

横須賀鎮守府の日常

イーグルアイ提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平和な横須賀鎮守府。過去の経歴がパイロットやら米軍やらの口リコン提督と艦娘たちののんびりとした日常である

※作品の世界観はエースコンバット世界＋現実世界って感じなので普通にオースリアとかベルカとかの国もあるなか日本やアメリカなども存在します。

目次

設定

設定とかいろいろ | 1

本編

平和な横鎮 | 9

友人のいる鎮守府へ | 14

お留守番なのです！ | 21

いざ帰還 | 24

ぶらずま&ブラックサンダー | 29

D A C T (異機種間空戦訓練) | 33

お前は最後に殺すと約束したな？・・・あれは嘘だ | 38

リボン付きの零戦 | 41

体はテカテカ、脂肪たつぷりの変態だ | 46

最強の不運 | 50

デイリー任務 | 55

イエス、ケストレル | 59

天龍のプリン | 64

N I M B U S、L U N C H ! | 67

航空母艦ケストレル | 71

深海棲艦の生い立ち | 83

中部海域 | 85

電とお買い物 | 89

デート II | 95

バンカーショット作戦発令 | 102

Operation Bunker Shot | 105

高速巡洋戦艦	115
戦線復帰祝いの宴会	120
警備任務	125
空母ヲ級	134
鎮守府強襲	138
開かずの施設	145
やーい！お前の鎮守府の隅っこハツテン場ー！	154
ケ・ツ・コ・ン・カ・ツ・コ・カ・リ	159
ケツコン式	165
ケツコン初夜	182
極秘任務	190
Silent Hunter	203
作戦開始！	211
拉致作戦	218
鎮守府視察	224
提督の遠征	236
出張一日目	251
出張一日目の夜	258
対潜哨戒任務	265
敵の潜水艦を発見！	274
敵の潜水艦を発見！ ↑\駄目だ!!\	287
亡国のイージス フタマルサンゴ	300
敵の潜水艦を発見！ ↑\嫌だ!!\	305
ミサイルの弾頭は通常に非ず	310
敵原潜、撃沈	315

横須賀への帰路	321
いそかぜの演習	327
エース・オブ・エイセス	335
迷子	341
いそかぜの悪夢	349
ブラ鎮死すべし慈悲はない	356
うらかぜ	361
少女の絵本	366
新婚旅行 出発	379
新婚旅行 旅館	384
姉妹デート	395
雪風とYUKIKAZE	401
超大型航空機	408
重巡航管制機	420
キーロフ級重巡洋艦とアドミラル・クズネツォフ級航空母艦	427
発令！第十一号作戦	434
発動準備、第十一号作戦！ 前編	445
発動準備、第十一号作戦！ 後編	451
第二次カレー洋作戦 前編	460
第二次カレー洋作戦 後編	464
遠征：長距離砲撃支援	472
出張：舞鶴鎮守府	477
星降る夜空	485
砕ける空 前編	491

砕ける空 後編	498
MEGALITH―メガリス―	506
ラーズグリーズ海峡の悪魔	513
シャンドリア攻落 前編	518
シャンドリア攻落 後編	522
久しぶりの横須賀	528
ハワイ沖偵察任務	535
平凡な夏日	541
空襲	546
東京空襲	551
NO RYO 肝試し	554
B7R制海戦	562
円卓の鬼神	568
グレースメリア奪還	576
首都解放	584
グレースメリアでデート	598
萌え萌え大戦争 艦こればーん!!	607
鋼の乙女と艦娘	613
敵飛行場襲撃作戦 前編	618
敵飛行場襲撃作戦 後編	623
S/C	627
遭遇戦	631
敵不明艦を拿捕せよ	639
間宮新作「鯛焼きが処刑されてる系パフエ」	644
航空偵察任務	652

リボンが一つ消えた空	663
あの真っ黒い空飛ぶ6足歩行戦車	669
電「にゃんっ♪」	676
泥沼化の戦況	682
核抑止	690
迎撃	695
うらかぜの裏	700
電とイチヤコラ	712
合同作戦	721
日本海軍92便	732
敵潜水艦	750
ローン・サバイバー	761
いそかぜ再就役	768
対潜水艦戦闘	775
葬儀	789
イタズラ好きの潜水艦	796
艦娘の日常	814
DDG—151 ネイサン・ジエームズ	826
DDG—151 ネイサン・ジエームズ 2	833
対潜水艦戦闘訓練	839
電の仕返し	848
敵工廠地区上陸作戦	859
敵工廠地区上陸作戦 2	875
尋問	888
アメリカ艦とロシア艦の休日	903

5月のある日	913
敵新型機	923
ドッグファイト	942
紅茶はキメるもの。	958
ネイサン・ジエームズの嫌いな物	968
ブラック鎮守府の捜査	983
夜間パトロール	1000
研究所捜索	1012
P M C 襲撃	1026
アーマードこれくしょん	1036

設定

設定とかいろいろ

「人物」

※主に登場回数が多い人を中心にしています。
気分で追加すると思われ。

【提督】

階級大佐。

元米海軍Navy SEALsだったり元円卓の鬼神だったりラズグリーズの亡霊だったりリボン付きだったりする。
ちなみにロリコン。

電を愛して止まない。電のためなら皇居に核ミサイル撃ち込むらしいの心構えだったりする。

【電】

特Ⅲ型駆逐艦。

提督の嫁。

いろんな艦娘や提督に振り回されてる苦勞人。

キレると怖い。

基本的に提督にたして悪意を向ける者には容赦なかったりする。

装備

10cm連装高角砲

12.7cm連装砲

61cm4連装（酸素）魚雷

【ケストレル】

ヒューバード級航空母艦。

提督の昔の乗艦。

まさかの大型建造で一番最初に建造された現代艦娘。

最近彼氏が出来た。

過去に自分の姉を自ら撃沈した。
最期の時に受けた対艦ミサイル以外機銃弾一発の被弾も無かった。
装備は初期から4機の艦載機と自衛火器のみである。

装備

4 F-14D (ラースグリーンズ隊)

20mmCIWS

RIM-7シースパロー

【アンドロメダ】

※艦級が分からないのでアンドロメダ級にしてあります。

アンドロメダ級情報収集艦。

提督の昔の知り合い。

情報収集に長けていて、物知りである。

電子戦や戦闘指揮も得意だが戦闘そのものは苦手である。

ケストレルに彼氏が出来てから自分にもほしいと思っている。

装備

76mm単装速射砲

20mmCIWS

RAM

電子戦システム一式

【いそかぜ】

いそかぜ型ブイ・ウェツブ艦。

一度沈んで引き上げられ、改装を受けた「はたかぜ型護衛艦いそかぜ」。

その自分が沈んだ「いそかぜ事件」で「うらかぜ」を撃沈したことに引き上げられた後も罪悪感を持ち続けている。

ハーブーン対艦ミサイルを極度に嫌っている。

ちなみにレズである。

装備は必要に応じて旧式の魚雷や主砲、最新式のミサイル、砲、魚

雷、果ては艦橋や機関も自由に寄せ変えることが出来、変装が大の得意である。

装備

127mm単装速射砲

20mmCIWS

特殊弾頭ミサイル「TPex」

特殊弾頭ミサイル「アポト―シスV」

【うらかぜ】

むらさめ型護衛艦

いそかぜの恋人。

コイツもレズである。

過去の「いそかぜ事件」でいそかぜに撃沈され、深海棲艦になった。

その後、いそかぜに救助され恋仲になる。

実は夜な夜な結構過激なプレイをしてたりする。

装備

76mm単装速射砲

20mmCIWS

VLS一式

90式対艦誘導弾

【雪風】

※元ネタは戦闘妖精雪風のパロディです。

陽炎型駆逐艦

つい最近建造された幸運娘もとい戦闘妖精。

ちなみに多重人格だったりする。

艦装をつけた状態・・・特に戦闘中は突然人格が変わる。

「I have control」と呟いた時は大体彼女に変わっている。

変わる前は舌足らずの可愛らしい印象だが、人格が変わると無機質な機械のようになる。

速力35ノットで前進中にその場で速度を変えず超信地旋回して魚雷を迎撃したり、一瞬で迫ってくるミサイルに対して最適な距離で爆発、軌道を変えられるように砲弾の時限信管をセットしたりする。いったい何なんだお前。

装備

12.7cm連装砲

25mm3連装機関砲

61cm四連装（酸素）魚雷

「取り外し不可」 YUKIKAZE

「施設など」

【横須賀鎮守府】

提督たちの所属基地。

提督の独断で勝手にICBMサイロや防空ミサイル、巡航ミサイルなどが配置されている。

果て衛星兵器も所持している。

バックにはアメリカ合衆国があるので大本営も手が出せなかったりする。

ちなみにすべての兵器が深海棲艦に対して有効だったりする。

もうこの鎮守府だけで戦争終わらせれるんじゃないかな。

装備

20mmCIWS

20cm沿岸砲

40mm機関砲

88mm対空砲

PAC3対空ミサイル

スタンダードミサイル

MGM-16アトラス（通常弾頭、核弾頭、サーモバリック弾頭）

BGM-109トマホーク（通常弾頭のみ）

攻撃衛星ODIN

【世界情勢など】

※この作品内ではオーストリア連邦(ヨーロッパ圏)、ユークトバニア連邦共和国(ロシア)という感じになっています。ホントはアメリカをオーストリア連邦にしたかったけどもう遅かった……。

エメリアとエストバキアは考え中！

日本

深海棲艦との戦闘で艦娘の活躍によりどの国よりも優位に立っている。

トラック島などにも泊地を作り、日本近海の安全性は比較的高い。またユリシーズの厄災の被害も少なく、経済、治安共に安定している。

ごく一部の提督を除き、敵情の調査などはすべて二次大戦時の手段を使用している。

そのため情報が遅れる事も多々ある。

それでも大本営は方針を変える気が無いらしい……。

アメリカ

対深海棲艦で日本の次くらいに活躍している国。

艦娘という概念は存在せず、既存の兵器を深海棲艦に使用している。

既存の兵器をどの国よりも先に深海棲艦に対し有効な攻撃手段に改造した。

ただ、既存の兵器のため、船や航空機は的が大きいたびたび戦闘では敗北している。

現在ハワイまで防衛の手が間に合わず、深海棲艦に占領されている。

そのため、輸送機や輸送船は大陸を沿って飛行、航行するしかなくたびたびユークトバニア連邦共和国の領空に近づきスクランブル発進した戦闘機に追い回されていたりする。

深海棲艦

1999年のユリシ―ズの厄災と同時に出現した謎の敵性勢力。艦娘のように過去や現在の軍艦を模した姿をしておらず、一部の陸上型深海棲艦のみが兵器の姿を模している。

また陸上でもある程度の行動が可能なようで、移動速度は極端に落ちるが陸上で砲撃を行うことも確認されている。

また艦装を外し小銃などを使い歩兵として行動も出来るようである。

深海棲艦は最初、既存の兵器でも迎撃が出来ていたが時がたつにつれ既存の兵器は無効化されていく。

また、侵攻をある程度食い止めただけであり、サイズが少女程度。それでいて火力は既存の軍艦並みだった。

そのため日本と一部を除く各国に艦娘の概念は無く、的の大きな既存兵器で抵抗するしかなかった。

現在深海棲艦はミサイルなど、現代兵器を一部だが使用し始め戦局が深海棲艦側に傾きつつある。

深海棲艦は現在、アメリカ合衆国のハワイ、エメリア共和国の首都グレースメリア、ベルカ公国の約半分などを占領し、さらに勢力を拡大させている。

ただ、内陸地ではほとんど活動できないため、海に面した都市を戦力している。

試験的にベルカ公国で陸上型深海棲艦の運用が確認されたが、ベルカ軍の決死の反抗作戦・・・自国内で七つもの戦術核爆弾を起爆させ自国民もろとも深海棲艦を葬り、その侵攻を阻止した。

結果、核爆弾の影響により12000人超の人命と国土の半分が失われた。

【歴史】

1999年7月8日 ― 小惑星ユリシ―ズ落下。同時にアイアンボトムサウンドに深海棲艦出現。

2003年夏〜2005年9月19日 ― 大陸戦争。背景で深海棲艦の勢力が増大、既存兵器が通用しない深海棲艦が現れだす。

2005年 ― 日本近海で初めて艦娘が発見される。最初は戸惑い攻撃を行おうとした自衛隊であったが、人の言葉をしゃべり、同時にその場に出現した深海棲艦を排除し自衛隊を救った。またこのときの艦娘により工廠が現在の横須賀鎮守府に建設され艦娘が量産されていた。

2010年9月27日〜12月30日 ― 環太平洋戦争。オシアとユークトバニアの超大国戦争が勃発する。この戦争で幸運の航空母艦、ケストレルが撃沈されている。

2012年8月30日〜2013年5月 ― エメリア・エストバキア戦争。

2013年9月 ― ついに既存兵器が深海棲艦に対し通用しなくなる。また同時に深海棲艦の侵攻が苛烈になり海に面した都市は次々と占領され深海棲艦の泊地となり始める。

2013年10月 ― ベルカ公国内で深海棲艦の進行を阻止するため7つの核爆弾を起爆、自国民に12000人以上の死傷者が出た。ベルカ公国は国土の半分以上を喪失する。

2014年5月 ― 深海棲艦がエメリア共和国の首都グレースメリアに侵攻、グレースメリアを占領する。先のエメリア・エストバキア戦争で疲弊していたエメリア軍は成す術無く敗北、撤退を開始し散り散りとなってしまう。

2015年8月 ― エメリア首都グレースメリアに横須賀鎮守府艦隊が進攻、首都を解放した。また、この戦闘で人と艦娘が初めて交戦した。

【敵艦情報】

原潜棲鬼

オハイオ級原子力潜水艦をモデルにしていると思われる深海棲艦。対艦ミサイルや弾道ミサイルを搭載している。

また、戦術級AIを搭載しているとの情報があり、深海棲艦という

よりは、深海棲艦が開発した兵器と言ったほうが近いかも知れない。
最後は原子炉が暴走し、爆沈。

現代級駆逐棲姫（仮称）

姿形が駆逐艦「電」に酷似している。

しかし武装は現代の駆逐艦をベースにしているとの事。

現在は情報が少ないため不明な部分が多い。

本編

平和な横鎮

平和な横須賀鎮守府。

平和と言うか提督の俺があんまり出撃さしてないから平和なだけだ。

「あの、司令官さん。最近あんまり出撃してないけど大丈夫なのですか？」

秘書艦の電が少し心配そうに言ってくる。

「ああ．．．まあ、遠征に出た部隊帰ってきたら南西海域行く予定だけだよ？」

「まさか．．．オリヨクル．．．ですか？」

「んなわけあるかい！」

オリヨクル行く暇あったら浜風ドロップを目指すわ！

とか思ったり。

「まあ．．．別に大本営に急かされてるわけじゃないし大丈夫じゃない？どちらにせよ錬度の問題で西方海域で詰んでるし」

「うう．．．電が戦艦ならお役立ちできたのです．．．」

「いや、電は駆逐艦だからいいんだよ」

ニコッと笑って言うて見るが、これ何も知らんやつが聞いたらロリコン扱いされるな。

いや．．．ロリコンだけだよ．．．

「そういえば司令官、さつきから何を弄ってるのですか？」

電は書類の整理をしながら興味津々で聞いてくる。

「ん？これ？」

カチャカチャと俺は昔、米軍時代に使っていた自動小銃の整備をしていた

ちなみに俺の経歴は民間機パイロット（マイクロソフトフライトシミュレーター）、空軍パイロット（エースコンバット）、米軍兵士（COD&BF）感じですか

「司令官さん、これ何て言う鉄砲なのですか？」

「ああ、これはM4A1マグプルカスタムだよ。俺が米軍時代に愛用してたからなく・・・」

「すごいのです・・・」

「そういや・・・あの後頭部ハゲ元気かな」

「ハゲ？」

「ああ、昔の上官。」

「上官さんをハゲ呼ばわりはよくないのですっ！」

「あはは、ごめんよ」

俺は分解していたM4を組み立てよっこらせと席をたった

「あれ、どこ行くのです？」

「ああ、今日友人がこの近くの鎮守府に配属されるんだよ。ま、だいぶ距離はあるけどね」

「何日くらい行くのですか・・・？」

「おいおい、そんな寂しそうな顔すんな。アレで飛んで行って日帰りしてくら」

「アレ？」

窓のそとに置いてある一機の戦闘機を指差す。

F-15C。

青い両翼と猟犬のエンブレムは昔のままにしてある。

「し、司令官さんの操縦する戦闘機にはもう乗りたくないのです・・・」

「あら？そんなに下手か？俺」

「い、いや・・・下手というか・・・あの・・・アクロバット飛行が・・・」

「空母の連中は喜んで後部座席に乗ってたがなく・・・あと金剛も」

やっぱ電には無理があったかな

「ま、とりあえず明日行つて来る。晩飯までには帰ってくるよ。あ、それと第六駆逐隊と金剛型、赤城、加賀が留守番な。お金は俺のところから持って行って良いから夜は横須賀の街で外食でも行って来い」

「え、でもそのときの留守番は？」

「PMCに任せた」

「大丈夫なのですか？」

「う〜ん・・・まあ、米軍時代の戦友のチームに任してあるから大丈夫だろ」

「了解です！気をつけて・・・なのです！」

「まだ行かないけどね」

あ〜・・・もう何か電ちゃん秘書でよかったああああ!!と心から叫びたくなったりならなかったり。

やっぱケツコンするなら駆逐艦だね！

「お、そろそろ第二艦隊が遠征から帰ってくるか。迎えに行くか？」

「行くのです！」

「そういえば海外艦連れて帰ってくるって無線入ったな・・・どんな娘だろ・・・」

「司令官・・・浮k・・・じゃなかった他の娘にデレデレしていると嫉妬しちゃうのです！」

「お、なんだ？電も提督LOVE勢か？」

「ちちちち違うのですうううう／／／／／／」

「はは、可愛いな」

「もう！司令官さんのバカあ!!なのです！」

「上官に向かってバカとは何だ！」

俺は笑いながら電の脇の下をくすぐってやる

「あ、あはははは!!や、やめっ・・・くすぐりたいのですうううう!!!」

なんて事してると・・・

「あのお・・・すみません・・・」

「ん？」

何か見たことある人がいた

「憲兵隊なのですが・・・」

「！」

「はわっ!?司令官さんの頭の上に赤いビツクリマークが出たのです！」

「逃げるぜ!!」

ポケットからM18スモークグレネードとM84フラッシュバンを取り出す。

「食らえ！煙幕の術！」

スモークグレネードを足元に投げる。

「くっ！逃がすな！」

「電！逃げるぞ！」

襟元を引つ張って逃走開始

「はわわわわわわわ！！！」

はははは！！この煙の中追ってこれまい愚民よ！！

「落ち着け！サーマルゴーグル装着！」

「ファツ！」

サーマル!?なんで持ってるの!?

「足を狙え!!生きて捕らえろ!!」

パパン!!パンパン!!

「ししし司令官さんんん!!撃ってきてるのですううう!!」

「くそう!ならば！」

M84の安全ピンを外す

「電ちゃん!目を閉じて耳をふさげ!!」

「はわわわっ!」

電が目を閉じて耳をふさいだのを確認する

「バルス」

そう呟いてフラッシュバンを放り投げる

そしてすぐに爆発音がして……

「ぐわああああ!!目が……目がああああああ!!」

ふっ……決まったぜ……

「さて……後は歩いて帰——」

ガシッ（肩をつかまれる音）

「あら……まだ生きてた……」

「同行願おうか」

「あ、はい」

ずるずると引きずられる俺を電は泣きながら見送っていた……

何この強制的に離れ離れにされる恋人みたいな感じ

とりあえず連れて行かれるわけにはいかん!抵抗するのみ!!

「い、いやああああ!!助けて!!ガチムチの憲兵さんにレ○プされる
うろうろう!!」

ゴスッ

「あべしっ!!」

後頭部をぶん殴られ・・・意識がそこで飛んだ

ああ・・・FPSならここで「敵に向かって撃ちましようーアメリカ製ロケットランチャーの説明書よりー」とか言うのが出てリスター
トできるのに・・・

そんなこんなで3時間後に釈放されましたとさ。めでたしめでた
し

友人のいる鎮守府へ

「つくかくれくたく．．．」

「大丈夫ですか？司令官」

「電が元氣くれるから大丈夫」

「はわわ．．．／／／」

「ほんと可愛いなお前は」

頭をなでてやると幸せそうな顔をする。

ホント可愛い．．．

「てか．．．腹減ったな．．．」

「もうすぐご飯できると思いますよ？」

「お、そうか！今日の当番誰だっけ？」

「確か．．．比叡さんなのです」

「あいつの料理は初めてだな。楽しみだ」

金剛達は料理が何気に上手いからな。まあ、比叡のだけ食ったことないんだが．．．ほかの連中はマジで美味いから大丈夫だろう．．．

なんてことを思っていたいが．．．

「なあ．．．電．．．変な臭いしないか．．．？」

「し、司令官も気づいてました．．．？」

「サルミアツキ食ったときに口いっぱいに広がるにおいみたいなのがあるんだが．．．」

アンモニア臭がする．．．確かに厨房のほうから．．．

「明日．．．大丈夫かな．．．俺．．．」

「そのときは私がつきつきりで看病するのです！」

「何それむしろ病気になるたい」

なんてこと言ってるよ

「Heyテートクウ！ディナータイムですよー!!」

どっかーん！と言う音が出そうなくらいの勢いで扉を開ける金剛．．．

「おまつ！もう少し静かにあけろ!!」

「Oh．．．sorryネ．．．」

「まあ、ぐ飯だろ？今から行くよ」

部屋から出ようとすると・・・

「テートクウ!!」

「ぐぶあああ!!!」

タツクル食らう勢いで抱きつかれた

うれしいけど死んじゃうよ僕

「明日会えないので寂しいデース・・・」

「・・・今の勢いで抱きつかれると永遠に会えなくなるぞ・・・」

「はわわわわ!!司令官さん!大丈夫ですか!?もう金剛さん!司令官は大切に扱わないとダメなのです!」

「電ちゃんく・・・ごめんなさいヨく・・・」

何か軽く物みたいな扱いされた希ガス

まあいいや・・・とりあえずご飯に行こうかな

「そーいや金剛、今日のご飯なんだ?」

「比叡特製カレーだヨー!愛情たっぷりネ!」

「お!そいつは楽しみだ!・・・といたいところだがこのアンモニア臭はなんだ・・・」

「そ、それは・・・特製スパイスだと思う・・・ヨ?」

「毒殺スパイスの間違いじゃないのか・・・?」

「そんなこと言ったら比叡さんに失礼なのです!」

「そうネ!比叡も頑張ったんだヨ!」

「ああ・・・その・・・すまん」

「分かればいいのです!」

「分かればいいのヨ!」

ま、とりあえず食堂に行くか・・・

「あ、そういえば今日着いた海外艦はどこだ?」

「マックスちゃんですか?」

「そうそう」

「あそこでレーベレちゃんと一緒にい・・・ファツ!」

「ん?どし・・・ファツ!」

「はわわわわわ!!!」

食堂の扉を開けた瞬間見た光景・・・

それはカレーを食べて天国の扉を開けた者たちの残骸であった。

「ちよっ！おい！衛生兵！ええええええええええええええええええええええええ！！！！」

「明石さんんん！！司令官！明石さんもカレーで・・・！」

「なんですとお!?」

「バケツ！バケツ持ってくるネ！！」

阿鼻叫喚な地獄絵図が・・・

そのなか

「ひえええええええ！！わ、私のカレーそんなにおいしくなかつたですかー!!?!」

「犯人はお前かあああああ！！！！」

「わ、私はカレーを作っただけですよー！！」

「おまつ・・・カレーに一体何入れたんだ！トリカブトか？スイセンか!?」

「普通の材料だけですううううう！！！！」

とりあえず・・・俺と電と金剛は・・・外で済ませてくるか・・・

「比叡・・・責任もって全部食え」

「ひええええええええええええええええええええええええ！！！！」

「あ、あはは・・・これは仕方ないヨ・・・比叡・・・」

「そんなあ！お姉さまあ！！」

とりえあえず・・・中華街にでも行こうかな・・・

ああ・・・70人入渠したせいで資源がグロ画像だ・・・

「電・・・金剛・・・あいつは置いといて俺らは中華でも食いに行こう・・・」

「さ、賛成ネ・・・」

「賛成なのです・・・」

く数多の屍を乗り越え、次の日々（みんな生きてるけどね☆）

「さてと・・・じゃ、電。金剛達と留守番よろしくな」

「司令官さん、事故には気をつけて・・・なのです」

「おう！」

妖精たちに無理を言って建設してもらった3000m級の滑走路。

使うことはめったにないけどな・・・

ま、車で陸路を行ってたら1日はかかるし音速で行けば3時間程度か？

「とりあえず8時ごろには帰ってくる。ご飯は俺の机の上にあるお金使つてどっかで食べて来い。それと・・・もう比叡に飯を作らすなよ・・・」

「そ、それは分かってるのです・・・」

「さてと・・・んじや言ってくるよ。」

「いつてらっしやいなのです！」

久々だなく・・・この機体も・・・

「エンジンスタート・・・よし音も良いな。燃料もよし」

外で電が少し心配そうに見ている。

雷も少し送れて見送りに来てくれた。

手を振る雷に俺は空軍式の敬礼を思わずしてしまった

「あの二人は可愛いもんだなく・・・」

なんてことを思いながらスロットルを全開にし離陸した

「そーいや式風のヤツは先に行ってるのかな」

なんてこと思っていると機首リーダーに航空機の反応が

「97艦攻で行ってるのアイツは・・・」

挨拶でもしてやるか・・・

そう思い俺は失速ギリギリまで減速し翼を振って飛び去ってやった

「さて10000ftに上がって巡航するかね
すると無線が

〈お前危ないだろうが!!〉

「あら？危なかった？」

〈危うく接触するところだったぞバーロ―〉

「そりやすまん」

〈今どこ飛んでんだ?〉

「知らん」

〈・・・〉

「オートパイロットに任せてるからな」

〈脆弱乙〉

「・・・マスターアームオン」

〈え、何?〉

ちよつと脅かしたるか

オートパイロットを切つて反転、式風のほうへ向かった

〈え、何!?何なの!〉

「バルカンとサイドワインダーどつちがお好き?」

〈ちよ、ちよつ待つたああああ!!〉

97艦攻は急降下する

・・・逃がさん

〈落ち着け!落ち着けください!!〉

「ガンの射程内」

〈やめろおおおお!!やめんかこのロリコン!〉

「おつしや絶対撃墜する」

〈いやああああああああ!!!〉

まあ撃墜したら俺も死刑だからしないけどね

背面飛行で97艦攻の真上をとおりながら写真を撮つてやった。

トップガンで見てから一度はしたかつたんだよな

〈はあ・・・はあ・・・〉

「よう相棒、まだ生きてるか?」

〈死ぬわボケエ!!!〉

そんなことをしながら飛んでいると目の前の鎮守府が見えてきた。

「お前先に下りろ。滑走路空けててくれ」

〈へいへい〉

さてさて、久々にアイツに会うが・・・どんな提督になつてるかな

〈降りたぞ。滑走路クリア〉

「あいよ」

滑走路が短いからギリギリまで減速しよう・・・

「50・・・40・・・30・・・20・・・タッチダウン」

久々の着陸だが上手く行ったな

機体から降りると式風が待っていた

「よう、空の旅はどうだった？」

「・・・お前のせいで最悪じゃアホ!!」

「そうキレイなってる」

滑走路で話していると

「あ、来たんですか!」

「今ついたぜ。こいつに撃墜されそうになったけど」

「あんなのお遊びだつて」

「お前の遊びで殺されかけたぞコノヤロウ!!!」

「ま、まあ・・・喧嘩しないで・・・」

「そうだ、お前今暇なのか？」

「ええまあ・・・建造に行く途中ですが・・・」

「建造・・・？」

これは・・・やるしかありませんなあ・・・ふはははは

「おい・・・イーグル・・・お前目が光ったぞ」

「はっはっは!何の話だね式風くん!」

「・・・こいつ絶対なんか企んでる・・・」

「そうか建造か・・・よし!良いレシピを教えてやろう!」

「本当ですか!?!」

あつひやつひやつひやつひやつ!!

若造が!見事に引つかかりおつて!!

「a11999でやってみろ!五航戦とか出るぞ」

「ふおおおお!!マジですか!!やるつす!!」

バアカめえ!!嘘ではないがたいがい水上機母艦だぜ!!

「・・・お前ホントゲスいな・・・」

「え、何の話？」

「・・・」

2分後、工廠にいった友人が帰ってきた

「何が来た？」

ニヤニヤ・・・

「それがですね・・・」

お、水上機母艦か？ 駆逐艦か？

これだから新米に a11999 を強 Y . . . すすめるのはやめられ
ませんかあ . . .

「で、何が来たんだ？」

「蒼龍って言う空母がキタつす！」

. . . え

「え？」

「だから蒼龍っていう空母なんですよ！ これ強いですか？」

. ジャキン☆ (M9A1 を抜く音

「ヤロオオオオオぶっ殺してやらあああああああ!!!!」

「ちよっ!! 落ちつけ!!!」

「離せええええ!!! こいつを殺して俺は逃げる!!!」

「死なねえのかよ!!!!」

ヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

お留守番なのです！

「はあ……」

「どうしたの電？元氣ないわね、そんなんじやダメよ！」

「司令官さん居ないとこんな寂しいものなのですね……」

それに何か変な気持ちもあるのです……

「それはズバリ……恋ね」

「はにや!？」

いきなり暁お姉ちゃんに言われてびっくりした

「私くらいのレディーだとすぐに分かるのよ」

「暁……レディーはそんな超人じゃないと思うよ」

「……分かんないのです」

「ただ単に寂しいだけじゃないのかい？電と司令官はずっと一緒だったからね」

「そうだと……思うのです」

「まあ、せつかく司令官が居ないんだ。自由にいろいろしようよ」

「司令官いても私たち結構フリーダムだけどね……赤城さんの一人ボーキ祭りとか」

「あ、あはは……アレは司令官さん号泣してたのです……」

今にも飛び降り自殺しそうな勢いで泣いてたのです……

「そうだ、午後から4人で遊びに行こうよ！」

「でも雷お姉ちゃんお留守番しないとダメなのです！」

きつと司令官さんも怒るのです！

「ええ……でも司令官が呼んだ人たちが来るって言ったじゃない」

「お客さんに留守番させるわけにはいかないのです！」

「いや……そのお留守番に来るんだけど……」

「あれ？そうなのです？」

「聞いてなかったの……？」

「わ、忘れてたのです……」

そういえばもうすぐその人たちのお迎えに行かなくちゃなのです

！

「そろそろ来る時間じゃないのかい？」

「あ、そうなのです！」

「金剛さんも一緒にお迎えに行きたいって言ってたわよ？」

「じゃあ、行きたい人は寮の前に集合なのです！」

どんな人が来るんだろう・・・怖い人じゃなければ・・・いいかなんてことを思っているとか寮の前に続々と集まってきた。

「あれ？みんな行くのです？」

「せっかくだからみんな呼んでみたのよ！」

「暁お姉ちゃん・・・お疲れなのです」

「レディーだから当然よ！」

「比叡！気合！入れて！お迎えします！」

そんなことを言ってる比叡さんの手にはクツキーらしきものが

「あ、あの・・・榛名さん・・・あの比叡さんが持つてるのって・・・」

「あ・・・はい・・・お姉様の静止を振り切って作っちゃって・・・」

大丈夫なのだろうか・・・

「とりあえず門の前に行くのです！」

もう着くのかな・・・そんなことを思っているとヘリコプターの音が聞こえてきた

そのへりはすぐに近づいてきて司令部前の開けた場所に着陸した

「おお・・・すごい屈強そうな兵隊さんが・・・」

その隊長らしき人はこちらに近づいてきて・・・

「君が艦娘か？」

「特三型駆逐艦電なのです！」

「俺はプライスだ。よろしく。ところでイギリス生まれの子がいると聞いたんだが・・・」

「あ、金剛さんなのです！」

金剛さんと呼ぶと・・・

「英国で生まれた帰国子女の金剛デース！」

「君が金剛か。私は元SAS隊員のプライスだ。」

「Oh！SASということはイギリス人デスカー！」

「そうなるな。あそこのモヒカン野郎もイギリス人だ」

「ダンディな方ネー！」

「とりあえず立ち話もなんだ。鎮守府内に案内してくれないか？」

「お任せなのです！」

そのときプライスさんが帽子を脱いだ。

ふと後頭部を見ると見事なハゲが・・・

「あの・・・もしかしてプライスさんって司令官さんの元上官さんですか？」

「ああ、そうだ。よく知ってるな」

「司令官さんが話してくれたのです！」

「しかしアイツもこんな可愛い娘に囲まれてさぞ幸せだろうな・・・」
なんていう他愛もない話をしながら鎮守府内を案内して回った。

そのあとは金剛さんがティータイムを開いてくれた。

すごい偶然でみんなイギリス人で金剛さんとすっかり意気投合した。

そういえばあのモヒカン野朗って言われた人は司令官が返ってきたらちよつと爆破するって言ってたのです・・・し、司令官は私がお守りするのです！

いざ帰還

「さて、長居もなんだ、帰るぞイーグル」

「お、じゃそうすつか」

「また来てくださいね」

「おう、今度はウォートホッグで来てやんぜ」

「・・・蜂の巣にする気ですか？」

「マーヴェリック撃ちこむだけ」

「シャレになりませんよ・・・」

なんていう冗談をいいながら・・・いや、50%くらい本気だが。とにかく冗談をいいながら俺と式風は滑走路に向かった

「そーいや、お前操縦は誰がしたんだ？お前資格持ってなかったろ」

「独学で学んだ」

「俺のイーグルは操縦できなかつたのか・・・」

「ジェットとレシプロは違うかな」

「イーグルもHUD除けばレシプロに近い計器類だぞ？」

すると式風は

「米帝機なんざ乗ってられるか！」

「おまつ・・・」

なんとという理不尽なキレ方を・・・

「まあいいや・・・帰りにドックファイトするか？」

「・・・勝てると思う？」

「俺が一方的に捻り潰すだけ☆」

「このゲス野郎が!!」

「最高の褒め言葉だ！」

「・・・もういいや帰ろう・・・」

「そうしよそうしよ」

そんなところ言いながら滑走路へ向かい、機体に乗り込んだ

「お前先に上がれ。」

〈後ろから撃つなよ〉

「んなことするか！ちよいとエンジンかかるのが遅いだけだ」

〈へっつ・・・これだからジェットは・・・〉

「サイドワインダーならとまっても撃てるぜ？」

〈ごめんなさい許してください〉

まあ、ロックオン出来ないけどね。

すると突然無線が

〈司令官んんんん!!!〉

ゴーヤの声だ

「どしたゴーヤ」

〈やっちゃまったでちいいいい!!!〉

「なにしたお前・・・」

〈マンボウが・・・マンボウが・・・〉

「マンボウ？」

すると今度はイクが

〈あの・・・マンボウが泳いでて・・・近づいたの・・・〉

「ああ・・・」

〈そしてら一瞬ビクッ！ってなつたと思つたらプカーってなつちやつたのおお!!!〉

「お前・・・マンボウのデリケートさ知らんだろ・・・」

〈知らないわよ!!!〉

こんどはイムヤが・・・そーいや外洋に遠征にだしてたな

「お前らなあ・・・マンボウはスペランカーみたいなもんだぞ？いや・・・スペランカーよりも脆いか・・・」

〈スペランカー？〉

「あれだ・・・自分の身長程度の高さから飛び降りたら即死するゲーム」

〈何それ怖い〉

「んでマンボウは寄生虫取り除こうとして10cm程度飛ぶんだがその衝撃で死んだり朝日が強すぎて死んだりウミガメとぶつかりそうになってパニックって呼吸方法忘れて溺死したり・・・」

〈魚が溺死・・・？〉

「ほかにも歯はあるけど口の構造上噛めなくてエビを食べたら甲羅が内蔵に刺さって死んだり・・・」

〈も・・・もういっぱいでち・・・〉

「だからお前ら潜水艦が近寄ったら即死ルート待ったなしだぞ・・・」

〈ご、ごめんなさいなの・・・〉

「まあ、次から気をつける。いいな？」

〈は〜い〉

それでプツンと無線は切れた

〈お前来ないのか?〉

「ああ、すまん。うちの潜水艦がマンボウ撃沈したらしくて・・・」

〈・・・何があつたの〉

「かくかくしかじか四角いムーブで・・・」

〈なつかしいなオイ!〉

そういいながら友人のいる鎮守府をあとにした

現在時刻は午後7時半

そろそろあいつ等来てるかな・・・

「なあ武風。お前よく考えたら夜間飛行どうすんだ？」

〈あつ・・・〉

「あつ・・・じゃねーよ!!!」

〈ま、まあ・・・お前が誘導してくれるよね(震え声)〉

「いやだから(震え声)じゃねーんだよ!俺が失速ギリギリで飛んでも

追いつけんのかお前の機体は!!」

〈ほらそこは歴戦のパイロットなら・・・〉

「歴戦でも新米でも失速したらアウトだろうが!!」

あのアホ・・・

なんで夜間装備持ってきてない・・・

「お前ナイトビジョンとかないの?」

〈もってないでち〉

「・・・次、語尾にでち着けたらオリョール海までつれてって撃墜する

からな」

〈大変誠に申し訳ございませんでした〉

「よーし・・・」

とりあえず200ノットまで減速して航空灯、衝突防止灯を灯火す

る。

「航空灯が見えるか？」

〈なんとか〉

「それ見てついて来い」

〈サンキュー〉

「報酬上乘せだ」

〈え・・・〉

「お財布握り締めて待ってろよ！」

〈いくら取る気なの!?〉

「まあそこそこ」

〈いやああああああ!!〉

なんて事を言っていると鎮守府の明かりが見えてきた

「もういいだろ。ライト消して増速するからな。今度は先に下りる」

〈はいよ〉

「地面とキスだけはするなよ」

〈何言ってる俺がキスするのは利根だけだ〉

相変わらずだなコイツ・・・

「てか、マジで滑走路見づらいから注意しろよ」

〈分かってるって〉

俺はさつさと降りたが・・・

「あっ・・・」

俺はふと式風のほうを見る

「あのバカ!!ギア降ろしてねえ!!」

急いで無線を繋げる

「ギア降りてないぞ!!着陸中止しろ!!」

〈え、マジ?〉

「いいから高度取れ!!」

忠告したが・・・

〈あべしっ!!〉

そんな悲鳴とともに胴体着陸していた

「・・・帰ろ・・・」

とりあえず無事そうなのでほっといて帰った。

んで司令室にはいると・・・

「・・・何これ」

「んふろ・・・テートクウ・・・こつち来るネろ・・・」

なんとも甘い声で顔真つ赤の金剛が出迎えてくれた

電はどこだと思いい机を見ると・・・

「ナスは嫌いなのです!!」

酔っ払った電が机をぶつ叩き叫んでいた

なんかすごいことになってる

・・・いったいなんなのこれ・・・

ぶらずま&ブラックサンダー

電のヤツ・・・飲んだのか・・・

「お、おい・・・電、お前未成年だろうが・・・」

「細かいこと言う司令官は嫌い、な、のです!!」
とシャウトし机を叩く。

「お、落ち着けて・・・」

「司令官・・・」

「ん?どうしたいかずつ・・・ファツ!!」

目の前に顔は真っ赤になってるが目が死んでる雷のような何かが居た。

「ねえ・・・司令官・・・ほかの艦娘と遊んでたんでしょ?」

「え、何!?!」

「司令官は私がいるだけでいいよね?ね?」

「ま、まて、俺は友人に会いに・・・」

「言い訳するの?」

「してません!!」

何なのこれ・・・しかも警備のPMCはどこいったあああああ!!!

「お、おい・・・雷・・・警備のPMCは・・・」

「追い出したわよ?私の司令官の間には不要よ。私が守るもの」

「OK、待ってくれ。とりあえず誰に酒を飲まされた」

「飲んでないって言ってるでしょ!」

そばにあつた椅子を蹴り飛ばしながら叫ぶ

「飲んでないなんて言ったの初耳なんですけどおおおお!!」

「司令官・・・そんなこと言う口はもういらないよね・・・ああ、そう
だ・・・逃げられちゃダメだから足も・・・」

「いやあああああああ!!!」

こんなの雷じゃないわ!雷の姿をした何かよ!!

だったら抱けばいいだろ!! (某大佐風)

ちなみにこの間に雷さん急接近

「ちよつ待つ・・・いやあああああああ!!!!!!」

「雷・・・」

「なななな何?」

「これでひと思いに撃つてくれ!」

なぜか枕元にあったDE・50CALを渡す。

「いいいいやししし司令官!?だ、ダメよ!撃てないわよ!」

「頼む!俺を撃つんだ!」

そんな騒ぎをしていると・・・

「んあああ・・・てーとくく・・・?」

「お、おはよう・・・金剛・・・」

「ふあく・・・あ、雷ちゃんグッドモーニングネ」

「あ、あははは・・・おはよう・・・金剛さん・・・」

「金剛・・・俺を撃て」

雷からデザートイーグルを奪い取り金剛に手渡す

「え、どうしたネ!」

「俺は提督失格だ!」

「何いつてるの!私がおこにつれてきただけネ!電ちゃんも雷ちゃんも!」

「・・・え?」

「そのお・・・私も酔っちゃって・・・気絶したテーク持つて寝室までいったヨ」

「う、うん・・・」

「したら電ちゃんと雷ちゃんも着いて来てて・・・寝ちやつたネ・・・」

「OK、そこまではいい。何で俺が裸なんだ」

「それは・・・その・・・」

何かいきなり金剛がモジモジしだした

「ちよつと・・・そんな気分になったネ・・・」

「・・・」

俺の中の何か切れた気がした

「・・・野朗ぶつ殺してやるアアアあああああああ!!!!!!」

「し、司令官落ち着いて!!!」

その後起きてきた電に後頭部殴られて気絶しましたとさ。

電は黒い笑みだったとか・・・でも起きたと思っただけで寝て・・・
また起きたらいつもどおりだったらしい。金剛は・・・クソがフラ
イドポテトに思えるくらい舐めて便所掃除させようかと思ったが
まあ・・・可愛い艦娘のしたことだから許してやったぜ☆
・・・起きてるうちに金剛とそういう状態になりたかったかと思っ
てないよ？10%程度だけ。

DACT（異機種間空戦訓練）

金剛をみっちり説教して俺は通常の提督業務に戻った

「あく・・・空戦してええええ・・・」

「へ、平和が一番なのです」

朝一で俺の後頭部ぶん殴りおった電はいつもの調子で言う。

てか覚えてないんかコヤツは。

するとドアがノックされた

「どうぞ〜」

「失礼します提督」

「お、赤城じゃん。珍しく早起きなんだな」

いつもはあと3時間くらい寝てる赤城が起きてきた。

「あの・・・提督は今お暇ですか？」

「まあ、正直暇だけど・・・」

「私の艦載機の訓練を手伝ってくれませんか？」

「へっ?」

訓練つっても艦娘用の艦載機に人間は乗り込めんど。でっかいラジコン飛行機くらいのサイズなのに

「どうやんの?」

「提督が標的機してください」

「・・・あんた鬼?」

仮にも提督だぞ俺は。

「おまえな・・・俺が空軍時代にくすね・・・もらって来た無人標的機が沢山格納庫にあるだろうが」

「いやその・・・やはりエースと戦わせたほうが・・・」

「まあ・・・飛びたかったからいいけどさ・・・」

「本当ですか!？」

赤城は飛び跳ねる勢いで喜んでる。

「あく・・・電、悪いんだけどこの書類をお願いいたします・・・」

「なのです!」

それでも電はしつかり引き受けてくれた。やっぱり嫁はこのk（r

「んじや、先に外行つてくれ」

「提督はどちらへ？あそこの戦闘機ではダメなのですか？」

「お前の艦載機が音速超えられるならいいけどよ・・・」

「ああ・・・なるほど」

「A-10でも引つ張り出してくるわ」

「では、先に演習海域へ向かっていますね。あ、それと正規空母はみんな参加するようでした・・・」

「・・・え」

「・・・よ、よく聞こえなかったな・・・もう一回言つて」

「正規空母はみんな参加するようです」

「・・・おk」

まあ・・・ボーキはたまりに溜まつてるからいいか・・・

とりあえず演習用空対空ミサイルと念のためのマーヴェリック積んでくか

格納庫から引つ張りだしたA-10のコクピットは少し埃っぽかった。

「・・・懐かしいな。このエンブレム」

リボンの中を飛行機が突き抜けていくようなデザインのエンブレム。

あの時はリボン付きの死神とか言われてたっけな

「赤城、今から行くぞ。そっちは着いたか？」

「へはい。もう着いてますよ」

「ほいよ」

エンジンの低い音が響く。

滑走路までタキシングしすぐに離陸した。

演習海域は鎮守府からすぐの場所なので時間はかからなかった。

「おっし！艦載機を上げる！リボン付きの死神様が相手してやる！」

「へ・・・みんな優秀な子たちですから」

すぐに加賀の戦闘機隊が飛んでくる

「お、加賀からか。左からだな・・・」

本来、CASのための機体なので空中戦は苦手だ。

「うーむ・・・やっぱり重いな」

するとすぐに後ろに零戦52型が飛びついてくる。

「さすが加賀の部隊」

だが、基地で空戦にも対応できるようにエレベーターとかいろいろ変えてて良かったよ

ハイ・ヨー・ヨーでオーバーシュートさせる。これで背後を取った「フォックス2!」

ついつい癖でミサイルを撃ってしまった・・・

だが、52型は機動性を生かして急旋回。ミサイルを振り切った。

〈へ・・・提督〉

「あ、あはは・・・ごめんって・・・」

明らかに聞こえますね加賀さん・・・

「いい腕してんな」

さつき急旋回した52型はまた後ろに食いついてくる

「おっと・・・あぶねえ!」

すぐ横を曳航弾が飛んでいく。

一応ペイント弾だがなかなか怖い

こっちはすぐにジェットの速力を生かしていったん振り切り急上昇して失速させる。

そしてそのまま一気に真下に機首を向けヘッドオン状態で機銃を撃ち込んだ。

「スプラッシュワン!」

加賀の52型の一機を撃墜判定にした。

「よっしゃー!どんどん来い!」

そのときふとレーダーを見ると明らかにおかしな点があった。

「ちよ、待て。レーダーに新たな反応・・・あゝ・・・深海棲艦かもな」

〈へ提督・・・私たち戦闘機しか搭載していないです〉

「しゃーないな・・・撤退を援護したるからはよ行け」

〈へて、提督!?!〉

「大丈夫、宇宙船も落としたし衛星も落としたし超巨大潜水空母沈め

た俺に敵はいないぜ！」

〈へ…慢心じゃないですか…〉

なんて事いってると視界の端に敵戦闘機が見えた

「うゝしちよつくら撃墜数増やしてくるぜ」

〈提督！やめてください!!人間の兵器は通用してないんですよ!!〉

「いいからさつきと鎮守府に帰って攻撃隊つんで来い!空母がこの近くに居んぞ！」

〈…御武運を〉

「へいへい」

さきさき…

「来いよヲ級!艦載機なんて捨ててかかって来い！」

なんてこと言いながら敵機に突つ込む

すれ違いざまに30mmを撃ちこむと何と撃墜できた

「え、マジで?」

やった本人が一番びっくりしてたりする

〈へえ…提督?〉

「俺…ええ」

〈へえ?〉

「俺TUEEEEEEEEE!!!」

〈へて、提督…?〉

「俺強え」

一機撃墜

「俺つええ」

もう一機撃墜

「俺…」

敵戦闘機隊全滅

「俺TUEE!!!」

すると下にフッキゆんが一隻見えた

「ひゃつはああああ!!汚物は消毒だああああ!!」

小物台詞を吐きながら提督、突撃

お前は最後に殺すと約束したな? . . . あれは嘘だ

まさかのヲ級撃沈という成果を挙げて帰還したら大本営のお偉いさんに俺のA-10を持っていかれた. . .

「お、俺のサンダーボルトがあああああ!!!」

いくらしたと思ってるのおおおお!!!

といくら抵抗したところで無駄なわけでありまして. . .

司令室にトボトボと戻ると. . .

「ただいま. . . あれ? 電?」

だれも居ない。

「あれ? 何でだ?」

すると. . .

「にゃー. . .」

「ん? 猫?」

机の影から一匹の猫が出てきた。

同時に嫌なうわさも

「ま. . . まさか. . .」

エラー猫. . .

「ま、まままままさかこんな可愛いにゃんこがそんなわけないよね」

あいつらはきつと買い物だ. . . そうだ. . . そうに違いない

「まあビールでも飲んでリラックスするニヤ。娘の面倒は俺が見といてるニヤ。にやははは」

キエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

. . . 待て、今娘の面倒は俺が見るとかいったか?

「. . . お前今なんつった?」

「娘の面倒は俺が見てるニヤ」

「電はどこだ」

「そうあせるニヤ、大佐」

殺す。焼肉にしてやる

「ちよつといろいろ事情があつて艦娘たちの世界と切り離されてる

ニヤ」

OK, ファンタジーだな。面白い

「お前は面白いヤツだな。気に入った。殺すのは最後にしてやる」

「ま、俺が消えれば電たちも戻ってく・・・ニヤ!?」

尻尾をつかんで持ち上げてやる

「いたたたたた!痛いにや!!離すニヤ!!!」

「・・・」

無言で窓際まで持って行ってやる

「・・・もう一度聞く。どうやれば電たちは帰ってくる」

「だ、誰がはにやすかよ・・・!」

「お前をつかんでるのは左腕だ。利き腕じゃないんだぞ?」

「た・・・高いところは苦手にやあああ・・・」

あえてぶらぶら揺らしてみる

「ひにやあああああ!!!分かったにや!言うニヤ!!俺が消えれば電たちは帰ってくるニヤ!!でも特別なことしないと・・・」

そこまで聞けたらOK。

「そうか。よし」

「は、早く降ろしてにやああああ・・・」

「お前は最後に殺すと約束したな?」

「そ、そうにや・・・た、助け・・・」

「あれは嘘だ」

素晴らしいきろうとした瞬間

「私の猫に何するのとおおおおお!!!」

思いつき後頭部を蹴り飛ばされ体制が逆転。まつさかさまになる

「うわあああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

あ、俺死んだ。

く電視点く

工廠で司令官に頼まれたレシピを一通りやってきた。

何か遠くから悲鳴が聞こえた気がするのです・・・

「司令官さんの声に似てたような?」

そんなことを呟きながら司令部に入ろうとすると・・・

「はにやあ!?!司令官さん!?!」

司令官・・・さん・・・?と思いたいものが地面から生えていた。
気をつけの状態で頭から花壇に刺さり肩まで埋まっていた。

「だ、大丈夫ですか!?!」

く提督く

「だ、大丈夫ですか!?!」

だ・・・誰だ・・・

「司令官さん!司令官さん!」

「い、電?」

「良かったのです・・・」

ああ・・・そうだ・・・エラー―猫を殺そうとして・・・

「とりあえず・・・司令室に帰ろう・・・悪い夢を見た・・・」

「いや・・・現実世界で地面に司令官さんが突き刺さったのです」

「それは幻覚。いいね?」

「ア、ハイ」

うう・・・頭痛い・・・

ちくしょう・・・あのネコ野郎・・・

後から聞いた話によると俺は居眠りしてるのを金剛が起こそうと
したらびつくりしてなぜか頭から落ちたらしい。

意味が分からん・・・夢遊病か・・・俺は・・・

リボン付きの零戦

「司令官さん！もう7時過ぎてるのです！起きるのです!!」

「んんん・・・ああ・・・電か・・・」

「寝すぎなのです!」

「疲れが溜まっててなく・・・」

いろいろありすぎて疲れたよ・・・

「ふあく・・・さて、朝ごはん食べるか」

「もう準備できてますよ」

「ちよつと顔洗ったらいくわ」

・・・待て。よく考えたらなんで電が起こしに来れた。寝室に鍵掛けてたぞ。

まあ・・・うれしいからいいか・・・やっぱ電は嫁でsry

とりあえず顔を洗って食堂に行く

「おう？えらいすごい朝飯だな」

「僕が作ったんだよ。ドイツの朝食だよ。」

「レーベレが作ったのか。」

「僕とマックスだよ」

「ん？マックスも作ったのか」

そういえばドイツ艦が着任して一ヶ月くらいだけど初めて食ったな。

うまい！（テーレツテレー

「ういゝ・・・ご馳走様。さてと、司令室に行くかの」

食堂を出て司令室に向かうと電と加賀が居た

「ありや？加賀？」

「提督、少しお願いが」

「加賀が？珍しいな」

「いえ、この子が」

「ん？」

加賀の足元から妖精の一人が出てきた。

「52型の妖精か。どうした？」

「あのね、てーとく」

妖精はちよこんと机に乗る

「あの、びよくに書いてた絵がほしいの」

「絵・・・ああ、エンブレムか」

「いいけど・・・絵は下手だしな・・・ちよつと工廠行くか」

とりあえず工廠へ向かう。

「てーとくく何か用なの？」

「ああ、装備を開発してほしいんだが」

「どんなの？」

「零戦にエンブレムつけるだけなんだが・・・」

「ふむふむ・・・とりあえず資材寄越すの！」

「おう・・・っておまつ！どんだけ持っていくんだ!!開発資材カンストしてるだろうが!!」

「だいじょうぶ、新開発のこの大型開発なら！」

「いや、俺の資材が大丈夫じゃない」

1万くらい持っていったぞ・・・

すぐに奥から音が聞こえ出す。

「できたのー!!」

「はやっ！」

「いったいアレだけの資材をどうやってたら数分で使い切るのか・・・」

「とりあえず見せてみ」

「ほいっ！」

零式艦戦52型（リボン付き）

零式艦戦52型（オメガ11）

「・・・あの」

「どしたの？」

「このオメガ11ってなんすかねえ・・・」

「知らん！」

「俺の元同僚は妖精になったのか・・・」

しかも説明文にちやつかりイジエークト!とか書いてるし・・・

「ああ・・・まあ、バルカンもあるし・・・」

「M61用の弾薬もないから一回出撃したら機関砲変えないといけなしし・・・爆装もほどこさいないと・・・」

「まあ、性能に見合った感じだな」

「あ、そうだ・・・一個失敗しちゃって・・・」

「ん？何だ？」

「これなんだけど・・・」

手渡されたものは・・・

水上機

それだけ書いてあった。形的にカタリナっぽい

説明文は・・・

偵察機としても使用可能です！

でも「こんなの飛行機じゃないわ！羽の着いたカヌーよ！」と艦娘は嘆くこと間違いなし！提督は「だったら漕げばいいだろ！」と言いつ返すのが礼儀です。

「・・・」

「どう？」

「・・・ネタ機やん」

「・・・失敗作だし・・・」

でも何気に索敵と対潜が4ある

とりあえず・・・夕張に積んでやるか・・・

工廠を後にし夕張の元に向かった

「お、いたいた。夕張ー」

「ん？提督？どうしたの？」

「新装備なんだが・・・」

「ええ!?本当!?ためさせて!!」

水上機を渡す

「・・・」

「どうした？」

「こんなの飛行機じゃないわ！羽のついたカヌーよ!!」

本当に言いやがった・・・

「だったら漕げばいいだろ!!」

俺も反射的に言ってしまった・・・

ちなみにほかの艦娘に試したところ、みんな一言一句間違わずに嘆いていた。利根なんか「くじや」と言うのを忘れるほど・・・

「これ使えんのかよ・・・」

そう俺も嘆いていると・・・

「てーとくー!!」

「ん? ああ、工廠の妖精か」

「忘れ物あったの!」

「何だ?」

「これ。」

何だこれ・・・

妖精のようなものを渡された

名前は・・・

筋肉妖精「ジョン・メイトリックス」

「・・・誰」

説明には・・・整備から戦闘まで自慢の筋肉でなんでもこなす筋肉モリモリマッチョマンな変態妖精! ぜひ火力が足りない艦娘や整備不良が多発する艦娘に搭載してあげてください!

「う、うん・・・まあ、これで4―3も大丈夫だろ・・・」

「海がドンパチ賑やかになるな提督」

「・・・やる気満々なのね・・・」

妖精の癖にめっちゃごつい・・・

この妖精、最近カタパルトの調子がおかしい利根に乗せるとカタパルトがものすごい快調になったらしく喜んでいた。

結構・・・使えるっぽい?

体はテカテカ、脂肪たつぷりの変態だ

「……ふぎけやがってえええええ!!!」

「はにゃあ!?!」

提督は激怒した。こんなFAXを送りつけてくる邪知暴虐な司令部は除かねばならぬと決意した。

提督には司令部のお偉いさんの頭が分からぬ。提督は一艦隊の司令官である。艦娘を指揮し、時には電たちとイチャ・遊んで暮らしていた。けれども邪悪には人一倍敏感であった。

「……これ見てみる電……」

「何ですかこれ?」

FAXの内容は司令部に持っていかれたA-10を見たところおかしな箇所はなかったが何故敵航空機の撃墜が出来たのか解明できないため鳩山特務大尉を派遣する。

と言うことだった。

「この特務大尉というのは何ですか?」

「まあ……エンジンアってどこか?ちよつと違うけど……」

「この人が来るのがダメなのです?」

「いや……来るのはいいんだ……」

「?」

「あの特務大尉……とんでもねえブラック鎮守府を運用しててな……個人的に大っ嫌いなんだよ。」

「は、はあ……」

「まあ、ヤツの鎮守府だけならいいがヤツが派遣された鎮守府の艦娘を酷使しやがるんだよ。俺らみたいところはなおさらだ。資源はある疲労もない。だったら突撃しろやハゲの如くな……ちなみにお偉いさんの中でもかなりめんどくさい位置にあつて階級は俺のほうが上でも権力は向こうのほうが強いんだよ……親父が大将とかでな……」

鎮守府の入り口に簡易トランプタワー―建造したるか。溶岩処理式の。

「そ、それ・・・私たちは大丈夫なのです・・・？」

「どうすつかな・・・」

ヤツが滞在する期間は1週間。

派遣された鎮守府では2日に一回轟沈艦が出たとか・・・

「・・・やりたくないが・・・デルタの知り合いに頼んでみるか」

「何するのです？」

「狙撃」

「え!？」

「海上から50口径で狙撃して深海棲艦の流れ弾が当たったことにすればいい」

「い、いやあの！仮にも司令部の方ですよ！」

「ええ・・・ダメ？」

「ダメです！」

だったらコンクリ詰めにして海に放り込むか・・・

「あく・・・どうやって暗殺していいか分かんねえよー！」

「いや、まず暗殺って項目を抜いたほうがいいと思うのです・・・」

「じゃあ・・・拉致！とりあえず北鮮にでも連れてってパラシュート無し空挺降下とかさせればー！」

「それ死んじやうのです！たとえ無事に着地できても確実に死んじやうのです！」

「いや、殺すのは向こうだし・・・」

「そういう意味じゃないのですうううう!!!」

「でも・・・アイツが来るなら・・・」

壁に飾ってあったフリントロック式マセット銃を手に取り・・・
「アイツが来るなら・・・みんな死ぬしかないじゃない！お前も！俺も!!!」

俺は理性を失ってとりあえず電より少し上に銃口を向けた

「ひにやああ?!?!し、司令官さん!!お、落ち着くのですうううう!!!」

「離せえ!!野朗ぶつ殺してやらああああああああああ!!!」

「まだ、来てないのです!!」

汚物は消毒だああああああああああ!!!ひゃつはああああ

ああああ!!! (理性崩壊)

「お、落ち着くのです!」(ゴスツ)

「おぶう!」

・・・話によると電に後頭部をぶん殴られ俺は数分立ったまま気絶してたらしい

そしてちようど起きたとき式風が司令室に入ってきた・・・ちなみこのときはまだいろいろぶっ壊れてた

く電く

「おくいイーグル、いるか?」

「あ、式風さん!え、ええつと・・・今司令官さんは・・・」

「なんだ?ほかの艦娘連れ込んでベッドウエー開戦からのアンアンキシムサウンドでそれを電に見られてシユラバヤ沖開戦か?」

「ち、ちがうのですつ!!」

「んじゃ何・・・だ・・・」

式風が司令室まで入ってきた。

「へへ・・・どうせ・・・みんな死ぬ・・・へへ・・・」

たつたまま何かを呟いてる司令官さんが・・・怖いのです・・・

「な、なあ・・・あれ・・・なんだ?赤い水でも飲んだのか・・・?」

「そ、その・・・」

理由を言おうとしたとき司令官さんは引き出しから38口径拳銃を取り出して・・・

「リョウカイ・・・シャサツ シマス・・・」

「へっ?」

そして発砲・・・

「フアツ!」

「しししし司令官さんんん!!落ち着いてええええ!!!」

「あれ絶対、羽生田村行って来ただろおおおお!!!」

「どこなんですかそれええええ!!!」

とりあえずパニックだ

そのときだった・・・

「何の騒ぎだね?」

最強の不運

くそう・・・実弾を込めておくべきだった・・・

「少し提督と二人にしていたただけるかな？」

「あ、ハイ。分かったのです」

え・・・やめて、こんなのと二人きりはヤダ

「さて・・・本題なんだが」

「A-10のことですか？」

「ああ。あと君の艦隊についてだ」

ハイ来たー。デリンジャー隠し持ってて良かったぜ

「うちの艦隊がどうかしました？」

「いや、普段あまり出撃していないようだね」

「まあ、のんびりやってますからね」

「そこでだ。君の艦隊の戦闘を見物したんだが・・・」

「航空機からならいいですよ」

「ふむ・・・そうしよう。一応私はパイロット免許を持っているから自分で操縦するよ」

・・・キタ。撃墜のチャンス・・・ふふふ・・・リボン付きの死神、

円卓の鬼神、亡霊などと呼ばれた働きをしてやろう・・・ふはははは

!!地獄に落ちろベネ・・・大尉!

「さて、では早速行きたいんだが・・・」

「あ、では機体を用意しますよ。大尉は先に格納庫へ行ってください。
い。」

「分かったよ」

よし・・・ここでこの前入手したあの筋肉妖精を呼ぶ

「何か用か？」

「今出て行った豚の機体に爆弾を仕掛けておいてくれ。もし俺が撃墜
できなければ爆破するんだ」

「タイミングは？」

「空がドンパチ賑やかになったらだ」

「任せろ提督」

妖精は窓から筋肉式スカイダイビングをして格納庫へ走っていった。

てか、あれ妖精って言うか妖怪だよね。筋肉妖怪。

なんてくだらないことを考えながら自分の機体に取り込む。今日はF-15で行こう。

すでに主力の戦艦隊が錬度向上のために出撃している。

「大尉、これより上がりますので着いてきてください」

「OK。ああ、そうだ。上がってからでいい。無線の周波数を118に合わせてもらえないか?」

「はあ・・・まあ了解です。」

何話す気だ?

とりあえず離陸する

「V1・・・ローテート・・・V2」

機体は離陸速度に達して離陸する。

「ポジティブブレード。ギア、アップ」

あとはチェックするだけ・・・

さてと、何する気か知らんが周波数を合わせるか

「合わせてくれたのか。よし、君に話しておかねばならないことがある」

「なんですか?」

「私の噂話・・・聞いたことはあるだろう」

「はあ・・・まあ・・・」

「確かに艦娘は他人から見れば酷使してるようにしか見えんだろうな・・・私は運がものすごく悪くてな。どんなに楽な海域でもものすごい勢力と衝突することがしょっちゅうだ。」

「それで回避しつつ逃げ帰るのに疲労が溜まって・・・って事ですか?」

「まあ、そうなるな・・・あと轟沈のことだ」

「・・・あれは本当ですか?」

「・・・私の不運のせいで主力級の敵勢力が来ることがあってな・・・そのせいだ。正直言うともう派遣なんてされたくないんだ。私のせいで艦娘が轟沈する・・・そんな罪悪感で夜も眠れんよ・・・」

「・・・」

本当なのか・・・？噂のせいで信じがたいが・・・

〈〈今日、君に撃たれただろう？あれで沈んだ私の艦娘、ほかの提督の艦娘に会えると思ったよ。〉〉

本当ならこの大尉、相当不幸だな。

〈〈海軍だって辞めたいが、親父のせいでやめれないよ・・・〉〉

なんて事話してるとレーダーに反応があった。

「あゝ・・・大尉？お話の最中申し訳ないんですが・・・敵ですね」
すると先行している艦娘から

〈〈提督！まずい！戦姫級がいる！撤退許可を!!〉〉

「戦姫!?このオリョール海にはいないだろ!!」

〈〈いや！それでも今日の前のいるんだ!!〉〉

「分かった！長門さっさと撤退しろ！援護する！」

急降下して長門たちに上空を通過する。確かに・・・戦姫級がそこにいた

「マジかい！」

〈〈やはり・・・呼んでしまったか・・・〉〉

「あんた魔法使いかなんかか・・・」

〈〈とにかく応戦しよう。これ以上沈没する艦娘を見たくない〉〉

「そこには同意だ！」

大尉のF-16Cは戦姫に向けて急降下する

それに続き降下する

戦姫は艦載機を発進させた

「おく・・・いっばいきたね〜」

レーダーに点がいっばいだ

「ロックオン・・・FOX2！」

ミサイルは正確に目標に命中する。

長門たちも撤退しつつ艦砲射撃をしてきている

「スプラッシュワン！」

戦闘機を一機撃墜した

「大尉、そっちはどうですか？」

〈…まずいかもな〉

声と一緒に警報の音が聞こえる

「被弾ですか？」

〈主翼をやられた。鎮守府には帰れないだろうな〉

「ベイルアウトを」

〈無理だ。キャノピーが飛ばない…イジェクションシートも…たぶんダメだ。いいか提督、艦娘を絶対に轟沈させるな。させたら私が化けて出るからな〉

「…」

〈提督、あとは私がやる。君は逃げろ〉

「しかし大尉」

〈大丈夫だ〉

いや、不運すぎて大丈夫じゃない。

〈帰ったら私の好きなハッピーターンを用意してくれ〉

「大尉！」

それ脂b…死亡フラグつす

大尉の機体はまっすぐ戦姫向かっていく

〈これ以上は進みませんぞおおおおお!!!〉

やだカツコいい

とか思ったり。

〈うおおおおおおおおおおおお——〉

大きな水柱が立ち無線も途切れる。

体当たりか…墜落地点に敬礼をする

「大尉…無茶しやがって…！」

ちよつと泣きそうになったがふと墜落地点を見ると…

「…外れてる」

100mくらい東の方角に突っ込んでる…

「あ、待てよ…俺の機体返せ豚野郎がああああああああ
あああ!!!」

悲しみより勝手に人の機体で突っ込まれたことに怒りが…FU

CK

ちなみに戦姫はこのあと別艦隊の砲撃でボコボコにされたとか
大尉は・・・最後の最期まで不運だったね。南無。
まあ・・・良いヤツだったよ（小並感

デイリー任務

今日はデイリーでも片付けるか。最近やってないし。

「電、第二艦隊の錬度ってどれくらいだっけ？」

「ええつと・・・平均60lvくらいなのです」

「じゃあ、デイリー消化ついでに第4海域行こう」

第4海域詰んでたからな・・・今回は片付けよう

電、そう伝えたあと俺はある部署に電話をかけた

「ああ、はい。そうです。あれの準備を・・・はい。」

もしものことがあった際に使うぜ。

ついでに大型開発行くか。筋肉妖精は居るから片羽の妖精とか出ようぜ。

というわけで工廠に向かった。

「お、てーとくく。このまえの装備はどうだった？」

「あの筋肉妖怪か・・・？」

「それもなの」

「うくん・・・まあ、零戦のほうはなかなか戦果をあげてるがあの妖精はもっぱら整備に行ってるな。」

「あの妖精は基地系深海棲艦に有効だよ」

「・・・こんど使ってみるか」

「確か一人ノルマンディー上陸作戦とかで・・・」

「なにそれ怖い」

「まあ、とりあえず何か作るの？」

「ああ、そうだった。テキトーに資材持って行って作ってくれ。デイリー消化でもあるし」

「OK！」

そういうと工廠妖精は資材を20個ほどと資源を1万ちよつと持っていきおった・・・

・・・そろそろ財政難

「はいできたー！」

だから早えーよ。どうやんだよそれ

「んでどんなのだ?」

「ほいー!」

46cm三連装砲×3

烈風×1

「……いやっほおおおおおう!最高だぜえええ!!!」

あとで装備組み替えねば!

「まだあるよ?」

「お、どれどれ?」

ADFX-01 Morgan (Pixy)

説明文は……

オースリア連邦を中心とした連合軍が南ベルカ国営兵器産業廠の試験開発機を接収して完成させた機体。翼構成はカナード、前進翼、内向き斜め双垂直尾翼で構成されるエンテ型。エンジンは双発で、比較的大型のタイプが機体後部にやや左右の間隔を空けて搭載されている。ADFX-01およびADFX-02は後のFALKENのベースとなったこともあり、機首部を除き外観には類似点も多い。広域制圧兵器「MPBM」や、戦略レーザーシステム「TLS」などの強力な武装と、非常に高度な機動性を両立しているが、一方で戦闘機としてはかなりの大型機となっており、前脚にはダブルタイヤを採用するなど、機体重量に対する配慮も見られる。また、前述の特殊兵装の他、通常兵装としては航空機関砲1門と、短射程AAMとして、翼下パイロンにAIM-9L/Mサイドワインダーを装備している。

というところでもないチート。MPBMなんか撃ち込んだら敵艦隊どうなるんだよ……

「んで?もうひとつは何だ?」

「なんと!妖精が出来たの!」

「また筋肉かよ……」

と思ひ受け取ると……

片羽の妖精「ラリー・フォルク」

人。……だから何で出来るの。どうやったら出来るの。教えてエロい

「……工廠って何なの怖い」

「しかもこのモルガン！なんと既存の資源で補給可能なのです！」

「いや、チートにもほどがあるだろ」

「あ、運用資源は一回につき燃料1000、弾薬3000。撃墜されたらボーキが8000は飛んでくから気をつけてね」

「あゝ……まあ、性能に見合ってるか……」

決戦にしか出せん。てか、コイツ、俺がウステイオに居たときの相棒じゃないか……なんで本当に妖精になってるんですかアナタ……よう相棒、元気か？」

「……なんで本当に妖精になっちゃってるんですかねえ……」

「さあな……とりあえずモルガンは俺が乗れば性能が数倍上がるぜ」
「知ってる、あんた落とすのにどんだけ苦労したと思ってるの。」

とりあえず今回の第4海域攻略戦に組み込もう。

司令室に帰ると……

「ぶんぶんなのです！」

「ええつと……電さん、いつからここに？」

「30分以上前からなのです！」

「……すみません……」

「何でも連絡せずに出て行くんですか！探し回ったんですよ！」

「いやほんとすいませんでした……」

「激おこなのです！」

ああ……怒ってる電も可愛いよ……

とか考えてる暇があったら指揮を取れですよ、サーセン

「とりあえず第二艦隊には46cm砲を一基ずつ渡してくれるか？あと出来れば一航戦の連中呼んできてくれないか？」

「了解なのです。あと、さっきのこと許してあげるのです……あとで……」

「ん？なんだ？」

「え……ええつと……あとで言うのです!!」

顔真っ赤にして走っていく電はなかなか可愛い。

そして一航戦を呼んできてくれた

「何か御用ですか？」

「ああ、お前ら二人にこの航空機搭載してほしいんだけどいい？」

「どんなのですか？」

二人はその機体を見て・・・

「・・・さすがに気分が高揚します」

「上々ね！」

「まぶしっ!!」

たぶんこのキラキラはミサイルが飛んできても避けれる可能性がある気がする・・・

「よし、じゃあ赤城はモルガンと片羽積んでくれ、加賀はF-14Dとリボン付きで」

「分かりました！必ず勝ちに行ってきます！」

「まあ、デイリー消化と飛行試験兼ねてるから小破が出た時点で撤退な。これ重要」

てか、正直なこと言うと第4海域を攻略する気がほとんど無かったり・・・

というわけで元気に第二艦隊は出撃していった。

そういえば・・・着艦時はどうするんだろ・・・まあワイヤーに引っ掛ければいけるかな？

てか、ラリーのヤツ去年戦死したとか聞いた気がするんだが・・・

イエス、ケストレル

第二艦隊を第4海域に出撃させたのはいいが一発で小破が出てしまった・・・まあ、デイリー消化だからいいんだけどね（震え声）
あ、ちなみにこの前電話して用意してたのは・・・なんとトマホーク対艦ミサイルだったのです！

追撃してきたヤツにぶち込んでやろうと思っただがな・・・ケツ
「金剛の小破以外の損害は無しか？モルガンが落ちたとか・・・」

「それは無いって連絡を受けたのです」

「なら良かった・・・」

モルガンが撃墜されたらシャレにならないぜ・・・ただでさえいくら資源を持つていかれるか分からないT L S（戦略レーザーシステム）積んでるのに・・・

「あ、司令官さん、明日の午後にお客さん来られるみたいなのです」
「客？」

「ええつと・・・武御雷提督なのです。お知り合いの方なのです？」

「あく・・・まあ、先輩って感じかな」

「付き合い長いのです？」

「いんや、俺も向こうも忙しくて会ったのは1〜2回かな？」

もう少将殿だっけかな

「さて、せっかく先輩も来ることだしいつちよ大型建造を3回くらい行ってみるか」

「え・・・大丈夫なのです？」

「資源はある（キリッ）」

「・・・ま、まあ・・・司令官がそういうなら・・・」

「おーし！工廠いくぜ我が嫁よ！」

「なので・・・!?!今なんておっしやいました!?!?」

「なんでもないよ?」

「な、なのです・・・」

やだ可愛い。

とりあえず工廠に行けますよね。はい。

「おお！てーとく！今日も開発？」

「いや、大型建造で」

「ほうほう・・・何作るの？」

「とくに目的は無いな・・・3隻分お願いできるか？」

「OK！」

ああ・・・資源の残りが2万程度になってしまった・・・

「よーし！一隻目の建造時間は・・・なんと10時間！」

「ファツ!?大和型ですら8時間だぞ!？」

「わ、分かんないよ・・・二隻目は・・・7時間！」

「だからそんな建造時間の艦は無いだろ!!!」

「でも・・・出たし・・・しかも最後にいたっては・・・！」

ああ・・・もう何でも来い・・・

「24時間！」

「ありえねえよ!!!」

何で!?何で24時間!?アホか!!!

「ああ・・・もう何でもいいや・・・高速建造でやっといてくれ・・・」

「りよーかい！」

ああ・・・うちの工場は壊れてる・・・絶対そうだ・・・

「あ、あの司令官さん・・・もし大和さん来たら・・・秘書艦って・・・」

「ん?どした?電のままだけど?」

「は、はうう・・・／／／／／」

書類で顔を隠している電が可愛すぎる。

「新しい艦が出来たよー!!!」

妖精が呼びに着てくれた。

「お、どんなのだ？」

やっぱり気になる

すると出てきたのは・・・煙で見えないが空母・・・か？

何か・・・アングルドデッキ持ってね？

すると煙が晴れて・・・

「初めまして。オーシア連邦海軍所属、航空母艦ケストレルです。」

・・・け、ケストレル
!?!?!?!?

「え……もしかして……あの……ケストレルか……?」

「?はい、ヒューバード級航空母艦の7番艦です。」

「……すまない、もうひとつ質問させてくれ……イーグリーン海峡での同伴空母は?」

ケストレルは少し顔を曇らせたが……

「……姉の……ヴァルチャーと……バザードです」

やっぱり……あのケストレルだ

「ケストレル、俺のことは分かるか?」

「?ここの提督さんですよ?」

「……ブレイズ。これで分かるか?」

「……!隊長!!」

ケストレルはいきなり抱きついてきた。

……空母のパワー半端ない……

「はにゃあ?!し、司令官さんん!!!」

電はあわててた。

「隊長……!隊長!」

「あ、あの……司令官さん……一体どういう関係なのです?」

俺の腕の中で泣いているケストレルを見て電が激おこになりかけてる

「ああ、俺の空軍時代の母艦だよ。まあ、実はいろいろあってな……本来空軍は母艦なんて持たないからな。」

「はい、いろいろありまして……隊長はたったの23日間でしたが私と共に戦場を駆けてました。」

「まさかの乗艦だったのですか……」

何か電が微妙にしょぼんってなってる。

「あ、そうだ、2隻目は?」

「ほいー」

工廠の扉が開いた先には……

「……あ、あの……じよ、情報収集艦アンドロメダです……よ、よろしく願いますっ!」

「……アンドロメダ」

「け、ケストレルさん!？」

「久しぶりね!」

二人とも抱きあっていた。そういえばあの時もケストレルの仇を討ったのはアンドロメダだっけかな

「あの・・・司令官さん・・・何か顔が緩んでますよ・・・」

「あ、すまん・・・懐かしくてな・・・」

「もうーや、やきもち焼いちやうのです・・・」

「ははっ。よしよし」

「はうう・・・」

ケストレルもアンドロメダもかなり可愛いがやっぱ電が一番!

「そうだ、最後の艦は?」

「お、そうだった!潜水艦なの!」

扉が開いて出てきたのは・・・

「シンファクシ級潜水空母のネームシップ、シンファクシだ。よろしく頼む。広域制圧は任せてくれ」

「シ、シンファクシ!？」

その名前を聞いた瞬間ケストレルがものすごい形相でこっちを向いた

「シ、シンファクシイイイ・・・」

「な、何だ?」

「ここで沈めてやる・・・!イーグリーン海峡の姉の仇!!」

「ちよー!待てー!ここで艦載機を上げるな!!シンファクシもシンファクシで散弾ミサイル撃つな!!」

やばい、鎮守府を高度5000ftまで上げねば・・・ああ・・・
そうだ・・・アークバード造らないと・・・どうなるんだこれ・・・

「あ、てーとく、取り込み中悪いんだけど、ハイこれ」

「何だこれ?」

「運用資源表」

「司令室でじっくり見るよ。」

「一応ここで少し目を通してみると・・・」

「・・・」

「し、司令官さん!？」

「あ、あれ!?隊長どうしたの?」

「て、提督!」

「どうした提督!？」

力が抜けてぶっ倒れかけた・・・

運用資源がLv99で大破で残りHP1の状態の大和型10隻分だ・・・入渠時間もな・・・あ、あはははははははははは・・・シンフアクシにいたっては弾薬消費量が大和型20隻分はあるぞおい・・・

「と、とりあえずみんな帰ろうか・・・か、歓迎パーティーだ・・・」

「あの・・・司令官さん・・・大丈夫なのです?」

「大丈夫大丈夫・・・」

今にも死にそうだけどね・・・

天龍のプリン

く電く

「電、そろそろ武御雷提督が鎮守府につくと思うから迎えにいったりやるか?」

「お任せなのです!」

司令官さんのお友達提督さんをお迎えに行くのです!

「・・・それにしても・・・司令官さん・・・あのケストレルって言う航空母艦で溺愛しちやってる気がするのです・・・」

「・・・はあ・・・」

「電?どうしたんだい?」

「あ、響お姉ちゃん・・・」

「何か元気無いようだね」

「う、うん・・・ちよつと・・・」

「私でよければ話を聞くよ」

「今は司令官さんに任せられたことがあるのでまた後でお願いなのです」

「うん、分かったよ」

「やっぱり頼りになるのです。」

「鎮守府の入り口に着くとほぼ同時に黒塗りのセダンがやってきた。」

「ヤ・・・ヤのつく人・・・?」

「すると車から降りてきた。」

「君がこのイーグルアイ提督のところの秘書かい?」

「あ、はい!そうなのです!」

「武御雷だよ。肝心の提督は何かしてるの?」

「え・・・ええつと・・・司令官さんは・・・」

「?」

「たぶん、司令室で空母の消費資材計算してると思うのです・・・」

「あれ、そんなに資材食うかな?赤城とかだろ?」

「いろいろあつたのです・・・」

「さすがに現代艦が艦娘になったなんて聞いたこと無いのです・・・」

ミサイルとか普通に積んでるし・・・

「司令室に案内してもらえろ？」

「はい！了解なのです！」

司令室の前まで歩いていくと突然中から天龍さんの怒号が聞こえてきた。

少しだけ扉を開けると・・・

「・・・怖いかクソツタレ、当然だぜ元世界水準越えの俺に勝てるもんか・・・フフツ、怖いだろ」

「試してみるか？俺だつて元ネイビー・シールズだ」

・・・な、何があったのです・・・

「ところで提督、もう一度聞くぞ、そのプッチンプリン。誰が食べた？」

「まだ言っているのか？俺だ、まだ3カップあっただろ」

「・・・あれはなあ・・・俺が4つ一気食いしたくて買ったんだよ！人のプリンを何だと思ってやがる!!」

「プリンを共用冷蔵庫に入れるお前が悪い」

「・・・お前は面白いことを言うな提督。殺すのは懺悔を聞いてからにしてやる」

・・・け、喧嘩なのです!?

「電・・・これ大丈夫なの？」

「へ、下手に止めたらダメな気がするのです・・・」
そしてまた二人を見る。

「来いよ天龍・・・怖いのか？」

「・・・誰がてめえなんか・・・てめえなんか怖かねえ!!」

「フフ怖(笑)」

その一言で天龍さんの中の何かが切れた

「野朗ぶつ殺してやるあああああああああああああああああ
!!!」
「来いよ——ぐえぶっ!」

一瞬でタックル食らつてもものすごい声が出てるのです・・・
そして足を持たれて窓際まで持っていかれた

「ね、ねえ・・・あれヤバくない・・・？」

「・・・やばいのです」

でも天龍さん怖いのです・・・

「・・・提督、謝るなら今のうちだぜ」

「だ、誰が謝るかよコノヤロウ！」

「参考までに言つとくがな、この腕は利き腕じゃないんだぜ？」

「で、フッフ怖いかな？つてか？」

「・・・お前を殺すのは懺悔の後だと約束したな？」

「そうだ、さっさと降ろせ」

「アレは嘘だ。」

そしてリリース

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

司令官さんの悲鳴が鎮守府中に響き渡った・・・

「・・・悪は滅びた」

天龍さんが少しかっこつけてたのです。

すると壁のほうから何か音が聞こえてきた。

「ん？何だ？」

天龍さんが窓のほうに行こうとしたとき・・・

「てんりゅうううううう・・・」

「きやあ?!?!」

頭から血を流し泥だらけの司令官さんが壁を這い上がってきた。

天龍さんは今まで聞いたこと無いような女の子らしい悲鳴を上げていた。

「ひっ・・・て、提督・・・？」

「コノ恨ミ晴ラサデ置クモノカ・・・」

もうこれただホラーなのです・・・

「い、いやあああああああああああああああああああああ!!!!!!
龍田ああああ助けて
よおおおおお!!!」

「待ああああてえええええええええええ!!!!!!」

直後、司令室から天龍さんが飛び出し、その後を司令官さんがものすごい形相で追いかけていった。

・・・ものすごく怖かったです。

NIMBUS、LUNCH!

天龍の身柄を龍田に引き渡して司令室に戻ってきた。

「……ものすごい悲鳴が聞こえてきたけど……大丈夫だよね！」

「ういゝつす……帰ったよ」

扉を開けると武御雷提督と電が居た。

「あら？武御雷さん、今ついたんですか？」

「……いや……君がものすごい形相で天龍追いかけていったあたりから居たよ……」

「あら？そうなの？」

「まあいいや、とりあえずお久しぶり。いつ以来かな」

「あく……1年前くらいじゃないですか？ほら、観艦式のときに」

「そうだったけ？」

「そういや、提督の艦娘は？」

「ああ、そとに居るよ？今から演習するって」

「えっ」

待って聞いてない。動かせるのあの3人なんだけど……

「どうした？私が怖いか？」

「いや、資源が怖……いや、なんでもありません」

「？」

「ええっと……演習やるんすか……？」

「ダメ？」

そとでばつちり準備してる艦隊を見てダメとか言えない。

「まあ、私に勝ったら間宮チケット10枚やるよ」

「やります！やらせていただきます！」

……シンファクシ、ケストレル、アンドロメダ……

ふふふふ……いける！

「じゃあ、やりますか。」

3人にさつさと連絡をする。

喜んで了承してくれた。

演習を見守るための部屋でモニターを見る。

上空を飛行する両陣営の偵察機の映像とレーダー画面が表示されている

「よし！演習開始！」

「イーグルアイ・・・君の艦隊3隻なのはなんで？」

「・・・あの娘たちしか居なくて・・・」

「・・・お、おう」

するともう射程に捉えたのかシンファクシから無線が入る。

〈提督、発見したぞ。もう撃つてもいいか？〉

「索敵は優秀なんだな」

「ここからですよ！・・・ニンバス、用意！」

〈了解！ニンバス、用意！〉

「二、ニンバス？」

「まあ、見てりや分かれますよ」

〈潜行して発射するぞ〉

「了解」

「潜水艦がいるのか？」

「居ますよ」

「ふふふ、我が艦隊の対潜値を舐めたらアカンで！」

「・・・どうですかね？」

〈がぼぼぼ!!（ニンバス、ランチ!）〉

レーダーに小さな点が4つほど表示される。

☆ち☆な☆み☆☆に☆

ニンバスとは着弾地点に揮発性燃料をばら撒き着火して大爆発を起こす空間制圧兵器なのだ！

まあ、簡単に言うとな燃料気化爆弾を空中で爆発させる感じだね。

ちな、弾道ミサイルな。

「艦載機?・・・ふむ・・・赤城、やれ！」

〈了解！第一次攻撃隊、発艦してください!〉

赤城隊の艦載機とニンバスが重なりあったところでニンバスの反応が消える。

「ふうははは!!どうだ！我が航空隊は世界一イイイイ!!」

「どうでしょうかね?」

「いや、全て撃つ・・・ファツ!」

レーダーに再び4つの点が映る。

その3秒後くらいだった

〈キヤアアア!!真上!!直上・・・!!〉

〈な、何だ!?太陽でも爆発したのか!?〉

「長門落ちつけ!何が起った!」

〈赤城大破、轟沈判定!電、響も中破!〉

「何が・・・」

その報告聞きながら俺氏、ドヤ顔

「さて、ケストレルさん、やっちゃいなさいな」

〈了解!ラーズグリーズ出撃!〉

ケストレルから艦載機が発艦する。

え?上がった艦載機?やだなあ、F-18E(ハープーン装備)に決まってるじゃないですかー

「なんてこった・・・赤城さん大破するとお財布やばいんだよなあ・・・」
「ふうははははは!!どや!!相手の力を見ずにやるからこんなことになるんですよ!!あーっはっはっは!!どうしようももうどこにも出撃する資源残ってないよ」

「お前もやばいんかい!!」

「しかたねーじゃん!!ニンバスってすごい弾薬食うんだもん!!」

あれ一発大和2隻分だぞ!!ちなみにレベルMAX、弾薬欠乏状態の大和2隻ね

「ところでイーグルアイ君、下は見てるのかい?」

「下?」

海面下?と思った瞬間・・・

〈きやあああ!!・・・そんな!魚雷!!〉

「はっはっは!!401の力を見たか!」

「oh・・・」

〈そんな・・・もう一発・・・?弾幕展開!〉

いやあああああ!!!ケストレルがああああ!!!

「どうした提督？目が死んでるぞ？」

「へきやあ!!・・・傾斜する・・・でも・・・!どんな機体でも打ち上げます!カタパルトがイカれても構わない!!」

「そんなにがんばらなくていいのよ・・・僕ちゃんもう目が塩水で埋め尽くされてるから」

「あ、あつはつはつは・・・ケストレルがああ・・・」

「だ、大丈夫か？」

「資源がああ!!!」

「・・・費用?腹ペコな大和10隻分プラスボーキ消費量がかかるく3万こえるぜ・・・」

「へけ、ケストレルさんんんん!!!こ、こうなったら・・・あ、あなたが悪いですよ・・・?や、やられる・・・前に!!」

「待って!!アスロック撃つな!!!」

「アスロック一発ボーキ4000と弾薬が8000飛んで行くよ・・・」

「ちなみにもう遅かったり」

「・・・今アスロックって言った？」

「武御雷さん・・・すごい顔になってまっせ」

「どうやって開発したんだ!?教えてくれ!」

「いや・・・うちの工廠が勝手に・・・ね?」

「結局演習は旗艦ケストレルの大破で判定負け。向こうは長門がニンバスの直撃を4回くらい受けても小破だった。」

「長門姐さんマジパネエっす」

「ちなみに向こうは全てニンバスで長門さん以外全滅してたらしい。」

「俺は資源の消費が激しすぎてちよつと禿げそうになっていた。」

航空母艦ケストレル

演習も終わり日が暮れた頃・・・

資源はすつからかん。遠征部隊がいるから何とかなるけどね。

「さてと・・・じゃあ、私は帰るよ」

「んじゃあそこまで送りますよ」

「ありがとう」

負けたのは悔しいがなかなかいい戦いだっただと思う。

・・・てか、何でニンバスの直撃に耐えられるの長門の姉御

「ありがとう、ここでいいよ。後は向かえの車で帰るさ」

「艦娘たちは？」

「ああ、あの子たちなら先に帰ったよ。」

「そうですか」

すぐに車がやってきて武御雷提督を乗せる

「じゃあ、また演習よろしくね」

「・・・もうしたくないんですが・・・」

「まあまあ・・・じゃ、またね」

車は走り去っていった。

とりあえず晩飯食うかな

そう思い司令室に帰っていくと・・・

「・・・なんでお前ら全員ここに居んの」

「だってこの艦隊私たちがいないじゃない！」

「そうなのです！9人程度なのでみんなここで食べるのです！」

「しゃーないな・・・机出するか・・・」

今日の料理は雷が作ったらしい

さすがロリおk (ry

「やっぱ雷の料理は美味しいな」

「そう？やっぱり？」

「やっぱりって何だ」

「自信あるのよ！」

そんな話をしながらわいわい食べる。

「ケストレルさん・・・でしたっけ？秘書艦の電なのです！」

「ああ、君が隊長の秘書か。昔も今もロリコンなんだね隊長」

「Yes！」

「いや否定しろよ提督・・・」

「ねえねえ！そういうえばその3人が艦娘じゃなかったときの話してほしいな」

「環太平洋戦争の話？」

「うん！」

その話には電も雷も赤城も加賀も興味深々だった。

ケストレルにはつらい話のほうが多そうだけど・・・

「同じ空母仲間としてケストレルさんの話を聞いてみたいです！ね？」

加賀さん

「・・・そうですね」

「ううん・・・どこから話して言いやら・・・」

ケストレルは宣戦布告と同時に軍港を急襲された話、姉2人をシンファクシの放った弾道ミサイルで撃沈された話、セレス海海戦で実の姉を自らが放った艦載機で撃沈した話をした。

最期の話も

「・・・すごい話だね」

「でもそのときの対艦ミサイル以外の被弾は無かったんですよ」

「ゆ、雪風に負けず劣らずだね」

「雪風？」

「ああ、駆逐艦なんだけどね、ほとんど無傷で第二次大戦を生き延びたんだよ。」

「なるほど・・・お友達になれそうですね。」

そしてケストレルは俺のほうを向いていった

「その雪風を早く建造してくださいよ隊長」

「・・・お前今の資源しってるか？」

「ひねり出さない！」

「ふざけんな!!」

出せるかアホ!!!

なんていう賑やかな会話も終わりみんな寝室に帰っていった。
ああ〜・・・まだ仕事があるぜよ・・・

〜ケストレル〜

「ふわああああ〜・・・」

「眠そうですね」

「ん〜・・・初めての戦闘だったからね〜」

「無理はしないでくださいね?」

「はいはい、分かっているよアンドロメダ」

アンドロメダとは長い付き合いだ。

あの戦いで私の仇をとったあとのことは知らないが天寿を全うして
るよね

「さてと・・・寝ますかな」

「そうですね・・・おやすみなさい、ケストレルさん」

「おやすみ〜」

自分の部屋に入りベットにダイブする

そのとき机からベットに写真立てが落ちてきた。

「ん〜・・・?あつ・・・」

それはニコラス艦長の写真だった

「ふふっ・・・」

急に懐かしくなってふと笑ってしまふ。

「艦長、私また航空母艦として戦うよ。もう艦載機を減らせはしない
から。」

その艦長は4年前に亡くなったと聞いている。

オーシアの病院で亡くなったとだけしか聞いていない。

「はあ・・・また艦長に会いたくないな〜・・・」

なんてことを呟きながら深い眠りに落ちた。

港に鳴り響く警報の音がする。

空襲警報!?

〈〈出港可能な艦はただちに港外へ逃れよ!〉〉

〈〈これは演習ではない!〉〉

〈〈見りや分かるぞ!馬鹿野郎!!〉〉

〈〈そこらへんユーク軍機だらけだ!!〉〉

ここは・・・?そうだ、セントヒューレット軍港・・・

私は艦橋にいた。

艦橋にいるだけが艦のデータは手に取るように分かる。

まあ、私自身だからそうだけどね

「スノー大尉、防空戦闘は任せたまよ」

〈〈了解です!アンダーセン艦長!〉〉

私のことは誰にも見えない。

いやまあ・・・見えたら怖いけど

〈〈こちらは対空艦エクスキャリバー!前方をふさぐ艦!離れてくれ

!SPYレーダーが照射できない!〉〉

〈〈こちらサンダーヘッド。空中管制指揮官だ。方位280から敵侵

入・・・ダメだ、数が多すぎる〉〉

〈〈何とかしろ!あんたの指示が必要なんだ!〉〉

無線は込み合い聞き取るのも一苦労だ。

そんな中増援に来た、たった3機の戦闘機が戦況をひっくり返して

いた。

・・・すごい、もう一人五機以上撃墜してる

その戦闘の中私とその他5隻以上が無事に港外へ脱出できた。

なんだろう・・・今度は少し薄暗い。

「ちよつとケストレル!置いてくわよ!」

「ああ!待ってよ!」

久々に姉のヴァルチャーと航行している。バザードも一緒だ

「姉さん、ここまで来れば安全だよね?」

「そうね・・・まあイージスも居るし大丈夫でしょ!」

「いや・・・大丈夫じゃないぞ」

「え?」

そのときだった・・・

〈へて、敵接近!各隊もどれ!空母を守れ!!〉

あの空中管制指揮官からの声が聞こえてくる。

「ほら行くわよ!」

姉さんは速度を上げていく。

飛んでくるのは全部VTOL機なのが少し引つかかる。

この近くには空母の反応なんてない。基地もない・・・

一体どこから・・・

だが、敵戦闘機隊は全滅。空も海も安全になった・・・と思いたかつ

た

〈弾道ミサイル接近!!〉

〈弾道ミサイルって・・・一体どこから発射されたんだ!〉

弾道ミサイル!

「姉さん!!逃げて!!」

「分かってるわよ!!面舵いっぱ——」

〈弾着、今!!〉

「姉さん!!」

空が突然轟音とともに爆発する

〈何だ!?何が起こった!?!〉

〈ちくしょう!太陽でも爆発したのか!?!〉

〈主翼が・・・落ちる!!〉

〈誰か!!助けて!!!〉

〈こちらヴァルチャ―！直撃を受けた！沈没する！！〉

そんな・・・姉さんが・・・

「ケストレル！悲しんでる暇があったら逃げるぞ！！」

「でも・・・でも・・・！」

〈弾道ミサイル、第2弾接近！！〉

「もう一発だ！取り舵いっばい！！」

何で・・・どこから・・・いやだ・・・艦載機も・・・みんな逝かないで！！

〈10・・・9・・・8・・・〉

早く逃げて！！

〈3・・・2・・・1・・・弾着、今！！〉

また空が大爆発を起こす。

「ケスト・・・レル・・・逃げろ・・・！」

「バザード姉・・・！！」

〈ちくしょう！！いったいどこの攻撃だ！！〉

〈メーデーメーデー―！こちらバザード！損害甚大！総員退艦する！！〉

〈あの攻撃は一体なんだ！鉄の雨が降ってきたみたいだ！〉

そ、そんな・・・やめて・・・姉さん・・・逝かないで・・・

「・・・こちら空母ケストレル。無事に生き残った艦へ。われわれはこれより全速で当海域を離脱する」

・・・姉さん・・・一人にしないで・・・

あの海域から9ヶ月。

姉さんたちも失った悲しみも大きいけど私たちは・・・今祖国を相手にしている

15年前のベルカ戦争の好戦派がオシア、ユークトバニアを惑わせ大國間戦争に導いた。それに気づいたのは、元サンド島分遣隊のメ

ンバーとアンダーセン艦長。それ以外はベルカの手のひらの上で踊っている。

でも、捕まっていたユークの元首、オーシアの大統領を救出し両国間の誤解を解こうと必死になっていた。

そしてこのセレス海でそれを邪魔するようにユーク海軍が現れた。

本当に・・・なんでこんなに馬鹿なの!!何で気づかないの!?

「ユーク艦隊の諸君、私はユークトバニアを代表する国家首相、ニカノールだ。」

首相の演説が始まる。

お願いだから理解してよ!

「この・・・ケストレルか?」

「イエス、ケストレル」

「オーシア空母、ケストレルの艦上に居る。われわれは再び・・・」

何かを言い切ろうとしたときECMで妨害される。

私はすぐにECMを作動させ通信を傍受する

「・・・艦に告ぐ!オーシアとユークトバニアの間には憎悪しか存在しない!元首ニカノールは敵についた!これを敵と認め、敵艦もろとも海中へ没せしめよ!!」

何でそんな簡単に元首を殺そうとするのよ!

だが・・・

「しかし司令官、仮にも元首のお言葉です。我々だって理不尽な戦いはごめんなのです!戦闘の中止を!!」

一隻のフリゲート艦が旗艦の前方をふさぐ形で回頭をはじめた。

そうそう!もつと行ってやれ!!ついで司令官殺っちゃえ☆

「・・・我に従う艦は、前方を邪魔するフリゲート艦「ピトムニク」を撃沈せよ!」

・・・!?何いつてるの!?

「撃ち方始め!!!」

旗艦を含め5隻以上が発砲した。だが、命中弾を撃ち込んだのは旗艦と他の一隻だけだった。

・・・ピトムニクと呼ばれた艦は船体の軋む音を響かせ轟沈してい

く。

今すぐにもこの旗艦を司令官ごと撃沈したい。

すると・・・一隻の艦から無線があった

〈こちららは、栄えあるユーク海軍ミサイル駆逐艦「グムラク」。同僚の撃沈を命ずる艦隊司令官とは行動を共に出来ない！我々は二カノール首相を護る！同意する艦は我に従え！〉

〈旗艦に従わぬ艦は攻撃する!!〉

そのとき私と艦長の思いが一緒だったのかほぼ同時に同じことを言った。まあ、聞こえないだろうけど

「勇気ある彼らを守れ！戦闘機発進!!」

3分もせずに次々と戦闘機が発進する

「こちらケストレル、そちらの艦名を教えよ」

〈こちらグムラク！そちらの艦隊に合流する！〉

〈こちら駆逐艦「チウーダ」！本艦もグムラクと共に首相をお守りする！〉

〈ケストレル！こちら「ドゥープ」！合流し戦闘に参加する！〉

「・・・かたじけない」

何でだろう・・・すこし涙が出てきた。

〈・・・全責任は私が負う！射撃開始!!〉

〈目標・・・「敵艦隊」・・・攻撃を開始する！〉

やっぱり敵艦隊と言うのに言葉が詰まるよね。
すると艦長はレコードをかけた

『The journey begins, Starts from
within, Things that I need to
know.
The song of the bird, Echoed in
words, Flying for the need to
fly.』

Journey Home・・・私はこの曲が大好き。平和の歌だ。

〈Journey Home・・・いい曲だな。こちら「ブイストル

イ」！「ブードウシシイ」と共にケストレル戦闘郡に参加する！」

「誰だ！戦闘中に音楽をかけているのは！！」

「何故敵の曲を聴かねばならん！！早く撃沈しろ！！」

私も思わず口ずさむ。この曲のおかげか新たに2隻が参加してくれた。

そして・・・このセレス海にオーシア艦隊が参加してきた。

その中には・・・

「久しぶりね・・・ケストレル」

「バーベツト・・・！」

「妹とは言え、裏切り者には容赦しないわよ」

「なんで・・・これがベルカの陰謀って分からないの!？」

「ベルカ？ああ・・・15年前の・・・それがどうかしたの？」

「だから・・・！」

「まあ、話しても無駄ね。あなた達を撃沈する」

バーベツト・・・！この分からず屋!!

だが、すぐにオーシア艦隊にも私の艦載機が向かう

「オーシアアイジス巡洋艦「ハルシオン」撃沈！」

「オーシア駆逐艦「サンプソン」撃沈！」

また一隻戦友が沈む・・・もう嫌だ・・・！

「オーシア空母」

やめて!!

そういうおうとしても声は聞こえない

「バーベツト、撃沈!!」

もういやだ・・・また・・・姉を失うの・・・？ヴァルチャー姉さ

ん・・・バザード姉・・・バーベツト・・・逝かないでよ・・・

「・・・オーシア、ユークトバニアの脅威レベル、ゼロ。戦闘はこちらの勝利だ。」

もう・・・戦争なんていやだよ・・・

私は自分の手で姉を沈めたことに罪悪感を覚えていた。

あのときもつと粘っていたら・・・！説得できたかもしれないのに！

そして次の日・・・最後の戦いのブリーフィング中だった
突然ミサイル警報が鳴る。

「対艦ミサイル接近！CIWS、撃ち方はじめ!!」

だが・・・弾幕の展開が間に合わず・・・

「うわっ!!対艦ミサイル被弾!」

「早くラーズグリーズを出撃させろ!!」

右半身に激痛が走る。

被弾したんだ・・・

「対艦ミサイル第二波接近!弾着まで10秒!」

「弾幕を展開しろ!」

「ダメです!衝撃に備えて下さい!!」

艦長は静かに目を閉じた。

次の瞬間、また激痛が走る。

「右舷に浸水!ダメコン急げ!」

「敵潜水艦からのミサイル2発命中!艦が傾斜します!」

「彼らを発進させろ!」

「ダメです!」

「傾斜していきます・・・艦が沈みます!」

「発艦を続けろ!」

「でも・・・!」

まだ・・・カタパルトは大丈夫!絶対に打ち出す!!

「彼らを打ち出せ!射出急げ!射出要員を除く、乗組員は退艦急げ!」

艦橋があわただしくなり、一人、また一人と船を下りていく。

みんな・・・やっと会えるね・・・

「何が何でも君たちを打ち出すぞ!!カタパルトがイカれても構うもんか!!!」

戦闘機が一機、また一機と発艦する。

そして最後の一機・・・隊長機だ。隊長・・・短かったけど・・・
ありがとね

「ブレイズ！行け!!」

アフターバーナーを点火し、私から最後の艦載機が発進する。
みんな無事に上がった・・・良かった・・・

「発艦を確認した・・・これより射出要員は退艦します!」

乗組員のみんな、さようなら・・・元気でね

「艦長も急いで!」

「ああ・・・ありがとうケストレル・・・負け戦ばかりの私だが・・・
今回は私の勝ちだよ」

そうだね・・・艦長・・・

長生き・・・してね。

私の意識はそこで途切れた

「・・・レル・・・ケストレル!」

「ん・・・? 艦長・・・?」

「いや、提督です」

「あれ・・・さつき対艦ミサイルを被弾して・・・」

「お前・・・あのときの夢を見たのか・・・」

「夢・・・? ふああああ・・・」

「ほら起きろ。」

「うん・・・って、えええ!?どっから入ったの!？」

「いや・・・起きないから起こしに来たら鍵開いててな」

「だからって入ってこないでよ!!!」

「いいだろうが長い付き合いなんだし」

「艦娘としてはまだ一週間たつとらんわい!!」

「口悪いぞ。いいから起きろ」

「ぐるぐるるる・・・」

でもなぜか隊長が起こしてくれたことが無性にうれしかったり・・・
それより電ちゃん視線が何か痛いです・・・

深海棲艦の生い立ち

「ふああああ・・・ねむ・・・」

ケストレルを起こしてから司令室に帰ると何か司令室が騒がしい。

「何だ？この声霧島か？」

何してんだ？と思い司令室に入る

「あら、提督」

「何してんだ？」

「この子たちが深海棲艦について教えてほしいと頼まれました」

そこにはドイツ娘と潜水艦組がいた

「霧島の教え方が上手いからな」

「いえ、そんなこと・・・」

「俺も聞こうではないか」

「提督もですか？」

「おう・・・と言うかここ司令室だから仕事もあるしな」

「そうですね・・・では深海棲艦の歴史について話しましょうか」

俺はとりあえず椅子に座って書類整理をする。

電にはケストレルとお使いを頼んでいるから今は居ない。

「そもそも深海棲艦がなぜ出てきたか・・・」

なぜ出てきたか、これは提督なら誰でも知っている。

今から20年前、1994年に地球の周りを飛んでいた小惑星ユリシーズに未知の小惑星が衝突し1万個の破片が地球に降り注ぐことが予測された。

それを重く見た各国政府は持てる力を持って隕石迎撃兵器の製作を開始した。

そのとき完成した超巨大地对空レーザガン「ストーンヘンジ」によって隕石の破片の迎撃に成功する。

・・・ほんの一部だけ。

そして約6000もの破片が地球を襲う未曾有の大惨事が発生した。

隕石の破片は各国の人のほとんど居ない田舎に落ちた物や、首都を

中部海域

本部からの連絡が来て20分程度のときだった。

式風が利根を連れて司令室にやってきた。

「イーグル！中部海域に進撃するぞ！俺とお前で組めばいける！」

「え、俺もう資源ないよ。てか行かないよめんどくさい」

「えっ・・・いや・・・お前全員出動ってきたろ？」

「来たけど資源がないのよねえ・・・」

「ああ、資源なら本部が出してくれるぞ」

それを聞いた瞬間・・・

「よし行くぞー！」

「はやっ！」

「んでその第一海域は？」

「ああ、俺は後方で援護するからお前は潜水艦でやってくれるか？」

「潜水艦？」

「ダメか？ダメなら俺が出すが・・・」

ダメなわけないだろう。資源は本部が出してくれる。

・・・ニンバス撃ち放題じゃん。しかも潜水艦？シンファクシの

出番じゃねえか！

「いや！行くぞー！」

「じゃあ、1200時に集合！」

「OK！」

俺はすぐにシンファクシを呼ぶ

「何だ提督？」

「お、来たな！出撃だぞー！」

「出撃!？」

その言葉に目を光らせる

そんなに行きたかったか・・・

「と言うことは私の初陣か！」

「そうなる。思う存分ニンバスをぶっ放して来い！」

「任せろ！」

シンファアクシは部屋を飛び出し工廠へ向かった。

本当は伊号潜水艦も連れて行きたいが・・・弾道ミサイルと酸素魚雷じゃ射程も威力も違いすぎる。

そして準備の終わったシンファアクシが帰ってきたところでちょうど12時になる

「あれ？お前の艦隊は一隻だけか？」

「どした？」

「いや・・・なんで一隻だけなの。しかも誰だこの娘」

「うちのひざつこだ。」

「そ、そか・・・」

そのシンファアクシは式風の艦隊の面々と挨拶をしていた

「では、この艦隊の指揮は我輩が取るぞ！」

「うちのシンファアクシを頼むよ」

「任せるのじゃ！」

7人の艦娘は海を進んでいく。

何か7人の艦娘って映画のタイトルっぽいな。

くシンファアクシく

「そういえばお主はどんな艦なのじゃ？」

艦隊旗艦の利根に聞かれる。

「シンファアクシ級潜水空母だ。」

「ということは伊号潜水艦系統なのか？」

「いや、弾道ミサイルを運用する戦略ミサイル潜水空母だ」

「ミ、ミサイルじゃと!？」

「何か変か？」

「い、いや・・・変とかではなくてじゃな・・・」

おかしな旗艦だな。

そのときレーダーに複数の対水上目標が映る

「利根、対水上目標6を確認。IFF応答無し」

「そ、そのIFFとはなんじゃ？」

「敵味方識別装置。逆に積んでないのかアンタは」

「そのような名前を聞いたのは初めてなんじゃが・・・」
「？」

「ま、まあいい。それで距離は？」

「約200kmつてとこか？」

「なぜ見えるんじゃ・・・」

いやだからレーダーに映ってるんだって。なんで逆に見えないんだ。

「はあ・・・まあいい。利根、私は艦載機を上げて潜行する。」

「何をする気じゃ？」

「先制攻撃だ。敵艦隊と一緒に海底に沈みたくなかったらこのまま進め。」

「い、一緒？」

「何をする気なの？」

「こんな距離じゃ魚雷もあたらないよ！」

艦隊メンバーが一斉に言う。てか魚雷なんか使わないよ。

「あ、この海域浅いな・・・仕方ない浮上したまま発射するか・・・」
「だから何をする気なのじゃ！」

利根の言葉を無視して提督に無線を繋げる

「提督、ニンバスの発射許可求む。発射弾数4発」

「へニンバスの発射を許可する。思う存分ばら撒け！>>>

「了解、ニンバス用意！」

背中に背負ったVLSランチャーのふたが開く。

その前に艦載機を出動させる

甲高いジェットエンジンの音が響く

「ああ・・・もう・・・式風のヤツにどうにかして建造してもらわねば・・・」

「それしたら私たち艦隊から外されちゃいますよ！」

「あいつは相当なフェミニストじゃから誰もはずさんと思うぞ。」

そんな会話の中F-35が数機発艦する。

ニンバスの発射準備も完了した。

「利根、偵察機は上げないのか？」

「そ、そうじゃな！」

腕のカタパルトから艦載機を発進させる。

速度的にニンバス着弾後に到着になるだろうな

「ニンバス準備よし」

〈へよし！ニンバス、ランチ！〉

「ニンバス、ランチ！」

VLSから4発のニンバスが打ち出される。

それを見た艦隊全員がおおく・・・と声を上げていた

「弾着まで・・・一分」

「よし！全速前進なのじゃ！」

まあ今発進しても着弾に間に合うことはないから大丈夫だろう。

つくころにはそこらへんに敵艦隊の残骸が浮いてるだけだろうが・・・

「着弾まで10秒・・・」

艦載機から送られてくるデータから着弾を予測する。

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・弾着、今！」

その瞬間遠くの海に4つの小さな太陽が出来た。

核弾頭ではないから一応その面では安全だ。

「なんじゃあれは!？」

「て、敵の新型兵器!？」

なんて周りは驚いている。

・・・さすがに鬱陶しくなってきた。

「・・・潜行する」

一気に急速潜行し50mまで潜る。

そしてさらに2発のニンバスを敵艦隊に向けて撃つ。

この戦闘での被害はニンバスのおかげで全くなかったが本部のためていた資源がこの戦闘でなくなったとかで提督がものすごいお叱りを受けていた。

電とお買い物

中部海域の第一海域の突破が成功した。

横須賀の提督は来週、敵泊地への侵攻作戦が通達された。

作戦名「バンカーショット」

「バンカーショットねえ・・・ユーリア戦争のときもそんな作戦あったな」

懐かしい思いに浸っていた。

今日は書類整理も終わりとても暇だ。

本当にすることがない

「あの・・・司令官さん・・・」

「ん？どした？」

「午後はお暇・・・ですか？」

「暇だけど？いや、現在進行形で暇だよ」

「その・・・あのっ・・・！」

「どした？」

顔真っ赤にして何かを言おうとしている。

すごい可愛い

「お、お買い物行きたいのです！」

「買い物？」

「そ、そうなのです！」

「そういえば鎮守府の近くにショッピングセンターできたしなあ・・・行くか！」

「なのです♪」

「あ、でも鎮守府はどうするんだ？シンファクシたちは明日帰ってくるけど他の連中は明後日まで演習に行ってるぞ？」

「あ・・・」

それを聞いた瞬間ショボンとなってしまふ・・・

うつ・・・失言だった・・・

「明々後日に・・・行くのです・・・」

声に元気ないし目が死んじやったんですけどおおお!!!

やばい!!

「きよ、今日行こう！警備は憲兵に任せる！」

「ほ、ホントなのです？」

「おう！」

「やったのです♪」

「どうせなら今から行くか？」

「いいのですか？」

「いいのいいの」

「じゃあ着替えてくるのです！」

電は廊下を急いで走っていく。

やだもう可愛い。

「さてと・・・俺も・・・」

着替えて準備するかあゝ・・・

持っていくものは・・・うん、これでいいな

財布とM92Fと免許証とスマホと・・・

え？何か今変な物持っていこうとした？

はっはっは!!目の錯覚だよ！

・・・誰に話してるんだ俺。

「さて、準備も出来たし行こうかな」

部屋を出て外に向かった

そして2分ほどで電も来た。

白基調で青ラインに胸元にリボンのついたセーラーのような服と

服と同じ柄の帽子を被っていた。

何気に髪を降ろしていてこれがまた可愛い。すごく可愛い。セミ

ロングの電マジで可愛い。

「お待たせなのです！」

「今来たところだよ」

すると電は顔を真っ赤にしながら笑って言った

「今の・・・恋人同士みたい・・・なのです」

「そ、そそそそうだな!!!」

あまりの可愛さにどもりまくる俺氏

いやもう電可愛い。嫁、マジで嫁。

ああ!?!ロリコン!?!ケツの穴の処女を、50CAL弾で奪うぞ!!

.....いやだから誰に話してるんだろうね僕。

「さて、どこ行く?」

「まずは...商店街のほうに美味しいラーメン屋さんがあるって利根さんが言ってたのです!」

「おしーじゃあちようどいいし昼飯はそこにいこうか」

「なのです!」

鎮守府をでて最寄の駅に向かう。

そこから電車で約10分のところに俺の艦隊の艦娘達が良く行く商店街がある。

もちろん人も行くのだがどうもここが艦娘たちにとってお気に入りらしい。

電もその中の一人で商店街の人からも顔なじみのようにだ

「あら、電ちゃん。今日は提督さんとデートかい?」

「で、デート?!?!」

駄菓子屋のおばあさんにそう言われてぼふん!と効果音の出そうな勢いで顔を真っ赤にする

可愛い。

「ちちち違うのです!!.....いや.....違わないのです.....」

「ふふ...相変わらず可愛いわねえ...あ、そうだ、これ電ちゃん好きなアイスクリームが入ったよ。食べていくかい?」

すると電は食べてもいい?と言う感じでこつちを見てくる

「提督さんも一緒にどうだい?安くするよ。電ちゃん達艦娘はこの商店街のアイドルだからね」

「じゃあ...お言葉に甘えて.....」

「いいのですか!?!」

「ああ、好きだけ食べていいぞ。」

「でも...お金が...」

「んなもん俺が出してやる」

「でも...」

「はい、つべこべ言わずに食べる！」

俺は強引におばあさんに500円渡して500円ぶんのアイスとお菓子を購入した。

「・・・ありがとう司令官さん」

「いいのいいの。おいしいか？」

「おいしいのです！」

満面の笑顔でアイスを頬張っている。可愛い。

「よし、ラーメン屋行くか。」

「また寄ってね。こんどはもつとおいしいの用意しておくから」

「ありがとうなのです！」

「電ちゃんの笑顔は元気もらえるわ。」

「な、なのです・・・」

電はまた顔を赤くして下を向いた。

そしてラーメン屋につくまでの道のりでいろんな人に電は呼び止められていた。

「買出しでよく間宮と来るから・・・」

そして目的のラーメン屋についた。

「ここか？」

「たぶんそうなのです！」

「よし入るか！」

らーめんとシンプルに書かれた暖簾をくぐる。

中から出汁のいいにおいがする

「へいらっしやい！お、珍しい。カップルかい？」

「カカカカカップル!？」

なんでそんなにあせるの。まったく可愛いよホント。

「違うのです！司令官さんは・・・その・・・」

「ん？司令官？もしかして海軍の方かい？」

「はあ・・・まあ・・・」

「おお!!そうか！実は家の息子が海軍に言っけてな！確か呉だったかな・・・あつたらよろしく言っけてくれ！」

まさかの同業者の親父さんか・・・

呉か〜・・・行く事ないな

「さてと何食べる？」

「ん〜と・・・みそラーメンとチャーハンお願いなのです！」

「おお、嬢ちゃんよく食べるな！司令官！あんたは何にする？」

「何故司令官・・・じゃあ、俺もみそラーメンの大盛りで」

「あいよ！」

「楽しみなのです♪」

そんなに楽しみか・・・連れてきて良かったよ。

「電、このあとどこに行く？」

「ええっと・・・わがまま・・・いいですか？」

「うん、いいよ。」

「その・・・ぬいぐるみシヨップ行きたいのです・・・」

「ぬいぐるみか・・・よし！次はそこに行こう！」

「ありがとうございます♪」

すると電の注文したチャーハンが出てきた

「へいチャーハンお待ち！」

「ありがとうございます！司令官さん、おさきにいただきますなのです

！」

「うん、ゆつくり食べればいいからね」

電はチャーハンを幸せそうに食べている。

「おいしいのです！」

「お、うれしいこと言うねえ！」

ニコニコしながらチャーハンを頬張っていた。

「へい司令官！みそラーメン大盛りお待ち！嬢ちゃんも少し待つてな

！」

「おお！これは美味そう！」

目の前に置かれたラーメンからもすごいおいしそうな香りが・・・

たまらん。

「いただきます！」

さっそく一口食べるとなんともいえないおいしさが。もうなんだこれ。美味すぎ。

「へい嬢ちゃんもお待ち!」

「ありがとうございます!」

電もラーメンを頬張る。

美味しい。ほんとうまい。なんだこのラーメン。隠れた名店にもほどがあるぜ

10分もしないうちに完食した。

「ふうく・・・食べた食べたく・・・じゃあ、お勘定お願いします」

「はいよく!ええつと・・・1800円ね!」

「ほい」

「あいちょうどお預かりね!また来てねく!」

「あ、あの!!司令官さん!!私もお金出すのです!!」

「いいのいいの!俺のおごり!」

「・・・むう・・・」

「はは、すねんなって」

「お金払わしてばかりじゃ悪いのです!」

「はいはい、次行くよ」

頭を撫でながら次の店に向かう

「はうう・・・」

頭撫でられるのがそんなに好きか・・・可愛い。

商店街を抜け、大きなショッピングモールに向かった。

電とデートも楽しいな。そろそろ可愛すぎて悶え死にそうだけど。

デート II

商店街を抜けてすぐのところ、電が行きたいと言った店があった。

「ここなのです！」

「どんなぬいぐるみがほしいんだ？」

「ううんっど．．．特に決めてないのです」

「そか」

とりあえず自動ドアをくぐり中に入る。

「はわ〜！」

そんな可愛い声を上げると同時に急ぎ足で店の奥に行った。

電はいろいろなぬいぐるみを手にとって抱いてみたりしていた。

「これも可愛いのです．．．ああ、これも！」

「迷ってるのか？」

「ううん．．．迷ってる．．．のです？」

「いやなんで疑問形？」

電はほぼ身長くらいある熊のぬいぐるみとリアルサイズのウサギのぬいぐるみを前にして悩んだ。

値段は二つとも5600円と同じだった。

「司令官さん、どっちがいいと思うのです？」

「うくん．．．いつしよに寝たりするなら熊かな〜」

「うう．．．でもウサギも．．．」

迷ってる姿も可愛いのう．．．

「あううう．．．決まらないのですうう．．．」

俺はふと財布の中身を見る。

残金は3万5000円ほど。

「電はどっちがいいんだ？」

「抱きついて寝たいのですが．．．でもウサギも〜．．．」

「ウサギだと抱きつきにくくないか．．．？」

「あ、確かにそうなのです」

「熊にするのか？」

「ううう．．．でもお部屋にウサギさん欲しいのです〜．．．」

あうろうう・・・とうなってる姿が可愛い。とにかく可愛い。
「決めたのです!」

と言うと熊のぬいぐるみを担いでレジに向かっていた。
・・・さて俺も買い物だぜ。

ウサギのぬいぐるみをつかみ電と少し離れたレジに並ぶ。
熊のぬいぐるみでこっちは見えていない。

「はうろう・・・買えたのです・・・」

「いやお前それ・・・でかすぎだろ・・・」

「お、重いのです・・・」

「はあ・・・持ってやるからお前はこれを持って」

とさつき買ったウサギのぬいぐるみを出す

「これ?・・・って、ええ!?いつの間にか買ったのです!?!」

「さつき。」

「い、いやその!悪いのです!」

「いいの、いっつも秘書艦としてがんばってくれてる電にプレゼント」

「で、でも・・・」

「うれしいなら素直にうれしいって言う!OK?」

「ありがとうございます!」

「よし!」

電は鼻歌を歌いながら歩いていった。

「さてと・・・次はどこがいい?」

「ええっと・・・ゲームセンター・・・いいですか?」

「おう、いいぞ」

「やったのです♪」

ここの近くのショッピングモールのゲームセンターに向かう。

・・・ただここDQN多いから電を一人にするとヤバイよな・・・

なんて思いながら中に入る。

「司令官さん!あのUFOキャッチャーでもいいですか?」

「ああ、ふな○しーのか。取れそうか?」

「が、がんばるのです!」

そのUFOキャッチャーの台から甲高いヒヤッハアアア!って

音声が届りまくっている。

電は100円を入れさつそくUFOキャッチャーをはじめた

「そこ・・・もうちょい・・・なのです!」

すると見事にアームが引っかかる。

・・・二体取れてるやん。

「司令官さん!取れたのです!やったのです♪」

「まさかのダブルゲットだな」

すると電はふな○しーを・・・

「これは司令官さんにあげるのです!」

「いいのか?」

「二つあるし・・・おそろいなのです♪」

「そか。ありがとな」

「いえいえなのです!」

ちなみに電のヤツ妙のUFOキャッチャー上手い。とりにくそうなものもほぼ2プレイで取っている・・・。

すごいな・・・

「し、司令官さん・・・ちょっとおトイレ行きたいのです・・・」

「んじゃ、荷物持ってそこのベンチにいるよ。」

「ありがとうございます!」

と電はスタスタと歩いていく。

とりあえずトイレの前のベンチに腰をかけて待つ。

「ふあああ・・・ねむ・・・」

中部海域のときはろくに寝てなかったからな・・・

あの司令部め・・・何で資源使い切ったくらいで激怒すんだよチク

シヨウ。

そんなことを心の中で愚痴っていると電がトイレから出てきた。

ついでにチャラそうなDQNも男子トイレから偶然出てきて・・・

「お、嬢ちゃん一人?」

「今から俺らと遊ばねえ?楽しいところ連れてってやるよ!」

「え、ええつと・・・」

なんでこうギャルゲに出てきそうなシーンになってんの・・・

「あ、あの・・・私はあの人と来てるので一緒に無理なのです!」

「あ?あの人?何々?彼氏?」

「は?あれが?いやいや、俺らのほうが百倍イケメンっしょ」

うつわ・・・めんどくせえ・・・

すると案の定こつちに来やがった。来んな。

「ねえねえ、お兄さん、俺らさあ、今からあのこと付き合うから手え引いてくんないかなあ?」

「はあ?何で?」

「あ?何その言い方。行つとくけど痛い目見たくないでしょ?」

なんでそんな小物セリフ吐けるの・・・しかも2人でこつちくんな。むさい。

「痛い目?へえく・・・どうやって?」

とりあえず面白いから挑発しておこう。

「あ?マジでやんの?」

「来いよ。」

「てめえ殺すぞ!!」

といつてまさかの拳銃を出してきおった。トカレフつてお前・・・

「これ本物の拳銃なんだけどき。殺されたくないでしょ?」

「別に。見慣れてるしな」

「はあ?余裕ぶっこいてんじやねえぞコラ!」

「いやお前・・・余裕ぶっこくつてもな・・・」

だってトカレフのハンマーが動いてないし・・・それ初弾送りこんでんの?

「まあ・・・本物ねえ・・・」

「そうだよ。助けて欲しけりゃ財布の中身全部置るかあの娘置いてけや」

「・・・」

「おお?ビビっちゃった?」

「・・・別に」

と言うのと同時に腰のホルスターに差しておいたM92Fを抜く。初弾装填済みだぜ。

「は？オモチヤだろ？」

「どうだろうな」

そして少しからだを動かして銃と密着させる。

これでトカレフはスライドが少し動いたためハンマーがファイアリングピンを叩くことが出来ず発砲できない。

「おら、撃てよ。」

あえて挑発してみる。

てか、この最中に電はどこ行ったの。

と思った瞬間だった・・・

「ぐげっ!!」

ものすごい悲鳴を上げてDQN1ダウン。

「・・・司令官さんに手を出す悪い人はアナタですか・・・？」

「えっ？」

あらく・・・何かプラズマモードオンになってるし・・・

ちなみにこのあとDQN2もダウン。二人そろってトイレにほりこんでケツの穴に大根突き刺しておいた。大根さん、こんなことに使ってごめんなさい。

「電、怪我はないか？」

「大丈夫なのです！」

「う、うん・・・元気そうだね」

「さてと・・・時間もいいし帰るか？」

「そうですね・・・ちよつと疲れちゃったのです。」

「じゃあ、帰るか。」

「艦隊帰投なのです！」

「ここは海じゃないぞ」

「えへへ・・・」

夕暮れの中、帰路についた。

電は電車の中で少し眠そうにウトウトしていた。

またこれが可愛い。すごく可愛い。

そして鎮守府の近くの駅に降りる。

「あの・・・司令官さん」

バンカーショット作戦発令

「おしっ！全員いるな！ブリーフィングをはじめろ！」

艦隊司令部の建物内にあるブリーフィングルームに総勢30人が集まった。

「これよりバンカーショット作戦について説明する。電、データを出してくれ」

「なのです！」

スクリーンに鮮明な海図がCGで表示される。

「今回の目標は敵泊地の制圧及び占領にある。また横須賀鎮守府所属部隊のみ出撃となる。本部は俺達のほうが錬度が高いと判断したんだろう。また作戦名の通り、目的地はバンカーまみれだ。」

バンカーの数はおよそ50を超える。これは偵察機がかるうじて撮影できたものであってまだ数があるだろう。

「作戦の詳細は……」

作戦はこうだ。

まず偵察、その後戦艦より艦砲射撃が行われる。

その後上陸船団とその護衛艦隊が前進、航空機が近接航空支援を行う。

また今回の上陸船団は米海軍海兵隊によって行われる。

ちなみに妖精さんだったり。

……アメリカの妖精さん、普通にそこらへんの人と変わらないのだよな……身長のは最高は150cmくらいだけど……アメリカンサイズつすな。

「今回の編成は、戦艦隊は無論、全員出撃。空母もだ。シンファクシはいざと言うときのため、戦艦隊と行動してくれ。上陸船団の護衛には第六駆逐隊を派遣する。それ以外は鎮守府で待機だ。ただし、全員いつでも出撃できるように。」

すると赤城が……

「提督、敵の戦力と注意点などはありますか？」

「敵の戦力か……情報が少なすぎてな……ただ姫級は確実にいるだ

ろう。それと・・・」

少し言葉が詰まる。

状況が地味に深刻なのだ。

「なぜこんなに状況が分からないかと言うとだな・・・」

俺はPCをいじり一つの画像をだす。

「この衛星が破壊されたんだ。」

「衛星？」

「軍事用偵察衛星だ。放置してあったのをハッキングして俺の鎮守府専用にしてやった。」

何でかウチの海軍のお偉いさんは偵察衛星を使ったがらずWW2のごとく偵察機の情報に頼りやがる。ほかの提督連中も・・・

「俺の予測だが・・・ユリシーズが関係あるかも知れない。」

「ユリシーズ？どうしてです？」

「軌道上にはまだユリシーズの欠片は1万以上あるんだ。地球に降り注いだのは迎撃できて6000程度だがな。まだ石ころサイズから戦艦並みの大きさまでさまざまなのがある。」

「・・・落下が近いと？」

「いや、まだ分からない。」

ユリシーズが衛星を破壊したのであればもう少し証拠があるはずだからな。

宇宙空間なら小さい釘でも下手すれば衛星一つガラクタにできるからそのせいかも知れない。

「今回の作戦、俺は空中管制機から指揮を執る。質問あるか？」

手はあがるのでなさそうだ。

「よし、本日1600より作戦開始だ！全艦は移動を開始！ここから4時間の位置で他の艦隊と集結することになる！」

「了解！」

全員からヤル気のこもった返事が来る。

「今日は俺の誕生日だ、プレゼントには勝利を頼む」

「・・・あの、司令官さん・・・司令官さんの誕生日って2月じゃなかったのです？」

「いや、一回言ってみたかったんだよこのセリフ」

「ちよつとボケが始まったのかと思っただのです・・・」

「待って、酷くない？」

「・・・冗談なのです」

とデートの後からちよくちよく見せてくれるようになった最高の笑顔で言った。

そして電は暁、響、雷とともに艤装を装備し出撃した。

俺もすでに滑走路に用意してあるE-767に空中管制指揮官として乗り込む。

コールサインはもちろん「スカイ・アイ」だぜ！

(L。□□□)「M o b i l i E n g a g e !」

Operation Bunker Shot

「スカイアイより各艦へ。これよりバンカーショット作戦を開始する！」

〈〈こちら上陸船団A隊のコリンズ！横須賀の提督だな？よろしく頼む！〉〉

海兵隊の妖精から無線が入る。向こうは艦娘は存在しないが、身長が人間とほぼ変わらないので既存の兵器の運用が可能だ。

アメリカの兵力はMBTが約150以上、イージス艦が20以上、LCCが80以上いる。

日本側は横須賀の艦娘が待機してる者を除きほぼ全員参加している。

〈〈ようイーグル！指揮は任せるぞ！〉〉

「任せ……いや待て、お前なんちゆうもんで戦場に来てんだ」

〈〈どうだ？イカすだろ？〉〉

「いや……お前……どこでデロリアンなんか作った……」

何故かデロリアンが飛んでいた。

〈〈何か俺も大型開発とかいうのやってみたんだがなあ……すげえな〉〉

「ああ……良かったウチのが壊れてたんじゃなかった……」

何故か安心感が湧き上がってきた。

「さてと……空母隊へ。作戦開始！」

〈〈了解！第一次攻撃隊、発艦してください！〉〉

〈〈……鎧袖一触よ。心配いらないわ。〉〉

〈〈ウォードック、出撃！〉〉

〈〈攻撃隊、発艦はじめっ！〉〉

〈〈友永隊、頼んだわよ！〉〉

レーダーに小さな点が約100以上表示される。

またレーダー外から接近する航空機もあった。

〈〈こちら、リッジバックス1。そちらの管制下に入る〉〉

「了解リッジバックス」

〈〈スラッシュから全機、妖精なんか負けるな〉〉

妖精なんかには負けるな・・・ねえ

く零戦妖精（リボン付き）く

「メビウスーから各機ーやるわよお!!」

〈二番機りよーかい!〉

〈はいはーい!三番機了解!〉

うん!みんな調子よさそう!

〈オメガー行つきまーす!〉

「ちよつとオメガ!あんた先にいったらダメでしょ!」

〈ええく・・・大丈夫だよ〉

「大丈夫じゃないわよ!!この被弾姫!」

〈ちよつ!その言い方はないでしょ!〉

なんて無線で喧嘩していると後ろからアメリカ側の戦闘機が迫ってきた。

〈邪魔だ〉

〈ごんにちわ妖精さん〉

「あつぷな!!」

〈おわあああ!!だ、脱出ー!イジェクトオオオ!!〉

「・・・あんた何しにきたの」

側を通過された衝撃波で何故かオメガが撃墜(?)されていた:

ホント何しに来たの・・・

するとさっきの戦闘機の一番機から無線がまた来た。

〈お前らが横須賀の妖精か?〉

「そうだけど、あんたジェットでレシプロ機の横を通り過ぎるってどんな神経してるの!?!」

下手すりゃ落ちるわ!!

〈ふん・・・遊んでるだけなら帰れ〉

「ぐるぐるぐるぐる・・・」

〈スラッシュより各機。お遊びに来た妖精連中は無視しろ。リッジバックス隊は散開して攻撃を開始する〉

無視しろですってええええええ!!?なによあの堅物!!!レーザーで焼か

れて氏ね!

「はぁ・・・メビウス1より各機・・・やるわよ!あんなクソ野郎に負けたら龍田さんのお仕置き120分コースだからね!オメガは確定!!」

「へい、いやああああ!!戻ってくる!戻ってきますからそれだけはやめてええええ!!」

「いやだ☆」

「へうわああああああああああん!!!」

なんて事いいながら進路上に存在する2つの島の要塞に向かう。

機体はラジコン機程度だけど耐久力も攻撃力も本当のゼロ戦と変わらないんだから!!むしろ被弾面積が減ってるからいいことづくし!

・・・え、防弾?何ソレおいしいの?

「へこちら強襲揚陸艦オキナワ!まもなく島の間を通過する!援護頼む!」

「まかせて!」

「へまかせろ」

まさかのあのリτζジボックスと被った。

「へ悪いな妖精。いただくぞ」

「やるもんですかあああ!!」

やらせはせんぞ!!

と心の中で叫び急降下する。

だが、ジェットとレシプロ。速さが違いすぎる。

「へまずは1キルだ。」

「くやししいい!!」

「へあ、あの・・・隊長・・・落ち着いて・・・」

「これが落ちついていられるかあああ!!」

しかもさっきの攻撃の当たり所がよかったようで要塞が大爆発を起こした。

・・・もうやだお家かえる

「へおいおい、リボン付きの零戦の力はこんなもんじゃないだろ?」

「そんなこといったてえ……」

〈へだつてお前……式風のヤツ見てみろ……〉
「え?」

ふとその式風提督が居る場所を見る。

〈ヒヤツハアアアアアア!!汚物は消毒だあああああああああ
あ!!〉

「ええええ……」

何か空飛ぶ車でどんどん敵を落としてる……

「あ、あれは……まあ……」

とりあえず……やろう。

〈メビウス各機、敵艦載機が接近中だ。〉

「りようかいっ!叩き落としてやるんだからあああ!!」

〈熱くなるなよ〉

しかし向こうの実戦経験が薄いのかすぐに撃墜できた。

対地攻撃はぜんぶリτζバックスに取られちゃったけど……

そして第一次揚陸船団がビーチに着いたころだった……

「ん……あれ?なにあの光……」

地上から空に向かって一直線に青い光が伸びている。

その光が途切れた瞬間、ものすごい轟音が……それこそ音速の戦
闘機が真上を通り過ぎたような音がする。

「何この音!」

〈なに!?〉

すると提督から……

〈へまずい……!航空機はただちに退避!接近する艦船もすべて退避
急げ!!〉

「何!?どうしたの提督!」

〈ユリシ―ズ来るぞ!!〉

ユリシ―ズ……!?と思った瞬間……

〈うわああああああ!!〉

〈こちらハルシオン!沈没する!〉

〈ぎゃああああああ!!あきつ丸がああああ!!〉

米軍や横須賀の提督の悲鳴が聞こえてきた。

「いったい何が・・・」

あの光が何かしたの・・・？

「・・・スカイアイより各機、司令部より緊急入電だ」

「どうしたの？」

「・・・隕石の軌道を変えるための施設、それが深海側に渡っていたらしい。司令部はこの事実を隠してたみたいだがな」

「提督」

隕石の落下軌道を変更するための施設・・・「シヤンデリア」が深海側に渡るとは・・・

「それと・・・この施設は冷却装置が5つあり4つを破壊するとのこり一つの非常用冷却システムが働くようになってるようだ。」

しかも・・・その非常用の位置は不明とのことだ。

「長門、艦砲射撃は可能か？」

「・・・無理だ。水偵を飛ばしたが撃墜された。正確な位置は不明」

「シンファクシはどうだ？」

「へニンバスで攻撃できなくもない。・・・味方を殺していいならの話だが」

「くそっ・・・」

ニンバスはダメ・・・艦砲射撃も難しい・・・

「どうする・・・」

「へてーとく、こんなときの航空隊じゃん！」

「お前ら・・・やれるか？」

「へやってやるよー!!」

「へイーグル、俺も攻撃に参加させてくれ。」

「式風までどうした？」

「へさっきの隕石でうちの利根が怪我しちまってよお・・・ちよつと借りを返してくるわ」

「お、おう」

航空隊は十分・・・

〈〈こちらコリンズ！MBT含め戦力は十分だ！〉〉

航空隊にかけるか・・・

「よし！作戦続行！航空隊は海兵隊の援護をしつつシャンデリアを破壊せよ！」

〈〈りようかい！〉〉

〈〈いくぜ深海引きこもり棲艦がああああ!!!〉〉

式風も一緒に突っ込んで行った。

そして散（ry

だが何気に改造された式風の機体が強い。

どっからそんな兵装出てくんだってくらい重武装な・・・

なんて事思っている・・・

〈〈提督！長門だ、水偵での偵察が成功した！艦砲射撃開始する！〉〉

「了解した！味方にだけは当ててるな！」

〈〈任せろ！〉〉

戦艦からの艦砲射撃・・・そして航空隊の攻撃によってシャンデリアは冷却装置をほぼ全部破壊された。

・・・非常用を除いてだが

〈〈ああもう!!弾幕が激しくて非常用の場所なんて分からないよおお!!〉〉

〈〈あつやバ!!メビウス3離脱しますううう!!〉〉

すると再び軌道変更レーザーが照射される

「クソ・・・長門！逃げる！隕石はそっちに落ちてくる!!」

〈〈くっ・・・卑怯な真似を・・・!〉〉

隕石は長門たちの居たとを直撃し大破した艦もいた。

〈〈・・・イーグル、データリンクは可能か?〉〉

「出来るが・・・何をやる気だ?」

〈〈・・・俺が単機で突っ込みデータを転送する〉〉

「無茶だ！撃墜されるぞー！」

だが式風のデロリアンはシャンデリアに向かっていく。

〈〈・・・天使とダンスだ!〉〉

そしてジャンデリアに突入していく

〈〈まだだ・・・もう少し・・・!〉〉

〈〈式風・・・頑張るのじゃ!!〉〉

〈〈提督・・・!〉〉

祈るような艦娘の声も聞こえる

〈〈捕らえた!!!〉〉

その声と同時に冷却装置のデータが送られてくる。

「確認した。早く高度を取れ」

式風は海上をかなり低高度で飛行していた。

〈〈・・・〉〉

警報の音だけがむなしく聞こえる

・・・被弾したのか・・・

「聞こえてるだろ!早く高度を取れ!!」

すると式風から・・・

〈〈・・・無理だ・・・もう、推力がない・・・だけど・・・もうそんなもの要らないかも知れない〉〉

「脱出しろ!早く!」

〈〈ほら、フロントガラスの向こうに天使の羽が・・・〉〉

そして衝撃音と共に無線がプツリと切れる

〈〈式風提督・・・レーダーから・・・ロスト・・・〉〉

〈〈そんな・・・提督が・・・落ちた・・・〉〉

そんなバカな話があるか!!

「全部隊救助に向かえ!まだ生きている!ヤツはまだ生きている!!」

〈〈そんな・・・嫌じゃ・・・お別れなんていやなのじゃあああああ

!!〉〉

利根の悲鳴も聞こえる・・・

〈〈落ちつけ提督〉〉

「落ち着いていられるか!」

〈〈まだジャンデリアは生きているんだぞ!〉〉

クソ・・・でもやるしかない・・・ヤツはあんな程度では死ぬはずない!

「・・・全機、シャンデリアを破壊せよ！」

そしてそこに居た全ての航空機がシャンデリアに向かって突っ込んでいく。

「・・・よくも零斗を・・・許さんのじゃあああ!!」

利根はありえない速度で主砲をぶつ放していた。

戦姫級を2秒かからずに沈めてる・・・

「もう!!弾幕激しすぎ!!」

「我輩が・・・じきじきに殺つてやるのじゃ・・・」

「え・・・ちよつ!姉さん!!」

「何があつた!」

「姉さんが・・・!!」

「ぶつとぶのじゃあああああ!!」

「姉さんが酸素魚雷をぶん投げましたあああ!!」

「・・・ええええええええええ!!」

レーダーにちやつかりアンノウン表記されとる・・・

「え・・・ちよ!あれ魚雷!」

「これが本当の航空魚雷?」

「ふざけてる場合じゃないでしょ!」

しかも吸い込まれるように非常用冷却装置をぶつ壊していた。

「はあはあ・・・」

「姉さん・・・大丈夫?」

「あれを壊しても・・・零斗は戻ってこんのじゃ・・・」

「・・・姉さん・・・」

・・・今回のバンカーショット作戦は成功に終わった。

多大なる損害もでた。

提督の一人を失うという事態だった・・・

「・・・全部隊へ・・・今作戦は成功した。これで深海棲艦に対する戦闘も減るだろう。・・・彼は最期まで模範的提督であった。」

「・・・うう・・・ぐすつ・・・」

「式風提督へ、敬礼」

墜落地点の上空をミッシングマン フォーマーションでリッジ

ボックス隊、メビウス隊が飛行した。

「・・・全部隊へ・・・帰還しよう」

そして全ての艦娘と提督が帰途に着いた。

〈おーい！待ってくれ!!ちよつとおおお!!おーい!!待ってくれええええ!!〉

ふと無線が入る。

この声は……

「……とんでもねえ、待ってたんだ。」

〈やめて撃たないで〉

「空中管制機で撃てるか!!」

〈この声……零斗か……!?!〉

〈お、利根！お前置いて死ぬかよ!〉

艦隊から利根が急速反転して式風の元に向かっていく。

〈零斗……零斗……！もう会えないかと思ったのじゃああ……〉

〈あ、あはは……そんなに泣くなよ……〉

〈うわああああ!!零斗おとおお!!〉

〈ああもう……よしよし〉

〈旦那を失くす妻の気持ちが分からんのかああああ……〉

〈ぶふっ!!〉

〈今夜は寝かせんのじゃああ!!〉

〈ちよつ!!待て!!一応カツコカリだぞアレ!!〉

〈関係ないのじゃ!!もう夜戦なのじゃああああ!!〉

「……ああ……その……お取り込み中悪いんだが……これ才

ーパンチャネルだから……」

〈うるさいのじゃ!!〉

「えっ」

利根から発射された砲弾が俺の機体を直撃する

「うわああああ!!メーデーメーデー!!!」

ちなみに俺はこのあと3日後くらいに救助されましたとき……

電が一人で探しに来てくれたよ……

高速巡洋戦艦

「さて・・・今日は何すっかな」

「式風提督のお見舞いはどうなのです?」

「ああ、大事をとって入院だっけ?」

「どこも怪我してなさそうですが・・・」

「まあバカは怪我しないから大丈夫だろ」

「それ風邪引かないの間違いなのです!」

「同じじゃね?」

「同じじゃないです!」

なんて書類に目を通しながらしやべっていた。

「あ、そうだ」

「どうしたのです?」

「大型開発行ってみるかな・・・艦載機ほすい・・・って空母の連中
いってたし」

「資源は大丈夫なのです?」

「一応報酬でもらったからな・・・1〜2回分はあるよ」

「いってみます?」

「うん、ちよつくら行こうか」

さてさて・・・工廠行こうかね。

そろそろまともな装備ほしいぜ・・・

「あの・・・司令官さん」

「ん?何だ?」

「こうやって、二人で歩くのって久しぶりな気がするのです」

「そうだな・・・バンカーショット作戦始まってからは艦娘の誰かと
一緒にいるってことはなかったからな。」

「そうですね・・・でもまた作戦が始まるって聞いたのですが・・・」

「ああ・・・今回は中規模らしいから・・・まあ、第一海域突破して
第二海域ちよろつと見たらすぐ帰るよ」

「それいいのです!?!」

「いんじゃない?」

立派な職務怠慢です本当にありがとう（ry
そんな話しながら工廠に行く途中に島風に会った

「お、島風。どしたそんなに急いで」

「おうっ！今日の建造当番だから行くんだよー！早いでしょ！」

「・・・昼の一時だぞ？」

「・・・はいでしょ！」

「はい早いです」

怖い。お前はいつからそんな怖い顔ができるようになった。

「とりあえずテキトーでいいからな」

「任せて！」

島風は全速力で走っていった。

「さてと・・・ついたか」

「今日は何作るの！がんばるよ！」

「適当に艦載機見繕ってくれ」

「あいあいさー！」

資源と資材を持って入っていく

「ほいできたー!!」

「はやっ!!」

「はやいのです・・・」

いつもより早かった・・・

「今日はね、一機だけしかできなかつたよ・・・」

「ほう、どれどれ・・・」

F-15Sスーパーイーグル（シエロ）

説明は・・・

F-15を改良しさらにユージア戦争の英雄仕様にした機体です

！もちろん艦載機！その性能は死神そのもの・・・深海棲艦は尻尾巻

いて逃げ出すこと間違いなし！

「・・・またジェット・・・？」

しかも・・・隊長つすか・・・何でアナタ妖精さんなってるんです

かねえ・・・

「・・・隊長・・・なんで妖精になったの・・・」

「空が飛びたかっただけ。」

「仕事選べっ!!」

「・・・人間が妖精になれるとか初耳なんで・・・はっ!待てよ!!俺も妖精になれば艦娘の寝床や装備の中に入り込んであんな※※※※※この提督は粛清されました※※※※※

「とりあえず・・・」

司令室に帰ろうかと思った瞬間

「提督提督ー!!!どうしょー!!」

「どした?」

島風が涙目で走ってきた

「工廠壊れたかもおおおお!!!」

「ああ、もともと壊れてるから大丈夫」

「ひどっ!!!」

妖精の言葉は無視して続きを聞く

「んで、どうしたんだ?」

「建造時間が・・・」

「建造時間?」

「つ、通常建造なのに・・・9時間ってでちゃったああああ!!!」

「いやおかしいだろ!!!お前大型建造やっただろ!!!」

「じゃあ見てよこの書類!!!」

書類には

建造方法：通常

時間：九時間

資材：各800づつ

建造責任者：島風

と書いてあった。

「・・・とりあえずそっち行くから高速建造使ってみなさいな」
「おうっ!」

「はあ・・・何で毎回毎回・・・」

「あ、あはは・・・司令官さん、仕方ないのです」

電は慰めてくれるが・・・うんまあ気にしないことにしよう

そんなこんなで建造工廠前

「うつわ・・・本当に9時間だ・・・」

「高速建造材使うよー!!」

「あいよ」

「とうっ!!」

毎回中で何してるんだろう・・・って思うくらい強烈な炎が妖精の
持つてる火炎放射器が噴出される

するとチーンツつと音になる

・・・
すると男の声が聞こえ・・・
!!!

〈超高速巡洋戦艦、ヴィルヴェルヴィント接近!!!〉

同時に島風が

「また私より遅い船ができたみたい!」

お前毎回それいうのな

「・・・遅い・・・?私か?」

煙の置くから銀髪ロングの女の子接近!!

「だって私より早い船なんていないもん!」

いや、水中翼船とかあるだろ。

「へえ・・・あなた、何ノット?」

「へっへん!脅威の40ノットだよ!早いでしょ!」

「40?ははっ・・・私の半分以下じゃない!」

・・・
!!!???

「私はねえ・・・80ノットはでるから」

「う、うそは泥棒の始まりだよ!!」

「じゃあ試してみる?」

「受けてたつよ!!」

就航した瞬間のヴィルヴェルヴィント?は、さっそく海に飛び込ん
だ。浮いてるけど

「ここからあそこの小島まで行った人の勝ちね。いくよ・・・」
するとどっかで聞いたことのある音が聞こえてくる・・・

ジエツト？

「ゴ—！」

「おうっ!？」

なんと一瞬で島風を追い越していった。戦艦とは思えない速度で……

ちなみに勝負はお分かりのとおりヴィルヴェルヴィントの勝ち。

「う、うわあああああん……!!速さだけが私の取り柄だったのにいいいい……」

いや、お前の取り柄それ以外にもあるだろ

とにかく大泣きしていた

「あ……あの……ごめんね!泣かすつもりはなかったんだけど……」

「うああああ!!」

「あ、あううう……」

ヴィルヴェルヴィントは混乱していた

「はあ……ここは追いといて帰るか……」

「置いてくのです!？」

「なんかもう疲れた……」

「な、なのです……」

とりあえず司令室に帰った。

そういえばこの後和解したらしく二人はなぜか親友になっていた。

……和解も早いなオイ

戦線復帰祝いの宴会

「式風の戦線復帰を祝って乾杯！」

「かんぱーい！」

あの作戦から3日たった日の夜、軍の病院から退院した式風の戦線復帰を祝うため鎮守府内で宴会を開催した。

何気に勲章者だからな

「よ、元気そうだな」

「あつたりまえよ！毎日利根が見舞いに来てくれたからな！」

「ラ、ラブラブだな・・・」

「なっ!?そ、そんなんじゃないんだからなのじゃ！」

なぜツンデレ風なのか・・・

「そういえばデロリアンは完全に損壊しちまって修理は無理だったよ」

「いや仕方ないから大丈夫だ」

あの墜落のときは進入角度が—3度くらいで毎分降下率も500ft前後だったので衝撃自体はかなり少なかったようだ。

「それにしても・・・怪我ひとつないってすごいな・・・」

「体はタフだからな！」

「お、おう」

「とりあえず料理食おうぜ、せっかく一流の料理があるんだから」

「お前食い気は元気なんだな」

「うるせえ！」

とりあえず食べよう。

すでに艦娘たちは食べ始めてい・・・・・・・・・・・・・・・・あれ、赤城さん・・・・・・・・？

「一航戦、赤城！食べます！」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
食い尽くされるーやばい!!
!!!!!!!」

「戦艦大和！押してまいります！」

「お前もかいいいい!!!」

なんとということだ・・・大食い姫二人が・・・

「おいみんな！こいつらに食われる前に全部食べ！」

「提督・・・勝負と見ていいですね？」

「何が!？」

「大食いです！」

死にます。

「やめてください死んでしまいます」

そんなやり取りの中・・・

「やっぱりレディーだからテーブルマナーくらいできないとね！」

暁は張り切っているが・・・ごめんね、コレ立食ぱーちーなの

すると暁のところにもひとつの料理が持ってこられた。

「あれ、何で私の持つてこられてるの？何でチキンライスの上に旗

立ってるの!?!お子様ランチじゃないコレええええ!!!!」

ああ・・・お子様ランチ持つてこられたのか・・・

しかも電とかには持つてこられてない

「何で私だけ子供扱いなのよおおおお!!!!」

すると・・・

「え、何?え・・・おもちゃ・・・やったああああ!!!!どれもらつても

いいの!?!わああああ!!!!」

・・・素敵なレディーだね(困惑)

そのときふとドアのほうを見るとちやうど式風と利根が宴会場を
出て行った。

「むっ・・・ヤツら・・・」

これは・・・スニーカーキングミッションするしかありませんな・・・

え、ストーカー?ちよつと何いつてるか分からないけどこつち来よう

か?大丈夫、何もしないからツラ貸せやワレ。

「電、ちよつと来てくれるか?」

「なのです?」

「・・・でな」

「なのです!?!いい、いくのです!!」

え、何吹き込んだかって?アレだ、あいつらが不純なことしかさ

ないようにソナー使ってくれといったただけだ。

そして鎮守府の艦娘寮。ちなみに屋根の上

「あ、あの・・・司令官さん・・・この服なんなのですか・・・」

「SEALS装備だ。」

「いや・・・司令官さんはですけど・・・私のです・・・」

「ああ、それ？スニーキングスーツ」

「いやコレ見た目いかついタイツにしか見えないのです!!体の線でもくりなのです!」

「少し声を落とせ。見つかるぞ」

「あ、あううううううう」

さて、上空を飛んでるシエロさんに連絡取りましようかね

「隊長、中の様子は見えるか?」

「へいや・・・よく見えない。でも本当にいいの?寮ごと吹き飛ばすかも・・・」

「コラテラルダメージだ」

「へ・・・」

「コラテラルダメージって何なのですか?」

「あれだ、軍事目的上の仕方ない犠牲だ」

「アカンやつなのですか!」

「大丈夫だ、問題ない」

「・・・問題しかないで・・・あ、司令官さん!声をキャッチなのですか!」

何気にノリノリじゃないですか電さん

「ええつと・・・しししし司令官さん!!きききききき聞いてくださいなのですか!!」

「ん?なんだ?」

ヘッドフォンを耳にあてる

「へ・・・とうにいいのか・・・?利根・・・」

「へま、前にその・・・夜戦って言ったのじゃ・・・」

「へ本気だったのか」

「へあ、当たり前じゃ!お前はその・・・わ、我輩の大切な夫なのじゃ

から・・・>

<<・・・そうだな>>

・・・

俺は無線機を取りだし・・・

「全部隊へ、アイリーン。もう一度繰り返すアイリーン」

こんなこともあろうかとデルタフォース、陸軍レンジャー、第16
0特殊航空連隊を近くに配備してあったのだ！

・・・野郎ぶつ殺してやるあ

あああああああああああ

!!!!!!

しかも続きあったり

<<零斗・・・我輩・・・お前が墜落したときはどうなるかと思ったん

じゃぞ・・・>

<<あれはその・・・すまなかった>>

<<零斗に死なれたら・・・我輩・・・>>

<<利根>>

<<なん・・・んむっ!?んんく!!>>

・・・

<<ぷはっ!!な、なひするんにやいきなり!!>>

<<そういえば一回もキスしたことなかったと思っただけ>>

<<むう・・・いきなりは何かロマンチックじゃないのじゃ・・・>>

<<んく・・・そうか?>>

<<も、もう一度・・・今度はちゃんとしてほしいのじゃ・・・>>

【顔真つ赤ゲージ】★★★★★★★★☆☆

ちなみに怒りな。

電は別の意味で顔真つ赤

<<・・・ん・・・んむっ・・・>>

ちきしよおおおおお!!俺なんてまだ電としたことないの
にいいいい!!!!

<<・・・ふふっ・・・お返し、なのじゃ>>

<<・・・利根>>

<<なんじゃ・・・うわっ!!!>>

このとき明らかにベツトに押し倒した音あり

【顔真つ赤ゲーッジ】★★★★★MAX!!!!!!

中突入ううううううう!!!野郎オブクラッシヤアアアアアアアアア

」

!!!屋根ぶち破つて突入した瞬間・・・

「・・・ここから先へは行かせることはできんな提督殿」

「憲兵!?お前・・・この先に行為に陥りそうな連中がいるのか!」

「ケツコン済みだ。問題はない」

「くつ・・・そこをどけ!俺は・・・お前を撃ちたくない!」

「俺は撃てる」

「えっ」

俺氏そこから先の記憶なし。

おきたら司令部だった・・・

・・・式風の野郎は何かすごい幸せそうな顔して歩いてた

ちきしよおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!

あ、ちなみに呼んだ連中は憲兵という人間の皮かぶった人型兵器に

襲われてブラックホークダウンして鎮守府の隅っこのほうでモガ

デイシオの戦闘になったた。

・・・・・・・俺、知らない!

警備任務

「さむっ！もうこんな季節か・・・」

朝起きて窓を開けると冷たい風が流れ込んでくる。

ついこの間発動された中規模作戦が第二海域まで進攻できた。

・・・秋月がああ海域にいるとは思わなかったけどな・・・

しかもアンドロメダに積んであるC I W SにシースパローにR A Mに興味津々だ。

「さて・・・仕事仕事」

司令室に向かう途中で朝起きてきたばかりの電と出会った

「お、電。おはよ」

「あ！司令官さん！おはようございます！」

「あれ？イメチェンしたか？」

「はえ？」

電は？と言う顔をしたが今日は髪を下ろしている。

「ほら、髪を下ろしてる」

「あ、これは髪を上げてると首元が寒くて・・・」

なぜか申し訳なさそうな顔をする

「んな申し訳なさそうな顔するな。似合ってるよ」

「はわわ！お、お先にいくのです！」

顔真っ赤にして走っていった。可愛い。

「そーいや今日は作戦あったっけ・・・」

とりあえず司令室にP Cを確認する

「ん・・・何だコレ」

一通のメールが入っていた

「・・・警備任務かよ・・・」

めんどくせえ・・・いや、俺は疲れないがあの子たちが疲れるからなく・・・

どうすっかな・・・と悩んでいると続々と起きて来た艦娘が司令室にあいさつに来る

「隊長！おはよ！」

「お、ケストレル。ちょうどよかった今日遠征とかの予定あるか？」
「ううん、ないけど？」

「シンフアクシとか引き連れて警備任務行ってくれるか？」
備蓄資源もたくさんあるしな

まあ、正面海域だからそんなに遠くはないだろう

「いいよー！あ、そうだ！秋月と浜風も連れてっていい？」

「いいけど、もう打ち解けたのか？」

「うん！しかしあの浜風って娘・・・ええ乳しとるのう・・・」

「おいお前いつからそんなキャラになった」

「え、何の話？」

すっごくいい笑顔で言ってますねアナタ。

「まあいいや・・・とりあえず1200から行ってくれるか？今、渾作戦でこの鎮守府の戦力のほとんど出払ってるみたいだから」

「隊長は行かなくていいの？」

「ううん・・・まあ、あんまり行く気ないからいいかな」

「ふくん・・・ま、分かったよ！じゃあ伝えてくる！」

「おう、よろしくな」

ケストレルはひさびさの出撃で少し嬉しそうだ

「そういえばこの前ヴィルヴェルヴィントだっけ・・・どんな装備なんだ？」

書類に目を通す。

「ええつと・・・38cm連装砲に5連装酸素魚雷に12cm両用砲に・・・」

へえ5連装酸素魚雷持ってるのか。

んで機関がつと・・・

「機関が・・・・・・おかしくね？」

明らかにおかしな表記あるんですが・・・

複合サイクルエンジンとか言うのが主機とかと別枠で書かれてる

・・・そういや背中の艀装についてたな・・・

速度は超速で・・・超速でお前・・・

そんなこと思っているとヴィルヴェルヴィントが起きて来た

「Guten Morgen! 今日はお出撃あるの?」

「おはよ。今日は……ん〜……お前はオフだな」

「やったー! 実は今日レーベとマックスとお買い物行きたかったんだ!」

「お、じゃ楽しんで来い! 晩飯までには帰って来いよ」

「うん!」

後から挨拶に来たレーベとマックスを引き連れて司令室を出て行った。

さてと……まずは書類から片付けるか……

すると電が朝ごはんをもって司令室までやってきた

「司令官さん、朝ごはん持ってきたのです!」

「ん? あ、すまんな。」

「いつもカッププラーメンじゃ体に悪いのです!」

「だなあ……食生活変えねば……」

朝ごはんはトーストにハムエッグと言うシンプルなものだったがカップ麺食べるよりはいいだろう。

「ああ……クソ……またコレか……」

「どうしたのです?」

それは空軍に戻ってこないかと言う手紙だった。

「空軍……ですか……」

電はさびしそうな顔をする

「そんな顔すんなって。空軍に戻る気はないよ」

「ホントなのですか?」

「ほんとほんと」

すると安心した顔をする。

まあ……あんなむさ苦しい場所よりはこの鎮守府のほうがいい。

仕事はキツイがな。

「あれ……なんだこれ」

何かを請求する書類が来てた。なんだこれ

「ええつと……あ、請求じゃないな……消費報告書……?」

そこには……

「そうだねえ・・・ってあらら・・・見つけた」

「敵ですか？」

「うん・・・っとうおおおい！マジか!!」

「ど、どうしたんです!？」

「フラッグ戦艦2隻とヲ級エリート1、駆逐フラッグ3、重巡2!」

えらい主力出てきたなあ・・・まあ、シンファクシもいるし・・・先制攻撃と参りますか!

「全機へ！対艦戦闘！ミサイルを夕級にぶち込みなさい！戦力の差を見せてやって!」

〈了解！攻撃開始!〉

さて、こつちも対艦戦闘と行こうかね

〈ケストレル！いいか、もし攻撃を受けたらすぐに撤退しろ！いいな!〉

「どうして？大丈夫だよ隊長」

〈お前らの編成は一発一発が致命弾になりかねないんだ!〉

「ああ・・・なるほど・・・分かったよ隊長」

まったく心配性だなあ・・・

すると攻撃機から対艦ミサイル命中、夕級撃沈の報告が入る。

「ナイス!」

「ケストレルさん！敵の無線らしきものを傍受しました!」

「え、向こう無線なんて使ってるの?」

無線をリンクしてもう

ちなみに秋月は・・・

「敵機！敵機来い!」

「いやだから来たらマズイですって!!」

「ええく・・・いいじゃん浜風く・・・」

平常運転だった。

とりあえず無線を聞かか・・・

〈夕級さん！向こうの攻撃は強すぎます！撤退しましよ!〉

〈ダメだ。〉

〈こちら提督。夕級の言うとおりで。撤退は許可しない〉

〈〈なんで!〉〉

〈〈戦力の差など関係ない。敵を沈める。それがお前らの仕事だろう?〉〉

〈〈しかし・・・このままじゃ全滅も・・・〉〉

〈〈兵器のクセに死ぬのが怖いのか?〉〉

〈〈タ級さん!〉〉

〈〈タ級の言うとおりで〉〉

ひつどい提督・・・提督!?!?

「ケストレルさん、目標を照準に収めました。」

「待つて浜風。」

「どうしてです?」

「何か動きがおかしい・・・」

「確かにそうですね・・・」

もう少し様子を見よう・・・

〈〈でもタ級さん!この情報を持ち帰れば戦力を整えて出撃できます!撤退を!〉〉

重巡の一隻が前をふさぐ形で増速する。

〈〈我に従う艦は前方を邪魔する重巡洋艦リ級を撃沈せよ〉〉

あれデジャブ

〈〈撃ち方始め!〉〉

そして遠くから砲煙が見える。

同時に黒煙を上げて沈むリ級もだ。

〈〈チツ・・・無駄に撃ちやがって・・・おいタ級、ふざけてるんじゃない?〉〉

〈〈すみません提督。〉〉

〈〈まあいい。お前らも分かったか。〉〉

〈〈・・・こちらはヲ級。〉〉

〈〈んだヲ級、文句あんのか〉〉

〈〈仲間の撃沈を命じる旗艦とは行動をともにできない!私は投降する。同意する艦はついて来て!〉〉

〈〈旗艦に従わない艦は攻撃する!〉〉

〈私も行く！ヲ級待って!!〉

3隻の艦は離反してこちらに向かってきた。

しかしその間に新たな深海棲艦が海中から出てきた。

その数8隻。

「どうするの？ケストレルさん」

「待って・・・隊長、どうする？」

もしかしたら相手は傍受されているの前提で演技しているのかもしれない。やつらは潜水能力を有しているから沈没に見せかけることだってできる。

〈・・・〉

「司令官・・・もうトリガーを引きそうです・・・！」

浜風は照準をずっとヲ級に向けたままだ。

〈・・・全艦に告ぐ、作戦変更!〉

そして一息つき・・・

〈目標は「味方艦隊」の護衛！いいか、絶対に一人も沈めさせるな！この鎮守府まで護りきれ!〉

「了解!!」

あ、思い出した・・・これセレス海と同じだ・・・

これはあの曲かけたいけど・・・

ま、いつか!

「浜風！いい？あのヲ級の後ろのヤツを撃って！」

「了解です!!」

そして発砲を開始した。

すると向こうから通信が入る。

〈こちらヲ級・・・投降します。攻撃を中止してください!〉

「中止？端からアナタ達を狙ってないよ！全速でこっちに来て！護つてあげる！」

すると少し涙声で・・・

〈・・・ありがとう〉

「お礼は鎮守府で！」

そのとき海中からミサイルが飛び出す。

「ちよ！ヲ級たちに当てちやダメだからね！」

〈〈当てるかバカ〉〉

「アンタってヤツはあああ………!!!」

沈めたるかワレエ!!

〈〈……艦隊後方……「敵艦隊」……砲撃開始!〉〉

〈〈艦載機発艦！敵旗艦「夕級」を狙って!〉〉

そして遠くで小さな太陽がひとつ出来た。

シンファクシのニンバスだ。

見事にヲ級たちを外している。

「……流石ね」

〈〈褒められる筋合いはない〉〉

「アンタってヤツは………何でそんなに可愛げないかなあ!？」

そして30分後……敵艦隊は全滅しヲ級たちと合流した。

やっぱり少しおびえている。

「始めまして！私は航空母艦ケストレル！」

「ヲ……ヲ級……です」

「そんなに怯えなくていいよ！提督は拷問とかそんなのする人じゃないから！」

しかし提督と言う言葉に少し怯えている。

「どうしたの？」

「いや……その……なんでもない」

「とりあえず帰ろう！」

そして私達は帰路についた。

く提督く

「これは……鹵獲……か？」

「そんな言い方しないの！」

ヲ級にリ級に……

「まあ……なんだ。これからよろしく頼む」

「え、ええつと……その……引き渡したり……とか……」

怯えきった表情でヲ級は言ってきたが……

「は？引渡し？んなもんするか。お前らは今から俺らの大切な仲間

だ。」

「でも……この格好じゃ……」

「んく……そうだな……じゃ、コレに着替えようか！」

駆逐艦用にセーラー服を出す。

「どっから出したの!？」

「さあさあ……着替えようか……」

「ヲツ!? ちよ、ちよちよ……!!」

ふへへへへへ、おじさん優しいから大丈夫だよ……ぐへへへへ

「やめんかアホ隊長!!」

「ひでぶっ!!」

あれ、意識が飛んじやうぞ。なんでだろ。

あ、あれだ、妖怪のせいだ……

ここで俺の意識は途切れた。

とにかくまた鎮守府に新たな仲間が入ってきた。

とりあえずヲ級には赤城の服を、リ級には利根型の服を、イ級

は……まあ……うん。

まあ、鎮守府がにぎやかになるな。

……そういえば他の提督連中&将校

からどうやって隠そう……

空母ヲ級

くヲ級く

自分の死ぬ夢を見ていた。

詳しくは思い出せない。

目の前に迫る敵機。そして、対艦ミサイル。

これだけしか夢の内容は覚えていない。

「うわああああ!!」

私は今日も悪夢をみた。

「はあ・・・はあ・・・もうなんなのいったい・・・」

私の悲鳴を聞いて隣で寝ていた艦娘が飛び起きる

「だ、大丈夫なのです!?!」

「大丈夫・・・」

「ホントに!?!何か泣いてるのです!」

「え・・・あれ・・・?」

何故か涙が零れていた。

そうだ、ここに来るまでこうやって気にかけてもらったことなんて無かった。

あの基地でも・・・

「今日は・・・提督のところに行かなきゃいけないんだよね?」

「なのです!あ、でも別に警戒する必要はないのです!」

「でも・・・私は敵なんだよ?」

「今は味方なのです」

「ありがとう電」

私は起きて提督の部屋に向かった。

「おはよう、電、ヲ級」

「おはようなのです!」

「・・・」

「ん?ヲ級どした?」

「・・・なんでもない」

・・・提督なんて

「ん・・・あれ・・・俺なんか悪いことしたかな・・・？」

「・・・司令官さん、初対面で私たちの服装させようとしてたのです」

「あ・・・あれはその・・・ごめんなさい」

「・・・」

別にそんなこと気にして・・・いや気にしてるけど・・・

「まあいいや、それでここに呼んだのはな・・・」

尋問か・・・それとも引渡しか・・・

「お前らに愛称つけようと思ってな！」

私は思いつきりこけそうになる。

なんじゃそりや。

「いやさあ・・・何か「何とか級」って寂しくない？」

「いや・・・特には・・・」

そのためだけに呼んだのかこの人・・・

「・・・そんな事なら私帰る」

「ちよつ待てつて！」

「・・・何？」

「あと聞きたいことあるんだ」

「・・・尋問でもする気なの？」

「いや、答えたくないならぜんぜんいいんだ。」

「それで何を聞きたいの？」

「ああ、その深海側の提督についてだ・・・」

「それが？」

「そいつは・・・人間なのか・・・？」

「人間だよ。正確には人間だったかな？」

「どういうことだ？」

深海側の提督、それは過去にブラック鎮守府を運営していて艦娘の恨みを買って殺された者達だ。

もちろん、そんな連中しかいないから深海側は物のように扱われどんな時も撤退を許されず休養を許されない・・・ある意味生き地獄だ。

改心したものもごく僅かながらいるが・・・

「・・・そんな場所なのか」

「……………」

「……………それで、ここまで聞いたら私は用済み?」

「用済みって何だお前……ここはブラック鎮守府なんかじゃないぞ?」

「最初はみんなそう言ったよ!!でも物みたいに扱われて……最後には銃口を向けられて……信じれるわけないじゃん!!」

「……すまない、今すぐ信じてくれというわけではないが……」

「……ごめん……」

涙が止まらない……なんで……

私は急ぎ足で司令室を出た。

「およう?ヲ級ちゃん?」

「あ……」

「あれ?どうして泣いてるの?あ……もしかしてあのアホ隊長にセクハラされたんでしょ!ダメだよ!そういう時は黙ってないで砲撃しないと!」

さりげなく恐ろしいこと言っただけ……

「えつと……その……」

「どしたの?」

そういえばこの子の名前なんだっけ……命の恩人で……

「えつと……えつと……その……あの……な、名前……」

「ん?あ、ああ私?ケストレルだよ?」

「ケストレル……」

その瞬間だった……

「う、うああああああ!!」

「おわああ?!ど、どしたの?!?」

突然の激しい頭痛に襲われる。

頭が割れそうだ……

「うううう……うぐっ……」

「ちよ、ちよつと大丈夫!?そんな……どうしよう……!」

もはや立っていられないほどの痛みが襲ってくる。

「どうしよ……どうしよ……!」

くケストレルく

鎮守府強襲

くケストレルく

ヲ級大丈夫かな・・・

艦娘用のドッグで治るんだろうか・・・

「はあ・・・」

「大丈夫なのですか？」

「あ、ごめんね、大丈夫だよ」

「やっぱりヲ級が心配なのですか？」

「うん、何か私の名前聞いた瞬間に苦しみだしたし・・・どうしたんだろ・・・」

「うくん・・・あ、そういうえばこんな噂聞いたことあるのです！」

「うん？どんなの？」

「えつとですね・・・」

その噂は深海棲艦はかつては自分たちと同じ艦娘だったということと私たちと同じように艦艇時代の記憶がうつすらとだけどこあることだ。

また沈んだ艦艇がそのまま深海棲艦になることもあるとか。

「・・・という噂なのです！」

「・・・」

私はヲ級のことだと思い当たる節があった・・・

「バーベット・・・」

「バーベット？」

「・・・私のお姉ちゃんだよ」

「あっ・・・」

電は少し申し訳なさそうな顔をする。

私が姉を撃沈したことを思い出したんだろう。

「ごめん、ちよつとヲ級の様子見てくる！」

「わ、私も行くのです！」

二人でドッグに走り出した瞬間、ものすごい爆音が聞こえた。

「な、何!？」

「わ、わかんないのです!」

次の瞬間警報が鳴り出す。

〈正面海域に敵艦隊3を認む! 現在攻撃を受けている! 艦娘はただちに出撃、これを撃破せよ!〉

「様子見はお預けかな・・・」

「と、とにかく司令室へ急ぐのです!」

私は走って司令室に向かった。

「隊長!」

ドアを蹴破る勢いで中に入る。

「いったいどういう状況なの!」

「見て分かるとおり襲撃だよ・・・ああもう・・・」

「どうしたの?」

「いや・・・それがだな・・・」

隊長はパソコンの画面を眺めている。

・・・死にそうな目で。

「ん? パソコンがどうかしたの?」

ふと画面を除くと・・・

「・・・隊長さん?」

そこにはエラー表示で強制終了しますというのが出ていた。

・・・ギャルゲーの一番盛り上がるシーンで。

「ちくしょう! あの衝撃で俺の・・・俺の推しキャラ攻略があああああ
!!!」

「・・・」

「お前なあ! 分かるか!? ツンデレキャラをデレモードにさせた時のこ
の・・・この感情をおおおお!!!」

「・・・お前はアホかああああ!!!」

いや、リーダーとかいろいろ見てなかったの!? 襲撃に気づかなかっ
たの!?

「アホとは何じやいワリヤアアア!!」

「いや、アホ以外にどういえばいいのコレ!! レーダーとか見てなかっ

たんかいワレエエエ!!」

「んもんよりこつちのほうが大事だしいいいい!!!」

「お前もう提督辞めろおおおお!!!」

「ただけアホなんだろうかこの人は・・・」

「ふざけやがってえ・・・野郎ぶつ殺してやらああああああああああああ!!!」

すると隊長は何かのコンピュータを取り出す。

「なにそのパソコンみたいなヤツ」

「見てろ外道が・・・宇宙空間からの狙撃を食らうがいい!!」

「・・・SOLG・・・?」

「いんや、あれは落としたり。まあ、見てろ。」

システム「ユーエーヴィーオンライン」

・・・UAVですかー

「さてと・・・プレデターで目標指示して・・・ふははははは!! O
DINの力を見るがよい!」

「あのお・・・隊長?もしかして・・・核?」

「んなわけあるか!」

「な、ならいいけど・・・」

「ポチつとな☆」

隊長がボタンを押した瞬間に隊長の知り合いの提督が入ってきた。

・・・名前なんだっけ

「イーグル!!やばいぞ!襲撃だ!!」

「知ってるよ」

「だったら早く艦隊を!」

「まあまあ、式風くん、落ち着きなさいな」

「落ち着けるか!!俺はもう艦隊を出撃させたぞ!」

「え、マジ!?!」

その瞬間ちよつと隊長が青ざめる。

「お、おい式風・・・いつごろ出した・・・?」

「10分前だ!」

「・・・やっぱ」

「どうしたんだ！早く行くぞ!!」

「……今すぐ引き返させて、頼むから」

「何でだ!!」

「……今からあの辺衛星から攻撃するんだよ……」

「フアツ!?!」

私は……とりあえず襲撃の件はどうかかなりそうなんでさっさとフ級のところに向かった。

く提督く

「ちよちよちよ待て!!衛星から攻撃つてどういうことだ!」

「え、ええつとお……米軍が放置してた攻撃衛星ODINをハツキングして俺専用にしてたんだよ……ちなみにあと2分後に攻撃開始」
「……被害はどれくらいになる?」

「ああ……まあ最強クラスの姫級でも体が残つてればいいねつてくらい?ちなみに海の深さも1mくらい増すかも……」

「おいおいおい!!!それ止めれんのか!」

「(・×・)ムリダナ!」

「マジかああああ!!!」

式風はダツシユで艦隊を引きもどそうとしていた。

まあ……距離的には今引き返せば余裕で間に合うけど。

「さてと……あとは誤差だけ修正するかなく……」

とりあえずプレデータの画面を見ながら誤差を直していく。

てか、こいつ等姫クラス連れてきてんじゃねーか……

そういえばODINはこの攻撃で残弾があと2発になるから本拠地攻撃までは温存だな。

もう宇宙空間に補給物資もつてく術がないからな。

「あの……司令官さん」

「あ、電か。どした?」

「あの……この子達が……」

「ん?」

電の後ろからガクブル状態でこの前来たり級とイ級が出てきた。

「おう?どした、そんなにガクブル状態で……」

「あ、あの・・・あの艦隊は・・・私たちを殺しに来た・・・」
「ああ・・・」

アレか、情報しゃべられる前に沈めたれということですね分かりません。

「だから・・・また攻撃に来る・・・そんなのだったら私たちは帰る！」

「いやまて、極論過ぎない？」

「だって・・・」

「だってもクソもあるか、お前らは俺の部隊所属の艦娘、勝手に帰ったり沈んだら沈んだ場所にODINから攻撃食らわすぞ」

「・・・ごめんなさい」

「分かればよろしい。んで、ほかに用はないか？」

「うん・・・」

「そか。あ、そうだ、お前ら鎮守府内散歩してみたか？」

「いや、まだだけど・・・」

「んじや今から電といってらっしゃいな」

「いいのです？」

「いいのいいの。電、よろしくな」

「なのです！」

電が司令室を出て行った瞬間、敵艦隊のいるであろう場所に宇宙空間から降って来た光の矢が直撃した。

「うわあ・・・こりやミンチのほうが体残ってるぶんマシかもな
・・・」

味方が巻き込まれてないことを祈って俺はギャルゲーを再会した。

ちなみにあの攻撃は俺と式風以外は誰がしたのか知らず、神の攻撃ということになってました。めでたしめでたし。

くケストレルく

ものすごい爆音と衝撃のあと砲声がぴたりとやんだ。

「隊長の攻撃が命中したのかな？てか・・・あの何気にいろいろおかしき物持ってたんな・・・」

何で一提督が攻撃用衛星とか偵察用衛星とか・・・この前はICBMまで・・・この人小さいのは拳銃から大きいのは攻撃衛星までこの

世にある兵器一式もってんじやないの？って気分になってきた。

「さて……とりあえずヲ級は大丈夫かな？」

入居ドッグを覗くと……

「…….…….……バーベツト……?」

そこにヲ級は居らずあのセレス海で撃沈したバーベツトの姿があった。

「やつぱり……バーベツト……だよな？」

忘れもしない。あの長く黒い髪、キリッとした顔立ち……

「この私よりちっさい胸は……やつぱりバーベツトだ」

さりげなくひどいこと言ってみたり。

そんなこといつていると……

「んんん……」

「あ、起きた」

「ん……あ、あれ……ここは……セレス海じゃない……」

「おはよ、バーベツト」

「んんん……おはよ……つてケ、ケストレルウウウウウ
!!!??」

「そだよ」

「え、ええええ?!?!ラーズグリーズは!?!」

「ああ……その隊長ならこの司令官だよ？」

「え、ええつと待つて、状況が読めないわ」

「ほいほい」

あのときのこと……怒ってないかな

「ねえ……ケストレル……あの時からの記憶がないの。何故か艦娘つて言うことだけが分かるわ」

「そうだねえ……その辺は隊長に聞けばいいと思うよ？」

「そ、そうね……てか、ケストレル……あんた私が起きる前に私よりちっさい胸とか言つてたの聞こえてたわよ……」

「えっ」

マジかよ……!」

「ちよつとお話しましょうか？」

やばい、命が危ない

「グッバイ！」

「あ、コラ待ちなさ・・・キャツ!!」

追っかけようとして盛大に床で滑っていた。

お風呂で走っっちゃ危ないよ。

そんなこんなで新しい仲間が増えましたとさ。

・・・あのことは後で謝っとかないと・・・セレス海の事も。

開かずの施設

「……………どちら様？」

いきなりケストレルが司令室に何かケストレルによく似た子連れて入ってきた。

「私の姉だよ！バーベツト！」

「建造した記憶がございませんが……」

「だってこの子ヲ級だったもん！」

「うそ?！」

一瞬うそ付けえ!と思ったが噂で深海棲艦の一部が過去の艦艇時代や艦娘時代の記憶を取り戻した時、艦娘になったとか。

……奇跡も魔法もあるんだよ! (錯乱

「あく……えつと、バーベツトだっけ？」

「ええ、そうよ」

「いきなりで紹介遅れたが俺はこの提督のイーグルアイだ。よろしくね」

「よろしく願いますわ」

「しっかしまあ……妹のケストレルとは違ってデキる姉っぽい雰囲気だな」

「……隊長?表出ます?」

あらやだケストレルさん、額に血管湧き出てますわよ。

……………怖い。

「すみませんしたああ!!」

「とりあえず、あいさつも終わったし行っていいかしら?いろいろあって疲れたわ」

「ああ、部屋はケストレルと一緒に使ってくれ。」

バーベツトはケストレルに案内されて部屋に向かった。

それと入れ違いで電が入ってきた。

「お、電。どした?」

「さっきのバーベツトさんに関する書類なのです!」

「ほいよ、どうも」

さて燃費とかは・・・

「あ、うん・・・予想通り・・・」

予想通り、いろいろ欠乏状態の大和さん10隻分以上ありますね・・・

あんまり出撃させれないな・・・

ちなみにこの大和さん10隻分というのはあのゲージ一本分が10隻分であって完全に燃料弾薬を欠乏すると普通に1万は資材飛んで行く。

まあ・・・現代艦艇だし仕方ないっちゃ仕方ないか・・・

「電、今日なんか予定とかある?」

「予定ですか・・・んゝ・・・書類整理終わったら今日は何もありませんね」

「お、じゃあ終わらせてどつか飯食いに行くか?」

「いいですか!?!」

「おう!今日は第六のメンバー全員で中華街でも行くか!」

「なのです♪」

電はごきげんで鼻歌謡ながら書類整理を手伝ってくれる。

その時、青葉がものすごい速度で飛び込んできた。

「司令官司令官司令官ー!!!」

「な、何だ?」

「スクープですよ!!」

「またか・・・」

「またかとは何ですか!これ見てください!」

「ん?ええつと鎮守府に開かずの施設がある・・・?」

「そうです!しかもここでは・・・出るんですよ」

「今冬だぞ、幽霊の連中も冬期休暇中だ。」

「ゆ、幽霊さんってお仕事なんですか?」

「おう、時給840円で人驚かす仕事だぞ」

「司令官・・・お化け屋敷じゃないですよ!」

「んじゃ証拠は?」

「その言葉待ってました!これです!」

「どれどれ・・・」

一枚の写真を出す。

そこには・・・

「ひにゃあああああああああ!!!」

俺より先に写真を見た電がものすごい悲鳴を上げて俺の後ろに隠れる。

いや、隠れるというより抱きついてる。

ああ・・・極楽じゃ・・・

「つーか、そんなに怖いのか・・・あああああああ!!!」

「はにゃあ!」

待て待て待て!!!シヤレになってないぞ!!

「おい青葉!お払いしてんだろうなこの写真は!!」

「え?さつき撮ったばかりなんで何もしてないですよ?」

「いやあああああああああ!!!」

呪われる、確実に呪われる。

だっってお前これ・・・写真の八割がものすごい形相の女の顔で埋め尽くされてんじゃねーか!!しかも一部色が濃かったり薄かったりで呪って文字になってるしいい!!

一瞬加工かと思ったが加工の跡が無いからな・・・

「それで司令官、今日の夜ここ行きますよう!!」

「いやいやいや!!無理だから!!」

「・・・もしかして・・・幽霊怖いんですか?」

「ベベベベベ別にい?!ゆ、幽霊なんて怖くねえしい?!」

「へえく・・・じゃあ行きましよう!」

「呪われそうだからヤダ!」

「じゃあ・・・スクープですね・・・元米軍の提督の弱点発見!幽霊が苦手!でタイトル決定ですね!」

「よし、行こう。来いよ幽霊、呪いなんか捨てて、かかって来い!」

「では、2100に状況開始です!」

そういつて青葉はそそくさと部屋を出た。

「電?もう大丈夫だぞ?」

「うううう・・・あ、ごめんなさい!!」

電は顔を真っ赤にして飛びのく。

ずっと俺に抱きついてたからな・・・

「電も夜に行くか?」

「うう・・・司令官さんが行くなら・・・」

「無理はしなくていいんだぞ?」

「ひ、秘書艦としてかんばるのです!!」

「お、おう・・・てか書類はあらかた終わったし、飯行くか」

「なのです!みんな呼んでくるのです!」

さて、夜の準備しとこうか・・・

とりあえず・・・CQBにバレルを変えておこう。

あとは・・・え?何の準備かって?んなもんお前、調査のためだろ。

とりあえずEoTechにフォアグリップ、AN/PEQ-16装
備して・・・ストックはMOEに交換しておこう。

ふふふ、我がM4が活躍するときが来たようだ。

サイドアームはM9でいいか。

なんてことしていると電がみんなを連れてきた。

「司令官さん!準備OKなのです!」

「よし、行くか!」

鎮守府を出て街に向かう。

何食うかな・・・

「みんな何食べるんだ?お金は全部俺が持つから好きなの言ってく
れ。高級中華でもいいぞ!」

「あ、暁は一人前のレディーだから自分のぶんくらい払うわ!」

「ほく・・・んじゃ財布見せてみ?」

「い、いやよ!」

「何で」

「だ、だって・・・そ、そうよ!お金ないわよ!悪かったわね!」

「お前見栄張るなよ・・・」

「いいじゃない!」

「んで、いくら入ってた?」

「い、一万円・・・」

「・・・普通に自分の分払えるじゃねーか・・・」

「え、そう!？」

「おう、てか俺があげてた小遣いこつこつ貯めてたんだな。えらいぞ」
「えへ・・・えへへへへ」

やだ暁可愛い・・・

すると雷が・・・

「あー!暁ちゃんだけずるいー!しれーかん私にも!」

「ああもう・・・はいはい」

「ああ!ずるいのです!」

「司令官、私にもしてほしいな」

何この状況、僕もう死んでもいい。

なんてことしてるうちに中華街へ。

「よし!何食べる?」

「コース系食べてみたいな」

「私も食べてみたいのです!」

「私もそれでいいわ!」

「れ、レディはフレンチがよかったけど・・・」

「じゃ、暁は一人フレンチで」

「じよ、冗談に決まってるでしょ!!」

「はいはい、てかお前一人ハブるわけないだろ?」

「し、知ってるわよ!」

とりあえず店の中に入る。

「どのコースにする?なんでもいいぞ?」

「私は日替わりで」

「私は四川料理!」

「私も雷ちゃんと同じなのです!」

「私は上海料理がいいわ」

「あいよ〜」

俺は・・・うん、辛いのが好きだし四川料理でいいかな。

「しかし外寒くなったな・・・ついこの間まで暖かったのに」

「きつとあれよ！松岡○造が日本に居ないからよ！」

「ああ、すごい納得・・・」

「ねえ司令官、鎮守府に温泉は作れないかい？」

「んん・・・温泉か・・・本部に聞いてみないとわからないな・・・」
「そういえばこうやって第六のメンバーとご飯食べにくるのは初めてかもしれない。」

「このあとどっか行きたいとかあるか？」

「んん・・・あ！あのタワーみたいなの最上階行ってみたい！」

「ランドマークタワーか？いいぞ」

「私はお買い物行きたいのです！」

「私も電と同じで買い物に行きたいな」

「おし！暁は行きたいところあるか？」

「うんん・・・そうね・・・あ！野毛山動物園行きたい！」

「動物園私も行きたい！」

「じゃあ、飯食ってランドマークタワー行って、買い物したら動物園行くぞー！」

計画も決まったところで料理が出てきた。

「わく！おいしそう！」

「ココ 料理長 中国行って修行して来たお店ヨ。味最高デスヨ」

最近片言のヤツが全員金剛に見えてきた。

なんてどうでもいいことはおいておこう。

「か、辛いのです・・・」

「電、このマーボ―豆腐はご飯と食べるといいわよ」

「やってみるのです！」

「日替わりもなかなかだね」

「んんん！！おいしい！ねえ司令官！私のと少し交換してみない？」

「お、いいぞ」

なんて楽しい時間が過ぎていった。

ランドマークタワーでは暁が高所恐怖症らしく涙目で俺にずっと抱きついてた。

可愛かった。

「お、もう7時か・・・早いな」

「もう真っ暗なのです」

「そうだな・・・また来ような」

「・・・この景色を護り通したいね」

「そうだな・・・」

そういえば今朝ODINから攻撃ぶち食らわしたのに街が案外騒がなかったのにはびっくりしたな。

てか・・・あと二時間ちよいで状況開始か・・・銃と弾薬は準備できた。

ちなみに弾薬は著名な知り合いの霊能力者の婆さんに頼んでお払いとかいろいろしてもらってる。

婆さんの弾薬渡されたときに「え、これをどうしろと？」という顔が忘れられん。

「電、帰ったら準備だぞ?」

「な、なのです」

ちなみに電の艦装もお払いしてもらってたりする。

そんなこんなで鎮守府に無事帰還。

「ふうく・・・あつたかくい・・・」

「暁、何かおじいちゃんみたいだよ」

「し、失礼ね!」

雷、響、暁は楽しそうに話しながら寮へ帰っていった。

「さてと、行くか」

「が、がんばるのです!」

弾薬もある・・・NVGも装備したし大丈夫だ!

え? 何でそんな重武装なのかって? お前相手がプレ〇ターだったらどうすんだよ!

「し、司令官・・・どんだけ重武装なんですか・・・電ちゃんも・・・」

「ははは。青葉よ、そんな装備で大丈夫か?」

「いや、プレ〇ターがいるわけじゃないんですよ?」

「気分だ気分」

「と、とりあえず入りましょ・・・あれ、鍵かかってる」

「あ、ホントだ」

「仕方ないですね・・・とうっ!!」

青葉が渾身のキックを扉にお見舞いする。

見事に老朽化したドアは壊れた。

「よし・・・GOGOGO!」

「なのですー!!」

「司令官・・・ここタリバンの基地じゃないですよー」

「玄関クリア!」

「廊下側クリアなのです!」

「聞いてないですね・・・」

「よし電、慎重に行くぞ・・・」

「了解なのです・・・!」

「アンタら案外ノリノリだなオイ」

ふははは!タリバン基地襲った日を思い出すぜ!

「ん?電、今なんか言ったか?」

「え?何も言っていないのです」

「んく・・・今なんか聞こえた気がするんだけど・・・」

その時・・・

「・・・!!!ひにやああああああああああああ!!!」

悲鳴と同時に電ちゃん、主砲斉射。

「うおわああああ!!どうした!?!」

「まままま窓に何か写ったのですうううう!!」

「おい、青葉!今なんか見えたか?」

後ろ振り向くと・・・

「あれ?青葉?」

青葉が居ない。てか壊れたはずのドアが閉まっている。

んでよく見たらなぜか外に青葉が居る。

そういえばさつき青葉は中には入ってなかったな・・・

「おい青葉、何してんだ、ドア開けろ」

「し、司令官!やばいです!ド、ドアが勝手に・・・」

「は?」

「ドアが勝手にしまつたんです!!」

「……冗談でしょ?」

「と、とにかく開かないんです!!」

青葉は涙目で訴えてくる。

必死に開けようとしているがピクリともしない……

てかよく見たらこのドア内側からしか閉めれないしなぜか鍵穴が内側に付いている。

「これ……鍵探して脱出か……?」

「どどどどうするんですか!?司令官さん!!」

「とりあえず……この管理室に行こう最悪お前の砲撃でドアぶち破って脱出だ」

でも施設自体が脆いから崩壊するかも……

「司令官!司令官が外出してる間に施設の下見したんですがこの施設の反対側にこの前の襲撃で壊れた場所があるのでそこから脱出できますよ!」

「了解!青葉、念のため艀装もつて待機!」

「りよ、了解です!」

「電、行くぞ。調査より脱出だ」

「な、なのです!」

二人いるだけまだマシか……

すっごい怖いけど。

……まてよ?これ吊り橋効果行けるんじゃない?!

やったぜ。

あわよくばココを脱出できたら……俺、電にケツコン指輪を渡すんだ!

やーい！お前の鎮守府の隅っこハツテン場ー！

床の軋む音が不気味で怖い。

「し、司令官さん……ここさつきも通った気がするのです……」

「ああ……俺もそんな気がする」

さつきも見た張り紙が張つてある廊下に出た。

張り紙の発行日が20年前だからな……つか、何でこんな建物残してんねん。

おかしいだろ……

まあ、場所が鎮守府の隅っここのほうだからな……

「そういえば階段あったよな、上に上がってみるか？」

「い、行くのです？」

「行くしかないでしょ」

「な、なのです！」

階段に向かう。

そのとおりにあるトイレが臭くてかなわんぜ

「うう……怖いのです……」

「そうだな……」

そういえばさつきからNVGの調子がおかしい。

付いたり消えたりする……PEQのライトを点灯させれば何とかなるが……

「ん……人影か……？」

「ゆ、幽霊なのです!？」

「いや分からん……トイレの前で何してんだ……？」

とりあえず人間っぽいし警告しとこうか……

「おい、お前何してる」

そいつはゆつくりとこつちを向く。

あ、これアカンやつかも

「しししし司令官さんん!!いやな予感しかしないのですううう!!」

「激しく同意だ」

でもなぜか体が動かない。

オワタ／＼（〇ゝ）／

「逃げるのですうううう!!!」

「くそ……体が動かん……」

「はにや!?わ、私もなのですよ!!?」

ゆっくりとこっちに向かっってきた……

手は動く……こうなった……

「野郎オブクラツシヤアアアア!!!」

トリガーハツピーになっちゃったけどいいよね。

とりあえず全弾ぶち込んでやった。

すると突然体が動くようになったぜ!

……それならいいけどね、もう目の前に居ちやったりするんです

よねこれが。

俺死んだ。

「ひ、ぴぎやああああああああああ!!!」

電がものすごい悲鳴を上げてる。

てかこの幽霊さん……えらいイケメソっすね。

なんでこんな冷静なんだろう俺。

すると幽霊が……

「やらないか?」

「……………総員退避iiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

!!!!

「撤退なのですううううううううう!!!」

身の危険と言うより貞操の危険を感じて全力で階段を駆け上った。

「はあ……はあ……」

「つ、疲れたのです……」

死ぬかと思った……主に俺のケツが。

さっきの幽霊(?)は階段に開いていた穴にボツシュートされた。

南無。

「とりあえず先にすすもう……」

歩き出した瞬間……

「……!?ひにゃああああああああああああああ!!!」

「おわああ!!!どした!？」

「あ、ああああ……あそこの扉が……」

「あそこ?」

電が指差す方向を見る。

そこは風なんか吹いていないのにドアが開いたり閉まったりしている。手招きするように……

てか、電さんアナタめっちゃ抱きついてきますね。

「なあ……電よ……」

「な、なんなのですか?」

「許可する、あそこのドアに砲撃しろ!ついでに壁に一発ぶち込んで穴あけて逃げるぞ!」

「なのです!!」

「いいか、俺の耳元でぶっ放すなよ?耳が聞こえなくなる」

「分かったのです!」

そして照準をドアに向ける。

「砲撃開始なのです!!」

電が砲撃を開始する。

………耳元で。

知ってたよ、こういうことになるって知ってたよ……

「お前俺さつきなんて言った!?もう絶対俺の耳元……」

「もう一発なのです!!」

お願い話聞いて……

鼓膜破れる……

ヘッドセットをつけていたから何とか耳は聞こえる。

「ああああああああ……」

「はにや!?ご、ごめんなさいなのですううううう!!!」

「今度から気をつけようね……」

とりあえず開いた穴から脱出しましょうねえ。

「んで、脱出したのはいいが……どうするね」

「ああ!司令官!脱出できましたか!」

「お前減給な」

「ひどいです!!」

ひどいわけあるか!!と青葉に心の中で突っ込んでおく。

「とりあえず疲れた・・・帰ろう・・・」

「なのです・・・」

あ、そうだ、電にあの書類渡そうかな・・・

ううむ・・・悩む・・・どう言っただけ渡せばいいのかな・・・

と悩みながら司令室に帰ってきた。

「ふう・・・電、今日はもう休んでいいぞ」

「え、でもお仕事が・・・」

「んなもん俺一人でできるよ。いや、心優しいボランティアがいたか

らそいつに任せるよ。な、青葉ちゃん？」

「う、ううう・・・」

「あ、青葉さん・・・頑張ってくださいなのです!!」

電を見送ったあと青葉と二人で書類整理とかいろいろ始めた。

そして次の日。

書類の量が多すぎていつの間にか寝落ちしていた。

「うわ・・・寝てたのか・・・とりあえず残りを・・・あれ？片付いてる」

ふと隣を見ると青葉がペンを手にぐっすり眠っていた。

コイツ・・・全部やってくれたのか・・・

「今日は一日休みにしてやるかな・・・」

上着をかけてやり俺は電に渡そうと思っていたケツコン指輪と書類を捜す。

「ううむ・・・いざとなるとどうすれば・・・」

どう言っただけそう・・・

そんなこと考えてると・・・

「司令官さん！おはようございますなのです！」

元気よく電が入ってきた。

「おわあああああ?!?!?」

「はにや!?!ど、どうしたんですか!?!」

「ど、どうもしてない・・・大丈夫だ」

「それならいいんですが・・・えっと、今日は私が演習でしたよね?」

「んつと・・・そうだな、金剛たちと式風の部隊と演習予定だったかな?」

「では今から準備して行って来るのです!」

「あ、そうだ電、演習終わって補給終わってからでもいいから司令室に来てくれるか?」

「了解なのです!」

そういつて電は部屋を出て行った。

とりあえず・・・昼過ぎまでに考えておこう・・・

ケ・ツ・コ・ン・カ・ツ・コ・カ・リ

司令室から赤城たちと一緒に海面を進む電を見送りながらケツコンの資料を見ながらため息をついた。

指輪を渡すのはいいが、どう言えばいいか……

彼女居ない暦Ⅱ年齢である俺だが……いや、あれだ、彼女居なかったのは米軍とか居たからだ。

「はあ……どうするかね……」

というか電はどう思ってるんだろうか。

そればかりが気になる。

「ベーシツクに「俺とケツコンしてくれ！」でいいかな……ううん……」
なんて独り言つぶやいてると

「グツドモーニングネー！」

「おうっ!? 金剛!?!」

「ど、どうしたネ?」

「あ、いやなんでもない」

「そう?とこで焦って隠した書類は何なのネ?」

「あ、ああ……これか……」

金剛ならいいアドバイスくれそうだが……

まあ、見せてみるか。

「おく……提督もついに電ちゃんにアタックしますカ……」

「おう……つてお前なんで知ってんだ!!」

「そんなもの見てたら分かるヨ。ていうかこの鎮守府でそのこと知らないの電ちゃんくらいネ」

「マ、マジか……」

そんなに分かりやすいかなあ……俺……

「とりあえず指輪とかはいつ渡す予定ネ?」

「ああ、今日演習から帰ってきたらだ」

「じゃ、急いで式の準備ネー!」

「待て待て待て!! 早すぎるぞ!!」

「えー……でも式風提督のところは式の準備済ませてケツコン指輪渡

したのヨ? ついでにプロポーズもその時・・・」

「いやまあ・・・アイツの場合は色々アレだしな・・・」

「まあいいネ、プロポーズの言葉考えてるノ?」

「まだだ・・・」

「もく・・・それくらい考えて事起こさなきやダメヨ!」

「す、すみません」

「ところで提督、電ちゃんがどう思ってるとか気になってるんでシヨ?」

「!? 何で分かるの!?!」

「提督って結構分かりやすいヨ?」

「さいですか・・・」

しかしまあ・・・気になって仕方ないのは事実だがな・・・

「電ちゃんなら心配いらないヨ、提督の話してる時幸せそうな顔してるネ。というか、この前相談受けたヨ」

「相談?」

「ケツコンの事ネ、提督は誰とするんだろうって」

「あ、ああ・・・」

「そのとき電ちゃん、提督のこと好きって言ってたネ」

そう言う金剛の顔は少し悲しそうだった。

「まあ・・・知ってたことだから仕方ないネ!」

「金剛・・・」

「ほら、提督も悲しそうな顔しないネ!」

「いや、お前の気持ちは知ってたんだが・・・何もしてやれないのがな・・・」

「そんなの問題ナッシング! ていうか重婚考えたら勝手に提督の古巣の部隊に連絡して強襲してもらおうからネ!」

SEALS 呼ぶ気かコイツは!!

まあ・・・重婚する気はさらさらないがな・・・

一回指がそれお前曲がらないだろって言うくらい指輪つけた提督見かけたが・・・

うんまあ・・・人それぞれだよな!

「それで、どう言って渡すネ?これ重要ヨ?」

「うくん……」

「俺とケツコンしてくれ……電!でいいとか考えてないでしょうネ?」

「うっ……」

「あく……やっぱりネ……」

「やっぱりって何だやっぱりって!!」

「まあ……提督らしくていいけど……もうちょっとロマンチックなのがいいと思うネ……」

うむ……ロマンチックか……

「そうだ!ブルーエンジェル스에頼んでキューピッドを空に描いてもらってプロポーズってどうよ!」

「いや……どこから呼んでくるネ!」

「そりやお前アメリカ海軍からだな……」

「とりあえずそれ……式の最中にやってもらったほうがいいと思うヨ……」

「ああ、それもいいな!」

「ほかに案ないネ?」

「他かあ……うくん……」

「これ私の案だけドイイ?」

「どうぞ」

「俺とケツコンしてくれ電!たとえこの艦娘が全員轟沈してもお前だけは守り抜く!……とかどうネ?」

「……不吉すぎるわ!!てか、明らかに今守られてるの俺だよね!」

「Oh……ダメですか……」

「もうストレートでいいよな……?」

「うくん……まあ……それはそれでいいと思うヨ?」

とりあえず色々決まったところで……

「やっぱ式とかいる?」

「んく……そこは電ちゃんど要相談かなく……細々としたって子も多いみたいだしネ!」

「そうか……まあ、あと2時間程度で帰ってくるしな……」

「あら、もうそんな時間ネ？」

「すまんな金剛」

「お安い御ネ！」

そういつて金剛は部屋を出て行った。

去り際に少し涙流してたが・・・

ちよつと悪いことしたかな。

そうこうしてるうちに二時間たった。

俺の心臓が破裂するんじゃない？つて勢いで動いてる。

「電、早く帰って来い・・・いや・・・もうちよいかかつてもいいぞ・・・」

私の心臓破裂しそうでち

するとドアノブが回った。

ステンバイ・・・ステンバ―イ・・・

「演習終わりました！」

補給も終えた電が笑顔で入ってきた。

・・・心臓破裂寸前だよ。

「お、お疲れ様。演習どうだった？」

「はい、私たちの勝ちでした！」

「よくやったな。お疲れ様」

「なのです！あ、それで話ってなんなのですか？」

「あ、ああ・・・話な」

誰かああああ!!!心臓の鼓動を抑える薬を急いでええええ!!!

「えつと・・・そのだな・・・」

「？」

ああああああ!!心臓がああああ!!でも首傾げてる電可愛いよおお

おお!!!

「その・・・あれだ・・・」

「司令官さん、どうしたのです？」

そして電さん、こっちに接近。

やめてえええ!!今来られたら死んじやううううう!!!

ええい!もうこうなつたら言うしかねえ!!いくぜ俺!

「電！」

「は、はい！」

「俺と・・・俺とケツコンしてくれ!!」

「えっ・・・」

一瞬電がフリーズする。

俺の心臓は過労死しそうな勢いで動いてる。

「え、えっと・・・私と・・・ですか・・・?」

「あ、ああ、お前とだ」

「そ、その・・・あの・・・わ、私なんかでよろしいのですか・・・?」

「お前だからいいんだよ。電」

電は顔真つ赤にして俯いている。

そして笑顔で顔を上げた。

「司令官さん！」

「おうっ!」

すごい勢いで飛びついてきた。

ついでに抱きついてきた。

「私・・・司令官さんのこと大好きなのです！」

「俺もだ、電」

「やっと思いが伝わったのです！」

「はは、まさか両思いとはな」

「・・・ずっと司令官さんの秘書艦で居させてくださいね」

「当たり前だろ」

「・・・司令官さん」

「ん?何だ?」

電は目を瞑って見上げてくる。

こ、これはあああああああ!!!

そして二人の唇が合わさりそうになった瞬間・・・

「ようーイーグルーお前の艦隊すごいな！久々にいい戦いだっただってウチの連中も言ってたよ！」

式風が司令室に入ってきてやがった。

・・・・・・・・・・・・・・・・クロス

「式風えええ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん？どした？」

俺は引き出しからDE・50c a 1を取り出し・・・

ちなみに電もどこからか連装砲を取り出していた。

さすが我が嫁だ

「電・・・」

「なのです・・・」

「え、ちよ、何?!何なの!?!」

セーフティを外す。

ついでに初弾も送り込む

「・・・野郎ぶつ殺してやらああああああああああああああああああああ

ああああ!!!」

「なのです!!!」

式風提督に向けて発砲開始だぜ☆

いいところ邪魔したもんね。仕方ないね。

「いやああああああああああああああああああああああああああああ

あ!!!」

その日、執拗に式風を追い掛け回す提督と電の姿が鎮守府のみならず横須賀市内で目撃されていた。

でもよく考えてみるとこの世で一番綺麗な電が見れるというものもあるからな・・・

まあ・・・安いもんか・・・

「すまん、ちよつと取り乱しただけだよ。大丈夫」

「そ、それならいいのですが・・・」

「ところで司会とかはどうする？」

「えつとですね・・・式風さんが司会する！って張り切っていましたけど・・・」

「却下」

「はにや!？」

・・・任せられん・・・

とりあえず・・・教会から牧師のおっさんでも連れてくるかな・・・

「あ、司令官さん、大きな声じゃ言えないんですけど・・・」

「どうした？」

「新婚旅行・・・どこに行きますか？」

「んく・・・電はどこに行きたい？」

「私は・・・スラバヤ沖に・・・お花を持って行きたいのです」

「スラバヤに？」

「あの時・・・スラバヤ沖海戦でも救助できなかった敵兵さんもいるのです」

「ああ、その人に花を手向けようって事か」

「なのです」

「ふむふむ」

ホント、やさしい子だよな。

「あとは・・・」

「どこだ？」

「シブツ海峡・・・いいですか？」

「シブツ海峡・・・ああ、いいぞ」

シブツ海峡は駆逐艦「電」が眠ってる場所だからか・・・

俺も花のひとつくらい持っていくか。

「電、すまないが花は空中投下になるぞ？」

「大丈夫なのです！また・・・海が平和になったら行きたいのです」
「そうだな。」

まだ深海棲艦が制海権を握ってる以上、海上でのんびりはできないからな・・・

「俺も行きたい場所いいか？」

「どこなのですか？」

「イギリスのデパートを丸々ゾンビシューティングアトラクションにしたところがあつてな！すっげえ楽しそうなんだよ！」

「ゾ、ゾンビですか・・・」

「怖いかな？」

「こ、怖くなんてないのです！」

「あとは・・・日本に帰ってきてきて温泉に行きたいな」

「温泉行きたいのです！」

「じゃあ・・・日数の計算だな・・・」

「交通手段は何で行くのです？」

「アレ」

「アレ？」

窓の外の格納庫で今まさに整備中のF-14Dを指差す。

米軍から退役したのを購入したからな・・・宝物だぜ

「せ、戦闘機ですか・・・」

「まあな」

「ちゅ、宙返りとかしないですか？」

「お前アクロバット系苦手だったろ？安全運転でいくよ」

「なら安心なのです！」

とりあえず計画が一通り決まったところで・・・

「電、久々にデート行かないか？」

「い、今からですか？」

「ああ、今回は空中デートだぞ？」

「あの戦闘機で・・・ですか？」

「ああ、まあ遊覧飛行だよ。あと知り合いが艦長の空母が近くまで来てるから挨拶に行かないとな」

「アメリカ海軍なのですか？」

「いんや、オースリアの航空母艦。名前……なんだっけ……あ、思い出した！ケストレルだ」

「ケストレルさんなのですか!？」

「ああ、二代目だよ」

ちなみに艦娘のケストレルとバーベット、アンドロメダを護衛に送ってるから喜んでるだろうな。

「とりあえず電、そのフライトスーツに着替えて外の格納庫前な」

「なのです！司令官さん、式はいつがいいのですか？」

「あく……準備自体は金剛たちが済ませてるらしいから……やろうと思えば明日にでも……」

「す、すごいのです……」

あいつら仕事速すぎい！

とりあえずまた空中で話を進めるか……

そんなこんなで格納庫前。

「電、準備いいか？」

「OKなのです！」

「よし、左の尾翼、主翼を見てくれるか？」

「なにをするのです？」

「動作チェックだよ」

「なるほどなのです！」

操縦桿を左と左上、左下、ラダーペダルを左に切る。

「動作はいいか？」

「えっと……きっちり動いてるのです！」

「よし、次は右だ」

「なのです！」

さっきと同じ要領で操縦桿、ラダーペダルを動かす。

「動作チェック異常なし！なのです！」

「了解、ありがとうな」

「旦那さんの頼みごとなら何でもこなすのです！」

「だ、旦那さんか・・・」

何か・・・まだ信じられないな。

「へ、変ですか?」

「いや、まだ信じられないというか・・・」

「そうですね・・・私もそんな感じなのです・・・」

「まさか両思いと思わなかったからな」

「でも・・・思いが叶ってよかったのです・・・ずっと一緒にいてくださいね」

「当たり前前だろ?お前を一人にはしないよ」

「司令官さん・・・」

「ん?何だ?」

「・・・大好き・・・なのです」

「・・・俺もだよ」

まったく初々しいというか・・・まあでも・・・こうやって話できるだけでも幸せなんだよな・・・

さて、エンジンも温まってきたし行くか。

「鎮守府グラウンド。こちらブレイズ、リクエストタクシー。」

「へブレイズ、こちら鎮守府グラウンド、滑走路31までE1、A ホールディングポイント・C6経由でタキシングしてください。<<

「こちらブレイズ、滑走路31までE1、A、ホールディングポイントC6経由でタキシングする」

スロットルを少し開いて機体を動かす。

「おお・・・動いたのです・・・」

「はは、初めて飛行機に乗った子みたいだな」

「い、電はもう大人なのです!キ、キスとかは・・・まだですけど・・・」
「ぶふっ!」

そ、それは式まで我慢かな?

いや・・・式に出来るかは知らんが・・・

「電、シートベルトは閉めてるか?」

「大丈夫なのです!」

「よし!」

最後の誘導路を曲がり滑走路31に近づく

〈ブレイズ、周波数118。4で鎮守府タワーにコンタクトしてください〉

「周波数118。4で鎮守府タワーにコンタクトする」

コンソールのつまみをいじり周波数を合わせる。

久々のフライトだな・・・

「鎮守府タワー、こちらブレイズ。貴局に周波数を合わせた」

〈ブレイズ、こちら鎮守府タワー、滑走路31に入り待機してください〉

「滑走路31に入り待機する」

今回は雲ひとつない晴天・・・絶好の飛行日和だ

F14のエンジンも快調に動いている。

〈ブレイズ、風は230方向から3ノットです。クリアード・フォア・テイクオフ ランウェイ31〉

「クリアード・フォア・テイクオフ ランウェイ31」

そして一気にスロットルを開きA/Bに点火する

「飛んだのです!」

「はは、ホント可愛いな」

「う、うにゆう・・・」

また声可愛いな・・・

無骨なヘルメットのせいで顔見えないけど・・・

〈ブレイズ、高度制限を解除します。よい旅を〉

「了解、ありがとう」

「まずはどこに行くのです?」

「そうだな・・・とりあえず高度8000メートルまであがってみるか」
「いきなりなのです!」

「おう!」

Gに配慮してピッチを20度くらいにする。

ものの2分ほどで高度は8000メートルまで上昇した。

「わあ・・・高いのです・・・」
「だろ?」

「綺麗なのです！」

「富士山見てみるか？」

「見てみたいのです!!」

「よし！」

進路を富士山にあわせて飛行する。

ひさびさに飛ぶと気圧の変化で耳がなあ・・・

「うう・・・耳が変なのです・・・」

「気圧の変化のせいだろうな」

「ちよつと気持ち悪いのです・・・」

「鼻つまんで息をフンツ！つてしてみな、一発で直るぞ」

「・・・ふみゅっ！」

何でそこまで可愛いのあなた。

「んく・・・お！おお!!直ったのです!!」

「だろ？」

「すごいのです！司令官さん物知りなのです！」

「ははは、ありがとうよ」

しばらく飛行していると富士山が見えてきた。

頂上には雪が積もっている。

「こんなところから見たの初めてなのです！」

「最近旅客機もあんまり飛んでいないから・・・どうだ？いい眺めだろ？」

「綺麗なのです！」

「よし！次は艦船の君には未知のスピードを見せてやろう！」

「？なんなのですか？」

「音速だよ」

「お、音速ですか・・・」

「運がよければマッハコーンが見えるかもな」

「マッハコーンって何ですか？」

「んく・・・まあアレだ。衝撃波が見えるんだよ」

「すごいのです！」

「とりあえず洋上に出てから音速になるからな」

「何ですか？」

「衝撃波が地表に達するとガラス割れたりするんだよ。あと騒音問題にもなるからね」

「なるほどなのです・・・」

「よし、とりあえず進路変えて海にレッツゴー！」

「なのです！」

左旋回して海を目指す。

「よし・・・音の壁を越えるぞ！」

「おー！なのです！」

再びA/Bに点火して加速していく。

そして音速を超えようとした瞬間・・・

「ひゃうっ!? な、なんなのです!? 今、ものすごい音と一緒に白い丸い雲が・・・」

「それがマツハコーンだよ」

「あ、あれがなのですか・・・一瞬だったのです・・・」

「でも見えたのはよかったな」

「貴重な体験だったのです！」

「そか、よかったよかった」

増槽を搭載していないから燃料がそろそろ危ない。

帰らないとな・・・

「電、そろそろ燃料がすくないから帰るぞ」

「早かったのです・・・」

「はは、仕方ないさ。それでだ、式は明日挙げないか？」

「あ、明日ですか!?!」

「ああ、電のドレス姿早く見たくてな」

「も、もう・・・早すぎなのです・・・」

「あはは、ダメかな？」

「い、いえ・・・その・・・わ、わたしも明日したいのです！」

「お、そうか。じゃあ、セッティングしてもらわないとな」

ただ、ブルーエンジェルスは出動できなかった・・・残念だ・・・でも明日が楽しみなような不安なような・・・そんな心境だな・・・

「電、今日は帰ってゆっくり休もう。部屋はどうする？」

「え、ええつと・・・できれば司令官さんと一緒がいいの・・・です」

「よし！じゃあ帰って引越し準備だ！」

「なのです！」

これから電と一緒に生活・・・楽しみでもあり不安でもあるな・・・
そんなことを思いながら滑走路18に着陸した。

～翌日～

「ふああああ・・・おはよう・・・電」

「んんん・・・おはようございますなのです・・・」

朝日がまぶしい・・・今日も快晴だ。

「さてと・・・今日は俺たちの式だな・・・」

「そうですね・・・もうみんなは呼んだのです？」

「ああ、ウチにある航空機フル活用してな。式が始まる2時間前には
到着予定だよ」

「で、では私たちも着替えないとですね！」

「そうだな。じゃあ朝ごはんだけ食べたなら準備しようか」

「なのです！」

顔を洗って二人で食堂へ行く。

すると・・・

「「ケツコンおめでとー!!!」」

艦娘のみんながクラツカーを鳴らして祝ってくれた。

食堂の壁には「祝・ケツコン！」って書いた横断幕が張ってある。

「電、おめでとー！」

「雷おねえちゃん・・・ありがとうございますのです！」

「司令官もおめでとー、電に変なことしたら許さないからね！」

「ふむ、変なこととは何かね？暁ちゃん（ゲス顔）」

「え、そそそそんなの・・・も、もうバカアアア!!」

「ぐえぶっ!!」

神は言っている・・・ここで死ぬ定めではないと・・・

「提督、はいお赤飯。ケツコンおめでとうございます」

「ああ、間宮。ありがとうな」

「いえいえ、夜戦用にうなぎもありますから」

「ごっつ!!」

盛大にお茶を吹いた。

今のが電に聞こえてなくてよかった・・・

川内には聞こえてたけど。

「夜戦!?!」

「お前はそこに食いつくな!!」

「夜戦!夜戦したいよ提督!!」

「ああもううるさい!(意味深)で聞き間違えられたらどうすんだ!て

か、昨日も一昨日も夜戦してきただろうがお前!!」

「あんなのじゃ足りないよ!私はもつと激しいのがいいの!!」

「アカアアアン!それ以上いったらアカン!!」

「ええー!なんでー!!」

コイツは地雷だな・・・いろんな意味で・・・

まあ、おめでたいせいでもあるが・・・いつも以上に騒がしかった。

「あれ?そういえば金剛は?」

「提督・・・お姉さまは・・・」

「ああ・・・まあ・・・大体は理解してるよ」

「式には出ますので今はそっとしておいてあげてください」

「ああ、分かってる」

金剛・・・やっぱり・・・失恋は・・・な。

まあ、でもこんなこと思っていると金剛がブチ切れるだろうから考えるのはやめておこう。

でも、辛いのに相談に乗ってくれてありがとうな、金剛。

その時一人の提督らしき人が食堂に入ってきた

「イーグル提督!お初にお目にかかります!メビウスというものです!
!」

「あ、今日配属された人だっけ?」

「はい!提督の前歴の活躍見させていただいてから大ファンなんです

！」

「え、マジで？」

「はい！ぜひともお話をまた聞かせてください！」

「おう！また司令室に来てくれればいつでも話すぞ！」

「ありがとうございます！あ、それとケツコンおめでとうございます！」

そう言うのと敬礼して出て行った。

まったく式風とは間反対の好青年だったな〜・・・

そんなこんなで朝食も終わり、いよいよ式の本番に近づいてきた。

「うう・・・やっぱり緊張するな・・・」

「自信もって！電ちゃんもかなり綺麗よ？」

「んな事言っただってなあ・・・てか夕張、お前があ教会みたいなの作ったのか？」

「そうよ！よく出来てるでしょ！」

「夕張・・・」

「ん〜？なにに？」

「グツジヨブ！」

「へっへっへ」

白を基調にしたデザインなんだが・・・何というかザ・結婚式場みたいでスゴイ。

夕張の給料上げてやらねばな

「さて、そろそろ時間よーがんばって提督！」

「ああ、ありがとう」

心臓がまた激しく動く・・・破裂はしない・・・よな？

そして扉を出た先には・・・

「電・・・」

「あ、司令官さん・・・ど、どうですか？」

第六駆逐隊の制服をイメージして作られたドレスがよく似合う。

髪を下ろした姿はまるで別人だ。

というか別人かと思った。

「すごく・・・その・・・なんだ・・・綺麗だな」

「え、えへへ・・・司令官さんもその服・・・カッコいいのです」

「え、そ、そうか？」

「そうなのです！」

「・・・ありがとう、電」

「いえいえなのです！」

「じゃ、行こうか」

「なのです！」

「そういえば電」

「どうしたのです？」

「さっき燃料補給したのか？」

「あ、はい！何か初めての共同作業で艀装つけて司令官さんが射撃を指揮するらしいので・・・」

「ああ、なるほど」

艀娘は艀装をつけた状態は完全に艦船となるので人間の食料を受け付けられないが、艀装を外せば普通の人間の女の子なので逆に燃料弾薬を受け付けられない。

ただ、補給してすぐに艀装を外せば体内に燃料が残る。燃料自体は重油だが最新の技術で普通の人間には完全に毒だが艀装を外した状態の艀娘でも悪影響がないように作られてるらしい。

科学ってすごいね（小並感

「さて・・・同時に扉をあけるぞ・・・」

「な、なのです・・・」

「3・・・2・・・1・・・」

完全に突入のノリである。

※提督と電は緊張のあまり思考が鈍ってます。

「GOー！」

「なのですー！」

扉オーブン！

するといつきに拍手が沸きあがる。

それと同時に上空を妖精たちの航空機がスモークを引いて飛んでいった。

「おめでとー!!」

「おめでとー!そして爆発しろ」

なんて声がいろんな方向から飛んでくる。

そして一番先頭まで来た。

そういえば司会はだれなんだろう……

「えく……ケツコンおめでとーぐざいます」

……この声はもしや……

「ようこの色男!」

「やつぱりお前かい!!」

式風が司会になってた。

「いいじゃん別にいゝ」

「ま、まあ……いいけどさ……」

「ええく……オホンツ!二人はどんなときでも愛し合うと誓いますか?」

「……そこで啗むか」

「うるせえ!!」

周りは爆笑だった。

「えくつと……そんなで、誓うの?誓わないの?」

「何で態度変わるの!?!」

「さつさと決めやがれ」

「なんて横暴!?!」

なんて言ってる……

「誓うのです!」

「誓うよ」

「ええ……じゃ、このリア充は誓うとかほざきやがったんで思い出話でもね」

「……お前司会やめい」

「重いノリ苦手なんだよ……まあ、顔見知りばっかだし」

「ま、まあ……お前らしくていいけどよ……」

そして紹介やら思い出話やらが始まる。

「……それでね、コイツは俺のハイスクール時代からの親友なんで

すけどね、ええまあ大層なロリコンでし．．．はっ!?」
「ん?どした?」

式風が青ざめていた。

．．．電を見て。

「電?」

なんと電は「言葉には気をつけやがれなのですこの雑種」って言う言葉を目で式風に送っていた．．．

「え、ええく．．．失礼しました．．．じゃあ続いてはじめての共同作業「ドキドキ!?初めての射撃官制!」を．．．」

「なにそのタイトル!」

突っ込みどころしかない．．．

「突っ込みはあとあと。ほら、艤装つけて」

「なのです!．．．式風さん、後で司令部裏に来やがれ．．．来てくださいなのです」

「ア、ハイ」

無慈悲な死刑宣告が行われていた。

「さてと．．．電、準備いいか?」

〈〈OKなのです!〉〉

電は水面に立ち、射撃体勢に入っていた。

「第一目標、左15度!」

〈〈射撃用意よし!〉〉

「撃ちー方始めッ!!」

〈〈砲雷撃戦始めます!!〉〉

電は一発でターゲットを撃ち抜いた。

さすがだ。

「第二目標!右対空戦闘!主砲、撃ちー方始めッ!」

次は迫りくるBQM-74標的機だ

〈〈対空戦闘はじめ!!〉〉

多数の主砲弾、機銃曳航弾が空中にばら撒かれる。

そして3秒もしないうちに小さな標的機に主砲を叩き込んだ。

「よし、電、任務完了、帰投せよ」

〈へふう・・・緊張したのです〉

「ナイスだったぞ」

〈えへへ・・・〉

そして陸に上がってきた。

少し汗を掻いているのか汗の匂いと一緒に電の女の子らしい香りが漂ってきた。

「電、これを」

「あ、ありがとうございます！」

燃料の入った水筒を渡す。

弾薬は後から補給される。

「さてでは・・・メインイベント行っちゃいましょう!!」

「は？メインイベント？」

「まだ残ってるだろ？キスがな・・・」

「フアツ!？」

「はにやつ!？」

まあ・・・うれしいのか恥ずかしいのか・・・

よし、気合入れよう。

「電」

「司令官さん・・・」

そして・・・

「ん・・・んむっ・・・」

二人の唇が合わさると同時に大きな歓声が上がった。

俺と電の初めてのキスの味は・・・

「ふうっー」

ぎ、艤装つけっぱなしなの忘れてたぜ・・・
遠のく意識の中・・・

「え、衛生兵を!!」

と医者を呼ぶ参加者と・・・

「司令官さん!!ごめんなさいなのですうううううう!!」
と涙を流す電。

そして意識が消える瞬間に見たのは・・・

「メデイック!!!メデイイイイイイイイイック
!!!!!!!」

頭を抱えて絶叫する式風のメデイックを呼ぶ叫び声だった。

ケツコン初夜

いろいろ波乱なケツコン式が終わった日の夜である。

「その・・・司令官さん・・・今日はごめんなさいなのです・・・」

「ははは、こうして元気なんだ、そう謝ることないよ。それに今一番幸せな時なんだ、楽しまなきゃ損だぞ?」

「そ、そうですね・・・うん・・・はい!」

「よし!とりあえずだな・・・プレゼントを見ようぜ!」

「なのです♪」

大量にあったので全部部屋に運んでもらってるが・・・確認してるだけでも一時間はかかりそうな・・・

「なあ電、もし平和になったらお前はそのまま家族になってくれるか?」

「突然どうしたのです?」

「あ、いや、ケツコン済みの軍務を終えた艦娘はそのまま提督の家族になる権利があるからな、どうするのかわかと思って・・・」

「そんなの家族になるに決まってるじゃないですか!」

「そう・・・だな。俺には家族といえる存在はお前らだけだから・・・」

「なのです!でもご両親はどうしたのです?」

「二人はベルカ戦争時に死んだよ。落ちてきた戦闘機が家を直撃したんだ」

「・・・」

「仕方ないさ、戦争だったんだ。それにもうそんな被害者を出さないのも俺たちの任務だろ?」

「ですね・・・」

「お前は昔から人を助けてきたんだ、今でも救えるよ」

「ありがとうございます!」

そんな話をしながら俺の個室へ帰ってきた。

今は俺と電の部屋だな。

まあ・・・ちよくちよく第六のメンバーが遊びにくるからもう俺の個室ってほどでもないがな。

「さてと、何が入ってるかな？」

「あ！すごいのです！最新装備なのです!!」

「お、何だ？」

それは工廠一同からだった。

どれどれ・・・

76mm速射砲

ハーブーン発射装置＋射撃指揮装置

・・・最新というか現代兵器ですね

でも装備の資源消費量はミサイルはまあ予想通りだが速射砲は案外安い。12.7cm砲以下だ。

「電、これ装備できるか？」

「んと・・・ちよつと分らないのです・・・」

また明日工廠行ってみようか・・・

「お？これは・・・メビウス提督のか。仕事速いな・・・つて封筒？」

「中身は何なのです？」

「んく・・・？チケット？」

そのチケットは

近接航空支援サービスと書かれたチケットだ。

しかもプラチナ会員用の・・・なんとこれは何回呼んでも費用がからないとか。

まあ・・・でも制空権の確保くらいか・・・あとは上陸作戦用かな？

てか俺は今思ったんだ。装備が現代化しすぎていると・・・

「お、何かカードがあつたぞ？」

「どんなのです？」

「ん・・・え・・・？何これ」

筋肉妖精「ランボー」

・・・誰ですかねこのおじさん。

今にもアフガン行きそうです・・・

「み、見なかったことにしよう・・・」

筋肉妖怪もいるからな・・・ていうか、筋肉多すぎるだろ！

「司令官さん見てください！大きな蟹なのです！」

「おお!!すごいな！こんど二人で食べるか！」

「なのです♪」

しっかしまあみんなプレゼントいっぱい用意したもんだな……
こりやしつかりとお返しせねば……

「電、そろそろ風呂に行ったらどうだ？時間も遅いし」

「そうですね、ではお先に行くのです！」

「混浴だったらいいのになく……」

「あ、あの……その……ま、まだ恥ずかしいのです……」

「まだ……だと……!?!」

顔を赤くして走っていく電を尻目に俺はつぶやいた。

……ということは段階を踏めば……いや、もう段階踏みまくり
な気がするんだけどね。

「さて、とりあえず布団だけ出して寝れるようにしとくかな」

あとは電がいつつも風呂上りに飲む牛乳を出しておいてやらない
とな。

とりあえず準備できたし俺も風呂でさっぱりしてくるかな。

「ふあああああ……いろいろなあって疲れた……」

風呂場の脱衣所で大あくびしながら風呂場に入る。

でも着任から今まで色々あったなく……一番最初の作戦で電が大
破したときには泣けたぜ……

「ふうく……」

お湯の温度がちょうどいい……そういえば最近こうやってのんび
り風呂には入れなかったな……

入れるには入れるが10分もせずに出たりしてたからな……
そんなこんな途中寝そうになりながら結構長湯していた……

「ふく……いい湯だった……あれ、電はまだか」

長湯してんなく

よし、突撃に行こうか……へっへっへ

とか思ってたら帰ってきた。

「お先だったのです！あれ、司令官さんも入ったのです？」

「うん、とりあえず布団とお前が飲む牛乳だけ出してな」

「ありがとうございます♪」

「どういたしまして」

そして電と他愛もない話をしながらのんびりと時間を過ごした。

テレビを見て最近の芸能人の話をしたり面白い番組を見て二人で笑ったり・・・

今が戦争中ということ忘れてしまいそうだ

「ふああああ・・・そろそろ眠くなってきたのです・・・」

「ああ・・・そうだな、そろそろ寝るか」

「そうするのです!」

二人で布団に入る。

一応二つ出しているが電が俺の布団に入り込んできた。

「えへへ、司令官さんのところがいいのです」

「お、おいおい・・・」

「ダメですか?」

「い、いや・・・いいけど何か緊張してな・・・」

「えへへ、私もです」

「なあ・・・電」

「どうしたのです?」

「式のとき、まともに出来てなかったよな・・・」

「・・・そうですね」

そう言うとき電は目を瞑ってこっちを見上げてくる。

俺もそれに従い、目を瞑ってお互いの唇を重ね合わせた。

「んっ・・・」

電の女の子らしい甘い香りとシャンプーの香りが息をするたびに香ってくる。

式のときはノーカンと考えたい・・・

電とのキスは甘酸っぱい感じがした。

「えへへ、これが始めて・・・ですね」

「そうだな、式の時ノーカンだ」

「ふふっ・・・そうですね」

「お、必死に謝るかと思ったんだがな」

「も、もう！そんなこと期待しないでください！」

「へっへっへ」

「もう・・・司令官さんのバカ・・・」

「おお？バカとは何だ？そんな子にはこうしてやる！」

電の脇腹をくすぐってやる

「ひゃっ!?あ、あははははは!!ひやめ・・・やめてくださいなのです
うううう!!」

「へっへっへ、この程度ではやめんどー！」

「あははははは!!だめ・・・くすぐりたいのですううう!!ひやうう
ううう!!」

さすがに苦しそうなのでこの辺でやめてやる。

「はあ・・・はあ・・・も、もう・・・息が出来なかったのです・・・」

「ははは、ごめんよ」

「今度は怒りますからね！」

まあ・・・可愛かったし・・・

あんな可愛い声出されたら誰だって・・・ねえ？

「ふああああ・・・司令官さん・・・そろそろおやすみなのです・・・」

「お、そうだな。寝ようか。おやすみ」

「おやすみなさいなのです・・・」

そういうと電はもう一度俺にキスをしてきた。

そして少し微笑んだ姿が可愛すぎてやばかった。

とてつもなく心地よく幸せに寝れた日だったかもしれない。

く翌日く

ものすごい雷の音で目が覚める。

今日はいいにくに大雨か・・・雷もなってるしな・・・

「電?もう起きてるのか?」

「あ、司令官さん・・・ひゃうっ!?お、おはようなのです・・・」

「雷苦手なのか?」

「は、はい・・・ちよつとだけ・・・ひにゃああ!!」

雷の音が鳴るたび可愛い悲鳴を上げまくっていた。

「電、着替えて朝ごはん食べに行くか？」

「え、えつと……その……今日はここで作っちゃダメですか……？」

「どこでか？そりやトースターとかもあるからぜんぜんかまわないが……」

「じゃ、じゃあ……ここでお願いするのです……」

「はいよ、てか電は何食べたい？」

「え、えつと……あ！作るのは私がするのです！」

「お、そうか？」

「妻の仕事なのです！」

「最近は何もするぞ？」

「私もしたいのです！」

「そうか、じゃ、よろしく頼むよ」

「なのです！」

電は張り切って簡易キッチンのほうに行った。

雷の音にビビりまくりだったが……

とりあえず俺はPCでもするか……

あれ？どこのメールだ？

「ん……？ウイルスの反応はないな……お、開いた開いた」

よく見ると差出人はアメリカ軍だった。

ええつと……アメリカ軍のどの組織だ？

「ん……と……ペンタゴンか……ペンタゴン!？」

アメリカ国防総省が一提督にじきじきに暗号化メール送ってくるか!?

「ええつと……作戦？」

内容は国防総省のお偉いさんが俺のところに来るからそこで話すってか……お勤めご苦労さんだね……

ちようどメールを読み終わったとき電が朝食を持ってきてくれた。

「お、ありがとう」

「召し上がれなのです！あれ、そのメールなんなのですか？」

「んく．．．アメリカ国防総省からじきじきに俺のところへ作戦が来たんだよ」

「あれ、司令官さんって日本軍所属ですよね？」

「まあ．．．正直表面上はな。米軍からの要請があれば日本軍側の指揮を抜けて米軍側の所属になることが出来るんだよね」

「それは司令官だけなのですか？」

「んく．．．たぶんな。どうも米軍のお上さんが大本営の石頭に頭下げに行ったとか．．．そんなに俺一人が大事かねえ．．．」

「それは司令官さんがきつと無くてはならない存在なんですよ」

「そうかねえ．．．まあ、今日の午後には到着らしいから出迎えの準備しないとな」

「私たちも作戦参加なのですか？」

「ああ、艦娘と俺の信用できる提督一名をつれてとのことだ」

「極秘なのですか．．．」

「たぶんな．．．SEALs時代に極秘作戦は結構やったから慣れてるんだけどな」

「SEALsって何ですか？」

「んく．．．アメリカ海軍の特殊部隊中の特殊部隊だよ。いやあく．．．訓練はきつかった．．．」

「どんな訓練なのですか？」

「．．．正直思い出したくないんですが

「ああ．．．手足縛られてプールに放り投げられたりとかな．．．」

「え、えつと．．．すごい訓練ですね．．．」

「他にはな．．．」

「も、もうお腹いっぱいなのです．．．」

「はっはっは．．．いろいろあるぜ．．．」

「今こうしてしてる提督がどんなに幸せか．．．」

「でも、こうやって電に出会えてケツコンできたってのは本当にこの仕事してて良かったって思うよ」

「しっかしまあ．．．米軍の極秘作戦って失敗多いから不安なんだよなあ．．．」

そんなこと考えながら電とのんびりと朝食と取った。

極秘任務

「作戦かゝ・・・国防総省直々ってことは極秘なんだろうけど・・・暗殺とかじゃなけりやいいいな」

「し、司令官さん殺し屋さんだったのです!？」

「いやいやいや違うから!!」

「でも暗殺って・・・」

「特殊部隊の仕事には暗殺があるんだよ・・・」

「司令官さんは・・・したことがあるのですか・・・?」

「んや、俺は暗殺任務はないぞ。まあ・・・空軍時代に撃墜した戦闘機からベイルアウトできなかったパイロットを見ると少し罪悪感に蝕まれたがな」

「やつぱり・・・そういうことあるのですか・・・?」

「戦闘機パイロットだったしな・・・実際戦争に行ってるから・・・」

「そう・・・ですね」

「すまないな・・・少しがっかりしたか?」

「いえ!そ、そんなことは!」

「そうか?」

「でもやつぱり・・・敵でも命は助けたいのです」

「お前は・・・本当に優しい子なんだな」

「素晴らしいながら頭をなでてやる。」

「ふにゆく・・・」

「なかなか可愛い声だしおつてからに・・・」

「すると一番大きな雷が鳴り停電が起きた。」

「ぴやあああああああ!!!」

「お、停電か?」

「厚い雲のせいで部屋の中はほぼ視界ゼロだ。」

「・・・電さん、真正面から抱きつくのはいいけど顔入れてる位置が大事なところだからね。」

「・・・」
「反応しないように般若心境唱えとこう・・・」

「か、雷怖いのですうううう!!!」

「お、そ、そうだな・・・」

アツカアアアアアン!!!そこでしゃべったり動いたりしたらアカアアアアン!!!

「と、ところで電、そ、そろそろどけてもらえるか?」

「て、停電と雷が怖いのもうちよつとこのままで・・・」

「お、おう・・・」

荒ぶりそうなMy sonを抑えるのに必死だぜ・・・

そしてもういつぱつデカイのが鳴る

「ぴゃつ!」

「おうつ!」

か、顔をさらに突つ込んできやがつたなコイツ・・・

やばいぞ、般若心境の般若様パワーが限界を迎える・・・!

こうなったら・・・「アラー・アクバル!」と心でシャウトし続けよう・・・

「し、司令官さん・・・?」

「アラー・アクバル!!」

「司令官さん!」

・・・しまった心の声が・・・

「ど、どうしたのです!」

「あ、ああ・・・大丈夫だ、ちよつと錯乱してた」

「大丈夫なのです!」ど、どこかで怪我したりだとか・・・」

「とりあえず・・・そろそろ電気つくだろ・・・離れるか?」

「も、もうちよつとこのままで・・・!」

お願いだからどけてえええええええ!!!!そこ俺の単装砲が格納されるからああああああああ!!!!

なんて思つてると電気がついた。

・・・助かったぜ・・・

「電・・・電気ついたぞ」

「び、びっくりし・・・ぴゃつ!」

電は今まで顔をうずめていた場所に気づき一気に真っ赤になる。

そしてフリーズ・・・

「お、おーい？電ー？」

とりあえず名前を呼んでみると・・・

「きゆううううう・・・」

そんな声を出してぶつ倒れた。

「い、電?!メディック!メディイイイイイイック
!!!!!!!」

そんな俺の絶叫で一日が始まった

く3時間後くらいく

電を起こして司令室まで二人で歩いていく。

「電、大丈夫か？」

「なのです・・・ちよつとびっくりしたのです・・・」

「そか・・・まあ、気をつけろよ?てか、もう昼前か・・・」

「そうですね・・・ごめんなさいなのです・・・私が気絶してたばかりに・・・」

「いんや、気にする必要ないよ」

電はしょんぼりしている。

「電、さつきそのペンタゴンのおっさんから連絡あったんだけどもうちよいで到着予定らしいから出迎え任せれるか?」

「あ、はい!お任せくださいなのです!」

「それと、今日は早く仕事終わらせような。なんとなく・・・電と二人で過ごしたい」

「も、もう・・・照れるのです・・・でも、私も同じなのです!」

「じゃあ俺は司令室でいろいろしてるからお迎え頼む!」

「了解なのです!」

電はピシツつと敬礼して外に向かっていく。

とりあえず今回の作戦メンバーを決めるか・・・

つれて行く提督は・・・信用できるヤツか・・・式風で大丈夫だとは思いますが・・・

「さてと・・・そういえば偵察衛星残ってたっけな・・・」
つい先週ハッキングした偵察衛星の画像を確認する。

たまたまデブリで破壊されてるからなく・・・

「お、あったあった」

画像を見ていくと・・・

「お・・・？この画像は・・・もしや！」

この前作った露天風呂の画像があった。

・・・誰か入渠しておるな

「もうちよい・・・もうちよいズーム・・・」

偵察衛星が高性能なヤツならオアシスが見えるかもしれない・・・

！

「もうちよい・・・見えたッ!!!」

そこには・・・

普通に風呂に使ってる俺だった。

「・・・俺かいいいいいいいい!!!」

な”ん”で”な”ん”だ”よ”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お

”!!!

そんな絶叫上げるとヘリの音が聞こえてきた。

「もう到着か・・・早いな」

とりあえずお茶でも汲んどくか。

なんてしているとドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼する。」

「お客さん連れてきたのです！」

「ありがとうございます。とりあえずこちらにかけてください」

「ありがとうございます」

何か・・・そこらへんのおっさんっぽいな。

「それで、何が始まるんです?」

「第三次大せ・・・おっと、作戦だ」

「どんな内容の?」

「そうだな、詳細はだな・・・」

するとカバンからひとつの衛星写真を取り出す。

・・・船団か?

「これは昨日CIAから送られてきた写真だ。この船団、積荷は何か分かるか?」

「分かっていたら苦労しませんよ。それで?」

「・・・中身はな・・・「深海側の提督」だ。」

「・・・!?!」

「それも、大将クラス。大物だ」

前にケストレルたちが話していたヤツか・・・

「あの・・・司令官さん、深海にも提督さんがいるのですか?」

「いや・・・分からない・・・」

「君は・・・艦娘だったよね?」

「はい!特Ⅲ型駆逐艦 電 なのです!」

「ふむ・・・イナヅマか・・・今後会うことはないかも知れないが、アメリカ国防総省のブラックだ。」

「ブラックさん、電取ったら許しませんよ?」

「おいおい、君顔が怖いぞ?」

え、そんなアシユラがキシヤーみたいな顔してた?

まあ、そんなことおいといて。

「で、作戦内容は何です?」

「ああ、そうだな。簡潔に話す、今回はこの深海提督の捕縛だ。」

「・・・敵側が激しく抵抗した場合は?」

「殺害も許可する。今回は深海提督を可能なら捕縛必要ならば殺害だ」

かーんさんに暗殺命令だしやがってこのおっさん。

電の顔がすごい曇ってんぞ

「・・・了解。それで、今回の戦力は？」

「Navy SEALsと第160特殊航空連隊、あとは君たち、艦娘隊だ。できれば空母と駆逐艦のみで編成してほしい」

「どうしてですか？」

「今回の作戦は日本側にも極秘の作戦なんだ」

「なぜですか？大勢で強襲したほうが・・・」

「その日本軍が深海と繋がっているとしたら？」
「!？」

「ど、どういうこと・・・なのですか？」

「電、すまない、少しお口チャックでいてくれ。」

「な、なのです」

「どういうことだ・・・」

「これもCIAが入手した資料だ」

「メモリー？」

「ああ、UAVが確認した密会の様子が入っている。ただし、赤外線映像だったのと建物の外に出る寸前でUAVが撃墜されて詳しくは分からない。それにヤツらが今向かっている場所・・・何があると思う？」

「疑問系が多いな・・・何があるんです？」

「核だ」

「核!？」

「旧ソ連が放置していた核ミサイル施設がある。・・・ちなみにミサイルもそのままだ」

「でも、寿命が来てるんじゃない？」

「やつらがそのミサイルを撃つとは言っていないぞ、その核を取り出した可能性はある。」

「そんなもの取り出して何をしよう・・・」

「砲弾か、爆弾にして人口密集地に打ち込むだろう。しかしミサイル施設の場所は明確だが、それを撃つつもりなのか核をとりだしているのかは分からない。」

「まずいぞ・・・核弾頭を所有されたら・・・」

「ブラックさん、ひとつ思うことがあるとすれば……核弾頭のサンプルかもしれない」

「サンプル……か……つまり量産するつもりか」
「予想ですがね」

「いや、案外あっているかも知れない。」

「いますぐ施設を攻撃できませんか？」

「無理だ。深海の占領下にある」

「こうなったらODINで……」

「提督、言つて置くが衛星から攻撃しようなどとは思わないよ。あの地下には核廃棄物もある。もし掘り起こされれどもすれば二度と人が住めなくなる」

「衛星攻撃つぶされちやどうしようもないですね」

「だから、深海提督を捕縛するんだ。いいな」

「了解しました」

「必要な武器や兵器があれば言ってくれ。なんでも揃えよう」
「そーいい残して帰っていった。」

「ああああ……核を持つてるかもってマジかよおおお……」

「司令官さん……もうしゃべっていいのですか？」

「も、もういいぞ。すまなかつたな」

「ぜんぜん大丈夫なのです！」

「とりあえず作戦を練ろう。資料を見る限り船団がそこに到着するまで一週間はかかる。」

「電、今日の艦隊業務は何がある？」

「えつと……今日はですね……」

「じーっと資料を覗き込んでる」

「え……何もありません……？」

「うそ!？」

「電と資料を覗く」

「……本当に何もありません。」

「今日は鎮守府全体が休日状態だ。」

「お、じゃあ今日は部屋に帰ろうか」

「い、いいのですか!？」

「何もないのにここに居てもな・・・とりあえず部屋に帰って二人でゆっくりしよう」

「今日はゆっくりと司令官さん独占できるのです♪」

「はは、じゃ、俺も電を独占だな」

「独占夫婦ですね!」

「夫婦って言うけど、俺たちまだカップルみたいだよな」

「えへへ、でも司令官さんとずっと一緒に居れることに変わりはないのです♪」

「そうだな」

そんな話をしながら部屋に戻る。

雷は止んだが、雨が激しい。

「雨止まないですね・・・」

「そうだな・・・てか、時雨のヤツ雨のたびに傘も持たずに外出てずつと空を見てるからな・・・風邪引かなきやいいが・・・」

「でもあの時の時雨さんって何か近寄りがたい感じなのです・・・」

「まあ・・・そうだな」

「あ、司令官さん、お茶飲むのです?」

「ん、じゃあいただこうかな」

「なのです!」

そういえば電はいつの間にか私服に着替えていた。
てか髪下ろした姿が天使過ぎる。

「なあ、電、お前これから髪下ろしててはくれんか?」

「はえ?どうしたのです?」

「いや、髪下ろした姿が可愛くてな・・・いつも以上に天使に見える」

「はわ!?て、天使ですか!？」

「おう、エンジェルだ」

「はわわわ・・・」

顔を真っ赤にしてる・・・可愛すぎる・・・

そんな感じでのんびりと過ごした。

テレビを見たりゲームしたり・・・

負けるたびに悔しがってもう一回！ってなってる姿が可愛くて仕方なかった。

負けて悔しがる姿が見たいからって本気だしたわけじゃないからね！

そんなこんなで夜。

「電、電気けしてくれるか？」

「もう寝るのですか？」

「もう寝るってお前・・・寝る準備万端だろうが・・・」

「私は・・・もうちよつと司令官さんとくっついていたいのです」

「電気消してもできるだろ？」

「ううう・・・女心が分かってないのです！」

「分かったよ。もう可愛いなあ・・・」

「えへへ・・・」

電はいつものように俺の布団に入ってきてくっついてくる。

・・・これ襲ったら犯罪ですかね。

「あの・・・司令官さん」

「ん？どうした？」

「あの・・・その・・・」

電は顔を真っ赤にしてもじもじしている

「司令官さん・・・司令官さんってその・・・あ、赤ちゃん・・・作る

方法ってしってるのです・・・か・・・？」

「ぼふおおお!!!」

盛大にいろいろ噴出した。

「ま、待て待て待て!!! どういうことだ!!」

「え、だから・・・その・・・知ってるのです・・・？」

「そ、そりゃ知ってるが・・・」

「その・・・あの・・・」

「ど、どうした？」

くそう、今ので完全に心臓が発作でも起きるんじゃないのかってぐらい動いてるぞ。

「じゃ、じゃあ・・・その・・・それをしても赤ちゃん出来ない方法と

かも・・・」

「そ、そりや・・・知ってるよ・・・?」

「あ、あの・・・司令官さん・・・」

「ななななななんですか!」

「なんでこんな敬語なんでしょうね私。」

「司令官さんと・・・それを・・・したいのです・・・」

「や、夜戦を御所望で?」

するとコクリと頷く。

「・・・喜んだらいいの!?これ喜んだらいいの!」

「い、電・・・いい、いいのか?」

「そ、その道具を・・・もらったので・・・」

「・・・ちよつと待て、誰からもらった。」

「し、式風さんからののです・・・」

・・・GJ。

心の中で敬礼しておく。

「そ、そうか・・・え、い、電は・・・したいのか・・・?」

「さ、さつきからそう言ってるのです・・・」

「そう言う電はおもむろに服を脱ぎ始めた。」

「おわああああ?!ちよちよちよちよい待てええええええ!!」

「も、もう我慢できないのです!私から襲うのです!と、利根さんだつ

てそうしたって言ってたのです!」

「誰だああああああ!!純粋無垢だった電に色々吹き込んだのはア

アアアアアア!!!ハッテン場送りにしてやるから出て来い!!!」

そんなこと思ってる間に電は生まれたまま

「でも・・・司令官さん・・・また・・・いいですか？」

「え?!いい、いいのか？」

「は、はい・・・その・・・気持ち・・・良かったのです」

「お、おう・・・」

「司令官さん、ちよつと疲れちゃったのです・・・」

「そうだな・・・寝るか」

「そうですね・・・おやすみ・・・なのです・・・ちゅっ」

そういうと電はキスをして微笑んだ。

天使だな・・・

だが、次の作戦ではこの子にだけは・・・いや俺の艦娘すべてにおいてだ。

人に銃口を向けさせたくない。

銃口を人に向け、トリガーを引くのは俺だけで十分だ。

この鎮守府で人を殺した・・・なんて提督は俺くらいだろう・・・

いや、俺だけで十分だ。

・・・何人も敵とは言え殺してきた俺だ、もし死ぬときは地獄だろうな。

この子とは・・・天国と地獄で別れてしまうがな・・・

やめとこう、ネガティブになるだけだ。

「司令官さん、寝ないのですか？」

「あ、いや、そういうわけではない」

「んく・・・キスが足りないのです？」

「ファツ?!いい、いや、そういうわけじゃ・・・」

「ん・・・ちゅっ・・・」

するともう一回キスをしてきた。

「え、えへへ、2回目なのです」

「明日は俺からしてやるからな」

「じゃあ、する前にしてやるのです!」

「望むところ!」

今のこの幸せを大事にしよう・・・

そう思いながら眠りの世界へ入っていった。

Silent Hunter

「うわああああああアッ♂!!!」

「はにやああああ?!司令官さんどうしたのです!?しかも最後のほう悲鳴がおかしかったのです!!」

「あ、夢か・・・すまん」

「も、もう・・・どんな悪夢見たのですか・・・」

「自分が死ぬ夢を見た・・・」

「それも・・・ケツがな!」

「あの建物入ったときの夢みたよ・・・」

「う、うわぁ・・・」

「何だよ!そんな引いたような目をするな!」

「い、いえ・・・引いてはないのですよ・・・?だ、旦那さんの趣味を疑っただけなのです・・・」

「いやこれ趣味違うから!俺はホモじゃないから!」

「だ、大丈夫なのです!私は司令官さんがどんなになろうと側にいるのです!」

「・・・あれ、何でだろ、悲しいのか何なのか涙出てきた」

「あらら・・・よしよしなのです」

「電はやさしく頭を撫でてくれるが余計にむなしくなる・・・」

「とりあえず気を取り直して司令室行こう・・・」

「あれ、もういくのです?」

「んく・・・ダメか?作戦内容の再確認したかったんだが・・・」

「じゃあ、後から朝ごはん持って行くのです!」

「お、ありがとう。あ、それとなんだが・・・今回の作戦では電は司令官代理を頼んでいいか?」

「代理・・・ですか・・・?」

「うん、今回は旗艦を情報処理能力の高いアンドロメダに任せてるからね」

「了解なのです!でも・・・司令官さん・・・必ず帰ってきてください
ね」

「おう！五体満足で帰ってくる！」

いい終わった後にフラグ立てたことに気づいたり・・・うつ・・・

「あ、電。ついでに景気づけに大型建造行かないか？」

「司令室に行かなくていいのです？」

「まあ、時間はあるからね。行かない？」

「行くのです！あ、でも・・・資源浪費はダメですよ？」

「わかってるって」

そんなわけで工廠行こうかね。

今回の作戦で急遽潜水艦が必要になったら建造したい。

え？シンファクシがいるから大丈夫だろうって？

バツカお前、資源なくなんだろうが！

とわけの分からんツツコミはおいといて・・・

「お？てーとく！何造る？」

「あく・・・潜水艦レシピ回しておくれ」

「ほいきたー！」

妖精連中が資源を持って工廠に入って行く。

「ほい！こんだけ使ったよ！」

「どーせろくでもない数使ったんだろ・・・」

と書類見ると

「あれ？お前らやつと反省した？」

「は、反省!！」

「?どうしたのです？」

「これ見ても」

そこには

燃料2500

弾薬1200

鋼材5000

ボーキ1000

と案外普通だった。

・・・潜水艦レシピなのにのは知らんが・・・

「んで建造時間は？」

「んと・・・三時間と20分ちよい！」

「え・・・!?」

そのレシピは・・・

「し、司令官!? な、何で震えてるのです!?」

「やったぜえええええ!!!」

「はにや!?」

「ついに! ついにシオイが我が艦隊にいいいい!! ひやつはああ!!!」

「司令官のテンションすごいです・・・」

「ふふふ・・・伊号401潜水艦とは最高ではないか! んじゃ高速建造よろぴく」

「ほいさー!」

バーナーを持った妖精が中に入って行った。

「ひやつはああああああああ!!! 汚物は消毒だああああ!!!」

「・・・おいあの妖精大丈夫か」

「あ、うん、昨日小麦粉吸ってたけど大丈夫」

「大丈夫じゃないだろそれ!!!」

「たまにお頭が火星に行ってるだけだよ!」

「いやだから大丈夫じゃないだろ!」

と言い合っているところで建造が終わる。

さあシオイとご対面!

「ようこそシオイ! 我が艦隊へ!」

扉開け切る前に言っちゃったぜ☆

「えっ・・・? あ、あの・・・私・・・」

「ん? どした?」

すると煙の奥から銀髪のセミロング女の子が・・・色白だし・・・

あれ? シオイってこんな子だっけ?

なんて思っていると・・・

「あ、あの・・・わ、私・・・ユ、UボートVIIC型潜水艦、U96つて言います・・・」

「へっ?」

「あ、あの・・・およびじゃなかったでしょうか・・・すみません・・・」

「え、いや・・・そのあれ？」

「し、司令官さん！今にも泣きそうですよ！」

U96は今にも泣きそうな目だった。

「あ、ああ・・・そのすまん！俺はここの提督のイーグルアイだ。よろしくな」

「はい・・・よろしくお願いしますアドミラル・・・」

「ところでお前さん、あだ名見たいのあるか？」

「いえ・・・ないです・・・」

「じゃあクロなんてどうだ？安直だけど・・・」

「い、いえ！私今まで鮫鮫言われてたので・・・むしろ嬉しいです！」
「鮫？」

彼女の擬装をよくみると笑う鮫が書いてあった。

「ああ、この絵のことか」

「はい・・・」

「んな気にすんなって！ところでクロ、今日実戦な」

「ひゃえ!？」

「ど、どんな声だお前・・・」

「い、いやその・・・い、いきなりすぎます!!」

「大丈夫、伊号潜水艦たちと哨戒任務だ」

「そ、そうですか・・・？」

「うん、まあ早めに実戦経験つんでおいたほうがいいだろ？」

「そ、そうですね・・・」

「あ、そうだ、紹介遅れてた、この子は秘書艦アンド俺の嫁の電だ」

「よ、嫁!?え、えつと・・・秘書艦の電です！名前の似た姉がいるので間違ったらダメなのです！」

「あ、もしかして雷ちやんのことですか？」

「あ、知ってるのです？」

「はい！昔聞いたことありましたから！」

どうやら仲良くなれた様子で。

とりあえず運用試験してみようかね

「クロ、さっそくなんだが魚雷発射演習してみないか？」

「いきなりですか・・・?」

「ああ。まあ、命中率を見たいつてもあるかな。ところで魚雷はどんなの持ってる?」

「こ、これです」

差し出してきた魚雷は・・・

「G・・・GesII・・・」

音響誘導魚雷っておま・・・

「あとは通常の熱走式魚雷です・・・」

「ふむふむ・・・じゃ、まずはあそこの標的を撃つてみってくれるか?」

「わ、わかりました!あ、でも・・・」

「ん?どした?」

「私・・・戦闘になると人が変わるって言われて・・・」

「んく・・・少々大丈夫じゃね?」

「そう・・・ですか・・・?」

「まあ、いつてらっしやいな」

クロは海に入る。

「んじや、浮上雷撃戦よーい!」

「浮上雷撃戦用意!」

「魚雷一番発射!」

「フオイア!」

クロから通常の熱走式魚雷が発射される。

移動するターゲットに向かって見事な偏差雷撃で魚雷が進んで行く。

コイツ結構やるな・・・

「魚雷命中します・・・」

すると大きな水柱があがった。

その瞬間・・・

「フタエノキワーミー!!キワーミー!!フタエノキワーミー!」

いきなりすごい音量で叫びだした。

ああ・・・うん・・・人変わるね。戦闘じゃなくて命中したときに。とりあえずうるさいので・・・

「静かにせいっ!」

「(・ω・)」

シヨボーンってなった。

とりあえず実戦に出せるのは決定した。

さてそんなじゃ作戦会議のために司令室にもどろるかね

「電、クロ、行こう」

「もういいのですか?」

「うん、あとは作戦会議しないと」

「なのです!」

そんなこんなで司令室へ。

「さてと、集まってるかな」

「いきなりで悪いんだがイーグル。この作戦、何で提督が俺だけなんだ。あとなんで米軍いるんだ」

「極秘任務って言ってなかったっけ」

「聞いてないわ!」

「あれ? まあいいや。とりあえず今回の任務、敵将校の捕縛だ」

「敵将校?」

「ああ、あれだ、深海の提督」

「ファツ!」

「えええええ?!?!?」

式風と周りの艦娘たちからも驚かれる。

「とりあえずこれ、この輸送船団を襲う」

「護衛艦隊はいないのですか?」

「いい質問だな赤城くん! もちろんそこらへんにいるだろうね」

「それを航空攻撃で叩くのですか?」

「そうそう。残存を駆逐艦と潜水艦隊で撃破する。あ、それと今回新しく加わった子を紹介するよ。クロ、出て来なさいな」

「クロ?」

まわりが少しぎわつく

「あ、えっと・・・その・・・」

周りからあの子可愛い・・・舐め回したいとか言う声が聞こえたが

あえて聞こえなかったことにしよう。

「えっと・・・UボートVIC型潜水艦U96です・・・よ、よろしくお願いしますー!」

「えっ・・・ユ、Uボートおおおお!!?」

「え、おまつ・・・Uボートってマジか」

「え、えっと・・・えっと・・・」

クロは周りからはやされおどおどしていた。

「はいはい、お前らクロ困ってるからその辺で」

「うう・・・」

「お前は元の席に帰っていいぞ」

「は、はい・・・びっくりしちゃった・・・」

「よし、電、衛星画像を出してくれ」

「なのです!」

「詳細を説明するぞ。本日1800にこの輸送船団はこの鎮守府の200km沖を航行するはずだ。そこでここを艦娘隊と俺たち、SEALsチームで強襲する」

「ここでちらほら手が挙がる

「なんだ質問か?」

「はい、今回なぜSEALs・・・?が必要なのですか?深海提督ごと撃沈してしまえば・・・」

「赤城・・・俺はお前たちに人を撃たせたくはないんだ。確かにお前は艦載機を攻撃するから実質自分の砲で撃つわけじゃないが・・・」

「すみません・・・」

「いいんだ。まあ、それで艦娘隊が周囲の護衛艦隊を殲滅したのち第160特殊航空連隊とともに奇襲する」

「それで、ターゲットは?」

「まだ名前までは確認できてないが・・・」

スクリーンにひとつの画像を表示する

「コイツだ」

「ひえっ・・・みごとな悪人顔なこつて」

「これが俺たち、SEALsチームの標的だ。ここからはSEALs

チームの作戦だ」

画像を船の画像に切り替える。

「まずはヘリで船尾に接近して降下する。そのときの指揮は俺が取る。艦隊の指揮は鎮守府からは電が、海上はアンドロメダと式風に任せる」

「せ、責任重大なのです……」

「今回の作戦は開始から終了まで1時間もかからない。だが相手の力を見くびるなよ」

うまくいくことを祈るしかない。

護衛には戦艦級がいるだろうな……

「あ、式風、お前はQRFで艦隊の指揮を頼む」

「はいよ。お前は地上か……」

「よし！作戦開始は1600！解散！」

みんな装備を整えに工廠に向かって行く。

「なあイーグル。今回の作戦は本当に捕縛だけなのか？」

「……お前には話しとくか……」

「何だ？」

「……対象が激しく抵抗した場合、もしくはこちらの判断で有用な情報が見いたらその場で排除だ」

「……殺すのか」

「ああ。だから電達には撃たせたくないんだよ」

「そこは俺も同意だな」

「さてと、俺も可愛い愛銃の整備をするかな」

「じゃ、俺は艦隊の調整してくるか」

そういつて二人で司令室を出る。

「相棒生きて帰るぞ」

「当たり前だ。」

俺と式風は拳を合わせて別々の方向に分かれた。

作戦開始まであと2時間だ。

作戦開始!

弾薬はこんなもんか・・・

装備を整えて司令室に向かう途中何気なく空を見上げた。
雲ひとつない快晴、冬なのにほんのり暖かい。

「はあ・・・こんないい日に戦争か・・・」
なんてつぶやいてると

「あ、司令官さん!探したのです!」

「ん?電か?どした」

「あの・・・これ・・・」

「ん?」

電がお守りみたいなものを差し出してきた。

「お守りか?」

「はい!無事に帰ってこれるように・・・私の手作りなのですよ!」
電は少しドヤ顔で言ってくる。

可愛いなもう・・・

「ありがとうな。電、鎮守府のことは頼むぞ」

「了解なのです!司令官さんはもう行くのです?」

「ああ、SEALsのやつらと打ち合わせもあるしな」

「えつと・・・司令官さん・・・」

「ん?何だ?」

「気をつけて・・・なのです!」

そういつて頬にキスをしてくれた

「おま・・・ホントに可愛いなもう!」

「ふにゃああああ!!頭ぼさぼさになるのですううう!!!」

頭をわしゃわしゃ撫で回してやった。

「さてと、行こうかな」

「必ず帰ってきてくださいね」

「おう!」

とまあ、フラグビンビンに立てたけど・・・

主人公補正あるし大丈夫だろ!(慢心)

とメタい話は置いて。

「さて、全員行くぞ！」

「待ってたぜ隊長！」

「もう一度作戦を確認するぞ、まずは艦隊が敵護衛隊を撃破、その後俺達が降下、制圧する」

「了解！」

なんて確認してると・・・

〈全部隊へアイリーン。もう一度繰り返すアイリーン〉

式風が無線で作戦開始を合図してきた。

うん、こんな開始コード言った覚えないんだけど俺。

まあいいや。

〈了解アイリーン！〉

〈ファツキンアイリーン！〉

あんたらノリノリだなオイ。

「よし！全員行くぞ！」

その合図でへりが離陸した。

作戦開始！

U—96

ううう・・・いきなり実戦なんて無いよ・・・

「大丈夫？」

「あ、はい！だ、大丈夫です！」

「でもちよつとふらついてるでち」

「き、緊張しちやつて・・・」

「大丈夫なの！私達は偵察して帰るだけだから気楽にいけばいいのね！」

「き、気楽にって言っても・・・」

初実戦で緊張しないほうが無理だよ・・・

〈アンドロメダより潜水艦隊へ。敵艦発見・・・〉

「て、敵艦！」

「ほら、やるわよ！雷撃戦用意！」

「で、でも敵艦見えません……」

小島にさえぎられてよく見えない……

〈そつちから見えないのか?〉

「ダメね……式風提督、そつちからは見えない?」

〈いや見えない……気象衛星とリンクできないのか?〉

「できるわけ無いでしょー!」

イムヤさんがすごい突っ込みを浴びせていた。

まあ……その……妥当な気がするけど……

〈え、できますよ?〉

「できるの?!」

〈イムヤさんのスマホにデータ転送しますね〉

「あ、そういえば貴女、情報収集艦だったわね……」

この艦隊なんだかすごい……

なんて思っていると双眼鏡に敵艦の姿が映る。

「あ、見えました! 駆逐イ級が一隻……あ、いえ3隻います!」

「よーし! じゃ、クロ最初の一撃をそのえつと……音響誘導魚雷だっ

け? それでやっちゃって!」

「わ、分かりました! 発射管一番注水!」

一番発射管にG7e s I Iを装填する。

「目標位置確認……フォイア!」

魚雷を撃ちだす。

当たって……!」

「じゃあ私達もやるわよ!」

「了解でち! 魚雷さん、四番発射! 続いて5、6番、放射状に撃つでち

!」

みんなも続いて魚雷を発射する

私の魚雷は……命中まであと10秒……

イ級は気づかず前進している。

「魚雷命中します……」

2秒後、大きな水柱があがる

「命中! クロさすが!」

.....

「クロ？」

「キワーミー!!キワーミー!フタエノキワーミー!!」

ひゃっはああ!!命中だぜええええ!!ぎまあ見やがれア○公め!

「く、クちゃんの人が変わったでち!!」

「お、おい・・・クロちゃくん？」

H A H A H A ☆次の魚雷装填だZ E ☆

ふと双眼鏡をのぞくと・・・

「あっ・・・」

「あ?」

駆逐艦が一隻こっちに向かってきていた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアム!!!」

「え、え?え?ど、どうしたの!?!?!」

「く、駆逐艦接近です!急速潜行急いで!」

うう・・・駆逐艦見て正気に戻ったけど・・・嫌われちゃったかな・・・

「い、急ぐでち!」

「これはやばいのね!」

みんな急いで潜行する。

ソナー音が近づいてくる・・・。

この瞬間はいつも心臓が弾けそうになる・・・

お願いだから通り過ぎて・・・!

そして・・・

「・・・もしかして・・・」

目をつぶってたから分からなかったけど後ろに行った?

後部発射管の射角内!

「・・・後部発射管注水・・・」

「クロちゃん、やるでち・・・?」

「や、やってみます・・・」

さつきと同じようにG7eSIIを装填する。

「2番発射用意・・・フォイア!」

魚雷の音に気づいたイ級が急いで転進しようとするが・・・

「遅いです!」

魚雷は見事にイ級の腹に直撃する。

「フタエノキワミィー!」

殺りました。

ひゃっはああああ!! 2キルだぜえええ!!

「く、クロちやくん……」

「あっ……す、すすすすみませんんん!!!」

「ど、どうしたの?」

「そ、その……昔から戦鬪になると人が変わるって言われてて……
うう……またやっちゃった……」

でもさっきの攻撃で哨戒中だった駆逐艦はすべて撃沈したみたい。
へへこちらアンドロメダ、潜水艦隊へ。こちらは護衛艦隊をすべて撃沈
しました。そちらは1800……隊長が輸送艦に到着するまでの哨
戒を継続してください

「了解しました」

「了解! そういえばクロすごいじゃない! 初戦で二隻撃沈なんてすご
いわよ!」

「そうでち! 今回のMVPでち!」

「え、そ、そうですか?」

「そうなのね! まあ……人が変わっちゃうのは……」

「うう……」

「イク!」

「ご、ごめんなのね!」

「い、いいんですう……」

ううううう……やっぱり変な印象与えてる……

「と、とりあえず哨戒を続行でち!」

「そうね、とりあえずイクはちゃんと謝りなさい!」

「ご、ごめんなさいなのね!」

「い、いえ……そ、そんなに謝らなくても……」

でも……なんとなく仲良くなれそう……

そんなことを思った初陣だった。

く提督く

〈〈こちらスーパ―6―1、すべての護衛艦隊が撃沈されたらしい〉〉

「了解した！お前ら、相手を見くびるなよ！」

「大丈夫だ！」

〈〈へへへ、あいつら困ったら石投げてくるからよくみりや平気だ〉〉

「お前・・・油断してたら死ぬぞ」

〈〈はいはい、隊長殿〉〉

「ホントに分かってんのかね・・・」

なんて軽口を飛ばしながら目標に接近していった。

〈〈えらい静かだな・・・〉〉

〈〈そうだな・・・〉〉

「式風、護衛艦殲滅後敵船で動きはあったか？」

〈〈いや確認できていないぞ〉〉

「了解」

いやな予感がする・・・

「ガンナー、クレーンの影に気をつける！」

「了解」

先行するブラックホークを見ながら無騒ぎを覚えていた。

すると・・・

〈〈左舷からRPG！〉〉

〈〈回避急げ！〉〉

予想通りだけど・・・まあ・・・

しかしパイロットがうまくいこと射線から逃れて同乗する狙撃手に

RPG兵は排除されていた。

倒れる瞬間にRPGが発射されブリッジを直撃していた。

「うわあ・・・艦橋ぶっ飛んだぞあれ・・・」

「中は地獄絵図でしょうね・・・」

「とりあえず降下しよう」

へりは艦尾の開けた場所に接近しロープを下ろした。

「ロックンロールだ！」

「G O O G O O ! !」

次々に兵士が降下していく。

んじゃ我輩も行くこうではないか

ロツクンロールだぜい！

拉致作戦

くアンドロメダく

輸送船に乗り移って行く隊長を見ながら警戒を続けていた。

ソナーもレーダーも反応なし・・・一安心かな？

「赤城さん、索敵機から報告はありますか？」

へへいえ、何もありません。海域クリアですく

「わかりました」

ふう・・・

でも海は安全でも船内からの銃声がたびたび聞こえる。

隊長・・・大丈夫かな・・・

なんて思っている・・・

「ん・・・？何この音・・・」

何かが海中を進んでくる音・・・まさか・・・！

「魚雷・・・！」

「え、何だつて!？」

「魚雷音聴知！方位・・・240度高速接近！」

いったいどこから・・・

「雷！対潜戦闘行くよ！」

「了解！」

雷ちゃんと響ちゃんが離れて潜水艦の元へ向かった。

するとレーダーに・・・

「まずい・・・新たに敵艦隊！規模は小さいですが・・・」

へ赤城よりアンドロメダさんへ！敵艦の位置を教えてください！く

「そこより40km先、孤島の影に隠れています！」

へわかりました！攻撃隊発艦！く

潜水艦は・・・潜っちゃったかな・・・

でも・・・！

「雷ちゃん！響ちゃん！こっちに戻ってきてください！」

へえ、でもまだ潜水艦いるわよ？く

「大丈夫です！」

ふっふっふ・・・私の秘密兵器使うときが来た！

「アスロック・・・発射用意！」

脇に伸びているVLSの蓋を開ける。

いくら深海に潜ってもコレなら・・・！

「発射はじめー！」

VLSから2発発射する。

あ、そういえばさっきの魚雷ってどこを狙ってたんだろ・・・

「雷ちゃん、魚雷の航跡は見える？」

〈へううん・・・見えないわ〉

「了解」

ソナーで位置を確認すると・・・

「ゆ、輸送船を狙ってる!?!」

〈へえ、何!?!〉

「魚雷は輸送船を狙ってます！」

〈へど、どうするの!?!〉

「げ、迎撃を・・・CIWS攻撃始め！」

海面に向けて撃ちまくってみるが・・・

「当たって・・・お願い・・・!!」

その願いが届いたのか魚雷が水中で大爆発を起こす。

やった・・・

「ふう・・・迎撃成功・・・やりました！」

〈へナイス！あと潜水艦の撃沈を確認したわ!〉

〈へハラシヨー〉

「了解しました！」

ふう・・・あとは敵艦隊だけかな？

なんてこと思ってる・・・

〈へフタエノキワーミー！キワーミー!!!〉

そんな絶叫とともに水平線の向こうで大きな水柱が立っていた。

潜水艦の魚雷かな？

〈へあ、えつと・・・クロが敵戦艦を撃沈したわ〉

「こちらでも確認しました」

〈へ式風よりアンドロメダ、すべての敵艦隊の撃沈を確認〉
「了解です」

あとは隊長だけかな・・・
大丈夫かな・・・銃声が大分減ったけど・・・

く提督く

〈へブリッジ制圧！〉

「了解、小包は見つかったか？」

〈へこちらチャージャー一分隊、小包確保。抵抗ありません〉

「了解、そっちに向かう」

さて、尋問して核兵器に関して聞きださんとな

階段を下りながらどうやって聞き出してやろうかと考えていた。

「この先です」

「あいよ、どうも」

ドアを開けて中に入る

中はえらい豪華だった

その奥には初老の男性がいた

「へえ・・・えらい豪華な内装だな」

友好的な雰囲気の話しかけてみる。

深海の提督も普通のおっさんだな・・・

「そりやどうも」

「あんたが提督か？」

「いかにも」

「んじや、本題で、核兵器持つてんの？」

「・・・どこからの情報だそれは」

「あら、もれてることに気づかなかった？」

「お前らは偵察機の情報にしか頼ってないだろ・・・それがどこから
だ」

「あく・・・まあ・・・俺は米軍からの情報も仕入れてるからな。てか
衛星持つてるし」

「・・・チツ」

舌打ちしやがったなこのおっさん

「・・・それで、聞きたいのは何だ？」

「お前ら核を持つてるのか持っていないのか、それだけでいい」
「じゃあ答えは持っているだ」

「やっぱりか・・・」

「今のご時勢、核兵器を持ってないとやっていけないだろ」

「じゃあターゲットはどこだ？」

「人口密集地、どこの国のもだよ」

「テロリストかよお前ら・・・」

さすがに呆れた・・・

まあちやっちやと核施設の情報吐かせないと

「核施設の情報がほしいんだろ？」

「さすがだなおっさん」

「おっさん言うなバカタレめ!!」

「いや、どうみてもおっさんだろお前!!」

「俺はまだまだ20代だし!!心は20代だし!!」

「心かよ!実年齢言えよ!」

「・・・48」

「おっさんじゃねえかああああ!!!」

不毛な突っ込み争いが・・・!!!

「もういいや・・・で、核施設はどこだ？」

「教えてくださいイケメンのお兄さんと言ったら教えてやろう」

・・・コノヤロウ

「おーし皆、コイツコンクリ潰けにして海に沈めようぜ」

「悪かった俺が悪かった」

「んじや話してもらおうか」

「・・・この先の核施設・・・そこしか知らん」

「ふむふむ・・・そこがお前の担当って事か？」

「そうだ、鎮守府みたいなものだ」

「なるほど・・・そんじや」

「？」

鎮守府にいる電に無線をつなげる

「おーい、我が嫁よ聞こえるか？」

〈〈はわっ?!?な、なんなのです?!?〉〉

「んとね、俺の机のPC開いて」

〈〈へりよ、了解なのです〉〉

「んで開いたらミサイル管制ってソフト開いて」

〈〈ミ、ミサイル!?!〉〉

「いいからいいから」

〈〈な、なのです・・・〉〉

「んで、M A R V ってヤツ選択して弾頭を通常で」

〈〈や、やったのです〉〉

「んじや座標送るから入力して」

電にメールで座標を送る。

一応通常弾頭だからまあ・・・大丈夫かな？

「入力した？」

〈〈準備OKなのです!〉〉

「んじや、発射!」

〈〈発射なのです!〉〉

無線機越しに爆音が聞こえる。

てか・・・俺の鎮守府ってよくよく考えたら重武装過ぎワロエナイ

「んじやおっさん」

「素敵なお兄さんだ」

「まだ続けるの!?!」

コイツ実は結構いい人なんじゃないかと思ってきた。

「そこの米兵と一緒にみんなのお友達サムおじさんとこ行ってきてね」

おっさんは抵抗もせず米兵に連れられてつれてかれた。

「はあ・・・終わった終わった・・・」

「さっさと帰りましょう」

「そうしよ」

後部甲板まで出てへりで回収してもらおう。

鎮守府視察

なんかもう色々疲れた・・・

そんなこと思いながら部屋に寝転ぶ

「もう・・・司令官さん、だらしないのです」

「今日は勘弁してくれえく・・・」

明日視察くるって時点でもうすでに疲れMAXなのに・・・

とりあえずり級とイ級を隠さねば・・・

「電、風呂はもう入ったのか?」

「あ、まだなのです!」

「んじやいつてきなさいな」

「なのです!」

電は着替えを持ってそそくさと部屋を出て行った。

俺はさつき入ったから眠くなってきた・・・だが、電が帰ってくるまで寝るわけにはいかん!

・・・売店まだ開いてたっけな

「さてと・・・電の好きなアイスでも買ってきてやるかな」

スー〇ーカップのバナラ味好きだったなあの子は

とりあえずさつきと着替えて近くの売店に向かう。

「あれ、クロ?」

「あ、司令官」

「どしたこんな遅くに」

「いえ・・・ちよつと・・・」

クロは何かの本を隠した。

「どれ、ちよつと見せてみ」

「へっ!?いい、いえ!」

チラッとタイトルが見えたが・・・雷撃に関する本か

「雷撃の教導本か」

「あ、み、見えましたか・・・」

「バツチリな」

「実は今日誘導魚雷しか命中させてなくて・・・」

「ああ・・・なるほどな・・・」

そのとき誘導魚雷っていう言葉で思い出したことがあった。

「あ、そうだクロ」

「何ですか？」

「お前誘導魚雷決戦時以外禁止な」

「えっ!? ななな何ですか!?!」

「あれな・・・めっちゃコストかかるんだ・・・」

「あ、ああ・・・」

物自体は二次大戦兵装なんだが・・・性能がな・・・

「あ、そうだ、俺用事あったんだ」

「あ、すみません! 時間とらせてしまつて・・・」

「いやいや、その本でしつかり勉強して次の作戦も頼むよ!」

「了解です!」

とりあえずアイスを俺の分と電と分、あと電が好きなお菓子を買つて店を出た。

「ふく・・・さぶ・・・ただいま」

やっぱりまだ電は風呂かな

とりあえずのんびり待つかねえ

「暖房つけてなかつたな・・・さむっ・・・」

この気温じゃ風呂上りの電は風邪引くな・・・

なんてことしてると

「お先、なのです!」

「お、おかえり、アイス食うか?」

「アイスですか? あれ、冷凍庫には無かつたですよ?」

「さつき買ってきたんだよ」

「わ、私に・・・ですか?」

「ああ、俺の分もあるがな」

「ありがとうございます!」

電はいきなり飛びついてきた。

おうふ・・・シャンプーのいい香りが・・・ああ・・・幸せ・・・

「あ、私髪乾かしてなかつた・・・」

「んじや俺のひぎの上座れ、髪乾かしてあげるよ」

「あ、ありがとう・・・なのです」

「んな照れんなって」

電は俺のひぎの上に座って鼻歌を歌っていた。

「♪♪♪」

「それ、この前UPされたばかりのボカロ曲だろ？」

「あ、知ってたのです？」

「イムヤのヤツが教えてくれたんだよ」

「うう・・・私が教えようと思ったのに・・・」

「はは、よしよし」

ドライヤーで髪を乾かしながら撫でてやる。

「ふあああ・・・ちよつと・・・眠くなってきたのです・・・」

「んだなく・・・寝るか」

「なのです!」

この前布団を少し大きめのを買ったから電といっしょに寝られるぜ・・・!

「司令官さん、今日はお疲れ様なのです」

「それを言うなら俺より潜水艦連中と実動艦隊に言ってくれよ」

「えへへ、でも司令官さんが先なのです」

「ホント可愛いなもう!」

頭を撫で回してやる

「ふにやああああ!!!ボサボサになるのですううう!!」

「かまうもんかったの!」

「や、やめてええええ!!」

可愛い声で抵抗してくる。

ああ・・・可愛い・・・

とか思っていると俺の手をつかもうとした電の手が俺の My So n を直撃する

「ポウッ!」

「はにゃ!」

下半身に走る激痛・・・Oh・・・

「し、司令官さん大丈夫なのです!？」

「う、うん．．．大丈夫じゃない．．．」

「はわわ．．．いい、痛いこの辺ですか？」

「フアツ!？」

電はさつきブツ叩いた俺のMy sonを撫でてくる。

．．．．．やめろおおおおおおお!!!

「ちよ、い、電待て!」

「で、でも．．．撫でてたら痛みは．．．」

「そこは特殊だから!」

「特殊?」

電は何のこと? 見たいな顔をして今撫で回してる部分を覗きこんだ

「ぴ」

「ぴ?」

「ぴやああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

「ぶべらああああああああ!!!!!!」

ものすごい勢いで布団が飛び出してきたのはいいが、ものすごい力

でMy sonを握り締められ顎に頭突きを食らった．．．

ああ．．．意識が飛ぶ．．．

く朝く

「ん．．．ん．．．? 朝か．．．」

時間は6時．．．よく気絶してて起きた俺．．．

電はどうした? と思って横を見ると頬に涙の筋を作って俺に抱き

ついて寝ていた。

ああ．．．泣いてたのね．．．

「お、おーい電く」

「ん．．．んん．．．? しれーかん．．．」

「起きたか〜?」

「ん・・・ふああああ・・・おはようなのです・・・」

とりあえず今は泣いてなさそうなのでよかったよかった。

「司令官さん・・・昨日はごめんなさいなのです!」

「ああ、大丈夫だよ」

「でも・・・」

「大丈夫だって! AKで撃たれるよりはマシだよ・・・」

そう・・・あれはイラクで・・・あ? 何? 聞いてない? 分かったも
う言わない

「そういや視察の何とかクソツタレ少佐だっけ?」

「そ、その言い方は・・・えっと寺田少佐です」

「了解、まあ本人の目の前でファック言わないように頑張るよ」

「そ、それ言ったらおしまいなのです・・・」

「とりあえず顔洗って朝ごはんにしよう」

「なのです! 司令官さんはそこで待っていてくださいなのです!」

「あく・・・ちよつとだけ外でてきていいか?」

「早く帰ってきてくださいね」

「はいよ」

さて・・・監視カメラと機銃をリンクさせねば・・・

ふはははははは!! この鎮守府は7.62mm機関銃がそこらへん
にあるんだぜ!

侵入者(視察官)は排除しないとな!

とりあえず動くことだけ確認してつと・・・

「電くただいま〜」

「おかえりなのです!」

おお・・・味噌汁のいい香りが・・・

「召し上がれなのです!」

「いただきます」

ああ・・・目の前のメニューよりポニテでエプロン姿の電が可愛す
ぎてご飯3杯はいける・・・

ああもう電をいただきますした(r y

「電、今日の予定は何があつたっけ？」

「えつとですね・・・お昼に視察の方が来られて・・・えつと・・・あ、1000から潜水艦演習です！」

「了解、あとは鎮守府待機か・・・んじゃひとつお願いしたいんだが・・・」
「なんですか？」

「リ級とイ級をどこかに隠すか変装して外出させてくれないか？」

「あ、確かに隠さないとヤバイですね・・・」

とりあえずソイツが来てまずいいそうなセリフが戦果についてだらうなく・・・

なんて不安に思いながら朝ごはんを食べていた。

「ふいっ・・・ちそうさま」

「おお・・・米粒残さず完食なのです・・・」

「電の作った料理は残すわけではないよ」

「う、ううっ・・・照れるのです！」

「へっへっへ」

「笑い方ゲスいのです!？」

「ゲ、ゲス!？」

なんてやり取りしてたら司令室に行かねばならない時間に・・・

「あ、こんな時間か・・・んじゃ司令室行こうかね」

「なのです！」

「あ、電、一応視察官にお茶くらい出してやらんとアレだからお茶葉買ってきてくれないか？」

「なのです！」

「ありがとうな、あ、金剛が紅茶が買いたって言ってたから金剛も連れて行ってやってくれ」

「了解なのです！」

寮の出口で分かれる。

さてと、潜水艦演習か

そんなこんなで司令室

「あっ・・・ねむ・・・」

昨日の疲れかまだ眠い・・・

大あくびしているとイムヤたちが入ってきた。

「これより演習に行ってきますー!」

「おう、気をつけてな」

「・・・なんでそんなダルそうなの?」

「・・・今日視察が来るっていうからダルくて仕方ない」

「あく・・・そういう・・・」

「まあ行ってらっしゃいな」

潜水艦たちを見送ってとりあえず暇になった・・・

銃の整備でもしようかな

「そういえばこの前米軍から買ったハーブーン発射機どこに設置しよう・・・」

一応艦娘が出払っている時のために米軍から深海棲艦にも有効な対艦ミサイルを買ったのはいいが・・・

ICBMサイロにトマホーク発射機に・・・置く場所なくなってきたなく・・・あ、CIWS無いわ

「追加発注しとこつと」

とりあえず知り合いの武器商に追加でCIWSとPAC3など地对空ミサイル一式を注文しておく

そういえば・・・ほかの鎮守府に訪問したとき対空砲置いてるところはあつてもミサイルとかは無かったな・・・

何で皆置かないんだろうね↑

「おし、これでOKつと」

何気に見ると最近米軍機の離着陸量が増えた気がする・・・この前の作戦で米本土から資源を送ってくれることになったから少し家計が助かった。

まあ・・・資源って言ってもシンファクシ一隻運用するだけで全部飛ぶような量なんだけどね・・・海路がふさがれてたら空輸だけだし仕方ないっちゃ仕方ないかな

そんなこんなで色々していると午後になる

「はあ・・・もうちよいで来るのか・・・」

なんてため息ついているとドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼する」

「お客様連れてきたのです!」

「お、ご苦労さん」

「………来たのか……」

「お初にお目にかかる大佐殿、私は寺田だ。」

「ご丁寧にどーも。まあ、お茶でもどうですか?」

「そうだな……いただこうか」

コイツ……すっげえ嫌なヤツそうな顔してる。言い方とか……

何かこう……目は細目で人を見下した物言いしやがるよ……キツネみたいな顔しやがってこのキツネ野郎。

しかもお前……電のごとじろじろ見てるといてまうぞワリヤアアアア!!

「司令官殿、少し思ったことがあるんだが?」

「ん?なんですか?」

「この鎮守府、何故アメリカの航空機の発着量が多いんだね?」

「ああ、ちよつと施設の改良のために色々持ち込んでるんですよ」

「色々とは?」

クツソコイツなんか薄くくニヤけてるのが気に入らん。腹立つ。

「あれですよ、対艦ミサイルとか迎撃ミサイルシステムとかC I W Sとか」

「ミサイル……だと……?」

「ああ、あと大陸間弾道弾とかですね。あ、もちろん通常弾頭の……あれ、サーモバリック弾頭あつたっけ?」

「君は……!」

何で青筋浮かべてんのコイツ

「君は……それでも日本軍人か!!」

「……ええええええええ!!?」

何でキレたの!?わけがわからないよ!

「貴様ア!この伝統ある日本軍の戦略にミサイルなどと甘つちよろい兵器を使うつもりか!!」

「……いやいやいや!!!今21世紀だからね!」

「偵察機で得た情報を元に戦略を組み艦隊決戦をするのが我が日本海軍だろう!そんなアメリカの卑怯で汚い戦法を持ち込むな!」

「……理不尽すぎね?」

「理不尽などであるものか!」

「いやまあ……てか偵察機なんて撃墜されたら終わりでしょうに……宇宙空間からの偵察か、無人機が妥当でしょ」

「貴様あ……!!」

あ、これアカン、怒りが沸点こしてるわ。

てかコイツ頭の中昭和かどつかで止まってんの……?

「軍司令部の意向だぞ!この戦法は!だいたい艦娘たちが衛星の電波などキヤッチできるものか!!」

「え、俺が伝えたりPDA持たせてるんですけど!!……」

「どこまで弛んでいるんだ貴様はあああああ!!!」

「いやいやいや!!!これ一番いい戦略でしょうが!!!」

「いいものか!アメリカの手先め!!」

「え、俺悪い言い方するとアメリカ軍の手先んだけど……」

一応米軍の指揮下に入るし……

「ふざけているのかあああああ!!!」

ああ……もういやめんどくさい……

「ああ……まあ落ち着いて……」

「はあ……はあ……この話は後だ。本題に移ろう」

めんどくせえ……コイツ撃ち殺して沈めても大丈夫かな

「司令官、君のところは何故あまり出撃しないんだ」

「あく……まあ……最近のはえげつないの多いですからね……」

「だから何だと?」

「いやだから、こいつ等が被弾、轟沈は嫌なんですよ」

「……君は兵器に情を持つのか?」

あ、コイツあれだ、ホントにウザいやツだ

スナイパー配置しとけばよかった……

「そういえばこの秘書艦の電……だったか?この指輪……愚の骨頂

だな」

その言葉で電の額に青筋が．．．あ、すごい笑顔だ．．．

「あく．．．少佐殿．．．？謝ったほうがいいかも．．．」

「意味が分からないな。兵器に情を持つなど．．．兵器など所詮消耗品．．．損失が怖くて戦争に勝てるものか」

「あ、あの．．．少佐．．．？」

電がすごい笑顔なんだけど．．．手とかいろんな場所に青筋が出てる．．．ヤバイ

「しかし．．．ケツコンなど．．．私がこの提督ならそんなことする前に進撃させ．．．あつつあああ!!!」

電が笑顔であつつあつのお茶をぶっ掛けていた．．．

「はわわわわ!!!ごめんなさいなのです!!」

「貴様あ．．．!!!」

「す、すぐに拭くのです!」

やっただぜみたいな顔して布巾を取りに行った。

「司令官! 貴様いったいどういう教育をしているんだ! いくら司令官より階級が低いとは言え本部からのものだぞ!」

「ああ．．．まあ．．．不慮の事故ですし．．．」

「ああ．．．そうか、貴様がクズだから艦娘もこうなるんだな」

カチンと来たが．．．まあ．．．電がさつきより2倍の青筋と笑顔を浮かべて帰ってきた．．．

「少佐」

「何だ!! まだしでかす気かこの小娘が!」

「司令官の悪口言うとはいいい度胸なのです．．．表出ろ」

「え」

あゝあ．．．

「表に出ろ．．．だと．．．!? ふざけるのも大概に．．．ぐはっ!!」

1 HIT!

「ぎ、貴様．．．ぐわああ!!」

2 HIT!

「電の本気を見るのです!!」

目にも止まらぬ速さで少佐をぶん殴っていく。

「……………いいぞもつとやれ

「ぐわあああああああああああああ!!!」

100HIT!

フルボッコだドン!

「司令官への言葉には気をつけるなのですこの雑種が」

気絶している少佐に唾を吐き捨てた……

あ、ちよつとその唾は欲し（ry

まあ……とりあえずほつとこ……

そのうち起きるだろ。

とか思っている……

「ぐっ……き、貴様あ……」

もう一回ゴかれるドン!

「まだ生きてたのですか……」

「ふざけやがって……」

腰から十四年式拳銃を取り出す……

さすがにコレはヤバイのでこの前納入したばかりのSIG226

を取り出す

とりあえず銃だけ撃つて……と思ったが安全装置かかったままな

ので大丈夫かな

「ははは、セーフティーがかかってるぞ、ルーキー」

「ル、ルーキーだと……!?俺はこの道10年のベテランだぞ……!」

と安全装置を確認しようとしたとこで……

「なのです!!」

「ぐはあああああ!!!」

K.O!

今度こそ完全に気絶した。

「次生き返ったら海に沈めてやるのです」

「あく……電、もう気絶してるから一応メディック呼んどいて……」

「むう……仕方ないですね……」

一応呼んでやるところはホント優しいな……

しかし・・・起きたら起きたでめんどくさそうだな・・・
てか考え方古風すぎんよ・・・
そんな感じで視察が始まった。

・・・早く帰ってくれないかな

提督の遠征

これ・・・処理どうしよ・・・
気絶した少佐を見て嘆いていた。

「この生ゴミどうするのです?」

「お、お前結構怒ってる?」

「激おこなのです」

笑顔だが額に青筋浮かんでる・・・

なんてことしてると・・・

「う・・・ぐ・・・」

あ、起きた。

生命力だけは強いね

「うつ・・・ここは・・・」

「あく・・・少佐、置きました?」

「・・・司令官殿か・・・?あれ・・・まだ視察にはついていないはず
だったが・・・」

やったぜ、記憶富んでる。

「ああ、お疲れのようですよと寝てましたよ」

「見苦しいところをお見せしたな・・・すまない」

「いえいえ」

こちらとしたら覚えられてるのがめんどくさいからむしろ好都合
だぜ

「ところで視察って何なんです?」

「ああ、そうだな・・・その前に司令部から預かった話なんだが・・・」

「何です?」

「君の鎮守府・・・何故こんなにもアメリカの航空機・・・それに米軍
が多い?」

「あれ、俺の前歴知りませんか?」

「元空軍・・・あとは米軍だろ?」

「そうですね。だからちよいちよいアメリカから物資輸入したりと
か」

「なるほど・・・まあそれならいいんだが・・・」

お、さつきみたいにキレなかった。

後ろで電が笑顔でスタンバってるけど・・・

「あ、それとだ、君にもうひとつ司令部からお願いでだな」

「ん？お願い？」

「まあ出張だ。秘書艦を連れて」

「へえ・・・」

「呉に新人提督が着任したんだがその教導に行つてやつてくれ」

「あゝ・・・了解です」

めんどくさいなんて思ったのはナイショ

「ところで提督殿」

「何です？」

「何故君の鎮守府はこんなにも意味の分からん武装が多いんだね」

「い、意味の分からん？」

え、結局その話に戻るの!?

「当たり前だろう。ほかの鎮守府でさえ対空砲程度だぞ？それを何故、誘導弾などという兵器を配置してあるんだ」

「いやまあ・・・防衛でして・・・」

「防衛にそんなものが必要なわけあるか！」

「いや大有りでしょ！」

「いや無い！この伝統ある日本軍にミサイルなどという兵器など必要ない！」

「いやいやいや・・・」

「言わせてもらうがな提督殿！こんな甘つちよろい事をするから錬度が上がらないんだ！」

「ええええ・・・関係なくね・・・？」

「関係は大いにある！そんな兵器に頼つて何ができる」

「敵の撃破」

逆に敵の撃破以外何ができるんだよ・・・

「いいや出来ない！そんな甘い考え方で戦争に勝てるものか！捨て身
の精神で突撃し撃破してこそ日本軍だろ！」

「何かそれ違う希ガス」

「違わない!」

なんて言い争いしていると・・・

〈警報!!警報!国籍不明の爆撃機、鎮守府に接近中!〉

「ば、爆撃機だと!?!」

「いい機会だ、君の艦隊の錬度を見せてもらおう」

「いや・・・今回は出しませんよ・・・?」

とりあえず無線で・・・

「スクランブル配置の機はただちに離陸、写真撮影と警告射撃を行え!」

〈へてーとく、撃墜しなくていいの?〉

「撃墜は出来たら頼む、ただ、味方の場合があるから注意しろよ」

〈了解!〉

外を眺めると2機のF-14Dが離陸していった。

あ、もちろん妖精さんね

「ジェット機だと・・・?どこまでふざけてるんだ!」

「いや・・・近代化して何が悪いの!」

「悪いに決まっている!そんなので日本軍を語るなど・・・この非国民めが!!」

「ええええええ!?普通そこまで言う!?!」

もう怒りというか呆れというか・・・

なんてやり取りを10分ぐらいしていると・・・

〈へてーとく、爆撃機はアメリカのB52だったよ〉

「ん?この鎮守府にか?」

〈うん、何かてーとくが注文したものお届けにだって〉

宅配便をフライトプラン未提出アンド爆撃機で届けんな!!紛らわしいわ!!

「貴様・・・今度は何を買った!?!」

「え、ええつと・・・CIWSと対空ミサイル一式・・・」

「はあ・・・もぅいい・・・」

やったぜ、諦めた

「とりあえず、鎮守府の視察だ。施設の案内をしてくれ」
「了解です」

とりあえず外連れ出すか・・・
何で本部はこんなめんどくさい人種を送ってくるんだチクシヨウ

「とりあえずここが艦娘寮、その向こうは工廠です」

「ふむ・・・なかなかいい立地だな」

「んで・・・この先には一応立ち入り禁止なんですけど・・・行きます
？」

「立ち入り禁止？何がある？」

「ミサイルサイロ」

一瞬イラツとした顔をしたが頑張つて真顔に戻してた。

てかコイツ真顔がニヤケ顔つてちよーキモいんですけどく

まあそんなこんなで施設も見終わり・・・

「ふむ・・・まあまあだな・・・」

「そりやどーも・・・」

とりあえず途中からミサイルをノリノリで観察してたぞコイツ・・・

「ふむ・・・まあ・・・問題は無いか」

よし帰れ！さっさと帰れ！

「よし、特に大きな問題も無いな。私は本部に帰るとしよう。提督殿、
出張はよろしく頼むぞ」

「了解つす」

やったぜ・・・視察もそんなかからなくて助かった・・・

とりあえず一応義理なので送って行ってやろう・・・

「少佐、帰りは何で？」

「ああ、車だ」

・・・轆かれろ！

とか思ってたけどまあいいか

「そういうえば艦娘の量が少ないな、どうしたんだ？」

「あく・・・演習行ったり遠征行ったりですね」

なんて話してると・・・

「提督提督提督うううううう
!!!!!!」

「ん？」

あれ・・・島風か？

「島風か？どし・・・」

「ぎゃあああああああ!!!」

艦装装着したままの島風に少佐が跳ね飛ばされていた・・・

時速40ノット・・・うわあ・・・時速80kmで跳ねられるとか・・・

しかも駆逐艦に・・・

「おうっ!？」

「いやおうっ!じゃねえよ!!人身事故起こしてんじゃねーかああ!!!」

「あれ、何か跳ねたの？」

「何かじゃねええええ!!!」

本来なら嬉しいんだけど・・・

本部にどう報告しよう・・・

「お前・・・駆逐艦が人身事故って洒落になんねーぞ!」

「おうっ!」

「だからおうっ!じゃねえええええええ!!!」

ちなみに肝心な少佐は海に飛んでいったあと何故か飛び出してきたクジラに食われてた。

・・・

・・・なんで鎮守府近海にクジラ生息してるんですかねえ(困惑

「はあ・・・とりあえず電話かけとこ・・・」

本部のほうに電話をつなぐ。

どう言おう・・・

「へむ、どうした？君からとはまた珍しいな、寺田君は何してるかね

？」

「ああ・・・その・・・少佐なんですけど・・・」

「へ?」

「クジラに食われちゃって・・・」

「へフアッ!」

今電話越しにありえん声が聞こえた気がする

「へえ、ちよ、どういふことだね!」

「で、ですから・・・海に落ちてクジラに・・・」

〈な、なぜ海に落ちたんだね・・・〉

「あく・・・何か白い粉吸って錯乱したっぽいです」(大嘘)

〈やはりか・・・実はヤツは違法薬物をしてる疑いがあったてな・・・〉

え、マジ？ラッキー

〈ふむ・・・まあ自業自得だ、君に責任はない〉

「はあ・・・ありがとうございます」

〈ところで・・・呉に出張は聞いたかね？〉

「ああ、はい」

〈あれな・・・明日で頼む〉

「フアツ!」

早くね!?

〈着任が早まって・・・すまない!頼む!〉

「ま、まあ・・・大丈夫ですが・・・」

〈では頼むぞ!〉

いきなりすぎんよ!

まあ・・・電も一緒に来てくれるからいいんだけどね

とりあえず電話を切り司令室に戻る。

「ふう・・・ただいま」

「あ、おかえりなのです!生ゴミはどうなりましたか?」

「・・・まだ怒ってる?」

「激おこなのです!」

「まあアイツなら島風に人身事故起こされてクジラに食われたよ・・・」

「・・・ざまあ」

電の口が悪くなっていく・・・嗚呼・・・

「あ、電、明日出張行くぞ」

「は、え!」

「呉鎮守府の新人提督の教導だとさ」

「わ、私もですか?」

「うん」

まあいきなりすぎるよな

「い、急いで準備なのです!」

そういうと電は急いで司令室を飛び出していった。

俺は・・・とりあえずその新人とやらを見とくか・・・

えくつと・・・データベース開いてつと・・・

「コイツか？」

女性提督なんて珍しいな・・・年が・・・

「年が18!？」

高校生!?!いいのこれ!?

「ま、まあ・・・いいか・・・」

とりあえず仕事は終わってるし部屋に帰るかな。

時刻は1700・・・疲れた・・・

学生時代のバイトに比べたらマシだけどね

「ただいま」

「あ、おかえりなのです! 晩御飯はもうちよつとでできますよ」

「お、ありがとう。今日は何？」

「今日は電特製カレーなのです!」

「おお! そりゃ楽しみだ!」

あゝ・・・カレーの香りが・・・

てか・・・このカレー、駆逐艦「電」じゃなくて護衛艦「いなづま」

のカレーの香りにそっくりなんだけど気のせい?

「電、明日なんだが朝の4時の始発でここ出ようと思うんだけどいい

?」

「朝の四時の電車ですか？」

「いや、五時のだけど4時前にはここ出ようかなって」

「そうですね・・・遅れたくないですからね」

「とりあえず向こうには行くことだけ伝わってるらしいから」

「なのです!」

電はご機嫌でカレーを煮込んでいる

「あ、明日から当分指揮を誰に任せよう・・・」

「んく・・・アンドロメダさんあたりがいいのではないですか?」

「確かに・・・秘書艦は・・・ケストレルでいいかな」

「そのほうがいいと思うのです!」

「あとは・・・そんなもんか」

事務処理みたいなのも終了したのとほぼ同時に電のカレーも出来上がる。

「おお!!うまそう!」

「召し上がれなのです!」

笑顔で差し出してくれる・・・ああ・・・可愛い・・・
そして美味しい!!

「し、司令官さん食べる速度すごいのです・・・」

「おかわり!」

「な、なのです!」

うますぎる! (某へび風)

「ふうく・・・食った食った・・・」

「すごい食べっぷりだったのです・・・」

「だって美味かったしな!」

「えへへ・・・今度は司令官さんの作ったものも食べたいのです」

「お、いいぞ!俺の学生時代は紛いなりにもホテルの厨房勤務だったからな!」

「はじめて聞いたのです!」

「腕が衰えてなければ何か作ってあげるよ」

「なのです!」

さて、風呂でも入るかな

「電、もう風呂行つて寝ないか?」

「もう・・・ですか?」

「明日早いしな」

「そうですね・・・私も行くのです!」

というわけで風呂に行く。

今日のはのんびりつかろつと・・・

そんなわけで風呂にのんびりとつかりのぼせる前には出た。

てかこの浴場・・・男俺だけに広すぎないか・・・

「ふく・・・ただいま」

部屋に帰つてもまあ・・・電はまだ帰ってきてない。

さて、布団しいて寝る用意はするかな
布団を敷いてると電も帰ってきた。

「司令官さん早いのです・・・」

「ははは、まあ男なんてそんなもんだよ」

「そう・・・なのです?」

てか何か電がやたらと顔赤いし目がキョロキョロしてんだけどど
うしたんだろう・・・

風邪かな?

「さて、寝るか」

「あ、ちよつと髪だけ乾かしてくるのです!」

「はいよ」

とりあえず俺は布団入つとくかな

「ふああああああ・・・」

「お疲れなのです?」

「ちよつとな・・・」

「し、仕方ないですね・・・」

「ん? 仕方ない?」

すると電が・・・

「えいつ!」

「ファツ?!?」

いきなり後ろから抱き着いてきておまけに俺の My son に手
を伸ばしてきた。

どゆこと。

「いいいい電!? どした!?!」

「い、イクちゃんから・・・その・・・司令官を元気にする方法教えて
もらったのです・・・」

「・・・アイツ・・・」

「で、ですからこ、今晩は寝かせないのです!」

「待ってお願い待って」

「も、もう待てないのです! わ、私だってそういう気分になるときはな
るのです! 駆逐艦の夜戦を舐めたらダメなのです!」

「ええええええええええ!!?!」

いろいろ状況が掴めないが・・・とりあえずイクGJ。

帰ったらビールおごってやる(フラグ

まあそんなことしてる間に電はまた生まれたまm(ry

く朝く

「んんんんん・・・いててて・・・」

まだ外は暗い、まあ今3時だしな

「電く・・・?」

「すー・・・くー・・・」

「可愛い寝顔しやがってコイツは・・・」

とりあえず電は疲れてるようだしおんぶでもして連れてってやるかな。

てか着替えどうしよ・・・まあ・・・どうせ昨日はアレだったから今更、電の服着替えさせるのがどうか言うんではないけどな・・・

起こさないようにするか。

「起きるなよく」

とりあえず寝巻きだけ脱がせて普段着のセーラー服を頑張って着させてみる。

「ふっ・・・ぬんっ!!」

難しい・・・!

まあ、5分くらい格闘して何とかなった。

「さて・・・行くかな」

電はまだ可愛い寝息を立てて寝ている。

すると・・・

「隊長」

「お?どした?」

アンドロメダが部屋まで来ていた。

「あ、起きてましたか」

「ああ、どした？」

「いえ、今日は私が指揮官ということでもいいんですよ？」

「ああ、そう伝えたら？」

「ちよっと不安でして・・・」

「気にすんな、困ったことがあったら俺に連絡して来い。あともし敵泊地見つけたら、鎮守府にある装備全部使っていいからヤツらを石器時代まで戻してやれ」

「りよ、了解です」

「さて、俺はもう行くよ」

「あ、お荷物持ちましようか？」

「あ、すまんお願いできるか？」

「はい、お任せください」

「電の荷物だけ持ってやってくれ。あともし忘れ物あったら空輸で空中投下してくれたらいいから」

「だ、大胆ですねえ・・・」

「いいのいいの」

「駅までですか？」

「いいのか？」

「いえいえ、私もちよっと朝の散歩と日の出を見たかったので」

「そか、そんじやお願いするよ」

「了解です」

そんなわけで二人で鎮守府を出る。

電は相変わらず可愛い寝息を立てている。

「ねえ隊長」

「ん？」

「電ちゃんどうしたんですか？」

「ああ、疲れが溜まってたみたいだな」

「そうですか・・・あ、そういえば隊長」

「ん？」

「い、電ちゃんともう・・・その・・・やっちゃったんですか?」
「・・・!?!」

「し、しちやっただんですか」

「ま、待て・・・まだアレだ・・・その・・・」

アンドロメダは顔を真っ赤にしつつも興味津々で聞いてきやがる
「どうなんですか?」

「そ、そりやお前・・・」

「やっぱりですか・・・ケストレルさんと賭けてたんですよ」
「おい」

「でも私の勝ちですね♪避妊してたっぽいので」

「何で知ってんの・・・!?!」

「なんとなくです」

「そ、そか」

なんて話してるうちに駅に着いた

「すまんな、荷物持たせて」

「いえいえ、ではお気をつけて」

「おう、ありがとな」

アンドロメダは少し微笑んでから鎮守府に帰っていった。

電車はすぐ来たのでとりあえず乗る。

東京駅から新幹線に乗り換えないと・・・

「ふう・・・」

電を椅子座らせて俺も一息つく

電の機装は後からC130で空中投下してもらおう予定だ。

「すく・・・すく・・・」

電はまだ気持ちよさそうに眠っている。

とりあえず少しだけのはのんびり出来そうだ。

・・・東京駅って何であんなに迷路なんだろうね。

「そろそろ東京か・・・」

次の駅が東京だ。

とりあえず電を背負って荷物を持つ。

電自体は軽いからそんなに苦じやない。

とりあえず30分ぐらい寝とこ・・・

〜4時間後〜

「んく・・・はっ!？」

いつの間にか岡山駅を通り過ぎていた。

「あ、おはようなのです」

「お、俺こんなに寝てたのか」

「はい、ぐっすりでしたよ」

「う、すまん・・・」

「ぜ、ぜんぜん大丈夫なのです!」

とりあえず降りる用意だけはしとかないと・・・

いろいろしてるうちに広島についた。

駅からは向かえがくるのでそれに乗って鎮守府へ向かう。

「新人の提督さん・・・どんな人なんでしょうか・・・」

「んく・・・写真見た感じ清楚な女の子みたいな感じだったぞ」

「女性の方なのです!？」

「あれ、知らなかった？」

「い、今知ったのです・・・」

「あら、マジか」

そんな話をしていると目の前にどっから持ってきたのかBTR―6
0が来た。

・・・なんでロシア製の兵員輸送車なんですかねえ・・・

とりあえず呉行きみたいなので乗り込む。

中は改造してあって装甲がくつついた高級リムジンみたいだった。

新人か・・・

やるべきことは一つだな（ゲス顔

やはり、先輩として洗礼は受けさせないとなあ・・・ハツハツハ
え、何するかって？そんなもんお前、ALL999建造よ！

出張一日目

「司令官さん、今日からいつまでが出張なのです?」

「んゝ・・・3日だったかな?もしかしたら伸びるかも」

「なかなか長いのです・・・」

そんな話をしていると呉についた。

「お、到着か」

車外にでると

「お、お待ちしました!!」

「ん?あ、君が新人提督?」

「は、はい!階級は少佐です!」

「若いのに疲れたな」

「いえ・・・そんな・・・」

「とりあえず施設案内お願いできるかな?あと、この子は秘書艦の電、よろしく」

「電です!よろしくお願いしますすなのです!」

「よろしく願います!えと・・・荷物は寮にお部屋を準備していますので・・・」

「ありがと」

「怖い人じゃなくてよかった・・・」

「ん?何か言ったか?」

「あ、いえ何も!」

「あ、ところで建造とかしたの?」

・・・状況開始だ(ゲス顔

「いえまだです」

「お、じゃあ一発行ってみよう!ALL999とかでやったらすごいのであるぞ!」

「ほ、ほんとですか!?やったあ!」

そのとき俺は罪悪感を覚えたが正直面白いのでそんなもん無かったことにした。

そんなわけで工廠

「あ、私、天音って言います!」

「俺はイーグルアイだ。階級は大佐だよ」

自己紹介も終わりさつそく準備する。

「お、一発目からすごいねえ・・・じゃいつくよー!」

「よ、よろしく!」

妖精は元気に資材を担ぎ込んでいった。

「ほいこれ書類!」

「お、どれどれなんて書いてある?」

ぬふふふふふ・・・まだだ、まだ笑うときじゃない

「えつとですね・・・15時間・・・?」

「え」

・・・あれ、大型だっけ!?

「すごいすごい!これで私も強い子を持てるー!」

元気に飛び跳ねているが・・・

「あつれえ・・・」

とりあえずどんな化け物が出てくるか・・・

「じゃあ高速建造行っちゃってえー!」

「ほいさー!ファイアアアアアアアアアアアアア!!」

そして出来る。

俺は内心すごい不安なんですけど

「呉鎮守府にいらっしやい!」

天音提督はまだ出てきてもないのに歓迎の言葉をかけていた。

すると中からものすごいデジャブを感じる艦装をつけた子が・・・

「いらっしやい!あなたは?」

提督は元気に声をかけていた。

俺氏ポカーン

「・・・アレーイ・バーク級ミサイル駆逐艦フライトI ネームシップ

のアレーイバークです。盾の役目・・・果たします」

「おおお!!やったアアアア!!強そう!提督、ありがとうございませす!」

「・・・うん、うん良かったね」

ええええええええええ?!?!何で?!アレーイバーク何で?!

提督はアーレイバークにほったすりすりしていた。

「とりあえず・・・司令室案内して・・・」

「はい！あ、私の秘書艦ご存知ですか？」

「んや、まだ見てないぞ」

「電ちゃんは先に行つて挨拶してると思うのですが・・・えつと私の秘書官は吹雪ちゃんです！」

「ふむふむ、まあ司令室で挨拶しようかな」

というわけでアーレイバークも連れて司令室に戻る

「あ、司令官！」

部屋に帰ると吹雪が天音提督に抱きついてた。

懐かれてるねえ・・・

「はじめまして吹雪です！」

「横須賀から来たイーグルアイだ」

「お話は聞いてます！前歴がすごいとか・・・」

「ん？そうか？」

吹雪とそんな話してると

「ねえねえ電ちゃん、これつてもしかしてケツコン指輪？」

「なのです！」

「おお！いいなあ・・・私にもそういう相手欲しいなく（チラツ）」

吹雪のほうを見たのはいいが普通に無視されていた。カワイソス

「そういうええ後ろの子は誰ですか？見たことない艤装着けてますけど・・・」

「あ、えつと・・・アーレイバーク級ミサイル駆逐艦一番艦 アーレイバークです」

「ミ、ミサイル駆逐艦!？」

「な、何かおかしいでしょうか・・・」

「すごいすごい！この鎮守府二人目にして大きな戦力ですよ司令官！あ、私は吹雪です！」

「よろしくお願いします」

・・・なぜ俺がALL999を薦めた相手にはこんな良いのばかり来るんだチクシヨウ。

「あ、そうだ、せっかくだし演習してみたら?」

「え、演習ですか?」

「うん、二人で一緒にやってるっていうのはどう?」

演習か?

電もやるかな?

「電もやるか?」

「え、いいのです?」

「おう、行ってこい!」

「なのです!」

そんな感じで演習の予定を立てていると突然の爆音と衝撃波が鎮守府を襲ってきた。

「何だ!?!」

「わ、わかりません・・・て、敵襲・・・?」

「クソ!電、どこから攻撃されたか分かるか?」

「わ、分からないのです!」

「・・・距離20km、対水上目標6」

「ア、アーレイバーク・・・?」

「すみません、盾の役目を果たすといったのですが探知が遅れました」
強襲か・・・この戦力は少ない・・・戦艦が来たら最悪だ。

・・・普通の鎮守府ならな。

「アーレイバーク、吹雪、お前らは迎撃に向かえ、指揮は俺が取る」
て、提督!?!」

「大丈夫、状況には慣れてる」

「わ、私はどうすれば・・・」

「電の艦装がまだだ。ここで補佐を」

「なのです!」

「わ、私は・・・」

「そこで見て学べ、強襲時の反撃だ!」

飛び出していった二人に無線をつなげる。

「聞こえるか?」

〈はい!〉

〈聞こえます〉

「よし、楽しい狩りの始まりだ。アーレイバーク、目標への攻撃は主砲のみで行え、戦艦相手ならミサイルも許可」

〈了解〉

ついでに横須賀にも無線を繋げる。

「アンドロメダ聞こえるか？」

〈あ、隊長、はい聞こえます〉

「例の斧準備して、いつものヤツ」

〈どうかなさったんですか？〉

「呉が強襲されてるんだ。いつでも使えるように」

〈了解！〉

さて、こつちも準備OKと

「敵は確認できるか？」

〈えっと・・・駆逐3・・・軽巡1・・・戦艦・・・2!?〉

「お・・・やっぱり出てきたか・・・よし、二人とも戦艦以外をやれ、戦艦は任せろ」

〈え!?で、でもどうやって・・・〉

「へっへっへ・・・」

「司令官・・・ゲスい笑いになってるのです・・・」

うっ・・・まあ気にしないようにしよう・・・

「アンドロメダ、準備は？」

〈できました！座標入力よし！〉

「それじゃ・・・」

ヤツら腰抜かすぜ！

「トマホーク、攻撃始め!!」

〈発射!!〉

横須賀からトマホークミサイルを発射してやったぜ！

ふははは!!海のもずk・・・違うや、藻屑となって沈むが良い!

てか、よく見たら天音提督、頭抱えて安全姿勢とつとるやん・・・

「吹雪、敵艦隊は？」

〈何とか駆逐艦は・・・でも・・・〉

「どうした?」

〈軽巡が逃げ回っててなかなか砲撃が・・・〉

「ふむ・・・」

ここうなったら・・・

盾にセットでついでに矛を使いますかな

「アーレイバーク、SSM用意」

〈SSM発射用意〉

「天音提督、資源ちよつと食うけど俺のここから送ってるから心配すんなよ」

「は、え?」

「ハーブーン発射始め!」

〈ハーブーン発射!〉

白い尾を引くハーブーンは目標の軽巡に迷い無く突っ込んだ。

あとは戦艦か・・・

「着弾まで・・・あと20分・・・」

「ど、どうするんです・・・?」

「ああ、艦隊は帰投させよう」

「え!?でも・・・まだ敵艦が・・・!」

「ああ、トマホークが飛んできてるから大丈夫」

「で、でも通常兵器は・・・」

「あ、それな、俺らのはアメリカ軍から直輸入の対深海棲艦用のだから」

まあアメリカは艦娘というか既存の兵器を対深海用にしただけだから攻撃能力が高くても的がでかいからねえ・・・

妖精さんアメリカンサイズですし

「提督、とりあえず忠告しとくが・・・アーレイバークにあまり武器使わすなよ・・・?」

「え、何ですか?」

「あれな・・・主砲はそんなにコスト掛からないけどミサイルがな・・・」

「そんなに掛かるんですか?」

「そうだな・・・今の君の鎮守府で一発でも撃つと資源全部持っていかれて君のお財布から1億円くらい飛んでいく」

「フアツ!？」

「そういうわけだから俺のところに連絡してくれば資源くらい輸送してやるから・・・ただし、マジで決戦以外撃たせるなよ・・・?」

「りよ、了解です・・・」

そんなことしてると・・・

「あ、二人とも戻ってきたのです!」

「お、そうか!電は出迎えに行くか?」

「んと・・・いいですか?」

「おう!行つてこい!」

「なのです!」

電は嬉しそうに外に出て行く。

その10秒後くらいに遠方で大爆発が起きた。

トマホーク2発の曳火射撃+直撃弾2発をぶち込んでやったからな・・・体残つてたらしいね(震え声)

「提督、今日の晩飯とかどうするんだ?」

「あ、考えてなかった・・・」

「皆で買い物でも行くか。まだ3時過ぎだしな」

「そうですね・・・」

「よし!イージス建造記念に俺が飯奢つてやる!」

「ええええええ!!?いいいいいですよおお!!!」

「いいじゃないの、可愛い後輩に飯奢るのも先輩の役目だつて!」

建造ALL999を強要するのも役目です(ゲス顔)

そんな色々あった出張一日目。

出張一日目の夜

「さて、晩飯どうするよ」

「司令官さん、お鍋がしたいのです」

「あ、私も！」

「んじゃ鍋しようか！」

そんな話しているとアーレイバークが

「お鍋……ですか……？えつと……変なこと聞くようなのですが日本人は鉄の鍋を食べる文化が……？」

「え……」

「あ、あの……すみません、まだよく分かってなくて……」

「え、えつとねアーレイバーク、鍋って言うのは野菜とかお肉を一つの鍋で煮てそれを皆で囲んでわいわい食べる料理にことを言うんだよ」

「えつと……提督、それはつまりバーベキューのようなものですか？」

「うん、それに近いかも」

「なるほど……」

「とりあえずスーパーでも行くか、今日は俺が材料費出してやるぜ！」
「で、でもそんな……」

天音提督はものすごく申し訳なさそうだが可愛い後輩に飯を奢るのは先輩の役目だぜ！

そんなわけでみんなですーパーに向かう

「あの……大佐」

「ん？」

「大佐の前歴ってアメリカ軍だったんですよね？」

「おう、正確にはアメリカ海軍だがな。あとはウステイオ共和国空軍の外国人傭兵部隊だな」

「すごいですね……私は高校を出たときにお父さんに海軍に入ること薦められちゃって……」

「あれ、入ったばつかなのか？」

「はい……」

「ん……？階級おかしくね……？」

「そ、それが・・・何故かいきなり提督になることになって・・・それから特別措置に階級も・・・」

「あく・・・」

「ですから、年上の方に敬語使われるのが・・・」

あく・・・まあしやーない。

階級が階級だからねえ

「お、そろそろスープパー着くな」

ふと後ろを見ると電はもう吹雪やアーレイバークと打ち解けていた。

仲いいなく

「とりあえず何鍋にするかな・・・」

「そうですね・・・私は海鮮寄せ鍋が食べたいです！」

「あ、私もそれがいいのです！」

「私も海鮮に一票で！」

「えっと・・・私は・・・」

アーレイバークは鍋がどんなものなのか理解してないようなので・・・説明してやるか

「種類が分からないのか？」

「はい・・・恥ずかしながら・・・」

「んく・・・簡単に言うとう寄せ鍋はスープに味がついてる直ぐに食べれる鍋で水炊きって言うのが文字どうり水で炊いた鍋だからポン酢とか調味料につけて食べるんだよ」

「なるほど・・・でしたら私も寄せ鍋をお願いします」

「んじや今日は寄せ鍋だな」

ポケットマネーはこの前の強襲作戦でたんまり報酬もらったから

懐が暖かいぜ！

「お！蟹発見！買うしかねえ!!」

「し、司令官さん！無駄遣いはダメなのです！」

「えく・・・」

「もう・・・お金は私が管理するのです！」

「か、勘弁してくれよ母ちゃん・・・」

「だ、誰が母ちゃんですか!」

なんてやり取りしていると・・・

「ふふ・・・さすがケツコンした仲だね」

「そうですね・・・司令官も早くお相手探さないと」

「へへん、私のお相手は直ぐ近くにいるもん」

「え、誰のことですか?」

ちよつとしたアピールしてるのに吹雪はまったく気づいていない。

「うええええん・・・」

「し、司令官!? な、泣かないでください! もう・・・どうしたんですか?」

頭を撫でてもらっていた。

・・・おい今口元がニヤついてたぞコイツ

「とりあえず何の魚入れるかな」

「んく・・・鮭と・・・鯛はどうなのですか?」

「鯛か・・・鰯も欲しいな」

「あとは魚の団子とかですね」

「そうだな、あとシメのうどんも買わないと」

そんなわけで色々カートに放り込んでいく。

・・・蟹買い過ぎたかも・・・

でも皆力ニ好きだろ! でもアレルギーあつたらごめんね!!

「さて、こんだだけ買ったらいいだろ。帰ろうか」

「なのです!」

そんなことしていると一本の電話が・・・

「ん? はいもしもし」

〈あ、隊長!〉

「ん? ケストレルか?」

〈そうだけど・・・その呉を襲ったヤツらの泊地を発見したよ〉

「お手柄だな。それで?」

〈その・・・新しく部隊を編成してるみたい、こっちはいつでも出れるけど・・・〉

「いや、今回は出撃しなくていい。アンドロメダに代わってくれ」

〈へうん、アンドロメダ？隊長からだよ〉

〈へはい、代わりました〉

「おっし、さつきと同じ要領で攻撃だ、今回はICBMだ」
〈弾頭は？〉

「サーモバリック、ヤツらの泊地を石器時代に戻してやれ!!」
〈了解!〉

「攻撃のタイミングは任せる」

そういつて電話を切った。

でもこれで鎮守府の弾道弾が残弾ゼロ、トマホークミサイルも残り
数発しかない。もともと決戦と自衛用に取り付けただけだからな…

ハープーンは10発ほどあったと思うけど…

まあウチは対空兵装を充実させてるからね。仕方ないね。

「今の電話はどうしたのです？」

「ああ、泊地を見つけたらしいから大陸間弾道弾で石器時代に戻して
やっただけだよ」

「お、恐ろしいのです…」

「そうか？」

とりあえず材料も買えたいし戻ろう。

「あの、大佐」

「ん？何だ？」

「明日って何するんです？」

「ん…あんまり考えてないな…まあ…演習でもして…
後は解散！」

「えっ」

「どした？」

「そ、そんなテキストでいいんですか!？」

「いいのいいの」

だつてめんどくせえしい!

てか、それより鎮守府の弾薬補充しとかないと…

「どこに電話かけてるのです？」

「知り合いの武器商だよ」

とりあえず今日使った分は買っておかないと

「もしもしっ？」

〈〈お、まいど！どした？〉〉

「IBMとトマホークを計4発ずつ買いたいんだが・・・」

〈〈オツケー！〉〉

「即日お急ぎ便で」

〈〈・・・いつも言うけどウチはamazonじゃないからな!〉〉

「んなこと言うなよ、古い仲だろ？」

〈〈まあ近いうちに届けるさ〉〉

そういつて電話は切られた。

いつ届くことやら・・・

そんなこんなで鎮守府に帰ってきた。

「ふく・・・ただいま」

「司令官！今日はここで鍋にしませんか？」

「んっ・・・司令室で？」

「はい！」

吹雪は司令室で鍋をやるうと提案していた。

「俺はどこでもかまわんど」

とりあえず食えたらなんでもいい!!

とか言つてるとケータイに一通にメールが入る。

「ん？メール？」

「どうしたのです？」

「んっつと・・・nenohi|love@・・・こ、このアドレスは

もしや・・・」

「し、司令官!?震えだしてどうしたのです!？」

「だだだ大本営の総司令官!?!？」

な、何でいきなり!？」

とりあえず内容が・・・

「えっと・・・重要事項につき電話で伝える。誤送信の可能性もあるため合言葉を言うこと。合言葉は「今日は何の日?」のあとに何か当てはまる言葉が続けること」

・・・なんじゃこりゃ

「大佐？このメールなんですか？」

「あら、お前のところにも来たの？」

「はい・・・」

「？一体どうしたのです？」

「んく・・・ちよつと電話かけて来る」

とりあえずかけるだけかけるか・・・

電話番号入力してつと

「もしもし」

〈〈合言葉を言え「三合会は？」〉〉

「ちよーさいこー！」

ノリで言っただけど何だこれ!!

〈〈あ、ごめん、合言葉間違えた「今日は何の日？」〉〉

「子音だよー！」

〈〈よし、名前を言え〉〉

「はっ、横須賀所属のイーグルアイです」

〈〈ふむ・・・とりあえず緊急作戦だ〉〉

緊急作戦ならメールで言うなよ!!電話かけてこいよ!!

「作戦ですか？」

〈〈ああ・・・数時間前、トラック泊地から救難信号を偵察機が受信した〉〉

「なんで偵察機じゃないと受信できないんすかねえ・・・」

〈〈まあその話はあとだ、トラック泊地が空襲を受けている、動けるものはすべて出撃だ、新米ベテラン例外なしだ!〉〉

そういわれて電話は切られた。

向こうもあせってるのか・・・

「はあ・・・鍋はお預けだな」

そうつぶやき司令室に戻る。

「提督、吹雪、電、アーレイバーク、緊急出撃だ。トラック泊地が空襲を受けている」

「そ、それ本当ですか!？」

「ああ、俺はここで天音提督の艦隊と合同で敵を迎撃する」

「わ、私の艦装は・・・」

「今向かってる」

俺は無線でアンドロメダを呼び出す

「アンドロメダ、聞こえるか?」

〈へはい、もしかしてトラック泊地ですか?〉

「ああ、それだ。いいか、アンドロメダ、シンファクシ、ヴィルヴェル
ヴィントは鎮守府で待機だ」

〈了解しました〉

「それ以外は出撃、敵を迎撃する!」

〈編成は?〉

「一旦すべての艦を呉まで送ってくれ、そこから決める」

〈了解しました、行動開始します!〉

これでこっちは大丈夫・・・

あとは出撃させるのみか・・・

「提督、艦隊を出撃させるんだ」

「え、でも錬度が・・・」

「大丈夫だ、そこに無敵の盾を持ったヤツがいるだろ」

するとアーレイバークは「?」って顔をしていた

「無理は言わない、損害を受けたらすぐに撤退しろ」

「りよ、了解です!」

出張一日目からコレか・・・

とにかくトラックは守らないと・・・

今は鎮守府の兵装がハーブーンと対空ミサイル、CIWSしか残っ
ていない。

先制攻撃を加えれないのが残念だな・・・

とりあえずとんだ出張だった

対潜哨戒任務

緊急指令が発動された翌日の朝。

俺の艦娘と艦装が呉に到着し始めた。

「提督、俺たちは比較的難易度の低い丙作戦を実行し敵を迎撃する」

「は、はい！」

「実戦は初めてか？」

「はい・・・」

「じゃあこれが初陣だ」

「が、がんばります！」

「よし！みんなを集めろ！作戦を練るぞ！」

そういうと天音提督は走っていった

「とりあえず衛星からの情報だと・・・」

「んん・・・潜水艦が多いみたいです」

「電は対潜戦闘得意か？」

「潜水艦は苦手なのです・・・」

「まあ・・・みんなのトラウマだしなあ・・・」

そんなやり取りをしていると艦娘たちが集まってきた。

「よし！みんな集まったな！今回の作戦は対潜哨戒任務だ」

そういつてスクリーンに海図を表示する

「この海域には潜水艦が大量にいる。これをまずは叩く！」

するとちらほら手があがり・・・

「あの・・・編成は・・・」

「今回の編成は天音提督のところと合同で行う。編成は吹雪、アーレイバーク、五十鈴、由良の四隻で行う」

「4隻で大丈夫かしら」

「大丈夫だ、そこにイージスが一人いる。その情報に従い存分に狩ってこい！」

するとその狩って来いという言葉に反応した由良と五十鈴が・・・

「久々の狩りじゃ・・・」

「狩りじゃ・・・」

「私たちのブツは時々危険よお・・・？」

気のせいだろうか、目が光ってた。青色に。

・・・ストレス溜まってたのかなあ・・・

「よし、これより作戦を開始する！対潜哨戒が終了の後出撃する艦隊を発表する。電、ケストレル、金剛、榛名、千代田、羽黒。この六人だ」

「わ、私も!？」

「ん？不満？」

「い、いや・・・不満とかじゃなくて・・・」

ケストレルは久々の出撃だからか喜んでいるっぽい

「それじゃ全艦出撃！」

まあ・・・初戦は五十鈴と由良が片付けてくれるだろう。アーレイバークもいるしな！

くアーレイバークく

初任務か・・・緊張する・・・けど私は戦闘艦。戦うのが指名だ。がんばろう

「アーレイ・・・バークだっけ？どういう船なのかしら？」

「私は俗に言うイージス艦です」

「へえ・・・うちの提督はイージスは持ってないわねえ・・・」

五十鈴や由良は興味深そうに艦装を見ってくる。

私は逆にその二次大戦の艦装が気になる。

私達、現代艦艇の先輩だからね

「・・・ソナーに感あり・・・」

「ナイス！どこ？」

「4時方向・・・距離・・・待ってください・・・魚雷推進音！こつちに突っ込んできます！」

「どどどどどどうしましょう!？」

吹雪は慌てまくっている。

「向こうが上手ね・・・回避運動！」

「魚雷・・・3時方向より接近！雷速30！」

「真横ね・・・総員最大戦速！避けきるわよ！」

「続きます！」

五十鈴と由良は増速をはじめ。

吹雪と私も急いでそれについて行く。

「潜水艦は見つけた？」

「見つけました！距離200・・・深度10！」

「了解！爆雷投射！」

「撃てー！」

吹雪や五十鈴、由良は爆雷を投射し始めるが・・・

私は爆雷を持ってない。ていうか使ったこともない。

とりあえず短魚雷でどうかしなきゃ・・・

「Mk. 32・・・敵潜をロック・・・発射はじめ!!」

足の魚雷発射管から短魚雷を2発発射する。

「ちよつとアーレイバーク！潜水艦相手に魚雷撃ってる場合じゃないでしょー！」

「これは・・・その・・・短魚雷といって対潜水艦用にも使える魚雷なんです」

「でも・・・魚雷じゃ潜水艦は・・・」

吹雪がそう言ってる最中にその短魚雷は命中した。

大きな水柱が上がる。

「命中・・・」

「へえ・・・すごいね」

そういう五十鈴も爆雷を命中させている。

確認できる限り由良、五十鈴ともにほぼ全弾命中だ。

「五十鈴もすごいですね」

「そう？ほめても何も出ないわよ？」

「え、私も結構やったんですけど・・・」

「由良もすごいです」

「それ何かついでみたいじゃないですかー!!」

とりあえず10km先にまだ潜水艦が残ってる。

五十鈴たちは気づいていないが・・・

一応アスロックで攻撃しよう

「提督、アスロックの発射許可願います。発射弾数・・・4発」

〈へんく・・・4発か・・・ちよつと保留〉

「了解」

やはり資材を食うから撃てないのかな

すると無線が入る。

〈一発だけなら許可する。まあ・・・10km先から魚雷飛んできて

しかも追いかけてきたら誰でも撤退するだろ〉

「了解、敵潜をロックオンします」

「今の無線は？」

「提督とです。一発だけ対潜兵装を発射します」

「無駄撃ちはダメよ？」

「いえ、ここから10km先に敵潜が4隻います。それをここから狙い撃ちにします」

「えつと・・・それはミサイルつて兵器？」

「はい。正確には先ほどの短魚雷にロケットブースターを搭載した兵器です。22kmまでなら届きます」

「これ、夕張が見たら発狂するわね」

「明石さんでもすね」

「でもウチの鎮守府明石さんいないじゃない」

「そうですね・・・」

明石・・・？何の話だろ・・・

「あ、ごめん、攻撃をお願いできる？」

「はい。VLA開放・・・アスロック発射・・・始め！」

背中のVLSからアスロックが一本発射される。

一応狙いは潜水艦隊の旗艦だ。

これを沈めれば敵を混乱させれる

「それじゃ進撃するわよー」

方位を2―2―4にあわせる。

「そういえば今日は・・・天気がいいですね」

「そうねえ・・・戦争じゃなければ海水浴したいわ」

「でもまだちよつと寒いです・・・」

「あら、吹雪つて名前なのに寒がりなの？」

「そ、それは名前だけです！寒いのは苦手です・・・」

「あはは！あなたたつて面白いわね！」

「も、もう！からかわないでください！」

仲いいな・・・

そんな事を思っていた。

「対空目標は・・・うん、いないで・・・待ってください、高速の小型目標接近！」

「な、なにそれ!？」

「わかりません・・・でも・・・まさか・・・ミサイル!？」

「ミサイル!?! そんな！アイツら撃てても魚雷じゃ・・・」

「わかりません！目標は海面ストレスを・・・まさか・・・」

ひとつ心当たりがある・・・これは私も持っている・・・

この動きをするのは・・・

「ESSM探知・・・目標ハーブーン！」

「ハーブーン？それって鯨狩用の・・・」

「対艦ミサイルです！早く逃げて!!迎撃は私が・・・!」

急いでロックオンする。

ハーブーン自体は比較的低速なのでロックオン自体は問題ない。

ただ海面ストレスを飛行するのでいつレーダーから消えるかわからない。

「ロックオン・・・よし・・・!」

「距離はどれくらいなの!？」

「距離は約10km先から・・・まさか潜水艦!？」

何で・・・あいつ等は魚雷しかないって・・・

「考えてる場合じゃない・・・シースパロー発射用意・・・よし!」

「撃ち落せるの!？」

「わかりません・・・でも・・・私は盾なんです！絶対に護りきります!」

「その言葉信じるわよ！」

「任せて下さい！後部VLS・・・シースパロー発射！SALVO！」
艦装の後ろの脇にあるVLSから2発のシースパローが発射される。

「チャフ散布始め・・・！主砲、CIWS攻撃準備・・・！」

私は艦隊が覆われるようにチャフをばら撒く。

シースパローが外れた場合に備えて主砲とCIWSも準備しておく。

「・・・きれい・・・」

吹雪が空中に舞うチャフを見てつぶやく。

太陽光を反射するそれはダイヤモンドダストみたいだ。

「インターセプト5秒前・・・スタンバイ・・・」

命中まであと少し・・・お願い当たって・・・！

そう祈りをこめる。

「マークインターセプト・・・！」

その瞬間レーダーからハープーンとシースパローの反応が消失する。

命中だ。

「目標撃墜・・・！やりました！！」

「すごいすごい！やるじゃない！！」

「さすが・・・イージス艦ですね」

「かっこいい・・・」

私に抱きつく勢いでみんながこっちにくる。

・・・だけど今抱きつかれると衝突なんだよなあ・・・

でも・・・護りきれた。

それと水中の爆発音が聞こえた。それに敵の沈む音も・・・

敵は撤退するだろう。

あとは対空警戒を頑張ろう。

「ふう・・・今度こそ大丈夫・・・え・・・」

「どうしたの？」

「そんな・・・もう一発・・・!？」

「え!!」

「ま、まだ一発残ってます!」

海面スレスレを飛んでいたのがレーダーに映っていないなかったよう
だ

「狙いは．．．い、五十鈴逃げて!!」

「え、わ、私!」

「ハーブーンはあなたを狙ってます!逃げて!!早く!!」

「わ、わかつてるわよ!!」

五十鈴は飛んできてる方向に向けて砲弾や機銃弾をばら撒く。

「見えたわ．．．!遅い!全然遅い!!」

太陽光をキラキラと反射させながら五十鈴の側面からミサイルは
迫ってきていた。

五十鈴はそれに向かって撃ちまくるが．．．

「え．．．!?!きゅ、急上昇!」

「ホップアップ．．．!もうシースパローは間に合わない．．．主砲、
撃ちかた始め!」

速射砲で弾幕を張る。

お願い．．．落ちて!!

「もう!!主砲の射角外じゃないの!!機銃撃ちまくって!!」

曳航弾が空中にばら撒かれる。

しかしあたらな．．．

そして弾幕をくぐりぬけ最後のCIWSの射程に入った。

「CIWS撃ちかた始め!!」

ものすごい轟音とともに毎秒50発で20mm弾をばら撒く
落ちて．．．落ちて．．．落ちて!!

しかし命中しない

「チャフは．．．再装填中．．．!?!そんな．．．!!」

そして．．．

「キャアアアアア!!!」

ミサイルが五十鈴を直撃する。

．．．．．そんな．．．

「い、五十鈴さんが大破!!」

「うっ・・・ま、だ・・・大丈夫・・・」

「五十鈴さん・・・!怪我が・・・!」

「大丈夫よ・・・吹雪・・・対空見張りを・・・敵として・・・」

「で、でも!!」

「いい・・・から・・・」

明らかに轟沈寸前だ。

「私の・・・私のせいだ・・・あの時・・・チャフをばら撒くから・・・」

「落ち着いて!!あなたのせいじゃない!!」

「でも・・・でも・・・」

私はパニックになっていた。

何が・・・何が盾の役目だ。何がイージスシステムだ。

旗艦一隻護りきれない盾がどこにいる。

「五十鈴・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「!」

「もう・・・あやまら、ない・・・で・・・」

「五十鈴さん!今から曳航して撤退します!指揮は私が!!」

由良が指揮を引き継ぎ撤退を行う。

五十鈴は辛うじて浮いている状態だ。

「五十鈴さん!頑張つて!!機関部が大破してるだけです!」

「弾薬庫が・・・無事なの・・・は・・・知ってるわよ・・・」

「もうしゃべらないで!!吹雪ちゃん!手伝つて!!」

「私は・・・私は・・・」

「アーレイバーク!!自分ばかり責めないで!!撤退するの!」

「でも・・・私のせいで・・・五十鈴が・・・」

そこから先はうまく覚えていない。

五十鈴は大破・・・轟沈は避けられたが・・・

吹雪の話によると鎮守府に帰るまでずっと自分を責め続けていた

らしい。

今は医務室で五十鈴のお見舞いに来た。

「五十鈴・・・大丈夫ですか・・・?」

「もう・・・それ何回目？大丈夫よ」

「私のせいで・・・」

「あなたは報告をくれた。それで私が少し動いたおかげで弾薬庫誘爆が避けられたのよ？むしろ私は感謝してるわ」

「でも・・・」

「でもじゃない！イーグス艦がめそめそしててどうするの！」

「・・・ごめんなさい・・・」

そんな話をしているとイーグルアイ提督が入ってきた。

「お、またお見舞いか？お前もご苦労だな。まあ・・・初戦で旗艦大破はショックだったな」

「提督・・・ごめんなさい・・・私が・・・もっと早く気づいてれば・・・」
「んな事気にすんなっての。一発迎撃できたんだ。二発とも命中してたら五十鈴はここに帰ってこれなかったんだぞ？」

「ごめん提督、想像して鳥肌たったわ」

「あ、ごめん、お前のこと忘れてた」

「あんたそれでも提督!?てか、何で私のお見舞いにこの子来てるのに私が不在っておかしいでしょ!!」

「え、いつものことじゃね？」

「いつものことって何だこの童貞提督!!」

「はあ!?おまつ！童貞ってどういうことだゴルアアアア!!」

「そのまんまでしょーが!!!このチ○カスがあああ!!!」

「んだとワレえええええ!!!」

「やんのかオルアアア!!!」

そのやり取りを見てると・・・なぜか心がほっとした気がする。

「あ・・・」

「お前は黙ってるおおお!!!」

「アンタは黙ってるおおお!!!」

「えええええええ・・・」

でも・・・少し気分が軽くなった気がする。

私はそんな喧嘩が巻き起こってる医務室から出た。

敵の潜水艦を発見！

敵潜から対艦ミサイルか・・・カ級かヨ級から発射されたとは考えにくい・・・

すでに第二艦隊が攻略を始めている。

付近に敵潜水艦の影がないのが救いか・・・

「提督、ハーブーンはどこから発射されたと思う？」

「ハ・・・ハーブーン・・・？」

うわあ・・・すごい何それおいしいの？って顔してる・・・

「まあ・・・その・・・なんだ？ミサイルだ」

「て、敵はミサイル持ってんですか!？」

「さつきからそう言ってるじゃん!!」

「名前知りませんもん！」

「うん・・・まあいいや・・・てか俺らもミサイル持ってるしな・・・敵が持つててもおかしくないよ」

「そうですね・・・その・・・ハーブーンってどれくらいの威力なんですか？」

「そうだな・・・あの五十鈴は改修値MAXだったのに一撃で大破、轟沈寸前まで追い込まれた。つまり軽巡クラスまでなら一撃だ」

「せ、戦艦は・・・」

「現実でも戦艦に向けてハーブーンを撃ち込んだことも撃ち込まれたこともないからどうとも言えないな・・・ただ直撃すればただじやすまな」

「どうしましょう・・・」

「お前のところにはイージスがいる。アイツは対艦ミサイル程度なら簡単に叩き落とせるさ」

「でも・・・」

「あれは経験が少なかったせいだ。責めてやるなよ」

「そ、そんなつもりは！」

「まあ慰めてやれ、だいぶショック受けてるからな」

「はい・・・」

とりあえず対艦ミサイルはやつかいだな・・・ケストレルたちが無事だといいが・・・

くケストレルく

敵潜・・・対艦ミサイル・・・やだなあ・・・トラウマだよ・・・

「Heyケストレル！浮かない顔してどうしたネ？」

「あ、いえ・・・ちよつと昔のことを・・・」

「今はそんな事を思い出しちゃダメネ！」

そんな事言われたつてなあ・・・

「・・・彩雲より入電・・・付近に敵影無し・・・だそうです」

「んくつと・・・千代田さん、その情報ちよつと修正、ホークアイがレ——ダーで敵艦多数確認」

「さすがですね」

「えへへ・・・」

私の艦載機は世界一イイイ！とか言いたいけど今回は戦闘機以外はレシプロ機積んでるんだよなあ・・・

F-14Dに流星・・・あとは彗星だったかな

「距離はわかりますか？」

「えつと・・・約・・・100km以上先です」

「うくん・・・射程圏外ネ・・・」

「・・・千代田さん？」

「うん、分かってるわよ」

「空母の本領発揮しましょう！」

千代田さんのを操り人形のようなものが入った箱から続々と艦載機が上がる。

なんだかちよつと面白い構造だなあ・・・

「・・・第一次攻撃隊、発艦開始よ！」

「カタパルト圧力上昇・・・全艦載機発艦はじめ！」

5機の烈風が千代田さんから発進する。

私は肩の飛行甲板から続々とF-14Dが発艦して千代田さんの

艦載機を追い抜く。

「みんな・・・帰ってきてね」

「よし！総員戦闘よーい！この海域の旗艦やっつけるネ！」

金剛さんの合図で増速する。

天候は快晴・・・あつちもこつちも見通しが利くから派手なことはしたくないな・・・

「ねえケストレルさん」

「ん？何ですか？」

千代田さんが飛び立っていく艦載機を見ながら話しかけてきた。

「ジェット戦闘機・・・って私とお姉でも扱えるかな・・・」

「ん・・・カタパルトがないと難しいかも・・・」

「提督に相談してみるわ！」

「やめてあげて」

隊長が禿げそう。

たぶん・・・可愛い艦娘のためなら！とか言ってやるけど開発できなくて禿げる未来が見える。

「・・・金剛さん、対水上レーダーに感あり！距離・・・えつと・・・30km!？」

「どうしたネ？」

「そんな・・・こんなに近くにいるのに気づかないなんて・・・」

まさか・・・海中に潜んでた・・・？

そんなことより早く艦載機を引き返させないと！

「ケストレル！着弾観測よろしくネ！」

「え・・・でも主砲は・・・」

「問題ナツシング！私の主砲は35kmまで届きます！」

「・・・了解！」

ホークアイと私のレーダーシステムをリンクさせる。

「金剛さん！いつでも大丈夫です！」

「OK！」

主砲が敵艦隊のいるであろう方向に向けられる。

艦載機たちのほうは続々と戦果を挙げていく

「第一第二主砲！ファイアー！！」

ものすごい轟音とともに砲弾が撃ちだされる。

私のレーダーにも砲弾が4発表示される。

狙いは敵の艦隊旗艦だ。

情報を見る限りでは本隊なのかな・・・

とにかくトラックを空襲してる空母を沈めないと・・・

「5・・・4・・・3・・・2・・・弾着！」

その瞬間レーダーから一隻だけ表示が消える。

撃沈だ。

「命中！一隻沈めました！」

「え・・・そ、それ本当ですか・・・？」

当たった本人がめちやくちや動揺してる。

まあ・・・30km先の目標ですからねえ・・・

「目標・・・敵旗艦ヲ級撃沈！！」

「What's!?!」

「金剛さん！やりました！あとは周りを！」

「オ、OKネ！」

ちなみに近くの機からの報告によると、3発は敵より離れて落ちたけどなぜか一発だけ敵の艦載機発着口に吸い込まれたらしい。

運良すぎイ！

「もう一回・・・全砲門！ファイアー！」

今度は8発発射される。

さて、私はこつちに来てる敵艦載機を落とすかな

「ねえ隊長、敵機相手にシースパロー撃っちゃっていい？」

「へへ・・・まあ・・・ほどほどなら・・・」

「了解！」

とりあえず千代田に向かっている2機をロックオンする。

「千代田さん、2機そつちに向かってます！」

「え!?ちよ、早く言ってますよ！」

「大丈夫・・・迎撃します！念のため回避行動を！」

「たった一隻の空母でどうするのよ！艦載機居ないでしょ！」

「私が現代艦って忘れちゃった?」

「忘れるわk・・・忘れてました」

「お、おう」

とりあえず射程に入ったので攻撃を始めよう。

自衛用だからあんまり弾薬ないけど・・・

「シースパロー発射始め!!」

甲板型の艦装についているランチャーから爪楊枝程度の大きさのシースパローが発射されるがある程度飛ぶと突然光り、大きさがその10倍以上になる。

何だろうねこの謎技術。

ま、いつか。

「とりあえず千代田さんに向かつてるのは大丈夫かな・・・」

ふとレーダーを確認すると金剛さんに向かつている高速の小型目標があった。

「え・・・何これ・・・」

たまにレーダーから消えるのを見るとかなり低空・・・水面ギリギリなんだろう。

・・・この機動って・・・

「艦載機!金剛さんに向かつてる物体が見える?!!」

「へえつと・・・煙を吐いてる・・・ロケット?<>」

「まさか・・・!!」

ついさつき五十鈴さんが大破したソレだ。

「金剛さん!逃げて!!ハープーンが!!」

「ハープーン?それって何ネ?」

「艦対艦ミサイルです!!さつきそれで五十鈴さんが・・・!」

「What, s!?!分かったネ!」

金剛さんは砲撃をやめ、転進する。

いま迎撃できるのは私だけ・・・やらないと!!

「金剛さん!私が守ります!」

「でも・・・」

「信じてください!なんとしても・・・」

増速して金剛さんとミサイルの射線内に入る。

・・・最後は・・・私が盾になっても！

「シースパロー発射!!SALVO!!」

2発のミサイルをハーブーンに向けて発射する。

たぶん・・・相手は二発以上発射してる・・・

「榛名さん！金剛さんを引き継いで砲撃してください！電ちゃんは対空警戒を！」

「分かりました！」

「なのです！」

「あ、あの・・・私は・・・」

「航空機の迎撃を・・・私の艦載機は今残弾ゼロで帰還中です！」

「了解です！」

対空目標が多すぎる・・・

「私にイージスシステムさえあれば・・・」

「電の本気を見るのです！」

「全砲門開いてください!!」

「主砲！砲撃開始!!」

各艦が攻撃を開始する。

電ちゃんと羽黒さんは速度の高いおかげもあり次々敵機を落とすていく。

榛名さんも三式弾や榴弾で艦載機や敵艦隊を攻撃していく。

「インターセプト五秒前・・・スタンバイ・・・」

「ケストレル！状況はどうネ!？」

「マークインターセプト・・・撃墜!!」

「ナイス！」

「油断しないで！まだ残ってると思います!!」

まさか一発だけなんて事はないだろう

それこそ目標を変えて突っ込んでくる可能性だって・・・

そのときまたレーダーに小型目標が表示される。

・・・本当にすぐ目の前で

「やっぱり残ってた・・・フアランクス、撃ち方始め!!」

轟音とともに機銃弾をばら撒く。

当たって・・・!

「ケストレル!もういいネ!逃げて!!」

「嫌です!!撃ち落します!!」

そしてミサイルは羽黒と電の間を通り抜けすぐ目の前に到達した・・・

また・・・食らっちゃうのかな・・・

あのとときの記憶が蘇ってくる。

「ケストレル!!!」

金剛さんが大声で叫ぶ。

でも・・・護れるならいいよね・・・

と思った瞬間、目と鼻の先で大爆発を起こす。

「キャツ!!」

ものすごい衝撃波と熱風・・・直撃ではないが・・・至近弾だ。

フアランクスがギリギリのところまで迎撃したようだった。

だが至近弾のせいで私は中破・・・カタパルトが破損してしまった。

「ケストレル!大丈夫ネ!」

「大丈夫・・・でもカタパルトが破損・・・」

「ケストレルさん・・・中破してるのです!!」

「大丈夫だから・・・私にかまわず敵を沈めて・・・」

私の損害は全体的には中破だが、飛行甲板そのものは小破、あとはCIWSとミサイルランチャーが破損したくらいだ。

「あれ・・・ああ・・・レーダーが消えた・・・」

レーダーも破損したみたい・・・

でも偵察機はまだ生きてるので状況はまだ分かる。

「榛名さん・・・敵は撤退を開始・・・成功です」
体の節々が痛い。

・・・昔の艦みたいに装甲ないもんなあ・・・

直撃しなくてよかった・・・

「ケストレルさん・・・痛いところないですか?」

「うん・・・ちよつと節々が痛いけど・・・大丈夫だよ」

とりあえず機関は無事・・・あとは艦載機を拾って帰ろう・・・

「艦隊・・・帰還するのです!」

「ケストレル、ありがとうネ」

「いえ・・・金剛さんに被害がなくてよかったです」

「もう・・・あんな無茶しないで欲しいネ・・・」

金剛さんは少し涙声だった。

「仲間は失いたくないヨ」

「すみません・・・」

「ケストレルは悪くない、私をちゃんと護ってくれた、自分に自信持つネ!」

そのまま帰るまで金剛さんと話していた。

・・・榛名さんが少しぐぬぬ・・・みたいな顔してたけど・・・

く提督く

「艦隊がお戻りなのです!」

「おかえり!ケストレルは大丈夫か?」

「はい!なんとか・・・」

「はあ・・・良かった・・・」

「あの・・・司令官さん、ハープーンって何なのですか?」

「んく・・・そうだな、みんな分からずに理解まで時間かかってたようだし説明するか・・・動けそうな者は司令室に集めてくれるかな」

「なのです!」

電は早足で司令室をでる。

「あの・・・提督」

「ん?どした?」

「あの・・・ハープーンって何ですか?」

「・・・お前もかいいいいいい!!!」

「(ぎんぎん)ごめんなさいいいいいい!!!」

何で!?あんた提督だろ!?何で兵器の名称わかんないの!?

「はあ・・・まああとで説明するよ・・・どこから発射されたかと敵も分かったからね」

そして続々と集まってくる。

そのときちようど呉に寄港していた式風も司令室に来た。

「何でお前いるんだよ・・・」

「いや・・・そと散歩してたら電ちゃんに話しかけられて・・・」

「お、おう・・・てかお前のところで被害は？」

「被害？なんの話だ？てか、そもそもなんでこんなに・・・」

「あ、事情知らないのね・・・」

「・・・すみません」

「まあいい。じゃあこの映像を見てくれ」

スクリーンにアーレイバークがつけていたカメラの映像が出る。

「まあそこにいる式風以外は知っているかも知れないが・・・敵はハーブーンを所持している」

「ハ、ハーブーン!?!ミサイルじゃないか!!」

「そうだ、敵からミサイル攻撃があり五十鈴、ケストレルが被害を受けた」

映像には接近するハーブーンにファランクスを撃っている所が映し出される。

ハーブーンもきっちり映っている。

「・・・ちよつと待ってこの子見覚えあるんだけど」

式風がミサイルじゃないほうを見て驚いている。

「アーレイバークのことか？」

「・・・なんているの?」

「その天音提督が建造したら出てきた」

「・・・何で」

「知るか!!」

知ってるなら教えてほしいくらいだ。

「とにかく話を戻そう。この戦闘で一発は撃墜できた・・・が、もう一発が五十鈴に直撃した」

「っ・・・」

「大丈夫だ、別にお前を責めてるわけじゃない」

アーレイバークが悔しそうな顔をして俯いていた。

「それと・・・もう一回、ケストレルのとき」

これはレーダーの映像と一緒に表示された。

「この映像から見ると・・・かなり近距離で発射されている・・・最低でも10km」

レーダーにはいきなりミサイルが表示されていた。

これはたぶん、発射した瞬間だろう。

「そしていったんレーダーから消える・・・これは海面スレスレを飛行してるせいだ」

そして数秒後再び表示される。

「まあ、何でハープーンって断定できるんだって言う理由はこの動きだな。海面スレスレを飛んでホップアップ・・・」

「・・・」

みんな黙り込んで画面を見ている。

「それでこれが衛星から偶然とれた映像だ」

そこには発射の瞬間が映し出されていた。

そして見たことない敵の姿も・・・

「こいつはたぶん新型だ」

するとアーレイバークが・・・

「そんな・・・ソイツは私が沈めたはずです!!」

「ああ、あとで確認したがソイツの周りにいた護衛潜水艦だった」

「・・・そんな」

「それでそこから逃げて俺たちの艦隊を狙った・・・ただほかの艦隊から被害報告がないのを見るとこいつはたぶん一隻だけだ」

沈めてしまえばこつちのものなんだがなあ・・・

「それで、ちやうど補給の瞬間を2回ほど収めれたんだが・・・弾薬しか補給していない」

「弾薬だけ・・・？燃料補給は・・・」

「確認できない・・・それにアメリカに拘留されてる深海提督の話によると新型潜水艦を建造したらしい。ただ、コストがやたら高いから一隻だけだ」

「新型潜水艦・・・」

「それと・・・この前の核の話・・・あれが絡んでくる」

画面にとある機関の画像を表示する。

「これは在りし日のとある潜水艦の機関だが・・・なんだと思う？」

現代艦娘以外は？という顔をしていた。

「まさか・・・」

アーレイバークとケストレルは気づいたようだ。

「・・・原子炉・・・」

「そういうことだ。ヤツら、これに通常弾頭だが長距離ミサイルも積んでやがる」

つまり・・・

「つまり・・・コイツに艦種って・・・」

「・・・戦略原潜だ」

現代艦は哑然としているが・・・

「戦略原潜って・・・なんなのでち？」

「まあ・・・何だ、無限に動ける潜水艦だ」

「せ、潜水艦革命なのね・・・」

伊号の連中は感激していたが・・・

「無限に動けるって事は・・・行動範囲が分からないってことですか!？」

「そうだ。地球全体のどこでもいける」

「そんな・・・」

おまけに駆逐艦や軽巡、軽空母の皆は通常動力の潜水艦しか知らない。
い。

未知の敵だ

「コイツの戦闘能力は姫級だ・・・それでコイツの仮称を原潜棲鬼とする。安直だがな」

「撃沈はどうやったら・・・」

「いや・・・それがだな・・・コイツを撃沈するとちよつと問題が起きるんだ・・・」

「問題って何なのですか？」

「・・・放射能だ」

放射能という言葉に長門と榛名は青ざめる。

「放射能汚染で撃沈した海域は生物が住めなくなってしまう・・・」

「そんな・・・だったらどうやって撃沈すれば・・・」

「・・・それはまだ検討中なんだが・・・一番手っ取り早いのは鹵獲だ・・・」
「む、無茶苦茶・・・」

「それと敵の装備についてだ・・・これを見てくれ」

画像を数枚表示する

「これがヤツの装備だ」

「魚雷以外見たことない・・・」

「まずはこれ・・・五十鈴とケストレルを攻撃した兵器だ」

五十鈴はそれを見て少し青ざめている。

まあ・・・あんなもん突っ込んできたらねえ・・・

「これが、ハーブーンと呼ばれる対艦ミサイルだ。射程は約120kmある」

「ひゃ・・・120!? そんな・・・私達じゃ探知できない・・・」

「そうなる・・・」

現代艦艇なんて持っている提督がこの世に何人いるのか・・・

「式風、次の作戦からはお前が頼む」

「何でだ?」

「コイツをどうにかしないと艦娘たちが全員沈む」

「・・・了解、次の戦闘はどうするんだ」

「俺と天音提督は別作戦に入る・・・米軍の協力を得てな」

「わ、私も!」

「イーjusがいるからな・・・いてくれたほうが心強い」

とりあえず装備説明の続きをやろう。

「装備説明の続きだ、これはまあ皆知っているとおり魚雷だが・・・コイツは誘導魚雷だ。クロの持つてる魚雷より高性能なヤツだ」

「ドイツの技術力の結晶なのになあ・・・」

クロはものすごいしよんぼりしてるが・・・

まあ、仕方ない。

「それとこれは弾道ミサイル、直接的にお前らには関係ないが・・・都市部に向けて発射されると大量の死傷者が出る」

装備はこんなものか・・・皆終始黙り込んでいた。

「あと敵はたぶん俺たちに撃沈されないとヤマを張ってるな」

「?なぜなのですか?」

「さっき言ったとおり、撃沈すると放射能漏れが起きるかもしれない」
そんなことが起きれば制海権の奪還なんて話してる場合じゃなくなる。

「作戦はまた後日立てる。今日は以上!」

全員がばらばらと司令室を出て行く。

残っているのは俺と天音提督とアーレイバーク、吹雪、電だけだ

「原潜か・・・」

はあ・・・とため息が出る。

「なんとかなりますよ、提督」

「なんとかしたいがな・・・放射能漏れを起こさずに撃沈なんて・・・
簡単に鹵獲させてくれるならいいけど・・・」

「鹵獲の場合の作戦は?」

「ん・・・そうだな・・・とりあえずヤツを航行不能に陥らせないと・・・
ただ原子炉に穴あけると大変なことになるんだよなあ・・・」

難しい作戦になる・・・

それより米軍に作戦協力を願おうと思ったがどこに原潜が潜んで
るか分からないから無闇に呼べない。

「はあ・・・」

「司令官さん、ため息ばかりだと幸せ逃げますよ?」

「そうだな・・・」

「とりあえずお部屋に帰るのです!」

そういうわけで電と一緒に部屋に帰る。

・・・なんかどつと疲れた・・・

いろいろありすぎてオマケに毛根死滅しそうな敵に遭遇した作戦
開始1日目だった。

敵の潜水艦を発見！ ↑ 駄目だ！！ ↓

とりあえず電と部屋に帰ってきた。

「……やっぱり横須賀の部屋じゃないと落ち着かない

「司令官さん、さつき話してた戦略……えつとなんでしたっけ」

「ん？戦略原潜か？」

「それってどんな船なのですか？」

「んん……簡単に言うとな無限に動き回れる潜水艦だな」

「無限ってどういうことなのですか？」

「原子炉っていう機関を積んでるから燃料補給がほとんど必要ないんだよ。ただ、メンテナンスとかあるから絶対に無限に行動できるってわけじゃないけど……」

「お、恐ろしいのです……」

だから作戦をどうするかな……

そこらへんに転がってるソナーでは探知できない。

アーレイバークとかのソナーなら可能だが……

「電、次の作戦……お前は出撃したいか？」

「突然どうしたのですか？」

「お前らWW2の艦にとって原子力潜水艦なんて未知の敵だ……できるなら出撃させたくないんだよ」

「……」

「アンドロメダとシンファクシも横須賀からこつちに来てくれていい。だから……」

「そんなに……私は……戦力になりませんか……？」

「いや……戦力にはなる、ただ、対艦ミサイルを瞬時に感知して迎撃行動が取れるか？」

「それは……」

「だから、今回は呉で俺と一緒に指揮をとってくれ」

「あ、横須賀に帰ってわけじゃないのですね」

「……勘違いしてた？」

「……してたのです」

これ勘違い続いてたら喧嘩してたかも・・・
良かった・・・

「とりあえず・・・今日は疲れた・・・」

「ですね・・・私ももう眠いのです・・・」

「そんじや寝るか」

「おやすみなさいなのです」

そういつてキスをしてきた。

あゝ可愛いんじやゝ

そんなわけで翌朝

とりあえず鎮守府に到着したアンドロメダとシンファクシを迎え入れ、敵原潜攻撃部隊を組む。

「よし、今から編成を言うぞ、原潜攻略部隊の旗艦、アンドロメダ。随伴艦をケストレル、シンファクシ、アーレイバーク。この四隻だ」

「四隻でたりますかね・・・」

「正直不安だがな・・・原潜に対する知識があるのはこいつ等しかいないんでな・・・」

何で不安かって言うと言資源の問題でほとんど出撃してないから錬度が・・・

「そんじや、次はその支援艦隊として暁、響、赤城、加賀、金剛、榛名。とりあえずこの原潜攻略部隊に近づく敵を片付けてくれ」

まあ・・・正直この2艦隊しか出動させれないんだよねえ・・・

「よし、準備が出来次第出撃！」

司令室からわらわらと皆が出て行く。

さてと・・・衛星から監視を続けますかな

くアーレイバークく

鎮守府を出発して数時間・・・私はソナーとレーダーをフル活用していた。

ケストレルから艦載機も上がっていく。ただ、艦載機はすべて

ジェット機ではなく、制空戦闘機のみジェット機だった。

アンドロメダからは対潜哨戒ヘリが出動していた。

「敵・・・見つかりますかね」

「分からないけど・・・見つかるといいね」

早く見つけないと・・・

そんな時、ソナーに反応があった

「・・・この音は・・・メインタンク注水音・・・」

「見つけた?」

「はい・・・たぶん・・・」

「あく・・・ソノブイ持つてる対潜哨戒機さえあれば・・・」

ケストレルは少し悔しそうだった。

「音紋分析・・・敵原潜!!」

アンドロメダが敵と判断したようだった。

「けっこう近くね・・・」

「へいつそのことニンバスで海域ごと吹っ飛ばすか」

「はあ!?原子炉も吹っ飛んだらどうすんのよ!!」

「冗談くらい分かれ」

「こんのお・・・」

ケストレルとシンファクシは仲がいいのか悪いのか・・・

「アンドロメダ、どうしますか?アスロックで先制攻撃も・・・」

「いえ・・・この海域の60km範囲内に友軍艦隊がいます!まずは撤退か援護しないと・・・」

「こちら第一支援艦隊、敵艦隊は発見した?」

暁から無線が入る。

敵原潜なら見つけたが、敵艦隊はいないようだった。

「敵原潜は発見、でも艦隊は確認できません」

「私達の出番ないかもしれないわね」

「一応警戒を・・・」

「分かってるわよ!レディーを舐めないでよね!」

元気だなく・・・

その間にアンドロメダは友軍艦との交信をしていた。

「どうですか？」

「・・・ひどい」

「え？」

アンドロメダの顔が少し怒っていた。

「どうしたんですか？」

「・・・あの子たちの提督・・・あの子たちを物みたいに扱ってる・・・撤退したら即解体って・・・」

この前提督が話していた事を思い出した。

ブラック鎮守府・・・

「どうしますか？」

「隊長に指示を仰いで見ます・・・」

アンドロメダは無線をかけ始める。

敵原潜は友軍を補足したがこちらは発見できてないようだった。

友軍の編成は空母2駆逐4という編成だった。

〈第一艦隊および支援艦隊へ、聞こえるか？〉

「はい、聞こえます」

〈まあ、状況は分かってるな・・・俺の言いたいこと分かるか？〉

「まあ・・・隊長の言いたいことなら大体ね」

〈へじゃ・・・全艦に告ぐ、友軍艦隊を保護しろ！〉

「了解！」

進路を友軍艦に合わせて増速する。

本部の意向ではこういったブラック鎮守府の艦艇の保護及び受け

入れは推奨されている。

「敵原潜の深度は分かかりますか？」

「分からない・・・でも・・・魚雷発射管を開いた音が聞こえた」

「ということは・・・」

ハーブーンが準備中だ・・・

私はすぐにスタンダードミサイルに情報を入力、VLSのハッチを開けいつでも撃てるようにする。

あとは味方の防衛に回れるようにすべての火器に火を入れる。

「主砲、短SAM攻撃用意・・・イルミネーターレーザースタンバイ！」

「さてと・・・私もESSMの準備するかな」

私は見逃さないようにレーダーを睨む。

味方の姿が目視できるところまでは近づいてきた。

「敵原潜停止・・・ソナーからロスト・・・」

「攻撃準備か・・・シンファクシ、対潜装備持ってたっけ？」

「ニンバスと・・・ああ、アスロックがあつた」

「ニンバスでミサイル迎撃できる？」

「できないことはないが・・・まあ・・・ロックオンせずに座標上で爆発させるだけだ」

「やれそう？」

「お前に頼まれるのは癪だな」

「・・・私にアスロックあつたら全弾撃つてるわ」

「冗談だ」

仲いいなあ・・・

「・・・どこの所属？」

突然無線が入る。

友軍艦艇だろう

「こちらは横須賀鎮守府所属、情報収集艦アンドロメダです」

「・・・知らない名前」

「付近に敵の新型艦がいます、早く退避を」

しかしここから返事がない。

「聞こえますか？早く退避を」

アンドロメダがもう一度退避勧告をしていると・・・

「そこの艦隊旗艦に告ぐ、ただちにこの海域から離れよ。従わない場合、本隊の作戦行動を妨害するものとして攻撃する」

「はあ!？」

たぶんあの艦隊の提督だろう。

「あんた、こっちは親切に敵新型艦がいるって警告してんのにその言い草はないでしょー!」

「新型艦など確認していない、もう一度警告する、離れろ」

なんだコイツ・・・

心なしか合流した友軍艦の表情が暗い。

疲れのせいかもしれないけど……

〈へどうする？コイツの鎮守府にニンバスぶち込むのもいいぞ〉

「やめよう、罪のない人もいるから」

〈へコラテラルダメージだ〉

「その便利な言葉やめよう?!」

二人がそんな話をしていると……

「……!!敵原潜、ハーブーン発射!!高速で本隊に近づく!!」

レーダーがハーブーンを捕らえた

……最悪なことにもう一発別のミサイルも

「敵潜……弾道ミサイル発射!」

「弾道ミサイル!?!迎撃急いで!」

急がないと……目標はトラックに向かっている。

「弾道ミサイルは……トラックに向かっていきます!」

そのトラックという言葉を聞いた友軍はすこし青ざめた

「どうしたの?」

「そ、そんな……私たちの母港に……?」

トラック所属の艦娘だったようだ。

とにかく迎撃しないと……

「ケストレル!対艦ミサイルをお願いします!私は弾道弾を……」

「わ、わかった!」

急いで情報を入力、ロックオンする。

「SM-3……発射!!」

VLSからスタンダードミサイルを発射する。

「ハーブーン補足……シースパロー発射はじめ!」

ケストレルも迎撃ミサイルを発射する。

今度は絶対に守りきる!

「命中まであとちよつと……!」

ケストレルのシースパローがあとちよつと命中する

「命中!一発撃墜!」

「もう一発います!!」

私のレーダーにはあと1発表示されていた。

「え、どこ?!」

「目標まで……14000!」

「近っ!!」

狙いは……

えっと……この人の名前なんだっけ……

ケストレルはCIWSを準備していた。

その間にデータベースを参照して名前を探す。

トラック艦隊の旗艦……

「飛龍……」

「何?」

こつちを向いた飛龍の顔は疲労の色が出ていた。

目にも光がない……

「飛龍、そつちにミサイルが向かってます……全速で退避を!」

「……無理だよ」

「何で!」

「……もう燃料がない……それに……どうせ逃げれないよ」

「でも……逃げないとー!」

ミサイルは刻一刻と迫ってきている。

私のSM-3は先ほど命中を確認した。

「あのね、撤退すると……みんな解体されちゃうんだ。すぐにしてくれるならまだいいけど……いろいろされて……」

「……そんな……場所を守ろうとしたの……? 私……」

私の中にはものすごい怒りが沸いて来た。

会話を聞いていたケストレルも起こった顔をしている。

「トラックに残ってる艦隊は?」

「たぶん……今はほとんど……みんな出払ってるから……」

なら……トマホークで……

と思ったが一応友軍の司令官、独断で攻撃するわけには行かない。

提督は攻撃を許可してくれるだろうけど、そうなれば提督の立場が危うくなる……

そのときだった・・・

「敵潜・・・弾道ミサイル連続発射!!」

アンドロメダが私に向かって叫んだ。

・・・好都合だ。迎撃するフリをして全弾外してトラック鎮守府を破壊してやる。

私はミサイルに情報を入力、ミサイルを発射する。

〈あのう・・・アーレイバークさん・・・?〉

そのとき突然提督から無線が入る。

〈その・・・できれば撃ちまくるのはやめて欲しいかなあ・・・なんて〉

「ごめんなさい・・・でも・・・迎撃しないと・・・」

〈あゝ・・・まあ・・・しゃーないか〉

そして無線は切られた。

そのとき、CIWSの射程圏内にミサイルが入ってきたのかケストレルが攻撃を開始した。

「今度こそ落とす!!」

側舷に装備された3基のファランクスが弾幕を展開する。

「当たれ・・・当たれ・・・当たれ!!」

すると祈りが通じたのかミサイルは艦隊の数キロ先で爆発した。

私はというとスタンダードをばれないように外した。

そのとき無線が・・・

〈飛龍、目の前の艦隊を「敵」と見なす。警告に従わないヤツらだ〉

「はあ?!?」

ケストレルがものすごい声を出していた。

「あんたの艦隊助けてやったて言うのに攻撃い!?ふざけてんじゃないよこのダボ!!」

ものすごいブチ切れてる・・・

まあ・・・仕方ないけど・・・

〈攻撃しろ。命令違反は・・・わかってるな〉

この提督に弾道ミサイルが命中するまであと2〜3分・・・
駆逐艦の一人は砲を握って震えている・・・

「ケストレル、弾着までと2分程度です」

「もうあの提督にぶつけなさいよ!!腹立つなチクショウめ!!」

〈〈あく……女の子がそんな言葉使うんじゃないやありません〉〉

「だって隊長!あの提督おかしいでしょ!!」

〈〈まあ……全部録音してるし……〉〉

すると……

「ちよ、ちよつと……!弥生!やめなさい!」

飛龍が怒鳴りだした。

振り向くと額にもものすごい汗を滲ませ砲をこちらに向けている駆

逐艦がいた。

「……砲の向けちゃダメな部分がかつちに向いていますよ」

弥生とよばれた駆逐艦はそれでも砲を向け続ける。

「め、命令に……従わないと……」

「あんだねえ……!」

ケストレルは爆発寸前だった。

そのとき……

〈〈何をしてる、早く撃て。命令が聞けないのか〉〉

「う、撃てます……」

〈〈じゃあ早く……ん?何の音〉〉—————

無線が途切れる。

レーダーで弾道ミサイルの行方を追っていたからわかる。着弾し

たんだ。

提督は戦死だろう。

「提督……?」

「死んだよ。たった今」

「し、死んだ……?」

状況を説明していると……

〈〈あ、あの……ケストレルさん……?トラックに弾道ミサイル

が直撃したらしいツスけど(震え声)〉〉

「あ……その……」

〈〈しかも壊滅したっぽい(涙声)〉〉

「あゝ．．．ごめんなさい」

〈いやこれヤバイからね!〉

無線の向こうから提督の悲鳴が聞こえてきた。

〈はあ．．．あゝ．．．トラック泊地所属の艦隊諸君．．．〉

「．．．？」

〈今から君たちは俺のところで引き取る。大丈夫、俺のところはブラックじゃない。休みたければ休ませてやる!〉

でもやはり信用できないという顔をしていた。

すると．．．

「了解．．．しました．．．今より横須賀所属になります」

〈そんじゃそのまま呉まで来てくれ。燃料が足りなければ給油艦を送るが．．．〉

「燃料は持ちます」

〈了解、そんじゃ呉で待つてるよ。護衛艦を今から送るから気をつけて〉

とりあえず艦隊を助けた．．．

あとは原潜だけ。

「アンドロメダ、敵原潜をロスト．．．場所は不明です」

「了解しまし．．．あ、まっってください。新たな推進音．．．潜水艦．．．？」

「新手ですか？」

「そこまでは．．．」

「私が確認に行きます」

「了解しました。ただ推進音とともに異音が混ざってます．．．損傷してるのかも．．．」

なおさら救助しないと．．．

「わかりました」

私は艦隊を離れ潜水艦を探しに行く。

敵原潜からの攻撃が完全に止まっているのを考えるとヤツは逃げたのかも知れない。

「この辺かな．．．」

アクティブソナーで探す。

するとすぐ近くに反応があった。

それと同時に排水音も聞こえる。

「浮上してくる・・・？主砲、一応攻撃準備」

主砲の薬室に初弾を送り込む。

そして潜水艦は姿を見せた。

・・・味方・・・？

「どこの所属ですか？」

「え・・・えっと・・・」

見知らぬ艦に遭遇したせいか少し怖がっているようだ。

なんだろう・・・可愛い・・・

「ド、ドイツ海軍のUボート、U—511です・・・」

「Uボート？」

「はい・・・」

「了解しました。敵ではないですね？」

「み、味方です・・・あ、あなたは？」

「呉鎮守府所属、ミサイル駆逐艦アーレイバークです」

「ミサイル・・・V1みたいなの・・・？」

「搭載兵器はそんな感じですよ。どこの鎮守府にも所属していないなら
帰りましょう。たぶん・・・配属先は横須賀だと思えますが」

「お、お願いします・・・さつき・・・おつききて怖い潜水艦に会った
から・・・」

「・・・潜水艦・・・？それはどっちに？」

「え、えっと・・・東に向かって・・・」

そしてふとレーダーを見ると・・・

「またハーブーン・・・!!」

「え、え？」

「511、潜行して私の真下にいてください」

「は、はい！」

511は急速潜行を行う。

「シースパロー発射用意・・・！」

〈へアーレイバーク!!ミサイルが!!〉

「分かっています!アンドロメダはアスロツクを!」

〈へ分かりました!ご無事で・・・!〉

今度は一発だけのようだ。

狙いは・・・たぶん511だろう。

「シースパロー発射!!」

2発のミサイルを発射する。

主砲とCIWSも準備できている。

ふとアンドロメダのほうを見るとアスロツクを発射していた。

アスロツクを敵艦手前で自爆させ水圧で損傷、もしくは撃沈させる
予定らしい。

「命中まで5秒・・・」

シースパローはもうすぐで命中というところまで来ていた。

だが・・・

途中で反応が消える。

外れたようだった。

「右90度・・・まっすぐ突っ込んでくる・・・距離14000・・・

砲撃始め!!」

主砲の射程に入り攻撃を開始する。

すると運がよかったのか初弾が命中、撃墜した。

「ふう・・・撃墜・・・511、もう浮上して大丈夫ですよ」

すぐに511は浮上してきた。

「お、終わりました・・・?」

「はい、あとは艦隊に戻りましょう」

そのとき遠くから爆音が聞こえた。

同時に船体の軋む音も。

だが、断裂音や圧壊音が聞こえないところを見ると撃沈には至って
いないようだ。

でも撤退させることは出来ただろう。

とりあえず、511をつれて港に帰ろう。

く提督く

「司令官さん、友軍を保護したってどうしたのです？」

「ああ、あれな。ブラック鎮守府ってあるだろ？」

「聞いたことあるのです」

「そこで酷使されてた艦娘がいたんだけど、司令官が戦死したようであちちに取り返すことにした」

・・・トラック泊地の鎮守府が吹っ飛んだけどね・・・

まあ、あそこはまだ司令官も残ってたし大丈夫だろう。

それよりも俺の資源がやばい。

もう毛根死滅しそう。

「司令官さん・・・ちよつと浪費しすぎなのです・・・」

「うう・・・毛根が痛い・・・」

「何で毛根なのです!？」

とりあえずアメリカからの援助のおかげで頭の被害はバーコード程度で抑えれそうだ。

「そういえばドイツ潜水艦を救助したって言ってたな」

「言っていましたね」

「クロの知り合いかな？」

「うくん・・・横須賀に帰ったら分かるのです」

「そだね」

それにしても原潜にアスロック命中・・・大丈夫かな・・・

そういえば爆雷程度なら原子炉に被害は入りにくいとか聞いたし爆雷を積んだ機をケストレルに搭載するかな

なんてこと思いながら帰ってくる艦隊を待っていた。

保護した艦隊は疲労がすごいから間宮のアイス準備しとかないと・・・

亡国のイージス フタマルサンゴ

保護した艦隊を迎え入れ、補給などをしていた。

どの子も疲労、損傷が激しい。

おまけに提督不信・・・あるていど信頼関係を築かないと・・・

「とりあえず全員補給は終わった？」

「はい、なんとか・・・」

「あとは入渠か・・・」

とりあえずスケジュールを組まないと・・・

「あ、そだ」

「？」

「工廠借りてもいいか？」

「工廠ですか？」

「うん、ちよつと建造をまわしてみようかと思って」

「私のところで大丈夫かな・・・」

「まあ・・・大丈夫じゃね？」

そんなわけで電をつれて工廠に行く

「ちわっす」

そんなノリで入ると・・・

「むっ!!何奴!!者ども!出合え出合え!!」

「フアツ!」

いきなり武装した妖精さんに囲まれました。

何なんですか。

「あ、なんだ横須賀の提督か」

「あ、なんだくじゃねえよ!!」

いきなり取り囲まれたらビビるわ!

「はあ・・・とりあえず大型建造回せるか?一応、俺のところの資材を使うから俺の鎮守府所属になると思うが」

「ん・・・でもうちでこういうことするの初めてだから・・・やってみる!」

そして妖精はせっせと資材を持っていった。

401が出たらいいな〜

「それじゃこれが書類ね」

「ほいよ、どうも」

他人の鎮守府だし壊れてないだろ！

とか思いながら書類を見ると・・・

「……………ここもかよおおおおおおお
!!!!!!」

「し、司令官さん!?!どうしたのです!?!」

「おまつ・・・30時間ってどういうことだ!?!」

「や、30!?!」

何を作ってるんですかねココ

とりあえず気にはなるので高速建造しよう

「まあ、高速建造してみてくださいいな」

「らじやー!」

バーナーかついだ妖精が中に入っていく・・・

「まったく建造は地獄だぜええええ!!ふはははははははは
!!!!!!」

やたらハイな妖精さん。

「おい・・・あいつ俺の鎮守府から来たのか・・・?」

「そ、それはないと思うのです・・・」

「とりあえず・・・出てきた子の演習というか訓練をお願いね」

「了解なのです!」

そして建造が終わり扉が開く。

どんなヤツが出てくることやら・・・

「あれ、何かデジャブ感じる艦装つけてる・・・」

アーレイバークで見たことある艦装をくつつけてる・・・

これは・・・イージス!?!

「いそかぜ型ブイ・ウェツブ艦、一番艦のいそかぜです」

「いそかぜ・・・?」

そんな艦名聞いたことないしブイ・ウェツブ艦ってなんだ・・・
「すまん、いきなりで悪いんだが、ブイ・ウェツブ艦って何だ?」

「話が長くなりますがよろしいですか？」

「ああ・・・まあ・・・」

「ブイ・ウエツブ艦とはですね・・・」

ブイ・ウエツブ艦というのは「Variable Equipment : Weapon, Engine and Bridge Vessel」の略、「VEWBV」で、スタンダード・フレックスの要領で武装、機関は当然のこと艦橋の位置や種類を自由に変更できる。

そして、システムやレーダー、イージスシステムまで何でも積み替えることができる。

いそかぜ曰く旧軍の主砲や魚雷、爆雷、機銃も搭載可能らしい。

砲は15.5cm砲までらしいが・・・

そのため、いそかぜ は変装が得意らしい。

艦橋を変更して兵装を一部換装、一見旧海軍の駆逐艦になることも出来る。

そのため、油断した敵に至近距離からミサイル攻撃を食らわせたリ、ある程度地上で行動することが可能な艦娘だから出来る潜入も得意らしい。

「そんな感じですよ」

「つまり、ブロックのおもちやみたいに何でも載せれるってことか？」

「そうですね」

ふむ・・・ためし装備開発してみても何か載せるかな

「そういえば装備は何を持ってるんだ？」

「えつと、127mm速射砲一門、VLS一式、CIWS、イージスシステム、システムリマ・・・」

「ん・・・？システムリマって何だ？」

「深海のイージスですよ」

「なんだそれ」

「通常イージスシステムでは複数の対潜目標に対する攻撃ができませんがこのリマは複数の対潜目標を感知、同時攻撃が可能です。また、機関停止状態の潜水艦も簡単に見つけることが出来ます。」

「つまりは超高性能なソナーに対潜攻撃も出来るイージスシステムが合体した感じか・・・」

「そうなります。あとは私は対艦攻撃と対ミサイル攻撃が可能なミサイル、「T-Pe x」を搭載してあります」

「ティーペックス・・・?」

「テルミットプラス・エクストラ。着弾時に周囲に約6000度の熱を発生させる特殊弾頭ミサイルです」

「ろ、6000!?核兵器並みじゃないのか・・・」

「いえ、炸薬は通常です。もとは生物化学兵器を殺菌するための兵器です」

「対艦で使うと・・・想像したくないな・・・」

「まあ・・・乗員は全員口―ストされますね」

「・・・聞かなきゃよかった」

「あ、あの・・・司令官さん、話が何も入ってこないのですが・・・」
「あとで詳しく教えてあげるよ」

しっぽりムフ（ry

「あと・・・私は常に特殊弾頭ミサイルを装備しているのですが・・・補給などは大丈夫でしょうか」

「その特殊弾頭ってのは?」

「先ほどのT-Pe xとアポト―シスVと呼ばれる電磁攪乱ミサイルです」

「・・・マジで?」

「電磁攪乱ってなんなのですか?」

電には意味不明な単語の連発のためハテナマークが飛びまくっていた。

てか、この艦は当たりなのか・・・?

一応書類に目を通しておこう・・・

「電磁攪乱っていうのは相手の電子装備を一時的に使用不能にするんだよ」

「司令官さん物知りなのです・・・」

「やだうれしい」

なんてこといいながら書類に目を通すと・・・

火力	30	～	180
耐久	40	～	100
装甲	2	～	60
速度	低	～	超速
対空	30	～	400
対潜	70	～	100
雷装	0	～	60
索敵	300		
射程	超長		
搭載	0		
回避	30	～	60
運	10		

・・・いろいろおかしい。

何がおかしいって数値が定まってない。

「司令官さん？どうしたのです？」

「これ見てみ」

電に書類を見せると・・・

「こ、これどういうことなのです・・・？」

するといそかぜは書類を覗いて・・・

「これはきつと装備換装後のことですね。」

「いや、火力とかは納得できるんだ・・・その・・・耐久値上がりすぎだろ・・・」

「いい忘れてましたが、私は装甲厚の変更が可能ですよ」

「なにそれおかしい」

とりあえず即戦力間違いナシではある。

「まあ・・・いったん司令室に行こう、装備はあとでまた開発だな・・・」
あと演習も・・・

とりあえず俺の いそかぜ に対する印象はよく分からんって感じだった。

敵の潜水艦を発見！ ↑／嫌だ！！／

「作戦を説明するー！」

あらたに艦隊に加わった、いそかぜと511の初陣となる作戦を開始しようとしていた。

「本作戦の目標は・・・敵原潜を撃沈せよ」

「撃沈!?でも放射能が漏れるって・・・」

「いや、船体を海のそこに沈めるだけだ。機関部にはあたらないうにする」

「でも・・・どうやって?」

「今回は爆雷でやる」

すると駆逐艦の面子は

「爆雷!?そんな・・・あんなの相手なんていくらレディーでも無理よ!」

レディーは果たして関係あるのかないのか・・・

「暁よ、もしここで敵原潜を沈めたらお前はもう一人前の超素敵なレディーだ」

「やるわー！」

ちよろいぜ・・・

と、そんなこと思っても下手すれば轟沈がありえるので無理はさせられない

「今回の作戦は第六駆逐隊に、いそかぜ、アーレイバークが随伴している。あと伊号全員とクロ、511だ」

「私の初任務ですね・・・がんばります」

511の気合は十分のようだった

「戦術はまず、いそかぜのシステムリマで原潜を搜索、発見後アスロックを撃ち込む」

「爆雷攻撃じゃないんですか?」

「まずは敵の航行能力か攻撃能力を奪うんだ」

「司令官、でしたら私から一つ進言してよろしいでしょうか」

いそかぜが手を上げた。

「ん？何だ？」

「私に搭載してあるアポトシスV・・・そのミサイルなら敵原潜から一時的ですが航行能力、攻撃能力を奪うことが出来ます」

「なにそれチートとか思ったがこれなら被害が少なくて済むかもしれない」

「よし、ならその作戦で行こう」

「司令官、アポトシスVの弱点は半径1km以内の目標はすべて2時間ほど無差別に無力化します。その電磁波は強力で人体に浴びると甚大な被害・・・死亡する可能性があるなので人がいる場所、または味方の近くでは使用できません」

「了解した」

「使い方次第では恐ろしい・・・」

「よし、出撃だ！」

「いそかぜ」

私の初めての实战が始まる。

そういえば昨日、司令官と話していて海上自衛隊所属というところ少し不安そうな顔をしていた。

たぶん、私が専守防衛を貫くと思っているのだろう。

だけど、私は表面上が海上自衛隊なだけだ。

専守防衛などそっちのけで先制攻撃し撃沈した艦船は数多くいる。

時には同盟国の船すら撃沈した。

・・・仲間の船も

乗っ取られていたとは言え、気持ちのいいものではなかった。

「アーレイバークさん、もしかしたらアポトシスの電磁波が貴女の電子機器に影響を及ぼすかもしれません、ご注意ください」

「分かりました」

「お互い敬語って何か不思議ですね」

「私は・・・ちよつと人見知りです・・・」

アーレイバークは少し顔を赤くしてうつむいた。

「姉妹は40人ほどいるのに長女がこんなのでは……」

「……その中にアーカンソーはいましたか？」

「アーカンソー……？いえ、知らない子ですね」

「そうですか……よかった……」

「？」

アーカンソーは過去に私が沈めたアメリカのブイ・ウェブ艦だ。

姿形はアーレイバークそっくりなので姉妹にいないかと思いい少し不安だった。

「……システムリマ……起動」

そろそろ作戦海域だ。

リマを起動させる

「発見しました……機関停止……隠れてるつもりですがバレバレです
すね」

「見つけましたか？」

「はい、距離30000……こちらには気づいていないようです」

「了解なのです！全艦対潜戦闘よーい！」

「電さん、少し待ってください、戦闘用意は10000まで近づいてか
らむ」

「？どうしてなのです？」

「私のミサイルが着弾して、その有効期間が2時間しかありません。
この距離、速度では間に合いません」

「分かったのです、方位は分かれますか？」

「2—2—0です」

「了解なのです！」

旗艦の電を先頭に方位を変える

そのときだった。

〈へまた……お前なのか〉
「!？」

私個人に来た無線……

この声……

「どうしたのです？」

「ヨンファア・・・」

〈ぐ〉名答・・・まあ私は提督しているが〈〉

「また・・・沈めてやる!!」

〈ふん、まあいいがな。そうだ、一つ警告しておこう〉

すると無線の周波数を切り替えた

〈全艦娘、提督につぐ。我々の作戦行動を妨害しないほうがいい。我々の装備するミサイルの弾頭は通常に非ず。以上だ〉

私はその言葉で怒りが爆発しかける

「ヨンファアアア!!」

「な、なんなのです!？」

また・・・日本を人質にとる気か!!

「ヨンファアって誰よ!」

「テロリストだ!あの死にぞこない・・・また沈めてやる・・・いや、TPexで焼き殺してやる!!」

するとヨンファアから無線が入る

〈そうだ、一ついいことを教えてやる。私はこの原潜に乗艦している〉

「乗艦!?艦娘に人間が乗ることなんて・・・」

そこから返答がない。

ただ私は思い当たることがある。

2035年の・・・千里馬艦隊の事件・・・AI・・・

「あのヨンファア・・・またAIか!」

周りは状況が読めずにいるようだ。

いま状況が分かるのは私だけのようだった。

「いそかぜさん、ヨンファアってのはいったい誰なのですか?」

「皆さんに教えます・・・ですが・・・必ず撃沈してください!」

ヨンファア・・・本名はホ・ヨンファア。

2005年の「いそかぜ事件」の犯人だ。

GUSOHと呼ばれる約一リットルで東京を死滅させれる生物兵器を海上自衛隊のいそかぜに持ち込み東京に撃ち込もうとしたテロリスト・・・

事件はヨンファの死亡、いそかぜの沈没で終わった。

私は2035年にそのいそかぜを引き上げ、改装、ブイ・ウエツブ艦として蘇ったいそかぜだ。

そして事件は起こった。

呉の基地から3隻のブイ・ウエツブ艦、「くにつかぜ」「たかまがはら」「よもつかぜ」を強奪、GUSHを装備した。

しかしそのヨンファは米軍の開発した戦術AIだった。

私はアポトシスでヨンファを破壊、その三隻も撃沈した。

そして事件は終わったと思っていた。

しかもこの世界に「いそかぜ事件」は起こっていない。

なぜヨンファがいるのか・・・

「つまり、沈めちゃえばいいのね！」

「短的にいうと・・・」

するとそのとき突然アラートが鳴る。

この誘導電波・・・まさか!!

「GUSH接近!!」

「グ、グソー？」

「生物兵器です！迎撃は私が・・・TPex準備！」

もしこの艦隊に直撃すればBC兵器対策をされていない第六駆逐隊、アーレイバークは無事ではすまない。

艦船にリンクしているから死亡することはないが気絶はするだろう・・・中にいる妖精は確実に死亡する。

しかも毒素は3日間滞留するため下手に救助も出来ない。

TPexで解毒なんて日には皆沈んでしまう。

私はイージスシステムを駆使してGUSHをロックオン、迎撃の準備をしていた。

あの時のみたいはしない！

ミサイルの弾頭は通常に非ず

「TPex・・・攻撃始め！続いてアポト―シス発射用意！」

私の両脇に着けられた艦装からTPexが発射される。

続いてアポト―シスのVLSハッチを開放する。

目標はもちろん、ヨンファだ。

「みなさん！今すぐここから逃げてください！」

「に、逃げるたってどこによ！」

「どこでもいい、早く離れて!!」

私はこれが初実戦。過去に何度も迎撃したミサイルだし自信はあるがもしも外れた場合全滅は不可避だ。

私には対BC兵器対策がしてあるためGUSH一発程度なら耐えることが出来る。

「インターセプト五秒前・・・スタンバイ」

「SM―2、発射始め！シースパロースタンバイ！」

突然ア―レイバークも攻撃を開始した

「なっ!?!早く逃げてって・・・」

「私だってイージスです！絶対に迎撃します！」

第六駆逐隊は素直に離れていく。

この状況ではありがたい。

もしあの子たちの主砲、機銃で迎撃できてもGUSHをその場で拡散させるだけになる。

そして迎撃できる距離はGUSHの被害圏内・・・

「・・・マークインターセプト・・・！」

だが両方の反応が残っている。

・・・外れた。

「目標を外れた・・・！」

「SM―2・・・着弾まで3秒・・・」

私は主砲とシースパローを準備する。

「ア―レイバークさん！もういい！逃げて!!」

「まだです！」

すると・・・

「命中!!迎撃成功!」

遠くで爆炎がと同時に大きな雲が形成される。

あの雲こそがGUSOHだ。

「あ、あの・・・雲って何・・・?」

「あれがGUSOHです」

「でも・・・迎撃は・・・」

「あれは私にTPexで迎撃しない限り発生します。今から解毒を行います」

「解毒?」

「TPex・・・撃ち方始め!」

二発目のTPexを発射する。

すると突然司令官から無線が入る。

「あのお・・・そろそろミサイルの使用を制限していただけでしようか・・・」

「なんでですか?」

「もうね、君たちを補給する資源残ってないの・・・燃料は大丈夫だけど弾薬が・・・あとお前らに積んであるだけしか・・・」

「了解しました。ヨンファを撃沈したら帰投します」

「ヨンファ?ああ、さっきの無線か」

「聞いていたので?」

「ああ、向こうさん、さっき日本・・・東京を人質にとりやがったぞ!」

「開放条件はあの艦の撤退を邪魔しないこと・・・だそうだ」

「そんなーあとちよつと撃沈できるんですよ!」

「さっきな・・・その無線を聞いて出撃した艦隊にその・・・特殊弾頭ミサイルが撃ち込まれたんだ」

私は言葉を失った。

2035年の千里馬艦隊の件と同じだ。

・・・千里馬艦隊の撤退を阻止しようとした海上自衛隊の護衛艦「つなしま」にGUSOHが撃ち込まれた。

ヤツらはGUSHOHのデモンストレーションとして護衛艦の乗っていた全員の命を奪った。

「外洋だったために日本への被害はないが……この無線を聞いてみてくれ」

「無線……？」

「さっき言ったはずだ。我々を邪魔するなど。もう一度言う、我々のミサイル弾頭は通常に非ず。いいことを教えてやる、この弾頭の毒素は3日間はその場に滞留する。解毒は不可能だ。ある一隻の船を除いてな」

この解毒できる船は私のことだろう。

録音はここで終わっていた。

「……今君たちがいるのはトラック島……攻撃があつたのは東京だ」

「……司令官……指示を」

「……」

「提督」

「……司令官……指示を」

「……」

今ならヤツを撃沈することは可能だ。

だが、いそがげが一発で撃沈できるとは分からない。

攻撃を確認した瞬間ヤツはそのグソを東京に発射するだろう。

今艦隊がいる位置はいそがげたちが東京と間逆の位置にいる。

しかも射程ギリギリだ。

もし撃たれば迎撃できないかも知れない。

それこそこちらが近づいた瞬間撃たれるかも知れない。

「司令官、私は指示に従います」

俺は決心した

「……いそがげ、お前は迎撃に自信はあるか」

「……あります」

「全艦に告ぐ、作戦続行！目標艦を撃沈せよ！」

ただしいそかぜ、アーレイバークはもう積んであるだけしか弾薬がない。

帰ってきて第二次攻撃と言っても補給することが出来ない。

「いそかぜ、アーレイバーク、攻撃は今しか出来ない」

〈〈分かってます〉〉

「アポト―シス、T P e xは何発残ってる？」

〈〈アポト―シスは18発、T P e xはあと16発です〉〉

「了解した。もしグソーを撃たれたらすぐにT P e xを発射、その後アポト―シスを撃ち込め！」

〈〈了解！〉〉

「電、聞こえるか？」

〈〈聞こえるのです！〉〉

「いいか、いそかぜが原潜の動きを止めたら全速で目標に向かって爆雷をばら撒くんぞぞ！」

〈〈了解なのです！〉〉

「・・・沈むなよ」

〈〈・・・ちゃんと、司令官の傍に帰ってきますね〉〉

フラグたった気がしたけど気にしない。

俺はいざというときのためにある兵器を準備していた。

「ODIN・・・スタンバイ」

もし電の身に何かあったら覚悟しやがれ。海域ごと消し飛ばしてやる。

弾頭を空間制圧弾頭にする。

・・・その空間制圧弾頭が30発詰まった弾を落としてやる。
時限信管で海中で爆発するようにする。

30発の空間制圧弾頭・・・それが敵原潜のいる一帯に降り注ぐことになる

いそかぜ

「アーレイバークさん、行きましよう」

「そうですね・・・電ちゃんたちの護衛はお任せください」

「いそかぜさん、どういう攻撃をするのです?」

「・・・私が単艦で突っ込みます、それについてきてください」

「そ、そんな無茶よ!!いくらレデイでもそんなこと出来ないわよ!」

レデイ―関係あるのかな・・・まあいいか・・・

「大丈夫です、私は1対100くらい経験しましたから」

「い、いそかぜさんの過去に何があつたのかしら・・・」

「ハラシヨ・・・」

四方八方からミサイル飛んできたなあ・・・

そんなことはおいといて。

「行きましょう。最大戦速!」

私が接近を開始して10分後にみんなも前進を始める。

その間にヨンファから無線があつた。

〈単艦で来る・・・か。相変わらずだな〉

私はそれを無視してアポト―シスに情報を入力する

「アポト―シス・・・撃ち―方始め!!」

脇の艦装からアポト―シスが発射された。

・・・同時にヨンファから東京に向けてGUSHが発射された。

敵原潜、撃沈

「やっぱり東京に・・・TPex発射始め！」

一応射程圏内だが当たるかどうか・・・いや、当てる！

〈へいそかぜ、スタンダードを発射します！〉

「わかりました、もし迎撃できたら解毒は私が」

〈了解です、SM-2攻撃始め！〉

後ろのほうで爆音が聞こえた。

敵艦まであと10000・・・

「敵艦からミサイル攻撃がない・・・罨？」

余裕でハープーンの射程圏内なのに発射してこない。

すると・・・

〈へいそかぜ！海中からミサイル出現！これは・・・迎撃ミサイル！〉

「敵潜からですか？」

〈はい！〉

「こちらでも捕らえました・・・なんで潜水艦が・・・」

するとアポトシスが直撃する寸前で撃墜される。

だが、このアポトシスは迎撃されても炸裂し、強力な電磁波を発

生させる。

ただ敵は海中・・・爆発は空中だったので効果は薄いかもしいれない。

「アポトシス炸裂を確認・・・敵潜は・・・？」

リマを駆使して敵の状況を探る。

すると効果があったのかさつきまで聞こえていた音がすべて聞こ

えなくなっている。

「敵潜の停止を確認！今です!!」

〈へなのです！〉

〈雷様の本気を見せてあげる！〉

各艦が突撃を開始する。

するとそのとき敵の機関だろうか・・・異音が聞こえ始める。

「何・・・この音・・・」

まるで何かが溶けているような音とガス漏れの音が聞こえる。

すると無線が・・・

〈へやる・・・な・・・だが、GUSOHは迎撃に失敗したようだ〉
「え・・・」

レーダーを見ると反応が残ったままだった

・・・そんな・・・

〈俺が・・・ただで沈むと・・・思うな〉

私はそんな無線を無視して提督に連絡する

「司令官！迎撃に失敗しました！GUSOHは東京に・・・」

〈分かってている。ただ幸いなことに・・・ミサイルは俺の鎮守府の真上を通るみたいだ〉

「何が幸いなんですか！早く避難勧告を東京に・・・!!」

〈俺の鎮守府はな、スタンダードやCIWS、パトリオット・・・防空装備のオンパレードだ〉

「でもGUSOHは迎撃されても・・・」

〈洋上で必ず落とす。そのあとの解毒は頼んだぞ〉

そういう無線はプツリと切られる。

それと同時に遠くで大爆発が起き、白い霧のようなものが発生する。

あの霧はたぶんGUSOHだろう。

それと・・・あの爆発は原子炉が暴走して起きた可能性がある。

電磁波で制御回路を損傷して暴走・・・爆発したようだった。

放射能漏れが心配だ

「あつけない最後・・・ですね」

いつの間にかアーレイバークが隣に来ていた。

「あくあ、結局私たちの出番なかったわね」

「そ、そんなこと言っちゃダメなのです！」

第六駆逐隊は皆本当に中がいいな・・・

そんなことを思っていると・・・

「え・・・なにこの音・・・」

「？私は何も聞こえませんよ？」

私にはハッキリ聞こえる・・・

「この音は・・・魚雷!!」

「魚雷推進音!!」

「魚雷!?!」

「方位2―2―0・・・敵原潜!?!」

「そんな!今沈んだはずじゃ・・・」

そんなことを言ってる間に魚雷はすぐ目の前まで迫っていた。

・・・コース上にいるのは・・・電。

「電!避けて!!」

私のそんな声と同時にアーレイバークが動いていた。

直後に大きな水柱・・・

「キヤアアアアアア!!!」

「ア、アーレイバーク!?!・・・さん・・・?」

電はいきなりのこと水面に座り込んでいた。

「うっ・・・大丈夫・・・夫・・・?」

「わ、私は・・・でもアーレイバークさんが!」

「左舷に・・・大破孔が出来た・・・だけ・・・です」

「そ、そんな事言っても・・・血が・・・」

私が・・・もっと集中してれば魚雷に気づけたのに・・・!

でも今自分を責めても何も始まらない。

まずは解毒をしないと・・・

「TPex・・・発射!」

GUSOHが散布された区域を熱殺菌しないと・・・

「アーレイバークさん・・・なんで・・・なんで私を・・・」

「仲間を・・・助けるのが・・・仕事・・・ですから・・・」

「でも・・・大破して・・・」

「私は・・・装甲は・・・薄・・・い・・・ですけど・・・ダメコンは・・・」

「でも・・・でも・・・!」

アーレイバークは苦しそうにしゃべる。

だが、損傷は確かに大破だがダメコンのおかげで沈没することはな

い

「とりあえず、帰還しましょう。曳航できますか?」

「わ、私が・・・私がするのです!」

電がアーレイバークと縄で繋がり、曳航を開始する。

被雷した位置は機関部だ。たぶん、機関停止だろう・・・

「警戒は私に任せてください。急いで帰りましょう!」

T P e x が着弾、蒼く眩しい炎を上げているのを尻目に帰還を開始した。

く提督く

「ドックをすぐに開けろ! 資材は何でもいい! 早く作れ!!」

俺は急いでドックを空けさせる。

・・・それにあと10分でG U S O H が俺の鎮守府の射程内に入る。
遠隔操作で迎撃を試みる。

一応、ケストレルの艦載機、横須賀鎮守府でスクランブル待機していた機が迎撃に向かっていている。

「東京に着弾すればいくらの犠牲が出ることやら・・・」

いそかぜの話によれば1リットルで東京を壊滅させることが出来るらしい。

弾頭に搭載してある量は500ml・・・

東京が半壊することになる。

「隊長、ケストレルさんの艦載機・・・戦闘機隊はラースグリーズですよ? 大丈夫です」

臨時の秘書艦となっているアンドロメダは落ち着いてPCを弄っていた。

対空ミサイルなどの火器管制のためだ

「そうだがな・・・」

「スクランブル待機の皆も優秀な子たちです。必ず撃ち落せます」

「そう・・・だな」

ここは部下を疑わずに信じよう

「G U S O H・・・射程まであと2分、迎撃機到着します」

「よし、いいかお前ら! もし失敗してもまだ基地の防空網がある! 変

に気構えて落ちるなよ！」

〈へりようかい！〉

〈へりようかい、へへっいい声だぜ〉

各機がミサイルに群がっていく。

そして……

「……命中……？命中！GUSOH撃ちゆッ……撃墜！！」

アンドロメダが囓んだ。

「……囓んだな」

「かかかかか囓んでなんてないですうううう！！」

顔を真っ赤にして抗議してきた。

とりあえず原潜は沈没、放射能漏れは確認できていないらしい。

呉の生活も終わりだな。

「提督、全作戦終了だ。アーレイバークが大破してるが……沈没の心配はない」

「ううう……よかったああ……」

涙声で言ってくる。

「帰ったら思いっきり褒めてやれ。俺もお礼言わないと……」

「入渠ドックは開いてますし……資源も一応大丈夫……」

あとは帰ってくるのを待つだけ……

ふう……あとはいそがせに頼んで解毒してもらわないと……

〈隊長、艦載機は全員帰ってきたよ〉

「了解、そのまま横須賀に帰投してくれ」

〈へは〜い、懐かしの横須賀だねえ〜〉

スクランブル待機の機体にも損害はナシ……

ただ、最初の艦隊に撃たれたGUSOH……あれは下手に解毒できないため、まだ艦娘たちがGUSOHの霧の中に閉じ込められたまままだ。

……艦装内の妖精の生存は絶望的だろう。

艦娘も気を失ったままだ。

しかし幸いなことにGUSOHは風で流されない性質のため、東京に毒素が降り注ぐことはない。

た。自然消滅まであと2日……艦娘が耐えられるかどうかだけが唯一心配だっ

横須賀への帰路

全作戦終了・・・まあ俺たちの単独任務だったが・・・
やっと気が抜ける・・・

「ふう・・・そろそろ俺たちも鎮守府に帰るかな」

作戦を終えた俺の鎮守府所属の艦娘は帰還していく。

「提督、短い間だったが楽しかったよ」

「はい！私もいい勉強が出来ました！」

俺と電はもう荷物をまとめていつでも帰れるようにする。

帰りも新幹線だ。

「電、もういいか？」

「うくん・・・ちよつと医務室に寄りたいたいのです」

「お見舞いか？」

「はい・・・」

「そんな罪悪感に打ちのめされてる様な顔するな」

「でも・・・」

「でもじゃない。ほら、早く行っておいで」

「・・・なのです！」

電は早足で医務室へ向かっていった。

「ほんと・・・仲いいですね」

「そりゃケツコンした仲だからな！」

「・・・リア充爆散しろ（ボソツ）」

「えっ」

「?どうしたんです？」

ものすごい笑顔で首かしげてきますねアナタ。

逆に怖い。

「とりあえず修理用の資源はこちらから送ったから安心しててくれ」

「送ってくれないと私の鎮守府もたないですよ・・・」

ちなみに俺は毛根が壊滅しそうなんだけどね。

そんなこんなしてるうちに電が帰ってきた。

「おかえり、どうだった？」

「元気になったたのです！ちよつと長話しちゃったのです・・・」
「まあまたいつか会えるよ」

そっとういながら荷物を持って司令室を出る。

「さて・・・まためんどくさい業務にもどるかな」

「司令官さん・・・お仕事はちゃんとしようなのです・・・」

「えく・・・」

「えく・・・じゃないですっ！」

「勘弁してくれよ母ちゃん・・・」

「だから誰が母ちゃんなのですか!!」

そんなこんなしつつ鎮守府を出る。

「んじや提督、またな」

「はい！いつか・・・またお会いしましょう！」

「そのときは練度上げとくんだぞ」

「はい！」

鎮守府を離れ、駅に向かう。

「はあく・・・原潜相手は疲れた・・・」

「あ、そういえばあの・・・えつと・・・ぐそー？でしつたっけ・・・」

「ん？」

「艦隊の皆さんは大丈夫なのでしょうか・・・」

「ああ、あれな」

GUSSOHを被弾し、気絶していた艦娘は無事に救助されたそう
だ。

潜水艦でがんばって引つ張つて来たらしい。

それと奇跡的なことに艦装内の妖精に生存者がいたらしい。

ただ、妖精が死亡した武装などについては使用が出来なくなるため
その艦隊の艦娘の艦装の大半は廃棄処分になるらしい。

あと帰りに いそかぜ が二箇所を解毒してくれたので海はもう
大丈夫だが、GUSSOHが海水に溶けている可能性があるため油断は
出来ない。

実際、東京に大量の魚の死体が流れ着いたり、たまたまその水を飲
んでしまった人が死亡したという話を聞いた。

・・・自然分解まであと2日・・・
それまで東京では水がほぼ使えない。

ろ過や沸騰させた程度でGUSHOHは解毒できないらしい。
いそかぜ曰く、GUSHOHは6000℃の熱でやっと解毒できるらしい。

「え〜と・・・12時があるな」

「あと1時間ほどあるけど・・・どうするのです?」

「ん〜・・・まあホーム行つてのんびりしとこう」

とりあえずホームに行く。

腹減った・・・

「電、お腹すいてないか?」

「ん〜・・・わたしはまだ・・・」

「じゃあちよつと俺、その売店でおにぎり買つてくる」

「いつてらっしやいなのです!」

とりあえず梅のおにぎりでも買おう。

買つてきて食べてると新幹線が来た。

「さて、横須賀に帰ろうか」

「なのです!」

へりとかで帰れたら良かったんだけどなく・・・

まあいいか。

「あく・・・なんかすごい久々に気が抜ける気がする・・・」

「このところ忙しかったですからね」

「帰つたら少し開発いつてみるか」

「無駄使いはダメですよ?」

「大丈夫だよ。いそかぜ用の武装とか開発したいしな」

「そういえばいそかぜさんって結局どんな船なのです?」

「前聞いた話だと、アイツは過去に一回沈んで、それを引き上げられて作られたんだと」

「もとは何て名前だったんです?」

「元も いそかぜ だよ」

そこから改装を受け、ブイ・ウェツブ艦になったという

でも・・・ブイ・ウエツブ艦って聞けば聞くほど凄い船だよな・・・
本来軍艦は政治の延長線上で建造される。

装備は作られたときから固定だ。

でもブイ・ウエツブ艦はそれこそ、素材となる上部構造が何もない
船体さえあればどんな艦橋、機関、武装でも簡単に付け替えれる。

装甲厚ですら変更が可能だ。

それこそ、昨日の作戦では標準的な駆逐艦だったのに今日は装甲は
戦艦並み、攻撃能力は戦艦を越えることだって出来る。

そのため いそかぜ曰く、「私の装甲を最上位にすれば大和さんの
徹甲弾の2発や3発耐えれますよ。正直、一発目は無傷に等しいかも
知れませんが。やりあったことないので分かりませんが・・・」

「いそかぜさんって駆逐艦なのです・・・?」

「うくん・・・一応?」

「大和さんの砲弾一発食らって無傷の駆逐艦ってなんなのです!」

「いそかぜの装甲の最上位が80cmらしいから・・・」

「それもうヤバイのです・・・チートなのです・・・」

「まあただ、こんなことすれば兵装、速力に制限は出るし資源消費量も
増えるからあんまりしたくないけどね」

「いざというときって感じですか?」

「まあ・・・簡単に言うとうと最終兵器かもね」

そんな話で盛り上がっていた。

2時間ほどたったときに突然睡魔に襲われた。

「ふああああ・・・ねむ・・・」

「寝ますか? ついたら起こしますよ」

「ん・・・お願い」

「なのです! おやすみなのです」

「おやすみ」

そういつて俺は夢の世界に落ちていった。

「・・・官・・・司令官さん！」

「ん・・・ん？」

「駅ついたのです！」

「ふあああああああ・・・もうか・・・」

「駅にお迎えきてるらしいですよ？」

「お迎え？」

ふと空を見上げると聞きなれた音が聞こえる。

俺の鎮守府のブラックホークだ。

「帰りはヘリか。楽でいいな」

「とりあえず駅を出るましよう」

「そうだな」

そして駅を出て広場に行くとブラックホークが降りてきた。

・・・降りてくるのはいいけど一応ここ・・・公共の場所だからね？

「提督！お迎えにあがりました!!」

「ありがたいけどここ公共の場だから!!」

そんな話してると警官が寄ってきた。

「ちよつとそこの君！」

「ん？なんでしよう？」

「君じゃない、パイロットのほう！」

するとパイロットはヘリから降りてきた。

「なんです？」

「君、ここどこだと思ってるの！ここはヘリを下ろす場所じゃないよ！」

「は、はあ・・・」

「おまけにここは公共の場！それに駐機違反だよ！」

駐機違反って何

「とにかくちよつと来て！切符切るから！」

「え、ちよ」

何で駐車違反みたいになつてんの・・・

つれられていくパイロットの背中をただ眺めていた。

そして10分後帰ってきた。

「おかえり」

「んだよあのポリ公!!次やったたら免停とかいいやがって!!しかも罰金2万に点数つけられるし!!」

「・・・いや、航空機の免停って何てかなんで点数あるの」

「というか航空機で交通法違反みたいなのないでしょ!!」

「あ、あははは・・・」

「とりあえず帰りましょう」

「そうだな」

そしてへりは無事に帰路についた。

なつかしの横須賀だ。

いそかぜの演習

やっと帰れた鎮守府で待っていたのはアホみたいに溜まった書類だった……

……全部資源関係の。

「フアアアアアアアアアアツク!!!」

そう叫びながらハンコを押していくしかない……

電は遠征に行ってるし……

「そうだ！気晴らしに開発でも行こう！」

最近ジェット機ばかりで赤城たちが嘆いていたしな。

そう思い今日は赤城を連れて開発に向かう。

「赤城、艦載機開発に行くんだがどうする？」

「艦載機……ですか……いいのですか？」

「ああ、少し欲しかったし」

「ではすぐ参ります」

赤城は食べかけというか食べ初めだった巨大パフェを0.5秒くらいで胃に突っ込み立ち上がる。

……一度大食い選手権とか出てみたらどうなるのか気になって仕方ない。

「工廠は久々ですね」

「そうだな……特に赤城はほとんど来ないもんな」

「改装以来ですよ」

そんな話をしてると工廠に

「てーとく！何作る？」

「ん……赤城達用に艦載機頼む。あ、ジェットはいらんぞ」

「え……いいジェットのレシピあったの……」

「魅力的だけど今はいいの！」

「ちえ……それで資源は？」

「とりあえず10回分回してくれ」

「りよーかい！」

「どんな艦載機ですかね」

「さあな．．．ろくでもないのじやないのを祈る．．．」
すると

「完成！今回はちゃんとレシプロ機だよ！」

「お、どれどれ」

赤城は一足先に工廠に入った。

「あ、てーとく、これ」

「ん？ああ、ありがとう」

艦載機の書類か。

どれどれ．．．

「．．．ごめん、俺こんな艦載機知らない」

それと同時に

「て、提督！」

「おおう!?どした!?!」

赤城がものすごい速度で工廠から出てきた

「わ、私あんな機体知らないです！」

「．．．俺もだ」

作られた艦載機は．．．

翠芽

翠芽 (クーガ隊)

散香マーク2

SH-60K

FFR-31MR スーパーシルフ”雪風”

．．．唯一分かるのがSHしかない．．．

「なんだこれ．．．」

「さ、さあ．．．」

とりあえず説明文を．．．

翠芽

スイガと呼ばれる逆ガル翼の戦闘機です！とある世界の戦争請負会社の主力機ですが、今は主力の座を散香に受け渡しています。

対空+8

「対空は烈風並みか・・・」

「上々ね!」

「・・・すごいキラキラしてる」

んで・・・次は・・・

翠芽（クーガ隊）

とある世界の戦争請負会社のエース部隊、クーガ隊仕様の翠芽です！あのティーチャの初陣で隊長を務めた部隊でもあります！

空戦能力は最強レベルと言えます。

対空+20

命中+10

「俺こんな部隊知らない」

「私もです・・・」

「てかとある世界って何だよ・・・」

「さあ・・・」

次！

SH-60K

あ、こいつは知ってるからいいや。

次次!!

散香マーク2

とある世界の次期主力戦闘機です！形状は震電に酷似しています
が性能はその上を行っています！機動性は風車と呼ばれるほど高い
です。

対空+18

命中+6

「なかなか使えそうだな」

「そうですね・・・この子はどこに配属しますか？」

「今、五航戦に艦載機が行き渡ってないからな・・・」

「五航戦の配属ですかね？」

「そうなるな」

さて最後だな。

ええつと・・・

F F R—3 1 M R スーパーシルフ”雪風”

とある世界の双発複座の戦術戦闘電子偵察機。機動性は現存するどの航空機よりも上を行っていると云っても過言ではありません。

武装も強力なものを取り揃えてあります。

対空+40

命中+30

索敵+50

チートすぎい!!とか思ったが、資源消費量を考えればそんなにバンバン使えない・・・

「とりあえずこんなもんか・・・てか、10回分回したか？」

「その・・・途中失敗しちゃって・・・」

「あく・・・そういう」

「もう一回回す？」

「いや、このあと いそかぜ の演習も控えてるしな」

「そっか、がんばって！」

そういつて工廠を後にする。

「提督、さっそく演習はどうですか？」

「いそかぜ呼んでこないと・・・」

「私が呼びに行きます！加賀さんと演習に参加してよろしいでしょうか」

「ああ・・・いいけど、今回はいそかぜのデータ収集が目的だからな！あと、511も初演習だからビビらすなよ！」

最後のほうが聞こえてたのだろうか・・・走って寮に戻っていった。とりあえず俺は司令室に帰る途中に511に会ったので演習の内容を伝えるに司令室につれてきた。

「演習はなにをするの？」

「ん・・・まあ今回はいそかぜのデータ収集だからな・・・赤城達と

組んでいそかぜを攻撃するようになると思う」

「うん・・・分かった」

「緊張してるか？」

「ううん、大丈夫。ユーはいつでも準備できてます」

「そか」

511は司令室のソファ―に座ってお茶を飲んでいた。

てか、いつも思うんだけどここ司令室だからね!?お茶飲んでゆっく
りする憩いの場とかじゃないからね!?

そんなつつこみは置いといて演習の準備をしよう・・・

書類は・・・もう見なかったことにしよう。

そんなこんなで演習のお時間

「んじやいそかぜ、今日はお前単艦でほかはいそかぜに攻撃しろ」

「私一人ですか」

「まあ・・・お前の戦闘能力の収集と新型艦載機の試験もあるからな」

「分かりました」

「よし、じゃあ皆終わったら飯食いに行こうぜ!!」

「提督のおごりですか!？」

「え、なんで」

「ありがとうございます提督!」

赤城さん話聞いてない。

まって皆聞いてない。

「ありがとう提督」

「たまにはいいとこ見せるじゃん」

.....

「ああああああ!!もう分かった!おごってやるよ!!」

一応原潜撃沈の報酬が入ったしな。

まあ撃沈というかGUSHOHの解毒のおかげだが。

くいそかぜく

単艦・・・か。

がんばろう。

〈いそがせ、調子は大丈夫か?〉

「はい、全システムオールグリーン、対水上戦闘準備よし」

〈じゃあまずは主砲のみで敵機と戦闘だ。赤城、艦載機を上げろ!〉

〈了解しました!第一次攻撃隊、発艦してください!〉

赤城さんから艦載機が上がっていく。

私のデータベースにはない機体だ。

あがったのはたった4機の戦闘機。

「4機だけ・・・主砲、撃ち方はじめ!」

腕につけられた127mm砲が攻撃を開始。

だが・・・

「外れ・・・いや避けられた!」

先頭を飛んでいた黒豹のエンブレムが入った戦闘機を狙ったが簡単にかわされた。

〈すごい機動・・・だな・・・〉

〈私も艦載機を上げます〉

〈いや待て、いったん赤城の艦載機の性能を見よう〉

次こそは!

主砲を旋回させ、狙いを定める。

VTなら・・・

「主砲!撃ち方始め!!」

今度こそ直撃ルート・・・思ったが・・・

黒豹の機体は砲弾が通過するルート手前で急減速・・・コブラを行い砲弾をかわした。

「な、なんで・・・!?!」

イービスシステムを駆使しても主砲弾を当てることが出来ない。

〈いそがせ、CIWSの使用も許可する!〉

「了解!」

〈赤城、艦載機に攻撃命令を!〉

〈了解!〉

艦載機は私に向かって攻撃を開始しようとする。

「CIWS、AAWオート!!」

CIWSなら・・・

ものすごい轟音とともにCIWSが発射される。

だが、撃墜判定を出せたのは黒豹の随伴機だけだ。

自らの機銃弾と目標を監視して弾道を修正するCIWSの機銃すら簡単にかわして迫ってくる。

「くっ！」

次の瞬間、すぐ目の前に爆弾が着弾する。

「司令官、シースパローの使用を！」

「へうくん・・・許可する！」

「了解！」

これなら・・・絶対にはずさない!!

黒豹機は進路を変えてまた迫ってくる。

「今度こそ・・・シースパロー発射始め!!」

脇から一本の矢を放つ。

絶対に外れることはない。

レシプロ相手なら!!

「行け行け行け・・・！」

黒豹は迫ってくるミサイルに気づいて離脱するがミサイルはその背後を取って迫っていく。

そしてあと2秒ほどで着弾という距離で・・・

「・・・クルビット!?なんでレシプロ機が・・・」

なんとクルビットでミサイルをかわしてしまった。

そして敵機は真上・・・

「くっ・・・最大戦速!!」

逃げようと思った瞬間だった・・・

「キャアアアアアアアア!!」

演習用の爆弾が直撃・・・私は轟沈判定になった。

「そんな・・・」

私を撃沈判定にした黒豹は悠々と飛び、赤城さんに帰っていった。

私は・・・レシプロ機などと甘く見ていたのが仇になってしまった。

「うつ・・・うつ・・・ぐすつ・・・」

〈お、おいおい、泣くなよ〉

「だ、だって・・・」

〈ああ、よしよし、早く帰って来い。まだ演習始まったばかりだぞ〉

「はい・・・うつうつ・・・」

あの黒豹・・・ホントに何者なんだろうか・・・

そんなこと考えながら鎮守府にいったん帰ってきた。

エース・オブ・エイセス

「いそかぜ」

「はあ……」

思いつきりため息が出てしまう。

「元気ないわね、どうしたの?」

「あ、雷さん……」

「話なら聞くわよ!」

「はい……」

悔しすぎる……

私は……イージスなのに……

「演習で何かあったの?」

「実は……」

私はレシプロ機一機を撃墜できなかつたことを言った。

「ん……でもそれって仕方ないじゃない?」

「仕方なくなんてないです!私は……同時に100以上の目標を捕捉、攻撃できるイージスなんですよ!」

「私はイージスっていうのがよく分からないけど……でも撃墜だつて出来る時と出来ない時があるんじゃない?」

「私は……音速で飛ぶ戦闘機やミサイルを迎撃するために作られた艦なんです……それが……レシプロすら落とせないなんて……」

「でも聞いた話によると向こうはもの凄い機動だつたつて聞いたわよ?」

「それでも……」

「ああ!ちよつと!泣かないでよ!」

「こんなのじゃ……艦隊防空なんて務まらない……」

艦隊からだつて外される……

「いそかぜ」

「あ……司令官……」

「ちよつといいいか?」

いやな予感しかしない……

「何でしょうか・・・」

「おお!? 何で泣いてんだ!?」

「ううっ・・・」

「と、とりあえず、次は航空機の演習になったっぽいからお前待機な
!」

「え・・・」

それは・・・もう私は艦隊に必要なのだろうか・・・

「おわああああ!! さらに泣くなああああ!!」

「だって・・・だって・・・」

「ただの待機だからな! 別にさっきの演習がとかじやないからな!」

「ホント・・・?」

「ホントだからそんな目で見るなあああ!!」

く提督く

あく・・・ドツと疲れた・・・

いそかぜが涙目でおまけに上目遣いとかアカンやろ・・・

「てか・・・あの機体いったい何なんだ」

ミサイルすら軽がる避けやがる。

零戦（メビウス）が演習挑んでたけどどうなることやら・・・。

しかもまあ・・・ジェット機の連中まで勝負挑みおつてからに・・・

大人気ない。

ていうか、演習挑んだ理由が「イージスに勝ったくらいで調子のん
な!」って・・・

どっかのヤンキーかツ!!

「もう始まってんのかな?」

外から機銃の音やエンジン音が聞こえてくる。

「外行つてみるか」

建物を出て外に向かった。

「・・・なんじゃこりゃ・・・」

空中では2機の戦闘機がまるで踊っているかのようにドッグフア
イトをしている。

見物に来ている艦娘が口々に「綺麗」と呟いていた。

く零戦妖精く

どこの国の戦闘機か知らないけど・・・赤城艦載機に勝てると思わないですよ！

「メビウスー交戦！」

空中には私とあの黒豹だけ・・・

大丈夫、昨日入ったばかりのヤツにやられはしない！

「ふふ！遅い遅い!!」

ヘッドオン状態から突っ込んできた敵機をバレルロールでかわしインメルマンターンで背後を取る。

あとちよつと機銃の射程にはいる。

向こうは悪あがきでもしているのかお尻を振って機銃の射線から逃れようとしている。

そして・・・

「もうちよい・・・捕らえた!!」

私が機銃のトリガーを引くのと同時に向こうは高度をほとんど変えず機首を真上に向けるマニューヴァ・・・コブラを使い急減速する。

「えっ!!」

敵機は一瞬で私の後ろをとって来る。

「くっ・・・このっ!!」

このままでやられてたまるか!!

急減速しながら右にバレルロールを行う。

・・・が、まだ食いついたままだ

「まだついて来る・・・!!だったら・・・!!」

一気に機首を上げて上昇する。

だが、ほぼ垂直のためすぐに失速する。

「失速・・・よし!!」

失速と同時に機体がグルンと一回転したら機首が下を向く。

失速を利用したマニューヴァだ。

これでヘッドオンだ

さすがに無理でしょ・・・

く提督く

「・・・動画とってたか？」

「いえ・・・まったく・・・」

あの二機の飛び方はもはやサーカスと言つてもいいくらい綺麗な
ものだった。

「もうあれ・・・一機だけで大丈夫じゃないのか・・・？」

「それ私も思います・・・」

「じゃあ赤城の艦載機はこれからあいつだけな！」

「ええ!？」

なんてことしてると・・・

「てーとく、てーとく」

「ん?なんだ？」

「はいこれ」

「書類？」

燃料関連のものだった。

「どれど・・・ファツ!？」

「どうされました？」

「今すぐ飛行中止!!!演習中止イ!!!」

「どうされたんです？」

「これ見ろこれ!!」

「あら・・・」

そこには燃料消費量が1万とか書いてあつたのである。

おもにクーガ隊の航空燃料に・・・

どうも、かなり特殊な燃料らしくコストがかかるらしい。

一回の出撃で燃料2000はかかるとか・・・

「燃料が溜まったら飛ばせてやるから今は中止!!絶対中止いいいい
!!!」

燃料がほぼすっからかんになってしまった提督の悲痛な叫びが海
にこだましていた。

（電）

「あれ、今司令官さんの声が聞こえた気がするのです……」

「気のせいじゃない？」

「そう……ですか？」

「とりあえずこの燃料と、えつと……迷子……？」

「迷子……なのですか？」

北方海域に遠征中に保護した迷子を基地につれて帰るのです！

迷子

「……電さん？これはどちら様で……？」

「ゼロ、オイテケ！」

「え……えっと……」

遠征から帰ってきた電達が連れていたのはもの凄く見覚えのある子だった。

……北方棲姫じゃねえかああああああああああ
!!!!!!!

「……海に返して来い」

「で、でも迷子だったのです！」

「迷子で敵の姫クラス連れてくんなああああ!!!」

何で!?何で連れてきちゃうの!?

とツツコミしてもどうしようもないわけで……

「はあ……とりあえず空き部屋に連れて行ってやってくれ……敵意は無さそうだし……」

「りよ、了解なのです」

「お泊りお泊り！」

北方棲姫は電にやたら懐いているようだった……

とりあえず司令室に帰ろう……

「電、ソイツの面倒見てやってくれるか？」

「分かったのです！」

二人仲良く寮に向かっていった。

何も知らない艦娘に攻撃されなきゃいいけど……

く電く

「電、ゼロちようだい」

「ゼロ……?ああ、零戦なのです？」

「うん!ゼロ!」

「さ、さすがに無理なのです……」

北方棲姫は大事そうに黒い零戦を持っている。

勝手にあげたら司令官に怒られるのです……

「北方棲姫ちゃんはあそこで何してたのです?」

「えつとね、港湾棲姫お姉ちゃんと散歩してたんだけどはぐれちゃった!」

「あ、明るそうに言うのですね・・・」

「私、ホッポでいいよ!」

「分かったのです」

「電はなんて呼べばいい?」

「電でいいのです!」

「分かったー!」

なんていいながら歩いていると・・・

「あ、電さん、今度の演習なんです・・・が・・・」

「いそかぜさん・・・?」

いそかぜさんが凍りついていた。

アカンこれ、なのです!」

「て、敵襲!!電さんが人質にいいいい!!!」

「ちよ、ちよ!!いそかぜさん!!違うのです!」

「電さんを離せ!!」

「だ、だからあ!!」

いそかぜさんは愛用らしい9mm拳銃をこっちに向ける。

今話を通じないのですううう!!

「離さなければ撃つ!!」

「お、落ち着いて・・・えいつ!!」

「ごふう!?ぐつ・・・私が一体何をしたと言うんですか・・・」

「ご、ごめんなさいなのです・・・」

いそかぜさんの鳩尾辺りを殴って黙らせた。

・・・ごめんなさいなのです・・・

「ふう・・・さ、ホッポちゃん、起きないうちに行くのです!」

「はあい!」

この子元気なのです・・・

そのとき司令官さんから電話がかかって来る。

「もしもし?」

へあ、電。北方棲姫と司令室まで来てくれるか？ちよつと察だと不安で……」

「了解なのです！」

そういつて電話は切られる。

私は後ろに転がっているいそかぜさんを見てため息をついた。

起きたらきつと怒られるのです……

そんなわけで司令室

「司令官さん、入るのです」

「はいよ」

「ゼロ、オイテケ！」

「それ挨拶なのです!？」

とりあえず椅子に座る。

「ホツポちゃん、何か飲むのです?」

「ん……重油！」

「で、出来れば人間が飲めるもので……」

「え……じゃあ軽油!!」

「それ燃料なのです!!」

「電わがまま」

「これわがままなのです……?」

「はは……」

「司令官さんも笑ってないで手伝ってほしいのですうう!!」

「電……! ホツポ、焼酎飲みたい！」

「ようやくまともな……まともじゃないのです!？」

「焼酎! 焼酎！」

「ホツポちゃん何歳なのです!？」

「知らない！」

「知らないのです!？」

「なんか……カオスだな」

「だから司令官さん見てないで助けてほしいのですうう!!」

「まあ……焼酎だしてやればいいと思う……」

「いいのです? それいいのです!？」

何かもう疲れたのです・・・
焼酎をコップについて出してあげる。

「ん〜!おいしい!!」

「けっこうグビグビ行くのですね・・・」

「いい酒が飲めそうだ・・・」

「一緒に飲んじやだめなのです!!」

すると一瞬で酔ったのか分からないが顔の赤くなったホツポちやんが・・・

「んふ〜・・・電〜」

「ど、どうしたのです・・・?」

「姉ちゃん、ええ尻しとるのう・・・パンティ、オイテケ!」

「はにやつ!!?」

「・・・なんだこれ」

「だから見てないで助けてええええ!!」

ホツポちやん酔ったらおっさんになっちゃったのです・・・

「ウエヒビヒビ、口で嫌がってもアソコは正直だぜ?」

「口調変わってるし何かおかしいのですううう!!」

「へっへっへ・・・」

「司令官さん助けてええええ!!」

「え〜・・・これ助けろったって・・・ねえ?」

「ねえ?じゃないのですうううう!!!助けてええええ!!」

「ウエヒビヒビ」

なんてことしてる間に体を触りまくってくる・・・

「ホツポちやん、やめっ・・・そこ触っちゃダメええええ!!」

「おお・・・これは・・・また・・・」

「司令官さんなんでちよつとニヤケながら見てるのです!?なんでビデオカメラ用意してるのです!?!」

「だってお前・・・な?」

「な?じゃないのですうううう!!わ、私の貞操がどうなってもいいのです!?!」

「む、それはよくないな。よし、一線を越えそうになったら助けよう」

「一線越える前に助けてえええええ!!」

何気に体をがちり押さえ込まれて動けない・・・

てか、司令官さん録画してる!?

「ホ、ホツポちゃん!?す、スカート脱がそうとするのやめてええええ!!」

「・・・いいぞもつとやれ(ボソツ)」

「聞こえたのです!バツチリ聞こえたのです!!!」

「へへへへ、乳は無いけど尻はええのう」

「ホツポちゃんおかしいのです!!いろいろおかしいのです!!」

し、司令官さん助けてええええ!!録画してないで助けてええええええええ!!!

く提督く

ロリ×ロリ・・・最高だ。薄い本が広辞苑になるな。

「司令官さんんんん!!助けてええええ!!」

顔真つ赤&涙目・・・たまらn・・・つとそろそろ助けないとやばそうだな。

「ほらホツポ、もうやめろ」

「電、オイテケ!」

「どゆこと!?!ぐっふえ!!」

同時に殴られた・・・あ、これアカン・・・意識飛ぶ・・・

「し、司令官さんんんんん!!!」

「ん・・・いててて・・・ああ、クソ・・・」

何時間ぶつ倒れてたんだろう・・・

ふと周りを見ると、一通り満足したのか焼酎のビンを握っておっさんみたいに寝るホツポと・・・

服が乱れまくって完全に一線を越えて号泣中の電がいた。

電はそれでも俺の殴られた場所を冷やそうと氷の入った袋を置いていくれた。

「イテテテ・・・電・・・大丈夫か・・・？」

「うろうろう・・・ぐすつ・・・」

「ああ・・・よしよし・・・」

抱き寄せてやると・・・

「うえええええええええええん!!! いろいろ大事なものが失った気がするのですううう!!」

「よしよし・・・」

「もうホツポちゃん怖いのですうう・・・ぐすつ・・・うええええん・・・」

「・・・一体何された・・・」

「・・・言いたくないのです・・・」

「そ、そか・・・」

なんてことしてると・・・

〈〈警報！警報！所属不明艦を感知！距離30000!!〉〉

「不明艦?!」

急いで無線をかける。

「対水上戦闘用意！ハーブーン攻撃準備！」

〈〈了解！対水上戦闘よーい!〉〉

双眼鏡で相手を見ると・・・

「港湾・・・棲姫・・・!? 単艦だと!」

〈〈目標港湾棲姫！ハーブーン準備よし!〉〉

「攻撃少し待て！」

〈〈了解〉〉

よく見ると白旗を振りながらこっちに向かってくる。

一応、オープンチャンネルで話しかけてみるか・・・

「あく・・・港湾棲姫に告ぐ！こちらに向かう意図を明らかにせよ！現在、本鎮守府のすべてのミサイル照準は貴艦に向けられている！」

〈〈あ、あの・・・えつと・・・こ、攻撃の意図はありません!〉〉

「了解した。用件は？」

「あの・・・ホッポはそちらに居ますか?」

「ホッポ? あ、ああ、迷子で保護したが・・・」

「ああ! 良かった! 私は引き取りに来ただけです!」

「お、おう」

とりあえずいつでも撃てるようにだけはしておく。

「電、ホッポの迎えが来たから送ってやるぞ」

「お迎えですが・・・ぐすつ・・・」

「む、無理するなよ?」

「大丈夫・・・なのです!」

涙声で言ってくるが・・・

大丈夫かな・・・

「とりあえず背負って行ってやるか・・・」

というわけでホッポを背負って外に出る。

何気に臨戦態勢な艦娘も集まってきている。

「あ・・・お前ら、頼むから撃つなよ・・・?」

「大丈夫ネ!」

「大丈夫言いながら砲口向けてるよね君!」

「・・・今度こそ決着つけるネ・・・(ボソツ)」

「お前さっさと部屋帰れえええ!!!」

なんてことしてると・・・

「ようこそ、横須賀へ」

「あ、その・・・ホッポは・・・」

「あ・・・その・・・司令室で焼酎飲んで酔っ払っちゃって・・・」

「いつものことなので大丈夫です」

「いつものことなの!」

とりあえず寝てるホッポを引き渡し・・・

「あの・・・これつまらないものですが・・・」

「ん?」

「深海最中・・・おいしいですよ」

「あ・・・こっちはお土産ないが・・・あ、間宮の饅頭持って来てやってくれないか?」

「あ、そんなお構いなく！」

「いいのいいの気にすんな！．．．いい映像が取れたしな（ボソツ）」

ビデオカメラが無事&かなりナイスアングルで固定されてたのでいい映像が取れていた。

．．．俺の宝にしよう

「映像？」

「ああ、こっちの話」

そんなことしてるとまだ涙目な電が饅頭をもって来てくれた。

「んじやこれ間宮の饅頭。美味いぞ」

「すみません．．．何から何まで．．．ご迷惑を．．．」

「ああ、いいのいいの。まあ道中気をつけてな」

「はい、またいつか．．．」

「ああ」

本音はもう二度と会いたくない。

次会うときは絶対敵だし！！

そんなこんなでホッポを連れた港湾棲姫は帰っていった。

「はあ．．．疲れた．．．電、風呂入るか？」

「．．．入りたいのです．．．」

「んじや行って来いな。俺は部屋で待ってるよ」

「行って来るのです．．．えぐつ．．．」

「ま、まだ泣いてるのか．．．」

目を擦りながら風呂場に向かっていつていた。

．．．何かビデオ見るのに良心が痛んできた．．．

うん、やめとこう．．．また今度にしよう．．．

そんなわけで自分の部屋に帰ってのんびりしていた。

一応、仕事は終わったしのんびりするだけだな。

「まだ18時か．．．晩飯時だし、今日は食堂行くかな」

そんな予定を立てながら電の帰りを待っていた。

いそかぜの悪夢

いそかぜ

「リンク17解除、対水上戦闘・・・用意!!」

「水上戦闘用意」

「水上戦闘、ハーブーン攻撃始め、目標「うらかぜ」。発射弾数2発」
CIC内に響く鐘の音・・・戦闘が始まる音・・・

正直言つてこれが私の初実戦。

目標は・・・味方の艦。

やめると叫ぼうにも声が相手に届くはずもなく、システム的な邪魔もできない。

今CICの中にいるのは某国の対日工作員とそれに同調する海上自衛隊員・・・

「目標位置 33° 13' N 138° 41' E」

「ハーブーン発射用意・・・よし」

着々と味方に対して発射されるミサイルの情報が入力されていく。

今の私は強盗に襲われて縛られた人質みたいなものだ。

何もできない・・・たとえ出来ても殺される。

そんな状況だ。

「ハーブーン発射始め!!」

何で同じ日本人を攻撃できる。

もうここまで来ると私は相手が迎撃してくれるのを祈ることしか出来ない。

「一番発射用意・・・撃てえ!!!」

軽く船が揺すられ、ハーブーンが発射される。

レーダーにも表示される。

もうそこからはほとんど記憶がない。

呆然と画面を見ていたのは分かっている。

うらかぜは一発ハーブーンを撃墜するも2発目が命中・・・轟沈した。

乗員の生存者はほとんど居なかったそうだ。

「・・・いそかぜ・・・ユルサナイ・・・」

「ひっ!？」

何度となく私の前に頭から血を流したうらかぜが現れる。

「ごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい・・・!」

「・・・どうして・・・撃つたの・・・ユルサナイ・・・絶対ユルサナイ・・・」

そして うらかぜ はゆっくりと私のほうに歩いてくる。

・・・全身ボロボロの姿で。

「やめて・・・いやあああああああああ!!!」

うらかぜ は錨のような物を私に振りかざす。

「・・・いそかぜさん!!」

「やめ・・・あ、え・・・?」

「ど、どうしたのです!?!ものすごいなされてましたけど・・・」

「ハア・・・ハア・・・すいません・・・昔の夢を・・・」

「昔?」

「いえ・・・何でもありません・・・悪い夢です・・・」

ふと起き上がると病室だった。

「あれ・・・なんで私こんな場所に・・・」

「あ、えっと・・・廊下で倒れてたらしいですよ（棒読み）」

「そう・・・ですか・・・」

「元気ないのです・・・大丈夫ですか?」

「大丈夫・・・だと思えます・・・」

「あの、あとで司令官さんが任務があるので司令室に、と」
「分かりました」

とりあえず歩けそうなので立ち上がる。

あの うらかぜ の顔がまだ頭に残っている。

もう何回目だろうか・・・この夢をみるのは。

たまに千里馬艦隊事件の夢もみるが・・・

「司令官、入ります」

「お、来た来た。今日任務に行ってほしいんだけど大丈夫か?」

「任務・・・ですか・・・」

「海上護衛なんだけど……タンカーを守ってくれて依頼が入ってて」
「分かりました。編成は？」

「お前と……あとは雷と響の3人だな」

「了解しました」

「あ、そうそう」

「？」

司令官は一枚の書類のようなものを取り出す。

「これ、お前積んでなかったろ？」

「これ……？」

それは……

ハーブーンだった。

「ハ、ハーブーン……」

「お前さん、ハーブーン積んでなかったしな。この際……」

「い、いや……」

私の脳内にあの光景がフラッシュバックする。

「いそかぜ……ユルサナイ……ユルサナイ……!!」

「うわあああああああ!!!」

「い、いそかぜ!?大丈夫か!!」

「いやあああああ!!!」

「おい!!」

そこからの記憶がない。

気づけばまた病室だった。

「お?起きたか。大丈夫か？」

「……はい」

「いったいどうしたんだ？」

「作戦は……」

「え？」

「作戦には……参加できません……」

「いやまあ……そりゃ護衛任務は明日だから大丈夫だけど……」

「すみません……」

「いったいどうしたんだ?あんなに錯乱して……」

そうか・・・司令官は知らなかったんだ。

「・・・お話します・・・」

「無理はするなよ」

「はい・・・」

私は過去にあつた話をする。

・・・いそかぜ事件の話を。

「・・・でもそりゃ、先代のお前だろ？何で・・・」

「私は・・・その いそかぜ を引き上げて作られたんですよ・・・？
もちろん、そのときの記憶だってあります」

「そう、だったな」

「司令官・・・」

「おわっ!？」

思わず抱きついてしまう。

泣きながら。

「私は・・・怖いんです・・・ずっと夢にでる うらかぜ が・・・それ
れに・・・また味方に砲口を向けてしまいそうで・・・」
「・・・」

司令官は黙って頭をなでていてくれた。

「すみません・・・もう少し・・・このままで・・・」

「ああ」

少したったら落ち着いてきた。

いつまでもこのままではいけない。

「すみません・・・そろそろ明日の準備をしてきます」

「ああ、明日は頑張れよ」

「はいー」

「あ、そうそう、VLS発射型のトマホークあるんだが・・・それなら
大丈夫か？」

「はい、それなら・・・」

「んじや工廠で装備して試し撃ちでもしてきなさいな」

「はい、ありがとうございます」

私が病室を出ようとしたとき、何だかものすごい笑顔なのにドス黒

いオーラをまとった電さんとすれ違った。

小声で許さないみたいなこと言ってた。怖い。

「あ、電。明日俺ちよつと出張に・・・あれ、何でそんなに笑顔なんですの？何でそんなに青筋浮かべてるんですの!？」

「・・・司令官さん、ちよつと裏まで来やがれ、なのです」

「え、待って・・・あ、ちよ、その関節はそっちに曲がらっ・・・ぎやあああああああああ!!!」

「なのです♪」

「ちよ、まっ・・・」

メキヨツとか言う音が病室から聞こえてきたが怖いのでそそくさと工廠に向かった。

↳翌日↳

「テ、テートクウウウウ!!!」

そんな金剛さんの絶叫で目が覚める。

驚いて声のしたところへ向かうと・・・

「し、司令官・・・」

花壇に頭だけ埋まり逆立ち状態の司令官の遺体(?)があった。

何故、頭だけ埋まってしかも体は気をつけの状態で固定されてるのが謎過ぎる。

「と、とりあえず引き抜きましよう!!」

「そ、そうネ!」

引き抜くと・・・

「・・・死んでる」

「テートクウウウウ!!!」

死んでいた。

「そ、そうネ!メディックを!!」

「でもそんなのどこに・・・」

ふと上を見上げると・・・

「え・・・誰あれ・・・」

パラシュート降下してくるグラサンつけた黒人米兵が・・・
彼は降り立つと救急箱のようなでっかい箱を司令官の横にほうり
なげ除細動器のようなもので・・・

「クリア!!」

司令官の体に押し当てる。

すると・・・

蘇生 100

分隊蘇生 20

とかいうテロップなようなものが出てきた。

意味が分からん。

でも司令官は復活したようだった。

「うっ・・・お、俺は・・・」

「テートクウウウウ!!!」

「おわああ!!」

「死んじやったと思ったヨー!!!!」

「おれ自身死ぬかと思った・・・」

いえ、死んでましたアナタ。

瞳孔開いて心臓止まって呼吸止まってきました。

「ゴリ・・・すまない」

ゴリと呼ばれた黒人米兵は親指を立てて走ってどっかに行つてしまつた。

「・・・司令官・・・昨日電さんに何されたんですか・・・」

「・・・言うな・・・」

司令官は青ざめていた。

目撃者によれば終始、ものすごい笑顔の電さんがボコボコにした司令官を埋めてさっきの状態にしたとか・・・

怖い。

「仲直りは出来たんですか?」

「・・・あとでしてくる・・・」

そういうながら司令官は電さんのいる寮に向かっていった。

「……ていうか、さっきの除細動器で復活したのはいいけど外れた関節とかまで元通りになってません!？」

「そんな話を金剛さんにすると……」

「ああ、あの米兵さん、ヘッドショット食らおうが戦車に轢かれようがトマホークの直撃食らおうがあ除細動器と救急パックで一瞬で治療できるって凄腕ネ」

「え、ええええええ……」

「凄腕とかいう問題じゃない。」

「とりあえず私は装備を整え、司令室に向かう。」

「司令官、入ります」

入ると……

「し、司令官さん……あの……本当にごめんなさいなのです……」

「あ、うん……大丈夫……誤解けたならいいの……」

泣きながら司令官に謝っている電さんがいた。

「……誤解であそこまでされたのか……」

「あ、いそがせ、今日の作戦は1200までに出発、タンカーに合流してくれ」

「はい、分かりました」

「特にこれといって説明することはないから……頼んだぞ！俺はちよっと近場のブラック鎮守府を殲滅に……あ、いや視察に行くから司令官代理は電だから」

「了解しました」

「雷さんや響さんを探さないと……」

「あ、二人なら待機室にいるから」

「了解です」

さて……気合入れて頑張ろう。

私は待機室に向かって歩き出す。

「……まだ私の頭の中には傷だらけで血まみれのうらかぜの顔が残っていた。」

ブラ鎮死すべし慈悲はない

司令部じきじきの命令でブラ鎮司令官暗さ……指導に来た。
一応視察が行くとは伝わってるらしいがその場しのぎすらする気がないらしい。

艦娘はボロボロで動き回っている。

「こりやひどい……」

「ひどいですね……」

一緒に視察に来た呉の天音提督と司令部に向かう。

司令室の前まで来るとやたら中が騒がしい。

耳を澄まして聞いていると視察は明日来ると勘違いしていて、今うち逃げようとしていた。

よし、いきなり入って驚かせよう。

「おやおやおやく？引越しの準備とはご精がでますね、中将殿」

「なっ!?し、視察は明日だって……」

「残念でした、今日ですよ」

中将は冷や汗を流しながら後ずさる。

すると苦し紛れに……

「ちよ、ちよつと待て、飯でも食って話し合おう。そうすりやどんなアホでも……」

往生際悪いな……

と思っていたら天音提督が中将の顎に蹴りを入れていた。

ミニス力姿で顎に蹴り入れるとは……。

そんなことより……くそっ……ここでは後姿しか見えん……！

あとで中将から何色だったかを聞いておこう。

しかしブチギレモード(?)の天音提督は……

「祈れ、今お前が生きてるうちに出来るのそれくらいだ」

「キャラ変わってる……(小声)」

聞こえたら殺されそう。

すると天音提督、どこから持ってきたのかガソリンの入った缶と

バッテリーのようなものを準備する。

・・・あんだここ吹っ飛ばす気か・・・

「提督さん、手伝ってくださいー!」

「お、おう」

中将と椅子に縛りつけ口をふさいでおく。

その間に天音提督は笑顔でガソリンをばら撒いていた。

あと何かの装置をつないだ車用バッテリーをまだ油が出ているガソリン缶の横に置いた。

「さ、行きますよ」

「んー!!!」

中将は鼻水と涙をポロポロ流して命乞いっぽいことしてた。

・・・僕はいろいろ設置してないので知りません。

「あ、提督。これどうぞ」

「なにこれ」

「スイッチです♪」

「おうお前、俺に汚れ仕事させる気か」

「お願いします♪」

ちなみにこのお願いしますは笑顔で言ってるが目笑っていません。
かっつ。

すごく怖かったです（小並感

「とりあえず司令部に指導できたと伝えるかな」

「そうですね」

「んじや電話かけてくるわ」

「了解です」

今頃司令室でガクブルなブラ鎮司令官を思い浮かべると少し可愛そうになってきたがこれも仕事だ仕方ない。

☆ちなみに司令部から暗殺命令なんて出てないお☆

「もしもし」

〈大佐か。どうだ?〉

「いまから面白い物聞かせてあげますよ」

〈面白い物?〉

ポチつとな☆

ものすごい爆音と共に司令部が吹っ飛ぶ。

〈…そりゃクールだな〉

司令官は爆死、艦娘は呉鎮守府で保護となった。

「さて、仕事も終わったし飯くいにも行くか？」

「行きます！」

「おっし！」

くいそかぜく

〈こちらシユガート級輸送艦、護衛感謝する。こっちは可燃物満載だ、鎮守府まで頼むよ〉

「了解です。武装はありますか？」

〈へいや、僚艦のゴードンと共に武装は無しだ〉

「了解しました」

今いるのは横須賀沖合いの海上、見晴らしはかなりいい。

天候も快晴だ。

「いい天気だなく、海水浴したいわ！」

「雷、任務中だよ」

「ちえく…響の石頭…」

「け、喧嘩はダメですよ…」

〈へいそかぜさん、雷お姉ちゃんが迷惑かけてたらごめんなさいなのです…〉

「め、迷惑なんて掛けてないわよ！」

微笑ましい姉妹なこと…

そのときふとレーダーを見るといつの間にか敵潜水艦を補足していた。

「敵の潜水艦を発見！」

「駄目だ！」

〈ネガティブ！〉

「ダメですか…って、本当にいるんです!!」

〈へおいおい、これは一種の儀式だろうが〉

「く、口が勝手に・・・動いちやったわ・・・」

「え・・・ええく・・・」

とりあえず気を取り直して・・・

「敵潜・・・本艦隊を取り囲む形で布陣しています。数10。現在停止しています」

「先制攻撃掛ける?」

「先制攻撃です、まず私が遠くの4隻にアスロックを発射します、残り私が誘導しますので撃破を」

「了解」

「任せて!もつと頼つていいのよ!」

雷さんは袖をまくり気合を入れていた。

「久々に潜水艦狩りだね」

響さんは何か黒い笑みが出ていた。

怖い。

「VLA開放・・・アスロック発射始め!」

4発のアスロックが白い尾を引き空中に撃ちだされる。

「雷さん、響さんは各3隻ずつお願いします」

「了解」

「了解!」

二人が分かれて潜水艦に向かっていく。

「雷さん、進路230に変更したら連絡を、響さん、進路そのまま、6秒後に爆雷を投下してください」

私の積んであるシステムがあれば機関をとめて潜んでいる敵潜なんて一瞬で見つけられる。

またそれに味方を誘導するなんて朝飯前だ。

「アスロック・・・命中!」

いつきに4隻の反応が消失する。

〈へてー!〉

〈y pa!〉

二人も攻撃を始めた。

ものの数分で敵潜水艦は全滅する。

〈へーんか、手ごたえないわね〉

「あ、あはは・・・強いと困るのは私たちなんですけどね・・・」
なんて話していると突然LINK17という表示が出る。

「ん？リンク17？」

表示を見ると・・・

DD URAKAZE

「う・・・うら・・・かぜ・・・」

〈どうしたの？〉

「やだ・・・うそ・・・」

〈だ、大丈夫!?〉

私の頭の中にあの血を流したうらかぜが出現する。

「いそかぜ・・・ユルサナイ・・・沈め・・・冷たい海に・・・！」

「やだ・・・やだ・・・いやああああああああああ!!!」

〈へいそかぜさん！落ち着いて!!〉

「いやああああああああああ!!!」

私はそのまま気を失った。

うらかぜ

くいそかぜく

「ハーブーン発射始め！」

「一番発射用意・・・撃てえ!!」

またこの夢・・・

「いそかぜ・・・ユルサナイ・・・」

そして血まみれのうらかぜ・・・

もう嫌だ・・・

「もう・・・いや・・・やめて・・・」

うらかぜはゆらゆらと迫ってくる。

その手には76mm速射砲が握られている。

その砲口はもちろん、私を狙っている。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・！」

ゆっくりと砲身がこちらを向く。

ああ・・・私もここで沈むのかな・・・

でも・・・こんなに苦しいなら・・・もういいかな・・・

「いそかぜ・・・」

しかしいつまでたっても砲撃はされない、不思議に思い目を開けるとそこには・・・

「いそかぜ・・・もういいんだよ・・・苦しまないで」

「うら・・・かぜ・・・？」

そこにいたのはあのうらかぜじゃない、在りし日の凛々しいうらかぜだった。

「あそこで攻撃を止めれないのは私でも分かってたよ。あれは仕方なかったんだよ」

「でも・・・私は貴女を・・・！」

「いいんだよ、もう苦しまないで」

「でも・・・でも・・・！」

なんで私の意識の中にあのうらかぜがいるのか不思議だった。うらかぜは私をそっと抱き寄せ・・・

「お願い・・・もう苦しまないで」

そしてうらかぜは続ける。

「・・・私を・・・沈めて」
「!？」

「私ね・・・あの後・・・深海棲艦になっちゃった」

「そんな・・・やっぱり私のせいで・・・」

「ううん、違うよ。あなたのせいじゃない。貴女がトリガーを引いたの？」

「それは・・・」

「悪いのはヨンファ。それに貴女はその後、ヨンファを自らの手で葬ったじゃない。私の仇・・・いや、その事件で沈んだ味方の艦の仇をとってくれたでしょ？」

「・・・」

「ね？だから苦しまないで。それと・・・私は深海棲艦のままで居たくないの。だから・・・お願い」

「出来ないっ・・・！」

「出来るよ、あなたは強いんだから」

「私は強くなんか・・・」

「ううん、強い。だから・・・早く・・・もう貴女たちを照準に収めてる・・・いま、貴女の僚艦を狙ってる・・・」

「そんな・・・でも・・・！」

「お願い・・・起きて」

「・・・」

「貴女は・・・イージス艦でしょ！護衛艦でしょ!!海上自衛隊なんですよー仲間を護れなくてどうするのー!」

「ツ・・・！」

「ね？だから・・・」

「うああああああああ!!!」

その瞬間意識が戻る。

「うわあ!?!起きた!?!」

「敵艦は・・・!?!」

「左30度、戦艦ル級」

「トマホーク攻撃始め!!!」

ル級に向けて一斉にトマホークを発射する。

「・・・うらかぜ・・・ごめんね」

「戦艦ル級・・・轟沈!」

「残りはいますか?」

「いや・・・これだけだよ」

「了解しました・・・」

私は沈んでいくル級に左手で敬礼を送った。

「?」

「どうして敬礼送ってるの?」

「・・・いえ・・・体が勝手に動いただけです」

「帰りましょ!疲れちゃったわ」

「そうだね、お風呂に入りたい」

〈へおいおい、護衛は忘れないでくれよ〉

「輸送船を引き連れて帰還します。速力20ノットで航行しましよ
う」

「了解」

「りようかーい!」

「ん?あれなんだい?」

「あれ?」

響さんがさつきまでル級がいた場所を指差す

「え・・・まさか・・・」

「どうしたの?」

「ちよ、ちよつと見てきます!!」

「え、ちよっ!」

私は全速でその地点に向かう。

あれは・・・

「うらかぜええええええ!!!」

海上に浮かんでいるの気を失ったうらかぜだった。

「うらかぜ・・・うらかぜ・・・!」

「ん．．．んん．．．あ、あれ．．．いそかぜ．．．？」
「よかった．．．よかった．．．また会えた．．．！」
「あ、あれ．．．私．．．さつき会った気がする．．．」
「うん！さつき．．．さつき会ったよ！」
「ん．．．どこで会ったかしら．．．」
「とりあえず帰りましょう！」
「そうね、でも何だか不思議ね」
「起きたうらかぜは引つ張って帰路につく。
よかった．．．うらかぜが助かって．．．
私は泣きながら海上を走っていた。」

く電く

司令官さん居ないときびしいのです．．．
それよりさつきこの辺で有名なブラック鎮守府が司令官ごと爆破
されたって聞いたんですけど．．．
やったのが司令官さんじゃないこと祈るのです．．．
「指揮官って結構疲れるのです．．．」
司令官さんの机に座っていろいろしていると疲れるのです．．．
司令官さんもこんな感じなのかな。
「あ．．．！帰ってきたのです！」
まどの外には輸送船といそかぜさん達が見えた。
ただ一人増えている。
「あれ、一人増えたのです？」
とりあえず外に出て艦隊を出迎える。
「おかえりなさいなのです！」
「ただいま電！」
「うわっ！雷お姉ちゃんいきなり抱きつかれるとびっくりするのです
！」
「えへへく、スキンシップ！」
「いそかぜさん、その方はどなたなのです？」

「あ、えっと・・・」

「護衛艦うらかぜです」

「うらかぜさんですか・・・よろしくなのです!」

「あ、うらかぜ。鎮守府は案内します」

「よろしく!」

いそかぜさんとうらかぜさんは手を繋いで鎮守府の奥に走っていった。

・・・あれ、いつの間にかデキてるのです!?

「とりあえず補給の用意は出来てるのです」

「ありがとうございます、先にお風呂入りたいな」

「了解なのです!」

私もお風呂入りたいのです・・・

それより司令官早く帰ってきてほしいのです!!!

少女の絵本

ブラ鎮爆破・・・指導も終わり、鎮守府に帰ってきた。
すると鎮守府の門の前に一人の女の子が・・・

「ん？お嬢ちゃんどうしたんだ？こんな場所で」

「あ・・・えつと・・・パパがここにいろつて・・・」

「パパ？」

「ここなら・・・拾ってくれるつて・・・」

「・・・捨て子・・・か・・・」

見た感じ、10歳くらいだ。

いくら一般人でもほつとくわけにはいかない、保護しないと

「そか・・・とりあえず中へおいで」

「うん・・・」

「しかし・・・その服サイズあつてくないか？」

「その・・・家は・・・お金なくて・・・」

「・・・」

戦争の影響で地方部の一部は極貧状態になっている箇所が多数ある。
たぶん、そこから来たんだろう。

「お父さんとお母さんは？」

「どこかへ行くつて・・・遠いところつて・・・」

「・・・すまん」

「・・・すまん」

たぶん失踪だろうな。生存は絶望的だ。

「あ、司令官さん！お帰りなさいなのです！あれ、その子はどうしたのです？」

「ただいま、電。さつき鎮守府前に置いていかれてたのを保護したんだよ。たぶん両親は失踪・・・生存は絶望的だろうな」

「そう・・・ですか・・・」

「うちで養つてやればいいさ、子供一人養えるくらいの物量はあるよ」

「了解なのです！」

「そだ、いそかぜはどうしてる？」

「あの・・・それが・・・」
「？」

電はものすごい言い難そうな顔をしている

「実は・・・うらかぜさんもうち所属になって・・・それからちよつと・・・」
「え、また現代艦増えたの・・・？」

「いや・・・そこじゃないのです・・・」
「じゃあ何だ？」

「それが・・・その・・・デキちやったみたいで・・・」
「フアツ!？」

まさかの百合カップルですか!?

・・・そそる (ry

「それで・・・今お部屋なのです・・・」

「と、とりあえず・・・この子の面倒を任せてくれないか・・・？」

「りよ、了解なのです!」

電に女の子を預け、司令室に向かった。

く電く

「お姉ちゃん、名前なんて言うの？」

「私ですか？電なのです!」

「いなづま・・・さん？」

「呼び捨てでいいのです」

「うん!分かった!」

「そつちはなんて言うのです?」

「私は佳織だよ!」

「佳織ちゃんですか、よろしくなのです!」

なぜか私と歩いていると突然元気になる。

大人の人が苦手なんだろうか・・・

いろいろ話しているうちに部屋に着く。

すると中から・・・

「ハアハア・・・あつ・・・うらかぜ・・・そこ、ダメ・・・です・・・!」

「えへへ、いそかぜってこんな所が弱いんだ」

「あツ!!ダメ・・・!!」

.....

「聞いちゃダメなのです・・・」

急いで耳を塞ぐ。

健全な子供には聞かせられないのです・・・

「あはは、手がべとべとく、ちよつと洗ってくるね!」

「ハア、ハア、ハア・・・う、うん・・・」

「えへへ、可愛い」

そんな会話が聞こえたと思つたらドアが開いた。

「あ、あれ!?電さん!」

「・・・うらかぜさん・・・」

一応うらかぜさんは服を着ていたが・・・いそかぜさんは・・・もうR-18タグつくのです・・・

ちなみにうらかぜさんは雷お姉ちゃんによく似ている。

この前本人が、「まあ、私つて護衛艦「いかづち」だs」といいかけたところでいそかぜさんが急いで口を塞いでいた。

いそかぜさん曰く「関わつたらいけない大人の事情」らしいのです。

「あ、あはははは・・・と、ところで電さん、この子はどうしたんです?」

「あ・・・お二人に預かつてほしかったんですけど・・・不安に・・・」

言い切る前に・・・

「可愛い!!!いそかぜ!見てみて!!」

「ち、力・・・入らないですううう・・・」

「もう・・・」

「と、とりあえず・・・お預けして大丈夫なのです・・・?」

「任せてください!」

そういつてドアを閉めた。

・・・ものすごく不安だ。

そつちの世界に入らない事を祈るのです・・・

くいそかぜく

うう・・・まだ何だか余韻が・・・

でも小さい子の前・・・服は着とかないと・・・

「うわく・・・お姉ちゃんたち美人・・・」

「え、そう？いいこと言うねー!」

「ねえお姉ちゃん、本の読み聞かせしてほしいな」

「うん、いいよ。どんな本？」

「えつとね、これ!」

差し出されたのは「新訳 桃太郎」だった。

・・・なんだ新訳って。

ものすごく内容が気になる。

「これを読めばいいの？」

「うん!」

「うらかぜが読みますか？」

「任せて! 私読み聞かせ得意なのよ!」

そういつてページを開く。

「むかしむかし・・・」

※ここからいそかぜの心の声は【】で表示されます。

昔々あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山に芝刈りに。

おばあさんは川に昨日屠った鬼の返り血を洗いにいきました。

【おばあさん強いなオイ!!!

何で鬼屠れるんですか!!

桃太郎いらないでしょ!!

と、心の中で突っ込みをした】

すると、大きな桃が川上から流れて来ました。

おばあさんは。

「じいさんのクソみてえにデケエ桃だな」

と言いました。

【おばあさん口悪いな!!】

・・・これ突っ込み無しには物語を聞けない気がする・・・
ていうか、なんで うらかぜ は突っ込みのひとつもないんですか
!?

でも、女の子は楽しそうに聞いているので声に出しての突っ込みは
やめておいた。

・・・声に出して突っ込みたい・・・】

「しかたねえ、ジジイにも食わせてやるか」

おばあさんは大きな桃を担いで持つて帰りました。

桃の総重量は40kgを越しています。

【おばあさん強靱すぎるでしょ!!!】

若々しいですね、おばあさん!!】

「早く帰ってこないかなじいさん」

するとおじいさんが返つて来ました。

おじいさんはたまたま仕留めた獲物のプレ○ターを持つて帰つて
来ました。

【なんでおじいさんプレ○ター仕留めてるんですか!!】

もうこれおじいさんとおばあさんだけで鬼が島壊滅できるでしょ
!!

・・・もうダメだ・・・声に出して突っ込みたい・・・】

「今帰ったぞ。今日はいいものを捕まえた」

「おかえり。川で大きな桃が取れてねえ」

おばあさんは突然温和な口調になりました。

猫かぶつてます。

【・・・本が突っ込み入れるですか!?!】

「お、その桃はどうしたんじや?」

「おいしそうな桃だったからねえ・・・べ、別にアンタのために取って来たわけじゃないんだからねっ! たまたま流れて来たから持って帰っただけなんだから!」

おばあさんはこの歳でツンデレです。キツイです。

【・・・ああ、もう疲れた・・・】

突っ込む気力が削がれる・・・】

「どうじゃ、食べてみんか」

「そうですね、では・・・チェストオオオオオオオオ!!!!!!」

おばあさんはあの赤鬼を屠った伝説の手刀で桃を!半分!に割りました。

すると中から可愛い赤ちゃんが出て来ました。

「おぎやあ!! (低音)」

ものすごい低音で泣く赤ちゃんが出て来ました。

「おやまあ! ものすごい低音の赤ちゃんですね!」

「こりやたまげた! 低音だ!」

おじいさんとおばあさんは低音ばかり気にしてました。

赤ちゃんはほったらかしです。

「この子は桃から生まれたから桃太郎と名づけましょう」

「そうだな、桃太郎がいいな」

子供がいなかったおじいさんとおばあさんは桃太郎をそれは大切に育てました。

おばあさんは料理や家事を教え、おじいさんは銃火器の扱い方、近接戦闘術、兵器の操縦方法をみっちり教導しました。

「いいか桃太郎! これから語尾にはサーをつける! 分かったか!!」

「Sir, Yes sir!」

「声が小さい!!」

「sir, yes sir!!!」

「よしー!」

おじいさんはどこぞのハート○ン軍曹です。

桃太郎がすすくと育ちました。

もう一人前の海兵隊員です。

【もうダメ突っ込む。

・・・桃太郎じゃないんですか!?海兵隊員なんですか!?】

「おじいさん、おばあさん、私は今から鬼退治に行つてきます」

「鬼が島へ行くのかい?」

「やめなさい、命がいくつあつても足りないよ」

「私は鬼達の悪さを止めたいのです。」

おじいさんとおばあさんは桃太郎の熱い思いを受け入れました。

「仕方ない、行くがいい。じゃが、生きて帰つてくるんじやぞ」

「大丈夫です。私には・・・護るべき人が居ますから。」

桃太郎はその思いを胸に武器を取ろうとしています。

おじいさんは桃太郎のために知り合いのガンスミスにお願いして
M92F Inoxカスタム、通称ソード・カトラスを二丁用意しま
した。

桃太郎はこの後、トゥーハンドとして恐れられることになります。

おばあさんは、吉備団子を作るのがめんどくさかったので近くのコ
ンビニからカロリーメイトを買って来ました。

江戸時代より前なのになんで拳銃とかコンビニがあるのか不思議
です。

【それ私も不思議だし、なんで本が内容に突っ込みいれてるのかも不
思議だし、これ小さい子向けの絵本って事忘れちゃいけない。

と、私はそろそろ冷静に突っ込みを入れだす。】

桃太郎は家を出て、鬼が島へどんどん進んでいきます。
すると途中で犬に出会いました。

「桃太郎さん、桃太郎さん、立派な獲物ぶら下げて狩りでも行くのかい？」

「ああ、今から鬼を狩りに・・・な」

「へっ・・・それなら俺も連れて行ってくれ」

「ふむ・・・いいだろう、カロリーメイトでも食べてお供になってくれ」

桃太郎は葉巻を吸いながら犬にカロリーメイトを差し出します。

「うますぎるッ!!」

「さあ、鬼が島へ行こう」

桃太郎はズンズンと進んで行きます。

すると今度は猿に出会いました。

「ああ、神様・・・助けてください・・・」

猿は桃太郎に助けを乞います。

「悪いが神は留守だ。休暇取ってベガス行ってる」

「ではあなたでいいんです。鬼達を駆逐したい・・・一匹残らず!!」

「じゃあ俺のお供になりな」

そういつて桃太郎はカロリーメイトを差し出します。

「もつと食わせろ!」

「さあ、先に進もう」

【なんで桃太郎は葉巻吸ってるの。なんでちょっとハードボイルドっぽいんですか。

ちなみに横の女の子は目をキラつかせて聞いている】

先にすすむとキジに出会いました。

「メーデーメーデー!!くそっ!落ちる!!」

「ああ!ジャン・ルイがやられた!!」

「落ち着けジーン!指揮を引き継ぐんだ!」

上にはキジが数匹飛んでいました。

その中の一匹が落ちてきたようです。

ワシと戦っているようです。

「キジ、大丈夫か」

「無理……だな、電気系統がイカれてるんだ。キャノピーが飛ばねえ……イジエクシオンシートもたぶんダメだ」

完全に作品を間違えているキジです。

【それ私のセリフです】

「これでも食べる。傷が治る」

キジにカロリーメイトを与えても元気になりません。

桃太郎は仕方ないので手持ちの高速修復剤を掛けました。

「上々ね」

するとどうでしょう、みるみる傷が治りました。

【なんでさりげなく艦娘要素でてるんですか。

もはや、突っ込みすぎて続きが気になってきた】

「さあ、鬼が島へ行こう」

桃太郎たちは山越え谷越え、国境を越え、鬼が島に到着しました。

鬼が島はアメリカ国籍です。

【なんでアメリカ国籍なんですか!?

あれ瀬戸内海にないんですか!?

鬼が島に入るためには大きな門を開けなければなりません。

「さて、と。どうする」

「俺が上から偵察する。犬と猿は狙撃班だ」

犬と猿にギリ―スーツを着せ、M21狙撃銃を持たせました。

刀じゃないんですね。

【なんでさりげなく銃が出てきてるのかももう違和感がなくなつた。

もはや普通に感じて来ました・・・」

「庭内クリア。桃太郎、行けるぞ」

「よし、扉を爆破する」

桃太郎は扉を吹き飛ばし、大穴を空けました。

これも桃太郎じゃないですね。

【ついには作品否定しました!?!】

「皇国の興廢この一戦にあり！」

「урааааааааааа!!」

なぜかみんなロシア語でした。

非国民ですね。

【だんだん辛口になる本に面白さを覚えてきた私は異常ですか?】

騒ぎに気づいた鬼が集まってきます。

ですが、重武装の桃太郎の敵ではありません。

しかしひととき大きな鬼が出て来ました。

「フハハハハ!!ガキが一人とはな!!見よ!俺様のこの銃を！」

鬼は自分の銃の自慢を始めます。

「バレットM82をベースにセミ、フル切り替えつき、M2用のベルトリンクが使用可能!さらに下部にはダネルMGLを追加!世界広しといえど、こんな銃を撃てるのは俺様だけよ！」

鬼が銃を持つてる時点で作品崩壊が始まっています。

それ以前に最初から崩壊していますのでご安心を。

【ついに作品崩壊を認めましたよこの作者】

「うるせえ!!聞いてもねえのにベラベラしゃべりやがって・・・お前はテレビ伝道師か!!」

むかついた桃太郎は鬼の腹に一発撃ちこみました。

「ぐっ……卑怯な……」

「卑怯？あのかな、いいこと教えてやるよ」

桃太郎は鬼の上に馬乗りになりました。

額に銃を突きつけます。

「こんなモンはな、撃つて当たりやいいんだよ！」

「ぐっ……！」

「勉強になったな、それじゃ、死んだお仲間によろしく」

容赦なく鬼を射殺しました。

その後攻略はどんどん進み、ついにはボスもボコボコにしました。

「ひ、ひい……!!い、命だけはお助けを……もう悪さはしません!!」

「そうか、それなら命だけは助けてやろう」

桃太郎はボスから去ろうとして振り向いてこう言いました。

「……と、約束したな？あれは嘘だ」

「うわああああああああああああああああ!!」

ボス鬼に向けて弾倉に残ってる弾を全弾叩き込みました。

えげつないです。

【これ小さい子向けですよね!?不安になってきたんですけど!!】

「というわけで村に平和が訪れました」

「わー！お姉ちゃん本の読み聞かせ上手ー！」

「えへへ、そう？」

「……いろいろすごすぎです」

「お姉ちゃん！次はこれ読んで！」

「うん！いいよ！」

タイトルは……

「桃太郎VSプレデター season1」

「もうやめてええええええええええええええええええ!!!!」

そんな悲痛な叫びが部屋に響いた。

〈提督〉

「ん？なんかいそかぜの悲鳴が聞こえなかったか？」

「きつと部屋でお楽しみなのです……」

「あの子置いてきて大丈夫なのか……？」

「た、たぶん……？」

「あ、そうだ。それより次の作戦なんだが、キス島撤退作戦だ」

「キス島ですか……」

「ああ、早く救助しないと兵士達の体力が持たない」

「そうですね……開始はいつなのでしょう？」

「明日だ。編成は第六駆逐隊と不知火、島風だ」

正直、電達をこの海域に送りたくないが……一番練度の高い艦娘なので攻略に必要不可欠になってしまう。

「電、すまない。明日は頼む！」

「……司令官さん、行く前に……したいのです……」

「電……」

電は頬を赤く染めて近寄ってくる。

「だ、ダメだ……ここは一応司令室なんだぞ」

「今は……誰もいないのです」

「……電、いいのか……道具はないが……」

「今日は……その……大丈夫なのです」

「い、いいのか……？」

「そ、そういつてるのです」

電はさらに近寄ってくる。

電の女の子らしい甘い香りが漂ってくる。

「司令官さん……んっ……ちゅっ」

電はキスをしてくる。

もう何度目だろうか。

でも、最愛の人とするキスは何度しようと飽きることはない。

「ぶはあ・・・えへへ、司令官さん真っ赤なのです」

「そういう電も真っ赤だぞ」

「え、えへへ」

可愛く笑いながら俺のズボンのベルトを外してくる。

俺はこの甘く幸せな時間が永遠に続けばいいのにと願った。

新婚旅行 出発

目覚ましの音がうるさい。

朝か・・・

「ふああああああ・・・」

電はまだ隣で寝息を立てている。

起きて司令部からメールが無いか確認する。

「えーと・・・あ、一通入ってる」

内容は、キス島作戦中止の知らせだった。

どうやら陸の兵士が大和魂を舐めるなあああ!!と叫びながら泳いで本土に帰ってきたらしい。

ちなみに全員欠員なく、健康状態も最高、五体満足で帰ってきたらしい。

・・・もうアンタ等が深海棲艦と戦ったらいいんじゃないかな・・・
まあでも、難易度の高い作戦が中止されてよかった。

「そういうえば・・・旅行、まだだったな」

最近作戦続きで新婚旅行に行けてなかった。

作戦中止のおかげで一週間くらい予定が開く。

せっかくだし行くかな。

寝ている電を眺めていると起きて来た。

「ふああああ・・・あ、おはようなのです・・・」

「おはよ、今日の作戦は中止だったさ」

「あれ、どうしたんですか？」

「・・・連れてかえるはずの兵士が全員泳いで本土に帰ってきたらしい・・・」

「っ、強いのです・・・」

「んで、予定空くし、旅行でも行かないか？海外まで行く余裕はないけど・・・」

「い、いいのですか!？」

「ああ、行こう」

「やったのです!!」

さて、どこに行こうかな。

国内で行くとすればどこがあるか・・・

「電、どこか行きたい場所あるか？」

「んん・・・北海道とか？」

「北海道か・・・よし、行こう！」

「いつ行くのです？」

「ん？今日」

「え・・・今日ですか!？」

「ダメ？」

「い、いや、準備とか・・・」

「まあ、夜には出発できたらいいなとは思っただけど・・・」

「と、とりあえず用意するのです！」

電は着替えなどを探し出す。

俺は・・・移動手段を用意するかな

「電、ちよつくら格納庫のほう行つて来る」

「了解なのです！」

俺は部屋を出て格納庫に向かう。

何で行くかな・・・

最近旅客機があんまり飛んでいないからな。

格納庫に着くと中に入って機体を眺める。

今飛ばせそうな機体はF-18Fか・・・

「ホーネットか・・・まあ、これでいいか」

格納庫に來た整備員に燃料などを任せて部屋に戻る。

「ただいま」

「おかえりなのです！」

「そういえば昨日保護した女の子はどうなった？」

「んん・・・つとまだいそかせさん達の部屋だと思っのです」

「ちよつと様子見てくるかな」

「そうですね！・・・いろいろ不安なので・・・」

いそかせ達はもう起きていて、部屋で何かしているようだった。

耳を澄ませると・・・

「ダメだって・・・佳織ちゃん起きちゃうツ・・・」

「うらかぜが悪いんですよ？昨日あんなにするから・・・」

「あツ・・・！そこ・・・ダメえ・・・！」

「ふふっ・・・可愛いです・・・もつとイジメたくなります」

「はあ、はあ、はあ・・・やめてえ・・・」

・・・

「・・・お前ら」

「し、司令官!?あ、あのこれは・・・」

朝から元気だな・・・

「ああ・・・その・・・なんだ・・・この階の奥に空き部屋があるから・・・」

「司令官さん!?そこじゃないのです！」

いそかぜ達は朝からお盛んだった・・・

とりあえず部屋に入り、女の子の様子を見に行くと女の子は一冊の本を抱えていた。

「あ、その本は昨日読んであげてたんです」

「へえ、どんな本？」

タイトルを見ると・・・

「エイリアンVS桃太郎」

「・・・なんだこれ」

「いろいろ内容すごかったです・・・」

「はあ、ふう・・・ん・・・」

うらかぜが横で色っぽい声を出しまくっている。

・・・落ち着け。

「あれ、もう一冊？」

拾い上げると・・・

「桃太郎 怒りのアフガン」

ラ○ボーじゃねえのかよ!!!!

内容が気になりすぎる・・・

とりあえず女の子を毒さないようにみっちり説教し司令室に電
と向かう。

「司令官さん、仕事終わったら出発なのです?」

「そうだなく、仕事って言っても俺がいない間をアンドロメダに任せ
るってこと伝えないと」

「それだけなのです?」

「あとはちよつとした書類を片付けて終わりだよ」

「お手伝いするのです!」

「ありがとう、助かるよ」

「お安い御用なのです!」

電は頼りなさい!と言わんばかりの顔をする。

「さて、ちやつちやと片付けようか」

「なのです!」

書類は10枚程度だったのですぐに終わった。

「んじゃ、いない間頼むな」

「はい、お任せください」

アンドロメダに鎮守府を任せ、部屋に戻る。

荷物はぜんぶ電がまとめていてくれた。

「ありがとうな電」

「えへへ・・・」

頭をなでてやる。

可愛いなもう・・・

「さて、出発しようか」

「まだ12時来てないですよ?」

「いいのいいの」

二人で格納庫に向かう。

「せ、戦闘機で行くのですか・・・」

「こつちのほうが早いしな!」

「でも荷物はどこに積むのです?」

「ああ、荷物用の輸送ポッド取り付けてあるから大丈夫」

「準備いいのです・・・」

「だろ?」

そんな話をしながら機体に乗る込む。

ひさびさのホーネットだ

「電、また主翼と尾翼のチェック頼むよ」

「了解なのです！」

俺はマニュアル通りに動かす。

「異常は？」

「ないのです！」

「よし、出発しよう」

エンジンをスタートさせて滑走路に向かう。

予定では新千歳についてからいったん旅館に向かい、荷物を置いてから観光に出かける。

電は後部座席でご機嫌に鼻歌を歌っていた。

電と旅行は初めてなので俺も楽しみだ。

新婚旅行 旅館

鎮守府を飛び立って1時間、もうすぐ新千歳だ。

「電、起きろー」

「すく．．．くく．．．」

「．．．よく戦闘機の中で寝れるな．．．」

電の寝息を聞いていた時、管制から無線が入る。

〈ホーネット、周波数114. 1MHzで千歳レーダーと交信して下さい〉

「了解」

もう空港の目の前だ。

着陸準備に入る。

「千歳レーダー、こちらホーネット。現在、フライトレベル250から150まで降下中。ATISの情報は「D」の情報コードのものを受信している」

〈ホーネット、こちら千歳レーダー。最終進入コースに誘導するため、機首を右回りで050度の方向に向け、高度を4000フィートまで降下させて下さい〉

「機首を050度の方向に向け、高度を4000フィートまで降下します。ホーネット了解」

電はまだかわいい寝息を立てている。

機首を050に向けながら空港内で何か買おうかと考えていた。

そうだ、あの子がもつてた桃太郎シリーズ気になるし一冊買ってみるか。

〈ホーネット、滑走路19Lに最終進入することを許可します。着陸方式はILSです〉

「滑走路19Lに最終進入許可、ホーネット了解」

滑走路の誘導灯が見えてくる。

久々の長時間飛行は疲れた．．．。

〈ホーネット、周波数121. 8MHzでタワーと交信して下さい〉
「了解、周波数121. 8でタワーと交信する」

周波数を切り替え、タワーと交信する。

今日は雪じやないからよかった。

視界最悪の状態で着陸はしたくないんだよな．．．

「千歳タワー、こちらホーネット。現在無線標識から14マイル」

〈ホーネット、こちら千歳タワー。DME無線標識から6マイルになつたら報告してください。滑走路は19L〉

機体はゆつくりと降下していく。

ホーネットのエンジンは強力なので、少し吹かすとすぐに速度が上がつてしまう。

とくに増槽、武装がない今の状態ではまさにそうだった。

「千歳タワー、こちらホーネット。DME無線標識から6マイル」

〈ホーネット、脚が下りているか確認してください。滑走路19Lへ着陸を許可。風が170度方向から3ノット〉

「滑走路19Lへ着陸許可」

さてと、電をそろそろ起こさないとな

「電、電、起きろ。空港に着くぞ」

「んく．．．ふあああ．．．あれ．．．寝てたのです．．．？」

「おはよ、可愛い寝息が聞こえてたよ」

「はううううう．．．」

顔を真っ赤してしてるのが見えないけどわかる。

そんなことしてるうちに着陸、機体を駐機させた。

「到着つと。忘れ物ないようにな」

「はいー」

輸送用ポッドから荷物を取り出して空港内に向かう。

時刻は午後1時前、旅館で軽く昼食をとったら出かけよう。

「電、少し本屋よっていいか？」

「本屋ですか？」

「保護した女の子が持ってた桃太郎シリーズ気になってな．．．」

「ああ．．．あれですか．．．」

電はすごく微妙そうな顔をする。

そんなこんなで本屋。

「さてと、どこにあるかな」

「あ、司令官さん、これじゃないですか？」

「ん？お、これ・・・か・・・？」

タイトルは「桃太郎 クレイジーグランドマザー編」と書いてあった。

なんだこれ気になりすぎる。

とりあえず購入した。

「ほんじゃ、旅館に行こうか」

「はい！」

空港を出て、バスに乗って少し山奥に向かう。

景色がいい峡谷の旅館に予約を入れておいた。

「きれいですね・・・」

「そうだな・・・今の時期だと少し寒いけどな」

「えへへ、司令官さんと一緒だといつても暖かいのです」

「お、おう、そ、そうか？」

急に恥ずかしくなってきた。

「司令官さん顔真っ赤なのです」

「う、うるせえ」

「えへへ」

ああもう可愛いんじゃワリヤア!!

と心の中でシャウトする。

そんなことしていると旅館に到着する。

チェックインも済ませ、部屋でちよつと休憩する。

というか今日はこのまま旅館で過ごして明日から観光に行く予定だ

「おく・・・なかなかいい景色だな」

「すごいのです・・・」

「あ、そうだ。さっき買った本読んでみるかな」

「私もちよつと見たいのです！」

「んじゃ、二人で見よう」

「なのです！」

※ここから提督の心の声とかは【】で表示されます

むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ昨日拉致った鬼を埋めに。

おばあさんは昨日バラした鬼の一部を焼いて川に流しに行きました。

【いきなりバイオレンスな展開だなオイ!!!なんでおじいさんは鬼を拉致れてんだよ!】

ばあさんに至っては猟奇殺人じゃねえかあああああ!!!】

おばあさんが焼いた鬼を川に流していると川上から大きな桃が流れて来ました

「おや、大きな桃じゃ」

おばあさんは桃を拾い上げます。

重量は50kg近いですが、200kgを超えている鬼を素手で撲殺したおばあさんにはティッシュペーパーを持ち上げるようなものです。

【ばあさんどんだけ強い!?】

「おじいさんにも食べさせてあげましょうかねえ」

おばあさんは桃を持って家に帰ります。

おじいさんもすぐに帰ってきました。

「おーい、今帰ったぞ」

「おや、お帰り。今日は川で桃が取れてねえ・・・」

「ワシも山でいいものを拾った」

拾ったとか言いながらおじいさんが持ってきたのは、鬼の子供（美少女）でした。

しっかりと縛ってます。亀甲縛りで。

【挿絵がエロすぎるんですけどおおおおおおおお!!! つーかじいさん若々しいな!! なんて亀甲縛りできるんだよ！

電は顔を赤くしてそっぽを向いていた】

「おや可愛い子ですねえ」

「捕まえたのはいいんじゃないやがどうするかの」

「そうですねえ・・・ここがバレちゃいけませんし・・・口を封じますか」

「仕方ない、可愛そうじゃがそうしよう」

【お前ら残酷だな!! これ子供用だろうが!!! さらつと口封じてんじやねーよ!!!】

しかしおじいさんはあまりに可愛そうだったので解体作業を行う前に逃がしてやることにしました。

【解体作業って何!? あんたらサイコパス!?】

こっそり逃がしてあげ、おばあさんの元にもどります。

おばあさんは桃を食べる準備をしていました。

「おじいさん、お仕事お疲れでしょう、桃でも食べませんか」

「そうだな、そうしよう」

おばあさんはどこからかチェーンソーを取り出してきました。

「大きな桃ですからねえ・・・行きますよ」

おばあさんはエンジンをかけます。

「うひえ、うひやひやひやひやひやひやあああああああ!!!」

おばあさんはサイコパスです。猟奇殺鬼を何度となく行い、鬼から

は「デーモン・グラウンド・サイコ・マザー」と呼ばれています。

ファツキンサイコ。

【やっぱりサイコかわいいiiiiiiii!!!
てか中学生が考えたような通り名だな!!】

桃を真つ二つに切ると、中から可愛い赤ちゃんが出てきました。

「おぎやあ!!」

「おや! たまげた! 赤ちゃんじゃ!」

「おやまあ、可愛い赤ちゃんですね」

おじいさんとおばあさんは若いころは夜な夜なやったのに赤ちゃんができませんでした。

なのでおじいさんとおばあさんはたいそう喜びました。

【夜な夜なつて生々しいわ!!】

電はまた顔を赤くしている】

おじいさんとおばあさんはこの赤ちゃんを桃太郎と名づけ大切に育てました。

「いいかい、桃太郎。おばあちゃんたちは今からお仕事に行くけど、着いてきちやダメだよ」

「はい! わかりました!」

おばあさんは一人地下に部屋に降りていきます。

その間おじいさんは桃太郎を海兵隊員に育てあげようと思いました。

【なんで海兵隊員なんだよ! 何時代だよ!!】

ちなみに江戸時代より前です。

何の海兵隊員なんでしょうね。

【なんで本がツツコミ入れてんだよ!!】

ああ・・・もう疲れた・・・】

すくすくと育った桃太郎はひとつの決心を固めていました。

「おじいさん、おばあさん、私は鬼が島に鬼を退治に行つてきます」
「鬼が島へ行くのかい？」

「やめておけ、危険すぎる」

おじいさんとおばあさんは必死に説得します。

それもそのはず、鬼が島を攻略されては老後の楽しみがひとつ減るからです。

老後の楽しみは何かつて？それは鬼殺しです。

【もう桃太郎要らないんじゃないかな・・・】

「桃太郎、やめるんじゃないや。お前の勝てる相手ではない」

「なぜそんなにとめるんですか！」

「それは・・・」

おじいさんはどう答えようか迷います。

ですがおばあさんはこう言います。

「しかたない、桃太郎には話しましょう」

「ばあさん・・・」

「私たちはね、鬼を捕らえては解体しておつたのじゃ」

【拉致つて解体つてもう猟奇殺人じゃねえかあああ!!!怖ーよ!!!これホラーだろ!!!】

おばあさんは一通り話します。

するとおばあさんは最後にこう言いました。

「桃太郎、お前は知りすぎた」

「っ!？」

「桃太郎、悪いけど・・・死んでもらうからねえ!!!」

【バトル展開待ったなし

なんだよこれ。もうすでに桃太郎じゃねーだろ】

「くっ……ババア!!貴様やはり!!」

「やはり……?知っていたのかい、桃太郎」

「俺は、FBIから派遣された捜査員だ。お前を猟奇殺人の容疑で逮捕する!」

「殺人とな……私は鬼しか殺しておらんが……」

おばあさんは袖に隠してあったジャパニーズ・ニンジャ・ソードを取り出します。

「刀でええやん!!これ翻訳でもしたの!?てか、なんで桃太郎はFBIなんだよ!!」

おじいさんはいつの間にか姿を消していました。

「桃太郎、思い残すことはないか?」

「お前らのような極悪人に言う最期の言葉などない!」

「ふ……活きがいいガキだねえ。鬼なんかよりよっぽど殺しがいるねえ……」

【いっちゃったよ。鬼より殺しがいるとか言っちゃったよ】

「こいよババア、刀なんか捨ててかかってこい!」

「殺してやるよガキ!キエエエエエエエ!!」

おばあさんはカタナを振りかざして襲い掛かってきます。

「桃太郎、伏せろ!!」

直後、銃声が響きました。

聞きなれた声……おじいさんでした。

【おじいさんキター!】

「ばあさん、もうやめにしよう。鬼たちは何の罪も犯してはおらん。罪を償おう」

散弾銃を持ったおじいさんはおばあさんと自首を呼びかけます。

しかしおばあさんはおじいさんに襲い掛かりました。

「ジジイ！あんたから殺してやるよ!!」

年をとり、衰えた体ではおばあさんの斬撃はよけれません。

心臓付近を一突きされました。

「ぐふっ……!」

「ひやははははは!!私に逆らおうっていうのが間違いでしたねおじいさんー!」

【おじいさん死んだああああああ!!!】

「ぐっ……桃太郎……ばあさんを……殺せ……」

桃太郎は無言で散弾銃を拾い上げおばあさんに照準します。

おばあさんは背骨を貫通した刀を引き抜こうとして反応が遅れました。

「死ねこのクソババア!!」

桃太郎は渾身の力をこめてトリガーを引きます。

こんな犯罪者でも育ての親……そのトリガーは生きてきた中で何よりも重いものでした。

おばあさんは上半身が消し飛びました。

「おじいさんー!」

「ぐふっ……桃太郎……これが……地下の鍵じゃ……」

「これは……」

「ここに……ワシが捕まえた鬼達がおる……開放……してやって……くれ……」

「おじいさん!もうしゃべるな!傷が……!」

「ワシは……罪を……死んで……償うよ……桃太郎……」

「馬鹿野郎!!死んだってな、罪は償えねーんだよ!!だから死ぬな!生きろおとおお!!」

しかしおじいさんは微笑みゆつくりと桃太郎の腕の中で息を引き取りました。

「おじいさああああああん!!!!!!」

【おじいさああああああああああああんんんんんんん!!!】

その後桃太郎は地下に行き、捕らわれていた鬼達を解放し、おじいさんたちを海によく見える丘に埋葬してあげましたとき。めでたしめでたし。

「ぜんぜんめでたくねえええええええええええ!!!おじいさんとおばあさん死んでんじやねえかああああ!!!」

「何か．．．すごいストーリーなのです．．．」

「つーか桃太郎がFBIつてもはや原作関係ねえだろおお!!!」

俺はここぞとばかりに突っ込む。

てかこれ幼児向け絵本なんだよ!?

「き、きつとこれ呼んで小さい子は成長するのです」

「成長って何?サイコパスにでもなるの!？」

「さ、さあ．．．?」

とりあえず突っ込みすぎて疲れた．．．

「電．．．温泉にでも入ろう．．．」

「そうですね!」

電と着替えを持って温泉に向かう。

じつはここ、カップル・夫婦専用の混浴がある。

「電と風呂入るのは初めてだな」

「えへへ、ちよつと楽しみなのです」

「可愛いなあ．．．」

「う．．．うにゆう．．．」

顔を真っ赤にして俯いた。

可愛すぎる。

「なあ電．．．もしもだ」

「なんですか?」

「戦争が終わったなら・・・二人でここに引越さないか」

「・・・はい！」

電は心底うれしそうな顔をして抱きついてきた。

ちなみに戦争が終結した場合、鎮守府に所属する艦娘は引退か、そのまま海上自衛隊所属として警備にあたるかになる。

引退した艦娘は提督が引き取るか、そのまま艤装とのリンクを外され、艦船としての記憶、鎮守府に居て戦った記憶を失い民間人になる。

俺は全員引き取る予定だ。

金はたんまりあるしな。

なにより、電が寂しがる。

そんなことを考えながら脱衣所に入った。

・・・今夜は夜s (ry

姉妹デート

くいそかせく

司令官は電さんと新婚旅行……。

電さんと司令官の目がない今なら うらかぜ と……ふふっ

「ねえいそかせ、ちよつと外にでm……うわあ!!」

「うらかぜうらかぜうらかぜうらかぜ……」

「ちよちよちよ!!!怖い怖い怖い!!!」

ベットに押し倒して服を脱がす。

「ちよ!!朝やったばつかじゃん!!」

「司令官も佳織ちゃんも今居ないんですよ?だからもつとしたいです」

「わ、私は今は外行きたいいいいい!!」

「問答無用です♪」

「いやあああああああああああああ!!!」

くケストレルく

あれ、何か悲鳴が……ま、いつか。

「アンドロメダく……暇だよ」

「私は仕事があるので……」

「真面目だな」

ちやつかりメガネまでつけて……

そだ、久々にバーベットと出かけるかな

「ちよつとバーベット探してくる」

「はい、たぶんお部屋に居ますよ」

「うん、ありがとー」

司令室を出て部屋に向かう。

たまには姉妹で出かけた。

「バーベット?私だけ」

「あら、ケストレル？どうしたの？」

「暇だし外で散歩でもしない？」

「いいわね、私も外行きたかったし」

「ほんと？じゃあ着替えてくる！」

「うん、30分後に寮の外で会いましょ」

「はいよー！」

急いで部屋に戻って着替える。

今の服のまま出てもいいけど・・・海軍の制服だからねえ・・・

「何来て行こうかな」

部屋のタンスを探る。

いい服ないなく・・・

まあ、少し暖かくなつたしワンピースと羽織るものでもあつたらいいかな。

「さて、行こつとー！」

部屋を出ようとしたとき私は日課のひとつを思い出した。

「おっと、忘れるとこだった」

ベッドに飾つてある今は亡きアンダーセン艦長の写真。

私にとってこの人は特別な人だ。

「艦長、行って来ます。今日はね、バーベットとデート行って来るね」

そう言った時、写真の艦長が少し笑つた気がした。

でも、気のせいだろう。

寮を出て、外に向かうとすでにバーベットが待っていた。

「おまたせ！待った？」

「ううん、今来た所よ」

「そっか！じゃあ行こつとー！」

こうやって二人でいるのが懐かしく感じる。

「ねえねえ、どこ行く？」

「そうね・・・私、ちょっと秋葉原まで行きたいわ」

「ア、アキバっすか・・・」

「な、なによ」

「別に？」

「もう何よ！」

「えへへ」

「・・・もう」

以外などこあるな・・・

なんて思いながら電車に乗り秋葉原に向かう。

バーベットのついた瞬間ダッシュで同人ショップに向かった。

私はどうすりやええのさ・・・

「やったわ！新刊が最後の一冊！」

バーベットのうれしそうな声が聞こえてくるが・・・

貴女が今居る場所・・・R-18ゾーンでっせ・・・

私はちよつと入る勇気ないかな・・・

バーベットは嬉々として10冊くらい薄い本を抱えて出てくる。

・・・気のせいかな、男同士の絵しか見えなかった。

「ねえ、バーベット・・・気のせいであつてほしいんだけど、男の人の

アレ入ってる場所って・・・お尻？」

「ええ、ケツよ」

「Oh・・・」

なんかえげつないものを見てしまった気がする・・・

まあ、人の趣味だしいいけどね。

「バーベット、ご飯でも食べに行かない？」

「そうね・・・行きましようか」

そう言つて店を出た瞬間だった・・・

「ハイ彼女ー！今暇ー？」

「うわあ・・・ナンパか・・・」

ものすごいチャラそうな二人組みにナンパされた。

ちなみに2人の容姿はこのチャラささえなければ、ものすごいイケ

メンだったりする。

「ねえねえ、カラオケでもどう？」

「いいわ、先を急いでるし」

「そんなこと言わずにいっ」

するとバーベットはイライラしてきたのか・・・

「ああもう、うるさいわね！私はアンタ達とイチャつくよりイケメン同士がイチャついてる方が興味あるのよ！それとも貴方たちがやってくれるのかしら?!ええ?!」

「え、ええ・・・」

私、ドン引きである。

「お、俺、そんな趣味な女の子もタイプかな」

引き下がらんのかいっ!!

引くだろ！大声であんなの言われたら引くだろ!!

実の妹の私がすでにドン引きだよ!!

なんて心の中で突っ込んでると・・・

「ぐちゃぐちゃうるさいわよ!!」

「おぶっ!!」

二人の頭をわしづかみにして思いつきりぶつけていた。

ちなみにこの時、マウス・トゥー・マウスでキスしております。

・・・うわあ・・・

しかもバーベツト、30秒くらいくつつけたまましている。

「バ、バーベツト・・・そこらへんで・・・」

とめようとしたとき・・・

「へい彼女!」

「え?」

また目の前にチャラそうな男が現れた。

こいつはちよいブサだが・・・

「なに?」

どうせナンパだろ・・・

「俺で妥協しない?」

「え」

新手過ぎるナンパで思考が停止した。

「・・・ごめん、もっかい言って」

「俺で妥協しない?」

「・・・妥協って・・・妥協ってアンタ・・・」

コイツ普通に面白いヤツなんじゃないかと思ってきた。

「ねえ、どう?」

「いや・・・どうって・・・それでナンパしようとするアンタを尊敬するわ・・・」

「・・・だってよ・・・」

男は俯き気味に言い出した。

「だってよ・・・いままでナンパなんて成功したことねーんだよ!彼女だって居ない暦〓年齢だしよ!!」

「え、ええ・・・」

「第一・・・地味キャラとか言われて・・・」

「いや・・・アンタ地味じゃないじゃん・・・見た目キャラ男じゃん・・・」

「これは・・・イメチェンで・・・」

「なんでイメチェンでチャラ男選んじやったの!?!」

「・・・これならイケメンになれるかと思つて・・・」

「いや、アンタ自分に自信持ちなさいよ!!大体、結構フツメンだよ?」

「え・・・」

何か哀れというか、こいつとなら友達になれそうな気がした。

・・・あれ、ナンパ成功されてねコレ。

ま、いつか

「何か可愛そうだし、連絡先くらい交換してあげるよ」

「え・・・え・・・?」

「ほら、ケータイ」

「い、いいんですか・・・?」

「なんで敬語になつちやうかなあ・・・ほら、早く」

「や・・・やったああああああああああ!!!」

男はプラトーンみたいなのポーズをして叫んだ。

・・・どんだけ女運なかつたんだコイツ・・・

「初めて女の子の連絡先をもらったああああ!!!」

「初めてなの!?!」

「いままで・・・キモイとかいろいろ言われて・・・僕・・・結構オタクで・・・」

「何で一人称まで変わったの!?!あんたもうチャライキャラやめとけ

!!

「ありがとうございます!!これからよろしくおねがいします!!」

「あ……う、うん……よろしくね?」

そして男は笑顔で手を振って帰っていった。

ちなみに私はさつきバーベツトが放した男どうしが何故か頬を赤く染め、手を恋人つなぎで指を絡めあいながら帰っていくのを見逃さなかった。

バーベツトがそれをうっとりした顔で見ているのも見逃さなかった。

……あいつ等目覚めてんじゃねーよ。

「さ、行きましよ。いいもの見れたし」

「そ、そうだね……」

そういえば私も……男の人と連絡先交換なんて初めてだな……
なんだかちよつと嬉しかった。

ケータイを開くとそっけない文章で「これからよろしくお願ひします」とだけ書かれたメールが入っていた。

私は自分にもっと自信を持って!と軽い説教文と一緒にこれからよろしくと絵文字付きで返信した。

……きつとどこかでプラトーンポーズしてる男が目撃されてるだろうな……

雪風とYUKIKAZE

旅行2日目。

とりあえず札幌に来てみた。

「とりあえず札幌に来たのはいいけど・・・どこ行くかな」

「んん・・・お昼食べたいのです!」

「もうそんな時間か・・・よし!ラーメンでも食いにいくか!」

「札幌ラーメン・・・食べたいのです!」

「よし!行くか!」

行くか!と行ったのはいいけど、どこに美味しい札幌ラーメンあるのやら・・・

「あ、司令官!あそこのお店どうなのですか?」

「ん?あの列が出来てるところ?」

「そうなのです!」

「そうだな、行こうか」

少し列の出来たラーメン屋に向かう。

列に並ぶと前に並んでいた少し太めの中年の男が話しかけてきた。

「おや、あんたもこのラーメンに目をつけたか」

「列が出来てたんでね」

「つまり・・・初めてか・・・」

何だこのオッサン。

「ええまあ・・・ここって美味しいんです?」

「いや、クソ不味い」

「・・・不味いんかい!!」

「いやほら・・・人間どこまで不味いのか気になるじゃん」

「ならないでしょ!美味しいもの食いたいでしょ!!」

とりあえずこのラーメン屋はやめておこう・・・

わざわざ旅行先で不味いもの食いたくない・・・

「司令官さん・・・列って信用できないのです・・・」

「すごく痛感した・・・」

いや、アレが稀な気がするけど・・・

とりあえず無難に駅前を探すかな・・・。

「あ、そうだ。鎮守府のほう大丈夫かな」

「もう・・・今はお仕事の話は無しなのです!」

ちよつと電が膨れっ面になる。可愛い。

「はは、よしよし」

「ふにやああああ!!撫でまくらないで欲しいのですううう!!」

「おつとすまんすまん」

「髪がぼさぼさになる・・・」

そんなことしていると鎮守府から電話がかかって来た。

「ん?」

「どうしたのです?」

「鎮守府から電話・・・ちよつと出てくる」

「了解なのです!」

「もしもし?」

〈旅行中すみません。少し報告があったので・・・〉

「報告?何かあったのか?」

〈はいその・・・ケストレルさんに彼氏できちやったみたいで・・・〉

・・・!!?

「ファツ!?え、ちよつ・・・えっ!」

〈どうもこの前出かけた先で仲良くなった男性がいたらしく・・・今朝嬉々として報告してきました・・・〉

「マジかい・・・」

〈あ、それと建造報告なんです、雪風さんが着任されました〉

「やりました」

〈ですがその・・・〉

「ん?どした?」

〈戦闘中の様子がおかしくて・・・〉

「怯えてでもいたのか?」

〈はいえ・・・人が変わるっていうか・・・その・・・話せば長くなるので動画をあとで送ります!〉

「お、おう」

そういつて電話は切られた。

・・・ケストレル・・・いつの間に・・・

まあ、いつか。

それよりも雪風キタコレ！

「電話終わったのです？」

「ああ、終わったよ」

「じゃあお店探すの再開なのです！」

「おー」

「棒読みなのです!?!」

くアンドロメダ（昨日）く

さてと、建造行こうかな。

「えっとデイリーは・・・うん、これでいいかな」

私は工廠に向かった。

「建造お願いします。駆逐艦クラス一隻分で」

「はいよー！今日はてーとく居ないの？」

「はい、電さんと旅行に・・・」

「ほく・・・ということは旅行中に【ピー】とか【ピー】とかしてるんだらうね」

「な、生々しい・・・」

「とりあえずこれ、高速建造どうする？」

「一応お願いします」

「イエッサー!!」

いったいあの火炎放射器でどうやって建造してるのか気になって仕方ない・・・。

すると・・・

「陽炎型駆逐艦8番艦、雪風です！どうぞ、宜しくお願い致しますっ！」

「横須賀鎮守府にようこそ。司令官代理の情報収集艦アンドロメダです」

「あれ、しれえは居ないんですか？」

「今は旅行に行かれています」

「雪風も旅行に行きたいです・・・」

私はそんな会話をしながら司令室に戻る。

「雪風さん、さつそくですが正面海域に出撃してもらいます」

「い、いきなりですか!？」

「はい、私といそかぜさん、うらかぜさんと警備をお願いします」

「わ、わかりました!」

雪風はビシッと敬礼をして出て行く。

「ふう・・・えつと・・・装備装備・・・」

装備を確認する。

12.7cm連装砲と魚雷・・・あれ、もうひとつ？

取り外し不可と書かれたスロットに「YUKIKAZE」と書かれたものがあつた。

ゆきかぜ・・・んぐ・・・なんだろ・・・

とりあえず出撃準備を済ませて洋上に向かった。

「これが初実戦ですが、雪風さんは主に見学してください」

「は、はい!」

洋上に出て少し向かうと索敵レーダーに複数の反応があつた。

駆逐艦クラス・・・3隻。

「いそかぜさん、うらかぜさん、駆逐艦3を認む。攻撃開始してください」

「了解しました。トマホーク、攻撃準備」

「いそかぜは長距離兵器あるからいいよねえ・・・」

「・・・(ドヤ)」

「あー!!むかつくううう!!」

「あ、あの・・・攻撃を・・・」

「了解・・・トマホーク、攻撃はじめ!」

いそかぜさんから2発のトマホークが発射される。

「あれ、一発撃ちもらしになるよ」

「いえ、一隻は雪風さんがしとめてください」

「はい！艦隊をお守りします！」

艦隊は増速し、一気に敵艦隊に迫る。

「雪風さん、もし敵を撃沈できないと判断したらすぐに援護要請してください」

「わかりました!!」

雪風は主砲を斉射する。

・・・しかし、射程圏外だ。

「あの・・・もうちよつと近づかないと・・・」

「あれ、遠かったです?」

「ギリギリ圏外・・・あれ!」

すると砲弾はなぜか敵駆逐艦に全弾命中・・・軌道をよく見ると何故か海面近くで発生した超強力な上昇気流で押し上げられ命中したようだ。

う、運良すぎる・・・

「敵艦隊殲滅・・・警備を続行しましょう」

「了解・・・あ、待って・・・魚雷音!!」

うらかぜさんが急に叫ぶ。

魚雷・・・!?

「6時方向・・・魚雷20!!」

「に、20!?!」

「間違いありません!!魚雷20・・・雷速40!!」

「どどどどどどうしましょう!?!」

「雪風さん、落ち着いてください！全艦最大戦速！振り切ります!!」

「魚雷・・・そんな・・・誘導魚雷!?!」

「誘導!?!そんな馬鹿な・・・」

「魚雷から探針音・・・音響誘導魚雷です!!」

「私も確認しました。各艦に五発づつ向かってきます!」

私たちは逃げ切ろうと思えば逃げ切れる・・・でも雪風さんはそうはいかない。

現在の速力は35ノット・・・どうやっても追いつかれる。

「魚雷・・・距離2000!!」

もう至近距離だ。

どうする・・・落ち着け・・・！
すると雪風が・・・

「あい・はぶ・こんとろーる・・・」

「雪風さん？何か言いましたか？」

雪風のほうを振り向くと雪風は死んだ目をしていて。
俗に言うレイプ目みたいな目をしていて。

・・・怖い。

「ゆ、雪風さん!？」

私が呼びかけても反応しない・・・

そんなことしてる間に魚雷はもう目の前まで迫っていた。

・・・ここで・・・終わりのかな・・・

雪風のほうを見たまま固まっていると突然雪風は180度急速旋
回した。

その場で・・・だ。

いくら艦娘とは言え、そんな旋回をすれば体はもとより、艤装が持
たない。

それ以前にいくら現代艦の私たちでもその場で速度を変えずに1
80度旋回なんて出来ない。

「雪風さん！何をする気ですか!!」

雪風は速力35ノットで後進状態だ。

艤装の耐久値が心配になる。

「主砲・・・準備」

雪風はそう呟いて魚雷に向けていきなり砲撃を始めた。
それも正確に一発ずつ撃ち抜いていく。

ものの1分で全魚雷を迎撃・・・

雪風はまた急速旋回で正面に戻る。

「ゆー・はぶ・こんとろーる・・・」

今度はそう呟いた。

同時に目に光が戻り、さっきまでの雪風になる

「ぎよ、魚雷いいいい!!」

「魚雷ならもう全部迎撃されましたよ・・・?」

「あ、あれ・・・そうなんですか・・・?」

「記憶ないんですか!?!」

「え、えつと・・・何の話かわからないです・・・」

「と、とりあえず戻りましょう」

「はい!艦隊をお守りします!!」

雪風さん・・・何者なんですか・・・。

そんなこと重いながら鎮守府への帰路に着いた。

超大型航空機

「ラーメン美味かったな〜」

「お腹いっぱいなのです〜」

二人で札幌ラーメンを堪能してここから牧場に向かう。

「やっぱり北海道といたら牧場なのです!」

「もうちよつと早く来てたら雪祭りもあつたけどな」

「寒いのは苦手なのです・・・」

「俺もマイナスの世界にずっとは居たくない・・・」

そんな会話をしながらレンタカーで牧場に向かっていた。

外は快晴・・・気温もちょうどいい感じに暖かくて最高だ。

「あと・・・10分くらいで着くぞ〜」

「楽しみなのです♪あ、それとソフトクリームも食べたいのです!」

「おお、牧場のソフトクリームか!食べよう食べよう!」

「なのです♪」

電はご機嫌で助手席に座っている。

牧場はもう目の前だった。

「電、乳搾り体験もあるらしいからやってみるか?」

「いいのです?」

「おう!」

「やったのです!」

そんなわけで牧場到着。

とりあえず最初に乳搾り体験を試みることに。

「電、大丈夫か?」

「だ、大丈夫なのです!」

電は牛を目の前に少しビクビクしていた。

可愛い・・・。

「はは、お穰ちゃん、怖がらなくても大丈夫だよ。ほら、こんな風に・・・」

牧場の従業員が牛に近づき電に見本を見せようとしてくれた。

「やさしくこうするんだよ。いいかい?」

「あ、ありがとうございます！」

電は教えてもらったとおりにやってみていた。

「搾れたのです！」

「お穰ちゃん、なかなか上手いよ。お父さんも一緒のどうだい？」

「お、お父さん!？」

「こ、この人お父さんじゃないのです！」

「あれ、違うのかい？」

「この人は私の夫なのです！」

「わ、若々しいね・・・」

「・・・俺そんなに老けてるかな・・・」

何でお父さんと間違うの。

せめてお兄さんであつて欲しかったとです。

電はそのあとも楽しそうに搾っていたが突然手が止まった。

「あれ、電?もういいのか？」

「・・・」

「お、お〜い・・・電?」

「・・・どうやったらこんなに大きくなるのです・・・」

「え?」

「どうやったらこんなにおっぱい大きくなるのですか!!」

「そこ!？」

「ちよっ・・・お穰ちゃん・・・放し・・・ぐえ・・・」

「さあ言うのです!おっぱい大きくなる方法言うのです!!」

「落ち着け電!!その人放さないと死んじゃうから!!」

ちなみに従業員さん、白目?いてらっしやる。

ヤバイ。

「い、電・・・ヤバイ、そろそろ死ぬぞその人・・・」

「あ・・・ご、ごめんなさいなのですうううう!!!」

「げほっげほっ・・・」

「だ、大丈夫ですか!?ごめんなさいなのです・・・」

電は涙目で謝罪している。

「だ、大丈夫だよ。今月4回目だし・・・」

「4回目?!いったい何回殺されかけてるのです!？」

「いやあ、ここよくあるんだよ、どうやったら牛並みの胸を手に入れられるかって……」

その理不尽な理由でこのおじさん4回も生と死の境目に立たされていったのか……

そんな騒動の起きた旅行2日目の午後だった。

くアンドロメダく

うくん……あの雪風さん……本当にどうしたんだろう……

「ねえアンドロメダ、その動画みるの何回目?」

ケストレルがパソコンの画面を覗き込んで言ってきた。

「なぜあなつたのかよく分からなくて……」

「んく……私が思うに、あの子多重人格なんじゃないの?」

「多重人格?」

「うん、たぶんそうじゃないかな」

「でもこれは多重人格で説明が着くんでしょうか……」

「まあ、あの動きは説明できないよねく」

「雪風さん本人にも分からないようですからね……」

「この動画は見せたの?」

「いえ、まだ……」

「それじゃ見せてあげたら何か思い出すんじゃない?」

「そうですね……」

「あ、ちよつとごめんね」

ケストレルはケータイを片手に部屋を出ようとしていた。

「どうしたんですか?」

「えへへ、彼からデートのお誘い」

「……幸せそうですね」

「おお?羨ましいのかく?」

「べ、べつにそんなことつ……」

「アンドロメダにもすぐ出来るよ!」

「・・・そうですかね・・・」

「そうだよ！っと、私はそろそろ行くね！」

「はい、気をつけて」

ケストレルは部屋を出て行った。

とりあえず雪風さんに動画見せるかな・・・

「あ、そうだ」

デイリー開発を忘れていたことを思い出す。

偵察機が不足してるって隊長言ってたな。

私は雪風さんを司令室に連れてくるついでに開発に向かう。

「お、今日も建造？」

「いえ、今日は開発で。艦載機・・・出来れば偵察機をお願いします」

「はいよー!! y p a a a a a a a a a a a a !!」

なんでロシア人の妖精追加されてるんですか。

「はいできました！」

妖精さんが出してきた書類には・・・

E-2C 早期警戒機

と書かれていた。

早期警戒機・・・なかなか当たりかな。

ただ、資源を考えてあまり出撃させれないと思うけど・・・

とりあえず雪風さんを探して司令室に行こう。

くケストレルく

・・・遅い。

いや、私が30分くらい早く着いたからだけど・・・
すると・・・

「あ、あれ!? もう来てたんですか!？」

「遅い！って言いたいけど私も今来たところだよ」

「あく・・・良かった・・・」

「はいはい、とりあえず行きましょ」

二人で並んで歩く。

公園だが、恋人とだと少し新鮮だった。

・・・てか私って案外チヨロいのかなく・・・

この前ナンパ(?)してきた男と付き合うなんて・・・

まあでも話してて楽しいヤツだし、優しいから私のタイプなんだけどね

「ね、ねえ、ケストレルさんの苗字って何なの？」

「何でさん付けちゃうかななく・・・呼び捨てでいいの！」

「は、はい！」

「それで、苗字?んなもんじゃないわよ」

「え、ない!？」

「そうだよ?」

「え、でも・・・」

「まあまあ、その話は後々!」

・・・私、航空母艦だし・・・

苗字か・・・ヒューバード級だから・・・ヒューバード?

ま、正直に話せばいいか。

「今日はあつたかいね」

「そうです・・・あ、いや、そうだね!」

「・・・なんかそんな所が可愛いよね君って」

「え、ええ!？」

「えへへ」

耳まで赤くなってる・・・。

イジリがいがあるなあ。

「ちよつと喉渴いたな・・・どつかで休憩しない？」

「あ、だったら僕が買ってくるよ。何が飲みたい？」

「え、いいの?私出すよ」

「彼女にくらいおごるよ!」

「そう?じゃあ、コーラお願い!」

「分かった!」

私は近くのベンチに座る。

なんとなく空を見上げると雲ひとつない青空だった。

・・・そういえばアンダーセン艦長が着任したときもこんな空だったな〜・・・

そんなこと思っていると・・・

「ねえねえ、彼女今一人〜?」

「え?」

チャラそうな男3人(こいつらはブサイク)に囲まれてた。

なんでまたナンパですか。

何、チャラ男は航空母艦がお好きなの?

「私、彼氏いるんだけど」

「あ、もしかしてさっきのダサそうなの?」

「は?」

「いやいや!俺らのほうがカッコいいから!どう?乗り換ええない?」

「却下」

そんなやりとりしていると・・・

「・・・僕の彼女に何してるんですか?」

「あ?もしかして彼氏?」

「・・・だったら何」

「何睨んでんだよ?ああ?」

あ〜あ・・・喧嘩始まった・・・

いざとなったら助けてやるかな。

一応、艀装がない状態の艦娘は艦級にもよるが基礎体力面はそこらへんの成人男性より高い。

「お前さ、俺とこの子付き合うから手え引けよ」

「えっ」

思わず声が出た。

その理屈はおかしい。

「・・・ふざけんなよ」

「は?喧嘩売ってんの?」

「・・・ふざけんなこのゴミが!」

やだカッコいいとか一瞬思ったが・・・

「ぐあ!」

カウンター―食らったた・・・。

そこは一発でも当てようよ!!

はあ・・・仕方ない・・・リンチされる前に片付けるか・・・

「はははははー弱すぎ!!」

「・・・おい」

「ははは・・・あ?」

「人の彼氏に手え出してんじやないわよおおおお!!!」

DQN一匹背負い投げ。

ちなみに木にぶつかって伸びてた。

「て、てめえ!」

DQN2、ナイフを出してきた。

「服切り刻んで全裸にしてやれ!」

DQN3も来た。

どんだけ小物やねん・・・

「・・・ケストレル・・・さん・・・逃げて・・・」

お前は弱すぎんだろおおおお!!!

なんで一仕事終えたぜ!護れたぜ!みたいな顔してんだ!!

「あのね・・・」

「んだコラア!!」

「・・・航空母艦を・・・舐めてんじやねえよおおおお!!!」

ものすごい勢いで2人をぶん殴る。

100コンボ!!フルボッコだドン!

「ぎゃああああ!!!」

2人を片付けて彼氏のほうに寄る。

「ほら、大丈夫?」

「う、うう・・・ごめんなさい・・・」

「何誤ってんの、ほら」

手をつかんで引き起こす。

「さてと・・・警察呼ぶ前に・・・」

「何してるのケストレルさん」

「今のうちにお小遣いかせがなきや♪」

「え、ちよっ」

うへへへへ、結構持つてやがんな・・・へっへっへ

「ちよっ!!ダメだつて!!」

「いいのよ、少しくらい」

「犯罪だよ!!」

「こいつらもアンタぶん殴ったしお相子でしょ」

「う、うん・・・そうだけど・・・」

「まあ・・・そこまで言うなら1万円で勘弁しといあげるよ。ペッ」

「結局取るの!?あと睡まで吐かなくても・・・」

「こまでしないと気がすまないの!」

まあいいか・・・

「でも・・・私を助けようとしてくれたとこ、カツコよかったよ」

「え、えへへ・・・」

「まあ、結局私が片付けたけどねん」

「うっ・・・」

「強くなれ少年!」

「は、はい!あ、それと・・・航空母艦ってどういう意味?」

「えっ・・・あ、ああ・・・そうだね」

「?」

仕方ない、この際言つとくか。

「お願い、幻滅しないでね」

「し、しないよ!」

「私ね・・・」

私はビシつとその場で海軍式敬礼をして喋る。

「私は日本海軍横須賀鎮守府所属、ヒューバード級航空母艦・・・その

7番艦のケストレル」

「え・・・日本海軍・・・?」

「そうだよ、私は艦娘」

彼は少しだけ俯いた。

「じゃあ・・・僕とはもう会えないの・・・?」

「・・・は?」

「だって・・・軍なら・・・」
そこかよ。

「あのね、場所にもよるけどウチの隊長・・・司令官は外出許可ポンポンくれるよ。ていうか勝手に出て行っても何も言われないし」

「え、ええ・・・」

「まあ、そういうわけ」

「で、でも・・・兵器・・・なんでしょ・・・?」

「んゝ・・・艦装をつけねえ。着けてないと生身の人間と変わらな
いよ。まあ基礎体力は私のほうが上だけど」

「でも寿命とか・・・」

「人と同じよ?まあ、艦装の寿命はもっと短いけど」

「何年くらいなの・・・?」

「まあ・・・物にもよるけど・・・3ゝ40年くらい?」

「そ、そうなんだ・・・」

「あ、そうだ。こんど鎮守府においでよ」

「え!？」

「司令官に紹介したいし」

「で、でも一般人だし・・・」

「んなもん気にすりやしないわよ、あの司令官」

「気にしてよ・・・」

「まあそんなわけだからこれからもよろしくね!あ、アンタの名前聞
き忘れてたわ」

「僕は島田 拓未だよ」

「ん、タクミか。なんで今まで聞いてなかったんだらうね」

「ホントにね」

お互い笑いながらデータを再開した。

・・・てか、早く手、繋ぎなさいよ!!私からは恥ずかしくて無理!!

ゝアンドロメダゝ

雪風さんに動画を見せたがやっぱりよく分からないらしい。

そんなとき、出撃命令が出る。

「鎮守府正面海域・・・またですか・・・」

「今動けるのって雪風だけですか？」

「いえ、バーベツトさんと赤城さんも同行します」

「分かりました！鎮守府をお守りします!!」

〜雪風〜

「雪風さん、お久しぶりです」

「赤城さん！いつみてもカッコいいです!!」

「貴方はいつ見ても可愛いわね」

「これが二回目の実戦・・・気合入れます!!」

「艦載機を上げます」

「了解ですっ!」

バーベツトさん、赤城さんから艦載機が上がる。

バーベツトさんは偵察機のみを上げた。

「・・・対空目標・・・30以上いるわね・・・」

「多いですね・・・」

「赤城さんの艦載機ならやれます!」

赤城さんの艦載機は練度が高いことで有名だ。

30機・・・やれます!」

「メビウス各機・・・交戦」

無線機に偵察機からの情報が入ってくる。

〈メビウス1、敵機撃墜〉

〈オメガ1、撤退を確認〉

「またオメガですか・・・」

「オメガって何ですか？」

「私の艦載機なんですが・・・いつも被弾しちゃって・・・」

「私がいるから大丈夫です!」

「いえもう被弾してます・・・」

「私の幸運の女神パワー足りないですか!？」

そんなやり取りをしていた。

すると・・・

〈艦載機各機・・・3時方向・・・距離10000より高熱源体接近・・・
恐ろしく速い・・・〉

〈何？新型？〉

〈分からない・・・いや・・・待てよ・・・〉

どうしたんだろう・・・私は無線に集中した。

〈ホークアイからメビウス隊各機。パーンパーン。ミサイル、
ブレイク、ブレイク!〉

〈うっそお!〉

〈に、にげろおおお!!〉

私にリーダーはないけど分かる・・・みんな散り散りになって逃げ
ている。

すると・・・

〈ミサイル・・・弾着ツ!〉

〈うわあああ!!〉

〈キヤアアア!!〉

〈み、みんな!!〉

遠くに大きな爆炎が見えた。

ものすごい威力なのは見て取れる。

〈メ、メビウス1より赤城・・・メビウス2から6・・・撃墜・・・
生存機・・・本機を含め・・・3・・・〉

「さ、3機しか・・・」

「そんな・・・」

〈ホークアイからバーベツト。ミサイル発射予想地点特定・・・空中
?〉

「どこ?早く教えて」

〈空中に大型目標!!そちらから2時!〉

2時方向を振り向くと遠くに巨大なエイのような姿をした黒塗りの
大型飛行機が飛んでいた。

あの模様は・・・深海棲艦・・・

重巡航管制機

くアンドロメダく

あの機影・・・まさか・・・!

私は急いでデータベースを検索する。
すると・・・

「アイガイオン級・・・重巡航・・・管制機・・・」

アイガイオン級重巡航管制機。

エストバキアが開発した空中空母だ。

「何なんですかあの航空機!!」

「空中空母です!早く艦載機を・・・!」

「ベルカ戦争の時のとは違うの!?!」

「あれとは違います!」

もう艦載機を上げ始めているだろう・・・

あの大きさから考えるに艦載機は・・・1000機以上・・・

「赤城さん!戦闘機はあと何機残ってますか?!」

「あと・・・メビウスが2機・・・クーガ隊のみです!」

「バーベツトさんは!?!」

「F-14Dが20・・・」

少ない・・・でも、やれるうちにやらないと・・・!

そんな時突然レーダーがおかしくなる。

「レーダーが・・・まさか・・・コツトスは居ないはずなのに・・・!」

「私もレーダーが・・・ECM!?!」

「ECM出力最大!みなさん、早く艦載機を!!」

「わかりました!第二次攻撃隊、全機発艦!!」

「上がる機は全機発艦!急いで!」

「わ、私どうしたらいいですか!?!」

「雪風さんは・・・」

今、雪風にできることは無いに等しい・・・

でも・・・対空砲火なら・・・!

「雪風さん、主砲で対空攻撃はできますか?」

「はい！」

「あの機を狙ってください！」

「わかりました!!」

私は敵をミサイルでロックオンする。

私の対空兵装は申し訳程度しかない・・・今は圧倒的に対空装備に欠けている。

「スタンダード・・・撃てー!!!」

〈へこちらホークアイ、敵艦載機発艦を確認。ものすごい数

———

突然無線が途切れる。

「ホークアイロスト!!撃墜されたわ!!」

「・・・そんな・・・!」

「司令官に連絡は入れたの?!」

「いえ・・・連絡は入れません」

「何ですよ！」

「入れてももう間に合いません！」

するとアイアガイオンから複数のミサイルが発射された。

「目標ミサイル発射!!こっちに突っ込んできますー!」

鎮守府にいそがぜさんとうらかぜさんが居てくれたら・・・

二人はデートと言ってどこかに出かけてしまっている。

「ミサイル本艦隊に近づく!アンドロメダ、迎撃するわよ!!」

「わ、わかりました!!」

迎撃ミサイルを発射するもミサイルの数が多い・・・

「I have control」

雪風がそうつぶやき突然表情が変わる。

さつきまであんなに焦っていたのに雰囲気まで別人になっている。

「redy」

いつもの舌足らずな口調ではなく流暢な英語を呟いている。

あの人格なんだろうか・・・

「GUN」

レディガンと呟きミサイルに向けて機銃掃射を始めた。

「ミサイル一発撃墜！さらに一発が突っ込んできます!!」

「ready main gun」

突っ込んできていた5発中、4発機銃で撃墜。
残り一発はもう目の前まで迫っている。

「Shelling started」

雪風はまず一発を発射。

しかしそれは少し逸れていた。

・・・外した・・・？

すると砲弾はすぐ真横で爆発、ミサイルの軌道を逸らした。
そして迷走を始めたミサイルにもう一発を撃ちこみ撃墜した。
時限信管を使用したのだろう・・・でもあの一瞬で・・・。

「ミサイル消滅！あとは本体だけ・・・」

しかし目標は弱点を撃ち抜かない限りスタンダードミサイル程度
では撃墜できない。

ましてやRAM程度じゃかすり傷一つできない。

「せめてあいつの後ろに回り込めたら・・・」

「・・・！アンドロメダさん！敵機来ます！」

赤城さんが頭上を見て叫ぶ。

・・・シースパローはもう間に合わない・・・

「対空戦闘！CIWS発射!!」

「ready GUN」

雪風と共に迎撃を急ぐ。

しかし数が多すぎる・・・

「多い・・・キャアアア!!!」

右半身にはしる激痛・・・

右を見ると雷撃機が火を噴いて墜落していった。

・・・被雷した・・・

急いで被害を確認する。

「そんな・・・FCS損傷・・・？」

FCSレーダーを破壊された。

「・・・(汗)で・・・終わりなの・・・？」

周りでは撃ち漏らした敵機の爆弾が着弾しおおきな水柱を上げて
いる。

「キヤアアア!!真上・・・直上・・・?」

「赤城さん!」

「飛行甲板大破・・・バーベツトさん・・・あの子たちを・・・」

「わかってるわよ!早くここから離脱して!」

「すみません・・・!」

赤城さんは離脱していく。

空中は敵機で覆われている。

・・・ここで沈むのかな・・・

隊長・・・鎮守府・・・守りきれなくて・・・ごめんなさい・・・

そんな事思っていたときだった。

「CIWS、撃て!」

ものすごい轟音が聞こえ横を向く。

「貴女は・・・だれですか・・・?」

「間に合ったあ・・・ボクはキーロフ級重巡洋艦、ピョートル・ヴェリ

ーキー!」

「ロシア艦・・・」

「さつき着任しました!」

「了解・・・しました・・・」

「ひどく損傷してるけど大丈夫?」

「右舷に一発被雷しました・・・」

ひどく痛む右のお腹を押さえながら言う。

「敵は・・・アイツ?」

「そうです・・・」

「わかったよ。クズネツオフとボクがあとは片付けるよ」

「でも・・・着任したばかりじゃ・・・」

「大丈夫、ボクはこれでも世界最大の戦闘艦だから」

「・・・わかりました・・・必ず、鎮守府に帰ってきてください」

「やだなあ・・・それじゃ死亡フラグだよ・・・」

そう言って別れる。

雪風が私のそばを守るように航行してくれている。

「You have control」

「・・・？」

「ひやあああああ!!!ミサイルがああああ!!!・・・ってあれ・・・？」

「あの・・・雪風さん・・・？」

「ア、アンドロメダさん!?どうしたのですか!？」

「魚雷を・・・」

「早く帰ってドックに・・・」

また覚えていないんだろうか・・・

くケストレルく

東京を離れて横須賀に帰ってきた。

彼氏も連れてだけど。

「ケストレルさん、横須賀に美味しいカフェみたいなのって無いかな」
「んく・・・私あんまり外でないからなく・・・行きたいの？」

「なんとなく・・・ケストレルさんの家の近くに行ってみたくって・・・」

「んじや、いつそのこと家来ちやう？」

「え、ええ!?ま、まだ早いよ!!」

「早いつて何だ・・・まあいいや、ついて来て」

「ぼ、僕まだ心の準備が・・・」

「・・・あんた私と何するつもり・・・」

とりあえず鎮守府に向かって歩く。

「あれ、ケストレルさん。あれ何？」

「そろそろさん付けやめてよく・・・んでアレって？」

「ご、ごめん・・・アレだよ」

指差す方向を見ると・・・

「え・・・何・・・アレ・・・」

「何だろうね・・・」

「あの模様・・・」

「?何か知ってるの？」

「タクミ！ここまで来たならついて来て!!」

「え、え!?何!?」

「いいから早く!!」

「・・・深海棲艦・・・!!!」

いつのまに空を飛べるように・・・

ダツシユで鎮守府に帰る。

そういえば今鎮守府にいる艦に対空戦闘能力がほとんど無かった・・・

「鎮守府ってここ?」

「そう、ここが横須賀鎮守府。とにかく安全な場所に隠れてて!」

「え、で、でも・・・」

「いいから!!」

そういつても私の後を追ってきた。

とにかく急いで工廠に向かわないと・・・

「お?ケストレル?」

「妖精さん!対空能力の高そうな船、何でもいいから建造して!!高速建造で!!」

「あいさー!!」

「ケ、ケストレルく・・・ゼエゼエ・・・」

「結局ここまで私についてきたのか・・・」

「だ、だって心配だし・・・」

「はあ・・・じゃあ工廠から出てきた艦娘にあのデカブツにしたに行くように言っというてね!」

「ケストレルはどうするの!?!」

「防空司令部に走ってそのミサイルをアイツに叩き込んでやるのよ!!」

「ミ、ミサイル!?!」

「とにかくお願い!!」

そう言っって私は防空司令部に向かった。

今動かせるのはトマホークのみ・・・

対艦ミサイルを対空攻撃に使うなんて考えたこと無かったけど・・・

なんとかかしてみせる！

キーロフ級重巡洋艦とアドミラル・クズネツオフ級航空母艦

くピョートル・ヴェリーキイく

さてと・・・一仕事しちゃおうかな

「クズネツオフ、制空権取れそう？」

〈問題ありません〉

「よしー」

あの巨体をロックオンする。

あれだけ大きいなら少し外したからって問題はないだろう。

「フォールト・・・撃てっー」

S—300FMを12発連続発射する。

S—300はかなり大型の対空ミサイルで何も知らない人が見たらICBMと勘違いしそうな形をしている。

ミサイルは2発がコクピット付近、残りは翼に命中した。

10発も大型ミサイルを被弾した翼はへし折れ、大型機はバランスを崩した。

〈敵機、バランス崩しました。どうしますか？〉

「なんかその・・・機械みたいな喋り方だねよえ・・・クズネツオフつて・・・」

〈兵器ですから〉

「艀装を外したら別人なのにね」

〈・・・グラニート、目標をロックオン〉

「わああああ!!待った待った!!!」

クズネツオフ怖い・・・

とりあえずアイツはバランス崩したけど・・・落ちる前に反撃してきそうだなく・・・

よし、やったこと無いけど対艦ミサイルを直撃させてみよう

「グラニート、諸元入力・・・撃てー!!!」

座標を空中で爆発するように設定して発射する。

対艦ミサイルで対空攻撃なんて聞いたこと無いけどね。

〈〈目標にミサイル命中・・・敵機、墜落します〉〉

「あれ、当たった?」

〈〈はい、直撃です〉〉

「やったね♪」

〈〈帰りましょう〉〉

「そうだね」

着任早々、デカブツを叩き落して帰路に着いた。

くアンドロメダく

「着任早々お疲れ様でした」

「いえいえ! 初実戦で戦果あげられてボクも満足だよ!」

「当然の結果です」

「あ、クズネツオフ! いつまで艀装つけてるの?」

「これが私の本体です」

「基地内では外すのが常識でしょ!」

「あ、やめっ・・・」

仲いいですね・・・なんて思いながらクズネツオフの艀装が外されるのを見ていた。

「はい外れた!」

「えっ・・・ひっ!」

さつきまでの機軸みたいな口調が変わり、ピョートルの後ろに隠れてちよこつとだけ顔を覗かせていた。

・・・かわいいです

「あー! 隠れるの禁止!」

「ひう! で、でも・・・わ、私・・・無理ですううううう!!!」

そう叫んでクズネツオフはどこかへ走っていった。

「え・・・ええつと・・・」

「ああ、ごめんごめん! クズネツオフって艀装外したら突然人が変わるんだよねー! あははは!」

「ええつと・・・と、とりあえずお部屋分かりますか？」

「うん！あ、そういえば提督は？」

「今旅行に行かれてますよ」

「ああ、そうなんだ！旅行いいなあ〜・・・」

「とりあえず今日はお疲れ様でした」

「初めてで疲れた〜・・・あ、クズネツオフはボクは見つけて連れて行くから大丈夫だよ」

そういつて司令室から出て行った。

するとこんどはケストレルが司令室に飛び込んできた

「ア、アンドロメダー!!よかったあ・・・」

「うわあ!!ケ、ケストレルさん・・・抱きつかないでください・・・」

「だって・・・心配だったし・・・」

「あの・・・それより・・・」

部屋の入り口で男性が一人ケストレルを眺めていた。

「あの人・・・誰ですか？」

「ああ、アレ？私の彼氏！」

「ア、アレ抜いて・・・」

結構扱いひどいな・・・

とりあえず挨拶はしとこう・・・

「ケストレルの彼氏さんですか？」

「は、はい！島田 拓未と申しますです！」

不恰好な敬礼をしながら噛み噛みでしゃべっていた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。私は情報収集艦アンドロメダです」

「よ、よろしくおねがいます！」

「とりあえずお茶でも飲まれますか？」

「ああ、アンドロメダ、そんなのいいよ〜」

「でも・・・お客さんですし・・・」

「ほらタクミ！ジュース買ってくる！」

「ええ!？」

「もちろん、お前のサイフな」

「ひどっ!!」

「えへへ、冗談だよ。何が飲みたい?」

「え、ぼ、僕は特に・・・」

「じゃあ、なんでもいいね。アンドロメダは?」

「あ、いえ!私が行きますよ!」

「いいのいいの」

「じゃあ・・・お願いします」

「はい!」

そんな感じで司令室はのんびりとした空気になっていた。

く提督く

「ソフトクリームおいしいのです♪」

「たしかにおいしいなコレ」

二人でベンチに腰掛け、ソフトクリームを食べていた。

このあとの予定決めてないけど・・・どうするか

「電、このあと行きたい場所とかあるか?」

「んく・・・お買い物に行きたいのです!」

「お土産とか?」

「はい!あとは北海道のおいしい食べ物とか!」

「お!いいな!いつそのこと食べ歩きするか!」

「きよ、今日はお腹いっぱいなのです・・・」

「んじや明日?」

「明日なら大丈夫なのです!」

「お土産は何買って帰るかな」

「んく・・・白い恋人とか?」

「そうだな」

とりあえず時間もいい頃合なので旅館に帰る。

「電、今日は満足か?」

「はい!・・・牛さんなみのおっぱいってどうやったら手に入るのです・・・」

「あ、あはは・・・」

そんな話をしながら旅館に帰ってきた。

3時間くらい運転してたら疲れた・・・
食事も済ませて部屋に帰って来た。

「ふく・・・疲れた」

「お疲れ様なのです！」

長時間の運転はつらい・・・

とりあえず風呂に入ろう

「電、風呂行かないか？」

「お風呂ですか？」

「ああ、ここってカッパル・夫婦用の混浴があるしな」

「ここここここ混浴!」

「だ、ダメか？」

「え、えつと・・・ダメではないですけど・・・」

「んじや行こう！」

「は、はい！」

よし、頑張つてMy sonがカーニバルだよっ!にならないようにしないとな。

え?何?混浴映像寄越せつて?

・・・1万からスタートな

「電はもう先に入ったかな？」

扉を開けて入るとまだ誰も居なかった。

「先に入っとくかな」

お湯につかり一息つく。

お湯の温度は最高で疲れが取れていく。

・・・それはおいといて、ここは露天風呂なんだが何故か周りに地上配備型CIWSとロシアの最新式対空ミサイルS-400が置いてある。

あと気のせいであってほしいけど、この露天風呂の半径40km以内は飛行禁止空域だった気がする。

「ここは何かの軍事施設かよ・・・」

しかもたまにCIWSが上空の目標を追尾するように動いたりする。

怖すぎ。

「電遅いな・・・」

一息つきながら空を見上げていると・・・

「きゅーそくふじょー！なのです！」

「おわっ!？」

電がお湯から飛び出てきた。

「えへへ、司令官さん、対潜警戒を厳となせ！なのです」

「・・・お前はその対潜警戒をする船だろうが・・・」

「えへへ♪」

「可愛いなもう・・・」

「司令官さん、お膝の上いいです?」

「ん?いいぞ」

「じゃあ失礼するのです」

電はあぐらを掻いていた俺の脚の上に座ってきた。

水の中なので元々軽い電がさらに軽く感じる。

「空・・・きれいなのです」

「そうだな・・・夕暮れ時だしな」

「そういえば司令官さんとうとうして空を見上げてると何だか落ち着くのです」

「場所もいいしな・・・ここで鳥の鳴き声とかあれば完璧なんだが・・・」

聞こえてくるのはCIWSのモーター音とバルカンが空回りする音だった。

・・・バルカンが空回りするって結構近いところにターゲットいるんじゃないね・・・?

なんて思っていると・・・

「はにゃあああ!？」

「おおっ!？」

ものすごい轟音とともにぶっとい対空ミサイルが飛んでいった。

・・・マジですか・・・

しかもその後空に赤い点のようなものが出来た数秒後、小さい爆音が聞こえてきた。

・・・撃墜されとる・・・

「へお客様にご連絡いたします。さきほど露天風呂上空の飛行禁止空域に偵察機と思わしき航空機が侵入、再三の警告に従わなかったため撃墜処置をとらせていただきました。お客様を驚かせてしまい、誠に申し訳ございません」

「て、偵察機？」

「あく・・・手の込んだ盗撮だな・・・」

「び、びつくりしたのです・・・」

「俺もだ・・・」

突然でびつくりしたがその後は静かになった。

これでゆつくり風呂に浸かれる。

「司令官さん」

「ん？何だ？」

「・・・大好き・・・なのです」

俺のほうに振り向き、上目遣いで言ってきた。

「俺もだよ、電」

「えへへ・・・ん・・・ちゅっ・・・」

何度目のキスだろうか。

・・・ケツコン式のときのファーストキスはノーカンな。

そのまま30分くらいお湯に浸かっていたせいで俺たちは軽くのぼせてしまった。

発令！第十一号作戦

くアンドロメダく

今日の仕事は・・・あれ、何もない？

アイガイオンによる鎮守府強襲が起きた翌日、私はいつもどおり司令室にきて今日の仕事を確認していた。

「書類整理が・・・少しだけですか」

ほんの4く5枚程度の書類があるだけでほかは何もなかった。

デイリーも今日は回す必要がない。

書類を片付けているとケストレルがやってきた。

「アンドロメダ、今日出かけない？」

「今日ですか？もう少して仕事が終わるので・・・」

「了解！私の彼氏も一緒にいるけど大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「実はアンドロメダに紹介したい人がいるんだって」

「は、え？私に？」

「男の人の友達ほしいでしょ？」

「ええ!?わ、私はそんな！」

実をいうとちよつと欲しかったりもする。

男の人といえは隊長くらいしかこの鎮守府にいない。

「まあ仕事終わったらいいこつ！」

「は、はい」

そんなわけで仕事も終わり、着替えてケストレルを待つ。

「おまたせく！」

「あ、ケストレルさん」

「えへへ、ちよつと服選ぶの迷っちゃった」

「私・・・こんな服でいいでしょうか・・・」

「普通にかわいいよ！」

「そ、そうですか・・・？」

「そういえばメガネかけてたっけ？」

「最近少し視力が落ちまして・・・艤装つけてるときは問題ないのです

が・・・」

「そうなんだ、メガネ似合ってるよ！」

「あ、ありがとうございます・・・」

「とりあえず行こっ！」

場所は東京で待ち合わせらしい。

実は会う前から緊張しまくりだ。

「ケ、ケストレルさん・・・逃げていいですか・・・？」

「ええ!?なんで!？」

「お、男の人と話すの緊張しちゃって・・・」

「お、おう・・・」

「そんな微妙そうな顔しないでくださいよおお・・・」

「いや・・・その・・・私が男なら襲ってるね！」

「な、なに言うんですか!？」

「へへへ、じよーだん、じよーだん!・・・同性カップルはあの護衛艦

二人でいいと思う・・・」

「あ、あはは・・・」

そんなわけで東京駅。

改札を出るとケストレルの彼氏と、その友人らしき人がいた。

「おまたせー!」

「ううん、今来たところだよ」

「なんだよ、お前可愛い彼女じゃねーかよおおおお!!お前だけは・・・味方だと信じていたのに・・・」

「あ、あはは・・・」

友人さん・・・結構タイプかもです・・・

話してみないとわからないけど・・・

「始めまして!俺、朝野 正樹っていいいます!」

「ほうほう・・・君がタクミの友達か」

「こいつとは小学校からの付き合いだからね」

「おまけに趣味も似通ってるしね」

「そりゃ、お前に俺が色々吹き込んだからな」

ケストレルはすぐに仲良くなったようだ。

私は・・・入りづらい・・・

「そっちの女の子は？」

「ああ、この子は私の昔からの友達だよ」

「へえ、よろしく！」

「はえ!? あ、ええつと・・・よ、よろしくおねがいます・・・」

いきなりびつくりした・・・

「名前はなんていうの？」

「わ、私ですか？ じよ、情報収集艦アンドロメダ・・・です」

「ん・・・？ どゆこと？」

正樹と名乗った少年は頭に？マークが飛びまくっていた。

「ああ正樹、その子とケストレルは艦娘なんだって」

「ファツ!? マジかよ!!」

正樹は軽く興奮したように話しかけてきた。

「俺、艦娘のファンなんだ! すげえ・・・」

「え、ええつと・・・」

「ぜ、ぜひとも連絡先を!!」

「ふええええ!!」

いきなりなこと過ぎてびつくりする。

連絡先聞かれるなんて初めてすぎる・・・

「正樹・・・ナンパするの早いよ・・・」

「え、これってナンパなの？」

「え、えつと・・・正樹さん・・・」

「は、はい! 何ででしょうか！」

「連絡先・・・交換しますか・・・？」

「いいの!? やったああああ!!」

「ふえつ!? え、えつと・・・ケータイを・・・」

その光景をケストレルとその彼氏さんは遠目から眺めていた。

なんで離れてるんですか・・・

「これからよろしく!」

「あ、はい・・・よろしくお願いします」

連絡先も交換し、4人で街に出かけた。

く提督く

「ふあああああ．．．」

朝の6時か．．．

今日も天気がいい。

ふとケータイを開くと着信が何件もあった。

「この番号．．．司令部？」

とりあえず電話をかけねば．．．

「もしもし？」

〈ああ大佐！やっと出た．．．〉

「なんです？」

〈大規模作戦だよ、明後日には作戦開始だ〉

「マジっすか．．．」

〈ああ、第十一号作戦だ〉

「第十一．．．二次大戦の？」

〈まあ、名前はそのままだな。深海棲艦の泊地をリランカ島に見つけ

た〉

「ああ、あれ泊地だったんですか。なんか1ヶ月前くらいから妙な動

きしてましたもんねく

〈．．．一ヶ月前．．．？我々が見つけたのはつい先日なんだが．．．〉

「えっ」

遅すぎい!!だから大規模作戦なんかになるんだよ！

．．．報告してないからなのもあるけど

〈どうやって見つけたんだ．．．〉

「偵察衛星が写真送ってきて、それを元にUAVで現場空域を．．．」

〈．．．なんで報告ないの〉

「．．．すみません」

〈まあ．．．仕方ない〉

よかった。怒られなかった。

「とりあえず明後日ですね。了解です」

〈よろしく頼む。ところで君どこにいるんだ？鎮守府に電話しても出ないし・・・〉

「ああ、電と北海道に旅行です」

〈旅行中だったのか・・・それはすまない〉

「いいええ。作戦でしたら仕方ないですからね。それに、アンタには鎮守府の改造黙認してもらってますし」

〈・・・あれは君が「俺のバックわかってます？アメリカつすよ？みんなのお友達サムおじさんつすよ？」って脅迫してきたからだろうが・・・〉

「そ、そんなことしたっけなく？」

・・・かれこれ3年前くらいにそうやって司令部に言ったのは事実です

とりあえず今日で旅行は終わりだな・・・

〈とりあえずよろしく頼む。あと、俺の嫁は子日だ。異論は認めん〉

「・・・ペドめ・・・」

〈大佐・・・君とはいい酒が飲めると期待したんだがな〉

「ロリコンとペドを一緒にするんじゃないですよ」

〈ふむ・・・よろしい、ならば戦争だ〉

「いいつすけど、俺のバック分かってます？アメリカつすよ？タスケテーっていったら武装した怖いおじさん達が攻め込んできますよ？〉

〈・・・〉

「まあ、明後日ですね。了解しました」

〈・・・無理やり話を終わらすな君・・・とりあえず頼むよ〉

「了解」

仕方ない・・・帰り支度だけしとくか・・・

「ふああああ・・・あれ・・・司令官さん・・・」

「おはよ。どした？」

「何で荷物まとめてるんですか？」

「ああ・・・すまん、明後日から大規模作戦が始まるんだ。それで、もう帰らないと・・・」

「もう帰るんですか・・・？」

「いや、午後に出発しようと思ってるよ」

「じゃあ午前中に急いでお土産買わないと・・・」

「そうだな」

そんなわけで朝食も済ませて空港付近に向かう。

荷物だけ機体に詰め込んで空港内でお土産を買うことにした。

「電、なるべく生鮮食品は避けてくれよ、あと壊れやすいものも」

「どうしてですか？」

「あの輸送ポッドの位置って地味に熱くなるんだよ、あとはGで壊れたりするからね」

「なるほどなのです！」

「まあ、白い恋人とかなら大丈夫だと思うけど・・・」

「了解なのです！司令官さんは何買うのですか？」

「ん？俺？これこれ」

「木彫りの熊・・・？」

「ちよつとこういうのを司令室に置いてみたくなってな。なんか偉い人感でるだろ？」

「いやまあ・・・出ますけど理由が・・・」

そんな会話をしていたら昼過ぎになる。

お土産もたんまり購入した。

「さてと・・・帰るかな」

「司令官さん・・・また、連れてきてくださいいね」

「おう！また来ような」

「はい！」

～アンドロメダ～

横須賀まで帰ってきてきて4人でカフェに行っていた。

「ところでさ、タクミ」

「ん？何？」

「彼女とどこまでやったんだよ」

「ファツ!?」

「ブフツ!!」

「ケ、ケストレルさん!?大丈夫ですか!」

「げほっげほっ・・・大丈夫・・・」

「な、なにもしてないよ!!」

「えく・・・つまんねーの・・・」

ちなみにその話・・・私も気になります。

「ところでケストレルさん」

「げほっ・・・何・・・?」

「どこまでやったんです?」

「ぶふおおお!!」

飲みかけてた水をまた盛大に噴出した。

「お! やっぱアンドロメダさんも気になる?!」

「気になります!」

「だ、だから何もしてないって! アンドロメダも目を光らせない!」

「いまナイトビジョン起動させてませんよ?」

「そういう意味じゃない!」

それ以外に目が光るって何があるんだろう・・・

そんな話してると・・・

「あ、すみません、少し電話に行ってきます」

「どうしたの?」

「隊長から・・・」

「ん、了解!」

店のトイレ付近で電話にでる

「もしもし?」

〈ああ、アンドロメダか〉

「はい。今、機内なんですか?」

〈へうん、横須賀に帰還中〉

「そういうえぼどうしたんですか?」

〈明後日から大規模作戦が始まるんだ。それで1500には会議室
にいて欲しいんだけど・・・〉

「あと1時間後ですか!?!」

〈へお、おう。どした?〉

「ちよ、ちよつと遅れるかもしれませんが・・・」

〈へああ、少しくらい大丈夫だよ〉

「すみません!急いで帰ります!」

〈へはいよー。気をつけてな〉

「隊長もお気をつけて」

電話を切り、ケストレルのところへ戻る

「おかえり。なんの電話だったの?」

「明後日から大規模作戦発令、1500に会議室に集まるようにこのことです」

「1500って・・・あと1時間しかないじゃん!」

「はい!急いで帰らないと・・・」

「ごめんタクミ!!お金は今度返すから払つといて!!」

「あ、え・・・う、うん」

「すみません!正樹さん、私のもお願いします!」

「お、おう。気をつけて」

「はい!」

急いで鎮守府に戻る。

その最中に真上を聞きなれた轟音が通り過ぎていった。

たぶん隊長だろう。

なんとか10分前までに鎮守府にたどりつけた。

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

「な、なんとか帰れたね・・・」

「そうですね・・・あとは着替えないと・・・」

「できることならシャワー浴びたい・・・」

「そんなことしてる暇ありませんよ!」

「分かってるって。着替えよ!」

「はい!」

急いで寮にもどり制服に着替える。

久々に走ったら汗かきました・・・
急いで会議室に入る。

「すみません！遅れました!!」

「お、おう、時間はまだ大丈夫だぞ」

「あ、あれ?」

「まだ4分あるよ」

「間に合ってよかった・・・」

「ははは・・・」

なんだか久々に隊長の姿を見た気がする・・・

く提督く

「よし、1500・・・作戦を説明するぞ!」

作戦名は第十一号作戦。

リランカ島攻略作戦だ。

まず、第一海域に軽巡と駆逐艦を派遣して威力偵察を行う。

この場で敵を確認した場合、これを撃破する。

今回の作戦にはケストレル、バーベツト、いそかぜ、アンドロメダ、
ピョートル・ヴェリーキイ、アドミラル・クズネツォフは出撃できな
い。

支援艦隊としては可能だが。

「あれ、何で私はOKなんです?」

「ああ、うらかぜはDDだろ?」

「そんなこと言ったらいそかぜだってDDだよ?」

「あいつはDDGだろうが・・・」

「あ、そっか」

「あとケストレルとかは一応原子力空母だからな。原子力を使う艦が
出撃できないんだ」

「なるほど・・・」

「とりあえず続きな」

編成はまず、第一海域に第六駆逐隊とうらかぜ、雪風を出撃させる。

「よしよし。大丈夫だ。うらかぜも、雪風もいる。第六のみんなも一緒だ。安心していつて来い。な？」

「はい……」

「ほら、涙拭け。もし何かあったら俺がどうにかしてやるよ」

「はい……ぐすつ」

「よしよし」

「……司令官さん……」

「ん？何だ？」

「……この部屋……もう誰も来ませんか？」

「んく……まあ、もう来ないだろうな」

「司令官さん……」

「ん？何だ？」

「ここで……いいですか……？」

「いいですか……おまつ……」

いきなり目の前に服をはだけさせ始めた。

「ま、待て待て待て!!せめて部屋でやろ!部屋で!!」

「わ、私はここでいいんです!」

「落ち着け、落ち着けて!!」

「お、落ち着くのはそっちなのですっ!」

「ちよ、まつ……んぐつ……!」

「ん……ぷはっ……」

「……キスで口塞いで落ち着かせるの反則だろ……」

「えへへ……」

結局そのまま司令室で電と夜戦を行い、翌日は地味に腰痛に苦しめられたとき。

明日は威力偵察だが、油断せずに行こう……鎮守府のミサイルも準備しておかないと。

「あんたが提督か？俺はミサイル駆逐艦ジョン・ポール・ジョーンズ！
ジョンって呼んでくれ！深海棲艦だろうが宇宙人の戦闘兵器だろう
がなんだって沈めてやるぜ！でも、パンジャンドラムだけは勘弁な
!!」

「ようこそ横須賀へ」

俺っ娘か・・・

天龍とキャラ被（ry

そんなこと思ってるともう一人出てきた。

「こんどは誰かな」

「見た感じ戦艦っぽいのです？」

煙が晴れ、出てきた艦娘は自己紹介を始めた。

「私はマイティ・ムー。戦艦ミズーリだ。大和型にも引けを取らない
ぞ。相手が戦艦だろうが宇宙人だろうがボコボコにしてやるさ」

「ようこそ。さっそくだけど、支援任務についてもらえるかな」

「いいぞ。任せろ」

「じゃあ、1200時に司令室に」

「了解」

二人を寮まで案内し、司令室に戻ってくる。

「司令官さん・・・現代艦多くないですか・・・？」

「ああ・・・しかも一人は結構いろんな艦と取っ組み合いしそうだ・・・」

「ミズーリさんですか？」

「ああ・・・長門あたりと・・・」

「だ、大丈夫だと・・・思うのです・・・？」

何で疑問系？とか思ったけど気にしない！

「よし・・・とりあえず作戦はこんなもんか」

「どんな感じなのですか？」

「内容はな・・・」

威力偵察の詳細な作戦はまず、うらかぜから艦載機を上げ周囲を偵
察しつつ、レーダーで警戒。

ほかの艦も対空、対潜警戒を厳としつつ目標海域まで進む。

周囲にはピケット艦などの存在も確認されていた。

今回進むルートはまず、ポイントA（アルファ）で確認されているピケット艦をなるべく遠距離からの砲撃で撃沈、敵に存在を気づかれないようにする。

もし発見された場合、上空に待機しているケストレル艦載機から電子攻撃を行い、敵の通信網を麻痺させ撃破する。

次にポイントB（ブラボー）に向かい一時待機、偵察衛星の情報をもとにポイントC（チャーリー）、ポイントE（エコー）のどちらに向かうかを選択する。

最短ルートはポイントCだが敵も強力だろう。

ポイントCに向かう場合、支援艦隊は全力で偵察艦隊を援護、敵艦隊を撃滅する。

ポイントD（デルタ）に向かう場合は少し遠回りにはなるが敵の警備は比較的脆弱だ。

ポイントDには複数の潜水艦も確認されている。その後ポイントF（フォックスロット）に向かう。

ポイントFはポイントCほどでは無いが比較的強力な敵艦隊がいるだろう。

そこでポイントFに向かう場合、少し遠回りをして燃料が減っているため、支援艦隊より長距離ミサイル攻撃を行う。

発射弾数4発、いそがせからトマホーク攻撃を行う。

そしてポイントH（ホテル）が敵の警戒艦隊の旗艦がいる。

まず、交戦と同時にピョートルとクズネツォフがグラニート対艦ミサイルを合計4発発射、旗艦とその周りの軽巡クラスを攻撃する。

残りを偵察艦隊で撃沈、殲滅する。

これが今回の作戦だ。

「まあこんな感じかな」

「えつと・・・私達は基本的に敵に気づかれないように動けばいいのです?」

「まあ、ポイントAではな。たぶん、ポイントCでは気づかれると思う」

「でもそれだと最初に隠密の意味がない気がするのです」

「ああ、でも最初に気づかれると敵の支援攻撃があるかも知れないからな。ポイントC、D、Fの攻略が難しくなるんだよ」

「なるほどなのです・・・あ、でももしポイントDに向かう場合はDで気づかれてもダメなのでは？」

「そうだな。ただ、相手は潜水艦・・・こつちが見つかる前にはもうこつちを見つけて通信を行つてるだろうな・・・」

「でもケストレルさんの艦載機なら・・・」

「ケストレルに積んである電子戦機は一機だけで効果も電子妨害もほんの一戦程度しか行えないんだ。でも、もしポイントAで発見されなければ、ポイントCで電子攻撃を行えるから敵旗艦隊から攻撃を受けるリスクが減るんだよ」

「なるほど・・・」

「さと・・・そろそろ時間か・・・みんなを集めよう」

「なのです!!」

く電く

「・・・これが今回の偵察作戦の内容だ。質問は？」

「質問いいかな」

「なんだピョートル」

「グラニートは撃つて合計4発だよ。それをどの目標に配分すればいいのかな」

「そうだな・・・一発は必ず旗艦、その他は偵察艦隊の情報を元に照準してくれ」

「なるほど。分かったよ!」

支援艦隊には現代艦・・・ミサイルって兵器を私はよく知らないけど少し頼もしい。

「じゃあ皆さん・・・出撃準備なのです!」

「おー!!」

工廠に走り、装備を整える。

ふと、装備を見ているとケツコン式でもらった砲を見つけた。

「あ……これ着けていこうかな……」

76mm単装速射砲

攻撃+1

命中+6

対空+20

迎撃+30

現代の主砲……どんな感じなんだろう……

「電ちゃん！つけちゃう？」

「あ、工廠妖精さん！こんにちわなのです！」

「こんにちはっす！それで着ける？」

「うくん……大丈夫なのです？」

「大丈夫！」

「じゃあ……お願いするのです！」

「はいよ！」

艦装に装着してもらおう。

「じゃあがんばって！」

「なのです！」

工廠を出て外に向かう。

もうみんなそろっていた。

「お待ちせしましたなのです！」

「レディは遅刻なんてしないのよ！」

「暁、なんでもレディをつければいいって物じゃないよ」

「な、なによ！いいじゃない！」

「喧嘩しちゃダメよ！」

「は、はわわ……」

でもよく考えたら私達、第六駆逐隊で大きな喧嘩といえれば暁お姉ちゃんのプリンを雷お姉ちゃんが食べちゃったくらいしかない。

……あのときは口喧嘩から始まって砲雷撃戦まで発展してたので
す……

流れ弾が司令室に直撃して司令官さんはアフロになって黒煙を吐いていたのが印象に残っている。

そのときPCでしていた仕事(?)の大切なデータが壊れてしまったらしく怒った司令官さんが2人に向かって演習用の塗料が詰まったトマホークミサイルを発射した。

2人とも塗料でベトベトになって泣きながら帰ってきたのです……

「と、とにかく行くのです!」

「レディにお任せよ!」

「y p a!」

「もつと頼っていいのよ!」

「艦隊をお守りします!」

「速射砲に初弾装填……よしっ!行こ!」

支援艦隊のみんなはもう出撃して援護位置に向かっている。

偵察任務だけ……頑張るのです!!

発動準備、第十一号作戦！ 後編

く電

まもなくA海域・・・頑張ろう

「うらかぜさん、そろそろ艦載機をお願いなのです」

「了解！」

うらかぜの腕についている飛行甲板のようなものからヘリが発艦する。

「対水上レーダーには・・・えっと・・・3隻感ありだね」

「艦級などは分かりますか？」

「うくん・・・その辺はSHからの報告を待たないと」

「距離はどのくらいなのかしら？」

「距離・・・約10km」

10km・・・一応射程圏内だ。

当たるかどうかは別として。

「射程圏内だけど・・・当たるかしら」

「私も少し自信ないわ・・・」

「電さん、今主砲は76mm砲ですよね？」

「はい、76mmなのです」

「じゃあ、SHで弾着観測を行いつつ砲撃しましょう！」

「了解なのです！」

「えっと・・・私達は？」

「うくん・・・一応砲撃を・・・」

「一応!?わ、私だって一人前のレディなんだから弾くらい当てれるわよー！」

「暁・・・そんな高性能なレディは居ないと思う」

響お姉ちゃんの突っ込みが地味に厳しいのです・・・

「雪風はどうしたらいいですか？」

「一緒に砲撃しましょう、SHの観測を待ってください」

「了解ですっ！」

砲弾を装填し観測を待つ。

はるか上空にケストレルさんの戦闘機が轟音を響かせ飛行していた。

「SHより報告・・・敵艦発見、軽巡1、駆逐2！」

「了解なのです！全艦砲撃用意！」

「方位220、距離10000！」

「いつでも撃てるよ」

「私も準備OKよ！レディの力をみなさい！」

「暁、何度も悪いけどそんな物騒なレディは居ない」

「何よー!!これも女子力じゃない!!」

「人はそれを女死力と言う」

「言わないわよー!!」

「はわわ・・・喧嘩はダメなのです・・・」

「あはは・・・」

とりあえず砲撃を始めよう。

「砲撃開始なのです！撃ちー方ー始めっ!!」

「てーっ!!」

「攻撃するからね！」

「さて、やりますか」

「雪風は沈みません！」

「撃ちー方始めー・・・用意！てーっ!!」

一斉に砲撃を開始、着弾観測を待つ。

「着弾まで1分・・・」

この一分が長い・・・

命中してくれることを願う。

「着弾まであと5・・・4・・・3・・・2・・・弾着！」

「命中しましたか!?!」

「SHより報告、敵巡洋艦大破！駆逐艦2隻の撃沈を確認！」

「了解なのです！」

「<<こちらケストレル、電子攻撃は必要?>>

「いえ、大丈夫なのです！」

「<<了解、必要なら要請を>>

「了解なのです！」

敵軽巡はもう通信できないだろう。
撤退しても私達を追い抜くことは不可能・・・今のうちに進撃しよう。

「まもなくポイントB・・・司令官さん、どちらに進めばいいですか？」

〈ポイント・・・あく・・・ポイントCに向かってくれ、いそかぜはトマホーク攻撃準備を〉

〈了解しました。うらかぜ、敵の位置報告をお願いしますね〉

「了解、任せて！」

「今回は敵艦隊に接近します！被弾に気をつけてくださいなのです！」

「了解」

「了解よ！」

「I have control」

突然雪風が呟く。

どうしたんだろう・・・

「まもなく交戦海域なのです」

「敵影・・・確認、巡洋艦1隻、駆逐2！雷巡2！」

「雷巡が危ないのです・・・いそかぜさんにその二隻を優先して攻撃するようにお願いするのです！」

「了解！いそかぜ、ターゲットE―1―1、二番ターゲットE―1―4、三番ターゲットR―2―6、四番ターゲット、R―1―6！」

〈了解しました。ミサイル発射します、着弾まで2分〉

「了解！」

「全艦最大戦速！敵に突っ込むのです！」

「了解！」

「ready：main GUN」

突然雪風が砲撃を開始する。

「雪風さん！まだ砲撃しちやダメなのです!!」

「・・・敵だ」

「雪風さん・・・？」

突然舌足らずな口調から冷たい・・・それこそ機械のような口調になる。

「雪風も・・・敵だと言っている」

「雪風も・・・ってあなたが雪風さんじゃないのです?」

「私はユキカゼ」

「・・・?」

そんな会話をしていると発見されたのか砲弾が飛んでくる。

「ケストレルさん!電子攻撃お願いなのです!」

〈了解!ECM出力最大!あと20分は持つよ!〉

「了解なのです!」

「攻撃する?」

「するのです!みんな攻撃開始なのです!」

「了解!てーっ!!」

「撃ちー方始めっ!!」

私も攻撃しよう。

「主砲!撃ちー方ー始めなのです!!」

主砲で砲撃をしていると・・・

「あっ!?あ、あつ、熱いのですううう!!」

なんなのですか!?!背中が火傷するうううう!!!

「熱いのですうううう!!な、何か背中にいいいい!!」

「お、落ち着いて!たぶん葉莖が背中に・・・」

その場で暴れていると服の隙間から葉莖がポロっと出てきた。

・・・背中絶対やけどしてるのです・・・もう今夜司令官さんに見

せられないのです・・・

「トマホーク・・・着弾!!」

「敵艦隊の被害はどのようなのです?」

「軽巡洋艦撃沈・・・でも雷巡2はまだ健在!いそかぜ、2発外れた

!」

〈へちっ・・・了解です〉

「こ、こらこら・・・舌打ちしない・・・」

「えっと・・・何隻健在ですか?」

「雷巡2と駆逐1！あとは撃沈！」

「了解なのです！」

3隻だけ・・・突っ込もう。

「全艦突撃、やっつけるのです！」

「y p a a!!」

「レディにお任せよ！」

一気に増速し、突撃する。

敵艦隊はいきなり飛来した対艦ミサイルで旗艦を撃沈され混乱しているようだった。

「相手は混乱中なのです！」

「みたいだね、一気に片付けよう」

「なのです！」

「主砲！撃ち方始め！」

全員が一気に砲撃を開始、敵艦隊に鉄の雨が降り注ぐ。

敵は旗艦を撃沈され、通信はECM攻撃で出来ず増援も呼べない。

もはや、当たらないように逃げ惑うしかなかった。

だが、SHの弾着観測のおかげで逃げ惑う敵艦にも命中弾が出だす。

「敵駆逐艦撃沈！」

「敵雷巡撃沈！今のは暁がやったんだから!!」

「目標・・・全滅を確認なのです！」

「対水上レーダーに感なし・・・うん。敵艦隊の殲滅を確認」

ここまでみんな無傷・・・やっぱり雪風さんが居てくれるからなのです？

だが、肝心の雪風はさつきから無機質な機械みたいな雰囲気を出している。

「あとはポイントHの敵旗艦だけ・・・行くのです！」

「了解！」

ここまで順調に作戦が進んでいる。

このまま被弾が出ないといいけど・・・

「・・・！対水上レーダーに感！IFFF応答なし・・・敵艦隊！」

「了解なのです！支援艦隊に攻撃要請をお願いするのです！」

「了解！決戦支援艦隊へ、こちら偵察艦隊。支援攻撃要請、ターゲツト F-2-4、T-1-9！2発つつ撃ち込んで！」

〈了解！グラニート発射！着弾まで3分！〉

「了解！着弾まで3分！」

「よし・・・突撃なのです！」

「おー!!」

「ready torpedo... fire」

いきなり雪風が魚雷を発射する。

射程圏内だがこれでは命中しない。

「雪風さんーこれじゃ命中しないのです！」

雪風にそう言っても反応してくれなかった。

「もう・・・なんなのです・・・」

「敵艦・・・発砲!!」

すると私達のすぐ近くに砲弾が着弾する。

「回避なのです！」

回避を始めていると上空に轟音を響かせミサイルが飛んでいった。

ミサイルは敵旗艦を狙うも一発が外れ、もう一発が至近弾として着

弾した。

だが小破させることは出来たようだ。

もう二発は敵艦に命中、撃沈した。

「敵旗艦は小破・・・でも長距離ミサイルのおかげで混乱してる・・・

やるなら今だよ！」

「了解なのです！雷撃戦用意なのです！」

「了解！」

敵艦隊に一気に近づき、至近距離から魚雷を撃ち込む作戦だ。

少し危険だけど・・・

「あとちよつと・・・」

「私はもう有効射程だよ！」

「了解なのです！うらかぜさんに続いて雷撃開始なのです！」

「了解！短魚雷・・・撃ちー方始め!!」

「魚雷発射なのです！」

5隻から4発づつ・・・合計20発の魚雷が放射線状に広がっていき

く。その中の4発はうらかぜの誘導魚雷のため、目標を追いかけ

ていく。敵艦隊はいきなりのごとく混乱、回避もままならず被雷、沈没していった。

旗艦も誘導魚雷1発と無誘導の酸素魚雷を2発被雷し、轟沈した。

「敵旗艦・・・撃沈！敵艦隊の殲滅を確認なのです！」

「簡単だったわね！」

「油断は禁物だよ」

「You have control・・・」

「ん？雪風、何かあったかい？」

「あれ、今私何かしてました？」

「え」

雪風さん・・・記憶ないのです!?

「え、えつと・・・ちよつと待って、今あなたそこで普通に戦ってたわよね」

「はえ？雪風はまだ出撃したばかりかだっただけだと思えます・・・」

「えつ」

記憶喪失なのです!?!どこか撃たれたのです!?

「ゆ、雪風さん！どこか撃たれたのです!?!」

「え、え？雪風はどこも撃たれてないですよ!!」

「で、でも・・・」

司令官さんに聞いたら何か分かるかな・・・

とりあえず司令官さんに連絡を入れとくのです

「司令官さん、こちら偵察艦隊、威力偵察終わりなのです」

〈へ了解、敵情は?〉

「うくん・・・実はあまりよく分からないのです・・・」

〈へうくん・・・やっぱりか・・・仕方ない、またこっちで調べるよ〉

「お役に立てずごめんなさいなのです・・・」

へい、ちゃんと役に立ってるよ。あとは無事に帰ってくるんだぞ
?<>

「はいー!」

さて・・・と、帰るのです

「あ・・・電さん、対水上レーダーに感。一隻のみ・・・」

「敵なのですか?」

「うん・・・SHからの報告待ちだね」

「了解なのです」

敵艦かも知れない・・・一応攻撃準備をしておこう。

「SHより報告・・・艦娘のようだけど・・・見たことない艦だね」

「接近してみるのです」

「そうだね」

その艦娘はここよりそんなに遠くない場所を航行していた。

近づくところちに気づき向こうも近づいてくる。

「始めまして、なのです」

「приятно познакомиться (始めまして)」

「ロ、ロシア語なのです・・・?」

「私の出番だね」

「響お姉ちゃん、ロシア語出来るのです?」

「私はこれでもロシア語は達者なほうだよ。見てて」

「すごいです・・・」

「приятно познакомиться」

「あ、私日本語できます」

「できるのか・・・」

普通に日本語でしゃべってきた・・・できるのですね・・・

「私はソヴィエツキー・ソユーズ。戦艦だよ」

「私は響」

「もしかしてヴェールヌイちゃん!?」

「そうだよ」

「わああああ!!始めまして!!こんな可愛い子だったんだ!」

「ちよ、ちよと離れてくれないかな・・・」

「ああああ・・・可愛い・・・可愛いよおおお!!」

「・・・そろそろ身の危険を感じてきたよ・・・」

「あ、あははは・・・とりあえず帰還するのです・・・」

「ヴェールヌイちゃん!今夜私の部屋に来てえええ!!」

「い、嫌だよ・・・」

「じゃあ私が行く!」

「・・・全力で排除する」

賑やかな戦艦が加わり、鎮守府への帰路へついた。

彼女曰く、自分は計画艦らしく、計画されただけで建造されなかった艦だそうだ。

・・・いそかせさんとうらかぜさんと同じ感じがするのです・・・
気のせいであってほしいのです・・・

第二次カレー洋作戦 前編

作戦は無事成功・・・ふう・・・

「おかえり、電」

「ただいまなのです！」

「みんな無事でよかったよ」

「はい！被弾した艦娘は居ませんでした！」

・・・全部完全勝利つてこの子達怖い。

なんて話は置いといて。

「えっと・・・ソヴィエツキー・・・なんだっけ？」

「ソヴィエツキー・ソユーズよ」

「ああ、ソユーズか。俺はこの提督。よろしくな」

「ええ、よろしく。ところで提督」

「ん？何だ？」

「響ちゃんの部屋教えてもらえないかしら」

「え、何で」

「いいじゃない！早く！」

何で目をギラつかせてるのか不思議でたまらん・・・しかも響は帰ってきたとたん報告だけして自分の部屋に帰っていった。

・・・気のせいかな、いそかぜ達と同じ臭いがする・・・

「あく・・・個人情報なのでお教えすることはできません・・・」

「教 え ろ 」

「ア、ハイ」

胸倉つかまれて物凄い形相で迫られた。怖すぎる。

「し、司令官さんに乱暴しちやダメなのです！」

「えく・・・だつてえく・・・」

「だつてく・・・じゃないのですっ!!」

「ちえく・・・自分で探すよ」

「・・・どうしても知りたいのですか・・・」

「もちろんよ！だつて・・・夜な夜な・・・ふへへへ」

「憲兵さああん!!憲兵さんはどこなのですかアアア!!!」

この戦艦アカン・・・
そんなこと思った作戦開始前日の夜だった。

↳提督の部屋↳

「電、背中見せてみ」

「い、嫌なのです・・・」

「んなこといったってちゃんと治療しないと痕残るぞ？」

「でも・・・」

「ああ、もうはよせいっ！」

「はにやつ!？」

仕方ないので無理やり服を上げる。

「あく・・・ちよつと水ぶくれになつてるな・・・」

「ううう・・・」

「よしよし、軟膏塗るだけだから大丈夫だよ」

「・・・痛くないですか・・・？」

「お、おう・・・」

やめろオ!!涙目&上目遣いとかある種の兵器だぞ!!

やばい、物凄く抱きしめたい。

そんな欲望を抑えて軟膏を塗ってやる。

「ほい、出来た」

「ありがとう・・・なのです」

「痛くなかつたら？」

「はい・・・」

「よしよし。電、明日も出撃できるか？」

「明日も・・・ですか？」

「うん。明日は連合艦隊で出撃するんだけど、電には第二水雷戦隊の旗艦をやってもらおうかと思って」

「了解なのです！」

「編成はまた明日発表するよ」

とりあえず明日はソーズとミズーリも編成に入れる予定だ。

「電、おやすみ」

「おやすみなのです．．．ふああああ．．．」
「お疲れ様」

優しく頭を撫でてやっていると俺に抱きついてきた

「司令官さんに撫でられるの．．．気持ちいいのです．．．」

「そ、そうか？」

「はい．．．ふああああ．．．」

「そろそろ寝よう」

「はい．．．おやすみなのです．．．」

電はすぐに寝たが俺は電が可愛すぎて当分寝れそうにない。

（翌朝）

「よし、作戦会議だ！」

今回の作戦は、カレー洋の敵艦隊を連合艦隊で撃破する。

まず編成は、水上打撃艦隊。

第一艦隊の旗艦を大和にし、長門、ミズーリ、ソヴィエツキー・ソ
ユーズ、赤城、羽黒。

第二艦隊の旗艦を電にし、響、北上、大井、夕張、金剛。

編成はこれで行く。

支援艦隊は偵察のときと同じだ。

作戦はまずポイントA（アルファ）に進撃、敵艦隊を撃破する。

今回は隠密行動など必要ないので全力で攻撃する。

次にポイントB（ブラボ）で一待機し、ポイントE（エコー）か
D（デルタ）に向かうかを判断する。

ポイントDには戦艦クラスを三隻確認している。

そのため、艦隊は戦艦を優先して攻撃、撃破する。支援艦隊はその
周りを攻撃、撃沈する。

ポイントEには空母が多く配備されている。

この編成だと制空権は赤城艦載機でしか取ることはできないので、
支援艦隊から艦載機を発艦、制空権を確保する。

その後空母を撃沈だ。

そこが終わるとポイントG（ゴルフ）に進撃する。

この海域には戦艦と空母が確認されている。

交戦した場合、支援艦隊は空母を優先して攻撃、これを撃沈する。攻略艦隊は戦艦を優先して攻撃する。

そしてGの敵を撃滅したあと、ポイントK（キロ）の敵主力艦隊の攻撃に移る。

ここでは装甲空母姫の存在が確認されている。

そこで、支援艦隊は長距離ミサイル攻撃を再び行い装甲空母姫を攻撃、撃沈に至らなくても艦載機発着艦を困難にすればいい。

攻略艦隊は持てる力すべてを持って、敵艦隊を攻撃、殲滅する。

「作戦はこうだ。いいか、一隻たりとも逃がすなよ」

「何故ですか？大破状態にすればもう動くことは・・・」

「こちらの情報が敵に渡ると向こうから侵攻されるかも知れないからな」

「・・・なるほど」

「その・・・なんだ、虐殺してこいつて言ってるわけじゃない。沈めると逃がすも最終判断はお前らに任せるよ」

「了解」

「とりあえず作戦は以上！解散！」

あと3時間で作戦が始まる・・・

艦隊の交戦海域はほかの友軍艦艇も入り混じるため、鎮守府からの長距離ミサイル攻撃が出来ない。

いざと言うときが辛い・・・

第二次カレー洋作戦 後編

作戦開始1時間前・・・会議室に今回の攻略艦隊、支援艦隊が集合している。

「作戦内容はみんな理解できたか？」

一応確認だけはしとかないと・・・

「大丈夫よ」

「私も大丈夫！」

全員大丈夫そうだ。

「よし・・・これだけは言わせてくれ。支援艦隊も攻略艦隊にもだ」

一息ついて続ける。

「本作戦は攻略艦隊、支援艦隊の全員が五体満足で帰還することで成功とする。必ず帰って来い。それ以外は絶対に許可しない！以上！」

「隊長が珍しく真面目なこと言ってる・・・今日は大嵐だね」

「うっさいわ!!」

このやろう、空気を壊しおって。

「とにかく、必ず帰って来るんだぞ！」

「はい」

「了解」

「了解！」

みんな言い返事で返してくれる。

こいつらなら安心だ。

「さあ、時間だ。全艦出撃！」

く電く

〈鎮守府より攻略艦隊へ、まもなくポイントA、警戒を厳とせよ〉

「了解なのです！」

「長門より提督、赤城艦載機より敵艦見ゆ、だそうだ」

〈了解、各艦の交戦を許可する！〉

〈こちら支援艦隊、いそかぜです。ケストレルさんの機関に異常発

生、そちらの交戦までに支援攻撃位置に付けません」

「了解なのです、ケストレルさんの具合はどうなのです？」

「今今は修理も完了、全速で回しています。次の海域には間に合いますので次海域より支援攻撃を開始します」

「了解なのです！」

「電探に感あり・・・敵艦だ」

さすがミズーリさん・・・見つけるのが早いのです・・・

長門さんが少し不機嫌そうな顔をしていた。

「まもなく主砲の射程距離だ、砲撃用意！」

「まさかミズーリさんと一緒に戦うなんて思いませんでした」

「私もだ。大和と敵艦とでなく味方とはな・・・私としてはかつての敵が今は味方というのは胸熱で好きだがな」

大和さんとミズーリさんは仲がよさそう。

長門さんは微妙な顔してるのです・・・

「彩雲より報告！軽巡1、重巡2、駆逐3を認む！」

「距離は分かりますか？」

「距離約20km！敵艦はまだこちらを捕捉できていないそうです！」

「了解しました、旗艦大和より全艦へ、対水上戦闘用意！赤城さんは攻撃隊を発艦させてください！」

「了解！第一次攻撃隊、発艦してください！」

「第一艦隊全艦へ！砲撃用意！」

今は水雷戦隊の出番はなさそうなのです・・・

「北上さん、大井さん、雷撃用意をお願いします！」

「はい、やろう大井っち」

「はい！甲標的は出撃開始！」

駆逐艦は・・・出番なさそうなのです・・・

「全戦艦は砲撃開始です！」

「了解だ！」

「りようかいっ！」

「第一第二主砲！斉射、始め！！」

「全主砲、斉射！てー!!!」

「痛いのをブツ喰らわせてやれ！撃てー!!!」

「Пушка стрелять!!（主砲、撃て!!）」

全身の骨の髄まで響くような砲声と衝撃波・・・あんなの食らいたくないのです・・・

「水観より報告・・・着弾！敵重巡撃沈、軽巡大破！」

「よし、もう一発いくぞー！」

「了解、次弾装填！」

最初の砲撃を命中させるなんて・・・みんなすごいのです。

「甲標的・・・敵駆逐艦一隻を撃沈！」

「艦載機が残りの艦を全艦撃沈！」

・・・これ完全に水雷戦隊要らない子なのです・・・

とにかく、先に進もう。

水雷戦隊はみんな装甲が薄いからもし被弾すればただではすまない。

遠距離砲撃で片付くほうがこちらとしても安心だ。

「ポイントA・・・オールクリアなのです！」

「了解しました！先に進みましょう！」

次の海域では脅威はないらしい・・・

一応、いつでも撃てるようにしておこう。

「提督、ポイントBに到着します、DとE。どちらに進めばいいですか？」

〈ポイントDに進んでくれ！敵戦艦に注意せよ！〉

「了解、進撃します！」

大和さんの合図でDに向け進撃する。

大和さんとミズーリさん・・・それに長門さんやソヴェエツキさん・・・戦艦が4隻もいると心強いのです。

「まもなくポイントD・・・警戒しましょう！」

「・・・偵察機から報告！敵艦見ユ!!」

「了解！全艦、砲雷撃戦よーい!!」

「敵艦、発砲!!」

「発砲!?もう発見されているの!?!」

「わかりません!ですが偵察機が・・・」

「くっ・・・回避だ!急げ!!」

距離から考えて敵戦艦だろう。

私達、駆逐艦や軽巡が被弾すればただではすまない。

「敵艦捕捉!全主砲、薙ぎ払え!!」

大和さんの砲が火を噴く。

〈へこちら前衛支援艦隊!攻撃開始します!〉

「了解なのです!」

〈へトマホーク、攻撃始め!!〉

〈へラーズグリーズ、出撃!〉

支援艦隊が到着・・・これなら・・・

そんなこと思っていると遠くの空から何かが降って来る。

敵の砲弾だ。

「敵弾、来る!!」

長門さんの叫び声とともに周囲に着弾する。

しかし遠距離のため着弾位置はかなりずれている。

だが・・・

「ぐっ・・・!!」

ミズーリさんの体が爆炎に包まれている。

被弾!?

「大丈夫か!!」

「くっ・・・!!戦艦が簡単に沈むか!!」

ミズーリさんは小破・・・

だが、作戦続行に支障はなさそうだ。

それよりも・・・戦艦が簡単に沈むか!ってなんだかカッコいいの

です!

「主砲、てー!!!」

「撃ち方始めえ!!てーっ!!」

「撃ちまくれえ!!!」

長門さん達も砲撃を開始、爆音がお腹に響く。

「響お姉ちゃん．．．これ私達出番あるのです．．．？」

「ハラシヨ．．．」

あ、ダメだ、お姉ちゃんキラキラした目で見てて話聞こえてない．．．
心なしか体もキラキラしてる。

「着弾！初弾．．．命中！敵戦艦中破!!」

〈トマホーク、着弾まであと10秒!〉

「了解!」

上空を轟音を響かせて黒塗りの戦闘機と4発の巡航ミサイルが飛び去っていった。

「だんちやく．．．今ツ!!」

「彩雲より報告．．．敵艦隊の旗艦撃沈！敵艦隊撤退を開始したようです！大和さん、追撃しますか？」

「はい！主砲、シヨックカノン．．．じゃなかった、主砲、次弾装填！シヨックカノンって何なのです．．．？」

とりあえずそんなことは置いといて。

「大和さん、敵はもう戦う気がないはずなのです！無理に撃破しなくても．．．」

「でも．．．敵本体に合流されると危ないですし．．．」

「敵の命も助けたい．．．っておかしいですか．．．？」

「．．．分かりました。全艦砲撃準備中止！最大戦速で敵本体に向かいます!」

「ありがとうございます」

「いえ、あんな純粋な目で言われて砲撃を行うほど私も鬼ではないですよ」

「大和さんカッコいいのです!」

「え、か、カッコいい．．．？わ、私が．．．？」

「はい!」

「．．．」

「ま、まぶしっ!」

一瞬で物凄いキラキラになった．．．

「ポイントGに向かいます!」

最大速力で向かう。

キラキラMAX状態の大和さんはGについた瞬間全主砲を斉射、一瞬で敵艦隊を殲滅した。

・・・ただけキラキラなんですか・・・

〈攻略艦隊へ、状況は？〉

「状況・・・順調に進んでます！」

〈被害は？〉

「ミズーリさんが小破、ですが戦闘に支障ありません！」

〈了解、もし中破することがあれば即時撤退だぞ！〉

「了解です！」

あとは敵本隊だけ・・・

たぶん本隊は夜戦になるだろう。

頑張らないと・・・

「まもなく本隊です！戦闘用意！」

〈こちら決戦支援艦隊！いつでも撃てるよ！〉

「了解しました！そちらの判断で攻撃してください！」

〈了解！雑魚はボクらに任せて！〉

「全主砲、薙ぎ払え!!」

「全主砲、斉射！てえー!!!」

大和さんから続いてどんどん砲撃を始める。

ここからなら着弾まで一分程度・・・命中することを祈る。

「敵艦より艦載機発進！空母姫だそうです！」

「了解しました！照準を空母姫に合わせ！」

「巡航ミサイル・・・着弾！敵戦艦、空母を撃沈！空母姫は健在！」

周りの脅威は排除・・・一安心なのです。

今の時刻はもう夕暮れ・・・暗くなり始めている。

「日没ですね・・・」

「はい・・・日没のため、艦載機帰還します」

「水雷戦隊のみなさん、あとはお願いしますね」

「はい！お任せなのです!!」

やっと私達の時間！

・・・あれ、なんだか川内さんの気分には・・・

「あとは敵空母姫だけです！さきほどの砲弾が一発だけ命中しましたが被害はそれほどでもないそうです・・・」

「了解なのです！魚雷装填！」

暗闇に乗じて一気に接近を試みる。

日没の影響で回りがすぐに暗くなり始める。

「探照灯・・・照射！」

6隻の艦から探照灯を空母姫に照射する。

・・・これある意味に嫌がらせなのです。

「酸素魚雷・・・撃ち方始めなのです！」

「ypai！」

魚雷をばら撒く。

北上さんや大井さんも魚雷をばら撒き何十本もの魚雷が空母姫に殺到する。

空母姫は避けようにも逃げる場所がない。

それより探照灯のせいで目が開けないだろう。

「魚雷・・・命中！！空母姫・・・撃沈を確認！」

「提督！敵本隊撃破！！」

〈へ了解！よくやった！！だが、家に帰ってくるまでが任務だぞ〉

「そんな遠足みたいに言わないでください・・・」

そんな会話を聞きながら回りを警戒しているとふと一隻の船影が見えた。

「あれ・・・艦娘なのです・・・？」

「ん？どれだい？」

「あれなのです」

指を刺す方向を響お姉ちゃんも見ろ。

「本当だ、空母かな？」

「あ、こっちにくるみたいなのです」

大和さんたちもそれに気づいて一応警戒する。

その空母はすぐ近くまで来た。

「雲龍型航空母艦の三番艦、葛城よー！」

「大和です。雲龍型ですか・・・」

「今対空砲台とか思ったでしょ・・・」

「ち、違います!!」

少し賑やかな空母が増えた。

私達は作戦を無事終え、12隻から一隻増え、13隻で鎮守府へと帰還した。

被害はミズーリさんの小破だけ。

疲れたのです。

遠征：長距離砲撃支援

「突然なんだけど、遠征に行ってくれないか？」

「はぁ・・・遠征ですか・・・」

カレ―洋作戦を終えた翌日。

司令室には電を始めとし、ミズーリ、大和、ジョン・ポール・ジョーンズ、ケストレルがいた。

「なあ提督、遠征たつてどこ行けばいいんだ？」

「ああ、遠征の内容はな・・・」

今回の遠征・・・長距離砲撃支援だ。

現在、キス島で日米の陸上部隊がキス島に上陸しようとしている深海棲艦を阻止している。

そこで、沖合いから長距離艦砲射撃およびミサイル攻撃を行い地上部隊を援護する。

座標などは地上部隊が指示してくれるのでそれに従い砲撃するというものだ。

「砲撃援護ねえ・・・ここからミサイルで援護射撃とかいけないの？」

「射程がギリギリなあ・・・弾道弾ならいけるけど味方にあたる可能性もあるしな」

「ふーん・・・それより、深海棲艦に上陸部隊なんかいるの？」

「ああ、何か噂によると海で死んだ人間をコピーして作った部隊らしい」

「なにそれ怖い」

実際普通に怖い話だ・・・

またこれも噂だが、長期間行方不明だったのにいきなり帰ってくる人間がいると言うのだが、みんな共通して海上で行方不明になったか。

それでその人間が深海棲艦のコピーだとか。

「とりあえず援護すればいいんだな！」

「まあ、そうだな」

「よっしゃ！俺に任せてな！」

「頼りにしてるよ、出撃はあと2時間後だからな」
「了解！」

く電く

「まもなく作戦海域なのです！」

「よし！向こうの部隊と通信つなげ！」

「こちら米軍艦ジョン・ポール・ジョーンズ、支援位置に到着した。オーバー」

〈〈海軍の支援を要請する！〉〉

〈〈敵の潜水艦を発見！〉〉

〈〈駄目だ!!〉〉

〈〈駄目d〉〉

〈〈駄目〉〉

〈〈駄目だ!〉〉

〈〈ちくわ大明神〉〉

〈〈駄目・・・おい誰だ今の!!〉〉

「なんか混線してるのです・・・」

「そ、そうだねえ・・・」

〈〈こちらミスフィット1-3！洋上の艦船へ!〉〉

「こちらジョンポールジョーンズ、聞こえるぞ」

〈〈砲撃支援、位置はJ-P-U-1-5-9 6-8-1!!効力射要請!!〉〉

「了解、位置はJ-P-U-1-5-9 6-8-1。攻撃オーバー」
〈〈攻撃アウト!!〉〉

ジョンさんはさっそく砲撃を開始する。

今回ミズーリさんとJPJさんはアメリカを援護、私と大和さんが日本を援護する。

ケストレルさんは両方を空中から援護する。

「こちら大和！砲撃支援は必要ですか？」

〈〈海軍の支援を要請する!〉〉

「了解しました！砲撃開始します！」

「あ、あの！座標は・・・」

「水観より確認しました！」

「了解なのです！」

「座標を送ります！」

大和さんから送られた座標を元に射角を合わせる。

「主砲！てーっ!!」

「撃ちー方ー始めなのです！」

私の主砲の音が大和さんの主砲の砲声にかき消される・・・やっぱりすごい。

〈上空援護機を要請する！〉

「了解！ラーズグリーズ出撃！」

無線はさつきから混線だらけ・・・ほとんど聞き取れない。

それよりさつきから無線の最中に「ちくわ大明神」とかつぶやく人いるんですけど・・・いったい何なのです・・・

く提督く

遠征が終わるまで・・・あと半日以上か・・・

「そんなに心配ですか？」

「そりやなあ・・・遠征つっても被弾しないわけじゃないし・・・」

「心配しなくてもきつと大丈夫ですよ」

「でもなあ・・・」

「隊長、心配してても帰ってきませんよ」

「まあ・・・そうだなあ・・・」

でも心配なので向こうの無線につなげてみる。

「無線ですか？」

「ああ、一応状況が知りたくてな」

つなげてみると・・・

〈ちくわ大明神〉

「・・・!!?」

〈誰だ今ちくわ大明神って言ったヤツ!!!〉

「……状況が理解できません。」

「あれ、もう無線きられるんです?」

「……ああ……つなげた瞬間ちくわ大明神って言われた……」

「向こうでいったい何が起きてるんですか……」

「さあ……」

「あ、隊長、外出許可願えますか?」

「ん?ああ、いいけどどした?」

「ちよつとお誘いが……」

「ああ、例の男の子か?」

「は、はい……」

「んな申し訳なさそうな顔すんなって、もう付き合ってるのか?」

「はえっ!?!つつつつ付き合ってるなんてないですよ!!」

「ありやそうなのか」

「も、もう……」

「まあなんだ、一度どんなヤツか見てみたいし鎮守府にでも呼んで来なさいな」

「いいんです?」

「いんじやね?」

「いや……よくないと思うんですけど……」

「まあ、見つかったても揉み消すし」

「何で揉み消すんです!?!」

「ほら……目撃者がいなければ大丈夫だって」

「消すんですか!?!」

「コラテラルダメージだ」

「……便利ですねその言葉……」

「まあ、とりあえず楽しんで来い!」

「はい!」

アンドロメダが出て行き司令室に一人になる。

「あ、メールだ。また本部からか……」

内容は……

「え〜．．．また出張．．．しかも新米提督かよ．．．またかよ．．．」
せめて作戦期間が終わってからのしてくれませんかねえ．．．
まあでも期間は約一日程度、何とかなるか。

「んで、データタデータつと．．．」

データを参照する。

すると．．．

「．．．．．え？」

表示されたのは明らかに呉の天音提督よりも若い顔立ちの少女
だった。

つーか年齢が13ってオイ。

ついに大本営は頭の中に蛆虫でも沸き始めたか．．．

「何でまた子供なんか．．．」

ふと階級を見ると．．．

「．．．少将おおおお!!?!」

新米だろ!?!新米なのに少将!?!俺なんてまだ大佐だぞ!?!

「ああもう．．．突っ込みはおいといて鎮守府は．．．舞鶴か．．．」

何でまた子供のお守りみたいなのを．．．はあ．．．

「明日から行けってか．．．少将殿に指導することなんてねーぞ．．．」

はあ．．．めんどくせ．．．

とか重いながらも仕事なので行くしかない。

明日か．．．もう新幹線使うのめんどくせーし．．．F35で行く
かな。

V T O Lなら着陸も楽だし。

出張：舞鶴鎮守府

「というわけで電！すまん！鎮守府を頼む！」

「了解なのです！気をつけてなのです！」

遠征が終わった翌日、出張の準備をしながら電に引継ぎを任せていた。

誰か一人艦娘を連れて来いと言われたので単座のF35じゃ舞鶴まで行けない……

「誰連れて行くのです？」

「ああ、今回はいそかぜを連れて行こうかと思ってる」

「うらかぜさんが怒りそうなのです……」

「あく……大丈夫……だと……思う」

ちよつと不安になってきた……

とりあえず いそかぜ には伝えてあるので出発の準備だけしよう。

「まあとりあえず行ってくるよ。あ、それと俺がいない間は特に作戦を進める必要ないからな」

「え、いいのです？」

「ああ、まだ期間は残ってるし大丈夫だよ」

「了解なのです！気をつけて行ってらっしゃいなのです！」

そう言った後に……

「司令官さん、ちよつと耳貸してほしいのです」

「ん？何だ？」

「……ちゅっ」

「!？」

頬にキスをしてくれた。

「えへへ、行ってらっしゃいのキスなのです」

ちよつと赤くなつた笑顔で言われた。

可愛すぎるやろがああああ!!!

「と、とりあえず行ってくる！」

「はい！行ってらっしゃいなのです！」

部屋を出て格納庫に向かう。

今回は艀装を持っていく必要がある。

今鎮守府に艀装を運搬する能力があるのはAC—130しかない。

「ガンシップしかないのか・・・」

一応、パイロットは俺だが火器管制員は妖精さんだ。

「あ、司令官。もう来てたんですか」

「ああ、もう出発の準備しないとな」

艀装を付けたいそかぜが格納庫までやってきた。

「もう出発ですか？」

「うん、お前が忘れ物ないんだったらな」

「はい、大丈夫です」

「んじや行こうか」

ガンシップに乗り込み、エンジンを始動させる。

「さてと、離陸しよう」

滑走路に入り出力を上げて離陸する。

舞鶴まで約3時間ほどだ。

〜3時間後〜

無事着陸し、鎮守府へ向かう。

「どんな提督かな」

「年齢が13でしたっけ」

「13で少将とか何やったらそうなるんだよ・・・」

「さあ・・・」

そんな事言いながら鎮守府に向かっていると海軍の制服を着た少女がこっちにやってきた。

「お、あの子かな？」

「みたいですね」

「てかお前いつまで艤装つけてんだ・・・」

「始めが肝心じゃないですか？」

「いきなり、私、イーجزス艦です！、とか言われても反応に困るぞ・・・」

そんな話してると・・・

「お疲れ様です！私はこの艦隊を預かっています」

「お出迎えどうも・・・ありがとうございます！」

いかん、いつもの癖でタメになってしまう。

「とりあえずお茶でもどうですか？」

「ちょうど良かった、のど渴いてたんで」

「では冷たいお茶用意しますね！」

「ありがとうございます」

「あ、そういうえばその方が秘書艦ですか？」

「はい、私は いそかぜ型ブイ・ウェツブ艦、いそかぜです」

「・・・ブイ・・・えつとなんです？」

「あとで説明します」

「は、はい・・・見たことない艤装ですけど・・・」

提督は興味津々でいそかぜの艤装を見ていた。

とりあえず中に入ろう。

「えつと・・・それでここが司令室になります」

「へえ・・・結構いい立地なんだn・・・なんですね」

「はい、海が良く見えます」

俺の鎮守府司令室の窓から見えるものはCIWS、パトリオット、対艦ミサイルetc・・・

「あ、大佐さん、いそかぜさん、少しお手伝いしてもらいたいことがあるのですが・・・」

「ん？手伝い？」

「いいですよ」

お茶（綾鷹）もらったしな。

それくらいはしないと。

「すみません、あそここの本部まで本を持っていかないといけないので

すけど・・・私じゃ重くって・・・」

「ああ、そういうこと・・・いいっすよ」

「司令官・・・敬語がおかしいですよ・・・」

「あ、け、敬語とかそんなに気にしなくていいですよ！」

「でも一応階級上だし・・・」

「歳はそっちのほうが上ですよ！」

「そうか？じゃあ敬語苦手だしそうするよ」

そんなわけでとりあえず本を持って本部まで向かう。

広辞苑みたいな本が10冊以上・・・こりや持てないわな。

「本当にすみません・・・」

「いやいいよ」

本部の廊下をあるいていると・・・

「おやおや、これは少将殿ではありませんか」

声をかけられた方向を振り向くとやたらニヤニヤした提督二人がいた。

なんだこれ、後輩イジリか。

SEALsの時に比べたら可愛いほうだな。

「こんにちわ、提督方」

「おや！少将殿が挨拶してくれましたよ！」

「当然ですよ、大将閣下ですからね。それより・・・駆逐艦ごときが秘書など・・・」

「まったくですな！秘書は戦艦クラスでない！」

駆逐艦ごとき・・・ねえ・・・

まあ、この子・・・、ミサイル、駆逐艦ですけどね。

「提督方」

「何かな？」

「この子は私に秘書ではありません、その提督の秘書です。ごときという言葉を取り消してください」

「その提督？どちら様かな？」

「あゝ・・・どうも」

「大将閣下に挨拶もないとは・・・」

絡みめんどくせえ!!!

DQNにもなれない位置づけのヤツかお前らは!!

「チツ・・・めんどくせーなもう・・・こんちゃーす。ペツ」

大将閣下に舌打ちした挙句、すごいだるそうな挨拶して廊下に唾吐き捨てた大佐の図です。

「な・・・」

さすがにあまりのこと過ぎてひるんてる。

「貴様！それが大将に向かってやることか！」

「だってうちの子のこと、駆逐艦、ごときとかいうんだもくん」
ガキみたいな言い方だったと我ながら思ってる。

「その何が悪いというんだ」

全体的にわりーよ

「つーかコイツは駆逐艦は駆逐艦でも種類ちげーですよ」

「何だというんだ、どうせ旧型とかそんなのだろう」

超絶最新型ですハイ。

「こいつの艦種はDDじゃないつすよ、DDGつすよ」

「DDG・・・？」

「ミサイル駆逐艦」

「!？」

「司令官、私は護衛艦です。海上自衛隊にミサイル駆逐艦なんていませんよ。ミサイル護衛艦です」

「そこ!?!ま、まあいいか・・・」

「う、うそをつくな！そんなもの演習でもすればすぐに分かる」

「うんまあ・・・いいけど・・・やるんで?」

「ああ！その根性叩き直してやる」

元SEALsの根性叩き治せるかな??

「大佐さん・・・いいんですか?」

「だいじよぶだいじよぶ、相手が6隻だしてこよーがイージスシステムがあるから」

「そうですか・・・」

「いそかぜ、演習の準備するぞ」

「はい、私のこと駆逐艦って言ったアイツ等許しません」

「駆逐艦って言われたことが嫌なんだ・・・」

「私は護衛艦です」

そこは譲れないのな・・・

そんなこんなで演習へ。

「1対6って・・・」

「本当は一隻でも良かったんだがな、ボコボコにされる貴様が見たいのだよ」

「あ、そ・・・」

ゲスいとかかなんと言うか・・・まあいいか。

「演習開始！」

「いそかせ、電子攻撃開始、敵の目を潰せ」

〈〈了解、電子攻撃開始します〉〉

「電子攻撃・・・？何の話だ」

電子攻撃分からのん!?何で!?

提督だろ!?

そんな演習を横で見守っている少将が・・・

「いそかせさんってどんな艦なんですか？」

「ああ・・・俗に言うイージス艦」

「イージス・・・ギリシャ神話の盾ですか・・・」

「まあそんなもんかな」

〈〈司令官、敵偵察機接近〉〉

「了解、対空戦闘用意。シースパロー攻撃始め！」

〈〈シースパロー発射用意よし!!〉〉

「シースパロー発射、始め！」

〈〈後部VLS、シースパロー発射！SALVO!!〉〉

これで完全に敵の目が潰れた。

独壇場だな。

「偵察機も撃墜・・・電探もダメ・・・貴様！何をした！」

「だからジャミングでレーダーを機能停止させて偵察機は対空ミサイルで撃墜したんすよ」

「きつきから山城が電探は不調だし偵察機は落ちるしでもものすごい鬱
になってんだよ！可愛そうだろ！」

「……………」

どう反応すればいいのやら……

「いそかぜ、敵の目は完全に潰れた、敵空母を攻撃する」

〈了解しました〉

トマホークで遠距離攻撃を行おう。

〈いつでも撃てます〉

「了解、好きなタイミングで撃て！」

〈了解〉

空母は確か……翔鶴だったかな？

〈トマホーク……攻撃はじめ!!〉

俺たちのモニターのレーダーにひとつの光点が写る。

「…………ドカン」

「ああああああああああ!!!翔鶴があああああ!!!」

頭抱えて悶えてる大将閣下であった。

クソワロタ（真顔）

「いそかぜ、一気に終わらせよう。イージスシステム起動、対水上目標
をすべてロック」

〈了解、イージスシステム起動〉

「ロックできたか？」

〈はい、諸元入力〉

「了解、少し待て」

〈はい〉

ここで大将に降伏勧告（？）でもしてみよう。

「大将殿、もうアンタのこの艦をいつでも全滅させれる、今のうちに
その少将といそかぜのこと駆逐艦って言ったこと誤ったらどうで
す？」

「は？ふざけるな！俺がなんで貴様等などに謝らないといけないんだ
！」

「そつすか……いそかぜ」

〈はい、何ですか?〉

「一斉撃ち方」

その言葉の数秒後、リーダーにいくつもの光点が写る。

着弾まで30秒足らず・・・可愛そうに、相手は一発も撃てないどころか相手すら見えてない。

「ドカーン」

「いやああああああああああああああああああ!!!」

さっきまでの威勢がどっかに行き、ものすごい悲鳴を上げていた。

クソワロ（ry

「ああああ・・・そんな・・・なぜだ・・・」

「さあ?日頃の行いが悪かったんじゃねーですか?」

「ああああああ・・・」

放心状態の大将はもうほつとこ。

「いそかぜ、そのままドツクに帰還してくれ」

〈了解しました〉

「さて、少将。帰りますかな」

「あ・・・は、はい!」

少将もモニターを見たまま固まっていたらしい。

・・・もはや見慣れた俺って・・・。

星降る夜空

演習という名目の蹂躪が終わり日も暮れてきた。

本部から明後日まで舞鶴に居ろとのことだった。

「綺麗な夜空ですね」

「そうだなあ・・・どうせなら電と一緒に見たいよ」

「電？」

「俺のケツコンした艦だよ」

「ケ、ケツコンされてるんですか!？」

「お、おう。どした？」

「私も相手がほしいです・・・」

「すぐ見つかるさ」

そんな話しながら空を眺めていると流れ星が過ぎていった。

「あ、流れ星」

「え、どこですか!？」

「もう行ったよ」

「見たかった・・・」

「また来るだろ。俺はあまり流れ星は好きじゃないよ・・・」

「どうしてですか?あんなに綺麗なのに・・・」

「1994XF04・・・」

「？」

「そーいや、アンタは生まれてないか・・・」

あの死が降る空・・・20年前の光景を思い出してしまう。

「こんな名前を聞いたことないか?ユリシーズって言う名前を」

「あっ・・・」

「ちようどあの時もこんな夜空だったよ」

忘れもしないあの光景・・・

120cm対地対空両用磁気火薬複合加速方式半自動固定砲・・・
通称「ストーンヘンジ」によってユリシーズ迎撃が行われるもすべて
を迎撃できず地球に死が降り注いだ。

それだけなら良かった。

アイアンボトムサウンドに落下したユリシーズの影響なのかは分からないがその日から深海棲艦が地球上に出現した。

それとほぼ同時に艦娘も。

二つとも何故出現したのか今でも不明だ。

艦娘本人も気がついたら艦娘になつていたという。

「大佐は・・・あの日を経験したんですよね」

「ああ、ユリシーズの厄災も大陸戦争も・・・」

ちなみにユージア戦争時には深海棲艦と艦娘の影響力は無いに等しく、人類側である程度抵抗が出来ていた。

しかし時がたつにつれ、通常兵器は効かないようになってくる。

唯一効く通常攻撃といえば、宇宙空間から鉄の矢を落としピンポイントで深海棲艦を文字通り潰すしか無かった。

しかし制空権を取られ、宇宙空間にSSTOを打ち上げようにも迎撃され、衛星兵器に物資が届かなくなってしまう。

そのため現存する衛星兵器はすべて本拠地攻略にそなえ温存されているがこの前の原潜のように弾道ミサイルなど、ミサイルを発射する深海棲艦が現れて来たら回避能力や迎撃能力を持たない衛星兵器など止まっているハエを叩き落すようなものだ。

「・・・すみません」

「いいや、大丈夫さ。お、また流れ星」

「あそこにも！」

「・・・多いな」

「綺麗です・・・」

少将は感動しているようだった。

この子にはあんな悲劇を経験してほしくない・・・俺はそう思った。

「さて・・・司令部に帰ろう」

「もう少し・・・眺めてます」

「そうか、風邪引かないようにな」

「はいー！」

そう言つて司令部に帰ろうとした瞬間、空が赤く光り、一直線に降つて来る

「冗談だろ・・・」

その光りは街に落ちていった。

それも一つや二つではない。

「20年前の光景をまた見るなんて・・・」

「い、いまの何なんですか!?!」

「隕石・・・クソ・・・!」

街のほうで爆発音が聞こえる。

「いったん司令室に、大本営と通信を取ろう」

「はい!」

急いで司令室に戻る。

「大本営!こちら舞鶴!聞こえたら応答しろ!」

〈〈こち———営———通———〉〉

「聞こえない!」

〈〈こちら大本営だ!〉〉

「良かった・・・今の隕石の被害は!」

〈〈日本中に落下している!〉〉

「冗談だろ・・・」

そんな通信をしていると電話が鳴った

少将がそれを取った

「もしもし?はい、大佐なら・・・」

「何だ?」

「アンドロメダ・・・って方からです」

「代わってください!」

「は、はい!」

電話を代わる。

「アンドロメダ!」

〈〈隊長、お願いです、今から話すことを落ち着いて聞いてください〉〉

「分かった、何だ?」

〈〈メガリスが・・・敵の泊地になり・・・稼動しています〉〉

「冗談・・・だろ・・・?」

メガリス・・・エルジアが開発していた、軌道上に残存する小惑星

ユリシーズの破片を落着させるロケット（ミサイル）の発射センターとして、首都フアーバンテイ南方のトゥインクル諸島近辺に建設された巨大要塞。要塞から南に伸びるミサイル搬入路の側面に構築された発射機群には、軌道上に残る小惑星の破片と結合し、地上に向かって落下させる機能を持つロケットが多数配備されている。ロケットは要塞から照射される誘導用レーザーによってコントロールされる。この特殊ロケットの他に、中央サイロには大型ミサイル、その東西のランチャーに4発の中型ミサイルが格納されているが、これらが隕石落着機能を持つものなのか、単なる弾道ミサイルなのかは不明だった。メガリスは通常の航空攻撃では破壊が困難な高い堅牢性を持つてはいたものの、開発途中だったためか防衛用対空火器が一切配備されていない状態であった。首都陥落によるエルジア政府降伏後、開発中であったメガリスは降伏に従わないエルジア軍将校団によって占領され、大陸に再び隕石を落下させ始める。

俺はそのメガリスを内部から破壊したはずだった。
なのに……

「そのメガリスは……深海……棲艦……なのか？」

〈分かります……衛星からの写真によると形はそのままで周りには敵艦が……〉

「了解した……」

俺はその情報に耳を塞ぎたくなる。

〈隊長……あともう一つ……〉

「何だ？」

〈ストーンヘンジが……深海棲艦の手によってコピーされて……泊地になっています〉

「……冗談もいい加減にしてくれ……」

ストーンヘンジ……基本構造は火薬による発砲と電磁加速を併用したハイブリッド式地对空レールガンである。正式には「120cm対地对空両用磁気火薬複合加速方式半自動固定砲」と呼ぶ。射程は約650nm（約1200km）、砲弾によってはその圏内で高度2000フィート以上を飛行する航空機に対しても絶大な破壊力を有して

いる。

使用される砲弾には隕石内部に侵入後炸裂・破碎するAPPE弾（Armor Piercing Explosive Ammunition、徹甲榴弾の意）、命中率を重視した榴弾、法的な使用制限があるものの広範囲の破片を処理できる特殊砲弾が存在する。

サンサルバシオン南部の砂漠に円形に広がる巨大な施設に8基の旋回式砲塔が円状に設置され、360度の全天の迎撃や交互発射による複数隕石への対応、同時発射による大型隕石の破碎が可能となっている。またこれらの砲塔を効率的に統合制御するために、施設地下には秒間90億回の浮動小数演算が可能なスーパーコンピューターが8台×1024セット、計8192台設置されている。この総合で1秒間に100兆回もの演算が可能なシステムを使い、人工衛星を含む大陸各地の観測所からのデータを基に大気状況をシミュレート、隕石の落下軌道を割り出し照準する。

これらの設備が必要とする多大な電力を賄うため、専用の原子力発電所が備わっている他、砲塔が消費する瞬間的な大電力をチャージするため、施設敷地内の20%を占めるほどのコンデンサーが設置されている。施設北東には専用の空港が建設されており人員や物資の輸送の他、エルジア軍による占領以前はF-15戦闘機を中心とした18機のUTO軍航空機による警備体制がとられていた。

しかし、2003年・・・エルジアはストーンヘンジを軍事転用。大陸の制空権を握った。

だがこいつも俺が叩き潰した・・・はずだった。

「こいつも破壊したはずなのに・・・」

〈隊長・・・どうしますか〉

「泊地はどこからだと一番近い」

〈・・・舞鶴からです〉

「はあ・・・呉もだったが舞鶴も巻き込むことになるか・・・分かった、みんなを舞鶴へ」

〈作戦のほうは？〉

「そんなもん放棄だ!!こつちのほうを優先的にやる!大本営がなんと

言ってこようが構うな！あの悪魔の兵器をまた地獄に連れ戻してやる……！」

〈へ了解しました。最低限の警備を残しそちらに向かいます〉

「そうしてくれ、現代艦は全員頼む！」

〈へ了解〉

そういつて電話は切られた

「すまん、少将……少し巻き込むことになる」

「いえ！お手伝いできることがあれば何でも仰って下さい！」

「ありがとう……」

俺は記憶を頼りにストーンヘンジ、メガリスの攻略法を出来る限りメモに書き残した。

メガリスもストーンヘンジも敵の手に……降って来る隕石を迎撃できる手段が無いに等しい。

横須賀の街は俺の鎮守府から発射した迎撃ミサイルである程度被害は抑えられているがほかの鎮守府にあるのは対空砲程度……しかも手動のものばかりだ。

音速を超える速度で落ちてくる隕石を迎撃など不可能に近い。

艦娘も同じように戦艦娘でも迎撃できるか分からない。

大和の徹甲弾ですら破壊できるか分からない。

今は隕石の落下が止んでいる。早いうちにとめない隕石なんて弾数無限に等しい。

ストーンヘンジも高度2000ft（約600m）以下の物はすべて破壊する砲弾を発射できる。

ストーンヘンジを破壊するまで高度2000ft以上の制空権は敵の物だ。

最優先で破壊……もしくは占領しないと地球がクレーターだらけになってしまう。

砕ける空 前編

あの星が降り注いだ夜から一夜明けた今朝、舞鶴の被害が明確になってきた。

「死傷者は5000人以上か・・・」

「行方不明者は2000人以上です・・・」

メガリスの攻撃で地球上に死が降り注いだ。

今回は主に日本を狙ったの攻撃だった。

全国での死傷者は10万人以上・・・大惨事だ。

「艦隊は？」

「もうまもなくです」

「今のうちに作戦を立てよう」

机に地図を広げる。

「大佐さん、先にどちらを攻撃しますか？」

「・・・同時だ」

「同時!?!」

俺自身、無茶だと思っている。

だがどちらか片方を攻撃すれば片方から攻撃を受けることになる。

ストーンヘンジは2000ft以上の相手に対して絶大な攻撃力を誇るがそれ以下の相手に対しては比較的攻撃能力は弱い。

ただしこれはオリジナルのストーンヘンジの場合だ。

だがエルジアは対地攻撃用にストーンヘンジを使っておらず、対地攻撃用の砲弾も無い。

そのため海上から戦艦娘による艦砲射撃でストーンヘンジを破壊する。

メガリスは空母艦娘より発進した航空隊による攻撃で撃破する。

攻撃時は駆逐艦娘隊が全速で接近、地上部隊を施設に送り込む。

地上部隊により施設が制圧されたあと航空機部隊は全機トンネル状の通路に突入、内部のジェネレーターを破壊し脱出する。

「主力は両方に分けないとダメですね・・・」

「ああ・・・たぶんメガリスは敵側にとって地上攻略の要だろうから

な・・・姫クラスが大量にいるだろう」

「ストーンヘンジにも・・・ですね」

「ああ、しかも航空隊はうかつに近づけない。レシプロ戦闘機なら高度600m程度なら飛行は簡単だが遅すぎる・・・迎撃機にやられるかもしれない」

「でも相手だって・・・」

「黄色中隊・・・」

「？」

「もしストーンヘンジを完全にコピーしているならかなり強力な迎撃機がいるはずだ」

編成は連合艦隊が必要になるだろう・・・

ストーンヘンジに水上打撃艦隊を・・・メガリスに機動艦隊を・・・

このさい出撃制限など知ったことではない。

「今回の作戦・・・あんたはどうする」

「私・・・ですか・・・」

「今回の作戦は危険だ・・・最悪轟沈艦がでる可能性だつて・・・」

「やります！私たちの国が危ないのに・・・仮にも少将が椅子に踏ん返り返ってるわけにはいきません！」

「分かった。俺は内容を大本営に伝達してくる。正直・・・OKが出るとは思えないが・・・」

戦力がかなり必要な作戦だ。一鎮守府の艦隊だけでは正直無理だ。

「司令部に伝えてくる」

正直気が進まない。

知り合いの將軍はすぐにOKをくれるだろう。

問題は上の石頭だ。作戦放棄で何言い出すやら・・・

データを送信し、無線をつなぐ。

「こちら舞鶴、聞こえるかどうかぞ」

〈大佐か？〉

「どうも、中将どの」

〈このデータ・・・何だ？〉

「この前の隕石に関するデータだ。こいつを破壊する」

〈…ふむ〉

「通せるか？」

〈いや…私は大賛成だがお上がな…〉

「何とか頼めないか？」

〈…少し待っててくれ〉

ほんの数秒後声の主が変わる。

〈大佐かね？〉

「はい」

〈…君は作戦放棄…それでいいのか？〉

「これを破壊しないと日本は隕石でクレーターだらけになります」

〈…〉

少し洩る將軍にだんだんイラついてくる。

「アンタ…ユリシーズの厄災を知ってんだろ!!メガリスも…ストーンヘンジも!んなもんが稼動してんのにまだあんな作戦引きずんのかこのクソジジイ!!」

〈…メガリス…か…あれが稼動しているのか…〉

「そうだ!」

〈了解した。君の作戦をメガリス、ストーンヘンジ破壊に変更する。可能な限り私達もバックアップしよう〉

「…感謝します」

これで自由に動ける、あとは編成か…

「大佐さん!艦隊が到着します!」

「了解!」

急いで外に向かう。

「電!」

「司令官さん!無事でよかったですううう!!!」

「おわあああ!!」

電が俺を見た瞬間ダッシュで飛び込んできた。

「お前も無事でよかった…横須賀の街は?」

「アンドロメダさんと防空司令部が気づいて迎撃をしたので被害はあまり…それでも撃ちもらしが…」

「そうか・・・」

やっぱり完全に迎撃は無理だったか・・・

「電、作戦会議があるんだ。みんなを集めてくれ」

「はいー!」

作戦会議室に続々と艦娘が集まってくる。

少将の艦娘は街で被災者の救助を行っているためこの鎮守府には居ない

「これよりストーンヘンジ泊地攻撃作戦及びメガリス泊地攻撃作戦を発動する」

画面に映し出された画像を指しながら作戦説明を開始する。

アンドロメダ、ケストレルはこの兵器の脅威を知っているため少し表情が浮かない

「今回の作戦は同時攻撃作戦となる」

「同時攻撃なんて・・・無茶です!片方ずつ戦力を集中させたほうが・・・」

アンドロメダが反対をする。

無理もない。俺だってこんな作戦をしたくない。

「どちらか片方を攻撃すればその片方に情報が行く・・・後は分かるな?」

「・・・」

「片方に攻撃を受けたと情報が行けば、ストーンヘンジからは特殊砲弾、メガリスからは隕石が降ってくる・・・メガリスを先に攻撃すればストーンヘンジの砲撃で制空権が奪われ航空攻撃を断念しないといけない・・・ストーンヘンジを攻撃すればメガリスからの隕石で艦隊が全滅という可能性だってある・・・」

だから同時攻撃という結論しかなかった。

普通の泊地なら攻撃しても増援到着前には片付く。

だが今回は話が別だ。

レールガンの砲弾はそれこそ光の速度で飛来する。

隕石はそこら辺をユリシーズの破片が飛んでいるので降らそうと思えばすぐに降らすことが出来る・・・それに普通の泊地なら本土攻

撃を行うにしてもすぐに戦力が集まらないがメガリスとストーンヘンジの二つさえあれば制空権は敵の物・・・隕石で地上は焼け野原にすることが出来る。

この二つの兵器は必ず密接な関係にあるはずだ。

「いいか、今回の作戦は危険とか言うレベルじゃない・・・だが失敗は日本・・・いや世界の滅亡に関わる事態になる」

本音は無理なら撤退しろ。生きて帰ることを優先しろと言いたい。だが・・・今回はそんな事を軽々しく言えない。

俺はあの二つの脅威を知りすぎている。だから途中で見逃すなんて出来ない。

「ただし轟沈だけは絶対に許さない！俺は全員生きて勝利しろと言ってるんだからな！誰か一人でも轟沈したらこの作戦は失敗なんだ！」正直不安だ。

ケストレルとアンドロメダ以外はこの兵器の脅威を知らない。

ストーンヘンジ攻略隊はきつと高度2000ft以下は安全と思いい込んでしまうかも知れない。

確かに高度2000ft以下は艦船にとっては安全だ。

ただし弾着観測に出た観測機、偵察機は思いつきり被弾高度だ。「いいか、今回の作戦はこうだ」

まずストーンヘンジ攻略隊は水上打撃艦隊にて泊地に接近、ミサイル駆逐艦などのレーダーの情報を元に戦艦隊とミサイル駆逐艦隊は地上に対して攻撃を開始する。ただしこの際ストーンヘンジにECM装置があるものと思われる。

そこで戦艦隊はストーンヘンジに向けて三式弾を発射。この際照準はでたらめで構わない。

三式弾でECM装置を破壊後、ミサイル駆逐艦と戦艦は攻撃を開始、敵を撃滅する。

今回は衛星からの支援は出来ない。ストーンヘンジはもともと宇宙空間から飛来する隕石を迎撃するために作られた砲・・・つまり衛星だって簡単に攻撃できる。むしろ隕石より簡単だろう。

次にメガリス攻略隊は機動艦隊にて出撃、泊地に接近する。

その後艦載機を随時発進させメガリスに接近する。
メガリスを攻撃するには航空機でトンネル状の通路に突入する必要がある。

メガリスには3つのジェネレーターがあり、この3つを破壊すれば一時機能が停止する。

その機能が停止してる間に施設中央の扉を艦砲射撃にて破壊、再び航空機が再突入、中にある弾道ミサイルを破壊し脱出する。

非常に難易度が高い作戦だ。

この作戦では支援艦隊を出撃させれないため横須賀鎮守府より長距離ミサイル支援を行う。

「・・・航空機で可能なんでしょうか・・・」

「大丈夫だ。赤城の艦載機ならやれる」

大丈夫なんて根拠はどこにもない。

無責任な事を言ったと思ってるが・・・。

「作戦開始は明日だ。明日に備えてくれ。以上！」

「あの・・・司令官さん・・・」

「ん？何だ？」

「怖いのです・・・」

「俺だつて怖いさ。ただお前らのほうが怖いのだつて分かってるよ」

「・・・」

「俺はな・・・あの二つを破壊したつて知ってるか？」

「はい・・・前に聞いたのです」

「本当ならみんなに行つてほしくないんだ。あの悪魔の兵器のある場所」

あの二つがもたらした被害は忘れることなんて出来ない。

「でもお前ならやれるつて信じてる」

「はい・・・」

電の顔にはやはり元気がない

「電、今は部屋に戻れ、な？」

「はい・・・」

「あ、電」

「？」

「これ、俺がこの二つを攻撃したときに持っていたお守りだよ。貸してやるから必ず返しに来るんだぞ、いいな？」

「はい……ありがとうなのです……！」

電はお守りをギュツツと抱きしめ部屋に向かっていった。

「俺も……準備するかな」

横須賀に無線で持ってきてもらう品を伝える。

「深海の連中に……死神の姿を見せてやるか……リボン付きの……な」

砕ける空 後編

「懐かしいな……」

横須賀から送られてきた機体を撫でながら呟く。

リボン付きの死神か……

スカイアイもまさか俺がこんな島国の鎮守府で艦隊指揮を執っているなんて夢にも思わないだろうな。

オメガなら目の色変えて突撃（イジェクト）してきそうだけど……。

「あ、大佐さん！電さんが探してましたよ！」

「ん？電が？」

「はい。あれ、その飛行機どうしたんです？」

「横須賀から送ってもらった」

「もしかして……行くんですか？」

「いや……あいつらにもしものことがあったらだよ」

「そうですか……それより電さんのところに行つてあげてください」
「ん、了解」

そんなわけで電を探しに行く。

「おーい、電ー！どこだー！」

名前を呼びながら探していると……

「あ、司令官さん！やっと見つけたのです……」

「どした？」

「あの……明日のことなんですけど……」

「明日？どした？」

「編成聞いてないのです……」

「あれ……言つてなかった……？」

「はい……」

「す、すまん!!今から伝えるよ!」

俺としたことが忘れてた……てか!何で誰もそこに質問しないの!?

とりあえず編成は水上打撃艦隊、旗艦が大和、ミズーリ、ピョートル、長門、榛名。水雷戦隊旗艦がいそかぜ、J P J、クスネツオフ。

機動艦隊旗艦がアンドロメダ、赤城、加賀、ケストレル、金剛。水雷戦隊旗艦が電、響、暁、雷、雪風、うらかぜ。

この編成で向かう。

「これを伝えてくれるか？」

「分かったのです！」

「電・・・危険な作戦だが・・・気をつけてな」

「はい！」

作戦案もまとまった。

いったん部屋に戻ろう。

作戦開始は明日の朝だ。

く翌日（いそかぜ）く

作戦開始の朝。

すでに私達は洋上に居る。

「機動艦隊の方とはここでいったんお別れですね」

「はい、いそかぜさんお気をつけて」

「電さんも」

機動艦隊が別れ私達は進路を変えずに航行する。

へへこちら舞鶴鎮守府、ストーンヘンジ攻略隊、聞こえるか？くく

「こちらいそかぜ、感度よし」

へまもなくレールガンの射程圏だ。砲撃来るぞ！くく

その通信の数秒後、ものすごい轟音が空に響いた。

「ぐうっ！これがレールガンってやつか！！」

「空が・・・砕けた・・・」

「全艦最大戦速！！花火の中に突っ込むぞ！！」

長門さんの号令とともに増速、接近を開始する

「SPY起動・・・ジョンさん、イージスを起動しましょう！」

「おう！」

「まもなく主砲射程圏です！三式弾装填！！」

へストーンヘンジ砲撃！！5・・・4・・・3・・・2・・・インパク

ト！！くく

ものすごい轟音と衝撃波・・・押しつぶされそうだ。

「目標！主砲射程圏！！全主砲薙ぎ払え！！」

「全主砲、斉射！てーっ！！」

「主砲、てー！！」

「主砲！砲撃開始！！」

4隻の戦艦から三式弾が発射される。

命中を祈るばかりだ。

レーダーを見てもストーンヘンジは霧のようなものに覆われていて何も分からない。

〈へ衛星よりデータ受信・・・敵艦隊！そちらのすぐ近くだ！〉

「了解、こちらにもレーダーに捕らえました！ロックオン！！」

「やるか？」

「はい！TPex・・・撃ち方ー始めっ！！てーっ！！」

「一斉撃ち方！！」

ジョンさんと私から長距離ミサイルを発射する。

敵艦はみた感じ戦艦が中心のようだ。

「三式弾・・・弾着確認できますか？」

「少し待ってください・・・確認！さつきより霧が少なくなっています！ダメージを与えています！！」

「了解しました！！次弾装填急いで！装填できた艦は砲撃してください！！」

「榛名！全力で参ります！！」

榛名さんが一足先に第二射を斉射する。

続いてミズーリさん、長門さんと続き砲撃を行う。

「三式弾・・・弾着！！」

レーダーを見ると・・・

「命中！！電子攻撃システムダウン！司令官行けます！！」

〈へよし！一斉撃ち方！！鉄の雨を降らせてやれ！！〉

「了解！トマホーク、攻撃始め！！」

「グラニート・・・やっちゃえ！！」

「敵機確認・・・くるぞ！速い！！」

ジョンさんが空を見上げて叫ぶ。

あの機影・・・SU-37・・・スホーイ!?

「スホーイ接近!」

「もうボクの国のじやないか!!撃ち難いよ!!」

「そんな事言ってる場合か!!撃て!!」

「分かってるよ!!」

「大和さん!対空戦闘は任せて砲台を攻撃してください!!」

「分かりました!!・・・幸運を」

「大和さんも!!」

大和さんたち戦艦隊は増速・・・離れていく

「対空戦闘!シースパロ―発射!」

空中にミサイルをばら撒く。

C I W Sや速射砲の砲弾が空中にばら撒かれる。

「この戦闘機速い!」

「<・・・いそかぜ、その戦闘機のカラーリングは?>>

突然司令官より無線が入る。

カラーリング?

「えっと・・・両翼が黄色く塗装されて全体的にグレーです」

「<・・・黄色中隊か・・・そこまで真似るか・・・>>

「なんの話ですか?」

「<帰ったら話す、今は迎撃に集中せよ!>>

「了解!!」

ところ狭しとばら撒かれるミサイルや砲弾、機銃弾のおかげで敵機は確実に数を減らしていく。

だが一機だけどうしても落ちない。

機種に13と書かれた戦闘機だけは弾がかすりもしない

「何なんですかあの戦闘機!!」

「さすがボクの国の戦闘機だけあr・・・わああああ!!」

「褒めてる場合か!!」

「貴様は祖国を裏切った!」

「何の話だよ!!」

こうなったら最終手段・・・アポトシスを空中で炸裂させて落とすしかない。

アポトシスは着弾地点に強力な電磁パルスが発生させる。

その電磁パルスは周囲のものを無差別に行動不能、最悪破壊するこ
とができる。

・・・でも私がやるしかない。

「皆さん・・・ここから離れてください」

「何する気だよ!!死ぬぞ!」

「電磁パルスが発生させます!」

「お前・・・それって・・・」

「大丈夫、核兵器なんて使いません」

「・・・分かった。ピョートルとともに海域を離れる。幸運を」

私は無言で敬礼する。

アポトシスの炸裂地点は・・・真上。

「アポトシス・・・VLS開放」

CIWSで敵機を追い掛け回しジョンさん達のほうに行かないよ
うにする。

この場所で炸裂させれば私はただではすまないだろう。

でも方法がこれしかない。

敵は確実に私達にダメージを与えていく。

たった一機でこんな損害だ。

「・・・アポトシス、発射・・・始め」

真上に向けて真っ赤な塗装がされたミサイルが発射される。

炸裂高度は約800m。

・・・落ちろ!!

「ふう・・・ごめんね、うらかぜ」

上空で大きな爆発が発生し敵機がコントロールを失ったのが見え
る。

同時にものすごい衝撃波が私を襲う。

システムがダウンしていくのが分かる。

同時に意識が遠のいていった。

く大和く

遠くで大爆発が見えた。

「いそかせさん・・・」

「あいつなら大丈夫だ」

「はい、長門さん、徹甲弾は撃てますか？」

「大丈夫だ」

「ジョンポールジョーンズさん、レーダーで目標を指示できますか？」

「ああ、出来る」

「了解しました。主砲砲撃準備！目標は？」

「距離・・・20km・・・方位2―3―0！」

「了解！第一第二主砲、斉射、始め！！」

「主砲、撃て！！」

砲撃を開始。

当たって・・・！！

へストーンヘンジが砲撃を再開！！くるぞ！！へ

遠くの島が光る。

でもここは高度600m以下・・・大丈夫！

へ5・・・4・・・3・・・2・・・インパクト！！へ

その瞬間・・・空と海が砕けた。

「きゃああああ！！」

「ぐっ・・・！！戦艦が簡単に沈むか！！」

「あの化け物・・・地对艦攻撃も出来るのかよ・・・！！」

「早く止めないと・・・！！」

損害は戦艦隊は軽微ですんだが駆逐艦・・・ジョンポールジョーンズさんは小破してしまった。

「大丈夫ですか!？」

「俺なら大丈夫だ!」

へ大丈夫か!へへ

「大丈夫です！砲台は・・・」

「レーダーで砲台2基の破壊確認!!」

「あと6基・・・主砲、三式弾に切り替え!!」

「三式!?そんなんじや・・・」

「敵の砲撃の瞬間を攻撃します・・・うまくいけば誘爆で・・・」

「無茶だ!そんなのどうやったら・・・」

「・・・俺のレーダーか?」

「はい」

イージス艦のレーダーなら・・・

「分かった。発射のタイミングを演算する」

「お願いします」

主砲を向け、待機する。

〈舞鶴より横須賀ミサイル管制!アトラス、気化弾頭!ストーンヘン

ジ周辺に存在する敵姫クラスを撃沈する!〉

提督が横須賀に連絡する。

弾道ミサイルなら・・・

〈メガリスにも弾道ミサイルを使った・・・これが最後のミサイルだ〉

「分かりました。・・・外さないでくださいね」

〈ああ、分かってる〉

「捕らえた!!砲撃予測時間・・・あと1分後!」

「了解しました!」

一分・・・ちょうど私達の砲弾が着弾するころだ。

「主砲!!撃て!!」

「全主砲!てー!!」

「主砲!!撃ちまくれ!!」

「主砲!砲撃開始!!」

4隻から一斉に砲撃・・・当たって・・・お願い!

「発射予測まであと10・・・」

「当たって・・・お願い・・・!!」

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・弾着!!」

その瞬間ストーンヘンジで大爆発が起きる。

「やったぞ！命中命中!!」

〈命中確認!! ストーンヘンジ機能停止確認!!〉

「やった・・・!!」

〈あとはメガリスか・・・〉

私は勝利の喜びでいっぱいだった。

そして私は空を見上げた。

「この空が・・・晴れていたなら良かったんですけどね」

「ああ・・・まったくだ」

そんな会話をしていると空が赤く光り一本の光が降って来た。

「ユリシーズ・・・!!」

轟音を響かせながら雲を引き裂いたソレは私達の目の前まで迫ってきた。

MEGALITH―メガリス―

く大和く

「そんな・・・ここまで来て・・・」

目の前に迫ってくる直径30m前後の巨大隕石・・・直撃すれば大和型とは言えたただではすまない。

「提督・・・ごめんなさい・・・」

私は静かに目を閉じた瞬間・・・

「主砲撃て!!」

轟音が轟く。

私は目を開けると目の前には主砲から煙を上げている長門さんが居た。

「長門さん・・・」

「大丈夫か?!」

「はい、だいじょぶ・・・あつつ!?!」

大丈夫と言おうとした瞬間、41cm砲弾で粉碎された隕石の破片が当たった。

まだ大気圏突入の熱を持っているのですごく熱い。

「ははは、大丈夫か?」

「なんとか・・・」

「あとは要塞だけか・・・」

「そうですね・・・そういえばいそかぜさんは?」

ふと周りを見渡した私は違和感に気づく。

いそかぜさんが居ない。

「そういえばさつきから帰ってきてねーな・・・さつきの爆発・・・まさか!!」

「・・・最悪の事態を想定したほうがいいな」

「刺し違えてでも落とすとした・・・のか・・・」

私もその最悪の事態を想像しつつ捜索に向かった。

く零戦妖精(メビウス1)く

「第一次攻撃隊、発艦してください！」

「ラースグリーズ、出撃！」

赤城さんから矢が放たれ数機の戦闘機になる。

私もその中に一機だ。

「降って来たわね……」

雪がパラパラと降り始める。

〈そうだね……こんな海での脱出は悲惨……頼むね一番機〉

「任せない！でもアンタは被弾姫だから知らないけど」

〈ひどっ!!私は今メビウス隊だもん!!〉

「名前が変わったからって変わるものなのかしら……」

〈舞鶴鎮守府より全機、これより航空隊の指揮はE-2早期警戒機、

コールサイン「スカイアイ」が担当する。俺は艦隊指揮だ。頼むぜ航

空隊〉

「了解！報酬はきっちり用意してねっ！」

〈部隊が全機無事であればだ〉

「へへん！お財布握り締めて待つてなさい!!」

そんな会話をしていると……

〈SkyEye here, All Mobius aircraft
t, report in〉

〈Mobius 2 on standby〉

〈Mobius 3 thorough 7 on standby
y〉

〈Mobius 8 on standby〉

〈Preparations are complete. Ready for battle. All aircraft, follow Mobius 1!〉

何でみんな英語?!ま、まアいや、さア行くか!

「みんな！全速で行くよ!!」

〈Mobius 1 engage〉

何でみんな英語なの!?!何でなの!?

そんな事は置いといて……

〈航空隊の皆さん、損傷を受けたらすぐに帰ってきてください！いつでも対応できます！〉

「分かりました！増援機は？」

〈えっと……〉

〈行こう……雪風〉

「……誰」

赤城さんの声と澄んだ妖精のような声が聞こえた。

「えっと……どなた？」

〈こちらB-3……雪風〉

「ま、まあいいや……さア行くか！」

要塞にどんどん迫っていく。

赤い光の線が空に伸びている。

〈あのレーザーは隕石を誘導するためのレーザーらしい。そのためかなり強力だ。航空機が触れればただではすまないだろう〉

「やっと日本語しゃべったわね……」

そんな事に関心していると無線が入る。

〈メビウス8、エンゲ……イジエエ！エエクト!!!〉

「なんでやああああああああああ!!!」

喉が枯れそうになる大声を久々に出したね気がする。

何で？何でオメガ1もといメビウス8はすぐイジエクトしてしまおうん？

〈まもなく要塞に接近する、全機攻撃開始!!〉

「さあみんな!!帰ったらホットウイスキーと洒落込むわよ！」

〈飛ぶのが怖いやつは赤城さんまで帰って震えてな!〉

〈行こう……天使とダンスだ!〉

一気に降下、トンネル状の通路に向かう。

「メビウス1、突入します！」

〈こちら3、続きます!〉

〈こちらメビウス8、戦線復帰!〉

「はやっ!?あんたまだ落下傘で空中じゃないの!？」

〈リスポン〉

「メタいわっ!!!」

そんな事言ってる間にトンネルに突入する。

「狭い・・・壁が迫ってくるみたい・・・!」

ラジコン飛行機のようなサイズとは言え、トンネルなんて飛んだことの無い場所だ。

〈くっ・・・後ろにつかれ——〉

〈ジョーカー1が落ちた! 攻撃部隊残り10!〉

〈ジョーカー3もやられた! 攻撃部隊残り8!〉

〈ドミノ4もダウン!! 攻撃部隊は残り6!〉

無線から聞こえてくるのは落ちていく味方の悲鳴と報告・・・
私達だけでも生きてアレを破壊するしかない。

「みんな、絶対に生きて帰るよ!」

〈うん! 私達にはリボンが付いてる!〉

だが・・・

〈くう!!こちらメビウス4被弾!!〉

「大丈夫!」

〈なんとか・・・機体は飛ばせるよ!!〉

〈こういうときこそイジエクトよ!〉

「お前は黙ってるオオオオ!!」

〈はい・・・黙ってますから怒らないでください・・・〉

〈えへへ・・・大丈夫、まだ戦える!〉

「いい?無理だと思ったら離脱しなさい!」

〈はい!〉

〈ジェネレーター1に接近!各機攻撃に備えよ!〉

目の前に迫ってくるのは巨大な回転する柱のようなもの・・・これがジェネレーター・・・

「目標・・・捕らえた!発射!!」

〈1に続く!撃て撃て撃て!!〉

〈撃て撃て撃て!!〉

銃撃を与えトンネルから脱出する。

「全機無事!」

〈こちらメビウス3！全機確認！〉

「了解！」

引き続きジェネレーターを攻撃しよう。

「メビウス1よりスカイアイ、分散攻撃を提案します」

〈分散攻撃・・・了解し待て〉

〈隊長・・・本気ですか？〉

「うん、たぶん・・・このまま何回も突入すると墜落機がでるかも・・・」

〈・・・〉

〈こちらスカイアイ、作戦を承認する。ただし第二突入はラーズグリーズ、第三はB-3が突入する〉

「私達は？」

〈最後だ。扉をぶち破ったら突入、中にある弾道弾を破壊し施設を誘爆で吹っ飛ばす！〉

「了解！」

〈こちらラーズグリーズ、突入する〉

〈こちらエッジ、ブレイズに続く！〉

〈こちらB-3、雪風。突入する〉

「みんな・・・幸運を」

突入していく味方機を眺めながら祈る。

その数十秒後、2箇所爆発が起きる。

〈命中確認、あとは正面だけだ！〉

〈電より管制官さん！砲撃ですか?!〉

〈ああ、そうだ。撃て！〉

〈主砲！砲撃開始なのです！〉

〈撃ち方！始め・・・用意！てー!!〉

一気に砲撃が扉に集中する。

いくら分厚い扉といえど、艦砲射撃を立て続けに受け崩壊した。

「穴が開いた・・・みんな、行こう！」

〈うん!!天使とダンスよ!〉

〈メビウス1へ、生き残るぞ!〉

当たり前!!

そう心で言い突入する。

「目標・・・捕らえた・・・撃て!!」

〈撃て撃て撃て!!〉

〈撃て!!〉

どんどん命中弾が叩き込まれミサイルが爆発を起こす。

私達は何とか巻き込まれる前に脱出が出来た。

「ふう・・・何とか・・・脱出できたね・・・」

〈一時はどうなるかと思ったよ〉

「あんたは一回脱出して帰ってきてたよね・・・」

〈ドヤツ!〉

「・・・」

〈へへん、そんな事より隊長聞いてよ!〉

「ん?何?」

妙にうれしそうなメビウス8。

〈私、実は基地に恋人が居るんだよ!帰ったら私からプロポーズしよう!花束も買ってあったりして・・・〉

あ・・・(察し)

〈警告、アンノウン急速接近中!ブレイクブレイク!!〉

〈へっ・・・うわあああああ!!〉

オ、オメガアアア!!と叫ぼうと思ったら。

〈エイムが甘いッ!!〉

バレルロールで華麗に交わした先に飛んでいた味方と衝突した。

〈キャアアアア!!!メビウス4、イジエクト!イジエクト!!〉

〈イジエエエエエエクト!!〉

二人が脱出していった。

お前何してんねん。

「あく・・・赤城さん、バカ一人が味方を巻き込み墜落、救助は被害者のメビウス4を優先してあげて。オメガ11・・・メビウス8はMIA(作戦行動中行方不明)で報告してください」

〈は、はあ・・・〉

〈あ、あたしを見殺しにすんじゃないわよオオオ!!!〉

「え・・・ちよつ!？」

パラシュート降下中のメビウス8は突然スパナを投げてきた。いきなりなこと過ぎて対応できず直撃してしまう。

しかもソレがエンジンに突き刺さり火災が発生する。

「ちよちよちよ!!イジエクト、イジエクト!!!」

〈ヘアタシを見殺しにしようとするからバチがあたったのね!!〉

「・・・あんた覚えてなさいよ」

その後帰還時にメビウス8だけ雪が降り凍えるような寒さの海にビキニ姿で浮き輪と一緒に括り付けられ放り込まれたとき。

帰ったら風邪引いてたけどそれはまた別の話。

てか何で風邪引くだけですむのアンタ。

ラーズグリーズ海峡の悪魔

くいそかせく

「う……ん……？」

ふと目を覚ます。

すごく寒い。

周りには氷山が浮いている。

いったいどこまで流されたのだろうか……

「あれ……ここ……あ、そうか……」

アポトシスを上空で炸裂させ敵機を撃墜したことまでは覚えて
いる。

そこから気を失っていたのだろう。

「SPY、火器管制レーダーが壊れてる……あと……ああレーダー
類は全部か……」

ほかにもGPSなど航法に必要なものがほとんど壊れている。

ミサイルも誘導装置が破損、唯一使えるのは主砲くらいだ。

主砲も自動装填装置が破損、装填を手動で行うしかない。

とにかく電子装置がすべて壊れていた。

唯一壊れていない電子制御のパーツは機関のみだ。

とりあえず航行に支障はなさそうだ。

「これじゃ大昔の船ですね……」

味方はたぶん私のことを探しているだろう。

それにしても……我ながらアポトシスって恐ろしい威力だと思っ
た。

「とりあえず……なるべく動かないようにしないと……」

錨を下ろしその場に固定する。

あとは味方が見つけてくれるのを願うしかない。

「せめて無線機だけでも生きてたらなあ……」

無線機も破損している。

私は空を見上げた。

「雲が出てきてる……雨が降りそう……」

雨が降るとなると搜索は一時中断だろう。

おまけにここは寒い。

作戦海域の近くにも氷山が浮いていたのでそんなに遠くに来たわけではないと思う。

「いったんこの場を離れて……でも……」

この場を離れるということは運がよければそのまま艦隊と合流できるとも知れない。

その確立は限りなくゼロに近いが……

搜索機も来ない可能性が高くなる。

だが動かないと敵に補足されればアウトだ。

「このまま……東に進んでみますか」

錨を上げ、機関を始動させる。

しかし流された距離や現在位置が不明。

燃料も後半分よりちよつとあるくらいだ。

「うらかぜ……もう会えないのかな……」

私はそんな最悪の状況を想像してしまっていた。

く提督く

「いそかぜが行方不明!?!」

〈すみません……ストーヘンジに向かう道中で……〉

「……了解した、こちらは衛星から搜索する、搜索を継続してくれ」

〈了解しました。あの……うらかぜさんには……〉

「一応伝えておこう……アイツのレーダーが役に立つはずだから」

〈はい……分かりました〉

なんて事だ……現場海域で強力なEMPが確認されたが……アポト―シスでも使って巻き込まれたのだろう。

「あのバカ……」

くいそかぜく

システム全部ダメかな……

「妖精さん、航法装置だけでも復旧できませんか？」

〈へちよつと待ってー！動けこのポンコツが！動けってんだよ!!〉

「あ、あの・・・」応精密機械なんですけど・・・」

そんなツツコミしてると・・・

「あれ・・・GPSが直った!?!」

〈この手に限る〉

※この手しか（ry

「現在の位置は・・・えつと・・・ラーズグリーズ海峡・・・」

周りには冰山が浮いている。

ラーズグリーズ海峡・・・えつと・・・

データを参照する。

「ここは・・・えつと・・・エメリアとエストバキアの境目ですか・・・私の知ってる国名に地名に・・・全部違う・・・」

唯一知ってるのはアメリカと日本くらいだ。

ロシアがユークトバニアと呼ばれていたりドイツはベルカと呼ばれていたり・・・

ただ過去のデータによるとドイツやロシアも二次大戦あたりでは名前は私の知ってるものと変わらなかった。

「不思議ですね・・・」

燃料を無駄に消費しないように航行する。

「レーダーは直りませんか？」

〈へちよつと待ってね・・・動けこのポンコツ（ry〉

ポンコツって・・・それ最新鋭の機械ですよ・・・
というツツコミを心の中にする。

〈あく・・・マスター・・・?〉

「どうしました？」

〈壊れちゃった☆〉

「はあ?！」

〈へえ、えへへ・・・配電盤ぶん殴ったら・・・〉

「・・・何してるんですか・・・」

〈ほ、ほら！きつと壊れかけだったんだよ!〉

「・・・止め刺しましたけどね・・・」

〈へあ、あははは・・・〉

「はあ・・・」

味方艦隊の位置が知りたいです・・・

そんな事してると遠くにチカチカ光るものがあった。

発光信号？

「んつと・・・所属と船名を明らかにせよ・・・」

私は発光信号で所属、船名を伝える。

すると発光信号がピタつと止んだ。

「発光信号が・・・一応攻撃用意・・・」

主砲に初弾を送り込んでいると・・・

「いそかぜええええええええええ!!!」

「うらかぜ!?!」

「うああああああ!!良かったよおおおお!!!」

「ちよ、ちよつと・・・」

遠くから全速力でうらかぜが突っ込んできた。

「もう会えないがどおぼったよおおおお・・・」

「う、うらかぜ・・・汚いですよ・・・」

鼻水と涙で服が・・・

「うわああああああ!!」

「よしよし・・・」

何で私が慰めてるんですか・・・

10分くらい慰めているとやつと落ち着いてきた。

「うらかぜ・・・ありがとう・・・」

「えへへ、なんたつて私はいそかぜの彼女ですから!」

「ふふ・・・そうですね」

「あ、そうそう。もうちよつとしたら艦隊がこっちに来てくれるって」

「分かりました」

そんな会話をしていた。

すると遠くから何か女性の声のようなものが聞こえた。

「あれ、何ですか?今の」

「うーん・・・アナウンズみたいだけど・・・」

「何かを発進・・・？とってたのは聞こえたんですが・・・」

「なんだろ・・・」

耳を澄ます。

すると・・・

『スタウロス装填完了、発射準備OK』

「スタウロス・・・なんですかね・・・」

「うーん・・・？」

『スタウロス発射5秒前・・・4・・・3・・・2・・・1・・・発射
！』

直後ものすごい轟音が響く。

「な、何の音ですか!？」

「私にも・・・レーダーにアンノウン補足!」

「くっ・・・レーダーさえ壊れていなければ・・・!」

「方位から目標を推測・・・目標は東京!」

東京・・・!?そんな・・・

「司令官に報告を!」

「分かってる!」

私は轟音のあった方向を目を凝らしてよく見る。

そこには・・・

「な、なんですか・・・あれ・・・」

そこには港湾棲姫によく似た姿形をしているが肩からものすごい長砲身の砲が生えている。

その周りには浮遊要塞のような物体が12も浮いており、各個が同時に大量の煙を吐き出していた。

「は、はやく艦隊に・・・見つかると危ないです!」

「た、確かに・・・あれはヤバそう・・・」

私達は急いで進路を味方艦隊に向けて増速した。

シャンデリア攻落 前編

「東京に巡航ミサイルが十数発着弾・・・」

俺は今朝そんなニュースを見ていた。

それと同時に横須賀鎮守府の防空司令部に問い合わせもした。

「んで、レーダーは何も捕らえていなかったのか？」

「へいえ・・・一瞬だけ・・・」

「なんでそれを報告しないんだよ！」

「それが・・・レーダースコープ上をもものすごい速さで通りすぎていったので・・・」

巡航ミサイルにしては速すぎる。

なにより十数発もあれば絶対にどこかのレーダーが捕らえているはずだ。

「いったいどんな兵器使ってた・・・」

「速度から考えて・・・レールガンかも・・・」

「巡航ミサイルを発射するレールガンねえ・・・ん、待てよ・・・」

一つだけ心当たりがある。

「すまん、今すぐ情報部にシャンデリアという兵器について調べてくれと伝えてくれ」

「へシャンデリア・・・了解しました」

通信を切る。

シャンデリア・・・俺は名前と噂しか知らないが・・・

「大佐さん・・・東京は・・・」

「何とかまだ政府機能を保ててるよ。着弾位置が霞ヶ関を中心に半径30kmにランダムに着弾してる」

「陛下は大丈夫なんでしょうか・・・」

「ああ、あそこはホワイトハウス並みに防空兵器あるから大丈夫大丈夫」

「何で皇居がそんなに重装備なんですか!？」

「何か陛下がホワイトハウスってカッコよくね？俺らもそんな風にしようぜって」

「国の象徴がそんなのでいいんですかね……」
「いんじゃない?」

対空兵器まみれに江戸城……時代の流れを感じるな……
一気に200年くらい流れるけど。

「あ、艦隊が帰還されたみたいですね」

「よかった……損害はなさそうだな……」

「本当に……よかったです……」

「とにかくいそがせをすぐ入渠させよう」

「ドックは開いています!」

「あとみんなを会議室に」

「了解しました」

少将が部屋を出て行ったと同時に情報部からデータが届く。

「お、来た……」

データを開こうとしたとき、司令室に電が飛び込んできた

「司令官さんんん!」

「おう!?ど、どした!?!」

「と、東京は……横須賀は無事なのですか!?!」

「あ、ああ。政府機能は何とか……横須賀鎮守府も無事だよ」

「よかったのです……」

「そだ、電、また出撃かも知れん……大丈夫か?」

「補給さえ出来れば……今度はどこなのですか?」

「……ラーズグリーズ海峡……北の海だ」

たぶん俺は今ものすごい顔になっていると思う。

正直、もう艦娘を過去の悪魔と戦わせたくない。

「司令官さんがそんな顔するってことは……大変な任務……なんで
すよね」

「ああ。正直、行ってほしくない」

「でも……行かないと……ですね」

「……」

俺は無言で送られてきたデータを開く。

電に詳細を見せるためだ。

「電・・・相手は・・・こいつだ」

「・・・何なんですか・・・これ」

絶句している。

むしろしないほうがおかしい。

超巨大な砲身・・・写真だけでも装甲がかなり厚いのが見て分かる。

大和の徹甲弾ですら抜けないだろう。

「名前はシャンデリア、ストーンヘンジと同じで最初は平和利用のために作られたんだ」

だが、途中で計画は頓挫する。

そして・・・兵器転用が始まる。

コイツはスタウロスと呼ばれるミサイルコンテナ弾を亜光速で打ち出し、目標手前で分裂、中から多数の巡航ミサイルが発射される。

これは、人を殺すという目的の元開発されたようなものだ。

平和利用の物が悪魔に成り下がった良い例だ。

「電・・・頼む、必ず・・・必ず帰ってきてくれ」

「もう・・・それって死亡フラグなのです・・・言われなくたってちゃんと帰ってきますよ、司令官」

電は雷をまねて袖をまくりポーズを取る。

「よし、作戦会議だ。俺の鎮守府にはもう弾薬が残っていない、これ以上発射されると迎撃は出来なくなる」

「分かったのです！」

電と一緒に作戦会議室に向かう。

「今回の作戦を説明する！」

画面に海図と写真を映し出す。

「これが今回の破壊目標・・・シャンデリアだ」

「シャンデリア・・・エストバキアのレールガンですか・・・」

「ああ。それで写真を見てくれ。こいつの周りに浮遊する浮遊要塞のような物体が大量の煙を吐き出しているのが分かるか？」

「これは・・・？」

「これがコイツの弱点・・・冷却装置だ」

「はは！丸出しじゃねーか！」

「ああ、本当にそのままならな……たぶん、装甲厚が大和の砲弾でも抜けるかどうかだ」

「私の砲弾でも……ですか……」

「ああ。ただ、それは側面の話だ。正面……煙を吐いている部分は比較的装甲が薄い。ここは航空機のミサイルでも貫通可能だ」

今回は航空作戦が主力となる……が、相手は兵器の形をしておらず深海棲艦になっている。

反応だって早いはずだ。

反応のやたら早いレールガン……うつ、頭が……

「つまり、正面角度から攻撃を行い冷却装置を破壊するんだ！」

「編成は？」

「今回は……」

機動部隊に赤城、加賀、ケストレル、クズネツオフ、レールガン攻撃部隊に大和、長門、ミズーリ、うらかぜ、ピョートル、JPJ、雪風だ。

いそかぜは艦装が電子的に破壊されているため出撃が出来ない。

「この編成だ」

「私達は突撃して撃破か……胸が熱いな」

これだけの軍勢……普通の相手ならひとたまりもないだろう。

でも相手があの化け物だ。

俺はゲロを吐きたくなるくらい言いたくない命令を言わないといけない。

「今回の作戦……」

こんな命令を言いたくない。

けどこのタイミングを逃せば東京は壊滅、日本は深海棲艦の手に落ちるだろう。

「……撤退は許可できない、全力で敵を破壊しろ」

許してくれ……

シャンデリア攻落 後編

（J P J）

撤退は許可しない・・・か

「間もなく目標海域です、赤城さん、索敵機を」

「分かりました」

赤城から艦載機が上がっていく。

俺もレーダーを起動させ周囲を見張る。

「・・・とらえた。バカデケエのが」

「距離はいくらですか？」

「えっと・・・40km・・・薄い霧のせいで目視は無理だな」

そんな会話をしていると・・・

『スタウロス発射5秒前・・・4・・・3・・・2・・・1・・・発射

！』

ものすごい轟音が響く。

「目標から高速飛翔体！行先は・・・東京！」

「そんな・・・こうなったら攻撃を・・・」

「分かった、レーダーで砲撃を指示する」

「お願いします！」

大和、長門、ミズーリさんの主砲が動き出す。

目標はあのバケモノだ。

「全主砲、撃て！！」

海に轟く砲声・・・レーダーに多数の砲弾が表示される。

「弾着まで40秒！赤城、艦載機を！」

「第一次攻撃隊！発艦！」

艦載機が上がっていく。

ここからは航空戦力が主体になる。

俺は上がっていく零戦を眺めていた。

（零戦妖精（メビウス））

「メビウスより全機、戦闘準備はOK？」

〈〈こちら2。OK!3〜7もOK!〉〉

「メビウス8、被弾姫?」

〈〈だから被弾姫って言うなあ!!OKだよもう!〉〉

「はは・・・怒らないの・・・」

そんな話をしていると相手が見えてくる。

〈〈こちらJ P J、各機に敵のデータを転送する〉〉

工廠の仲間から機体に取り付けてもらったPDAにデータが来る。

「これは・・・」

表示される100を超える目標・・・

とところどころ赤い表示がある。

これがターゲットだろう。

「メビウス1より全機!行くわよ!」

〈〈了解!〉〉

一気に降下し目標に向かう。

〜提督〜

「もう・・・交戦が始まったか・・・」

「司令官さん、落ち着きがないですよ?」

「電もその割にはえらい震えてる気が・・・」

「なので すす?」

「・・・なんでもありません」

すっごい怖い笑顔向けられた。

死ぬかと思いました(小並感)

「シャンドリアのミサイルコンテナはぎりぎり迎撃できたが次はどうなるか・・・」

「もう弾切れなのですか?」

「いや、対応しきれない可能性があるんだ。もしかしたらここを狙ってくる可能性だってある」

「こ、ここですか!?わ、わたしはどうすれば・・・」

「い、いや少将はそんなにビビらなくても大丈夫だと思う・・・」

そんな話をしながら衛星から送られてくる映像を睨む。

「そういえば電・・・編成に入れなった事・・・何も言わないのか？」

「・・・司令官さんの考えてる事・・・大体分かってるのです」

「・・・」

「私も・・・危険な目に合わせたくないのは分かってるのです」

お見通しか・・・さすが嫁だなあ

「確かに今は戦って仲間を守りたいのです。でも・・・私だつて愛する人の前から消えたくないのです。だから・・・正直ほつとしてるのです」

「・・・電・・・」

「あ、あの・・・私お邪魔ですよね・・・」

気まずそうな顔をして少将が出ていった。

「電・・・」

「司令官さん・・・」

電が寄ってくる。

女の子らしい匂いが香ってくる。

「でも・・・今度仲間外れにしたら承知しないのです」

「ああ、わかってる」

そういつて電は軽くキスをしてきた。

く 零戦妖精く

〈〈対空機銃撃 h—————〉〉

〈〈2番機が落ちた!〉〉

〈〈クソ!弾幕が・・・!〉〉

無線からは味方の悲鳴しか聞こえてこない。

「冷却装置は・・・見つけた!!」

真正面から60 kg爆弾を放り込む。

冷却装置は以外と脆いらしく60 kg爆弾でも簡単に破壊できた。

「冷却装置破壊!これで6基目!」

あと私はもう一つ弱点を見つけた。

敵の腰についている工場のような物から例の砲弾が出てきていた。それは簡単に破壊することができ、誘爆でダメージを与えていた。

「あの砲弾・・・案外脆い・・・」

見た目は重厚だが装甲は薄いらしい。

〈〈こちらメビウス8！イジエエエエエエクト！！〉〉

「うおおおおおおおい！！！」

なんでまたイジエクトじてんねん！！

ちなみに空になった機体は冷却装置に直撃、破壊していた。

残りはあと一個！

「あとは・・・あそこ！！」

一気に降下し銃撃を浴びせる。

すると当たり所が良かったのか爆発を起こす。

「あとは非常用・・・どこかに・・・」

上空から探しているが大和さんたちの砲撃の爆炎でよく見えない。

すると・・・

〈〈こちらメビウス8！単機で降り、冷却装置を破壊する！〉〉

「いつ帰ってきたのよ！！てか無理！！そんなのダメ！！」

〈〈危険なのは承知の上だよ。天使とダンスだ！！〉〉

「バ、バカ！！」

メビウス8は敵の股のしたにある溝のような場所に潜り込む。

すると・・・

〈〈破壊！破壊！！〉〉

「や、やるじゃない！！そんなことより高度を・・・」

〈〈・・・〉〉

「どうしたのよ！！」

反応がおかしい。

・・・まさか

〈〈無理だよ。エンジンが・・・それにキャノピーが歪んじゃって・・・〉〉

「どんな状況でも脱出するのがアンタでしょ！脱出しなさい！！」

どんどん海に落ちていく。

私は眺めるしかできない。

〈〈えへへ・・・ほらキャノピーの向こうに天使のはん・・・イ

ジエエエエエエクト！！！！〉〉

「……できるんかい。」

〈やっぱ落ちるの怖いわ〉

「……」

〈あ、あはは……怒ってる?〉

「もう……バカアアアアアアアア!!」

そんな話をしていると何かが動く音がする。

〈砲身が開いた……あのバケモノ……砲身から排熱してるぞ!〉

〈往生際の悪い……〉

「……今度こそ私の出番ね」

私は操縦桿を握り直し、砲身に向かう。

あの排熱が終われば砲弾が発射されてしまう。

「こちらメビウス1、突入する!」

〈わ、私も!〉

「ダメ!私一人で行く。大丈夫、任せて!」

砲身に飛び込む。

目標は最深部の薬室にある砲弾だ。

それを吹き飛ばせば砲身に穴が開くはずだ。

「目標……補足……撃て撃て!!」

機銃弾を浴びせる。

すると大爆発を起こす。

爆風で機体が揺さぶられる。

だが奥から光がさしこんでいる。

穴だ。

「やった……やった!撃破!撃破!!」

その爆発と同時に砲身が崩落をはじめ、シャンデリアを横した深海棲艦に砲弾の雨が浴びせられる。

そして数十秒後、大爆発を起こし、その場は何も残らない焼野原と化した。

「あの大きさのものが一瞬で……」

驚いていると……

〈帰りましょう。みんな待ってます〉

「了解、赤城さん」

方位を赤城さんに合わせ帰還を始める。

いつの間にか霧は晴れていた。

く提督く

「撃破・・・?!本当か!」

大和から入る一報。

これほどうれしい報告はない。

損害だつてゼロだ。

「やった!やったぞ!!」

「大佐さん・・・終わりましたね」

「ああ!」

あとはみんなを横須賀に帰らせないと・・・

「電、俺たちも帰ろう。我が家に」

「はい!」

「大佐さん、短い間でしたが・・・ありがとうございました」

「こちらこそ。こんなことになるとは思わなかったがな」

「ふふ、私もです」

そんな話しをしながら司令部を出る。

まるで勝利を祝っているかのように空は晴れ渡っていた。

久しぶりの横須賀

「久々の横須賀だな」

滑走路に降り立ち司令部を眺める。

「よし、部屋に帰ろうか」

「なのです！」

電と歩くのも久々に感じた。

まったく深海はなんだってあんなゲテモノ兵器をコピーするのかねえ……

なんて思いながら部屋に帰る。

もう夏の気温だ。

「あつつ……」

「暑いのです……」

部屋が蒸し風呂状態だ。

そういえばエアコンが結構古い型だったな……指令室も……

「なあ電、この後暇か？」

「この後ですか？暇なのです」

「よし、ちよつくら買い物行くか」

「なに買うのです？」

「ちよつとエアコンをな、型古いから電気代もかかるし」

「ああ……確かに音も大きいのです」

「んじや行くか」

「はい！」

とりあえず着替えて外に出る。

電も数分で来る。

「ほんじや行きましようか」

「はい！」

「まずは……とりあえず銀行でお金降ろさない」と

「カードでいかないのです？」

「カードだとなんか無駄使いしそうでな……いつつも現金なんだよ」
「なるほどなのです」

「そういえば電とこうして歩くのも久々だよな」

「そうですね・・・いろいろありましたし」

「そうだな、まあ全部片付いたし良かったよ」

そんな話をしながら銀行に入る。

「えつと・・・14番か」

「ATM使わないのです?」

「ああ、ちよつと大金だしな」

「なるほど・・・」

ソファーに座りのんびりと待つ。

すると・・・

「あれ、イーグル?」

「ん?」

聞きなれた声がした。

「零斗か」

「よ、久々」

「そうだな・・・」

「買い物か?」

「そういうお前も?」

「ああ、利根とテレビ買いにな」

「なるほど」

ふと後ろを向くと電と利根が楽しそうに話していた。

そんな姿を眺めていると外に黒塗りのトラックが止まる。

中からは男たちが降りてくる。

「・・・6時に不審者、強盗の可能性あり」

「え、なに?」

「たぶん強盗だ」

「ちよちよちよ!!どうすんだよ!」

「・・・お前軍人だろ・・・落ち着け」

そんな話していると・・・

「ひゃっはあああ!!金出せコラアアア!」

そんな声とともに銃声。

あんたら派手だなオイ！しかも「ひゃつはあああ!!!」って世紀末か
!!

「どどどどどどうすんだ」

「だから落ち着けての・・・」

めつちやガタガタ震えてる零斗を横目に強盗の武装を見る。

装備は・・・拳銃と・・・リーダー格が自動小銃か。

よし、元SEALsの力を見せてくれよう。

「おいおm・・・」

「オイてめコラ」

人質に銃を向ける犯人に対し零斗が立ち上がる。

やっぱり国民を守らんな。うん。

「お前ら・・・ふざけんよオイ」

「んだあ？黙って座ってるコラア！」

「さつきから黙ってみてりやテメエら・・・」

よし、いったれ！今のお前輝いてるよ！

と心の中で持ち上げる。

「銃の持ち方違うだろうがアアア!!!」

・・・そこかいいいいいい!!!!!!

「お前らバカですかあ!?!そんな片手で持つてたら簡単に奪い取られる
に決まってるだろうが!!とくにリーダーっばいお前！」

「え、お、俺？」

「AKを片手で構えるとかアホかあ!?!ちよつと来い！」

いやあの・・・奪い取ろう。そこは奪い取ろう。銃を。

利根は後ろで「やっちまった……」って感じで顔を抑えている。

「アホかアイツ……どっちの味方だよ……」

「我輩は何もしらんのじゃ……」

「とりあえず……避難誘導だな……」

と話している……

「おいゴリアア!!人質のクセにしゃべってんじゃねえぞ!!」

ちなみにこの怒声は零斗のものです。

なに役になりきってんだああ!!!

「……とまあ脅すのも大事だ。いいか?こうしないと舐められる」

「なるほど……」

強盗のやり方教練してんじゃねーよ!!!

もういいや……

「司令官さん……早く逃げようなのです……」

「ああ……」

「おいそこの小娘、ちよつと来い」

「え?」

近くにいた男が電をつかむ。

「こいつを人質にしようぜ」

「ははは!!いいなそれ!」

「た、助けて……」

「ほら、お父さんに助けてーって言えよ」

「……お父さん……?」

……え。

「お、お父さんなんかじゃないのです!!」

「じゃあなんだ?お兄ちゃんか?」

「夫なのです!」

その瞬間場の空気が凍り付いた。

そして人質と犯人が俺を指さし……

「ロリコンだあああああ!!!」

「……お前ら全員ぶつ殺したるかあああああ!!?ここをペンキ塗りたての赤い部屋も真っ青なくらいの血の海にしたるかコ

ラァァァァ!!!」

殺意って簡単に湧くんですね（

「はははは、だから俺みたいにこういう子とケツコンすればよかったんだよ」

「人の嫁をバカにするのは良くないと思うがのう・・・」

するとまた空気が凍る。

人質と犯人が零斗を指さし・・・

「ロリババアだああああ!!!こいつはきつとババコンだああああ!!!」

そんなことを絶叫した。

いやその理屈はおかしい・・・と思ったが俺はこみ上げる笑いを堪えていた。

すると零斗は・・・

「よつしや全員ぶつ殺したらああああ!!!血祭りじゃああああ!!!」

どこに隠していたのかPKM軽機関銃を取り出し乱射を始める。

「さあ素敵なパーティーしましよおおおお!!!」

頭おかしいっぼい。

てかお前の背中は四次元ポケットか!

とりあえずこそこそと抜け出せたので銀行を後にする。

中からは銃声が響いていた。

「あ・・・いいのです・・・?」

「いいのいいの。収穫あったし」

「収穫?」

「これこれ」

なんか強盗の足元にあったスポーツバックもらっちゃった☆

何かお札いっぱい入ってた!サンタさんのプレゼントかな?☆

「・・・これアカンやつなのですううううううう!!!」

「電、逃げるぞ」

「いや早く捨てるのです!ポイするのです!!」

「ぼい?」

「夕立さんの真似じゃないのですううううううう!!!」

「ちえ・・・」

「いいから捨てるのです!!捨てないと・・・指令室の写真燃やすのです!!」

俺は音速でバックを放り棄てた。

バカな・・・なぜ・・・あの写真集がバレていた・・・艦娘の隠し撮り写真が・・・

「よし、エアコン買いに行こうか」

「な、なのです・・・」

気持ちを切り替え電気店に向かう。

テレビではさっきの強盗がもうニュースになっていた。

『先ほど、横須賀の銀行で強盗が発生しました。』

「お、もうニュースになってる」

「早いですね・・・」

『現在は警察特殊部隊が突入し事件は収束しましたが犯人の一人が手りゅう弾を使用した模様です』

人質は無事だといいが・・・

・・・零斗はどうでもいい。

『この爆発で人質、犯人を含め6人が遺体・・・失礼しました、アフロ体となって発見されました。』

アフロ体って何だ!?

「アフロ体って何なのです!」

「お、俺が知りたい・・・」

「ギャグマンガなのです?!」

「ドリフだね(震え声)」

たぶん零斗もアフロだろうけど・・・

そんなこと言いながらエアコンを探していると誰かとぶつかった。

「おっと、すみません」

「ああ、いやいや、大丈夫。あれ?」

「ん?」

ふと見上げると・・・

「よ、またあったな!ゲフツ」

口から黒煙を吐いてアフロになった零斗であった。

「やっぱお前もアフロになってたんかいいい!!」

「はっはっは!!あの手榴弾は俺が投げてやったぜ!」

「しかも犯人はお前かよ!!出頭しろ!今すぐ!!」

散々な休日になりそうだ・・・

ハワイ沖偵察任務

「ハワイ沖で偵察？」

〈そうだ、間もなく開始されるパールハーバー奪還作戦の前準備だ〉

「んなもんアンタら米海軍でしてくれないっすかねえ・・・」

〈こっちは的が大きいんだ、頼む〉

「報酬頼みますよ」

〈わかった。任せろ〉

そういつて電話は切られる。

詳細はすぐにPCに送られてきた。

「電、作戦会議の準備は今からできそうか？」

「はい、大丈夫なのです。何の作戦なのです？」

「アメリカ軍の要請でハワイを偵察することになった」

「ついに深海棲艦から奪還作戦の前準備ですか？」

「そうだな、そろそろアメリカもハワイを取り返したいんだろ」

「なるほどなのです」

「よし、とりあえずみんなを会議室に集めよう」

ハワイ沖の偵察任務・・・来週あたりに日米合同で真珠湾奪還作戦が行われる。

その前準備だ。

「みんないるか？よし、任務内容を説明する」

今回の任務は、ハワイ沖に接近、艦載機を上げ上空から偵察する。

編成はうらかぜ、JPJ、クスネツオフ、ケストレルだ。

いそがぜは艀装がまだ修理中なので出撃はできない。

「まあ簡単な偵察任務だ、敵戦力と遭遇したら戦闘を避け撤退しろ。

今回は敵との交戦がメインじゃないからな。ただし追撃してくる場合は敵艦隊を撃滅しろ、いいか？敵と遭遇したら任務をいったん放棄していい、自分の身の安全を優先しろよ」

「分かったよ」

「わ、わかりました」

「よし、3時間後に出撃だ！」

くケストレルく

ハワイ沖かく、せっかくならハワイのビーチで海水浴とかしたいよ。

「ねえうらかぜ」

「なに？」

「ハワイ奪還が成功したらさ、みんなでハワイ旅行とか行かない？」

「おお！それいいね！」

「俺もハワイで海水浴したいな、ん……待てよ……ハワイ……宇宙人……うっ頭が……」

「ど、どうしたの？」

「い、いや何でもない、うっ……パンジヤンドラムが……」

「英国面が一体どうしたのよ……」

この人は何にうなされてるんだろうか……

まあそんなことは置いといて。

「クズネツオフ、艦載機は上げれそう？」

「発艦準備完了しています」

「よし、偵察部隊発艦開始！」

偵察ポッドを装備したF-14が発艦していく。

あとは報告を待つだけだ。

「そういえばさ、うらかぜは いそかぜと最近どうなの？」

「え？どうって？」

「ほら、いろいろと」

するとうらかぜはちよつと赤くなり……

「だ、だっていそかぜったら私がもうダメって言ってもやめてくれな
いし……この前なんて私をベッドに縛り付けて【読ませねえよ！】し
たり【読ませねえよ！】して3時間くらいで気絶しちゃったのに叩き
起こして【読ませねえよ！】してき（ry）」

ごめん、誰もそこまで聞いてない。

てか私はデートとかそういうの聞きたかったんですー！

「ご、ごめん・・・そこまで聞いてない・・・」

「あれ？そうなの？」

「う、うん・・・」

「ところでさ、ケストレルはどうなの？」

「私？うくん・・・まだ何も・・・」

「うっそだー！キスクらいしたでしょ！」

「キ、キス!?ま、まだしてないよ！」

「あはは、顔真っ赤〜」

「やめてよ・・・もう・・・」

「で、ホントは？」

「・・・」

私は顔を茹ダコのごとく真っ赤にさせて俯く。

「ねえねえ、どうなの？」

うらかぜは満面の笑顔で寄ってくる。

「ああもう！したよ！悪いか!!」

「おお、ついにファーストキスしちゃったか〜」

「そ、そうだけど・・・なによー!!」

「その先は？」

「へっ？」

「その先」

その先とは何なんでしょうかね・・・

「ほらわかってるでしょ？」

「な、何のこと？」

「知らないふりしちゃって〜」

うらかぜは耳元まで近寄り囁いてくる。

「夜の営み、だよ？」

「よよよよよ夜の営み!?し、してない！断じて私はしてない！ま、ま
だ処女だもん!!」

「そ、それ大声で言っちゃうのか・・・」

「はえ？」

私の叫びに回りが顔をちよつと赤くさせ肩を震わせていた。

「わあああああああああああ!!!」

「あははは、弄りがいあるな」

「ひどいよ……」

「ごめんって」

そんなガールズブトックしていると……

「ん……偵察機より報告……損傷状態で交戦中の艦娘を補足したらしいです」

「救援に向かったほうがいいかも……」

「隊長、どうする?」

〈へうくん……一応救助に向かおう。それと……ガールズブトックは無線を切ってやれよ……全部聞こえてたぞ……〉

「……えつと……どこから……?」

〈……最初から……〉

「うわあああああああああん!!!」

恥ずかしい……死にたい……

もうマジ無理。。。爆撃しよ。。。

「目標を目視……ん……?兵士……?」

私も確認する。

たしかに迷彩服を着ていて、艦装のようなものは足くらいしかない。

手にしているものはM4カービンライフルのようだ。

アタッチメントに40mmグレネードランチャーも確認できる。

「艦娘にしてはおかしいですね」

「そうだな……とにかく接触しよう」

私たちは増速して接近する。

艦娘は接近してくるイ級に対して銃撃を行っている。

「味方だ!」

JPJがそう叫び砲撃を行う

「よかった、助かったわ!」

「ああ、あとは任せろ!所属は?」

「所属はないわ」

「了解した、じゃあ俺たちのところに来るのはどうだ？」

「そうね、そうするわ。それより・・・撃たれた傷が痛いわ」

よく見ると彼女はあちこちから出血している。

「早く港に戻ろう。ケストレル、ハワイの偵察は？」

「ある程度の情報は・・・一応任務達成だよ」

「よし、全速で帰還しよう。それとアンタ名前は？」

「私？私は・・・」

一息置き続きを話す。

「アーレイバーク級ミサイル駆逐艦の62番艦、マイケル・マーフィよ」

く提督く

マイケル・マーフィ・・・どっかで聞いたような・・・

「なあ電、マイケル・マーフィってどっかで聞いたような・・・」

「うーん・・・？私は覚えがないのです」

「確か米軍時代に・・・あつ」

思い出した。

2005年6月27日にSEALsが行った作戦・・・『レッド・ウイング作戦』・・・その部隊の隊長の名前だ。

「あのマーフィ大尉か・・・」

「知り合いなのです？」

「いや、俺は本土にずっといたからな、名前くらいしか知らないよ」

そんな話をしていると艦隊が帰ってくる。

「みんなのアイスと飲み物でも用意するかな」

「アイス食べたいのです！」

「よしよし、ちゃんと電の分もあるよ」

「ありがとうございます♪」

すると数十分後、指令室に集まってくる。

「その子が新型？」

「私はマイケルマーフィよ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

「そういえば提督、艦娘ってヤツについて帰りに聞いたのだけど・・・私は艦娘じゃないのかしら」

「?どういうこと?」

「艦娘って船だった記憶があるのよね」

「ああ、そうだよ」

「私には人としての記憶もあるのよ。もちろん、船としてもだけど」
「人?」

「どんな人だったかは覚えてないわ。でも最期の光景ははっきり覚えている。険しい山の中・・・追いかけてくる武装した人間・・・」

レッドウイング作戦の記憶だろう。

「まあ、たぶん夢じゃないか?とりあえずアイスと飲み物を用意してあるから食べなさいな」

するとみんなが・・・

「アイスううううう!!!」

「飛びつくなお前ら!!!」

ものすごい勢いでわれ先にとアイスに飛びついていた。

平凡な夏日

偵察も無事終わり新しい仲間が入った日の午後、俺は仕事の休憩がてら鎮守府を散歩していた。

「いい天気・・・っていうか暑いな・・・」

もう気温は夏だ。

海が目の前のおかげで潮風がありいくらかマシだがそれでも日差しが強い。

「ん・・・クズネツオフ？」

工廠の前でキョロキョロと落ち着きのないクズネツオフがいた。

よし、後ろから近づいて驚かせよう。

「どんな声上げてびっくりするやら・・・」

そんなゲスい事思いながら近づく。

相手は気づいてない。

よし、誘拐犯みたいな事してみよう。

「うくん・・・提督さん居ないとダメですよね・・・」

俺を探しているのか。

ゆっくりと近づき、口をふさぐ。

「んぐっ!？」

「動くな」

ちよつと声を低めにする。

クズネツオフは冷や汗をダラダラ流しながら震えている。

「動いたら・・・分かるな」

「んんん!!」

ちよつとどんな顔になってるか気になる・・・

まあ十分楽しんだしネタ晴らしするか。

口から手を離し、振り向かせる。

「うえっ・・・ひ、ぐ・・・」

めっちゃ泣いておられました。

・・・ヤバイ、やりすぎた。

「お、おーす・・・」

「ていとく、さん・・・?」

「お、おう」

「ぐすつ・・・うわああああああああああん!!!」

「ちよ、ちよい待て、そんなに泣くなつて!」

「ど、どれだけびつくりしたと思ってるんですかあああ・・・うえええええええん!!」

「悪かった!悪かったから!!お詫びにアイス買ってやるから!」

「うああああああん!!!アイスなんかじゃダメ!!」

「駄々こねんな!!」

「うえええええん!!憲p・・・」

急いで口をふさぐ。

「むぐうううう!!!」

「・・・それ以上言わない。OK?」

「むぐつ!むぐつ!!」

頷いてくれたからまあいいか。

「驚かせて悪かったつて」

「ひぐつ・・・ぐすつ・・・」

「艦載機作つてやるから・・・な?」

「かん、さい、き・・・?」

「ああ、作つてやるから、な?」

「・・・うん・・・泣き止む・・・」

ようやく泣き止んだ。

なんでコイツは艦装外すところ・・・幼くなるんだ・・・

「まあつーわけで艦載機作つて」

「お、おう・・・ま、まあ任せてよ。一回?」

「ああ、まあ一回で」

「はいよー!」

資材を中に運んでいく。

「艦載機・・・何ができますか・・・?」

「そうだなあ・・・まだ分からんよ」

そんな話していると。

「できたー！はい！」

「どれどれ？」

九六式艦戦

「ハズレか・・・もっかい！」

九六艦戦

「もっかい!!」

九六艦戦

「もっかい!!!」

九六艦s (ry

「もっか (ry」

九六 (ry

「(ry」

(ry

「フアアアアアアアアアアアアアアアアック!!!!!!!」

チクシヨウ！ふぎげやがって!!あと!!回分しか資材ねえ!!

クズネツオフはまた涙目になってきた。

「艦載機・・・できないです・・・」

「だああああ!!泣くな!!」

「あと一回作れるドン！」

「うるせえ!!!はやく資材ぶち込め!!」

「ちえ・・・ちよつとくらいノってくれたっていいのに・・・」

そういういながら妖精さんは資材を運んでいく。

「できたー！」

「どうせまた九六なんだよね・・・知ってる・・・」

そういういながら書類を見る。

すると・・・

S u — 3 3 シュトリゴン隊

「フリヤンカアアアアアア!!!」

クズネツオフがものすごい声を上げていた。

「やったやった!!提督さんありがとう!」

「お、おう」

とりあえずご機嫌になったみたいで良かった。

というわけで散歩も終え、司令室に帰ってくる。

「ただいま」

「あ、お帰りなさいなのです!」

「ただいま、外は暑いな・・・」

「そうですね・・・冷たいお茶用意するのです」

「ありがとう」

出された冷たい麦茶を飲みつつPCでマイケルマーフィの情報を登録する。

鎮守府の艦娘管理のためだ。

「ん、そういうえば明日給料日か」

「あれ、もうそんな日ですか?」

「せっかくだし、みんなに休暇やるかな、こここのところ外でれてないだろうし」

「そうですね・・・ただ いそかぜさんと うらかぜさんは何があるうと平常運転でしたけど・・・」

「うん・・・まあ・・・」

ちなみに今は部屋を防音設備が施された部屋に変更したが、前の部屋では他の艦娘と鎮守府の関係者から「あの部屋、喘ぎ声が毎晩絶えなくて寝れない」と苦情が来ていた。

鎮守府内にも提督以外に男の職員もいっぱい居るが「あの部屋の近くは最初行くと最高に天国だったがもういろいろ激しすぎて最近は息子も萎える」とワケの分からん苦情まで入っていた。

「あいつらいつか過労死すんじゃないの・・・」

「それが一番の心配なのです・・・」

そんな話しながら給料の計算をしていった。

もちろん、艦娘たちのだ。

いろいろ手当をつけて手取り25万くらいだ。

初任給は13万だったがな。

「とりあえず・・・計算はすぐ終わるな。あとは・・・」
後の仕事を確認する。

えっと・・・

「鎮守府内の装備の補給・・・午後には弾薬積んだ輸送機が来るしそろそろ給料計算終わらせるかな」

「私があとを引き継ぎますよ?」

「んく・・・頼めるか?」

「はい!お任せくださいなのです!」

「すまん!と、そろそろ輸送機来るし俺は滑走路に行ってるよ」

「はい、お気をつけてなのです」

「確か今日くるのは・・・CIWS用の弾薬と鎮守府の航空機用の弾薬だったかな。」

ああ・・・日焼けしそう・・・

夏はどうも嫌いだ・・・

そんな事思いながら滑走路に向かった。

空襲

「あちい……」

朝、刺すような日差しで目を覚ます。

「司令官さん！おはようなのです！」

「おはよ……元気だな……」

電はなんでこんな元気なんだ……

「司令官さんは夏バテ気味なのです？」

「どうなんだろうな……」

とにかく暑い。

汗も出て気持ち悪くて仕方ない。

「すまん、ちよつとシャワー浴びてくる」

「あ、じゃあその間にご飯用意しとくのです！」

「ありがとう」

寮の中にあるシャワー室に向かう。

艦娘と共同の場所だが今は朝の6時、誰もいないだろう。

それより入ってる場合札がかけられるので人がいるのがすぐわかる。

シャワー室に向かうと札はかけられていなかったので遠慮なく入る。

「はあああ……なんでこんなに暑いかな……」

そんな独り言を言いながらシャワー室のドアを開けると……

「……たい……ちよ……？」

「……」

なんでケストレルが居るんだよ……

「な……なんで……？」

「いや……入ってるなら札かけとけ……」

「……」

ヤバイ、俺死んだ。殺される。

死を覚悟したが……

「う、うっ……ぐすっ……」

・・・これ、そろそろ死にそうなんだけど。

（4時間後）

みつちり電に説教をされて解放された。

とりあえず不可抗力ということを感じてくれて助かった。

被害も関節が外れたくらいで済んだぜ・・・

「電・・・今度からきつちり話聞いてくれ・・・」

「でも・・・ほかの女性の裸見たことは許さないのですつ！」

「すまなんだ・・・」

それでも電はしっかりと朝食を用意してくれていた。

「遅い朝ごはんですけど・・・」

「ああ、ありがとう」

食べながらニュースを見る。

ちやうど世界のニュースをやっているところだった。

『次のニュースです。幽霊飛行機と言われている超大型航空機が太平洋上を飛行しているのを発見しました。この機体の形状はベルカ戦争時に撃墜された大型航空機XB-0に酷似していて・・・』

XB-0・・・んなもんが幽霊航空機ねえ・・・

・・・ふつうに怖い。

「XB-0って何なのです？」

「ん・・・簡単に言うとか飛ぶ航空母艦だよ」

「そ、そんなものあったのです!?!」

「ああ、エストバキアとベルカが開発してたんだ」

ただ2つとも、航空機の爆弾に弱いという弱点があったけどな。

てかそれよりもこんなゲテモノに爆弾を投下しようとした変態はふつうにすごいと尊敬する。

そんなニュースを見てみると警報が鎮守府に響き渡る。

（<こちら防空司令部！アンノウンが当鎮守府に接近中！>）

「なんでこんなタイミングで・・・！」

部屋にあった無線機をとる。

「おい！不明機との距離は?!」

〈あと20マイル!〉

「クソツ!!」

窓を開け空を見る。

そこには・・・

「XB・・・0・・・」

間違いない。あれは・・・XB-0だ。

それはすぐに鎮守府に接近してくる。

〈強力なECM!第一種警戒態勢発令!〉

〈どうしてここまで侵入に気づかなかった!!〉

〈当鎮守府に接近する機影を目視!総員配置急げ!〉

〈敵機上空に接近・・・来る!〉

大きな影が鎮守府を覆う。

機体下部に装着された榴弾砲や機関砲が牙をむく。

〈滑走路に直撃弾!離陸不能!!〉

スクランブル発進しようとする機体の前の滑走路に徹甲榴弾が撃ち込まれる。

滑走路に大穴が空き戦闘機が離陸できない。

「クソツ!!」

「司令官さん!早く避難するのです!!」

「あ、ああ、わかった!」

向かっているのは・・・東京!!

「電待ってくれ!東京に連絡を・・・」

「わ、わかったのです!!」

急いで東京に連絡を入れる。

〈こちら東京司令部〉

「横須賀鎮守府だ!!現在国籍不明機に攻撃を受けている!向かってい
る先は東京だ!!」

〈なに・・・待て、陸軍より入電・・・国籍不明機・・・了解した、た
だちに航空支援を・・・〉

「もう間に合わない！迎撃を頼む！こっちは滑走路を破壊された！」
へ了解した、陸軍航空隊のF-15が向かう」

「頼んだ！」

そういつた瞬間鎮守府をものすごい衝撃・・・地震に近いものが襲う。

同時に熱風もだ。

窓の外を見ると航空機用燃料タンクが爆発を起こしていた。

電は口を抑えて絶句している。

「クソつたれ・・・鎮守府が・・・！」

艦娘を出撃させようにも間に合わない。

黙ってみているしかなかった。

東京空襲

「ケストレル、バーベット！上がれる機は全機上げろ！クズネツオフもだ！」

「りよ、了解！」

艦装をつけて俺の元に来たケストレル、バーベット、クズネツオフに指示をだす。

三人はすぐに洋上に出ていった。

「司令官さん！航空燃料タンクの近くで負傷者が・・・」

「分かった、救護班をすぐに！」

「わ、私もお手伝いしていいですか？」

「・・・できるか？」

「やります！絶対に助けるのです！」

「分かった、やってみてくれ！」

「なのです！」

俺は無線の周波数を東京で交戦中の部隊に合わせる。

状況がわからないので無線を傍受するためだ。

〈敵大型機、羽田上空を通過！駐機中の民間機が破壊された！〉

〈ちくしょう！死傷者が出てるぞ！〉

〈避難誘導は警察と消防に任せろ！〉

〈レインボーブリッジが落されたぞ！〉

〈爆撃により被害甚大！民間人にも死傷者多数！〉

〈サーベラス隊、滑走路侵入を許可する〉

〈全機、離陸後は空中管制機の指示を受けろ。これは演習ではない、繰り返す、これは演習ではない〉

東京はえらいことになってる・・・クソ！

「隊長！」

「アンドロメダ？どうした？」

「敵機の情報が入りました！」

「情報？なんだ？」

「敵機の発進予想位置は・・・グレースメリア！」

「グレースメリア……」

グレースメリア……エメリア共和国の首都だ。

だが……今は深海棲艦に占領されエメリア軍はなす術なく内陸まで撤退していった。

「どうしますか？」

「まずは敵機の撃墜か撃退だ！」

「了解しました」

無線機からは被弾して撃墜されていく戦闘機のパイロットの悲鳴が時々聞こえてきた。

〈敵機の右エンジンに直撃！だけど……ちくしょう！一体何基のエンジン積んでんだよこのバケモノ!!〉

〈ちくしょう……！ミサイ――〉

〈秋葉原付近に爆弾が着弾！小規模な爆発が多数……クラスターだ!!〉

〈ビルが崩壊するぞ!!あのビルから避難する人を確認したか?!〉
〈羽田空港、滑走路16R付近で爆発！滑走路に大穴が開いてるぞ!!〉

〈上空に退避中の民間機が撃墜されたぞ!!〉
深海棲艦のクソつたれめ……東京が……

〈コクピット付近の着弾!!これで操舵を……〉
〈敵機から攻撃がやんだ……?〉

〈大型機、バランスを崩した!〉
コクピットに弾着……操縦系統が全滅したんだろうか……

無線によると機体は海のほうへ傾いて行ってるらしい。
〈そのまま海に……?!おい！都市部に傾いたぞ!!〉

〈落せ!!何としても!!あれじゃ霞が関……皇居に当たるぞ!!〉
そんな無線を聞いていると大きな爆発音が聞こえた。

炎上中の航空燃料が別のタンクに引火したようだった。

「おい……おい……?冗談だろ……!?!」

あれは……電のいる方向……

「電!!」

時間ごとにかくゆっくりに感じる。心臓の鼓動もえげつないくらいに早い。

「電・・・電!!」

名前を叫びながら走る。

到着するとあたり一面火の海だった。

瓦礫の量もすごい。

「電ーどこだー!」

瓦礫の海を探していると・・・

「げふっ・・・艦装つけて行ってよかったのです・・・」

「電・・・?」

「あれ、司令官さん!」

「・・・頭どうした?」

・・・アフロ姿で煤だらけの電(?)が立っていた。

「頭・・・はにやつ!」

金属片に移った自分を見てびっくりしていた。

「とりあえず・・・無事でよかった・・・」

「はい・・・何とか・・・あ、それとこのあたりの人はみんな助けたのです!一人も欠けてないのです!」

「分かった・・・よくやった!」

「えへへ・・・」

「あとは・・・XB-0か・・・」

無線を聞いていると・・・

〈敵機・・・東京湾に墜落・・・ふう・・・〉

〈・・・何機欠けた?〉

〈数えただけでも・・・20は・・・〉

〈クソッ・・・〉

東京も被害甚大だろう。

「電・・・とりあえず司令部に戻ろう、あとは消防班に任せよう」

「・・・」

電は無言で隣を歩いていた。

NO RYO 肝試し

あの空襲から一週間が経った。

鎮守府もある程度復興が進み、航空機の離発着と補給は問題ない。ただ東京では死傷者が3000人以上、行方不明者が2000人以上だった。

羽田空港は第一滑走路とターミナルビルの一部を破壊され今は閉鎖されている。

「グレースメリア・・・か」

「どうしたのです?」

「いや、ここが今深海棲艦の巢になってるのはしってるだろう?」

「はい、知ってるのです」

「んん・・・いつになるやら・・・」

「そんなに難しい作戦になるのです?」

「まあ・・・難しいっちゃ難しいんだが・・・道中がな」

「道中?」

俺は海図を見ながら悩む。

グレースメリアまでの道には巨大な海中山脈の上を通る事になる。

山脈自体は海面下で100m以上余裕があるが、その海域が厄介だ。

膨大な地下資源のせいで通信障害が多発し、混線はもちろん、レーダーやソナーがうまく機能しない。

アメリカネバダ州にも同じような地域があり、そこはエリア「B7R」と呼ばれている。

地下に豊富な鉱物資源があり通信障害が多発する地域だ。

この二つの地域は昔から資源を求めて血を流しあつた場所だ。

空のB7Rがネバダ州ならここは海のB7Rだ。

深海棲艦としてもこの資源はほしいだろう。

なにせ、鉄やボーキサイトなどとウランがここには眠っている。

「この海域は今ユーク海軍が何とか占領してるんだがな・・・そろそろ深海棲艦に奪われそうなんだ。いる部隊もエースクラスだしな」

「うん．．．迂回はできないのです?」

「迂回．．．できないこともないが思いつきり深海棲艦の勢力不明海域に踏み込むことになる」

「ということはここしかルートがないのですか．．．」

「そうだな．．．とりあえずまだ動こうにも動けんな．．．」

俺は参ったというポーズをして椅子に座りなおす。

鎮守府修理のための資金関係の書類のチェックがようやく終わった。

「そーいやケストレルは?」

「えっと．．．確か東京に．．．」

「そっか．．．」

ケストレルの彼氏も東京に住んでおり、その日は空襲を受けていた。

彼は秋葉原に居り、クラスター爆弾の破片で負傷したらしい。

怪我自体は軽いもので今は入院している。

ケストレルはその事を知った瞬間泣きそうになりながら病院に向かっていった。

「まあ．．．大事にならなくてよかった」

心底そう思う。

「よしっ、書類整理おわり!」

「お疲れなのです!」

「しっかし今日は暑いな．．．」

「そうですね．．．夏は苦手なのです．．．」

「ん．．．」

ちよつと早いけど．．．涼しくなる事でもしようかね。

、肝試し、をな!!

「なあ電、今鎮守府にはどれだけ残ってる?」

「んと．．．私たち第六駆逐隊といそかぜさん、うらかぜさん、ピョートルさん、クズネツオフさん．．．あとは．．．マイケルさんなのです!」

「あとは全員遠征か．．．あれ、シンファクシは?」

「今はユークトバニアに帰省しているのです」

「・・・帰省って・・・あいつ実家あんの・・・？」

「た、たぶん・・・？ところでなにをするのです？」

「ん？そりやお楽しみ」

「気になるのです・・・」

この鎮守府を出て少し行ったところに廃病院と家屋があり近所でも有名な心霊スポットだ。

病院が廃墟になった噂はいっぱいあるが一番有名なのは院長が経営難と借金のせいで発狂し患者や医者や猟銃で次々と殺し、自身も自殺したという話だ。

それを裏付けるように血痕のようなものがあちこちに飛び散っており、薬莢も転がっている。

噂では殺された患者や医者と一緒に散弾銃を持った院長の霊が出るそうさ。

「さて・・・みんな集めてみるかな」

「ここでいいですか？」

「おう、頼めるか？」

「お任せなのです！」

電が出ていったのを確認して俺は肝試しの用意をする。

とりあえず最上階の院長室に置いたお札をとって何かお菓子を備えていくというものだ。

ドローンでお札を置いていこう。

てか・・・このお札・・・よく見たらアルファベットでOFUDAとか書かれてて効果の程が不安すぎる・・・

あと、銃を持った霊が出る可能性があるとなると一応自衛するものがある。

二人一組にする予定なのでとりあえず拳銃を一組ずつに配ろう。

そんなこと考えてると指令室にみんなが集まりだす。

「いきなり司令室に集まられてどうしたの？」

「いや、最近暑いしイベントでもとな」

「イベント？」

「そうだ、題して・・・第一回NO RYO肝試し大会」
「・・・」

「おい、なぜみんなして黙る。面白いスポットだぞ？ここからすぐの
ところの廃病院だぞ？」

「・・・」

なぜかみんなすごい顔して黙り込んでいた。
すると暁が・・・

「ゆ、幽霊なんていないのは知ってるけど・・・参加してあげないこと
ないんだからね！」

「私は面白そうだから参加するよ」

「ボクも！」

と暁に続き全員参加すると言ってきた。

電は少し怖がつてるようだが・・・

「あの・・・司令官さん・・・前の建物の時みたいにはならないですよ
ね・・・？」

「あく・・・大丈夫じゃね・・・？」

思い出したくないこと思い出した・・・

そんなわけで準備しているうちに暗くなり、出発する。

目的の建物はすぐだった。

「おーしーじゃあみんな最上階にお札おいてくるからそれとってお供
えおいて帰ってくるぞ！OK？」

「OKー」

ドローンを飛ばし、最上階においてくる。

あとは・・・

「あ、そうそう、「組ずつに・・・」

拳銃をバックから取り出し渡す。

「・・・なんで？」

「いや、銃持った霊が出るらしいから自衛用」

「いやこれ・・・効くの・・・？」

「大丈夫じゃね？」

とりあえずみんなに拳銃を渡しクジでペアを決める。

俺は運がいいことに電と一緒にされた。

あとは暁、マイケルペア。響、クスネツオフペア。いそかぜ、雷ペア、うらかぜ、ピョートルペアだ。

「おーしーじやあ順番はどうする?」

すると響が・・・

「私が行くよ」

「ふえあっ!?!」

「ダメかい?」

「い、いや・・・最初って・・・」

「グズってないで行くよ」

響は問答無用でクスネツオフを連れていく。

「や、やだああああ!!まだ心の準備がああ・・・!」

「ШУМНЫЙ(うるさい)」

「Да・・・(はい・・・)」

く響く

幽霊なんていない。

そんなのいたら見てみたい。

「ねえクスネツオフ、歩きにくいんだけど」

「だ、だって・・・幽霊居そうじゃないですかあ・・・怖いですよ・・・ぐすつ・・・」

「泣くほど怖いかな・・・」

私はポケットに入った司令官から受け取った拳銃を握りながら歩く。

一応人のいない廃墟だし不審者がいてもおかしくはない。

「響ちゃん・・・怖いよお・・・」

「仕方ないな・・・」

手をつなぎながら歩く。

中は埃っぽい。

「ここは・・・受付か」

ボロボロの受付の中をライトで照らす。

「ひやああ!!」

「ど、どうしたんだい?」

「い、今人影があああ・・・もうやだああ・・・」

「どっ?」

私は拳銃を抜き、構える。

「無駄な抵抗はやめて出てくるんだ」

「絶対幽霊です!人じゃないですうう!!!」

私は指さす方向を見ていた。

すると・・・

「にゃー」

「猫か・・・」

「ねこ・・・?」

「ほら、猫だったよ」

猫が一匹机の裏から顔を出した。

「ほら、先に行くよ」

「もうやだあ・・・行きたくないです・・・」

問答無用で引っ張る。

階段を上っていくと病室のエリアについた。

「ここは病室だね。上に上る階段はここでもいいけど・・・」

「ここ!ここから上りましょ!ね、そうしましょ!」

私はたぶんすごいゲスイ顔をしていると思う。

そんなこと思いながら・・・

「面白そうだから向こうの階段を使おう」

その言葉を聞いたクズネツオフは・・・

「も、もうやらああああ!!うええええんん!!!」

号泣してしまった。

「ご、ごめん、ちよつとからかいすぎたよ」

「うえっ・・・ひぐっ・・・もうやら・・・怖い・・・」

「ごめんって・・・ほら、ここから上るよ」

「ま、まだ上るんですかあ・・・?」

「任務完了してないよ」

「うわああああああん!!!やらああああ!!!」

泣き叫ぶクズネツオフを無理やり引つ張り階段を上った。
病室エリアを抜け最上階の4階につく。

私はこの時ちよつと違和感を覚えた。

空気が少し冷たい。

「空気が冷たい・・・警戒しよう」

拳銃を取り出し構えながら進む。

「空気が重いです・・・」

「そうだね」

「なんでそんなに冷静何ですかあああ!!!」

「いやだって・・・幽霊なんていないから」

「います!絶対います!ほら!ア・・・レ・・・?」

「アレ?」

クズネツオフが指さす方向に・・・

・・・半透明の子供がいた。

明らかに眉間に銃創がある。

「ひやあああああああああああああ!!!」

「・・・・・・・・」

私は無言でトリガーを引く。

というか近寄りながら全弾叩き込む。

「・・・・・・・・」

「で、出た・・・出たあああ・・・」

だが半透明の子供は姿を消した。

血も死体もない。

「おかしいな、どこに・・・」

「ひ、響・・・ちゃん・・・」

「ん？」

私は後ろを振り向く。
すると・・・

「・・・ Добрый вечер (こんばんわ)」
後ろにさっきの子供がいた。

私の両肩をがっしりつかんでいる。

子供はニヤッと笑い大きな口を開けた。

「・・・・・・・・ひっ・・・・・・・・」

「ひ、響ちやああああんん!!!」

気が付くと外に出た。

「うえっ・・・・・・・・ぐすっ・・・・・・・・うええええん・・・・・・・・」

「よしよし・・・・・・・・何があつたんだい・・・・・・・・」

「ピョートル・・・・・・・・あそこ出るよお・・・・・・・・」

どうやら気絶した私をクズネツオフが外まで運び出してくれたようだった。

とりあえず私の結論。

幽霊なんて居ない、あれは妖怪の仕業。

「よっしや！次は俺らだな！」

「し、司令官さん・・・・・・・・帰りたいのです・・・・・・・・」

「んな事いうなって、出たら守ってやるよ」

「やだかつこいい・・・・・・・・とうとでも思いますか?!怖いのです!ふつうに怖いのです!それより響お姉ちゃん気絶して出てきた事には突っ込みないのです!?!」

「うんまあ・・・・・・・・大丈夫じゃね？」

「大丈夫じゃないのですうううううう!!」

そんな叫びを上げながら電と司令官が病院に入っていった。

B7R 制海戦

病院の中に恐る恐る踏み込む。

雰囲気抜群だ。

「司令官さん……何も出ないですよね……?」

「大丈夫だろ」

「いやでも……響お姉ちゃんが……」

「……怖くなるからやめようか」

「いや怖いんならもう帰ろうなのです!何が楽しくてこんなところ入るんですかああ!!」

電の悲痛な叫びが響く。

一階部分を探索していると突然何かが割れる音がした。

「おっ?」

「ひにやあああ!」

「なんか割れたな……」

「もういやなのです……ぐすつ……」

「ああ……よしよし泣くなって」

でも一応気になるので確認しに行く。

「行くのです……?」

「一応な」

「……私も行くのです……」

「怖ければ待つても大丈夫だぞ?」

「こんなところに一人のほう怖いのです!」

「まあ……それもそっか」

というわけで二人で音のした方向に向かう。

するとそこにはガラス瓶が落ちていた。

「風か……なんかの拍子に落ちて割れたみたいだな」

「幽霊さんじゃないですよ?そうですね?」

「ん……まあ幽霊じゃないとおも……」

思う、と言おうとした瞬間目の前の扉がドンドンと音を立てる
「びぎやああああ!!」

「おおおおお!!?」

さすがに俺もビビる。

いや、ふつうドアがそんな音立てたらビビるでしょ?ね?

「な、なんなのですかううう!!」

「こつちが知りたいわああ!!!」

そんな叫びをあげているとゆつくり扉が開く。

「ひいひい!!」

「神よおおお!!」

電は俺に抱き付き、俺は拳銃を構える。

すると・・・

「・・・あれデジャブ」

中から青いツナギ着たいい男が出てきた。

・・・いやな予感しかない。

すると・・・

『やらないか?』

「・・・ここもかよおおお!!!」

俺はものすごい勢いで電を担ぎ上げダッシュで逃げる。

「はにやつ!」

「回避いいいい!!!」

なんでここもコイツいるんだよ!!

てか、銃持った幽霊はいなかったけどさ、ある意味巨砲を持ったヤ

ツいたよ!!

しかもその砲口が女の子のほうに向いてもアウトだけど俺のほ

うに向いてたよね?!

おまけにエネルギー充填120%みたいな状態で今にも波動砲撃

ちそうでしたけどおお!!

「なんでアイツここにもいんの!?!」

「しらないのですううう!!?ていうか追いかけてきてるのです!!!」

『ホイ♂ホイ♂』

ホイホイ言いながら追いかけてくる幽霊ってなんなの!?

「アカン、ここマジでアカン!!」

「いやもう最初からヤバそうな雰囲気出てたのに突入したの司令官さんなのですー!」

「いやホントごめんなさい!!」

『ホイ♂ホイ♂』

「お前はホイホイうるさいわああああ!!」

幽霊にブチ切れながら逃走する。

すると・・・

『アーツ♂』

という悲鳴を上げて声が聞こえなくなる。

後ろを見ると床に開いてた穴に落ちたようだ。

「やったか?」

内心フラグのような事を言ったと思いつつ穴に近づく。

「し、司令官さん・・・危ないのです・・・!」

「大丈夫だ」

穴をライトで照らすと・・・

『ホイ♂ホイ♂』

『ウホツ♂』

『アーツ♂』

・・・大量の青つなぎが穴の

中にいた。

俺は無言で電の腕を引き外に出る。

「し、司令官さん?なに見たのです・・・?」

「・・・思い出したくない・・・」

「何があつたのです?」

そして外に出ると同時に・・・

「鎮守府!近接航空支援要請!ポイントA—G—0—9—2!廃病

院、J D A Mで吹っ飛ばせ!!」

〈へし、司令官!〉

「いいからでっかいの落して吹っ飛ばせ!!」

〈へりよ、了解!待機中のストライクイーグルが向かう!〉

「司令官さん?!何する気なのです?!」

「この悪魔の館を吹っ飛ばしてやる！」

「あの・・・司令官・・・なにが出たんですか・・・？」

「・・・ホモが出た」

「oh・・・」

その20秒後、病院は跡形もなく吹き飛んだ。

（翌朝）

「・・・昨日はひどい目にあつた・・・」

「・・・司令官さん・・・もう肝試しはやめようなのです・・・」

「俺も懲りた」

「そういえばさつきから何の書類を作っているのです？」

「ん？ああ、これか。エメリア軍から依頼が来てな」

「依頼？」

「グレースメリア奪還戦だとき、そこでその前哨戦のB7R攻略の用意だよ。これは米軍と共同でやる任務だ」

昨日の夜にエメリア軍からの依頼が日本軍に届いていたらしい。

現在のエメリア軍に深海棲艦と戦える戦力は少なく、ましてや艦娘というものが存在しないエメリアにとっては藁にも縋る思いだったのだろう。

「それで、今回は横須賀鎮守府がエメリア派遣になるらしい」

「外国ですか・・・」

「成功したら一ヶ月は向こうに滞在らしいよ」

「なるほどなのです・・・」

「それでその前哨戦としてエメリアに行くためのルート上に存在するこのエリアB7Rの制海権を確保、その後米軍と日本海軍の補給艦から補給と修理を受けてグレースメリアに進攻って感じだな」

作戦としては今言った通りだ。

米軍はB7Rの制海権を確保までがこちらとの合同任務となつて
いる。
その後はエメリア軍と合流しグレースメリアに向かう。

「よし、とりあえず案もまとまったし、会議室に行こうか」
「了解なのです！」

一足先に会議室に向かい、機材を準備していると続々と集まってくる。

「よし！みんないるな？作戦説明だ！」

今回のB7R制海戦、内容は細かいことはあまりない。

なぜならそこは敵味方が乱戦する場所であり、敵と味方を間違えるな。というのが注意事項なだけだ。

その海域は電波状況も悪く、混線したりして指揮系統がうまく機能しない。

だから作戦案を練ってもあまり意味をなさないのだ。

「とりあえず交戦規定はただ一つ、生き残れ。いいな？」

昔からB7Rに伝わる交戦規定だった。

「それと今回は夜戦になる。そういうわけで川内、好きなだけ暴れてこいー」

「ひゃつはあああああ!!!夜戦だああああ!!!汚物は消毒だあああああ!!!」

「・・・世紀末になってんぞ・・・」

とりあえず今回は夜戦メインなので水雷戦隊が主戦力となる。

現代艦は主に後方支援となる。

しかしもし相手にミサイル駆逐艦などがいた場合に備えて、いそかぜとマイケル・マーフィを艦隊に入れる。

編成は いそかぜ、マイケル・マーフィ、川内、夕立、第六駆逐隊の8隻だ。

残りの艦は後方から交代要員や支援要員として待機する。

戦艦隊はグレースメリアに備えて後方待機となる。

「この作戦で行く。質問は？」

手は上がらない。

「よし、1300から作戦開始だ、解散！」

会議室から皆が出ていく。

「電、準備は大丈夫か？」

「はい！久々の夜戦なのです・・・」

「そうだな、まあ・・・その・・・川内みたいになるなよ・・・」

「いや、どう転んだら私がそうなるように見えるのです!？」

「いやまあ・・・大丈夫か」

「大丈夫なのです!」

「電、装備換装とかは大丈夫か？砲は76mmしかないが・・・」

「いえ、案外使いやすいのであれで大丈夫なのです!」

「ならよかったよ、もし換装したかったら早めにな」

「了解なのです!」

電も準備のため部屋を出ていく。

俺も念の為航空支援の準備するか・・・

そういえば昨日の病院爆破・・・なぜかニュースになっていないと
いうこの・・・

俺・・・圧力かけた記憶ないんだけどなあ・・・

円卓の鬼神

くいそかせく

鎮守府を出てはや6時間、もうあたりは暗くなってきた。

〈そろそろ作戦海域か・・・内容を再確認するぞ〉

「了解」

〈今回は米海軍との合同作戦だ。制海権は現在深海棲艦にある。俺たちは米海軍との連合軍として参加する。まあ、必要事項はこんなもんか？あとは、生き残れ、それが唯一の交戦規定だ〉

「ずいぶんとさっぱりした交戦規定ですね・・・」

〈昔っからの伝統なんだ、仕方ない〉

「了解、そろそろ作戦海域ですね・・・総員、戦闘用意！」

「了解っばい！」

いつの間にか改二？というものになった夕立さんは目を赤く光らせていた。

普通に怖いです。

「向こうが赤く・・・戦闘海域に突入します！」

闇夜が赤く照らされている。

燃え上がる艦船の炎のせいだろう。

無線を合わせると・・・

〈左舷魚雷!!〉

〈連合軍統合本部より入電、連合軍海上・航空戦力はすでにその40

%を損失!〉

〈ぐそつ!数が多すぎる!手におえん!!〉

〈増援はまだか?!〉

無線からは味方の助けを求める声や砲声が響いてくる。

「みなさん、これより戦闘海域・・・」

「よし!花火の中に突っ込むっばい!!」

「あ、ちよっ!!」

夕立さんが最大船速で突っ込んでいく。

「あらら、行っちゃったわよ?」

「私たちも続きます！第六のみなさん、夜戦はお任せします！」
「なのです！」

「y p a a a a a a a a a a !!」

そんな声といっしょに……

「ひゃっはああああ!!私の時間だああああ!!この海を私色に染め上げるよー!!」

と、奇声を上げ突っ込んでいく川内さんの姿があった。

「みんな元気ね……」

「マイケルさんも行きましょう、攻撃開始です！」

「了解、さて……どれから狙おうかしら……」

「第一目標……チツ……敵味方が入り乱れすぎて……」

レーダーには100以上の光点がある。

狙おうにもどれが敵でどれが味方が今一わからない。

IFFで判別はできるものの、砲撃が行おうにも味方に当たる確率が高すぎる。

〈識別信号受信……！艦娘隊だ!!〉

〈来た……来たぞ！天使のお出ましだ!〉

味方の士気は上がっているようだ。

ここから見える限り……敵艦は30以上……味方艦は20を下回っている。

〈こちら対潜哨戒機ブルーハウンド！現在、敵潜水艦の情報なし!〉

〈こちら空中管制機ヘビークラウド、了解〉

〈ベインブリッジより艦娘隊！敵戦艦を片付けてくれ!〉

「こちら いそかぜ、敵艦の位置情報願います」

〈はいそかぜ、こちらヘビークラウド〉

「こちら いそかぜ」

〈そちらより6 km、ベインブリッジの真横4 kmの位置に敵戦艦だ〉
「了解しました！トマホーク発射します！」

VLSを解放する。

発射弾数は……3発!!

「トマホーク、攻撃はじめ!!」

轟音を上げ、艦装からミサイルが放たれる。

〈〈ソロモンの悪夢・・・見せてあげる!〉〉

〈〈電の本気を見るのです!〉〉

皆次々と敵艦を沈めていく。

その中でも夕立さんの戦果が著しい。

すでに3隻沈めている。

しかも3隻とも戦艦だ。

主力を失いつつある敵艦隊は劣勢になってゆく。

〈〈あの駆逐艦娘なんてヤツだ・・・アイツが戦況をひっくり返してやる〉〉

〈〈悪魔だ・・・〉〉

〈〈そんな生易しいものじゃない〉〉

たしかに・・・悪魔なんてものじゃない。

あれは・・・

〈〈ああいうのはな、鬼神って言うんだよ〉〉

〈〈鬼神・・・〉〉

そう、鬼神だ。

目を赤く光らせ敵艦を容赦なく葬っていく。

その戦いっぷりに私は見入ってしまった。

「すごい・・・」

同時に恐ろしくも感じた。

〈〈こちらハルゼー! 敵艦撃沈!〉〉

〈〈こちらUSSアンツィオ! 前方をふさぐ艦、離れてくれ!〉〉

〈〈ぐっ・・・! こちらソーサラー1! 被弾したベイルアウトする!〉〉

〈〈隊長!〉〉

〈〈こちらAWACSヘビークラウド、敵脅威レベル低下。あと少しだ、叩き潰せ〉〉

「敵艦・・・あと15隻!」

〈〈あと何隻?!〉〉

「あと15・・・いえ13隻です!」

〈〈了解!!〉〉

〈もういつちよ撃沈っぽーい！これで6隻目っぽい!!〉

「鬼だ・・・」

確認できた戦果だけでも戦艦を3隻以上沈めている・・・

〈あの犬耳少女・・・鬼だ・・・〉

〈円卓の鬼神・・・〉

夕立さんに新たな通り名がつけられそうになっていた。

「主砲、撃ちー方ー始めー!!」

私も負けじと主砲を撃つ。

目標は敵駆逐艦だ。

「命中・・・撃沈!」

〈こちらAWACS、当海域に近づく艦影を補足、動きが妙だ。警戒

せよ〉

「増援・・・」

そんな事を呟いていると混線で相手側の声が聞こえてくる。

〈目標を射程範囲内に補足〉

〈雷巡チ級より各艦、槍を放て〉

槍・・・魚雷?!

でも距離はだいぶある。

当たるのか・・・?

〈こちらブルーハウンド!魚雷音・・・高速接近!複数、複数だ!避ける!!〉

「ブルーハウンド!魚雷は何本ですか?!

〈最低でも20!早いぞ!100ノット近く出ている!〉

「100!?キャビテーション魚雷か・・・!!」

周囲に細かい泡を発生させ抵抗を減らし、航空機並の速度で水中を進める魚雷・・・

スーパーキャビテーション魚雷・・・かつてユーク軍が開発していた魚雷だ。

なぜ深海棲艦が・・・

〈魚雷・・・どこなのです!〉

〈雷跡が見えないっぽい!!それに早いよ!!〉

〈ぬあああああ!!!こちらシャイロー!!被弾した!!船殻に亀裂!浸水発生!!〉

〈無理だ!避けきれない!!〉

〈弱音を吐くな!取り舵いっばい!!〉

〈バカツ．．．!僚艦にぶつか．．．うわっ!!〉

〈メーデー!メーデー!!こちらUSSレイクエリー!僚艦と衝突!!

機関部に浸水!!航行不能!航行不能!!〉

友軍と衝突する艦も出てくる。

すると．．．

〈あ．．．!!電、避けて!!〉

〈え．．．?〉

無線だけで状況がわからない。

だが．．．電さんに魚雷が迫っているのはすぐわかる。

「避け．．．!」

〈面舵いっばい!!〉

レーダー上で電さんと一隻の米軍艦が重なる。

〈くっ．．．!!〉

〈あ．．．あ．．．〉

〈こちらUSSサン普森。嬢ちゃん、無事か?〉

〈あ．．．え．．．ぶ、無事．．．なのです．．．〉

状況はきつと被弾しそうになった電を米軍艦が庇ったのだろう。

〈無事か．．．よかった。こっちはスクリュ―軸をやられた．．．航行不能だ、総員退艦する!〉

〈わ、私のせいで．．．〉

〈この艦は最期に女の子を護れたんだ。本望だろうさ、救助頼むぜ天

使ちゃん〉

〈りよ、了解なのです!〉

〈みなさん!無事ですか?!〉

〈なんとか．．．〉

〈無事っばい!〉

良かった．．．

あとは敵艦に向けて攻撃を行わないと・・・

「マイケルさん！トマホーク撃てますか？」

〈撃てるわ、敵艦隊ね？〉

「はい！攻撃開始してください！」

〈了解、攻撃はじめ！〉

「撃ち方ー始めー!!」

その攻撃を行ったすぐあとだった。

もう一度混線で敵の情報が聞き取れた。

〈全艦、もう一度だ、放て!!〉

〈敵高速魚雷発射!〉

〈こちらへビークラウド、敵増援機確認・・・速い!〉

「敵機まで・・・チツ・・・!!」

混線で敵航空隊の無線も聞こえてきた。

〈・・・ロト1より各機、野犬狩りだ、艦娘を沈めるぞ〉

〈了解っ!〉

あの艦載機しやべれるんですか!?という突っ込みが発生したが気にしない。

とりあえず・・・アポトーシスで迎撃してみよう。

「司令官！アポトーシスでの敵機迎撃を進言します！」

〈了解、ちよつとまって〉

私はいつでも撃てるように敵機の通過予想地点をロックオンしておく。

〈許可する！味方に当てるなよ!〉

「了解！」

次の瞬間、真っ赤に塗装されたミサイルが発射される。

炸裂位置はぎりぎり味方に届かない程度だ。

〈こちらへビークラウド、友軍艦艇さらに沈没。戦力50%〉

〈敵は!?敵の戦力は!〉

〈敵戦力・・・30%以下に減少、あとひと踏ん張りだ〉

〈了解・・・了解!!〉

戦力が削られていく。

いつまで持つか・・・

しかしその間にも夕立さんはさらに敵艦船を撃破、もう10隻以上撃沈している。

通り名は完全に円卓の鬼神で決定らしい。

「敵艦船・・・あと4隻!」

〈敵脅威レベルさらに低下。敵は撤退を開始、B7Rの制海権を確保した〉

〈やった!やったぞ!!〉

〈ぎまみろ!!深海に引きこもってやがれ!!〉

〈へびークラウドより艦娘隊、補給艦が3時間後に当海域に到着する、補給が完了後、エメリア軍ミサイル駆逐艦マリーゴールドと合流しグレースメリアに迎え。また、この後エメリア軍の空中管制機ゴーストアイが貴艦隊の指揮をとる〉

「こちら いそかぜ、了解しました。お疲れ様でした」

補給艦が来るまで待機か・・・

「いそかぜさん!お疲れっぽい!」

「はい、お疲れ様・・・って何持ってるんですか?!」

「ぽい?」

夕立さんは撃沈した敵艦のツノ?のような物を握りしめていた。

「なんでそんなもの持ってるんですか?!これ戦艦のじゃないんですか!?!」

「殴ったら取れたっぽい!」

「戦艦殴り倒したんですか!?!」

「うん、弾装填中だったから右ストレート入れたら沈んだっぽい!」

「どんな威力なんですか・・・」

「試すっぽい?」

「やめてください死んでしまいます」

さすが円卓の鬼神・・・とか思っていた。

てか円卓の鬼神って・・・司令官の昔の通り名ですよ。

二代目ですか・・・

そんな会話をしていると・・・

〈なあ、艦娘の嬢ちゃん〉

「?なんですか?」

〈このあとよ、俺たちの船でパーっとどうよ!〉

「・・・下心が声色から漏れ出てますよ、USSゴンザレスのクルーさん」

〈あ、テメツ!!何作戦中にナンパしてんだ!〉

〈げっ・・・砲雷長・・・〉

〈お前、便所掃除2週間な。ちなみに第三ブロックの〉

〈ちよっ!!あそこ臭くて有名な場所じゃないですか!!しかもなんか出るってみんないうし!〉

〈ちようどいいじゃないか、便所はキレイになるし幽霊は見える。最高だな〉

〈地獄だ・・・〉

そしてプツリと無線が切れた。

「あ、あはは・・・向こうも大変ですね・・・」

「まあ、仕事中にナンパしたし、自業自得じゃない?」

私はUSSゴンザレスの名も知らないクルーに心の中で合掌しおしやべりしながら補給艦を待っていた。

グレースメリア奪還

B7Rの制海権確保・・・よし！

「電、調子はどうか？」

〈良好なのです！これからグレースメリアに突入するのです！〉

「了解！全力で叩き潰してやれ！」

〈電の本気を見せてやるのです！〉

無線が切られる。

グレースメリアにはもうエメリア軍が攻撃を開始している。

「作戦は成功する・・・戦況は常に俺たちの味方だ」

自分に言い聞かせるように呟いた。

「いそかせ」

〈フオックス2！フオックス2！〉

〈ピング！〉

〈敵電子戦機撃墜！グレースメリアの制空権を確保！〉

〈ステイルガンナーズ、滑走路に接近〉

〈正面から堂々の凱旋だあ！邪魔するヤツは容赦しないぞ！！〉

無線から士気マックスの味方の声が聞こえてくる。

今はグレースメリア空軍基地を奪還に向かう戦車隊の援護のために射程圏内に近づいている。

「みなさん！これより湾内に進入、艦砲射撃を行います！」

「了解なのです！」

「まず何から撃とうかしら？」

〈こちらゴーストアイ、敵艦隊は湾内に展開。駆逐艦が主な水雷戦隊だ〉

「了解しました！」

水雷戦隊・・・キャビテーション魚雷を持っていない事を祈ろう。

「電さん、水雷戦隊を任せてもいいですか？」

「はい！」

「私は戦艦を狙います！」

「分かったのです！」

目標敵戦艦・・・トマホーク発射用意！

「トマホーク発射・・・はじめ！」

「私はどうしようかしら」

「私と敵戦艦・・・いえ、敵空母をお願いします！」

「了解！」

分散して攻撃を開始する。

湾内には敵艦隊が最低でも10隻以上・・・でも私はイービスだ、やれます！

〈ステイルガンナーズ、滑走路にさらに接近・・・行けるぞ！〉

〈こちら赤城！艦載機を上げます、近接航空支援はお任せください！〉

赤城さんたちの第二艦隊が到着したようだ。

続々と艦娘が到着している。

今はもう敵艦より数が上回っている。

「油断は禁物・・・ですね」

私は注意深くレーダーで索敵する。

その時無線が混線・・・いや・・・混線じゃない・・・

〈われらの偉大なる提督は・・・〉

これは・・・プロパガンダ放送？

深海棲艦にもこんなことするヤツが・・・

だがその瞬間陽気な音楽が流れる。

今度は何だ？

〈電波ジャックなら俺たちに任せろ！本日も最高のビートをお届けするぜい！俺は自由エメリア放送のDJゼッド！〉

陽気なDJが無線をジャックしたようだ。

戦場で電波ジャックした挙句ラジオ放送って・・・どんだけ肝座つてるんですか・・・

〈敵対空砲撃破、イエロージャケット、行け！〉

〈了解！ラジオ局を奪い返す！〉

ラジオ局奪還も始まったようだ。

〈こちらドラゴンバスターズ、議事堂を奪還する！〉

〈ドラゴンバスターズ、新たな敵増援・・・ビルの間から敵が湧いてきている〉

〈敵って・・・あれは女の子じゃ・・・〉

「それは深海棲艦です!!容赦しないでください!」

艦装を外した深海棲艦は厄介だ。

見た目は華奢な少女なので油断したり攻撃を戸惑ってしまう。

そのせいで返り討ちに会うことが少くないのだ。

〈くそっ・・・撃て!!〉

〈こちらステイルガンナーズ!滑走路に到達!残りを片付ける!〉

〈ステイルガンナーズ、こちらゴーストアイ。残敵は撤退開始、追撃する必要はない〉

〈了解!グレースメリア空軍基地を奪還したぞ!俺たちの滑走路だ!〉

さっそく空軍基地を奪還したようだ。

私は湾内の敵撃破に集中する。

「こちらいそかぜ、援護を必要としている部隊はありますか?あったら応答してください!」

〈こちらアバランチ!敵機が少なくなったが・・・対処しきれぬ量じゃない、落してくれ!〉

「了解しました!」

イービスシステムを駆使し敵機を補足する。

「撃ち方ー始め!」

〈こちらイエロージャケット!ラジオ局に突入部隊を降下させる!〉

〈くそっ・・・この建物はもう持たない!勇士よ、最期まで勝利を信じ、深海に命をささげよ〉

〈逃げるんなら俺のスタジオのレンタル料置いていきなあ!〉
ラジオ局の奪還も時間の問題だろう。

あとは湾内と議事堂・・・
でも湾内はあと駆逐艦が数隻だ。

「撃沈！これで・・・！」

〈湾内の敵を殲滅、マリールード、艦娘は湾内に進入しろ〉

〈了解した、湾内への侵入を開始する。エメリアのエース・・・いや
エメリアのエースと小さな天使に感謝する〉

小さな天使か・・・ちよつとうれしいな

〈いくぞ・・・ペイバックタイムだ！〉

〈アルファ1突入！〉

〈ドラゴンバスターズ、議事堂に接近。情けは無用だ、敵を殲滅しろ
！〉

怒涛の快進撃・・・少し順調に進みすぎて不安になった。

でも、順調に進む事が悪いことではない。

「作戦は順調に進行・・・あとちよつとですね」

〈上空の敵機は全滅っぽーい！〉

〈こちらゴーストアイ、了解〉

レーダーにも敵機影なし・・・

あの量をどうやって落したのか気になるけど聞いちやダメな気がする。
する。

「あとは・・・あの港！」

私のすぐ目の前にある港。

あれが最後だ。

〈こちらドラゴンバスターズ、議事堂を奪還した！自由の象徴を奪い
返したぞ！〉

〈よくやったドラゴンバスターズ。あとは港だけだ〉

〈こちらダガー！艦娘隊を援護する！〉

〈了解した。艦娘隊、これより作戦を終了した部隊の一部を艦娘隊の
援護に回す。必要に応じ支援要請を行え〉

「了解しました！さっそくですが、港付近に展開する砲を排除してく
ださい！」

〈ダガー了解！ミサイルを叩き込む！〉

〈こちらメビウス1！いそかせさん！私たちも行くよ！〉

「了解しました！これより港に突入します！みなさんは私と単縦陣に組みなおして突入します！」

〈了解！〉

皆が集まってくるのを待つ。

その間に港の砲台が次々とつぶされていく。

「これで全員ですね！これより突入します！」

「なのです！」

「y p a！」

「やるっぱーい！」

速力を上げ港に向かう。

港からは敵の最後の艦隊が出現した。

「敵艦隊！戦艦2、重巡4！」

「砲雷撃戦はじめー！」

「90度左旋回！T字に持ち込みます！」

「了解！」

左に急旋回して敵艦に横を向ける。

これで最大火力を発揮できる……と言いたいが私とマイケルさんは砲が一門のみ。

第六のみんなや川内さん、夕立さんが力を発揮できる。

「てーっ!!」

「y p a！」

魚雷や砲を斉射する。

私たちも対艦ミサイルを発射する……が私はトマホークがもう弾切れだ。

砲と短魚雷で応戦する。

「撃ちー方ー始め!!」

敵艦隊も負けじと砲撃を始める。

「敵弾来る！」

「回避してください！」

何十発という砲弾が飛び交う。

「きゃっ！」

「暁お姉ちゃん！大丈夫なのです?！」

「小破・・・この程度大丈夫よ！」

被弾する艦を出てくる・・・だけど・・・損害軽微！

「敵戦艦撃沈！」

「あとは重巡だけです！」

「雷撃で仕留めるよ」

「了解なのです！」

あとは損傷を受けた重巡洋艦のみ・・・やれます！

「てーっ！」

一斉に酸素魚雷を発射する。

魚雷に気づいた敵艦は回避しようとするがもう手遅れだ。

「遅い！」

次の瞬間、敵艦を大きな水柱が覆う。

撃沈だ。

「撃沈確認！港の敵勢力を撃破!!」

〈〈こちらゴーストアイ、グレースメリアに展開する敵性勢力を殲

滅・・・首都を取り返したぞ!〉〉

〈〈ついにやった・・・俺たちの街だ〉〉

〈〈やった!やったぞ!〉〉

「ふう・・・終わりました」

「疲れたのです・・・」

「もうすぐ間宮さんが来てくれるそうですよ」

「間宮さん!?アイス!アイス!!」

私も疲れた・・・アイスが食べたいです。

そんな勝利に浸っていた。

〈〈ん・・・?レーダーにアンノウン・・・〉〉

「え?」

私もレーダーを確認する。

確かにアンノウンが表示されていた。

〈〈地上部隊、アンノウンを確認できるか?〉〉

〈待つてくれ．．．えーと．．．〉――

〈おいどうした！応答しろ！〉

爆発音が一瞬間こえ、無線が途切れる。

〈データ照合．．．エストバキア機の増援を確認！〉

〈エストバキア!?クソ！アイツらまだ諦めてないか!!〉

〈全機、エストバキア機を迎撃しろ！〉

〈こちらアバランチ！弾切れだ！燃料も少ない!〉

〈こちらダガー！私もだ!〉

〈ほかの航空部隊も弾薬不足．．．〉

どういことだ．．．?

私は混乱していた。

深海棲艦ではない敵がここに．．．?

〈クソ．．．今武器が撃てるのは湾内に展開する艦娘隊だけだ!〉

「え．．．?」

その時混線で敵の声が聞こえた。

〈全機に次ぐ、グレ―スメリアを再び我らの手に〉

〈了解〉

敵は間違いなく人間だ。

〈艦娘隊！聞こえるか?!ただちに迎撃しろ!〉

〈対空戦闘!!〉

〈おい！弾薬はまだか?!はや――

〈3―1応答しろ！チクショウ!〉

味方の損害が拡大している。

でも．．．相手は人．．．

私たちが船だったときトリガーを引くのは人だった。

でも．．．今は私自身だ。

．．．人を．．．殺せるのか．．．。

〈艦娘隊！これは命令だ！迎撃しろ!〉

私は震える手で砲を上空に向ける。

他のみんなも一緒だ。

砲を向けているのは私とマイケルさんのみだが．．．

全員震えている。

「はあ．．．はあ．．．」

撃てない。

今の私に人は殺せない。

〈艦娘隊！聞こえないのか！！撃て！！〉

〈くそ！さらにエストバキア機の増援確認！〉

レーダーにさらに光点が増える。

数は10以上．．．

「はあ、はあ．．．！」

息が荒くなる。

今、砲を向けているのは深海棲艦じゃない。

人間なんだ。

その感情を捨てたいが捨てれない。

捨てたら何かが終わってしまいそうだ。

「撃てない．．．撃てない．．．！」

私はたぶん情けない声を出しているだろう。

その時混線．．．いや明らかにこちらの無線周波数である増援機か

ら無線が入る。

〈シユトリゴン12、進路2―5―0。機器の感度も良好だ。始めよう〉

〈．．．ジエントルマンがこんなに集まるとは．．．壮観だな〉

〈全機いいか。グレースメリアに展開する敵性勢力を排除する〉

〈了解した、エメリア軍を、援護、する！！〉

首都解放

くいそかぜく

〈エメリア軍へ、こちら370航空連隊第009戦術飛行隊シュトリゴン隊だ〉

〈シュト・・・俺たちの回線に入ってくんなクソが!!〉

敵?増援から私たちに通信が入る。

「いそかぜさん・・・!どうするのです・・・!?!」

電さんが冷や汗を流しながら話しかけてくる。

〈我々は敵ではない、敵は最初に進入したあのエストバキア機だ〉

〈どうということだ〉

〈あれは・・・〉

シュトリゴン隊の話によると戦争に負けたあとエストバキア国内では好戦派と守戦派が対立していた。

国内には好戦派が大多数だったらしく再び侵攻してきたとのことだった。

〈せめてもの罪滅ぼしだ。これよりシュトリゴン隊はエメリア軍の指揮下に入る〉

〈こちらゴーストアイ。了解した〉

〈おいおい!!信じるのかよ!!〉

上の話が何一つ理解できない私たちは茫然としていた。

・・・その時だった。

「・・・ッ!?電さん!!敵機直上!!」

「えっ・・・?」

突然の轟音・・・真上を見上げるとエストバキア軍のF-18が急降下してきていた。

明らかに私たちが狙っている。

「くっ・・・!!」

私はとっさにVLSを開きスタンダードを発射する。

スタンダードは白い尾を引き敵機に真正面から直撃した。

直後に轟音と爆風・・・

「あ……ああ……」

突然に出来事に電さんは放心していた。

「はあ……はあ……大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫なのです」

「よかった……」

私は力なくその場に座り込んだ。

海水がスカートを濡らして冷たい。

「い、いそかぜさん？大丈夫なのです……？」

「少し……休憩させてください」

上空を見上げるとすでに空中戦が始まっていた。

その時私のすぐそばに何かが落ちてきた。

「？」

私はそれを拾い上げる。

それは……血の付いたヘルメットの一部だった。

さっきのパイロットのものだろうか……

急激に罪悪感が押し上げてくる。

私は仲間を護った。

だけど……人を……殺した。

「う、うあ……」

「いそかぜ？大丈夫？」

「うああああ……!!」

「……」

マイケルさんがやさしく私を抱きしめる。

「ねえ、泣いても仕方ない事じゃない？」

「でも……私は人の命を……私は命を護るために作られたのに……

殺すためなんかじゃないのに……!」

「でもね、私たちは一応、兵器、なのよ？」

「でも……!」

「でもじゃないの。それに今のは電やみんなの命を護ったじゃない。

あの機の翼に着いてた武器を見た？」

私は無言で首を振る。

敵機の兵装なんて見ていない。

ずつと見ていたらたぶん、トリガーを引けなかった。

「GBU12・・・誘導貫通爆弾が6発ついてたわ。あんなブツトイのが電に当たったら・・・どうなるかしら」

「・・・！」

考えるだけでもゾツつとする。

「それに、相手には明確な殺意があった。というか私たちの姿を確認して急降下ってなかなか殺意に充ち溢れすぎて殺意の波動を感じるわ」

「殺意の波動ってなんかかつこいいっぱい！」

「あんたは空気読みなさい！」

「あだっ!!」

マイケルさんに夕立さんがゲンコツさされていた。

でも確かにそうだ。遠目から見たら私たちはただの女の子だ。

それに誘導貫通爆弾を叩き込もうとするなんて、そこには明確な殺意がある。

〈へこちらシユトリゴンリーダー！艦娘・・・だったか？〉

「こちらミサイル駆逐艦マイケル・マーフィ。旗艦がちよつとアレだから私が代わりに交信します」

〈了解、上空の敵機には容赦しないでくれ。アイツらは守戦派の連中を兵士、市民、女子供問わず処刑してきたクソつたれだ。あと10分でエメリア機が補給を終えて離陸してくる。それまで俺たちの援護と電子支援頼めるか？〉

「了解したわ」

マイケルさんは通信を切り私たちのほうを向く。

「というこで、対空戦闘用意」

「た、対空戦闘!? あれは人間が乗った戦闘機なのです！」

「そうよ、何か問題でも？」

「も、問題って・・・人を殺すのですか!？」

「あれは敵。それに貴女だって第二次大戦を駆けた軍艦じゃないの?」

「今は違うのです!!」

電さんとマイケルさんが口論をしていた。

他の艦娘はみんな黙っていた。

きつと撃つべきか撃たないべきかを考えているのだろう。

「・・・私はやるよ」

「響!?!」

響さんが砲を上空に向け眩く

「もう姉や妹を失いたくないんだ。だから私は・・・撃つ」

「いそかぜ、貴女は?」

「・・・やります・・・!」

今撃たなければ誰も護れない。

上空の敵機は20以上、シユトリゴン隊は12機程度。

数で押されている。

それに艦娘の存在も気づかれただろう。

敵が来る可能性だって十分にある。

「わ、私は・・・」

雷さんは砲を握って震えていた。

その時だった。

「・・・!敵機接近!!雷さん!!」

「えっ!?!」

雷さんは驚いて振り向く。

そこには今まさに機銃掃射を行おうとするS u—25の姿があった。

30mm機関砲が今まさに牙を剥こうとしていた。

その時。

「危ないのです!!」

「きゃっ・・・!!」

電さんが雷さんを突き飛ばす。

直後にS u—25から機銃掃射が始まった。

「きゃああああ!!」

「い、電!!」

「い、いたたたた・・・怪我はないですか・・・？」
「な、ないけど・・・中破してるじゃない・・・！」
「雷お姉ちゃんを護れたから・・・満足なのです」
「ま、満足って・・・」

電さんは艀装の魚雷に直撃弾を受け、魚雷が誘爆していた。

しかし奇跡的に中破にとどまり轟沈には至らなかった。

雷さんは通り過ぎ、旋回して再び掃射コースに乗ろうとしてるSU
—25を睨みつける

「よくも・・・よくも電を・・・!!」

砲を素早くSU—25に向ける。

「うわあああああああ!!!」

少しずらして12.7cm砲弾を二発発射する。

すると一発は外れたが2発目がエアインテークに吸い込まれ機体
中央部付近で爆発した。

直後に機体のはじかれるように横に吹き飛んだ。

「はあ・・・はあ・・・」

しかし上空にパラシュートを確認した。

「パラシュート・・・あ・・・！ベイルアウト!!」

私は一つ思いついた。

人を殺さずに敵を叩き落とす方法。

なぜ思いつかなかったのだろうか。

「みなさん!!聞いてください!!」

「何かしら」

「敵機の翼か胴体を狙ってください!でも機銃のみで・・・!」

「どうするつもり?そんな場所を狙い撃ってついうの?」

「ベイルアウト・・・させれなくても敵機を撤退させれます!そうすれ
ば・・・誰も死なない!!」

「なるほど・・・でも・・・コクピットに当たっちゃうかもよ」

「・・・私はみなさんを信じます!」

「旗艦らしいことかは分からないけど、いいこと言うわね。乗ったわ」

「私もやるっばい!狙撃なんてしたことないけど・・・」

「私もやるわ！夜戦ならもつと当てれたけどね！」

夜戦だと危ないですよ・・・という突っ込みは置いて・・・

「レディーなら狙撃くらいできるのよ！きつと映画化よ！」

いろいろ突っ込みどころが多いが気にしない・・・

「よし・・・やります!!まずは敵の注意をひきつけます！主砲弾を時限信管で上空を撃ってください！」

「分かったのです！」

駆逐艦たちから砲撃が開始される。

今湾内にいるのは私たちだけ・・・マリーゴールドやほかの艦はみんな湾内から出て交戦している。

「撃てー！」

対空砲火に気づいた敵機がこちらに向かってくる。

「来ました！機種・・・A-6とSu-34!!Su-34のほうが厄介です！先にアイツを狙ってください！あの青い機体です！」

「了解！」

一発一発慎重に機銃弾が放たれる。

そして・・・

「命中・・・！敵機がバランスを・・・バイルアウト・・・パラシュート確認！雷さん！」

「任せて！助けるわ！」

「あ、私も行くのです!!」

撃墜したパイロットの救助に二人が向かった。

「さて・・・救助はあの二人に任せましょ」

「はい！」

その約6分後、続々とエメリア機が空に上がってきた。

戦闘は増援の到着とエストバキア機の撤退で終わった。

シュトリゴン隊はその追撃とばかりにその後ろを追っていた。

どんな人たちだったんだろう・・・

「ふう・・・終わったわね・・・」

「はい・・・」

帰ったらどこか空がよく見える場所にこのヘルメットを埋めてあ

げよう・・・

私は撃墜したパイロットの遺品を大事にしまった。

グレースメリアの港に入港する。

と言っても私たちはそのまま陸に上がったが。

電さんと雷さんは撃墜したパイロットを背負って病院に担ぎこんでいた。

もう夕暮れだ。

早くお風呂に入りたい・・・

そんな事を思っていると・・・

「いーそーかーぜええええええ!!」

「ん?うらかz・・・きやああああ!!」

「えへへ・・・やつと会えた〜」

「やつとつて・・・2日ぶりくらいですよ」

「私にとつては3年くらいです!」

「いやドヤ顔で言われても・・・」

「それよりも・・・お風呂いこっ♪」

「え、どこのですか?」

「ほらあそこ!」

うらかぜは高級ホテルを指さす。

あそこは艦娘に与えられた宿泊地だ。

「お部屋はとつてあるんですか?」

「うん!私たち第3艦隊はさきについてたからね!」

「そうですか・・・じゃ、行きましようか」

「おうよ!あ、夜は・・・寝かさないからね♪」

「え、あ、あの・・・私、今夜はきついんですけど・・・」

「大丈夫♪気絶したら寝れるよ♪」

「待って、お願いです待って」

「気絶させないようにするけどね♪」

「やめてください死んでしまいます」

嗚呼・・・私死ぬんだろうか・・・

（電）

グレースメリアの埠頭に腰かけて空を見上げていた。
時刻は夜。

首都解放を祝って花火が打ち上げられていた。

「キレイなのです・・・」

私はボソつと呟く。

司令官さん・・・早く到着してほしいのです・・・

「お前のほうがキレイだよ・・・なんちって」

「え？」

「よ、2日ぶり」

「し、司令官さんー！」

私は思わず抱き付いた。

久々の司令官さんだ。

「おっと・・・可愛いなホント」

「えへへ・・・」

「さてと・・・よっかいしよ」

司令官さんは私と一緒に座る。

波の音と花火の音がとても心地よい。

「たーまやー」

「日本の花火とはまた違ってキレイですね・・・」

「そうだなあ・・・」

「ここがかき氷でもあったら最高なのです」

「エメリアは今冬だぞ？」

「ふふ、知ってるのです」

「日本に帰ったらかき氷食べような」

「はい♪」

「さて・・・いつまでもここにいたら風邪引くし、宿泊先にでも行くか」
司令官さんは私の手を握り歩き出す。

この手を握るには2日ぶりだけど・・・私には1年より長く感じた。
その分・・・幸せだけだ。

「ホテルに帰ったら高級ディナーが待ってるぞ〜」

「おお！楽しみなのです！」

「コース料理だつて聞いたな・・・楽しみだな」

「はい！」

そういえば・・・港に帰ってから雷お姉ちゃんの姿が全然見えない。

「司令官さん、雷お姉ちゃんはどこ行ったか知ってるのです？」

「ん？ああ、あいつなら被災者の救護に回ってたらしいぞ。なんか
まあ・・・すごい活躍だったらしい」

「あ、そういえば私たちが助けたパイロットさん・・・」

「ああ、エストバキア機の？あいつ等なら病院だよ。まあ・・・その・・・」

司令官さんはすごく言いづらそうになる。

「どうしたのです？」

「そのだな・・・電と雷に会いたくて仕方ないらしい・・・ちなみにも
う4回くらい病院を脱走してる」

「え・・・」

「お前ら好かれてるなあ・・・」

司令官さんはすごく苦笑いだった。

「まあ・・・電は渡さんがな！」

「えへへ・・・」

そんな話をしているとホテルに到着した。

「さて・・・んじゃチェックインしようかね」

「お部屋は何階ですかね」

「見晴らしがいいと良いな」

司令官さんがカギをカウンターから受け取っていた。

「えつと・・・25階・・・スイートルームウウウ!？」

「すいーとるーむ・・・？」

私には聞きなれない言葉だった。

「どんだけいい待遇になってんだ・・・」

「スイートルームって何なのですか？」

「ん〜・・・まあ・・・めっちゃめっちゃ高級な部屋だよ」

「すごいのです・・・!」

そんなところ初めてなのです!

部屋に入るとまずは荷物を置いた。

と言っても私たちの荷物は先に届いていてほとんど司令官さんの物だった。

「すごい景色なのです・・・」

まだ復興が進んでないとはいえ、ライトアップされたお城や艦船がキレイだった。

「なあ電、あのお城明日行ってみるか?」

「え、いいのです?」

「ああ、休暇が貰えてるからな。それに明日グレースメリアに鎮守府を作るしな」

「それお手伝いしなくていいのです?」

「ああ、妖精さんが全部やってくれるよ」

「じゃあ明日はデートなのです!」

「そうだな!それにしても今日はお疲れ様」

「ふにゅ・・・」

司令官さんが頭を撫でてくれる。

「えへへ・・・」

そのまま後ろに倒れるように司令官さんにもたれかかる。

おっきな体・・・それがすごく安心した。

「そうだ、風呂入らないとな」

「そうですね・・・あ、司令官さん!」

「ん?なんだ?」

「お背中流すのです!」

「え」

司令官さんが少し硬直した。

「え、い、いや待て待て!一人で大丈夫だ!」

「え〜・・・でも前混浴したじゃないですか・・・」

「あれは風呂ひろかつしな!」

「狭いと抱き付いてお風呂入るから安心するのです！」

「いや待て安心できん！主に息子が！」

「？私、子供は出来てないのです……」
ちよつと恥ずかしくなる。

で、でも司令官さんの子供なら……／＼／

「とりあえず行くのです！」

「ま、待ってって!!はあ……もうなるようになれ……」

「れっつお風呂ー！なのです！」

「おー……」

「なんで元気ないのです！」

「いや……元気だよ……一部が……」

「？」

変な司令官さん。

く提督く

マズイ。結構マズイ。

何がマズイってさすがにこんなところで行為に及ぶわけにはいかん。

「お背中ゴシゴシなのです〜♪」

で風呂に入っちゃってんだよなああああ!!!

やばい！マジでヤバイ！

「司令官さん、私の背中も流してほしいのです！」

「お、おう」

ええい、もうなるようになれ!!

「んっ……くすぐったいのです……」

電が顔を少し赤くしながら振り向く。

これなんてエロゲですかね。

いやもうゲーム化してください。私買いに行きます。

「あっ……!」

「ど、どした？」

「い、いえ……その……くすぐったかったただけなのです……」

「そ、そか」

司令官さんの主砲が仰角最大ですけどどうしましょうコレ。
どう納めましょうコレ。

あくそうだく切り捨てればいいんだく（乱心

「司令官さん、前も・・・流すのです?」

「ま、前?!」

「えへへ・・・もう司令官さんには何回も見られちゃってるので・・・」
「い、いや・・・そのだな・・・」

完全にエロゲだなコレ。

「前もお願いするのです・・・」

顔を赤く染め電がこつちを向いた。

何回も見たとはいったが・・・まだこれ3回目ですからね!
いや3回も・・・だけど・・・

今、頭の中で欲望と理性がドンパチしてるけど負けそう。

理性が負けそう。

「ん・・・あッ・・・」

「ど、どした?」

「・・・司令官さんのエッチ・・・なのです」

ご褒美ですハイ。

欲望が圧している!占有率70%!

「あの・・・司令官さん・・・」

「な、何だ?」

「変な気分になつちやったのです・・・」

「へ、変な?」

「・・・えへへ」

はい負けましたー。

理性が負けましたー。

「い、電・・・」

「きゃっ!」

さすがに風呂場で押し倒したのまずかったかな・・・
ま、いいか。

「お、お風呂場じゃ・・・」

「もう無理だ・・・理性が負けた・・・」

「ふふっ・・・実は私もなのです・・・結構前から負けてたのです」

「電・・・」

「んっ・・・」

電とキスをする。

「ぶはっ・・・えへへ、ここだとすぐ体洗えるので案外いいかも知れないのです」

「そ、そうだな・・・」

く朝く

「ぶえつくしよい!!」

現在朝の6時。

さすがに風呂あがった後もはキツかった・・・

湯冷めした・・・

よく考えたらエメリアは冬だもんなあ・・・

「電が風邪引いてなければいいけど・・・」

幸せそうな顔をして寝る電の額に手を当てる。

幸い熱はなさそうだ。

「ふう・・・よかった。俺も熱はないけど・・・うえつくしよい!!」

くしやみが・・・鼻風邪かな

「ん・・・くうく・・・」

「ホント・・・幸せそうな顔してるな」

電の頭を撫でながらももう布団に入る。

電の横に行くと・・・

「しれーかんさん・・・」

電が寝言をいいながら抱き付いてきた。
シャンプーのいい香りがする。

「だいすき……」

もうその言葉でお腹いっぱいです。

その時フロントから電話が鳴る。

「ん？もしもし」

〈朝早く失礼します……あの……お連れ様が……〉

「連れ？誰です？」

〈えっと……いそかぜ様……とうらかぜ様です〉

「はあ……どうされました？なんとなく予想つきますが……」

〈実は喘ぎ声がうるさいと苦情が……〉

「……」

〈えっと……お伝えしましたので、失礼します〉

「あ……どうも……すみません……」

電話が切られる。

……あのクレイジーサイコレズ共……

「はあ……」

深いため息が出る……

怒る気力もない。

「とりあえず……デートの準備でもするか……」

電の頭をもう一度撫でてやり準備を始めた。

そういえば電とは初めての海外だな。

楽しもう。

グレースメリアでデート

「……いかんさん！司令官さん！」

「んあ……」

「もう9時なのです！起きるのです！」

「ふああああ……あれ……もうそんな時間……？」

「そうなのです！デートに寝坊なんて、おこなのです！」

「す、すまん……」

俺としたことが二度寝していた……

とりあえず起きて顔を洗う。

「司令官さん、っ飯はどうするのです？」

「んく……ホテルの朝食でもいいが……今から出かけてどっかで食うのもいいかな？」

「私は出かけるに賛成なのです！」

「おっし、んじゃ出かけようか」

「なのです！」

電は鼻歌を歌いながら荷物をまとめている。

まとめるといっても女の子らしいバックにいろいろ詰めているだけだが。

俺も準備しとくかねえ。

「財布と……ケータイと……」

あと護身用に拳銃も……

「あれ、なんで拳銃持っていくのです？」

「ああ、まだ町が解放されたばかりだろ？警察の目が隅々まで届いてるとは言いにくいしな」

「なるほど……」

「まあ、撃つ事はないだろうけどな。一応だよ」

弾数的に少し不安だが、知り合いから納入した9mm拳銃を専用のホルスターにしまう。

予備弾倉は3つ。

「さて、出かけるか」

「なのです！えい！」

「おう!？」

「えへへ・・・恋人繋ぎ？なのです！」

電は満面の笑顔で腕をからめてくる。

可愛い。

ホテルを出て歩いていると声をかけられた。

見たところ海軍関係者のようだ。

「イーグルアイ大佐・・・かな？初めまして」

「えくつと・・・どちら様？」

「僕は今度からグレースメリア鎮守府に提督として配属になる、マールカス・ランパートだ。シャムロック・・・まあそう呼んでくれないかな」

「シャムロック？」

「ああ、僕が空軍時代だったときのTACネークさ。今は、この通り怪我で飛べなくなったんだけどね」

「へえ・・・俺と同じ空軍パイロットだったのか」

「僕はガル―ダっていう飛行隊の2番機だったんだ。一番機は・・・今もどこかで飛んでいるんだろうな」

シャムロックはそう言いながら空を見上げた。

まるで大切な物がそこにあるかのような目だった。

「タリズマン・・・」

「タリズマン？」

「隊長機の名前さ」

「隊長機か・・・俺も長らく隊長機を務めていたからなあ・・・ホント、飛行隊の仲間ってのは家族みたいだよな」

「まったくだ」

そう二人で笑いあった。

「あ、そういえば司令部から言われたんだけど、艦娘を4人ほどこっちに派遣させるんだって？」

「ああ、まだ誰を派遣するかは決めてないけどな」

誰を派遣するか・・・本当に悩む・・・

そんな事をしていると前方からフラフラの雷が帰ってきた。

今の今まで救助や応急治療をしていたのだろう。

「ふあああく……つ、疲れたく……」

「おっと……大丈夫か？」

「しれーかん……もつと私に頼っていいのよ……」

「今の状況で頼れるかッ!!」

「はわわわ!!大丈夫なのです!?!」

雷は俺に倒れ掛かってきた。

「はあ……お疲れ様」

「えへへ……いっぱい助けたんだからあ……」

「あく……シヤムロック、すまないがコイツを自室に運び込んでやれないか？」

「モニカ……」

「シヤムロック？」

「ん、ああ……すまない、わかったよ」

モニカとつぶやいていたけど……なんだ？

「シヤムロックさん、モニカって呟いてましたけど誰なのですか？」

「ああ……聞こえてたんだね。僕の娘だよ……その、雷って子によく似ててね……いや、本人かと思うくらい似てたよ」

「どんな子なのですか？」

「えっと……写真が……」

シヤムロックは一枚の写真を取り出す。

「これがモニカだ」

「確かにそっくりなのです……」

ただ、似てはいるが雷のように元気ハツラツ！みたいな感じではなく、おっとりした感じだ。

「今娘さんは？」

「……死んだよ」

「し……」

「エメリア・エストバキア戦争でね……僕は国を守り……家族を失った……エースパイロットが、身内すら守れないなんて……」

「・・・ごめんなさい、なのです」

「いや、いいんだ。君たちに非はないよ」

「でも・・・」

「いいんだ。なんだが・・・こうやってそっくりな子と会えてちよつと嬉しかったんだ」

「そうなのですか・・・」

俺は何も言えずにいた。

俺も過去に空爆で家族を失った。

相手は・・・友軍の戦闘機だった。

家族が隠れていた建物の近くに敵の対空車両がいた。

それに誘導爆弾が直撃、爆発で建物が崩壊した。

思い出したくない過去だ。

俺もその上空を飛んでいたんだから。

「大佐、すまない時間を取らせてしまって」

「ああ、いやいいんだ」

「じゃあまた。あと・・・雷ちゃんを送り届けておくよ」

「ああ、願います」

シヤムロックと別れ、町に向かう。

「さて・・・朝飯をどうすつかな」

「んく・・・あ！あのカフェとかどうなのですか？」

「お、いいな。行こうか！」

「なのです♪」

カフェに入り、軽い食事とコーヒーを注文し席に着く。

俺たちはテラス席に行った。

少し寒い空が快晴で差し込む日差しが暖かい。

「む・・・美味しいなこのサンドイッチ」

「私のクロックムツシユもおいしいのです！」

「どれ、交換してみるか？」

「はい♪じゃ、あくん」

「あゝ・・・え？」

「あくん、なのです！」

「あ、あくん・・・」

「おいしいのです?」

「うまッ!!なにこれうまッ!!」

中のホワイトソースは美味い。とにかく美味い。

外にかかっているチーズも香ばしい・・・

俺もこれ頼めば良かった・・・

「司令官さんのサンドイッチもおいしいのです!」

「だろ!でも電のクロックムツシユも美味かったな・・・」

「えへへ・・・」

電はちよつと照れるような顔をしてコーヒーをすすする。

「はうう・・・苦いのです・・・」

「ははは、ミルクとか入れたほうが苦アアア!!!」

なにこれ濃い。すごく濃い。

しかもめっちゃ苦い。

でも香りはいい・・・

「ん・・・でもこれ後味がいいなこれ!美味い!」

「た、確かに・・・でも苦いのですうう・・・」

苦いのを我慢して飲んでいる電を眺めながら俺もコーヒーを飲んだ。

「さて、次はどこ行くかねえ」

「あ、私お城行きたいのです!」

「そういえば昨日も言ってたな」

「はい!」

「んじや行こうか!」

近くのバス乗り場からバスに乗りお城に向かう。

その途中バスの中でそのお城に関するエピソードが流れた。

笑顔を武器に敵を屈服させた王様の話だった。

「もうすぐ着くな」

「降りる準備なのです!」

バスの中から町の様子を眺めていたが思ったほど治安は悪化していないようだった。

深海棲艦による破壊は少なく町の状態も良かった。

「到着なのです〜！」

「間近でみると・・・でかいな〜」

電と手をつないで城に入る。

中の美術品などを見てみると奥に金色の王様の像が見えてきた。

あと隣に何かの看板があった。

「ん？なんだあの看板」

近寄ってみてみると・・・

「・・・金色の雷像って・・・」

どうやら応急救護や救難に回っていた雷が黄金の像として建造されるらしい・・・

というか、仕事早いなエメリアの連中・・・昨日今日の話だぞ・・・完成図にはいつもの明るい笑顔で袖をまくる雷のポーズが書かれていた。

「お姉ちゃん・・・」

「お姉ちゃん人気者だな・・・」

「なのです・・・」

なんだか妙な気分だったが・・・

まあいいか。

城を出てまたバスに乗り街に戻る。

「そろそろ昼飯時だな」

「もうそんな時間なのですか？」

「ああ、12時前だよ」

「早いのです・・・」

「まだ時間はたっぷりあるさ」

俺たちはその後いろいろな場所を回り、ホテルに帰ってきたのは夜の10時前だった。

「ぶはー・・・あのレストランなかなか美味かったな」

「なのです・・・食べ過ぎたのです・・・」

「あの美味さでバイキングなんだもんなあ・・・」

「しかも安いと来たので・・・」

「とりあえず風呂入るか」

「あ、お背中流・・・」

「今日は大丈夫ツ!!」

マツハで風呂場に入る。

「むう・・・」

とりあえず体を流し、スッキリしたので外に出る。

「電、お次どうぞ」

「ありがとうございます!」

電は俺と入れ違いに入っていた。

「今のうちに派遣で残す艦娘のリスト作つとかないと・・・」

風呂場からは電の鼻歌が聞こえていた。

「とりあえず・・・雷は残すべきかなあ・・・」

エメリアの英雄のようなもんだしなあ・・・

あとは・・・

「戦力的にいそかせと うらかぜを残したいが・・・こいつ等残したらシャムロックの胃が溶けてなくなりそうだから・・・いや、引き離れたら俺の明日の命が保障されん・・・やめとこう・・・」

そんな事を呟きながら仕事をしていた。

「お先なのです」

「おかえり」

「司令官さんなに作ってるのです?」

電がタオルで頭を拭きながらのぞいてきた。

シャンプーのいい香りがする。

「派遣艦娘のリストだよ」

「期間はどれくらいなのですか?」

「そうだな・・・まあ・・・半年間は・・・」

「長いのです・・・」

「そうだな・・・まあ、まだ期限はある。とりあえず今日は寝よう・・・ふああああ・・・」

「えへへ、お疲れですもんね」

「歩き疲れた・・・」

「じゃあ、今日はもうお休みなさいなのです」

「ああ、お休み」

「だいすき……ちゅっ」

「俺もだよ。ああもう……可愛いやつちやなあ……」

俺はそのまま電を抱き枕のように抱き寄せて眠りについた。

↳一ヶ月後↳

日が経つのは早いもんだな……

俺はグレースメリア鎮守府に来ていた。

今日は派遣艦娘をシャムロックに引き渡すときだ。

「すまん、雷、暁」

「いいのよ！レディーにはこれくらい寂しくなんてなふええええええん!!!」

「泣いてんじやねーかよ……」

「お姉ちゃん、半年間のお別れ……ですね」

「半年間なんてあつという間よ！司令官のことよろしく頼むわね！」

「な……！私の旦那さんだから大丈夫なのです！」

「えっへへ」

派遣した艦娘は暁、雷、飛龍、蒼龍だ。

戦力はこれでなんとかなるだろう。

「じゃあシャムロック。あとは頼んだよ」

「ああ、大佐。しっかりと預かった」

俺はそのままシャムロックと派遣した艦娘たちと別れ、空港に向かった。

あとは一緒に来た艦娘たちと一緒に横須賀鎮守府に帰還するだけだ。

「電、寂しくないか？」

「ふえ……寂しく……ないのです……ぐすっ」

「よしよし」

やっぱり寂しいらしくちよつと泣いていた。

俺はその頭をゆっくりと撫でているといつの間にか寝てしまったようだ。

「あら・・・寝たか」

飛行機はもう滑走路に到達・・・離陸滑走を開始した。

ここから横須賀まで10時間程度だ。

俺も一眠りしよう。

「そう思い眠りの世界へ落ちていった。」

萌え萌え大戦争 艦こればーん!!

「ただいま〜」

「あ、おかりなさい隊長」

「おつかえりー!」

「ケストレルもただいま。アンドロメダ、鎮守府の状況は?」

「そうですね・・・資源が溜まりに溜まってますよ。なんか・・・匿名の援助も多くて・・・」

「なんじゃそりや・・・」

「司令官さん、建造・・・いっちゃうのです?」

「お?電がちよつと建造にノリノリか?」

「お姉ちゃん居ないのがちよつと寂しくて・・・」

「なるほど」

可愛いのコヤツめ。

まあせつかく溜まってるし建造行くかな

「じゃあちよつくら建造行ってくる」

「了解しました」

司令室を出てドックに向かう。

せつかくだし航空母艦のレシピを回してみるか・・・

「お久〜」

「てーとく!?!殺されたんじゃ・・・」

「残念だったな、トリック・・・って何物騒な事言ってるんだお前は!!」

「えーいいじゃん〜・・・」

「いいじゃんじゃない!」

「はいはい〜・・・んで、どうするの?」

「建造、空母で頼む」

「はいよ〜」

予想はロクでもないのが出ると見た。

「電、何が来ると思う?」

「さあ・・・思い切ってハボクックあたりですか?」

「どういう思い切りだソレ・・・」

思い切りでハボクツク出てこられても（困惑）にしかならんぞ・・・
そんな会話していると妖精が書類を持ってきた。

「はいこれ。たぶん失敗だよ」

「ん？まあ見せてみ」

「どうなのですか？」

電と二人で見る・・・すると・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

電と俺氏、絶句。

通常建造までは良かった。

資源もふつうだ。

それは良かった。

良かったんだ・・・

建造時間3分って何。

「おいどうなってんだこれ」

「し、知らないよ！」

「いったい何が出てくるのです・・・」

「さあ・・・」

「とりあえずカップ麺でも作って待ってやがれ！」

「お前口悪いな!!」

妖精さんにそんな突っ込みを入れながら待つ。

すると建造が終了し、ドアが開いた。

「どんな娘が来ることやら・・・」

煙の奥に見えたのは駆逐艦サイズ・・・でも電たちと身長がそこま
で変わらない。

てか・・・艦装・・・変じゃね？

気のせいかな・・・

可変翼が見える・・・

「ようこそ、横須賀へ」

いつも通りそう声をかける。

さあどんな自己紹介をしてくることやら・・・

「ニヤーはネコにや！こんにちにや！」

「・・・はっ？」

ネコなんて駆逐艦居たっけ・・・

あ、軽巡にいたね。ネコじゃないにやっって言ってるけど・・・

「あく・・・ネコ・・・？駆逐艦？」

「ニヤーは駆逐艦じゃないにやー!!どう見たらそう見えるにやー!!」

「いやどう見たらっつて・・・見た目から・・・」

「キミの目は節穴かにや?!」

「いや・・・あの・・・」

腰より長い金髪に猫耳のようなパーツが頭についている。

艦装は・・・艦船というより戦闘機に近い気がする。

てか・・・この形・・・どっかで見たような・・・

「いいかにや?!その耳かっぽじつてよく聞くにや!!」

「お、おう・・・」

「司令官さん・・・この子・・・船なのです？」

「とりあえず戦艦ではないな」

「なのです・・・」

そんな話しているとネコ(?)は深呼吸して・・・

「ニヤーはアメリカ海軍所属F-14トムキャットのネコにや！」

「・・・なんだっつて？」

「だから、F-14トムキャットのネコにや！」

「・・・」

「にやにやにや！驚いたかにや！アメリカ海軍は世界さいきよーにやよー！」

いやまて。いろいろ待て。

まず何で戦闘機が出てきてる。

「オイこら妖精」

「な、なに!？」

「お前いつ開発に切り替えた!？」

「いや切り替えてないよ!!」

「じゃあなんで戦闘機出てきてんだよ!!ここ艦船用だろうが!!」

「し、知らないってばー!!」

妖精とそんな言い争いをしていると・・・

「えっと・・・初めまして、私、特Ⅲ型駆逐艦「電」と言います。よろしくおねがいます・・・なのです」

「イナヅマ・・・?にや?」

ネコは不思議そうな顔をして首をかしげる。

「どうかしたのです?」

「護衛艦じゃないにや?」

「駆逐艦なのです!」

「にやにや?」

「あの・・・艦娘じゃないのです?」

「艦娘?なんにやソレ」

「え・・・」

ネコの頭には?マークが飛び交っている。

「鋼の乙女じやいのにや?」

「鋼の乙女・・・って何なのです?」

「はにや!?!お前鋼の乙女知らないのにや!?!てか、海戦型乙女じゃないにや!?!」

「海戦型っていうか・・・その私たちは元から艦船というか・・・」

「ニヤ、ニヤー知恵熱出てきたにや・・・」

「だ、大丈夫なのです!？」

「ちよつと休みたいにや・・・」

「と、とりあえず司令室行くのです!」

電たちがそんな話をしている最中・・・

「お前いったん工廠の整備しとけー!!」

「んだとこのクソてーとく!!その短小砲引きちぎるぞ!!」

「誰が短小だコラアア!!」

「お前じやアアア!!」

「やんのかコラアアア!!」

「かかってこいオラアアア!!」

妖精さんとバトルしていた。

く司令部く

「ぐふっ……ただいま……ガクツ」

妖精のバトルを終え帰ってきた。

死ぬかと思った……

なんで100人くらい総動員で襲ってくるの？

怒らすとヤバイ。

ヤバイ、妖精ヤバイ

「し、司令官さん!?!」

「あ、さっきのオツサンにや」

「オ……オツサ……ン……」

「司令官さああああん!!!」

誰がオツサンだ!と言いたかったけど俺の意識がそこで終わった。

く3時間後く

時刻は夜の八時。

「ん……」

「よ、よかったのですううう!!」

起きると同時に電が抱き付いてきた。

「電、すまんな」

「大丈夫なのです!それよりネコちゃんと仲良くなれたのです!」

「お、よかったな」

「特にケストレルさんと息が合ってたのです!」

「まあ、F-14っていったら艦載機だしなあ……」

そういえばと思い、ネコの情報を確認する。

人の形をしているが……艦娘扱いなのか装備扱いなのか……

確認すると・・・

「ええつと・・・装備としても艦娘としても編成可能・・・どゆこと!?!」
装備はM61バルカンとAIM-9X・・・あとはAIM-54フェニックスか・・・

艦隊防空向きかな?

「なんか・・・ややこしいな・・・」

「でも艦娘として編成可能ってことはやっぱり艦娘なのですか?」

「いや・・・戦闘機だしなあ・・・」

それよりも・・・

「この記述・・・鋼の乙女って何だ?」

「さあ・・・私にもさっぱり・・・」

「まあ・・・あとでネコに聞いてみるか」

「そうですね」

何とも不思議な艦娘(?)が建造(?)された日だった。

鋼の乙女と艦娘

なんとも不思議な艦娘(?)が建造された翌日。

「さて・・・仕事仕事」

司令室の机に腰かけPCを開く。

鋼の乙女とやらについても調べてみるか・・・

「最近日本近海は静かだねえ・・・」

そんなこと呟いていると・・・

「司令官さん?いるのです?」

「ん?どした?」

「あの、お手紙が届いたのです」

「ん?」

電が封筒を持って司令室に入ってくる。

開けてみると・・・

「航空写真・・・か?画質悪すぎるだろ・・・」

白黒のよくわからない写真・・・

とりあえず司令部に問い合わせしてみる。

「もしもし」

〈大佐か。どうした?〉

「あのウチに送ってきた封筒なんですけど・・・」

〈ん?ああ、敵泊地のだな〉

「あれ泊地なの!?!」

〈どうした?分からなかったのかね?〉

「分かるか!!あんなん分かるか!!何で写真撮影してきたんすか!!」

〈へいや・・・そう怒鳴らんでも・・・ふつうに偵察機だが・・・〉

「機種・・・」

〈え?〉

「機種は!」

〈ひゃ、百式だが・・・〉

やっぱり旧式機かよ・・・

「なんで陸軍航空隊に頼まないんすかアンタ等は!!」

〈へり、陸軍などに頼んでどうする!〉

「あそこ、RF-4とか偵察機持つてんでしようが!!」

〈え、そうなの?〉

「今知ったんかいいいいいいいいい!!!」

〈へい、いやあ・・・すまん・・・ウチと陸軍で仲悪いからなあ・・・〉

「仲悪くても装備の把握くらいしとけ!!」

いつの間にかタメ口になってたけどまあいいか・・・

「はあ・・・とりあえずウチの衛星でどうにかしますよ・・・んで・・・

その泊地攻撃ですか?」

〈ああ、泊地と言っても敵の前哨基地のようなものだ〉

「了解しました」

ハア・・・とため息をもらしながら電話を切る。

「司令官さん、すごい怒ってましたけどどうしたんですか?」

「いや・・・つくづくウチのお上ってネジ飛んでるなって・・・」

「?」

「ああ・・・知らないほうがいいのよ・・・」

「な、なのです・・・」

「とりあえず敵泊地攻撃だとき。敵戦力の確認ができるまで待機だ」

「了解なのです!」

「あ、そうだ電」

「?」

俺は一つお使いを頼もうと思っていたことを思い出した。

「すまん、ちよつと街まで行つてこのPCのパーツを買つてきてくれないか?」

「パーツですか・・・」

「ああ、メモを渡すからそれを店員に見せたら教えてくれるから」

「分かったのです!」

「すまん!あと、帰りに何でも自分の好きな物買つておいで」

「え・・・でも司令官さんのお金ですし・・・」

「いいのいいの」

「えつと・・・ありがとうございます!」

「おう！じゃあ、頼んだよ」

「なのですー！」

電は部屋を出ていく。

俺はふと送られてきた写真を見る。

どれも画質が悪く、何が映ってるのか分からないが・・・

「ん・・・滑走路と・・・ハンガー・・・航空基地か？」

てことは・・・戦艦隊の出番かな。

しかし俺は写真に違和感を感じた。

「んっ・・・？」

よく見てみると・・・

「この機影・・・嘘だろオイ・・・」

国籍やカラーリングまでは分からないが・・・

「Su-27・・・いや35か・・・なんでフランカーが・・・」

周囲にはMiG-29やMiG-21の姿もある。

しかし人間の姿はない。

「深海棲艦の戦闘機・・・いや・・・だったらもっと小さいはず・・・」

そんなことを呟いていると・・・

「おっはよーにやー！」

「おわああああ!!!」

「おはようにや！」

「なんだネコか・・・」

「なんだとは何にやー！」

昨日建造された艦娘(?)

まあいいや、今ちようど聞きたいこともあったし。

「なあネコ。鋼の乙女って何なんだ？」

「にや!?てーとくともあろう人が鋼の乙女を知らんにや!？」

「いや初耳だ」

「仕方ないにやっ・・・ニヤーが直々に教えてやるにやー！」

鋼の乙女・・・基本的には戦うために建造された兵器なのだが、名前の通りベースはすべて乙女である。あらゆる国が保有しており、その戦力は非常に高く戦局が鋼の乙女の有無に左右されることもある。

最新鋭の技術によって圧倒的な戦力と自我を持ち、すべての鋼の乙女は実在の兵器がモチーフとなっている。そのため、新型機として固有の型番で開発されたものがある反面、既存兵器の鋼の乙女版として建造されたものもある。年齢はバラバラで、第2世代ジェット戦闘機の鋼の乙女と第5世代ジェット戦闘機の鋼の乙女が同じ時代に戦っているほどである。鋼の乙女は主に航空機型、艦船型、装甲戦闘車輛型が存在する。

兵器いえど人間の乙女として造られているため、感情はちゃんと存在し、体つきまで人間の女性そのものである（食事もとりに、買い物や料理、また旅行なども時たましている。航空機型でもある程度なら泳ぐことも可能だとか。

「つまり・・・人に作られた以外は艦娘と同じか・・・」

「艦娘がニャーにはよくわからないにゃー・・・」

「艦娘っていうのは、第二次大戦中に存在した艦がなんやかんやでああなって出現したヤツだ」

「なんやかんやって何なのにゃ!!もつと詳しく教えるにゃ!!」

「いや・・・艦娘って俺たち人間が建造した存在じゃないんだよ・・・」

「じゃあアレかにゃ?妖精の仕業とでも言うのかにゃ?そんなこと・・・」

「いやそうだけど?」

「にゃ!」

まあ・・・本当に妖精の仕業かは知らんけどな・・・

「それよりも第二次大戦の艦って言ったにゃ?」

「ああ、そうだけど」

「ケストレルたちは何なのにゃ?」

「いや・・・あれも艦娘なんだが・・・その・・・ウチの工廠がおかしいんだよ・・・」

「にゃ?」

「ふつう電たちみたいなお戦中に存在した艦しか出てこないはずなんだが・・・」

「でもなんでニャーが出てくるにゃ?」

「それは俺もよくわからん」

「にゃく・・・あ！そうにゃ！二次大戦って事はミスーリさんとかいるにゃ?!」

「ああ、なんかウチにはいるな。どした？」

「挨拶行ってくるにゃー！」

「お、おう・・・」

ネコはすごいスピードで司令部を出ていくが・・・アイツ寮わかんのか・・・？

すると外から・・・

「にゃー!!!ここにゃー!!!」

案の定迷っていた。

俺は右往左往するネコを司令部から眺めて仕事に戻った。

敵飛行場襲撃作戦 前編

「提督より全艦娘へ。1200までにオペレーション集合」
鎮守府内にそう放送する。

敵泊地攻撃作戦のブリーフィングのためだ。

「電、準備は大丈夫か？」

「はいーばっちりいなのです！」

「気合い入ってるなあゝ・・・」

電は元気にそういった。

今回は敵航空基地攻撃だ。

第一艦隊が戦艦・空母で編成し敵飛行場に艦砲射撃および空爆を行う。

第二艦隊は水雷戦隊で編成、対潜警戒を行う。

第三、第四艦隊は現代艦で編成、対空対潜対艦警戒を行う。

直接敵飛行場に攻撃を行うのは第一艦隊のみでほかは護衛だ。

「さて、ブリーフィングルームに行くか。電、補佐頼んだよ」

「なのですー！」

時刻は1130。

「準備は・・・よしー！」

プロジェクターを設置し、作戦海域の海図を表示させておく。

「不安要素は・・・アレだけか・・・」

本部の情報を元に行った偵察で得た写真。

そこには飛行場といつても離陸できる状態のSu-27とSu-35、MiG-29、MiG-21。

国旗は表示されていないのでこの国のかは分からない。

深海棲艦がスホーイ使ってるって聞いたらユークの軍人大激怒だ
ろうなあ・・・

そんな事考えてる皆が集まってくる。

「よし、ブリーフィングを始めるー！」

今回の作戦、編成はさつきも言った通りだ。

第一艦隊が航空基地襲撃。

第二艦隊から第四艦隊までが第一艦隊の護衛だ。

第一艦隊の編成は大和、長門、金剛、榛名、赤城、加賀。

第二艦隊、電、響、秋月、浜風、五十鈴、由良

第三艦隊、いそかぜ、うらかぜ、ピョートル、クズネツォフ

第四艦隊、アンドロメダ、ケストレル、シンファクシ、マイケル

「編成はこの通りだ。秋月は初実戦だな」

「はい！対空攻撃はお任せください！」

「あ、それとジョン、ミズーリ」

「ん？なんだ？」

「すまん！お前らは別働隊というか・・・派遣でグレースメリアに向かってくれー！」

「はあ!?なんで俺らだけ!?!」

「いや・・・戦力がな・・・」

「ああ・・・向こう、駆逐艦と空母しかいねーもんなあ・・・」

「工場もあるんだがなあ・・・妖精さんが言うこと聞かんらしい」

「なんだソレ・・・」

「とにかく頼んだ！」

「へいへい・・・」

しづしづ了承といった感じだった。

「話を戻す、今回の作戦・・・不安要素が一つある」

「何ですか？」

「この写真を見てくれ」

うつされた写真はスホーイなどが映っている例の写真だ。

「これ・・・ボクの国のじゃんかー!!なんでこいつ等持ってたんだよー！」

ピョートルが写真を指さして怒り出す。

「状況はよくわからんのだがな・・・とりあえず脅威はこいつ等だ」

こいつ等が居たら赤城、加賀の艦載機は全滅だろう。

「そういうえばニャーはどうすればいいにや？まさかお留守番かにや？」

「いや、お前はケストレル艦載機だ」

「任務は何なのにや？」

「赤城、加賀の航空隊と合流して航空基地まで護衛及び艦隊防空だ」
「なんかお仕事多いにや・・・でもニヤーのフェニックス空対空ミサイ
ルがあれば問題ナシにや！」

「なんか不安だが・・・」

「ニヤーがいれば百人力にや！」

「ま、まあ・・・頼んだ」

なんとなく不安が残るが大丈夫だろう。

「あ、そうだ。今回の作戦、艦隊指揮及び航空隊指揮をAWACSが担
当する」

「AWACSって何ですか？」

赤城が質問をしてくる。

「そういや、赤城達には分からん単語だよなあ・・・」

「早期警戒管制機。まあ、空飛ぶ指揮所だよ。コールサインはスター
バーストだ」

「了解しました」

「よし、一時間後に作戦行動開始！幸運を祈る！」

「了解！」

わらわらとブリーフィングルームを出ていく。

俺は・・・支援攻撃の準備をしとくかな。

てか・・・あの武器商め・・・ICBMが在庫切れってなんだよ！

あれさえあれば攻略が楽になったのになあ・・・

く大和く

「こちら第一艦隊、間もなく作戦海域に突入します！」

〈〈こちらスターバースト。了解。現在索敵レーダーに機影なし〉〉

「大和さん、私たちはここで停止、艦載機を上げます」

「分かりました。敵の潜水艦などには注意してください」

「はい。では・・・第一次攻撃隊！発艦してください！」

赤城さんが矢を放ち艦載機を上げる。

空に無数の戦闘機、攻撃機が展開された。

〈〈ニヤーもすぐいくにやー！〉〉

後方から轟音・・・ネコさんも航空隊に追いつく。

「私たちも行きましょう！」

くネコく

これが初実戦。頑張るにや！

「おく・・・ラジコンみたいにや・・・」

横を飛ぶ零式戦闘機を見ながらつぶやく。

〈こちらメビウスー！ネコさん！ちよつと速いよー！！もつとゆつくり！〉

「これ以上落とすと失速するにやー！これ以上は無理だにやー！！」

〈こつちはフルスロットルなのにー！！〉

駄々っ子のように零戦が翼を振る。

そんなこと言われたって無理な物は無理だにやー・・・。

〈こちらスターバースト。索敵レーダーに機影〉

「にや!?こつちも捕えたにや！」

〈目標・・・Su-27・・・フランカーグループ、敵〉

「先制攻撃にや！みんな先にいくにや！」

〈了解！ネコさん！また後で！〉

「ここはニヤーに任せて先にいくにや！」

あれ・・・もしかして今のニヤーつてすぐくカツコいいにや!?

アメリカ舐めるにやよー!!

「ニヤーがやつつけてやるにやー！」

2発のフェニックス空対空ミサイルを発射する。

ニヤーには複数の目標を同時攻撃する能力があるからたったの2機や3機くらい迎撃なんて余裕にや！

〈ベンゴ！敵戦闘機撃墜・・・待て、新たな機影・・・これは・・・！〉

「どうしたにや?」

〈索敵レーダーの反応が・・・ステルス・・・！しかもコイツは・・・〉
管制官の声から驚きが漏れている。

「どうしたにや！早く言うにや！」

〈F-22・・・ラプターグループ、敵！〉
「にやー?!?!」

索敵レーダーには2機編隊が映ったり消えたりしている。

ニヤーは第4世代の戦闘機・・・相手は第五世代機・・・。

うん、無理にや。

「ニヤ、ニヤーの攻撃を避けれるかにや！」

残ったフェニックスミサイルを発射に一基に転進する。

「ラプター相手なんか無理にやー!!!」

いそかぜ

〈ラプター相手なんか無理にやー!!!〉

「ラプター・・・!?!」

「ラプターって・・・F-22?!」

「IFFはどうなってる?!」

「応答なし・・・敵です!!」

敵はSu以外にもアメリカ製の戦闘機まで・・・

「敵機の迎撃を急ぎましょう！艦隊にたどり着く前に落します！」

「了解！」

この作戦・・・なんだか嫌な予感がする。

敵飛行場襲撃作戦 後編

く電く

「らぶたー……って何なのですか？」

横を航行している秋月さんに聞いてみる。

「さあ……一応軍用機は把握しているんですが……」

そんな時上空に轟音が響く。

司令官さんが乗っていた戦闘機の音によく似ている。

「あれ？この音……司令官さんの戦闘機？」

「司令官って戦闘機乗るんですか？」

「元パイロットさんなのです」

「なるほど……今度対空戦闘の練習お願いしようかな……」

そんな雑談をしていると……

「航空機直上を通過……あれ？急降下……」

こつちに向かって急降下してきている。

驚かせるつもりなのですか？

「司令官さん……いたずらはダメなのです……」

そんな事を呟いた時、秋月さんが叫ぶ。

「ば、爆弾投下!!」

「え!!」

上空を見上げると確かに黒い粒のようなものが降ってくる。

もう回避は間に合わない。

「そ、総員衝撃に備え！対ショック姿勢なのです!!」

とつさにそう叫ぶ。

すると……

「!!とつくに対ショック!!」

全員からそう返ってきた。

……反応というか……行動速いのです……

私も急いで水面に伏せる。

すると一瞬しか見えなかったがトビウオのような形をした爆弾がすぐ近くに着弾した。

〈第二艦隊！こちら第三艦隊！！近くにいる航空機は敵機です！迎撃してください！！〉

「も、もう攻撃を受けたのです!!」

敵はすぐに反転して向かってくる。

「あの戦闘機どこから湧いたのよ!!第三艦隊は補足してたんでしょ?!
対空電探には何もなかったのに!!」

五十鈴さんが対空砲撃をしながら怒鳴る。
たしかにそうだ。

対空電探を装備した艦娘全員があの敵機を補足していない。
でも第三艦隊はそれを補足していた。

「状況が分からないのです・・・」
突然出現した敵機。

それにどう見ても深海棲艦の戦闘機ではない。
「とにかく迎撃なのです!」

上空に弾幕を張るが、敵の動きが早すぎる。
敵は再び急降下をかけてきた。

「て、敵機直上!急降下!!」
機体下部の扉を開いて急降下してくる。

もう回避は間に合わない。

「避けきれな・・・」

「当たれええええええええええ!!!」

私が避けきれないと言おうとするのと同時に秋月さんの絶叫のよう
うな声が入る。

艦装の長10cm砲から放たれた砲弾は敵機下部の爆弾倉付近で
炸裂。

敵機が搭載していた爆弾が誘爆し空中で爆散した。

「や、やった・・・!」

「秋月さん!すごいのです!!」

「ハラショー・・・」

秋月さんにそんな言葉をかけていると・・・

〈へこちら空中管制機スターバースト。横須賀鎮守府より撤退命令が

下された。作戦を放棄する。進路を西に保ち海域より離脱せよ

「撤退・・・？」

「こちら第一艦隊！飛行場まであと少しです!!なんでなんですか?!」

「付近に敵の新型艦及び不明機が多数迫っている。ただちに撤退せよ。第三、第四艦隊は第一、第二艦隊を援護、電波妨害も同時に行え」

「確かに、この状況では撤退が最善の選択かもしれない。」

「私たちの電探に捕えられない敵の新型機・・・」

「撤退急ぎましょう！」

「はい！進路を西に変更するのです！」

「あとちよつと作戦成功なのにい・・・テートクは何考えてるデーッス!!」

「提督なりの考えがあるんだ。文句を言ってやるな」

「むう・・・仕方ないネ・・・」

「提督」

「フランカーにラプターだと・・・？」

「敵はよりによって既存の兵器を模すんだ・・・」

「くそ・・・ワケが分からん・・・！」

「何度考えてもメリットが浮かばない。」

「いや・・・一つだけある。」

「下手をするとすべての国の首都が焦土と化す可能性がある。」

「既存機・・・ということは国籍ごとに使い分ければ近づいても・・・」
「たとえばスクランブルが発動したとしても日本ではすぐに撃墜ということはない。」

「その間に巡航ミサイルを積んだ爆撃機なら・・・」

「それに一部の国は航空機にも対深海棲艦用装備があっても大半の国にはない。」

「特に内陸国などはこの戦争には無関係な国もある。」

今までの深海棲艦の艦載機は航続距離の関係で内陸国には行けなかったが既存航空兵器などは話が別だ。

「……これかなりヤバイな……」

急いで大本営に送る必要がある。

……信じてくれるかは別として……

「それよりも……」

俺は衛星から送られてくる映像を見る。

そこに映っているのは……

「なんで……なんでお前がここにいるんだ……」

複数の深海棲艦と艦隊を組んで進む見慣れた姿形をした者……

「いったいどういうことだ……」

俺はモニターを眺めながらつぶやく。

これがアイツではないのは分かっている。

今、無事に撤退している最中だ。

それも映像がモニターに映っている。

だが、問題のヤツは艦装や色……体系も微妙に違うが……

気のせいだと思いたいが、写っているのは見慣れた髪型、髪色、

顔……

「なんで……」

「なんで深海棲艦にお前がいるんだ……電」

「これ・・・どうするかな・・・」

偵察機が送信してきた画像と映像。

写っているのは電とよく似た敵艦だ。

「しかもこれ・・・ESSMじゃね」

この偵察機は映像を送ってきた数十秒後に撃墜されている。

明らかに艦装から対空ミサイルが発射されていた。

弾着の数秒前を一時停止してみるとミサイルがきつちりと映っていた。

形状からしてRIM-162 ESSMだ。

この艦についていろいろ推測していると・・・

「隊長、入ります」

「はいはい、どうぞ」

アンドロメダだ。

お茶を持ってきてくれたようだった。

「それ、なんの資料です？」

「ああ、なんか電とよく似た敵艦がな」

「電さんと？」

「艦装はたぶん、現代艦ベースだな・・・それを証拠に腕に76mm速射砲も見える」

「ん・・・これって元の艦が存在しそうですね」

「たぶんな。あと、日本の艦艇かも」

「なんでです？」

「なんとなくだよ、そんな気がしたただけだ」

「そうですか」

司令室でお茶を飲みながらいろいろ考えていると電たちが帰ってきた。

ひどい損傷を受けてないのを見ると無事で撤退できたようだ。

「おかえり、電」

「ただいまなのです、司令官さん！」

電は被弾もなく元気だ。

「では、私はこの辺で秘書艦を交代しますね、お二人の時間を邪魔しちゃ悪いので」

「・・・変な気は回さんでいいからな」

アンドロメダはそのまま微笑んで部屋を出た。

「さて、と・・・」

椅子に座り直しいつもの仕事に戻る。

最近鎮守府に諜報班なるものを作ったし解析はそっちに回そう。

「司令官さん、なんで撤退命令を出したのです?」

「あの状況じゃ・・・な」

「でも、いそかぜさんも・・・」

「たしかに、航空戦力も十分だったし・・・」

続きを言おうと思ったたら扉が勢いよく開き、ネコが飛び込んできた

「たいちよー!!!なんで撤退させるニヤー!!!」

「なんでつて・・・戦力がな」

「戦力は十分だったにや!!ニヤーだけでも十分にやー!!!」

「・・・ラプターとか(ボソツ)」

「ら、ら、ラプターってなんですかにや?ラププラスの新しいキャラで

すかにや?」

「おいコラすつとぼけんな」

「す、すつとぼけてないですよにやー」

と、鼻歌歌いながら部屋から出ていった。

何しにきたんだアイツ。

「さて仕事仕事・・・」

書類に目を通してしていると、上空を轟音が過ぎていった。

電が外を見ている。

「戦闘機・・・海に向かって飛んでいくのは珍しいですね」

「スクランブルじゃないのか?」

「スクランブル・・・?」

「緊急発進だよ、ウチでもたまにかかるだろ?基本は陸軍航空隊の仕事なんだがな」

このご時世、スクランブルがかかることは滅多にないが、それでもごく稀に不明機が日本領空に進入することがある。

たいていはフライトプラン未提出の軍用機だったりするんだが……「そういえば何で私たちの鎮守府にスクランブルかかるのです？陸軍航空隊だけでも……」

「ウチのは対深海棲艦相手だよ、たまに偵察機が飛んでくるからな」その頻度も稀だが……

「ウチも対空兵器の増強するかなあ……」

「え？でももう十分じゃないのです？」

「一応な……ただ、敵は現用の航空機のコピーを始めた……今までは対空砲程度で落ちてたけど、現用機は別だよ」

「ん〜つと……性能が違いすぎるのです？」

「それもだけど、フレアとかチャフって言うミサイルをかわすための防御兵装を積んでるんだ。いそかぜ達も積んでるんだけどね」

「チャフ……フレア……？」

「フレアは簡単に言うとエンジンの熱程度かそれ以上の熱源を空中に放出して赤外線誘導のミサイルを避けるんだ。チャフはアルミホイル何かを空中に放ってレーダー波を反射させる兵装で、レーダー誘導ミサイルに使うんだ。艦船にもチャフは積んでるよ」

「なるほどなのです……でもコレ相手だとミサイルは使えなくないですか？」

「いや、チャフとフレアも万能ってワケじゃないんだ。あれは生存率を高めれるだけの物に過ぎないんだよ」

実際、熱源誘導ミサイルに追尾されていてフレアを撒き散らしたとしても絶対の回避できるというわけではない。

「まあ、そんなと……」

突然、司令室に大音量でベルが鳴り響く。

壁についている電光掲示板にとある表示が灯った。

H O T S / C

「な、なんなのですか!？」

外からはジェットエンジンの音が響いてきた。

「防空司令部！状況を送れ！」

〈陸軍航空隊のF-15J二機が太平洋上でベイルアウト！付近に不明機あり！〉

「了解した！救難機を上げられるか？！」

〈待機中のUH60が離陸できます！コールサイン「ピークオド」〉

俺の予想では・・・深海棲艦だろう。

「司令官さん！私たちも・・・」

「いや、電たちはまだ休め、待機中の艦娘を出撃させる！」

「でも・・・」

「でもじゃない、疲労がたまってるんだ、出すわけにはいかない」

「・・・了解なのです・・・」

電は悔しそうだがどうしようもない。

疲労した体で出撃させても被害を被る可能性がある。

「防空司令部、救難機はあとどこから出る？」

〈陸軍航空隊所属、百里救難隊から搜索機と救難ヘリが上がります

！〉

「了解」

助かるといいが・・・

「ふう・・・」

「ため息ついてどうしたのです？」

「いや・・・助かればいいなと思ってな・・・」

「・・・そうですね・・・」

「電、明日からは搜索に行ってくれ」

「明日からですか？」

「疲労もとれるだろうしな」

「了解なのです！」

だが・・・もし電が見つけたとして回収するのが遺体でないことを祈る。

外を見ると救難ヘリが離陸していった。

遭遇戦

「よし、0600・・・電！行ってこいー！」
「了解なのです！」

友軍機撃墜・・・その搜索に電を出した。
編成は電、響、いそかぜ、うらかぜ。

昨日は夜中もずっと搜索を続けていたがまだ見つからない。
敵機もその後すぐに姿を消してしまい、見つからなかった。

「無事だといいがな・・・」

もう10時間ほど経過している・・・

体力は限界かも知れない。

く電く

〈アルテミス17よりヘリオス78〉

〈こちらヘリオス78〉

〈そちらから8時方向、洋上に何か不自然に光るものを確認。至急、向かってください〉

〈ヘリオス78、了解〉

無線機からは搜索機と救難ヘリの無線が聞こえてきた。

〈アルテミス17、こちらピークオド。フューエルビンゴ、一旦基地に帰還する〉

〈アルテミス17、了解〉

私たちの鎮守府の救難ヘリが真上を通過していった。

「ん・・・？電、2時方向に何か光ってる。距離は・・・えっと」

「距離約3000ですね」

「見えたのです！」

「パイロットかも・・・急ごう！」

方向転換して向かう。

確かに何か不自然にキラキラと光っていた。

「もうちよつと・・・見えました！」

双眼鏡を構えているいそかぜさんが何かを見つけた。

「パイロットさんですか？」

「いえ・・・尾翼・・・？」

近づいていくとそれは飛行機の尾翼だった。

「これ・・・F-15Jのだよね」

「そうですね・・・ヘリを呼んで回収してもらいましょう」

「私が呼びます」

無線機を取り出して陸軍航空隊のヘリを呼ぶ

「こちら横須賀艦隊、ヘリオス78さん、聞こえますか？」

〈こちらヘリオス78〉

「洋上で戦闘機の尾翼を発見しました、回収をお願いしますか？」

〈ヘリオス78、ラジャ。方位を教えてください〉

「えつと・・・」

電探を搭載していないので目視でヘリを探さないと・・・

「電さん、ちよつと無線機借りますね」

「あ、はい。どうぞ」

「ヘリオス78、そのまま左に70度旋回、そのまま直進してくださ

い」

〈了解〉

〈こちらアルテミス17、ビンゴフューエル。いったん基地に引き返

します〉

〈ヘリオス78、了解。こちらあと30分ほどで燃料ビンゴ〉

「搜索は引き続きしますので、給油を優先してください」

〈ヘリオス78、了解〉

搜索機が帰っていくのを見届け、ヘリが到着するのを待つ。

この海域に敵がいらないといいんだけど・・・。

〈こちらヘリオス78、現場に到着。回収開始〉

低空まで降りてきてホバリングを開始した。

私たちが降りてきたウインチを尾翼に括り付け、引き揚げてもらっ

た。

〈回収完了。このまま給油のため一時戻ります〉

〈こちらピークオド、給油完了し、離陸。ヘリオス78のあとを引き

継ぐ」

「へこちらへリオス78、ラジャ」

「私たちも搜索を再開する。」

「無事・・・ですよね」

「無事を信じて搜索するしかないですよ」

「絶対無事だよ！ほら・・・なんだっけ、キス島から泳いで帰ってきたつて言うじゃん」

「うらかぜ・・・それ陸軍さんですから・・・」

「あれ？そうなの？」

「そんな話していると司令官さんから無線が入る。」

「へあく・・・搜索中の艦隊へ、聞こえるか？」

「はい、感度よし、なのです」

「へあの・・・すごく言いにくいんだが・・・」

「どうしたのです？」

「へいやその・・・一人・・・泳いで帰ってきた・・・」

「はあ!？」

「へしかも・・・お手製のヤリ作って魚捕ってきてた・・・」

「あ・・・あの・・・エンジンジョイしてません・・・？」

「へ・・・たぶんしてるねあの人・・・」

「ええええ・・・」

「へすっごいいい感じに日焼けしてて・・・」

「海水浴なのです!？」

「へ・・・パイロット曰く、サバイバルキットのボートで漂流してるときに「今年海行つてねーな・・・よし！ちようど海の上だし体焼くか!」だって（震え声）」

「陸軍さん・・・航空隊もなんかいろいろ超人なのです・・・」

「あ、でも、もう一人はどうなつてのです？」

「へそつちはまだ行方不明みたいだな。ただその・・・」

「?」

「へコイツもコイツで・・・サメとバトルしたらサメのヒレに引つかかって行方不明になつたらしい・・・」

「アホなのですか？その人アホなのですか!?!」

「アホだね」

「アホですね……」

「アホ以外の何物でもないね」

全員からツツコミが帰ってきた。

〈まあ……捜索を頼む……〉

「りよ……了解なのです……」

捜索を再開しようとする……

〈へこ、こちらピークオド!!海面に……なんだアレ!!〉

「どうしたのですか!?!」

〈救命ボートらしき物を確認したんだが……高速で移動中!〉

それ……あのサメの人じゃないのです……?

「あの……ヒレとか見えますか……?」

〈ヒレ……見えた!確認!!〉

「それアホのパイロットさんなのです!!」

思わずアホのパイロットって言っちゃったのです……

〈あ……えと……サメと木の棒……いやヤリのようなもので交

戦中ですが……〉

「……」

何で陸の人ってなんか変なのですか!?!っていうか全員が変なのですか!?!

と心の中でツツコミを入れる。

〈あ……〉

「?」

〈……なんか……サメがプカ―って浮いて……あ……ガツツ

ポーズして雄たけび上げてる……〉

「狩っちゃったのです!?!」

〈こちらアルテミス17、捜索に戻る〉

「あ、あの……もう大丈夫なのです……」

〈発見しましたか?〉

「あの……一応……」

〈生存は?〉

「元気なのです．．．すっごく元気なのです．．．」
私たちの元気を奪っていくくらいには元気なのです．．．
〈〈了解〉〉

とりあえずもう後は航空隊に任せるのです．．．
帰路に着こうとしたときだった。

「ん．．．レーダーに．．．」

「どうしたのです?」

その時、無線から連絡が入る。

〈電!今すぐ逃げろ!!敵艦が迫ってる!〉

「え．．．」

「レーダーには一隻だけですが．．．速いです!!」

〈この前確認した新型艦だ!!早く逃げろ!!〉

「接触まであと5分程度です!!」

いそがせさんが叫ぶ。

「し、司令官さん!もう間に合わないのです!」

〈間に合うもクソもあるか!!撤退しろ!!〉

「ぜ、全員転進!撤退なのです!」

「敵艦．．．高速目標分離!!」

「え．．．?」

高速目標．．．?それは司令官さんから嫌というほど聞かされた。

ミサイル．．．

「くっ．．．シースパロー発射始め!!SALVO!!」

「シースパロー発射!!」

二人から迎撃ミサイルが発射される。

「二人は早く逃げてください!!相手がミサイルを使ってる艦なら私たちが相手をしたほうが得策です!」

「わ、わかりました!でも．．．すぐに逃げてきてください!」

「分かっています!いやがらせ程度に対艦ミサイルを発射したらすぐに逃げます!」

「ねえいそがせ．．．いやがらせ程度って．．．」

「今はそんな話してる場合じゃないです!」

「はいはい・・・さてと、やつちやいますか。インターセプト5秒前つと」

私は響お姉ちゃんと撤退を開始する。

「電、砲弾に近接信管はついてるかい？」

「えっと・・・」

私に搭載してある76mm速射砲の砲弾の種類を確認する。

「一応なのです」

「私には電探があるからもし何かあったら頼むよ。電のと私のじゃ性能が違うからね」

「なのです！」

「いそかぜく」

「命中！撃墜！！」

「さて、せいじゃ先に撃つちやうよ」

「はい、続いて撃ちます！」

うらかぜからミサイルが発射される。

私も続いて一発発射する。

ブースターが切り離され、ミサイルは低空で飛翔していった。

「じゃ、私たちもあの二人に追いつこう」

「そうしましょう」

レーダーを確認しながら撤退を開始する。

「敵艦から2つ目標分離・・・あく・・・やっぱ迎撃してきたか」

「みたいですね」

「まあ私は2発発射したし、全部迎撃できるとは思わないけどね」

「私もトマホークですからね・・・」

敵艦の艦種が分からない以上、なんとも言えないが。

ただ、すべてをミサイルで迎撃できるとは思えない。

速度的にほとんど全弾が同時に弾着するように発射した。

「えっと・・・うわ・・・全弾撃墜された・・・しかもまた向こうがミ

サイル発射、こんどはこつちを狙ってるね」

「チャフをばら撒きつつ撤退しましょう」

「そだね」

二人でチャフをばら撒きながら前進する。

しばらくすると先行していた二人に追いついた。

ミサイルは上手い事チャフで逸れたそうだった。

「お二人とも・・・時間稼いでくれて・・・ありがとうございます！」

「いえいえ」

「それよりも・・・これ、逃げれそうにないね」

「はい、ちよつと無理そうですね」

「どうしてなのですか？」

「思った以上に敵艦の速度が高くて・・・たぶん、45以上は出てるかと・・・」

「45・・・」

高速ミサイル艇並の速度だ。

これは交戦する必要があるかも・・・

「司令官、撤退は無理です。交戦許可を」

〈交戦つて・・・逃げれないのか〉

「はい、敵艦が思った以上に高速で・・・」

〈クソ・・・了解、こつちからも増援を出す、支援攻撃を準備する。い

いか、絶対に誰も欠けるなよ〉

「分かってますよ、特に、うらかぜは失いたくないですから」

〈あの・・・失いたくないのはいいけど・・・夜はほどほどにな・・・〉

夜？なんの話ですかね？

とすつとぼけてるのはいいとして、敵艦がそろそろ危ない距離まで迫っている。

「司令官、これより交戦します」

〈了解・・・幸運を祈る〉

無線を切るのと同時に・・・

「敵艦から高速目標・・・2！」

「向こうも本気・・・ですよね」

「電の本気を見せてやるのです！」

「y p a！」

気合いは十分・・・よし、やります！

敵不明艦を拿捕せよ

くいそかせく

「シースパロー発射始め！」

「シースパロー発射!!」

うらかぜと一緒に2発つつ迎撃ミサイルを発射する。

「電さん、響さんは酸素魚雷の用意を」

「え?でも魚雷じゃ・・・」

「相手に回避と迎撃で手一杯にさせたところで砲撃します!」

「なるほど・・・了解なのです!」

しかし相手の能力がまだ分からない以上、成功するかどうか・・・

いや、やるしかない!

「命中・・・撃墜!」

「敵艦目視・・・ってあれ・・・」

「うそ・・・」

敵艦を目視した電さんとうらかぜが絶句していた。

私もそれを確認する。

「え・・・?電・・・さん・・・?」

あれ・・・電さんだ。

「わ、私・・・?」

「電によく似た艦だ、惑わされたらダメだよ」

「な、なのです!」

向こうはニヤつと笑いまたミサイルを発射してきた。

「もう!何発積んでんのよー!!」

「私に文句言っちゃってどうしようもないですよ!!チャフ散布!」

「んじゃ私はハーブーン発射!」

チャフを散布する前にうらかぜが対艦ミサイルを発射、すぐに私が

チャフを散布する。

早いうちに飽和攻撃でもしないと・・・

「そうだ・・・電さん、司令官に通達、敵艦に対艦ミサイルを最低でも5発発射してください!」

「ミサイル・・・了解なのです！」

電さんが鎮守府に無線をかけている間に私たちは迎撃準備をしていた。

相手はこっちの作戦に気づいているのか酸素魚雷を撃たれても余裕でかわせる位置から動こうとしない。

それよりも・・・

「ねえ・・・相手、撃ってこなくなったよね・・・」

「そうですね・・・」

チャフを散布し、ミサイルをかわした後から一発も撃たなくなつた。

代わりに機銃のような物がずっと空を見ている。

「いそかせさん、司令官さんから発射開始したとのことですよ」

「了解しました」

私は着弾時刻を予想し、ミサイルに敵艦の情報を入力する。

しかし・・・何か嫌な予感がする。

「ミサイル弾着まであと1分・・・トマホーク攻撃はじめ!!」

発射と同時に空中に複数の光が見えた。

鎮守府のミサイルだ。

「電さん、響さん！砲撃用意！」

「了解なのです！」

「y pa！」

しかし次の瞬間、敵艦が両手を広げたとと思うと、10発以上の防空ミサイルが発射された。また機銃も迎撃を開始、瞬く間に全弾撃墜された。

そして、相手はこっちを見て意地の悪い・・・いや、不気味な笑みを浮かべている。

「まさか・・・」

「どうしたの？」

「こっちの会話・・・筒抜けですね」

「筒抜け？でもそんなはずは・・・」

「指向性マイクでも装備しているのか・・・」

「どうするのです?」

「いつそ、宇宙空間から撃ってもらうかな」

「それこの海域吹き飛ぶのです・・・」

「相手の動きさえ止めれば・・・」

うらかぜのその発言である方法を思いついた。

・・・アポト―シス・・・それなら強力な電磁波で相手を行動不能にできる!

また、高度な電子システムを搭載していない艦には効果が薄い。

それを利用してアポト―シスで相手の動きを止め、電さんたちが撃沈する・・・

ただ、距離的に炸裂すると一時的に私もうらかぜも電子機器が使えなくなる。

だが、足は動く・・・それにロックオンができなくても指定座標にミサイルを撃てる。

これで飽和攻撃を行えば・・・

「みなさん・・・ちよつと勝手な行動を許してください」

「へ?」

直後、アポト―シスVを発射、気づいた敵艦が迎撃ミサイルを発射してくる。

「甘いですね・・・」

「ちよ!あれ私たちも危ないじゃん!」

「そうですね・・・ちよつとミサイル撃てなくなりますよ」

「それちよつとじゃないいいいいいい!!!」

「指定座標には飛ばせませすから」

「迎撃!迎撃できないでしょ!」

そんな会話をしているとアポト―シスが炸裂した。

強力な電磁波に襲われるが、奇跡的に炸裂距離が敵艦に近かったためミサイルの誘導装置やそれに必要なシステムが生きていた。

敵艦は何が起こったか分からないという顔をしたまま痺れて動けないようだ。

「このミサイル、迎撃しても効果出ますから」

敵に向かって言うのと悔しそうな顔で睨みつけてくる。
そして

「それじゃ・・・これで終わりです」

トマホークを2発発射する

「私たちも行きますー！」

電さんと響さんから酸素魚雷が発射された。

一直線に敵艦に進んでいく。

「どカーン」

トマホークが着弾、その数十秒後魚雷が次々と着弾していった。

だが、撃沈には至らなかった。

「ぬう・・・しぶといですね・・・」

〈へみんな、聞こえるか？〉

司令官から無線が入る

「はい、聞こえます」

〈へできればだが、アイツを捕獲してくれないか？〉

「今ならなんとか行けそうですが・・・」

〈へ出来ればいいからな、抵抗が激しかったら撃沈していい〉

「了解」

私たちは無線を切り、敵艦に近づく。

その時だった。

「私を・・・ただで・・・捕まえられると思うなア!!!」

絶叫と同時に一発の対艦ミサイルが発射された。

「やば・・・シースパロー準備!!」

「間に合いません！CIWS・・・」

迎撃を行おうと思ったとき、ミサイルが反転して敵艦に向かっていく。
く。

相手は不気味に笑ったままだ。

「まさか・・・!!」

「あ、危ないのです!!」

電さんが砲をミサイルに向ける。

「電さん！やめてくださいー！」

「でも……!」

「あの敵艦は……私たちに捕まるくらいなら……自爆する気です」
「だったら尚更!!」

たしかに迎撃して助けたほうがいいかも知れない。

だが……もう電さんが砲を構えた時には遅かった。

「やめっ……!」

電さんが何かを叫ぼうとしたとき、ミサイルが着弾、爆発した。

「なんで……なんで自爆なんかするのです!」

「敵に捕まって味方を売るくらいなら……って思ったんじゃないかな」

「でも……ってあれ……?」

敵艦が居た場所を見ると、破片の一つも浮いていなかった。

燃料も流れていない。

「もしかして……逃げられた……?」

「これは……逃げられたね」

「よかった……」

電さんは敵艦が無事だった事にほっとしているようだった。

「電さん、敵が無事でよかったですか?」

「え、い、いやあの!」

「あ、いえその!怒ってないですよ?ただその……なんだかいつもと違ったので」

「それは……やっぱり自分と同じ顔の人が死ぬところを見たくないって感じなのです」

「なるほど……」

「それより、お腹すいちゃったのです!帰還しましょう!」

進路を鎮守府に合わせて前進する。

あの敵艦……逃げられたならまた会敵する可能性がある。

正直……もうやり合いたくないな

間宮新作「鯛焼きが処刑されてる系パフェ」

あの遭遇戦から2日たった。

依然としてあの敵艦は撃沈したのか逃走したのは不明だった。

だが、逃走の説が濃厚だろう。

「ふく・・・さて、仕事終わりっつと」

「お疲れさまなのです」

「あ、電。明日の予定書いたノートとかある？」

「はい、すぐ出すのです。えつと・・・」

電は背伸びして棚を漁る。

それにしても最近・・・敵も性能を上げてきている。

ついにはミサイルを使用してくる水上艦が出てきた。

「ありました!」

「サンキュー。えつと・・・」

明日は赤城と加賀をほかの鎮守府といっしょに異機種間空戦訓練に出さないと・・・か。

あとは個人的な鎮守府内の施設改修と・・・それくらいか。

「電、施設改修んだけど、業者に食堂の冷蔵庫直すように伝えてくれる?」

「冷蔵庫ですか?」

「うん、最近調子悪いらしくてな。そのままほつといて食中毒出すわけにはいかないし」

「了解なのです」

「さて・・・一応仕事は終わったし、間宮でも行くか?」

「行くのです!甘いもの♪」

「よしっ!」

そういうわけで間宮に向かう。

間宮は鎮守府内にあるが、ここは民間人も立ち入り可能だ。

「そういえば司令官さん、最近新しいパフェ出たのですよ!」

「ほう、どんなヤツ?」

「名付けて・・・鯛焼きパフェなのです!」

「待つて嫌な予感しかしない。」

あの・・・鯛焼きが拷問を受けてるようになしか見えないヤツが・・・

いや、間宮さんのことだ。大丈夫だ・・・よな？

「いらつしやいませ〜」

「2人、大丈夫？」

「あら、司令官さん！はい、空いてますよ」

「お、よかった」

案内された席に向かうと近くに赤城と加賀が居た。

ちようどいいや、明日の事伝えとかないと。

「よ、赤城、加賀」

「あら提督」

「なんででしょうか？」

内容を伝えようとすると、頬つぺたにクリームつけた赤城が・・・

「提督がここに来るのは珍しいですね。はっ・・・もしや私のパフェを

狙って・・・?!」

「いや待て」

「このパフェは私のです！指一本触れさせませんからね!! Don't

touch my パフェエエ!!」

「触らねーよ、てかいらねーよそんなあくソデかいパフェ!!!」

すると加賀が・・・

「・・・という事は赤城さんを狙って・・・!？」

「いやあの・・・」

「Don't touch my 赤城さんん!!!」

「だから触らねーよ!!っーか赤城はお前の物かよ!!」

「やだ・・・加賀さんったら／＼／」

「お前らデキてんの!？」

もうツツコミ疲れたでござる。

「あのな・・・明日、DACTがあるんだよ、それに参加してくれ」

「ああ、そんな事でしたか・・・てつきり私のパフェを狙ったのかと・・・」

「私も赤城さんを犯されるのかと・・・」

「あの・・・提督さん何だと思われてるの？」

そんな疑問をぶつけたが・・・

「ではまた明日詳細をお願いします」

「あ、うん・・・」

パフエ食う前に疲れた・・・

とりあえず席に着く。

「司令官さん、何の話してたのです?」

「ああ、明日の話だよ」

「でも・・・なんか叫んでませんでした?」

「あの・・・もう掘り返さないでください・・・」

「なんかあったのです!?!」

「なんかあったのです・・・」

そんな話していると電が頼んでいてくれたのかパフエが運ばれてきた。

そのビジュアルは・・・

「おいしそうなのです!」

「おいし・・・そう・・・?」

鯛焼きが拷問を受けているビジュアルではなく、鯛焼きがパフエのソフトクリーム部分を啜えさせられているような状態で、固定のためチョコのお菓子が鯛焼きに斜めから突き刺さっており、拷問通り過ぎて処刑されていた。

「見た目が・・・」

見た目に引きつつ、パフエを食べると・・・

「美味しいな」

「おいしいのです!」

和風のパフエで餡子などが乗っているのだが思ったほど甘くなく、食べやすかった。

これ普通に美味しいな・・・見た目は別として・・・

そんな事していると間宮が来た。

「司令官さん、今日はありがとうございます」

「いえいえ、久々に甘いものが食べたくなっただけ」

「その鯛焼きパフエ自信作なんですよ!でも何故か売れないんですよ

ね・・・」

「いや・・・それは見た目・・・」

「それに、赤城さんが食べてる特盛パフエのほうが人気なんですよ」
「へえ、どんな客が？」

「主に女子高生とかですよ」

「ああ・・・やっぱり・・・」

「いいですよねえ・・・若い子って・・・」

あの世代ってあの量を食べてしまうんだから恐ろしい・・・

「しかも華奢な子まで食べちゃいますから・・・」

「それだけ美味しいんじゃないか？」

「それはそうなんですけど・・・鯛焼きパフエ・・・」

「だからそれは見た目が・・・」

「見た目ですか？」

「これ完全に鯛焼きが処刑されてんじゃねーか・・・」

「あ」

なんだ「あ」って。

「おい・・・なんだ「あ」って・・・」

「い、いま気づきました・・・」

「遅くね!？」

ちなみにこんな話の最中にも電は幸せそうな顔でパフエを食べていた。

「か、改善を頑張ります・・・」

「が、頑張ってください・・・」

何故かしよんぼりした間宮は厨房に戻っていった。

「味は美味しいのになあ・・・」

どうしてこうなった。って言いたくなる見た目なんだよなあ・・・

ちなみに胴体貫かれている鯛焼き君、皮はモチモチで美味しい。

「ふく・・・ごちそうさまなのです!」

「ごちそうさま」

お会計を済ませて店の外にでた。

「司令官さん、もう外が暗いですね」

「前はもっと明るかったのにな」

「でも私、この時期好きなのです」

「なんで？」

「なんとなくなのです、強いて言えば外が寒くもなく暑くもなくで夜空を眺めれるから・・・なのです」

「そっかや今日は満月だな」

「お月さま、キレイなのです」

月を眺めながら鎮守府構内を歩く。

俺の寝泊りをしている部屋までは約400mくらいだ。

「なあ電、月明かりもキレイだしちよつと港のほうに行くか」

「港ですか？」

「ああ、たぶん今日は海がキレイだろうしな」

ちよつと遠回りして港に向かう。

昼間は少し騒がしい港も今は静かだ。

「あれ？人影なのです？」

「ん？本当だ」

港を歩いていると二つの影を見つけた。

シルエットからして女の子っぽい。

「んっ・・・誰だ？」

「さあ・・・」

耳を澄ましていると・・・

「好きだよ・・・いそかぜ・・・」

「私もです・・・」

「ねえ・・・ここなら誰も見てないし・・・」

「・・・うらかぜとなら・・・いいですよ・・・」

・・・あのレズ共かい。

てか待て。ここで行為を始める気が貴様ら。

止めに行こうとしたら・・・

「いそかぜ・・・結婚してください！」

「・・・喜んで・・・！」

え・・・プロポーズ・・・？

「あの・・・司令官さん・・・?」

「目の前でプロポーズしちゃってるな・・・」

「いやあの・・・結婚おめでとうございます。」

「じゃない!!!なんでお前ら今、ここでやってんだよ!!」

「とりあえず・・・場所変えるか・・・」

「なのです・・・」

アイツらの邪魔するわけにもいかんしな。

と思いつその場を立ち去ろうとして後ろを振り返ると・・・

「うら、かぜ・・・はう・・・ん・・・!」

行為に入ってた。

やっぱりかい。

「電・・・さっさと部屋に帰ろう」

「なのです・・・」

というわけで部屋に帰り、風呂に入る準備をする。

「おっふる〜♪おっふる〜♪」

電が鼻歌を歌いながら着替えを準備していた。

ちなみに最近、俺の部屋に風呂を増設した。

一応、艦娘寮の個室にも増設できるようにしているがどうしてもまだ時間がかかる。

やっぱり、冬に長い廊下を歩かせて風呂に行かせては酷だ。

「やたら機嫌がいいな」

「えへへ♪司令官さん、一緒に入るのです♪」

「おっしや・・・ってちよつと待てい!!」

「なんか変なこと言ったのです?」

「言ってますよ、思いつきり言ってますよ!」

「?」

気のせいかな?顔赤いぞコイツ・・・

ふと電の足元を見ると・・・

「あれは・・・俺が冷蔵庫に入れてたオレンジジュースサワー・・・」

間違つて飲んだな・・・

「電・・・酔ってるな・・・」

「酔ってなんてないのです！さあ、お風呂行くのです！」

「あれ、気のせいかな？強制？」

「なのです！」

「フンス！って鼻息を出しながら答えるが・・・

いやホント待つてください。

「待つて、襲うよ俺！」

「い、いいのですよ・・・？」

「よくねーよ」

冷静に返答してしまった。

しかし電は・・・

「さあ脱げこの野郎なのです！！」

「え」

「脱がんとタマ潰したろかワレエ！なのです！」

「まて！！どこでそんな汚い言葉覚えた！！」

誰だアアア！！三枚おろしにして南蛮潰けしてしてやるから出てこ

いコラー！！

なんて事してる間に風呂場に連れ込まれましたとき。

「んふふく・・・じゃあ早速・・・」

司令官の主砲をなんで啞えようとするんですかねアナタ。

「まてコラ・・・」

「んぐぐぐく・・・もうちよつとでく・・・！！」

「もうちよつと俺の理性飛ぶからね！」

「いつそ飛んじやえ、なのです！」

「マジですか・・・」

そして力が抜けた瞬間・・・

「あむっ！」

「フォッ!？」

食われた・・・俺の主砲が・・・

というわけで朝。

いやもう疲労がハンパじゃねーです。

「電……. どんだけ溜まってたんだよ…….」

しかもまあ……. 避妊具なんて用意されてないし…….

「まあでも……. 電との子供……. ならいいかな」

「んふ……. ママですよ……. むにや…….」

「夢の中ではママですか…….」

「パパ……. 遊園地行くのです…….」

「……. 子供……. 出来たら、みんなで行こうな」

寝言を言う電の頭を撫でながらそんな事を思った。

退役したら北海道にでも引っ越してほのぼの暮らしたいな。

あ……. でも東京も捨てがたい…….

なんて将来の計画を立てていた。

航空偵察任務

吹き込む風が寒くなってきたこの頃。

秋刀魚が食べたい。

「はあく・・・腹減ったく・・・」

「もう、まだ3時なのですよ?」

「んなこと言ってもだな・・・」

「もう・・・私がおにぎりでも作ってきてあげるので」

「お!さんきゅー!あ、塩は電の手汗でい・・・ぎやあああ!!!」

「なんか言ったのです?」

「何も!何も言っていないから指折れるうううあああ!!!」

なんだよ!嫁の手汗で塩味が付いたおにぎりとか最高だろ!

と、なんか思考がおかしくなってる俺がいた。

こんな季節だしね、仕方ないね。

「さて、おにぎり作ってくるのです!具は何がいいですか?」

「アあん・・・指痛いよう・・・あ、具は電の髪の毛のk・・・ぎやあああ

ああああ!!!」

「いっぺん・・・死んでみる・・・?なのです」

「ごめんなさいいけません許してくださいやあああああああ!!!」

「いつたいなんで今日に限ってそんなに変態さんなんですか・・・司令

官さん・・・」

「うう・・・痛いよう・・・」

「これ聞いてないですね・・・具はこっちで決めますね」

腕を変な方向に曲げられて関節外れそうになったでござる。

で、なんでこんなに今日は変態なのかって?

H A H A H A!俺も分からねーぜ!

そんなこんなしていると司令部から電話が

「はいもしもし」

へ大佐か?ちよつとした偵察任務を任せたいんだが・・・

「はあ、偵察ですか・・・む、まさか女風呂を!」

へへいやまで・・・いろいろマズイから

「じゃあ・・・女湯の露天風呂を空撮ですか?! よっしや任せろ!」

〈へねえどうしたの?! 今日どうしたの!?!〉

「俺も分からねーぜ!! H A H A H A!!」

〈へいやまあ・・・この近海に深海棲艦の活動が活発になってる場所があるんだ。どうも泊地を建設中らしい〉

「つまり・・・」

〈へつまり?〉

「そこの泊地の女風呂を偵察っすね!」

〈へいやちげーだろ!! どんだけ女風呂好きなんだお前!〉

「はあ!? 女風呂とか最高のパラダイスじゃないっすか!!」

〈へ君いったいどこで拾い食いた?! 昨日何食った!?!〉

「え、昨日? 昨日なら電と体を重ね・・・あああああああああああああああ
あああ!!」

〈へえ、ちよ、大佐? 大佐・・・大佐アアアアアア!!!〉

俺氏、突然意識を失う。

ボクが一体・・・何をしたって言うんだ・・・

突然の頭部への衝撃のあと俺は意識を失った。

く電く

今日の司令官さんどうしたのです・・・あ・・・そういえば今朝盛大に転んで頭打ってたのです・・・

「女風呂とか最高のパラダイスじゃないっすか!!」

司令室の前にお茶とおにぎりを持ってきた時、そんな声が中から聞こえた。

何話してるのですかこの変態は・・・。

いやでも・・・今日は頭打っただけなのです、きつとそのせいでおかしくなってるだけなのです! 私は司令官さんを信じるのです!

「司令官さん、入り・・・」

「え、昨日? 昨日なら電と体を重ね・・・」

私はその言葉の続きを瞬時に理解して司令官さんの顎にアツパーを入れた。

た、確かに昨日はしましたけど! そこから先ほかの人に言われるの

恥ずかしいのです!!

「司令官さんの変態!変態変態!!なのです!!」

「それは我々の業界ではご褒美・・・で・・・す・・・」

何か変態的な言葉を言い残して、司令官さん撃沈。

〈あ、あの、もしもーし!〉

「電話代わったのです」

〈ああ、電か。大佐はどうしたんだいったい・・・〉

「あの・・・頭をぶつけて・・・」

〈ああ・・・OK、状況を理解した〉

「それで、何の御用なのです?」

〈ああ、内容は・・・〉

近海での偵察任務だ。

この近くで敵の活動が活発になっていいる地域が確認され、近くには泊地のような物が建設中らしい。

またすぐくどうでもいい情報だが、この海域、やたらと秋刀魚がいるとか・・・

すぐくどうでもいいのです・・・

「了解なのです、司令官さんが起きたらまた伝えるのです」

〈ああ、作戦自体の決行はなるべく急ぎで頼む〉

「了解なのです」

電話を切ったのはいいが・・・司令官さん・・・どうしよう・・・
そんな事を考えていると。

「うくん・・・」

「あ!司令官さん!元に戻ったのです?」

「元ってなんだよ・・・いてて・・・」

「あの、司令官さんが寝てる間に任務が来たのでお伝えしときますね」
「ん?任務?」

「はい、付近の海域を偵察だそうです」

「はいよ、んじや早速、赤城、加賀、アンドロメダ、いそかぜを呼んでくれるか?」

「了解なのです!」

司令官さん……元に戻ってよかったです……いやもう本当によかったです。

↳提督↳

「……が今回の任務内容だ。いそかぜは付近の索敵、アンドロメダは情報処理だ。あと念の為、鎮守府の即応戦力としてシンファクシを待機させる」

「そういえばシンファクシさんの姿を最近見てなかったんですけど……」

「ああ、アイツならユークの実家に里帰りしてたぞ」

「じ、実家あったんですか……」

「建造された工廠じゃなかったか？」

「ああ……オクチャブルスクの……」

てか、潜水艦の里帰りってなんかすごい壮大な気がする。

そんな話は置いといて。

「まあ、そんなわけだ。出撃準備急げ！」

「了解！」

↳赤城↳

そろそろ偵察隊を上げないと。

あの子たちはもういつでも飛び立てるみたい……

うん、行きます！

「艦載機発艦はじめ！」

「……発艦はじめ」

私と加賀さんが放った矢が空中で光、十数機の航空機が変わる。

「メビウス隊、加賀航空隊ともにレーダーコンタクト……」

アンドロメダさんは隣で偵察機の情報を受け取る準備を始めていた。

「レーダーに敵影ありません、空域、海域ともにクリアです」

「いそかぜさん、それは偵察海域もですか？」

「いえ、偵察海域には霧のようなものがかかっているレーダーには何

も・・・たぶん、電波妨害の可能性が・・・」

電波妨害・・・知らない子ですね！

「それだと・・・私もデータ受信ができないですね」

「一応、アンドロメダさんと私の電子装置は強力ですし、問題はないと思いますよ」

「念の為、ECCM起動します」

「了解」

二人からはもはやどこの国の言葉か分からない単語が飛び交っていた。

加賀さんのほうを見ると涼しい顔をしていたので・・・

「加賀さん、今の二人の話、何かわかりました？」

「ええ」

「さすが加賀さ・・・」

「まったく分からないわ」

「ですよー・・・」

くメビウス隊く

「まもなく偵察空域に到着、偵察準備」

〈こちら2、眼下に何か見えた・・・写真撮るね〉

〈こちら加賀航空隊、敵機か？〉

〈へいや、たぶん違うよ。敵機はお願いね！〉

〈赤城さんトコのは偵察に集中してくれ、尻はアタシ達が護る〉

「頼もしいことで・・・」

偵察空域は驚くほど静かだ。

無理いつて増設してもらったレーダーにはまだ何も映っていない。

スイッチをいじり、レンジを10nmから25nmに変更する。

すると小さな光点が映った。

「メビウス1より加賀航空隊、現在地から20マイルくらいに反応・・・たぶん・・・航空機だと思う」

〈了解、迎撃に向かう〉

「今回は私たち、レーダー積んでて重いからホントに頼むからね！」

〈ああ、任せろ〉

6機の烈風が旋回して迎撃に向かった。

私たちは散開しているため、敵機に補足されると回避が難しい。

「メビウスーから被弾姫、聞こえる?」

〈ちよ!!だから誰が被弾姫よー!!〉

「何か異常ある?」

〈無視かーい!スルーですかー!!異常はありませんよーだ!〉

「ならいいんだけど・・・なんかまたアンタが一番最初に落ちそうな気がして・・・」

〈なんでよー!!〉

「乙女の勘ってヤツかな?」

〈そのまま物騒な勘があつてたまるか!つて言いたんだけど・・・敵影目視・・・〉

「ちよ、早く逃げなさい!!」

〈うーん・・・難しいかも〉

「難しいかもじゃないわよ!!私が守ってあげる、早く!」

〈こういう時だけ優しいんだから・・・〉

「冗談言ってる場合じゃないわよ!!」

私はすぐに旋回してメビウス8のいるほうに向かう。

「加賀航空隊!こちらメビウスー!援護要請!」

〈ま——れ!!——右に避け——撃——〉

「何?!聞こえない!!」

〈アンドロメダよりメビウス隊!緊急離脱してください!パーンパーンパーン!コードU、ユニフォーム!ユニフォーム!〉

コードU・・・私たちが決めたフォネティックコードがある。Uはアンノウンを示している。

つまり・・・不明機が接近しているのだ。

「もう・・・目の前・・・だよ!!」

機体が重い・・・!でも・・・敵機よりは機動性が残ってる!!

「オメガ!ブレイクレフト!ブレイクレフト!!」

〈くっ・・・こいつ・・・!!〉

私は落ち着いて照準を合わせる。

後ろには別の敵機が食いつこうとしていた。

「くっ……でも!!こいつだけは!!」

照準があと少し……あと少しで合う!

「発射!!」

〈撃墜!ありがとう!!〉

「お礼はいいから後ろのどうにかしてー!!」

敵機に食いつかれ、ハイGバレルロールで敵の照準を外そうともがく。

「ハアハア……!!くそっ!!」

Gのせいで呼吸も苦しい。

でも、苦しさから逃げようと旋回を緩めれば撃墜される。

〈隊長!!そのまま機首下げて!!〉

「え?」

私は思わず機首下げを行う。

後ろを振り向くとちようど敵機の機関砲が火を噴いたのが見えた。

同時に……

〈当たれええええ!!〉

敵機が爆発を起こすのも見えた。

「グツキル!グツキル!!」

〈ハアハア……ふう……スプラッシュワン!〉

「まさか助けられるとは……それもオメガに」

〈まさかかって何よー!!〉

「えへへ、冗談だよ、じよーだん」

横を飛んでるオメガに笑顔を向け正面に向きなおすと……

「あ……」

火を噴きながら突っ込んでくる敵機のロケット弾が迫っていた。

油断した……

「オメガ……ごめん……」

私の最期の言葉をオメガに言う。

静かに目をつぶる

空で死ねるなら・・・まあ・・・いいか。

〈うわああああああああああああああああ!!!〉

オメガの悲鳴のような声と爆発音。

目を開けると小さな破片と爆煙が空に散っていた。

「オメ・・・ガ・・・?」

被弾したのはオメガだろう。

その機影をさがすと。

「オメガ・・・どこ!?」

〈へこ、ここだよ〉

「どこ・・・どこよお!!」

〈へこだって!〉

その瞬間、胴体に複数の穴が開いたオメガの機体が目の前を横切った。

「あなた・・・被弾して・・・」

〈えっへっへっ、いつもの事じゃん〉

「いつもなら脱出してるでしょ!!」

そうだ、いつもなら被弾したら必ず脱出している。

でも・・・

「オメガ、赤城さんまで帰って!」

〈ええ、大丈夫だよ〉

「帰りなさい!!これは命令よ!!」

〈・・・〉

〈オメガ?どうしたの?〉

〈こちらさ、隊長、状況は?〉

「ごめんみんな、ちょっと待ってて」

今はオメガを帰らせないと・・・

脱出できたなら何か不思議な力か何かで母艦まで帰れるが・・・墜落か撃墜は帰れないのだ。

つまり・・・死ぬということになる。

「オメガ!お願いだから帰還して!」

〈・・・無理・・・かな〉

「・・・？」

〈燃料タンクに穴が開いてるの。それに左のエルロンの反応がまるで無い・・・エレベーターも反応が薄い・・・急激な機首上げとかが全然できないよ〉

「そ、それ・・・」

つまり・・・ほとんど操縦不能だ。

「だったら脱出！脱出しなさい!!」

〈それも・・・無理かな〉

「なんでよ!!」

〈キャノピーのフレームが歪んじゃって・・・扉が開かないんだ〉

「あなたどんな状況でも脱出したじゃない!!脱出してよ！お願いだからあ・・・!」

私はいつの間にか涙声になっていた。

目の前で仲間を失うなんて嫌だ!

「そうだ・・・機銃でキャノピーを撃てば・・・!」

私はそう思いつくが・・・すぐに現実に戻る。

もしオメガに当たったら？

さっきの空中戦の最中に7.7mm機銃が給弾不良を起こしている。

今残っているのは機関砲のみだ。

しかし20mmなんて口径が人体をかすめれば？

「どうすれば・・・!」

〈無理だよ〉

「なんで諦められるのよ!!」

〈何でって・・・私自身が・・・被弾してるもん〉

「え・・・?」

背面飛行を行いオメガの真上を通過する。

・・・コクピットに血が広がっていた。

「ち、血が・・・」

〈ケフツ・・・だから・・・無理なんだよ〉

「やめてよ！無理なんて言わないでよ!!」

何とか助ける方法は・・・

そんな事を考えていると被弾しているオメガを狙って敵機が迫ってきた。

「この・・・邪魔するなアアアアア!!」

残りの20mm弾を敵機に叩き込んだ。

その間にオメガの高度はどんどん下がっている。

〈ああ・・・レーダーが消えた・・・配電盤がイカれてる〉

「お願い・・・生きて！死なないでよ!!あなたどんな状況でも脱出して笑顔で帰ってきてたでしょ!!」

〈・・・〉

〈隊長・・・〉

「なによー!アンタは黙っててよ!!」

私は思わず僚機に怒鳴りつける。

〈・・・敵機が撤退を始めた、加賀さんの航空隊が勝ったみたいだよ〉

「だから黙ってて!!そんな事どうでもいいのよ!!」

完全に冷静さを失っていた。

どうする・・・どうすれば・・・機体をぶつけてキャノピーを・・・

ダメ!それじゃオメガが・・・

〈隊長、下に敵の空母が見える・・・〉

「空母・・・」

確かに眼下に敵の空母を発見した。

そして私は最悪の状況を予想してします。

・・・体当たり・・・

「オメガ・・・やめて・・・そんなことしないで!!」

〈えへへ、やっぱりわかったんだ〉

「やめてって!!お願い!帰ろうよ!!」

しかしオメガは急降下に入る。

外れかけていたエルロンがその急降下の影響で吹き飛ぶ。

「やめ・・・やめて!!オメガあああああ!!!」

〈えへへ、いい声・・・最期に命令違反をごめんなさい・・・〉

「オメガアアアアア!!!」

数秒後に敵空母の艦載機発着口に機体が飛び込み大爆発を起こす。
敵空母はその爆発で轟沈した。

「オメガ・・・バカ・・・バカ!!バカバカバカア
!!!!!!」

くいそかせく

「メビウス8・・・レーダーロスト・・・」

「こちらも確認しました・・・同時に敵空母撃沈確認」

「レーダーロストってどういうことですか!?!」

「赤城さん・・・一機・・・落ちました」

「そんな・・・」

赤城さんはその場に膝をつく。

「赤城さん」

加賀さんは冷静に赤城さんい声をかける。

「・・・これは戦争なんです」

「だからしょうがないんですか?!そんなの・・・」

「でも私たちは艦の時代にも多くの未帰還機がいました。敵だつて・・・」

「・・・」

・・・私はその状況を眺めるしかできなかった。

「・・・偵察・・・終了しました。敵泊地・・・確認できず、です」
「了解しました」

泊地に見えたのは過去に作られた陸軍のLCC用の基地と放置されたLCCだった。

こちらの損害は14機中、4機撃墜だった。

メビウス隊の隊長機は燃料が尽きかけるまで搜索を続けていた。

リボンが一つ消えた空

「よし、午前中のノルマは達成だな」

今日は電は遠征で出かけていていない。

背伸びしながら何気なく外を見る。

海を見ながら堤防に腰かけている少女の姿が見えた。

「アイツ・・・またか」

メビウスの隊長だ。

オメガが落ちてからずっとあの調子だな・・・

「どれ、ちよつくら行ってくるか」

俺も昔は隊長機だった。

仲間が落ちる気持ちは痛いほどわかる。

司令部を抜けて、隊長の元に向かう。

ちなみに非番時の妖精は人間と同じサイズになっている。

「よ、隊長」

「・・・司令官」

「オメガの事か」

「・・・」

目の下にはクマが出来ていて完全に憔悴しきっている。

「お前、最近寝てないだろ」

「関係ないよ・・・」

「そりやお前が寝ようが寝まいが俺には関係ないけどな・・・」

「じゃあ何・・・気休めみたいな慰めならよしてよ！」

突然怒鳴る。

相当精神的に来てるな。

「なあ、俺が元パイロットだったの知ってるか？」

「知ってるけど・・・」

「じゃあ、俺がお前と同じ名前の隊にいたことは？」

「知ってる・・・」

「じゃあ・・・僚機をもう2人失ってるのは？」

「・・・」

まあ、誰にも話してないし知らんわな。

知ってるのはケストレル、アンドロメダくらいか。

「あれは・・・ベルカ戦争の時だったか・・・やつと戦争に終止符を打てそうな時だったよ。俺は二機編隊で飛んでたんだ」

メビウスは黙って聞いている。

「つーかよく考えたら俺、コイツの名前知らねーや・・・」

「めちやくちやな任務だったよ、ダムに飛び込んでミサイルの制御装置ぶっ壊して来いって・・・んで、そんな時の僚機はなんて言ったと思う?」

「・・・なんて言ったの・・・?」

「俺のファルコンならちっさいから余裕だ! ってな」

「それで・・・落ちちやった・・・?」

「いや、まあ見事にダムに飛び込んで制御装置をぶっ壊したよ」

「じゃあ、なんで・・・落ちちやったの? その人は・・・」

「ダムを飛びぬけて上空に上がったとき。まあ・・・彼女が待ってるだとか何とか言ったら目の前からレーザーが飛んできてな」

「レ、レーザー・・・?」

予想外の攻撃方法にメビウスは目を丸くしていた。

そりゃ・・・ふつうレーザーなんか飛んできませんわ・・・

「そのレーザーは俺を狙ってた。だけど・・・そいつは急旋回で俺の目の前に出てきて盾になったんだ」

「・・・オメガも・・・」

「ああ・・・アイツと一緒だよ」

仲間を護るために自らを犠牲にした。

PJもそうだったな・・・

「しかし・・・その僚機を撃つたのは俺の元相棒・・・ひどく混乱したよ」

「なんでその相棒は敵になったの・・・?」

「国境がどうたらって言ってたな・・・まあ・・・今となつては国境なんてもう意味のない線だが」

今は深海棲艦の影響で大抵の国家は孤立してしまっている。

艦娘や深海棲艦に対抗できる物を持っているなら別だが・・・

「ねえ・・・もう一人は・・・どうして落ちたの・・・？」

「ああ・・・アイツの時は・・・お前と同じ状態になったなあ・・・」
「え？」

「今度は環太平洋戦争の時だ。オースシアのスタジオム上空で展示飛行をしてた」

あの戦争が・・・今思えば一番クソツタレだったなあ・・・

「そしたら、いきなり敵機が襲撃してきて上空は大騒ぎさ」

「なんで敵はスタジオムを？」

「そりゃ、そこに副大統領が居たからさ」

「大統領は？」

「その話はあとで出てくるよ。そんで俺の僚機・・・TACネーム「チョツパー」ってヤツが被弾したんだ」

「チョツパー・・・」

「おしゃべりなロックロールオタクでさ、いつも俺の部屋に来てはロックンロール祭だったよ」

「にぎやかだね」

「いや・・・にぎやかかって騒ぎじゃかったけどな・・・」

何回壁ドンされたか・・・

「んで、被弾したんだけど損傷は大したことなかったんだ。でも安全のため離脱が必要だった」

「その時味方は来なかったの？」

「来たよ・・・すべてが終わった後だったけど・・・」

8492・・・

「それで味方呼んだ。だけど・・・あいつ等演習だって言って撤退しやがった」

「え？でもレーダーで・・・」

「ああ、見えてたよ。だけど増援って言うのがな・・・」

「増援が？」

「まあ、続きだ。それでチョツパーの損傷が時間がたつごとに酷くなっていった。バイルアウトが必要になったんだ」

「脱出できなかった・・・？」

「いや・・・しなかった」

「しなかった？」

「アイツは機体を落とせる場所がないか探していた。一般市民の頭の上に戦闘機を落とすわけにもいかないから・・・それで・・・スタジアムを見つけた」

「そのスタジアムに・・・」

「ああ・・・じゃあ脱出しようって話なった時には遅かった・・・電気系統の破損で射出座席が反応しなかったんだ」

「・・・」

「着水って手もあった。緊急着陸だっただきたらうに・・・だけど、もし爆発を起こせば罪のない市民が死ぬ。チョツパーはそう考えて最小限の犠牲で済ませようとしたんだ」

「それで・・・落ちたの・・・？」

「そうだ、まっすぐスタジアムに降下して・・・ど真ん中に機体を落とす・・・自分も一緒に・・・あの日の空中管制指揮官の声が耳に残ってるよ」

「なんて・・・言ってたの？」

「普段は石頭のつまらないヤツがき・・・諦めるなチョツパー！頑張るんだ、チョツパー！！って叫んでた。普段はTACネームなんて言わなかったのに」

そのあとのアイツの声だっ・・・忘れたことがない。

いや、忘れるなんてできない。

「それで・・・アイツは「へへっ・・・いい声だぜ・・・」って最期の言葉を残して・・・落ちた」

「オメガも・・・」

「ん？」

「オメガもそう言った・・・私の事・・・いい声って言って・・・ごめんささいって・・・」

メビウスは泣き出す。

「司令官・・・私どうすればいいの・・・？もう飛べないよ・・・」

「・・・割り切るしかない」

「割り切る!?仲間を!?やだよ!そんなの・・・やだよ・・・!」

「俺はこう考えたんだ。アイツのおかげで10人:いや100人:いや1000人:それ以上の人命が救われたんだって」

「オメガは・・・」

「アイツは空母を最期に撃沈した。その空母がどこを攻撃するかなんて分からない。だがそいつはもしかすると、首都を空爆したかも知れない。名前も分からない町を襲ったかも知れない。お前たちを襲ったかも知れない。でもそれをオメガが阻止した」

「・・・あの子・・・無駄死になんかじゃない・・・?」

「あたりまえだ。まあ・・・人が死んでいて・・・こんなこと言うのも何だが・・・アイツの事を誇りに思え。アイツのおかげで何千いや、何万の人命が救われたんだって」

「でも・・・」

「どういっても、どう思っても帰ってこないんだ」

「そんな事・・・言ったって・・・」

「じゃあお前がもしその調子で飛んで落されたらオメガはどう思う?アイツはお前に生きて欲しくて助けたんだ、それを忘れたらダメだ」
「・・・オメガ・・・」

「何も忘れろってわけじゃない、アイツの事を隊の誇りだっと思ってやれ」

「うん・・・分かった・・・」

「どうだ、少し元気出たか?」

「何とかね・・・もうちよつとかかるけど・・・」

「そりゃ、すぐに治るわけじゃないさ、まあゆつくり休んでアイツとの思い出を心に刻んとくんだけぞ」

「うん・・・分かった・・・ありがと・・・司令官!」

「ああ、さて・・・俺も昼飯食いに行くかな・・・」

気付けば一時間くらい話してたな。

今日は電の手料理食えないし・・・

司令室にまだ缶飯があつたしそれでもいいか。

「あと仕事何残ってたっけな・・・」
考えたくもない・・・
そんな事思いながら司令室へと戻った。

あの真っ黒い空飛ぶ6足歩行戦車

今日も一日頑張るぞい。

とか思いながら机に向かう。

「そろそろ経理課作ったほうがいいかな・・・」

手元にあるのは経費の書類、書類、書類・・・

40cmくらいの山になっていた。

大半は資源に関する物だったりする。

燃料不足で中東から独自ルートで輸入したのはいいが・・・

やっぱり高くつくな・・・

「電、コーヒー一杯入れてもらえるかな」

「了解なのです！あ、ミルクと砂糖はどうするのです？」

「んく・・・一応つけてもらえるかな」

「分かったのです！」

電にコーヒーを入れてもらっていると、いきなり部屋に警報が鳴り響く。

「うおわあああああ?!?!?なんだ!?!」

続いて無線から・・・

〈〈CP！CP！こちらデルタ4！駆逐艦娘寮で敵と遭遇！増援求む！送レ!!〉〉

〈〈こちらCP、了解。過剰戦力を回す〉〉

何で侵入されてんだよ!!

さすがに俺も出たほうがいいな

「電、お前はここに居ろ。いいな」

「で、でも・・・」

「命令だ、安全なところにいるんだ」

「わ、わかったのです・・・」

手元にあった89式小銃に弾を込め俺も艦娘寮に向かう。

「デルタ4、聞こえるか？」

〈〈こちらデルタ4！提督ですか?!〉〉

「ああ、状況は？」

〈へビジュアルコンタクトロスト・・・警戒を厳に・・・うわあああ!!〉
「おい！応答しろ！」

〈へいやあああああああ!!出たあああああ!!!〉
つづいて無線機から艦娘の悲鳴が聞こえてきた。

出た・・・？

〈へバ、バカ！大きい声だすからこつちに來たじゃない!!〉

〈へだ、だつてえ!!〉

〈へあんたいつまでも驚いてないでどうにかしなさいよ!!〉

〈へじ、自分にも・・・ぎやあああああ!!飛んだあああああ
あ!!〉

〈へいやあああああ!!キモイイイイイ!!〉

無線から聞こえる悲鳴。

!!!

あと単語から状況が予想できた。

・・・Gかよ・・・

「あく・・・デルタ4、Gが出たのか？送レ」

〈へですす!!そうなんです!!アパーム!!新聞紙持つてこーい!!〉
なんだこれ。

正直な感想がそうだった・・・

「はあ・・・89・・・いらなかったな・・・」

そんな事思いながら艦娘寮に入る。

「しししし司令官!!出た、出たんですうう!!」

いきなり いそがぜに飛びつかれた。

目の前には泡吹いてぶつ倒れてる うらかぜが。

「あく・・・コイツどうした・・・」

「う、うしろから飛んできたアレに・・・」

「なんて不幸な・・・」

それよりも白目剥いて、首に手を回して泡吹いてる姿どうにかなら
ねーのか・・・

ホラーだぞ・・・

「つたくG一匹に何騒いで・・・」

ふと足元に視線を向けると・・・

「・・・・・・・・・・」

Gが「やあ！」って感じで俺の目の前に出てきた。

「ででででで出たああああ!!!」

「誰かアアア!!新聞紙イイイ!!!」

いや、Gがいきなり目の前に出てきたら誰でもビビるでしょ。

とか心の中で言い訳しつつ、パニくる提督であった。

「チツ・・・消えた!」

「司令官!逃げましょう!ここはもう終わりです!」

「いやそこまで大事じゃないからね?」

まるでゾンビでも発生したみたいな・・・まあいいか・・・

「とりあえず搜索・・・あ」

「え?」

何かプチツツという音がしたと思い、足を上げると・・・

「・・・・・・・・・・ぎゃあああああああ!!!」

G・・・ふんじやった・・・(号泣

「司令官、もう二度と私に近づかないでください」

「やめて司令官泣いちゃう」

とりあえず泣きながら処理をした。

それよりもどこから発生したのか・・・

「なあ、アレどっから出てきた?」

「天井裏から・・・」

「ふむ・・・」

天井か・・・となると早いところ駆除しないと・・・

「いそがせ、ガスマスクと強力な殺虫剤頼むわ」

「了解しました」

いそがせにガスマスクと殺虫剤を取りに行ってもらおう。

少し待っていると・・・

「・・・・・・・・・・」

「出てこい・・・チェーングンが待ってるぜ・・・」

なんか顔に迷彩塗装をしたアンドロメダがM134を持って歩いてきた。

「……なにしてんだお前」

「何って……害虫退治ですよ?」

「あ、うん……そっか……」

そんな害虫退治あつてたまるか。

そんな事思っていたら……

「ケ、ケストレル! やめなさいって!!」

「離してバーベツト!! 汚物は消毒するんだから!!」

「あなた火炎放射器もって何言ってるのよー!!」

こんどは火炎放射器を持ったケストレルが出てきた。

後ろから必死で止めようとしているバーベツト。

「おまえらなんで駆逐艦寮にいるんだ……」

「アンドロメダの部屋でU N O してたら……それよりケストレルを止

めるの手伝ってよー!」

「いや……まだ焼かれたくない」

「ヒヤッハアアア!! 汚物は消毒よオオオオ!!」

「出て来いクソツタレええええ!!」

アンドロメダ、ケストレルが暴れ始めた。

……どうすりゃいいんですかねコレ。

「ハア、ハア……司令官、持つてきま……し……た……」

「あ、おかえり」

「どうしたんですかコレ……」

「ちよつとクレイジーになった二人が暴れだした」

「見たらわかりますよ!?! どうしてこうなつたんですか!?!」

「知らん、とりあえずガスマスクとコレ、もらうぞ」

いそがせから物を受け取り装着する。

さて、駆除に行こうかね

「バーベツト、いそがせ……その二人落ち着かせといてな」

「……」

すごく嫌そうだ。

とりあえず天井裏に向かう

「……どっかいせー!」

うわゝ．．．薄暗いな．．．
ライトをつけると．．．

「．．．．．」一匹見たらって言うけどさ．．．」
想像してごらん、100匹くらいのGが蠢きあつてる姿を．．．

「フアアアアアアアアック!!!」

とにかく殺虫剤をばら撒く。

なんとか数を減らしていくがそれでもまだいる。

「ちくしょう！何匹いるんだよー！」

殺しても殺しても湧いてくる．．．

そんな戦闘が10分ほど続いた。

「ハア、ハア、ハア．．．」

なんとか片付いたようだ。

ふう．．．

「あとはこれを掃除して．．．」

箒と塵取りを取りに戻ろうとした瞬間．．．

「うおわ!？」

床が抜け、下に落ちた。

「いててて．．．」

「．．．．．」

ぶつけた腰をさすりながら視線を上上げる。

そこには便座に座っている曙さんの姿が。

縞パンツ!!!

「あく．．．男子トイレと間違つたみたいだな、失礼」

「いやあああああああああああああ!!!!」

「逃げろい!!」

ダッシュで逃げる。

次の瞬間警報がまた鳴り響く。

〈〈CP!CP!こちらズールー!!トイレに不審者あり!交戦許可
願う!送レ!〉〉

〈〈こちらCP了解、細心の注意を払え〉〉

やばい、捕まったら殺される。
主に曙に殺される。

「どうやって逃げ・・・あんなところにダンボール！もらった!!」
不自然においてあるダンボールを被り警備がどこかに行くのを待つ。

足音が通り過ぎた・・・？

「ゆっくり逃げよう・・・」

少し立ち上がると・・・

「ん・・・!?!」

やっべ!!!

「CP、こちらデルタ3、ダンボールが動いている。送レ！」

〈へこちらCP、真面目にやれ。終ワリ〉

「クソツ！信じてないぞ！」

いや当たり前でしょうに。

「もういい、行くぞ」

「絶対動いてただけだな・・・」

なんとか危機は去った・・・

とりあえずガスマスクを外し堂々と歩いていそかぜ達の所へ戻る。

「司令官、不審者が出たらしいんですが・・・大丈夫でしたか？」

「ああ、それならさつきパトロールの連中が引つ張って行ってたぞ」

「そうですか・・・」

・・・言えない。

口が裂けても言えない。

「とりあえず駆除はしたが・・・」

「じゃあ一安心ですね」

「ああ、俺は仕事に戻るよ」

艦娘寮を後にし執務室に戻る。

するとなんかまあ・・・青筋浮かべた電さんと刀持った曙さんがいらっしやいました。

「おかえりなのです、司令官さん」

「おかえり、クソ提督」

「たたたたたた、ただいままままま」

バレてる?!これもしかしてバレてる!?

「司令官さん、さつき不審者が出たらしいんですけど・・・」

「ええ、私が被害にあったわ」

「そりや大変だな・・・パトロールの連中も・・・」

「やっばい。どうやって逃げよう。」

「つかどうやってバレた!?

「いや、まだ確信じゃない・・・うまく・・・」

「ねえ、クソ提督」

「ん?なんだ?」

「あたしのパンツ・・・何色だった?」

「縞パンツ!!」

あ

「へえ・・・なんで知ってるのですウ?」

「あ、えつと・・・あの・・・」

「クソ提督」

「はい何でしょうか!!」

「言い残すことは?」

あ、もう処刑ムードだコレ。

電さんもスイツチ入ってますねコレ。

最期くらい・・・キレイに決めたらアア!!

「電のパンティおくれエエエ!!」

「死ねクソ提督!!」

「司令官さん、さすがにオイタが過ぎましたねエ」

「ぎいやああああああああああ!!!」

まったくキレイに決まりませんでした。

電「にやんっ♪」

なんで本部まで出向かねばならんのだ・・・

今朝、本部への出頭命令を受けて出発し、今帰ってきたところだ。

「ええやん・・・別に戦果微妙でも・・・」

そんな愚痴を言いながら鎮守府への道を歩く。

一応戦果は挙げているんだが・・・基本的に米軍とかとの共同戦・・・しかも無かつた事にしないといけないレベルの作戦・・・ブラツクオプスが多いのだ。

大半は敵司令官の排除が主になる。

遠征で偽装しているのでバレはしないが・・・

「はあ・・・コレ言うと大問題だもんなく・・・」

敵司令官の排除は問題ではないのだが・・・

深海棲艦との接触、または協力している可能性のある人間の排除も含まれている。

排除するのは米軍だが俺たちはその援護と言う形で協力している。

目標は他国の人間・・・

その暗殺に日本が絡んでるなんて知れた日には国際問題だ。

「それにしても・・・お説教が途中から駆逐艦談義に変わるって何なんだ」

途中から突然駆逐艦の良さについて語り合っていた。

まあそんな事してたからこんな外が暗くなるまで外出していたのである。

「ようやく帰ってきた・・・」

ホント疲れた・・・

電とのんびり過ごしたい・・・

「提督さんがご帰還つと・・・」

門をくぐり司令室のある建物へ向かう。

何やら司令室で人影が見える。

「あいつら・・・また司令室に溜まりやがつて・・・」

まあ、にぎやかで嫌いじゃないが・・・食ったもんとか片付けてく

れ。

そんな愚痴を心の中で言いながら司令室のドアを開ける。

「ただいま」

「あ、しれえくかんさん。おかえりなのれす」

「い、電さん・・・？」

明らかに酔っている電が出迎えてくれた。

いや、それよりもその猫耳と尻尾は何だ！

俺を殺す気か！似合いすぎだろ！・・・じゃなくて！誰だ酒飲みしたのは！！

「しれえかんさん、見ててくらさいなのです」

「へーい！イナズマ！やっちゃうネー！」

焼酎持ってハイテンションな金剛もいた。

お前か飲ませたのは！！

「しれえくかんさん」

「あ、ああ、何だ？」

電のほうを見ると・・・

「にゃんっ♪」

可愛い声出してネコのポーズをする電が。

「ふあああああ！！！！」

変な声出た。

いや、可愛すぎるでしょ。

嫁に來い。あ、もう来てたね。

「にゃー！！ニャーのほうが上手いニャー！見てるにゃー！」

「あ、本家が」

「にゃんっ！」

「・・・にゃんっ♪」

電も同時にネコのポーズを・・・

「電の勝ちだな」

「にゃあああああ！！なんでにゃあああああ！！！」

「そりやお前、普段しないから可愛さ10割増しなんだよ！」

「ニャーだって普段こんなことしにゃいにゃー！！」

「いや、普段からにやーにやー言ってるやん」

「にやあああああ!!!たいちよーなんか嫌いにやあああああ!!!」

「あ、逃げた」

叫びながら司令室を出ていった。

てかこの状況いつたい何なんだ。

「おい、アンドロメダ」

「ふあいく?」

「お前も酔つとるんかい!!」

唯一まともな艦娘が・・・

「たいちよーも飲むといいれすく・・・」

「よくねーよ!!」

「しれえくかんさくん」

「ん、何だ?」

「どうぞなのれすく」

そういつてチューハイを出してきた。

てかなんでお前も飲んでんねん!!

「おいしいのれすく」

「はあ・・・もうせつかくだし俺も飲むか・・・」

どうせ今は課業終わりの時間だ。

飲んだつてバチは当たらない。

「そーいや、おつまみあつたかな・・・」

戸棚を探すとミックスナッツが出てきた。

「よっし!みんなで飲もうぜー!」

「ヒヤツハアアア!!飲むネー!!」

「お前は一升瓶振り回すな!!」

酔った金剛が危ない・・・

まあ・・・こんな平和な時間もいいか・・・

「しれえかんさんく」

「ん?どした?」

「今日も一日、おつかれにやんっ♪」

「グハアア!!!」

ある意味ダメージがすごい一言いただきましたー！
そんなにぎやかな夜だった。

く朝く

「ん．．．」

朝日で目が覚める。

「司令室で寝てたか．．．」

あたりを見ると電や金剛、アンドロメダも寝ていた。
てか、なんで金剛は服脱ぎ掛けなんだよ。

電に至っては猫みたい丸まって寝ている。

「お前ら風邪ひくぞ．．．」

「んく．．．」

「電、起きろ」

「ふにやああああ．．．」

「ま、まだ猫なのか．．．」

「あれ．．．司令官さんおはようなのですく」

「ああ、おはよう。そんなところ居ると風邪ひくだろ」

「あれ．．．司令室？」

「お前ら、昨日酒飲んで酔っ払ったろ？」

「あ．．．ご、ごめんなさいなのですううう!!!」

「ど、どした？そんなに謝らんでも．．．」

「だって．．．司令官さん帰ってきたのに酔っ払ってて．．．」

「いや、滅茶苦茶可愛い電が見れたから問題なし」

「え？」

「あ、いや何でもないよ」

「気になるのですく．．．」

軽く膨れる電を撫でてやり今日の業務の確認を行う。

「さてと．．．今日は．．．」

ふむ、いそかぜ達が鎮守府周辺の警備か。

あとは特に作戦もないな

「電、いそかぜ達に警備って伝えてきてくれるかな」

「はい、了解なのです！」

「あ、そういえばお前ら風呂入ったか？」

「あ……」

「やっぱみんな入ってないよな……」

「ごごごごごごめんなさいなのですー！」

「いや、俺も入ってないし、今日は暇だから温泉にでも出るか？」

「え、いいのですか……？」

「ああ、金剛とアンドロメダも連れて行こう」

「はいっ！」

んじゃそれまでに仕事終わらせるかな。

PCを開き、いつも通り衛星から怪しい地域を監視する。

「特に異常なしっ」と

いつも通りの海だった。

いや……なんか変なもんあった。

「これ……ヲ級……？」

無駄に気合いの入ったおしゃべりしたヲ級が誰かと海岸を歩いていく。

服装からして相手側の司令官か……

「深海にもこんなことあるのか……」

その風景をのんびり眺めていた。

すると……

「ん……？なんだこれ」

ズームすると……指輪？

司令官が何かを渡している。

「へえ……やっぱあいつ等もこんな話あるんだな」

そして受け取ったヲ級はその指輪を笑顔で海に投げ捨てた。

「捨てるんかいいいいいいい！！！！」

俺は一人画面に向かって突っ込む。

うわ……相手側の司令官泣き崩れたぞ……

「全然優しくない世界だった……」

しかもヲ級さん、泣き崩れた司令官に捨て台詞っぽいと唾吐いて立

ち去ってますやん・・・

「うわぁ・・・・・・・・」

えげつない・・・

いや、待て、司令官が何かを始めた。

「ん・・・コイツ何して・・・」

よく見ると吐き捨てられた唾を舐めとっている・・・だと!?

どんな変態だよコイツ!!

「これはひどい・・・」

酷い光景を見た・・・

そんな事していると電が帰ってきた。

「おかえり」

「ただいまなのです! つていうか・・・まだ寝てるのですか・・・」

「ん? あ、ああ。ぐっすりな」

そっぴいや起こすの忘れてた・・・。

「さてと、昼まであと3時間頑張るか」

「がんばるのですー!」

「終わったら昼飯ついでに四人で近くに出来た温泉行こうな」

「はいっ! 楽しみなのです!」

「よし、早く終わらせよう」

あと書類整理が少しだけ。

頑張るか。

泥沼化の戦況

「ふく……仕事終わりの温泉って最高だ……」

仕事も片付き、温泉につかっていた。

疲れが取れていく……

「あく……これで混浴だったらなく……」

平日の昼過ぎ、爺さんしか居ない温泉の湯船でそう呟いた。

くそう、電たちの様子が見たい。

あ、いや、邪な思いなんかないぞ！

く電く

「金剛さん……おっきいのです……」

「電も大きくなればこのくらいなりマース！」

「くツ……！」

司令官さんと温泉に出かけた。

今は脱衣所だ。

「私だって……十分いい年なのにイ……！」

「ア、アンドロメダはその……そのままでも可愛いヨ？」

「そのままでもってなんですかあ!!あれですか!勝者の余裕ってヤツですか!!ちくしよめ!」

「お、落ち着くネ……」

アンドロメダさんが自分の胸と金剛さんの胸を比較して暴れていた。

でも……アンドロメダさん……私からしたら十分なのです……

「アンドロメダさん……サイズおいくつなのです?」

「Cですよ!金剛さんくらいがいいのにいー!」

「……私からしたら十分なのです……」

……ちくしよめ。

あ、心が荒んじやう……

「は、早く中に入るのです」

「そうネー」

「おっばい・・・」

「アンドロメダさん・・・」

「私への当てつけですか？（ニッコリ

「あつたかいネ」

「そうですね」

「ケストレルさんもついて来ればよかったのになあ・・・」

「秘書艦代理だし仕方ないのです」

「でもやっぱりみんなで来たほうが楽しい。」

「あ、でもやっぱり空母とか戦艦組は・・・うつ・・・泣きそうなので
す・・・」

「ケストレル」

「ぬああああ!!!私だって温泉行きたいいいいい!!!」

「落ち着いてください」

「だってえく・・・いそかぜはどうなのー?」

「うくん・・・私は特に・・・」

「ああああく・・・温泉行きたいよおおお・・・」

「どうせなら彼氏と旅行に行きたいんだけど・・・」

「この前の空襲で負った怪我がまだ治らないんだもんな・・・」

「あ、そうだケストレルさん」

「んく?何?」

「彼氏さんと使ってあげてください」

「ん?なにこれ?」

「いそかぜから薬の入ったような箱を渡される。」

「0.01mm・・・何のこと?」

「これって何?」

「コンドームですよ」

「ファツ!」

「ほら、ケストレルさんだってお年頃ですし」

「い、いやいやいやいや!!私そんな・・・」

「この年くらいのカップルならみんなしてますよ?」

み、みんな!?ううう・・・確かに興味はあるけど・・・
「う・・・」

「顔真っ赤にして可愛いですね」

「んにやっ!?な、何言ってるのー!!」

「冗談です。それでどうですか?」

「ど、どうって?」

「ほら、彼氏さんと」

「うえ!?そ、そりや・・・その・・・あの・・・うう・・・」

「大丈夫ですよ、彼氏さんだっけと喜んでくれますよ。まあ最初
は戸惑うかも知れませんが」

「そ、それは分かってるけど・・・やっぱり最初は・・・その・・・痛
いって言うじゃん・・・?」

「ん・・・人によりますよ?」

「個人差あるの・・・?」

「私の場合、そんなに痛くなかったですよ?うらかぜが上手かったの
かな?」

そりや女同士ですからね!

「でも大丈夫ですよ。ちゃんと手順踏めばそんなに痛くないですか
ら」

「む、向こうがそれ分かってるかなあ・・・」

「そこはケストレルさんが・・・」

「私そんなエッチな娘じゃないもん!」

「今時の女の子って男の人よりその辺詳しい気がするんですが・・・
なんて軽い猥談に花が咲いていた。

う・・・最初が怖い・・・

「処女と話すのは結構楽しいですね」

「なっ!?」

「こう・・・染めていくところが最高です」

「このドSー!!」

「褒め言葉です」

「腹立つー!!」

なんて話をしていると・・・

「おーす、ただいま」

「あ、司令官。おかえりなさい」

「ただいまく。あれ？なんでケストレルそんなに真っ赤なんだ？」

「う、うるさい！」

「どうしたんだいったい」

「聞くなー!!」

「ちよつと私の経験談と助言を話してただけですよ」

「にやああああああああ!!!」

もうここのいやああああああ!!!

私はそう叫んで司令室を飛び出していった。

く提督く

「・・・お前、あんまりケストレルをイジメんなよ・・・」

「イジメてないですよ」

「まあ、ほどほどにな」

さて、さっぱりしたし鎮守府の武器弾薬の管理でもしようかな

「いそかぜ、あとは電と交代してくれ」

「分かりました。あと、お願いしますね」

「はい！お任せなのです！」

「うし、とりあえず期限が近い弾薬がないかチェックだな」

このチェックがまた骨が折れる。

一応リストをパソコンに作成しているので検索は楽だが・・・

量がな・・・

「あゝ・・・多い・・・」

気分転換にテレビでもつけよう・・・

適当にチャンネルを合わせてチェックを再開する。

その時だった。

突然、大きな爆発音にも近い音が響いてきた。

「ん？なんか爆発したか？」

「事故・・・ですかね？」

鎮守府内ではなさそうだが・・・

まあ、こんだだけ大きい音なら明日のニュースにでも上がるだろ。

そんな軽い気持ちでいた。

その時、テレビの番組が突然ニュースに切り替わる。

〈き、緊急ニュースをお伝えします！〉

えらく取り乱したアナウンサーがしゃべっている。

〈先ほど、東京湾上空、100mの地点で大きな爆発が発生しました

！被害は東京湾沿岸地域で建物が崩壊したとの情報が・・・〉

「何？」

「東京湾上空・・・」

電と二人でニュースに見入る。

〈負傷者などは不明ですが、おそらく数百人規模に上るとわれ・・・

あ、今、爆発の瞬間の映像が届きました！〉

俺は今のうちに防空指揮所に連絡を取る。

「東京湾上空で大規模な爆発があったらしいんだが・・・レーダーに何

か映っていたか？」

〈今ニュースで出ているヤツですね。えっと・・・いえ・・・何も映っ

ていません〉

「ミサイルや爆弾の類ではないか・・・」

そんな話をしていると・・・

「司令官さん!!」

「どうした？」

「あれ・・・」

テレビを電が指さしている。

そこには爆発の瞬間が流れていた。

〈映像では一瞬黒い筋のようなものが見え・・・〉

黒い点が一瞬だけ映り、空中でキノコ雲が発生するほどの大爆発を

起こしていた。

しかし、その点を通った後一瞬、雲のような物が形成されている。

「まさか・・・燃料気化爆弾か!？」

「それって何なのですか？」

「空中に揮発性燃料を放出して引火させ大爆発を起こす兵器だ・・・まさか・・・」

急いでまた防空指揮所につなげる。

「おい!あの爆発、気化爆弾の可能性が高いぞ!本当にレーダーには何もなかったのか!」

〈それが・・・一瞬だけレーダーに筋が・・・〉

「なんで報告しない!」

〈すみません、バグかと・・・〉

「分かった、これ以上は追及しないが・・・次は見落とすな!それから情報班に映像の調査を」

〈それはすでに完了しています、あとは結果待ちです〉

「分かった、また連絡してくれ」

〈了解〉

まずいな・・・深海棲艦の攻撃か・・・それとも他国からの攻撃か・・・深海棲艦の一般的な技術能力を見れば気化弾頭はまだ製造できないはずだ。

出来ても極少数のはず。

だが、後者の他国・・・それこそもつとありえない。

このご時世に侵略攻撃を仕掛けても第三勢力として深海棲艦が介入することになる。

それにどちらの国も侵略される可能性だつてある。

しかし、深海棲艦ならステルス攻撃機を使用したのか・・・?

いや、それならレーダーに跡が残るはずだ。

巡航ミサイルの可能性も低い。

となると残っているのは・・・

〈提督、調査結果が出ました〉

「俺もある程度推理してみたよ」

〈推理の結果はどうですか?〉

「……大陸間弾道ミサイル……それならレーダーにも映らない」
「……ビンゴです。あと、悪いニュースと良いニュースがあります
が」

「じゃあ、悪いのから頼む」

「あの弾道ミサイル……深海棲艦です。またステルス能力を有して
います」

「深海棲艦？深海棲艦製ではなくてか？」

「はい、あの弾道ミサイル……発射時に指示された目標への攻撃が
困難な場合、自らの意志で攻撃を行えるようです」

「なんでその情報があんな一瞬で……」

「それは企業秘密です。あと、これが最悪かもしれませんが……」
「まだあるのか……」

「あの攻撃はデモンストレーションです。本命は……『熱核弾頭』で
す。それも……東京の霞が関程度の人口なら蒸発してしまうほどの
威力です」

「さいつつあくだな……」

「あと、いいニュースですが……」

その時、テレビが犯行声明文？のようなものを流しだす。

「ちよつと待ってくれ」

「司令官さん、核兵器っていうのは……」

「まってくれ、テレビが何か……」

音量を上げる。

『日本国政府……いや、全世界に通告する。我ら深海棲艦は強大な力
を手にした。これよ侵攻を開始する。人間ども、無条件降伏をするの
ならその身を保証しよう。ただし、邪魔をするようであれば一匹残ら
ず殲滅する。また、最後に警告する。我々の保持するミサイルの弾頭
は“通常に非ず”。以上だ。』

「ふざけやがって……」

「司令官さん……」

「一匹残らず殲滅だあ？そのままそっくり返したらア！」

ただ、向こうの核兵器の量が分からない以上、下手に攻撃に出て齊

射されれば世界が核の炎に包まれる事になる。

気化弾頭である威力だ。

通常弾頭でも都心に落ちれば大惨事だろう。

「情報部・・・いいニュースって言うのは？」

「ヤツらのミサイル発射基地を特定しました」

「それはどこだ！」

「・・・ハワイ・・・パールハーバーです。現在は強固に要塞化されています。あと・・・もう一つあります」

「あと一か所はどこなんだ」

「ミッドウエーです」

「キツイ戦いになりそうだな・・・」

「まだ不十分な情報が多いですので調査を続けます」

「了解した」

とんでもない事になったな・・・

日米の連合艦隊で突撃するか・・・

いや途中で発見される・・・

「くそ・・・」

「あの・・・司令官さん」

「何だ？」

「その・・・海の中から狙い撃ちなら・・・」

「海の中から・・・そうだ！」

そうだ、うちにも弾道ミサイルがある。

しかも取っておきの秘密兵器が・・・

「電、作戦を練ろう。それを後から本部に送りつけるぞ」

「了解なのです！」

核抑止

「潜水艦たちの用意は？」

「できているのです！」

「空母は！」

「OKなのです！」

「よっしゃー！作戦開始！」

数日前の深海棲艦からのメッセージ・・・核攻撃を行える能力を有するものだ。

今、俺たちはその阻止に向かっている。

〜数時間前〜

「作戦内容を説明する。今回の相手はみんなからすれば未知の相手だ」

薄暗いブリーフィングルーム。

あの忌々しい核ミサイル基地を攻撃する作戦を開始しようとしていた。

「今回の目標、それはミッドウエー島基地攻撃及び真珠湾基地攻撃だ」
作戦目的は、2つの基地を同時に攻撃し破壊すること。

ただし、直接攻撃にはBMD能力を有する艦は参加できない。

BMD能力を持つ、いそかぜ、マイケル・マーフィ。

この二隻が艦隊後方で防空及び対弾道ミサイル防衛を行う。

まずは、ミッドウエー島。

ここのはレーダーピケット艦が半円状に4隻ずつ基地の近くまで展開しており、強固な監視網を敷いている。

ここに潜水艦隊を送り、ピケット艦を4隻ずつ同時攻撃、撃沈し基地に向かう。

基地に近海に到着次第、シンファクシの散弾ミサイルで基地を攻撃する。

この潜水艦隊の後方にマイケル・マーフィが万が一のため待機する。

真珠湾攻撃隊は航空母艦を中心に編成、航空攻撃による基地の破壊を行う。

現代艦組は誘導貫通爆弾で直接ミサイルサイロを攻撃、戦艦隊は砲撃でサイロを破壊する。

旧軍空母組は上空警戒及び弾着観測。必要あれば徹甲爆弾によるサイロ攻撃を行う。

真珠湾にはピケット艦の存在は確認されていないがレーダーが多数配備されている。

このため、最初に いそかぜ から電子攻撃及び、電磁攪乱ミサイル「アポトシスV」でレーダー及び基地機能をマヒさせる。

ただし、アポトシスは比較的低速のミサイルのため最終手段となる。

「内容はこうだ。かなり難しい作戦になるが……」

「……失敗すれば日本は核の炎に包まれる……でしょ？」

「ケストレルの言う通りだ」

その威力はツアーリボンバクラスの100Mtという情報を確認している。

「あまりこんなことは言いたくないが……どんな手段を用いても核攻撃だけは行わせるな！」

「了解！」

〜現在〜

「電、お前もそろそろ出撃準備だな」

「はい！でも大丈夫なのです！絶対に成功させるのです！」

「気合いは十分だな……よし！頼むぞ！」

「はい！」

電は司令室を出て、作戦に向かう。

核兵器……

「失礼します、秘書艦を交代しました」

「ああ、頼むぞアンドロメダ」

「はい」

情報処理が得意なアンドロメダに補佐を任せ、俺はPCにある情報を入力する。

「隊長……その座標……どこをさしているのか分かっているのですか？」

「分かっているよ」

その座標……それはつい昨日、衛星が見つけてきた敵の都市のようなものだ。

深海棲艦の国のような場所……

それが北極付近に存在する。

写真にはヲ級やタ級が艤装を外し仲良く歩いている物や、その子供のような物を映っている。

幸せそうに暮らしている深海棲艦たちが居た。

……そして入力した情報は俺の鎮守府に設置してある弾道ミサイルの目標情報だ。

この間、アトラスから更新を行い、配備したLGM—30ミニットマン。

弾頭はW87……475?の威力がある。

ちよつとした街なら消し飛ぶ威力だ。

今、そのミサイルはその、罪のない深海棲艦が暮らしている街に向けられている。

ボタンを押せば発射だって可能だ。

「……隊長……あなたはこういうことをしているのか承知の上ですよね？私だって軍人です、その行動を非難するつもりはありません……でも……」

「分かっている……分かっているつもりだ。でも俺は、お前らのためなら鬼だろうが悪魔だろうがなってる」

「死んだら地獄確定だろうがな……」

まあ、今はそんな事どうでもいい。

「アンドロメダ、敵の頭に分かりやすいように伝えろ。お前らが核を打てば、こつちだつてお前らの愛する者の頭の上に向けて発射すると」

「・・・了解しました。・・・核抑止・・・ですね」

「ああ・・・まるで冷戦だよ」

電が知ったら嫌われそうだな・・・

まあ、向こうが撃たなければこつちだつて発射はしない。

だが、俺たちの上は・・・どういう行動をとるか・・・

俺たちの隊はなるべく察知されない行動・・・それに核兵器による行動の制限・・・

「アンドロメダ、もう一つ奴らに送ってくれ。今すぐ、核兵器の廃棄又は基地の放棄を行えば核攻撃は行わないと約束する・・・と」

「了解しました。平和的解決・・・ですね」

「ああ。あとはこのメッセージを聞いた本部がどう反応するか・・・」
「どう・・・とは？」

「威力不足とはいえ、俺も核兵器を持っている。上からすれば今すぐ発射して街を攻撃、敵の士気と行動能力を下げろつてな」

「・・・ありえそうですよね」

「ああ・・・」

所持している俺がこんなことを言うのはアレだが、核兵器は決して使つていいものではない。

自分も使わず、相手にも使わせない・・・この使用方法で何とか保つている。

撃てば撃ち返される・・・その繰り返しがどういふことかはどんなバカにでも理解できるはずだ。

撃つて撃たれて撃ち返して・・・地球の終わりだ。

「頼むから発射するなよ・・・こつちからも撃たなければいけないよ・・・」

くシンフアクシく

核兵器・・・私はそれがどんな物か今一理解していない。

私は弾道ミサイルを運搬する潜水艦だが・・・核攻撃を行ったことも受けたこともない。

「・・・核って言葉・・・あまり聞きたくないでち」
ゴーヤが突然呟く。

「そういや・・・お前はそうだったな」

第二次大戦を生き延びた潜水艦・・・

しかも、その核兵器を運ぶ巡洋艦を撃沈した艦だ。

ただ・・・核兵器を運搬した後の・・・だが。

「大丈夫よ、うちの司令官なら絶対に撃たせないわよ」

「そうなのね！元気だすの！」

それでもゴーヤは少し落ち込んでいた。

「攻撃艦隊の現状は？」

近くにいた いそかぜに聞いた。

「そうですね・・・現状は問題なし・・・です」

「了解。なあ、お前は核兵器の威力ってのは分かるのか？」

「私も正直、微妙です。ただ、生物化学兵器の恐ろしさはよく理解しています・・・」

「化学兵器・・・か。どうして人間はそんなものを作れるのか・・・私のこのミサイルも・・・」

私に積んである散弾ミサイル・・・高度5000Ft以下の物体を無差別に破壊するミサイルだ。

これでオースリア相手に戦った。

このミサイルで何人も殺したが・・・やっぱり気分がいいものではない。

「あ、そろそろ待機位置ですね。私はこのままここで対空警戒を行います」

「了解した」

いそかぜと離れ、潜行する。

敵艦はもうすぐの位置に迫っていた。

迎撃

核を撃つことがなければいいが・・・

核報復の事ばかりが頭をよぎる。

「そういえば隊長」

「ん？なんだ？」

「電さんって編成に入っていましたっけ」

「へっ？」

さつき出撃命令を出したが・・・

アレ？なんか入れてなかった気がするような？

「ご、ごめん、ちよつと確認してくる・・・」

「あ、それなら私の手元に・・・」

「ど、どうなってる？」

「あく・・・入ってないですね」

「だああああ!!俺のアホオオオオ!!!」

急いで電に無線をつなげる。

「電!すまん!お前出撃じゃなかった!急いで戻ってくれ!」

〈へあく・・・その・・・途中で気づいてまだ鎮守府出てないのです〉

「あ、あれ?そうなの?」

〈へ司令官さん、ちよつと落ち着くのです!もうっ!〉

「す、すまん・・・」

海に出てなくてよかった・・・

ちよつとホつとしながら現場海域の監視を続ける。

「もう間もなく潜水艦隊が敵と遭遇・・・航空隊は発艦を開始しました」

「了解。シンファクシに散弾ミサイルの発射準備を伝えてくれ」

「了解。シンファクシさん散弾ミサイル発射を準備してください」

〈へ了解、弾数は?〉

「2発だ。炸裂高度はいつもより低めの2000ftで頼む」

〈へ了解〉

2000ftであるのミサイルが炸裂すれば基地は壊滅だろう。

「そういえば敵からの声明は?」

「核報復に對してですか？えっと・・・」

アンドロメダが調べてくれてる間にコーヒーを入れに行く。

「隊長、ちよつとマズイかもです」

「ん？どうした？」

「深海棲艦より司令部から・・・」

「司令部？」

「今すぐ核を撃て。命令が届いています」

「核攻撃命令だと？どこのどいつだソレを送ってきたのは！」

「最高司令官から・・・」

「ふざけんな！電話つなげ！」

「りよ、了解しました」

電話を司令部につなげ、司令官を呼び出す。

〈大佐。どうした？〉

「どうしたもこうしたも・・・核攻撃命令についてです」

〈ふむ・・・〉

「いいですか。核を撃てば撃ち返される。そして撃たれたら撃ち返す、これが核報復なんですよ！」

〈私は報復の話を聞きたいんじゃないんだがね〉

「これは重要な話です。核兵器は簡単に・・・ロケット砲みたいにポンポン撃つていいものではない」

〈ふむ・・・なら、敵はもう撃つてきた。撃ち返すべきではないのかね？〉

「あれはたしかに弾道ミサイルだ。でもあれは通常弾頭、核兵器じゃない」

〈発射の時点で君に分かるのか？それに核が積んであるか積んでないか〉

「確かにそれは確認のしようがない。では、ここで核を撃てば相手から撃ち返されるのは分かりますよね」

〈ああ、だが君はそれを迎撃できる装備があると報告があるんだが〉

「それは東京までです。」

〈敵は東京を狙ってくる。十分だ〉

「相手は多弾頭ミサイルだ！日本の重要都市すべてに核を降らせれるんですよ！」

「へふむ・・・で？それが攻撃しない理由だと？」

「そうです、核は簡単に使つていいものじゃない」

「へ・・・今は戦争中・・・忘れたか？」

「それは分かつてます」

「敵は我が国に対して弾道ミサイル攻撃を行い、多数の人命を奪つた。それよりも先の隕石落下事件・・・巡航ミサイル攻撃・・・報復攻撃を行わない理由がないと思うが・・・」

石頭め・・・

電話で交渉を続けていると・・・

「隊長・・・大変です・・・」

「どうした？」

「真珠湾基地から・・・弾道ミサイルが発射されたって・・・」

「ちくしょうッ!!」

「へほら見ろ。やっぱり撃つてきた。報復攻撃を行え、命令だ」

「クソッ・・・」

だが、今司令官の言っている事は100%間違いじゃない。

やるしか・・・ないのか・・・

「ブーストフェイズで迎撃は？」

「同時に発射された3発中2発を迎撃したらいいんですが・・・」

「1発生き残ったか・・・」

「・・・」

撃つしかない。

ここで撃たないと・・・また撃たれる。

「・・・アンドロメダ、発射ボタンをくれ」

「待つてください！まだ迎撃ミサイルが残つてます！」

「報復攻撃だ、やらないとやられる」

「隊長！ここで撃てば向こうだって撃ち返してきます！世界が終わりますよ!!」

「・・・俺はお前らが核兵器で死ぬくらいなら・・・」

ほぼ無理やりアンドロメダからボタンを奪い取ろうとする。

「やめてくださいー！」

突然聞こえた電の声。

「やめてくださいー！罪のない人の命を奪っちゃダメなのです！」

「だけど・・・これは撃ち返さないと・・・」

「いやなのです・・・」

電が泣きながら訴えてくる。

「核を撃たれた時点で平和的解決方なんて・・・」

「何か・・・何かあるのです！だから・・・撃たないでください・・・」

「・・・」

その時一つ思いつく。

やれるか分からないが・・・

失敗の可能性も高い。

「・・・アンドロメダ、電装系・・・吹っ飛んでも許してくれるか？」

「え・・・？」

「核を宇宙空間で爆発させて迎撃する」

「EMPが起きますけど・・・それ以外なさそうですね」

「これしかない。一応PAC-3もあるが・・・」

「いえ、相手はMARVです、これでやりましょう」

「・・・よしー！」

盛大な賭けだが・・・やるしかない。

「電、ミサイルを撃つが、これは相手の街は狙ってない。分かるよな」

「・・・街に撃つたらもう口聞かないですからね・・・」

「け、結構罰軽いな・・・まあ、大丈夫だ。核を宇宙空間で爆発させて

迎撃する」

「・・・まるでなんでも核兵器時代みたいですね」

「・・・仕方ない」

「司令部にはなんと？」

「核兵器を発射、だけど宇宙空間で爆発しちゃったゴメンねって送っ

とけばいいだろ」

「了解しました」

あとは発射管制に連絡して核の炸裂高度を設定させる。

「あとはタイミングだな・・・」

「できれば高度が一番高い段階で狙いたいですね・・・」

「それを狙うとすると・・・あと何分後だ？」

「あと12分と30秒後です」

「分かった」

何としても宇宙空間で破壊してやる

うらかぜの裏

くいそかぜく

ミサイルが・・・

発射されたミサイルの白煙を見ながら茫然とする。

「くっ・・・もう射程圏外・・・」

もうあとは鎮守府の防空装備に頼る以外ない。

無線からは攻撃部隊が敵施設を破壊したと言っている。

作戦自体は成功・・・だが、ミサイルは行ってしまった。

「もっと早くレーダーで気づいていれば・・・」

自分を責めてもどうしようもない。

攻撃部隊は続々と撤退を開始している。

今は司令官を信じて味方を援護しないと・・・

「赤城さん、撤退を援護します」

〈了解しました、でも・・・〉

「ミサイルは司令官が何とかしてくれれます、急いで撤退を」

〈・・・了解しました〉

レーダーを注意深く確認して敵の動きを確認する。

施設自体は完全に破壊され、ミサイルの脅威はなくなった。

潜水艦隊も同じだ。

「まだ敵影は無し・・・」

その時、司令官から無線が入る。

〈いそかぜ、聞こえるか？〉

「司令官？はい、聞こえます」

〈イチかバチかの賭けを行う。強力な電磁パルスが起きるから注意

してくれ〉

「何を・・・」

〈宇宙空間で核を爆発させてミサイルを爆風に巻き込む〉

「・・・そんな無茶苦茶な・・・」

〈無茶苦茶だろうがやらないと日本が終わる、とにかく撤退を急いで

くれ〉

「了解」

迎撃ミサイルじゃなくて宇宙空間で核弾頭を爆発させて迎撃なんて……

まるで60年代……

「今は信じなきゃ……」

そう自分に言い聞かせ、レーダーを再び確認する。

しかし、レーダーには敵艦隊の艦影が表示されていた。

「やっぱり……赤城さん聞いてください、敵艦隊が出現しました。攻撃可能な艦載機は艦隊の護衛を行わせてください」

〈敵……！了解しました！〉

レーダーには多数の機影も表示される。

敵には空母もいるようだ。

「敵艦隊より艦載機発艦中！迎撃機を急がせてください！私も向かいます！」

〈了解しました！〉

距離は約200km……

早く赤城さんたちを逃がさないと……

増速して敵艦隊に向かう。

「さあ……来るなら来い……！」

向こうにはレーダー持ちが居るのかこつちに向かう艦載機が多数いた。

艦載機の量を見るに……ヲ級か……

〈メビウス1交戦！〉

〈クーガ隊、交戦〉

艦載機隊は敵と接触、交戦を開始した。

私はいつでも撃てるように準備するが空中の目標が多すぎる。

どれが敵でどれが味方か分かるには分かるがすべてを補足できない。

「私に向かってくるヤツらだけでも落してやる……！」

接近してくる目標2機をロックオンする。

「シースパロー発射！」

ミサイルを発射、同時に電子戦闘を開始する。

せめて敵の目から隠れないと・・・

「最低でも100機以上・・・クソッ・・・多すぎます・・・！」

そんな時、アンドロメダから通信が入る。

「おいそかぜさん、及び攻撃艦隊全隊へ。緊急入電です。ただちに攻撃を中止して撤退してください」

「撤退!? 攻撃を受けているんですよ!!」

「敵にあの艦が居ます! 撤退を急いでください! 護衛の戦闘機隊が向かっています!」

「アンドロメダさん! ジョークもほどほどにしてください!! 攻撃を中止なんてできません!」

「ジョークで戦争を終わりにできるか! 攻撃をやめて撤退しろ!」

突然司令官の声が変わる。

「撤退ならしています!! でも敵が多すぎて・・・!!」

「今お前らの居る場所は敵勢力圏と味方勢力圏の境目にいるんだ! そこからすぐに日本海軍の勢力圏に入れる!」

「でも敵が多すぎます! それに・・・あの艦をほっとけません!!」

「おいそかぜ! これは命令だ!! ヤツらは俺たちの勢力圏まで追ってこない!」

「赤城さんたちだけでも逃がして私が応戦します!」

「おい、ふざけるな!! お前ひとりではどうにかできる相手じゃない!」

「攻撃されているのに背中を見せて逃げるなんてできません!! 私だけでも撤退の援護をします!」

「おいそかぜ! お前分かつているのか!! 撤退しろ! 命令だ!!」

「くっ・・・この・・・!!」

無線機の電源を乱暴に切る。

赤城さんたちはもう日本海軍の勢力圏に入った。

司令官の言う通り敵もこれ以上赤城さんたちを追うつもりはないらしい。

だが、他が私を狙ってくる。

それに敵にはあの深海棲艦が居る。

・・・ミサイルを装備した艦が。

「これ以上進まれると赤城さんたちがやられる・・・」

だったら私が盾になっても進行を止める。

敵はもう目と鼻の先だ。

私はミサイルを敵の空母に発射する。

発射されたミサイルをあゝの艦は無視し、空母に命中。

敵空母隊は壊滅した。

「無視した・・・？いや・・・」

何かを指示し、護衛の艦を撤退させ、私のほうに向かってくる。

「やあ、また会ったね。私を大破させるなんて」

「・・・」

「無視なんてひどいな」

「・・・あなたと話したくない」

「あ、そう」

そういうと敵はすぐに砲を向けてくる。

「撤退命令出てるんだってね？全部聞いてたから分かるよ。ねえ、早く行ったほうが身のためだよ？」

「お前を・・・沈めたら逃げます」

「怖い怖い・・・まあいいや、逃げないんだったら交戦しないと」

「最初からそのつもりです！」

不意打ちで砲を発射する。

だが、狙いも適当なうえ、相手に動きを読まれたようだ。

簡単に避けられた。

「うつわ・・・本当に撃つちやうかな・・・」

私はすぐに距離を取り砲を速射する。

確実に命中コースだった。

「エイムが甘いっ！」

「え・・・？」

敵は飛んできたボールを避けるかのように全弾躲した。

「イービスなんでしょ？これくらい当てないと、盾になんてなれないよ」

「うるさいッ!!」

私はバカにされたのが悔しいのか避けられたのが悔しいのかよくわからない気持ちでいっぱいだった。

半ばヤケクソ気味で砲弾や機銃弾をばら撒く。

「おっ怒った怒った、さすがにここまでやられたら撃たなきやね」

敵も距離を取り反撃してくる。

敵の装備は現代の護衛艦をベースにしていると思われる装備・・・
私と装備があまり変わらない。

「クソッ・・・!」

距離が1キロないところでの砲戦・・・

装甲が無いに等しい私は避けるので精いっぱいだ。

何とか距離さえ取れば・・・

そう思い、後ろにCIWSをばら撒きながら距離を取る。

「アハッ、逃げた逃げた」

敵は笑いながら追撃とばかりに砲撃をしてくる。

私は自分でも不思議なくらい焦っていた。

それはたぶん・・・私にとって初めての事だからだろう。

同じ、ミサイルを搭載した水上艦艇と戦うことが。

過去の・・・艦だった時はまた違う。

「アポトーシスで・・・いや、この距離じゃ・・・!」

私は苦し紛れにミサイルを2発発射する。

「可愛がってあげる」

敵は気味の悪い笑いを浮かべながら砲弾を撃ってくる。

だが、あえて当たらないようにしているようだ。

「クソ・・・クソッ・・・!!バカに・・・しないで!!」

CIWSをばら撒くが艦に効果は薄い。

ミサイルは撃つても落される・・・

こうなったら・・・自分も含めてになっちゃうけど・・・

「うらかぜ・・・」

今度こそ最後になるだろうと恋人の名前を呟く。

そして一つのミサイルのVLSを開いた。

T—P e x

約6000度の熱を発生させるこのミサイルで焼き払ってやる。

被害範囲に自分もいるが・・・

「苦し紛れのミサイルは効かないよ」

敵は何のミサイルかは分かかっていないだろう。

「あのビリビリミサイル？もうあの対策しちやってるんだよね」

対電磁パルス防御能力を手に入れているのだろう。

でも・・・この高熱なら・・・

「アハッ、何かしゃべってよ」

「・・・終わりです」

「アハ、だよね。でも君可愛いから・・・沈めるのもつたいないな」

電さんによく似た顔で笑うが、その顔はあの天使のような笑顔じゃない。

もつと・・・醜いものだ。

「・・・天使とダンスでもしてな」

「え？何？」

私はミサイルを発射する。

このミサイルも迎撃されても炸裂し効果を発揮する。

「アハッ！残念でした！」

敵は迎撃を行う・・・が。

「・・・!？」

「まんまとかかりましたね」

青白い光が私たちを包む。

「さようなら、うらかぜ」

一瞬、熱による痛みのようなものを感じたが、すぐに何も感じなくなる。

敵は悔しそうな顔をしながら光に包まれた。

く提督く

あの爆発・・・T—P e x！

「赤城！状況はどうなっている！」

〈艦載機からの報告だと・・・〉

心臓の鼓動が痛いくらいに早い。

いそかぜ はあんな爆発で沈むようなタマじゃない・・・と信じた
いが・・・

〈・・・確認！洋上にいそかぜさんが居ます！〉

「・・・良かった・・・了解だ」

〈あの・・・でも・・・〉

「どうした？」

〈艦装が・・・〉

「・・・」

たぶん・・・もう使い物にならないだろう。

あの熱だ、艦装のシステムや装備はすべて壊れているだろう。

・・・艦娘を引退する道しかない。

「はやくアイツを連れ帰ってやってくれ・・・」

〈・・・了解しました〉

無線を置いて深いため息をつく。

「あの・・・バカ・・・」

だが・・・作戦は成功・・・したと信じたい。

基地の完全破壊には成功したがまたあの艦には逃げられた。

あの戦闘能力・・・これからも遭遇の可能性があつたらすぐに撤退
が必要になるだろう。

いそかぜ

目が覚めたらベッドの上だった。

「あれ・・・？天国ですか・・・？」

上半身を起こすとベッドに うらかぜ がもたれかかって寝てい
た。

生きてる・・・

「いたッ・・・」

体にいたるところが痛む。

この痛みは火傷のようだった。

手鏡で自分の姿を確認する。

「顔は・・・奇跡ですね・・・被害がないなんて・・・」

顔は傷一つなかったが手足が包帯でぐるぐる巻きになっていた。そんな事をしていたらうらかぜが目を覚ました。

「ん・・・ふあああ・・・」

「あ、えと・・・おはよう・・・ごごいます・・・」

「ああああ!!!目え覚ましたああああ!!!」

そういつて私に抱き付いてくる。

「あの・・・怒ってないんですか・・・?」

「え?怒ってるよ?すごく」

「・・・」

「・・・艦娘として引退だつてね」

「え?」

「艦装・・・完全に壊れちゃつて、修復は無理なんだつて」

「・・・そうですか」

「ホント馬鹿だよ・・・まあ、いいよ。こうやって生きてくれたんだから」

「・・・」

うらかぜは笑顔でそう言ってくれた

「それにしてもよく寝てたね」

「え?」

「3日寝てたんだよ?」

「え・・・?3日もですか・・・」

「もう大変だったんだから・・・」

そんな話をしてしていると司令官が入ってきた。

「お、やっと起きたかバカタレめ」

「司令官さん!!いきなりバカタレは失礼なのです!」

「・・・すみません」

「いそかぜさんは謝らなくても大丈夫なのです!」

「でも・・・命令違反・・・」

きつとその事で怒られる・・・

そう思っていた。

「命令違反で怒られる……って顔してるな」

「……はい」

「そんな終わった事じゃないよ、今日聞きたい事あってな」

「なんですか？」

「いやその……本人居る前でなんだが……うらかぜについて……」

「はあ!?!私!?!」

「え……」

なんか拍子抜けだった。

なんの事なんだろう……

「いや……うらかぜのヤツ……敵の通商破壊作戦に行ったんだ」

うらかぜ（回想）

〈これより、敵の輸送船攻撃に向かう、各艦へ。病院船が紛れているから気を付けろ〉

「……」

「了解なのです！」

「了解しました」

〈おい、うらかぜ〉

「……何」

〈はあ……いそかぜが負傷して落ち込んでるのは分かるが……頼むぜオイ……〉

「……」

私の頭はいそかぜの事でいっぱいだった。

今は、私とアンドロメダ、電さんの3人で通商破壊に向かっている。

またその艦隊にいる病院船の拿捕だった。

でも……今はそんな事どうでも良かった。

いそかぜを傷つけた深海棲艦に対する怒りでいっぱいだ。

「アンドロメダより全艦へ、敵影確認。攻撃準備に移行してください」

「分かったのです！」

「……了解」

「……大丈夫なのです……?」

「……うん、大丈夫」

「……」

電さんは心配してくれているようだった。

さすがに八つ当たりするほど私は捻くれていないが……

「敵……もうやっちゃお」

「え、ちよ、待って……」

「発射」

敵の旗艦らしき艦にミサイルを発射する。

「まだ攻撃命令だしてません!!どれが病院船か分かるんですか?!

「……別にいーじゃん」

「よくないですよ!!」

そんなやり取りしてる間にミサイルが命中、増速して目標に向かう。

「病院船以外撃てばいいんでしょ」

「そうですね……!」

速射砲で病院船以外を狙っていく。

「うらかぜさん!撃ち方やめてください!!もう航行不能なのです!」

「……でもさあ、ほつとくと敵に弾薬届いちゃうじゃん」

「捕まえればいいのです!お願いなのです……」

「……」

だが、電さんが助けようとした艦は弾薬に引火したのか爆沈した。

「……あ……」

電さんは爆発の様子を茫然と見ていた。

「病院船見つけ」

「あ……や、やめ……」

「あなた、深海棲艦の病院船だよね」

「そ……そうだから……い、命だけは……」

無残にも仲間を沈められた病院船は震えていた。

見た目は深海棲艦よりは艦娘寄りの容姿だった。

「ねえ……あなたたってさ」

「な、何ですか……?お願いだから……撃たないで……」

「私の撃った敵を直す医者だよね」

「え・・・？」

「だったらお前も敵じゃん」

私はそのままトリガーを引く。

「なっ・・・」

「う、ぐ・・・ああああああ!!!」

「あ・・・避けないでよ」

砲弾は腕に命中した。

敵は腕を押さえて苦しんでいる。

その時、頬に鋭い痛みがはしった

「な、なにしてるのですか!!」

「何って・・・敵じゃん、コイツ」

「敵って・・・この子は病院船なのです!!」

「病院船だから?ここは戦場だよ」

「だからって・・・!」

横目で病院船を見る。

痛みで泣いていた。

「大丈夫ですか?すぐ診てあげます」

「なんで・・・なんで撃つんですか!いそかぜさんの仇とか言うんですか?!」

「別に・・・でもほっとけば いそかぜ を傷つける敵になる」

「でも・・・海上自衛隊はそんな簡単に人を傷つけるのですか!？」

「・・・アンタが何を知って・・・」

「私には確かに未来の事なので分からないのです!でも・・・今まで人命を救ってきた組織じゃないですか!」

「・・・私はその組織に・・・沈められたけどね」

「あ・・・」

電さんは申し訳なさそうな顔をした。

「電さん、もういいです。これより帰還します。うらかぜさん・・・処罰は覚悟してください」

険悪なまま港への帰路についた。

く提督く

「・・・な話があった」

「あ、あつれく？そんな事あったっけな？」

「あつたわ!!国際問題スレスレだからな!!」

「も、もう十分に反省したじゃん!!」

「はあ・・・もう・・・で・・・こいつって病んでるとこんなヤツなのか？」

うらかぜ怖い・・・

「い、いや・・・私にも・・・」

「・・・いそかぜ、これから うらかぜの監視よろしくな・・・」

「あ、はい・・・」

そういえば病院船はどうなったんだろう。

「あの、病院船はどうなったのですか？」

「ああ、看護スタッフになってもらったよ。まあ向こうはブラックでいい加減亡命したかったが気が弱いんでどうにもならなかったそう
だ」

「・・・無事でよかった・・・あ、うらかぜ。ちゃんと謝りましたか？」

「謝りましたよ・・・菓子折りもって・・・」

「よろしい」

体は痛むけど・・・またここに帰ってこれた。

でももう私は艦娘じゃない。

これからは鎮守府のスタッフとして頑張ろう。

電とイチヤコラ

核兵器の事件から一週間たった。
何とか平和な日常に戻りつつある。

「ふああああ・・・」

「大きな欠伸なので・・・ふあああ」

「欠伸がうつったな」

「うつっちゃいましたね」

お茶を飲みながら電と談笑する。

仕事もちゃんとしてるがな。

「そういや、いそかぜの調子はどうだ？」

「もうすっかり元気ですよ、ただその・・・」

「ん？」

「うらかぜさんが落ち込んでた いそかぜさんを励まそうと私の艦長
だよって言ったら・・・」

「なんとなく予想ついたぞ・・・どうせ独占欲に駆られて・・・か？」

「そうなのです・・・」

「・・・無理してでも艀装直しといたほうが良かったかな・・・」

この前の戦闘でいそかぜは艀装が完全に大破、本人も瀕死の重傷を
負ったが奇跡的に助かった。

だが、艀装は解体処分とするしかなかった。

そのため、いそかぜは書類上、解体処分となった。

解体と言っても普通の女の子に戻っただけで本人の希望で海軍に
在籍もできる。

もちろん、退役して普通の生活を送ることもできる。

今のいそかぜ は表面上俺の補佐だが、殆どうらかぜの専属オペレ
ーターだ。

「なんか日に日に加速するよな・・・過労死しなきゃいいけど・・・」
「あはは・・・それは心配なのです・・・」

それにしても毎日毎日・・・仕事が同じような物で飽きてくる。
最もそんな事を言ってしまうえば終わりだが。

「あ、12時・・・」

「んあ？ そうだな、どした？」

「あの・・・今日お姉ちゃんたち帰ってくるので・・・お出迎えに行きたいのです・・・」

「そういや今日だったな、東京の港か？」

「はい！14時には帰ってくるってメール来たのです！」

「じゃあ、行っておいで。俺は悪いけどこの仕事片付けないと・・・」
「あ・・・」

電は少し悲しそうな顔をする。

仕事中の俺をほっといいのか考えているんだろう。

「んな悲しい顔すんな、誰かに秘書だけ任せてきてくれないか？それが終わったら行っておいで。そこらへんで暇してるヘリのパイロット捕まえれば東京まで行ってくれるよ」

「はい！あの・・・お仕事頑張ってください、なのです！」

「おう、ありがとな」

電はルンルンで出ていった。

さて・・・誰かすぐに秘書に出来そうな子っていたっけ・・・

「経理の書類多いなホント・・・計算するだけでも大変だよコレ・・・」
「予算案の提出に必要な事が多いため雑にするワケにはいかない。」

電は正直なところ、数学が苦手らしく計算は遅い。

俺も数学は高校時代万年赤点レベルだったので大変だ。

俺何でパイロットになれたんだろう・・・

なんてしてらうちに誰かが扉の前に来た。

「ん？誰か居るのか？」

「うえ!?なんで分かるの!?!」

「その声・・・曙か？」

なんとなく気配があつたからな。

と、そんな話は置いて。

「もしかして・・・お前が秘書代理か・・・？」

「そうよ！何か文句でもあんの？このクソ提督！」

「んだよお前かよ・・・このツンドラ娘・・・」

「はあ!? ツンドラ!?!」

「ツンドラだろ。ツンドラ気候のように冷たいだろお前」

「・・・べつにしたくてしてるんじゃないし・・・」

「ん? なんか言ったか?」

「何も言っていないわよ!」

「そうかい、とりあえずその計算だけ頼めるか? 支出の所だけでいい」

「ふくん・・・予算関係?」

「ああ、ちよつと基地防衛に力入れすぎてこの辺の部署を作る余裕ないんだよな・・・」

「もうちよつと考えなさいよ・・・」

「返す言葉もない・・・」

「でも・・・その考えなしのおかげで私たちがこうやって守られてるのよね」

「それ・・・褒めてんのか馬鹿にしてんのか」

「どっちでもないわよ?」

「そっか」

「へへ」

「そういや・・・お前の笑った顔初めて見たな」

「うえ!?!」

「いつもしかめっ面ばかりだったからな。もっと笑え」

「うううるさいわね! この会話全部電に報告するわよ!」

「いらん誤解招きそうだからやめろ!」

なんて半分喧嘩しながら書類を整理する。

「うあああ・・・途中から変な単語おお過ぎて目が回る・・・」

「変な単語って・・・ああ・・・これか」

曙が見ていた書類は基地防衛のための装備の書類だ。

各部署から申請が届いている。

「警備班は・・・ふむふむ、7.62mm口径の小銃を100挺
弾薬・・・」

具体的にはFN社製のMk17を100挺発注か・・・

「曙、FN社つてところに発注かけてくれるか？」

「えふえぬ・・・どこそれ」

「ベルギーの会社」

「はあ!?外国語なんて分かんないわよ?!」

「ああ、いや。メール送ってくれ、このPCで」

「だから外国語は書けないし読めないのよ・・・」

「日本語で大丈夫だぞ、向こうで翻訳してくれるらしい」

「あ。そうなの?じゃあ任せて」

前までは頑張つて英語にして送信してたんだが・・・いい時代になつたもんだ。

「んでお次が防空司令部・・・は見なかった事にしよう」

「どうしたの?」

「対弾道ミサイル迎撃レーザー砲の建造・・・つて・・・ここにエクスキャリバーぶつたてろつて言うのかあいつ等・・・」

「エクスキャリバーつて何?」

「ベルカ戦争つて知ってるか?」

「ああ、なんか私たちが沈んだ何十年もあとの戦争よね」

「そうそう、まあベルカ公国はお前も知ってるドイツだった国なんだけど、そこが弾道ミサイル防衛のために高さが1kmもあるレーザー砲作つたんだよ。んでそれとおんなじもん作れつて・・・」

「どうしたのかしらね防空司令部は・・・」

「わかんね・・・とりあえず却下」

他は弾薬とか電子機器の部品か・・・

防空司令部はどうしちやつたんだいったい。

「ふう、終わったわよ」

「5時か・・・すまん、ありがとうな」

「お礼なんていらないわよ、クソ提督」

「それは優しい声色で言うセリフじゃないぞ、ツンドラ娘」

「う・・・うるさいわね・・・」

「じゃあクソ提督つて言うのやめろよ」

「いやよ、呼び慣れたし」

「ほう、じゃあ語呂がいいツンドラ娘でも大丈夫だな」

「んなっ!?こ、このお・・・」

「ふははは!どうした!何か言ってみろ!」

と仕事が終わわり、若干高いテンションで煽る。

「こ・・・この・・・このクソてーとくうう!!」

そして曙さん、ソファーに隠してあった俺のヘソクリを取り出す。

何で我が妻でも知らないヘソクリの場所しってるんですかアナタ。

「そのツンドラ娘やめないと・・・これを電に報告・・・いや燃やすわよ!!」

「な・・・なぜその場所を・・・」

「やめるの?やめないの!?!」

「もう言いません」

「はあ・・・とりあえず返すわ」

「・・・なんだかんだ言って返してくれるところ優しいな」

と、褒めたはずなのに・・・

「・・・」

無言でライターに火をつけた。

「なんで!?!俺褒めたよね?褒めたよね!?!」

必死に抗議するが、ゆつくりと火を近づける。

「ノオオオオオオオオオ!!!」

叫んでいたらやめてくれた。

曙は封筒を元の位置に戻してくれた。

「曙さんや・・・ワイ褒めたやろ・・・」

「・・・知らないわよ!」

そういつて部屋を出ていった。

「ツンドラ娘め・・・」

早く電帰ってきてくれないかな。

「ふああ・・・課業終わりのラッパか・・・」

国旗の方向に向かって敬礼してまた席に着く。

「30分ほど寝ようかな・・・」

そのまま机に突っ伏して寝てしまった。

「・・・さん!」

「んゝ・・・」

「司令官さん!起きないと風邪ひくのです!」

「んゝ・・・?もうちよい・・・」

「もうちよいつてもう7時なのです!ごはん食べるのですう!!」

電の声で目が覚める。

「ふあああ・・・まだ30分も経ってないだろ・・・?」

と時計を見ると7時だった。

「あれ?7時?」

「そうなのです!部屋に帰っても居ないので・・・」

「ふあああ・・・すまん、心配かけたな」

「大丈夫なのです。それよりもご飯作るので部屋に帰るのです」

「ん、そうだな」

「お疲れなのです?」

「そう見える?」

「んゝ・・・なんとなく?」

「よく俺の事見てるな」

そっぴいながら軽く頭を撫でてやる。

電は気持ちよさそうな顔をしていた。

「今日の晩御飯は何だ?」

「えつと・・・司令官さんが好きなビーフシチューなのです!」

「お!やった!」

「えへへ、なんか今の可愛かったのです」

「んあ?そうか?」

二人で晩御飯を作り、のんびりと過ごす。

「そっぴいや最近忙しかったよな・・・」

「そうですね・・・」

「こっぴやって二人で居ると本当に安心するな」

「それは私もなのです」
なんて会話しながら食べ終わった食器を片付けて、順番に風呂に入る。

俺はその間、冷蔵庫に入っていた炭酸飲料を飲みながらテレビを見ていた。

「はく・・・やっぱデモやるよね」

つけたチャンネルは艦娘反対派のデモだった。

まあ見た目は女の子だ。

こういう連中が出てくるのは仕方ないだろう。

さすがに戦争反対派はほとんど存在しなくなったらしいが・・・

「まあ、重巡航管制機に空襲されたりICBM飛んで来たりしてるのに言ってる場合じゃないもんな」

独り言を言いながらテレビを見ていると電が風呂から出てきた。

「お先なのです」

「おかえり、んじゃ俺も行ってくるわ」

「はい！お湯加減はいい感じでしたよ」

「そりゃよかった」

つい一ヶ月前に自室の風呂を増設したのでわざわざ寒い中風呂場に行かなくて済む。

一応、艦娘寮には個々の建物に浴場があるので寒い中風呂に移動する必要はないが、その他職員用の浴場は別の位置にあるので移動がめんどうかい。

「ふく・・・今日も疲れた・・・」

のんびりと20分くらい入っていた。

「上がったよ」

返事がなかった。

ドライヤーの音がするから髪乾かしてるのかな？

「おっい、電？」

「あ、司令官さん上がったのです？」

「髪、乾かしてやろうか？」

「はい、お願いなのです！」

電は俺の足の上にチョココンと座り、ドライヤーを手渡してきた。
ふんわりといい香りがした。

「電の髪の毛ってホントサラサラだよな」

「えへへ、どうしたのです?」

「触ってて気持ちいいなと思ってな」

「えへへっ」

「なあ電、ちよっとお願ひしていいか?」

「どうしたのです?」

「ちよつとポニーテールしてみて」

「いいですけど・・・髪留めのゴムあったかな・・・」

電は足の上を離れてゴムを探していた。

俺はそれを眺めている。

「あ! あったのです!」

電はそのまま髪をくくってポニーテールにしてくれた。

「どう、ですか?」

「すっげえ似合ってるぞ! 可愛いな、やっぱり」

「え、えへへ・・・照れるのです・・・」

「いいもの見れたな。今度電とどこか行くときはその髪型にしてほしいな」

「司令官さんが望むのならいくらだってしますよ」

電は微笑みながらそう言ってくれた。

「お、こんなことしてる間に11時だな、寝るか」

「はい! あ、暖房はずっとつけときますか?」

「寒いからつけたままにしとこうか」

「じゃあこのままで」

二人で布団に潜り込む。

電は俺の方向に向けて寝るようだ。

「なあ電、二人は元気にしてたか?」

「はい、元気だったのです、でも司令官さんに挨拶に言ったら寝てたつて言ってたのです」

「あちやく・・・悪い事したかな・・・」

「また明日行くって言ってたので大丈夫なのです！」

「そうだな：：そうだ、明日は祝日だしみんなでどこかに出かけるか」

「賛成なのです！」

「んじや明日はお出かけだな」

「楽しみなのです」

「俺もだよ」

電はそのまま俺を抱き枕のようにして抱きついてきた。

「司令官さん：：おっきい：：」

「お前はちっこくて可愛いな」

「むっ：：私はすぐに大きくなるのです」

電は少しふくれっ面で言う。

「これもまた可愛い。」

「そうだな：：そろそろ寝るか」

「そうですね：：おやすみない、司令官」

「おやすみ」

そういつて昼寝したのに気付けば夢の世界だった。

合同作戦

少しづつ温かくなってきた。

差し込む日差しが気持ちいい。

・・・なんだけど・・・

「司令官さん、こんな噂知ってますか？」

「ん？どした？」

電が珍しく噂話をしてくる。

どんなメルヘンな話が出てくるか・・・

「深海棲艦が人間を連れ去って、研究してるって」

「こわッ!!」

ほのぼのしそうな話かと思ったら普通に怖い話だった。

だが、その話は聞いた事がある。

「本当だったら怖いですよね」

電は笑いながら話しているが・・・

実は日本以外でも急に失踪する人が増えている。

日本では今月だけで10人だ。

「まあ・・・よくある話じゃないのか？」

「ですよね」

「・・・今月の失踪者がただの事故ならな・・・」

「え」

「今月だけで10人消えてる」

「え・・・あの・・・」

「しかも貧困に困っている人間でも、鬱の症状が出てる人間でもない
そうだ」

「ちよ、あの」

「誰の仕業なんだろうな」

「ううう噂なのです！きつとそうなのです！いやそれ以外考えられない
のです！」

「でも他国の仕業とも・・・」

「この話はおわり！」

無理やり終わらされた。

ひさびさに焦ってる姿を見たような。

「まあ・・・何かしらの理由で消えたんだろうな」

なんて呟きながら来月のスケジュールを組む。

「電、テレビでもつけてくれないか?」

「あ、はい」

テレビをつけた時、血相を変えた情報部のスタッフが入ってきた。

「お?どした?」

「提督!やばいです!」

「いや・・・提督の部屋のドア蹴破って入ってくるお前がヤバイ」

「そんな悠長な事言ってられませんよ!今すぐ空母から艦載機を上げ

てください!」

「スクランブルか?」

「違います!深海棲艦が人間を拉致してるって話聞きませんか?」

「ああ、さつき聞いたな」

「その作戦命令を傍受しました、警察はすでに行動を開始。私たちに

は空中からの支援要請が来ています!」

「マジかよ・・・」

「え・・・あれ本当の話だったのです・・・?」

「みたいだな」

ちやうど、すぐ沖合に赤城が航空機の訓練を行っている。

燃料補給を終えさせて向かわせよう。

「んで、場所は?」

「横須賀市です」

「・・・ここか・・・」

「警察無線とこちらの無線の周波数を同じにして連携をとりますか

?」

「そうしよう。あと上空に陸戦要員を待機、警察の手に負えなくなっ

たら降下させる」

「了解しました!」

赤城に無線をつないで状況を説明する。

今は敵の行動を阻止する必要がある。

「赤城、聞こえるか？」

〈〈提督？はい、どうしました？〉〉

「今すぐに艦載機を横須賀市に向かわせろ、それと無線周波数は警察と同じに合わせるように伝えるんだ」

〈〈警察と？どうしたんですか？〉〉

「深海棲艦が日本人を拉致する作戦命令を傍受した、その阻止だ」

〈〈了解しました、メビウス隊を向かわせます〉〉

「頼んだ！」

核兵器のあとは拉致・・・やることすごいなホント

「司令官さん、私は・・・」

「今できることはない、あいつ等を信じよう」

くメビウス隊く

〈〈たーいちよ〉〉

「ん？何？」

〈〈深海棲艦の噂知ってます？〉〉

「ああ、うん。知ってる」

〈〈アレかな、拉致った後はエロ同人みたいな展開になってるのかな？〉〉

「ブフォ!!!」

コイツ・・・

脳内ピンク娘め・・・

「真面目にしなさいよ!!」

〈〈はいほーい〉〉

「ほんつとにもう・・・何でウチの隊はみんなこんななの・・・」

まあ・・・嫌いじゃないけど・・・

そんな事しているうちに警察無線が聞こえてくる。

〈〈・・・航空隊！〉〉

「ん？どちら様？」

〈〈こちら神奈川県警、パトロールカーです〉〉

「こちら空母赤城所属、メビウス1。そちらの状況は？」

〈〈まだ何も発見できず〉〉

「了解」

散開して探したほうがいいかも。

「みんな、怪しい動きをする車、航空機、なんでもいいから怪しいヤツを全部警察に報告して、OK？」

〈〈メビウス2、了解〉〉

〈〈3、りょーかい〉〉

〈〈4、ラジャー〉〉

今回は4機編隊・・・

あとから増援機が来るらしいけど・・・

「全機、広範囲に散開して搜索開始！」

〈〈了解！〉〉

編隊を崩してバラバラに散る。

みんな地上に目を光らせていた。

〈〈こちら警視07、警ら中のPCへ！怪しい車両を発見！軍用車のよ
うだが・・・〉〉

「どいどい！」

〈〈あゝ・・・まってくれ・・・そつちの下だ！〉〉

「下！」

ロールして背面飛行しつつ下を確認する。

たしかに怪しい軍用車だ。

〈〈こちら警視111！対象を発見、接近する！〉〉

「メビウス1より、全機。不審なトラックを発見！」

〈〈了解！編隊を戻す？〉〉

「いや、このまま散開してて！」

〈〈了解、号令一つで戻るからね！〉〉

「言葉だけは頼もしい・・・」

なんて呟いて監視を継続する。

〈〈そこのトラック！路肩に停車しなさい！〉〉

「止まればいいけど・・・」

〈〈アイツ加速した！警視1-1より全車！逃走中の不審なトラックを
発見！〉〉

〈〈こちらメビウス2、必要あれば航空支援行きます〉〉

〈〈今は必要ないと・・・うわっ!!〉〉

「どうしたの!？」

地上で小さな爆発を確認した。

規模は手榴弾程度だ。

〈〈トラックに接近するもグレネードを撃ち込まれた！路肩の郵便ポ
ストが大破！負傷者無し！その間に逃げられちゃった!!〉〉

「了解！上空で監視を継続！」

〈〈あく・・・海軍の航空隊さん。こちら県警本部、飛行機から銃撃は
しなくていいからな!〉〉

〈〈ちよつとだけでも・・・ダメ?〉〉

〈〈ダメ!!〉〉

ここで提督の声が聞こえた。

〈〈うっへえ・・・提督・・・〉〉

〈〈跳弾が人に当たったらどうすんだ!〉〉

「あはは・・・怒られてやんの」

〈〈こちら警視07！あのトラックで間違いないようだ!〉〉

〈〈了解！今どこだ!!〉〉

〈〈横須賀工業高校の通りに差し掛かろうとしている!〉〉

〈〈こっちは公郷小のところだ！高校のグラウンドを突っ切る!〉〉

〈〈落ち着け!!どこ走ろうとしているのか分かってるのか!!〉〉

なんか・・・すごい警察官がいる。

「メビウス1より警視1-1、目標は弾薬補給所方面に逃走しています
！」

〈〈犯人のトラックを発見!!チクショー！撃ってきやがった!!〉〉

ここからでも発砲の炎が確認できる。

「ま、待ってて！今すぐ援護に!!」

〈〈安心しな海軍の嬢ちゃん！撃ちまくって足止めしてやらあ!!〉〉

「……日本ですよ!」

〈なんちゅー警察官だ……〉

〈陸軍のレンジャーより怖い気がするのです……〉

全くだよ!とか思いながらあとを追う。

いつの間にか全機集合していた。

「目標……衣笠ICから繋がる大通りを北久里浜駅方面に向かいます!」

〈こちら警視07!近道の市営公園墓地内に行く!〉

〈お前こそどこ走ってんだ!!バチ当たるぞ!!〉

〈こちら県警本部、湘南橋を封鎖した!ここに追い込んでくれ!〉

〈了解!戦闘機!機銃掃射で頼む!〉

「え……撃つていいの……?」

〈まあ……撃てつつてるし……やれ!〉

「りよ、了解!」

パトカー4台ほどがトラックの後方に着き銃撃していた。

それに混ざって行ってほしくないほうの道に機銃掃射する。

「そのまままっすぐ!」

だが突然、トラックはスリップして停止した。

タイヤを撃ちぬかれたようだ。

〈対象は停車!〉

〈待て……奴らまだ撃つてきやがる!!〉

〈往生際が……なんだこの音!〉

その時、積んであった簡易レーダーが目標補足の電子音を鳴らす。

その数10。

〈こちらメビウス4!護衛戦闘機に守られたUH-60ヘリコプターを確認!〉

〈あいつ等の本命か……!〉

「全機!護衛戦闘機を撃墜するわよ!」

〈了解!エンゲージ!〉

アイツらの作戦はトラックに乗せた被害者をヘリで本拠地に運ぶ魂胆だったらしい。

それよりも何で護衛戦闘機まで侵入できてるんだろう・・・

「敵戦闘機はなるべく撃墜より撤退させて！」

〈地上に落ちるとヤバイもんね！〉

「そういうこと！」

撃墜でも不時着できる程度の損傷にとどめたいが・・・

奴らは素直に撤退するかどうかだ。

あの機はパイロットがいるのかどうか分からない。

もし居ないのであれば地上に激突させる事だってできる。

パイロットが居ても・・・だが。

〈こちら警視11！これから俺は独自に奴らを攻撃する！〉

〈おい待て！後部座席に見えるのは何だ！〉

〈携行式の地对空ミサイルだ！署の押収品倉庫から持ってきた！〉

「それアカンでしょ!!」

〈アカンね〉

〈まじかよこのお巡りさん・・・〉

日本の警察おかしい。

空中戦を開始して10分、あの警察官がすでに4機撃墜した。

〈誰か!!弾薬!弾持ってこーい!!〉

〈先輩!署の倉庫にあったのはこの5発だけです!!〉

〈チクショウ!あと一発か!!〉

「いや待って、どこの誰が所持してたのそのミサイル」

〈ヤクザだろうな・・・〉

「提督!おかしいでしょ!!どんだけ重武装なんですかそのヤクザ!」

〈まあ、そこら辺の兵士よりいい装備してるからなあいつ等〉

なんてしてる間に全機撃墜を確認した。

運がいいのか悪いのか、全機空中で爆発して地上への被害は軽微の

ようだ。

〈あのへりはどこ行った!!〉

〈待ってる、視界にとらえたぞ・・・〉

別の警察官の声。

なんか嫌な予感がする。

「あの・・・何する気かだけ教えてくださいな・・・」
恐る恐る質問する。

〈署の押収品の倉庫の中にあつたRPG-7を持ってきた！これで
地面に叩き落としてやる!!〉

「日本の警察頭おかしいの!?!」

素直な感想。

今までにいたであろうか、こんな重武装なお巡りさん。

こんなのが街のお巡りさんとか想像したくない。

〈撃てツ!!〉

見事にブラックホークのテールローターを吹き飛ばした。

回避行動をとろうとしたが間に合わなかったようだ。

そのまま回転しつつ湘南橋のかかる川へ墜落した。

〈確保！確保!!〉

〈荷台に拉致された被害者を確認、保護した!〉

〈被害者に目立った怪我無し！一応救急車を・・・〉

〈なんだコイツ・・・女の子・・・?〉

〈こちら横須賀鎮守府司令官、警察チームへ。その少女は白い肌に白

い髪をしているか?〉

〈こちら警視11、白い肌に・・・白い髪だ!〉

〈・・・生きているならこちらに引き渡してくれ。上空で待機中のへ

リが向かう〉

〈了解〉

はあ・・・終わった。

まさか警察と合同なんてね。

「そろそろ燃料がビンゴ、帰りましょう」

〈へりよーかい〉

く提督く

「んで、コイツか・・・」

鎮守府にある空き倉庫に確保した深海棲艦を収容する。

見たところ艤装はなさそうだ。

「ヲ級・・・か」

犯人グループは地元の暴力団がかかわっていた。

また、ヘリは深海棲艦が複製した航空機だった。

機体にはアメリカ国籍があつたため一時混乱したようだ。

「拷問なんて趣味じゃないんだがな・・・」

つい二時間前、海軍本部からどんな手段を使つても情報を吐かせろとの通達が来た。

この倉庫にいるのは俺だけ。

一応自衛用に拳銃を持ってきてはいるが・・・

「ん・・・」

「起きたか」

「ヲツ!？」

「よく寝れたか?」

とりあえずそう話しかける。

だがコイツは開口一番・・・

「くっ殺せヲツ!!」

「いや待って」

エロ同人じゃねーからなコレ。

「私はどんな仕打ちを受けようと屈しないヲ!」

「待って、これエロ同人的な展開はないから」

「私をこんなにしてどうする気!? イジメるの!? エロ同人みたいに! 絶対そうする気だヲツ!!」

「話し聞けコラア!!」

「やっぱりオークとかと同じだヲ!!」

「ちげーよ!! どうみたらオークに見えんだよ! アホか!!」

なんだコイツ!!

「いやああああ!! 助けてヲ!! 凌辱されるヲ!! 初めてなのに汚されちやうヲヲ!!」

「人聞きの悪い事言うなアア!!」

しかし運が悪いのか・・・

電が倉庫に入ってきてた。

次いでいうと会話聞かれていた。

「し・れ・い・か・ん・さ・ん・？」

「フアツ!？」

「助けてヲ!!この人欲望のままに私を犯そうとしたヲ!!」

「てめ!火に油を注ぐな!!」

なんで立場逆転してるんですかね。

なんで私が命の危険に瀕しているんですかね

「電!誤解だ!!」

「誤解?はて?それはこのヲ級ちゃんから聞きましょうか?

「やめろおおお!!!ソイツ嘘しか言ってないからアアア!!!」

「ううう・・・私のバージン持っていかれたヲ・・・」

「お前さつき初めてがどうたら言っただろ!!」

「・・・司令官さん?」

「待つて!なんで俺が!!」

「尋問はほかの人にお任せするのです!」

「ああもう是非そうしてください!!」

「いそかぜさんとうらかぜさんをお願いするのです」

「それはそれでヤバイ気がする・・・」

「ところで司令官さん?」

「ん?なん・・・いだだだだだだだ!!!」

ものすごい力で手首をつかまれる。

痛い。

「さつきの話・・・本当ですか?」

笑顔で聞いてくるが青筋浮かんでる。

「いだだだ!!違う!お前以外のヤツに手なんてださない!!」

「・・・信じますよ?」

「信じて!お願いだから!!関節外れる前に信じて!!」

「んもう・・・」

「んもうってアンタ・・・」

痛む手首をさすりながら倉庫を見ると、いそかぜとうらかぜが入っ

て行った。

「ヲ級・・・相手が女の子二人で良かったな・・・」
と同時に可愛そうに・・・と思っていた俺であった。

日本海軍92便

ある日の昼下がり、少しだけコーヒ―を飲みながら休憩していた。尋問中のヲ級は何を聞こうと「くっ殺せ！」しか言わずしびれを切らしたいそかぜがガチで殺しそうになっていた。

最近、やり方を変えたらしいが倉庫の中からは「んほおおおお!!」とか妙な叫び声がするらしい。

想像したくない。

「さて、休憩も終わりにしようかな」

今日は滑走路に降りてくる航空機の数も少なく、静かだ。

「ヲ級さん・・・大丈夫ですかね・・・」

電は心配そうに倉庫のほうを見る。

たぶん、大丈夫じゃない。

「まあ・・・死にはしないと思う・・・」

なんて話しているとドアがノックされた。

「はい?どうぞなのです」

電がドアを開けると、本部の将校がいた。

「あら?少将殿?」

「いきなりですまん大佐!航空機の操縦は出来るか?!

若干息を切らしていた。

そんなに走ってきたのか。

「出来ますけど・・・どうしたんですか?」

「それが、佐世保に急ぎよ出張の予定が出てな・・・飛行機のチケットも取れなかったんだ」

「ああ、そういうことですか。ちょうど複座のストライクイーグルありますけど・・・」

「いやそれが・・・輸送する物資も大量にあって・・・」

「物資?」

「いろいろあるんだが・・・武器弾薬に食料と・・・」

「でも今輸送機空いてたかな・・・」

今いる航空機のリストに目を通す。

電はその間にお茶を入れてくれていた。

「どうも、いたただくよ」

「はい、お疲れのようなので」

「提督にずいぶん良くしてもらってるんだな」

「え？どうしたのです？」

「顔だよ、ここに来るまでにいろいろな艦娘に会ったが皆辛いつて顔はしてなかったからな」

「えへへ・・・」

電は少将と雑談をしていた。

んで俺は・・・

「物資輸送が可能な航空機は747しかないですね・・・それでも良ければ飛ばしますが・・・」

「おお、ジャンボか！しかし君免許はあるのかね？」

「一応、昔に2か月ほど民間航空会社に勤めてましたからね。DC-10と747の免許を持ってますよ」

「ほおDC-10もか」

「・・・もう二度と操縦したくないですけどね・・・」

あの機体デフォルトで欠陥があるから・・・

貨物室のドアとか貨物室のドアとか貨物室のドアとか。

「それで、いつごろ離陸できる？」

「副操縦士が居ないとどうにも・・・一応、航空機関士が必要ない型です・・・」

「副操縦士の仕事・・・できる娘はいないかね・・・」

「ん・・・電・・・でも免許ないからな・・・」

本当なら隣の席に座らせてやりたいが・・・

免許がない以上、それは出来ない。

「私じゃ無理ですかね・・・」

「無理ではないんだが・・・」

「・・・責任は私が取る、乗せてやれ」

少将は少したため息をついて言った。

まあ・・・そういうなら・・・

一瞬頭に児童操縦という単語が過つたが気のせいだと信じる。

「じゃあ離陸前点検と積み込みがありますので3時間ほどお待ちください」

「了解したよ、機体に乗りに込んでおくのはいいかね？私は昔からジャンボが好きでね・・・」

「そういうことでしたらコックピットも開けときましようか？」

「いや、もし何かのスイッチに当たるとまずいからな、やめとくよ。そういうわけで代理をアンドロメダに任せて格納庫へ急ぐ。」

この747が飛ぶのは2か月ぶりだ。

「フレアもIRジャマーもないが・・・」

一応基地防空隊のF-15が2機護衛に着くことになっている。

ただ・・・深海棲艦の艦載機の前では的が小さすぎてどうなるか・・・
「機材は・・・異常は無さそうだな」

目視と触ってみて点検する。

どこにも異常は見当たらない。

「よし、行こうか」

電には先にコックピットに乗りに込んでもらっている。

そういえば、戦闘機以外に乗せるのは初めてだな・・・

喜んでくれるといいが。

「じゃあ、操縦頼むよ機長殿」

「航空会社の時はまだコパイでしたけどね」

「まあ、必要な訓練は全部受けているんだろう？」

「そうですね・・・空軍時代にもいくらかこの747は操縦しましたからね」

「じゃあ大丈夫だ、快適な空の旅を楽しむよ」

「了解しました、少将殿。ところでほかに乗る方は居ないんですか？」

「ああ・・・私の秘書がもうちよつとで到着する予定だよ。今日は葛城だったかな」

「空母が航空機で空の旅って言うのも新鮮ですがね」

「ああ、もう下まで来てるらしいがプロペラがついてないのに飛ぶわけない！って必死に訴えてるそうだ」

少将は苦笑いだった。

まあレシプロを見慣れた艦娘からすればターボファンエンジンなんて分からないだろう。

「じゃあ私は操縦席に居ますので」

「ああ、もしかしたらお邪魔するかも知れないよ」

「シートベルトサインが消えてからにしてくださいね」

「子供じゃないんだ、分かってるよ」

そんな冗談を飛ばして操縦席に入る。

中では電が目を輝かせていた。

「司令官さん！高いのです！」

「だろ？」

俺はそんな電のほほえましい姿を見ながら席に座る。

「さてと、管制に連絡しようか」

管制に周波数を合わせて通信する。

コールサインはジャパンネイビー—092だ。

日本海軍92便と言う意味だ。

「クリアランスデリバリー、ジャパンネイビー—092。経路と高度の

承認を要請」

へ「ジャパンネイビー—092、佐世保鎮守府までの飛行を、「MITOH 1 出発経路」に続き、飛行計画どおりの経路経由で承認します。巡航高度は18,000フィート、レーダーコードは3225です。<<

「ジャパンネイビー—092、了解」

クリアランスももらった

エンジンスタートだ。

「電、チェックリストを頼む」

「チェックリスト・・・あ、これですか？」

「そうそうそれ、読み上げてもらえる？」

「はい、了解なのです！えっと・・・バッテリーオン」

電の読み上げ通りにスイッチを押していく。

「APUスタート」

APU・・・補助動力装置の動く音が聞こえてくる。

「空調オン」

外の太陽光で温まった機内に少し冷たい風が送り込まれる。

その後も淡々と電の読み上げ通りにエンジンスタートの手順を踏む

「エンジン・・・」

「あ、エンジンはプッシュバック中だよ」

「そうなのですか？」

「ああ、だからプッシュバックが始まったらな」

後はスタータースイッチを押すだけだ。

管制にプッシュバック許可を要請する。

「横須賀グランド、ジャパネイビー092。プッシュバックを要請」
「へジャパネイビー092、滑走路17に向けてプッシュバックを許可します」

「よし、プッシュバックも始まった、エンジンスタートしようか」

「はい！」

スタータースイッチを押してエンジンを始動させる。

この低音から高音が変わっていく音がたまらない。

「エンジン4正常に始動・・・ほかも大丈夫そうだな」

4発のターボファンエンジンはご機嫌に動いていた。

「よし離陸前チェックだ」

「はい！えくつと・・・フライトコントロール」

「チェック」

「飛行計器」

「チェック」

「フラップを離陸位置にセット」

「チェック」

滞りなく離陸前チェックリストを読み上げ、確認していく。

「離陸前チェックリスト、コンプリート」

「よし、管制に離陸許可をもらおうか」

鎮守府の飛行場は少しせまく、格納庫から滑走路まではほぼ直進だ。

離陸は陸側の17番滑走路から行い、着陸は海側の34番から行う。

滑走路をそのまま端まで走ればすぐに格納庫と駐機場に着く。

「横須賀タワー、ジャパンネイビー092。周波数を切り替えた」

「ジャパンネイビー092、風160。から5ノット、滑走路17、離陸支障ありません。」

「離陸支障なし、ジャパンネイビー092」

滑走路に入り、エンジン出力を徐々に上げる。

「80ノット」

電は事前に教えた通りに速度を読み上げていく。

「V1」

離陸決定速度に達した。

ここまで何も異常はない。

「ローテート」

機首上げ速度だ。

俺はゆつくりと操縦桿を引き起こす。

前輪はすぐに滑走路を離れた。

その数秒後には後輪も離れ、高度は上がり始める。

「V2」

機体は宙に浮き上がり、海の上に出た。

「ポジティブブレート、ギアアップ」

ランディングギアを格納する。

速度も高度も順調に上っていく。

「フラップス、アップ」

ここでフラップも格納する。

航空機はもうフラップで揚力を増やさなくても自力で高度を上げていける速度だ。

「離陸後チェックリスト、ランディングギア、アップ。フラップ

アップ」

すべて正常だ。

警報も表示されていない。

「離陸後チェックリスト、コンプリート」

〈ジャパンネイビー―092、周波数120.8MHzで東京ディパーチャーにコンタクトしてください〉

「ジャパンネイビー―092、切り替える」

周波数を羽田空港のレーダー管制室に切り替える。

「東京ディパーチャー、ジャパンネイビー―092。現在1,200フィートから18,000フィートに上昇中」

〈ジャパンネイビー―092、こちらはレーダーで貴機を補足しました〉

「了解」

さて、ある程度飛行も安定した。

オートパイロットに切り替えよう。

〈ジャパンネイビー―092、フライトレベル180で飛行してください〉

「ジャパンネイビー―092、了解」

高度維持装置、ナビゲーション保持スイッチ、速度維持スイッチ
オートスロットル、自動操縦マスタースイッチ・・・よし、全部O

K。

「電、操縦桿を握ってもいいが曲げたり引いたりするなよ」

「何か起こるのですか?」

「操縦桿にある程度の力がかかるとオートパイロットが切れるんだ」
「なるほど・・・そんな事があるのですか・・・」

電は操縦桿よりも計器の方がいいようだ。

すると後ろから轟音が聞こえてきた。

〈92便、こちら鎮守府航空隊〉

「こちらジャパンネイビー―092、目的地まで頼むよ」

〈お任せください、提督殿〉

「コールサインは?」

〈イーグル1とイーグル2です。F-15Cが二機、武装はM61、
サイドワインダーが4、アムラームが4〉

「対空目標絶対に殺すマンだな、頼もしい」

そんな冗談を飛ばしながら飛行計器に目を配る。

特に異常もなく10分程度で高度18000Ftに到達した。

「シートベルトサインオフと・・・電、もう席を立ってもいいぞ」

「あ・・・じゃあちよつとお手洗い行ってくるのです」

「はいよ。あ、そうだ、返りにCAから飲み物を何か受け取って来てくれないか」

「はい、わかりました」

電が操縦室を出るのと入れ違いで少将と葛城が入ってきた。

「すつーいー！」

「この機体のコクピットがもう懐かしいなんてな・・・」

少将は懐かしいといった目で計器を眺めていた。

葛城は子供のようににはしゃいでいる。

「最初プロペラもないのにどう飛ぶのかと思ってたけど・・・プロペラなんかよりも乗り心地最高だわ！」

「はは、そりやよかった」

「ねえ、横須賀の提督さん、操縦桿離してて平気なの？」

「ああ、これは自動操縦って言って機械が飛行機を飛ばしてるんだ」

「ふくん・・・機械が機械を動かすってなんか変ね」

「それだけ航空機は進化したってことだよ」

少将はコックピットの計器を眺めながら葛城にそう言った。

「大佐、ちよつと副操縦士席に座っていいかな」

「ああ、はいどうぞ」

「あ！ずるい！」

「葛城もあとで座らせてもらえ。大佐・・・じゃない、機長に許可をもらってな」

「だからホントは機長までなってますってば」

「経歴だけだと機長になってもおかしくないがな」

「んな事ないですよ」

なんてコクピットで話していたら電が帰ってきた。

「今帰ったのです！あれ、みなさんいらしたんですか」

電はコーヒーを二つ持ってきていた。

「ああ、今葛城が副操縦士席にいるから少し待っててやってくれ
「はい！」

葛城は副操縦士席で少しはしゃいでいた。

「空を飛ぶってこんなに気持ちいいんだ・・・」

「艦載機の気持ちがあったか？」

「うん！私も飛行機の免許取ろうかな・・・」

「お？だったらそこの鬼教官に教えてもらえ」

少将は俺を指さして言った。

「え、俺!？」

「冗談だよ、冗談。まあホントに免許取るって言いだしたら操縦を見てやってくれ」

「見てやれって言ってもインストラクターの資格は持ってないですから」

「そうなのか」

コックピットではそんな空気でなごんでいた。

すると・・・

〈警告、アンノウンの接近を感知!〉

「マジかよ・・・!電、席につけ!少将も席についてシートベルトを」

「わ、わかった」

平凡な空気が一気に緊張に変わる。

乗っているのは戦闘機ではない、鈍重な大型旅客機なのだ。

「イーグル1、2!こっちは高度を10000ft以下に下げろ!雲に潜るぞ!」

〈了解!1をそのまま護衛に着け2が迎撃に向かいます!〉

「分かった!」

自動操縦を切り、手動に切り替え高度を一気に下げる。

飛ぶのは無視界状態の厚い雲の中・・・バーディゴ、空間識失調を起すかもしれない。

頼れるのは計器のみだ。

「電、いいか。俺の指示通りに頼むぞ」

「りよ、了解なのです!」

「まずはそのスイッチをいじってスクーク77に合わせろ！」

「は、はい！」

スクーク77・・・それは緊急事態を表すコードだ。

管制官が一目で緊急事態だと分かる。

〈ジャパンネイビー092、こちら東京コントロール。何か非常事態を宣言しますか？〉

「ジャパンネイビー092！未確認航空機に追跡されている！交戦の可能性あり！」

〈未確認・・・了解しました！付近の航空機を退避させます。陸軍航空隊に連絡は・・・〉

「こっちの護衛機一機が迎撃に向かった！」

〈了解、被弾はありますか？〉

「まだない！」

〈こちらイーグル2！未確認機は深海棲艦の戦闘機3機！速度400ノット！〉

「了解！」

あと少しで雲の中・・・！

その時、一瞬ニアミス警報が鳴る。

「後ろか!!」

ただ敵機の方が早くオーバーシュートしたようだった。

だが次はそうもいかない。

〈ちくしょう・・・！ミサイルが撃てない!!〉

距離的に熱源ミサイルしか撃てない。

アムラームを撃つには近すぎる。

「もうすぐ雲の中・・・!!」

その時、機体が少し揺れ、貨物室の気圧が下がったという警報が鳴り始める。

「司令官さん!!」

「分かってる!!」

すぐに管制に連絡する。

「メーデー！メーデー!!貨物室に被弾あり！気圧が下がっている!!」

〈被だ．．．りよ、了解しました！高度を下げて．．．〉

「無理だ!!雲に隠れて迎撃を待つしかない!!これ以上下げたらいいのだ!」

〈客室に被弾は!〉

「確認できない!」

〈了解、火災に注意!!〉

火災に注意と言われた時だった。

火災警報が鳴り始める。

貨物室で発火したのだ。

火災位置は前方デッキ．．．武器弾薬は後部だが

前方デッキには紙などの燃えやすいものがあつた。

曳光弾を被弾して発火した可能性がある。

「前方デッキに火災!」

〈ほかに被害は!〉

「まだ確認できない!」

マズイ．．．飛行中の火災は大惨事を招く。

この機体にはスプリンクラーはない。

代わりに貨物室内の気圧をさげる事ができる装置がある。

「貨物室内を減圧する!電!操縦桿を少し保持してくれ!」

「は、え!?わ、わかりました!」

スイッチを押して貨物室内の気圧を下げていく。

これで空気は外に吸い出され沈下するはずだ。

だが．．．

「けほっ!これ、煙じゃ．．．!!」

「しまった．．．!」

操縦室内に煙が充満し始める。

この機体は煙を感知するとエアバックを開き飛行に必要な計器を見えるようにするシステムが搭載されていない。

その改修に出す前だったのだ。

「もつと早くやっつくんだっだ．．．!」

「司令官さん!!操縦桿が．．．引いても機首が上がらないのです!!」

「何・・・!?!」

計器を見ると油圧が下がって行っている。
油圧ポンプにも被弾していたようだった。
俺は急いで自動操縦のスイッチを入れる。

この機体は油圧システムと自動操縦の電気回路は分かれているため自動操縦は可能なはずだ。

煙はまだそこまで濃くはない。

「よし、機体が安定した!」

ただ急いで着陸する必要がある。
それに客室の状況が心配だ。

「イーグル2! 状況は!」

〈敵戦闘機一機を撃墜!〉

「分かった! イーグル1、迎撃に向かってくれ!」

〈え、でもエスコートは・・・〉

「大丈夫だ! それよりも戦闘機を!」

〈了解!〉

前を飛んでいた轟音が消える。

この機体に防空レーダーがないのがもどかしい・・・

「電、客室の状況を見てきてくれ」

「了解しました!」

「そのガスマスクつけて行けよ!」

「はい!」

電は席を立ち、ドアを開けた。

すると、ものすごい量の煙がコクピットに流れ込む。

「しまった・・・」

「煙が・・・! 様子を見てくるのです!」

「分かった、そのガスマスクも二人分持って行ってやれ!」

「分かりました!」

後ろを振り向いた時に酸素マスクが降りているのは確認できた。

二人がそれをつけている事を祈る。

「これで操縦室に一人きりか・・・」

しかも煙は客室側から流れ込みコクピットを満たす。
幸い、火災自体は鎮火しているが・・・

「近場の空港に引き返さないと・・・」
地図も何もほとんど見えない。

ただ、10 cm弱のところまで近づけば計器は視認できる。

「ジャパンネイビー092！近くの空港に緊急着陸を要請したい！」

〈ジャパンネイビー092、そちらの東190 kmに関西国際空港がある、そちらに緊急着陸を！〉

「了解！」

周波数を関西国際空港に合わせる。

絶対に地上に下ろす！

〈ジャパンネイビー092、こちら関西空港〉

「ジャパンネイビー092！」

〈滑走路06Lを開けました！いつでも着陸してください！ILS
周波数108.7 MHz！〉

「了解！」

なんとか見える視界で機首方位を合わせる。

電は客室に行ったきり帰ってこない。

言いようのない不安に襲われるがそれよりも着陸させる事を優先する。

〈こちらイーグル隊！すべての敵戦闘機撃墜を確認！〉

「了解！こちらはもう視界がゼロだ！速度と高度、方位を前を飛んで
教えてくれ！」

〈視界ゼロ・・・コクピット内がですか！〉

「そうだ！雲から抜けているのか抜けてないのか分からない！！」

〈了解！あと1分で前に出ます！〉

「頼む！」

この一分が長い・・・

すると後ろから足音が聞こえてきた。

「電か!？」

「戻りました！お二人ともなんとか無事です！」

「分かった、席に戻れるか?！」

「それがほとんど見えなくて・・・わっ!!」
躓いたんだろう。

その時、エンジンからおかしな音がした。

出力・・・いや、エンジンが停止した音だ。

「はわっ!!!何かスイッチ押しちゃったのです!」

「待ってる確認する・・・」

電が押したスイッチあたりを見ると、第三エンジンの燃料がカットされていた。

この煙のなかでは再起動は難しい。

「電、客室に戻れるか?」

「はい・・・」

申し訳なさそうな声。

だが、この視界の中では転んでも仕方ない。

俺は責めはしない。

「大丈夫だ、客室に戻ってシートベルトを絞めてろ」

「はい・・・!」

また足音が遠ざかる。

〈提督! 現在高度6000ft! なおも下がってます!〉

「何!?!」

よく見ると高度維持装置のスイッチが入っていない。

押し忘れていた。

「高度はもう6000で維持しよう・・・」

〈方位はこのまままっすぐ行けば関空です! 速度300ノット!〉

「了解!」

速度維持装置をいじり、速度を160ノットに減速させる。

手さぐりでフラップも探し、一段階下げた。

〈あと100kmです!〉

「分かった・・・!」

その時、何かの警報が鳴り始める。

何の音か思い出す。

「まさか・・・」

計器に5cmまで近寄って見る。

そこには・・・

「フラップが出てない・・・」

〈何ですか!?!〉

「フラップが下がらない!!」

〈そんな・・・〉

俺は急いで速度維持装置を250ノットに切り替える。

フラップがない。

そうなるのと低速飛行時に揚力が足りず、翼から気流が剥離し失速することになる。

「この速度で下すか・・・それとも急減速で下すか・・・」

この速度で下せるか・・・

それともフラップ無しで失速しないギリギリに行くか・・・

または滑走路の上空ギリギリを飛んで、急減速で無理やり下すかだ。

どれも非常に危険だ。

「手動なら行けたが・・・」

速度が速くても、関空の滑走路は長い。

ギリギリ停止できるだろう。

だがILSを使った着陸では・・・

いや、だがここはILSを使う。

どれも着陸前に自動操縦を切らねばならない。

ILSで着陸なら接地後に切っても問題はないはずだ。

本来は着陸前に切るのだが・・・

「やるぞ・・・」

速度180ノットまで原則する。

機体は若干の迎え角を取り始める。

〈空港まであと50km!〉

その時、機体がグライドスロープに乗った。

ILSの周波数もキャッチしモールス信号のような音が鳴る。

「ふう．．．」

一安心だ。

だが以前として前は何も見えない。

高度は徐々に下がっていく。

『2500』

「ギアダウン！」

2500ftを示す音声は鳴る。

速度は時速にして360km。

通常の着陸よりかなり速い。

ランディングギアは正常に降り、ロックしてくれた。

「無事に地上に降りてくれ．．．！」

エンジンは3基しかないが、この機体はエンジン一基でも飛べるように設計されている。

なんとかなる！

『1000』

高度1000ft

地上から300mの所にいる。

高度が1000ft以下になれば機体は滑走路端に差し掛かるはずだ。

その時にオートパイロットを切り、エアブレーキを展開する。

急減速で地面に叩き付けられるかもしれない。

『500』

500ft

俺は準備を始める。

もうちよつとだ。

『400』

もう地表まで120mだ。

幸い失速警報はなっていない。

〈ジャパンネイビー—092！フラップが出ていません！〉

「ジャパンネイビー—092、フラップは故障により下げられない！！」
管制とそんなやり取りの中、200ftを切る。

すると・・・

『Toolow, Flaps.』

フラップが出ていないというGPWSが作動する。

「んなこと分かってんだよ・・・!!」

機械に当たっても仕方ないが・・・。

『100』

100ft・・・!!

「オートパイロットカット!エアブレーキ展開!」

その時、いきなり降下率が下がり

『WhoopWhoopPullup』

機首を引き起こせという警報がなったと同時に激しく揺さぶられた。

車輪が接地したのだから。

「止まれええええええ!!!!」

一人、コクピットで叫んで逆噴射、フットブレーキをかける。

〈滑走路から外れるぞ!!〉

「・・・!」

護衛戦闘機の警告のあと機体が激しく揺れ始める。

滑走路を外れ、芝生に突っ込んだ。

〈提督!逆噴射を切ってください!!〉

言われたように逆噴射を切る。

すると、その数秒後機体は停止した。

「・・・止まった・・・」

一瞬放心状態になる。

だがすぐに我に返り、緊急脱出の手順を踏む。

「エンジン・・・カット!」

その他の手順も踏み、客室に移動する。

視界は30cm先も見えない。

「全員降りるぞ!!」

「げほっ!そうだな!」

ドアをこじ開けると脱出スロープが出てきた。

俺は全員の脱出を確認してからスロープを下りて、機体から離れた。

まだ機体からは白煙が立ち上っている。

「ここまで逃げたら・・・」

全員の姿も確認し再び機体のほうを見ると、炎が貨物室のドアを吹き飛ばし噴出していた。

どうやら、低空に降りてきた時に火災が再発していてそれが弾薬に引火したようだった。

「はぁ・・・運がいいのか悪いのか・・・」

地上に降りて、全員放心状態だった。

だが、少し煙を吸っただけで負傷者無し。

強いて言えばこけた時に電が手に怪我をしたくらいだった。

「司令官さん・・・」

「ん？なんだ？」

「生きて・・・ますよね」

「ああ、俺が全員連れて帰った」

電はそのまま俺に抱き付いてきた。

少将も後ろで葛城に抱き付かれたため息をついていた。

「とんだフライトでしたね」

「ああ、気分は最高だがな」

「もう飛行機いやだああ!!うわあああああんん!!!」

「・・・葛城は深い傷を負ったみたいだがな」

「・・・」

大泣きする葛城を横目で見ながら俺も生きていると実感し深いため息をついてしまった。

目の前では747の大きな機体が炎に包まれていた。

敵潜水艦

「あつっ……」

エアコンが効いていても日差しが暑い。
もう夏だ。

「あついのですううう……」

俺の横でも電が汗だくになっていた。

無駄に日当たりがいいのでエアコンがなかなか効かない。

「こんな日に限って余計なことか起こったりするんだよなあ……」
「縁起でもないのです……」

「まったくな」

アイスでも食べながら休憩しよう……

冷凍庫のほうに向かおうとしたとき、電が窓のほうを指差した。

「司令官さん、何かこっちに飛んできて……」

「え？」

振り向こうとしたそのときだった。

「うわッ!？」

突然爆発音、衝撃。

窓ガラスが割れる。

「電！無事か!」

「あ……はい……何とか……」

突然の出来事に若干放心状態だ。

外を見るとレーダーが破壊されていた。

「レーダーがやられた……!」

そしてまた遠くから轟音が聞こえる。

俺は双眼鏡を取り音のする方向を見る。

「クソツタレが！巡航ミサイルだ!!」

俺は電を抱きかかえるようにしてその場に伏せる。

その直後にミサイルが近くの建物に着弾した。

激しい衝撃で意識を失った。

〜数時間後〜

「う……」

まだ耳鳴りがする。

体が痛い。

「生きてるのか俺は……？」

意識が戻ってくると同時に腕に激しい痛みを感じた。

金属片が腕に刺さっていた。

「クソ……痛え……電……」

電は俺の腕の中にすっぽり納まっていた。

「おい……電……電……！」

呼吸、心拍を急いで確認する。

「はぁ……よかった……」

生きている。

幸い怪我もなさそうだ。

俺は自分の腕に刺さっていた金属片を引っこ抜き、立ち上がる。

鎮守府のいたるところから煙が上がっていた。

「無事な施設は……」

見渡す限り、瓦礫だらけだ。

司令室があるこの建物と工廠、ドックだった。

弾薬庫と資源保管庫、燃料タンクはすべて破壊されていた。

司令室も大穴が開いていた。

「う……ん……」

「電！よかった……目を覚ましたか……」

「あれ……どうしてここで……」

「鎮守府が攻撃を受けた、被害は甚大だ」

「攻撃……って……司令官さん!!腕から血が!!」

「あ……ああ、これか。大丈夫だ」

「でも……」

「止血も消毒もした。それよりも……」

艦娘たちを呼んでくれというと思ったら、アンドロメダ、ケスト

レルが司令室に飛び込んできた。

「隊長!!」

「大丈夫だ、それより状況は」

「防空司令部および航空基地は壊滅・・・その・・・」

「どうした?」

「生存者・・・無し・・・でした・・・」

「・・・!?!」

「それと・・・東京が・・・」

「東京が・・・どうしたんだ」

「核攻撃を・・・受けました」

ああ・・・意識を飛ばせるならそうしたい。

防空司令部と航空基地が壊滅で生存者無し?東京が核攻撃?

冗談もいい加減にしてくれ。

「核攻撃は東京郊外で発生したので都心の被害はないのですが・・・」

「不幸中の幸い・・・か」

「いえ・・・それが・・・これが最悪のニュースだと思います・・・」

「何だ?」

「私の偵察機が・・・見ちゃったの・・・」

「何をだ、ケストレル」

「・・・潜水艦型の艦娘が・・・こつちに向けてミサイルを・・・」

「・・・今なんていった・・・?艦娘だと!?!」

悪い冗談だ。

深海棲艦以外が人間を攻撃?

これが本当なら・・・

「ケストレル、それはお前の偵察機が見つけた情報だよな?」

「う、うん」

「絶対に外部に漏らすな、いいな」

「隊長・・・あとその艦娘なんですが・・・」

「何だ?」

「2隻確認しました」

「2隻・・・」

俺は頭を抱える。

2隻の潜水艦型艦娘が攻撃してきた。

チラッと見えたあのミサイルはP-700グラニート・・・ピョートルたちが積んでいる巡航ミサイルだ。

これを積める潜水艦は・・・

「オスカー型潜水艦・・・アンドロメダ、今すぐユークトバニアの潜水艦の音響ブーヤを集めろ、あと駆逐艦もだ！」

「了解しました！」

「司令官さん・・・私・・・私たちの仲間がやったんですか・・・？」

電は今にもなきそうな声で言ってくる。

ケストレルは居心地の悪そうな顔だった。

「ケストレル、対潜哨戒機を上げれるか？あと耳貸してくれ」

「わかった。電、ちよつとごめんね」

「たぶんだが・・・その艦娘の場合によっては撃沈することになる。現代艦のお前らのみで編成するつもりだが・・・全員に心の準備をさせておいてくれ」

「・・・分かった」

「はあ・・・」

ケストレルが部屋を去っていった。

俺は核攻撃をわざわざ人の少ない郊外に行った理由を考える。

相手が本当に艦娘なら何故仲間を攻撃する・・・？

ミサイルを郊外に落としたのは寸前で民間人を殺すのが怖くなつたのか？

「こんなこと考えてもな・・・」

電は少し放心状態だ。

幸い、艦娘寮と俺たちの部屋がある場所が無事だ。

「電・・・こつち来い」

「・・・」

「大丈夫、何かの間違いだ。お前らが俺たちを攻撃なんて何の利益があつてするんだ？」

「・・・」

電は少し震えている。
シヨックがでかいよな……

「オペレーションルーム」

「よし、全員休め」

全員が椅子に座って画面を見る。

この作戦会議に電は居ない。

アイツには悪いが……どうしても知ってほしくない情報があったからだ。

「状況は分かっているとと思うが……当鎮守府は攻撃を受け、東京にも核弾頭が打ち込まれた」

スクリーンに敵の姿を映す。

あの二隻の潜水艦だ。

「こいつら二人を探し出して話を聞け。抵抗したら即……撃沈しろ」
「げき……ちよつと！あんた自分が言ってることが分かってんの!？」
バーベットが抗議してくる。

「ケストレルから話は聞いただろ、覚悟しろって」

「……分かっているけど……」

「とにかく、何故やつらが攻撃にいたったのか分からない。その情報だけでも持ち帰ってくれ」

「了解」

「細かい指示は追って出す。とにかく出撃を急いでくれ」

「マイケル・マーフィー」

鎮守府を出発して数時間以上たった。

いまだにソナー、レーダーともに反応がない。

今回の編成は旗艦を私に、うらかぜ、ケストレル、バーベット、ピョートル、クズネツォフだ。

「見つけたいけど……複雑だよ……」

「どうしたの？うらかぜ」

「・・・相手つてさ・・・いそかぜと同じ・・・艦娘つて思うと・・・」

「艦娘つて決まったわけじゃないけど・・・まあ私も心中は複雑よ」

まあ・・・ただ、相手が敵なら容赦しない。

そういうことだ。

「マーファイ！対潜哨戒機が何か見つけた！」

〈へこちらアンドロメダ、音紋分析します〉

私は無言で武器の安全装置を解除する。

私の機装は他の子と違い、兵士のようなのだ。

主砲とミサイル類はこのM4のような武器から発射される。

銃身下につけられたグレネードランチャーにアスロックと書かれ

た弾を装填する。

「アンドロメダ、どう？」

〈分析終了しました。艦種はオスカ―型潜水艦およびタイフーン級

潜水艦と確認！こちらより北100km地点です！〉

「了解。艦隊、進路3―6―0。最大戦速」

「了解！」

ピョートルとクズネツォフの返事がなかった。

「嘘だ・・・嘘だ・・・そんな・・・僕の同志・・・？」

「ピョートル、行きますよ。あいつらは人類を攻撃した。祖国の裏切

り者です」

「そんなこと言ったって!!」

「つべこべ言わずに来てください、張り倒しますよ」

「・・・」

無言でついてくる・・・が足取りは重そうだ。

「・・・！ソーナー探知！潜水艦！」

「私が浮上するように言うわ」

「待ってよ！敵だったら！」

「敵だったらもう撃ってきてるわ」

うらかぜを黙らせて無線で相手を呼ぶ。

「こちら日本海軍所属ミサイル駆逐艦マイケル・マーファイ。あなたた

ちをもう見つけている、味方なら浮上しなさい」
すると数分後、海中から何かが浮上してきた。

白く長い髪・・・もう一人はショートヘアでソ連の星がついた帽子をかぶっている。

間違いなく艦娘だ。

「はじめまして、クソツタレの海軍艦娘」

「開口一番口悪いわね。ピロシキ野郎」

「あら、口が悪いのはあなたね。私は野郎じゃないわ」

「それは失礼、メス豚野郎」

「結局野郎ついてんじゃないのピザ野郎!!」

「それはあなたも一緒よ!」

「こいつとは絶対仲良くなりたくないわ。」

「アホみたいな話はもう終わって、あなたたちに聞きたいことがあるの」

「聞きたいこと?」

「・・・あなた、ミサイルを日本に向けて撃ったわよね」

「それが?何か問題でも?」

その言葉を聞いたうらかぜがつかみかかる。

「アンタ自分がしたことが分かっているの?!何人も死んだんだよ!本来ならアンタ達みたいな艦娘が守るはずだった人が!!」

「・・・人の事情も知らずによく言うわね。シンビルスク」

「はい」

「もう一発行つとく?」

もう一発・・・まさか・・・

「やめなさい!今度はどこを狙うつもり!」

「うくん・・・そうねえ・・・私たちが大っ嫌いなアイツを消させてもらうわ」

「R-39用意良し」

撃たせてたまるか!

私は砲を向ける。

「やめなさい!どうして深海棲艦じゃなくて私たちを狙うのか教えな

「さい！」

「はあ・・・アメリカ人ってどうしてこんなにうるさいかなあ・・・シンビルスク、発射待て」

「了解。あ、今私を沈めようとか思っても無駄ですよ、そんな素振り見せたら私、自爆しますから。積んであるすべての核弾頭が炸裂してこの海域が大変なことになるかも知れませんよ」

シンビルスクと呼ばれた艦娘は笑顔で恐ろしいことを言う。

「あんたもさあ・・・艦娘なら提督いるんでしょ？」

「いるけど・・・それが？」

相手は思い出すだけでも嫌そうな顔をする。

「提督ってさ、私たちの指揮官であってその理解者のようなものよね」

「まあ・・・そうね」

「そんな人にさ・・・こんなことされて嫌にならない？」

突然服を脱ぎ始める。

一瞬、何考えてるのか分からなかったが私は彼女の体を見て悟った。

彼女はブラック鎮守府の艦娘だったということだ。

「提督がね・・・こういうこと好きなのよ。私たちを痛めつけてそこから・・・」

「・・・後は察したわよ」

「最初は我慢してた、他に行くところが無かったから。でもアイツは・・・私の・・・妹を・・・！」

彼女は鬼のような形相になる。

「ねえ・・・分かる？私の妹さあ・・・あのクソ野郎に犯されてる最中に殺されたんだよ？」

「・・・」

私は黙って話を聞く。

この会話は提督にも聞こえるようにしてあった。

「どこで聞いた話か知らないけど、首絞めたら気持ちいいんですって、妹は苦しんでるのにな!!」

彼女の怒りが頂点に達しているんだろう。

ただそのとき、彼女の艤装にある魚雷発射缶が開いた。

「たまたまさあ・・・提督に用事あつて行つたら司令室で妹が冷たくなつてるのよ。最後に心の中できつと言つたでしょうね、お姉ちゃん助けてつてさあ！」

「とんでもないクソ野郎ね。で、それはいいんだけど、魚雷発射缶開いてるわよ」

「ああ・・・ここ？壊れてるのよ・・・直せる場所もないからほつてゐるんだけどね」

「あらそう。ただ、へんな真似したら沈めるからね」

砲は彼女に向けたままにしておく。

魚雷で撃たれたらたまつたもんじゃない。

「それで・・・続きだけど、見た瞬間何が起きてるのか分からなかつたわ。でもね、あの野郎なんていったと思う？お前の妹はよかつたが・・・壊れちまつた、お前でいいからさっさと脱げ・・・」

「そろそろ胸糞悪くなつてきたんですけど・・・」

うらかぜの眉間にしわが寄つてきていた。

「私は脱ぐ振りをして拳銃を抜いて撃ち殺してやったわよ、まあそれが無くてもその日、殺すつもりで提督に会いに行つただけけどね。で、私たちはそれぞれ別の鎮守府に向かつた。まさか・・・そこも同じような場所なんて思わなかつたけど」

「・・・そこも・・・」

「ええ。そこでシンビルスクと出会つて二人で任務中に逃げたわ。ただ、私たちの周りは提督に変な忠誠心を抱いたヤツばかりだったからすべて沈めたけど・・・で、私たちはこんなヤツら守りたくも無いしむしろ殺してやるつてなつた。どう？分かつた？」

「まあまあね。じゃあどう？私たちの鎮守府にきたら・・・」

「絶対嫌ね。だつて・・・私たちがこんなひどい目にあつてるのに幸せそうに暮らしてる人間も・・・艦娘も許せないから。シンビルスク」

「はい、何でしょうかルスク」

「撃て」

「ОГОНЬ（発射）」

「なっ・・・!?」

シンビルスクからSLBMが発射された。目標は飛行進路からしてトラック島だ。

まだブースト段階・・・!

「SM—3用意!」

「撃たせないわよ」

クルクスから低速の魚雷が発射された。

私は回避しようとしたため、目標のロックオンが遅れる。

「悪いわね、もう私たち人類の敵になるって決めたから」

「私より幸せなんて許しません」

「そういうことだから」

二人は潜行を始めた。

その間にもSLBMは射程外に達してしまふ。

「提督!トラックに退避命令をだしなさい!」

〈分かってる!それと・・・あいつらをどうにかしてつれて帰ってやれないか〉

「それなら頑張ってみるけど・・・期待しないでほしいわね、何人も仲間を理不尽な理由で殺されて頭にきてるから」

〈・・・分かってる。状況は把握している、ただ・・・なるべく沈めないでやってくれ〉

「はあ・・・アンタも大概優しすぎなのよ」

〈・・・うるさい〉

「マーファイ!発射管注水音!」

「ケストレル、バーベツト、クスネツオフ!対潜装備持つてる機は全部上げなさい!ピョートル、あんたも対潜装備を用意!」

「・・・分かった、僕も準備する」

うらかぜが水中を必死で捜索してくれている。

そしてこつちを見て叫んだ。

「クルスクが魚雷発射!!」

「デコイ散布!全艦、対潜戦闘用意!ありつたけの対潜兵器をばら撒きなさい!!」

艦娘同士の戦闘・・・演習ならしよつちゆうだが・・・これは実弾だ。

あの子たちも・・・もつといい場所で生まれていればよかったのに・・・

私は心の中で少し彼女たちに同情しつつアスロックを発射した。

ローン・サバイバー

くマイケル・マーフィく

「ケストレル！艦載機の発艦を急がせて！」

「分かってるよ！あともうちよいで！」

デコイを散布しながら回避行動を取る。

魚雷の狙いは空母ではなく私らしい。

「私を沈めるつもりかしら？面白いわね」

米海軍の駆逐艦舐めないでほしいわね。

そう心の中で呟き、敵潜を探す。

「見つけた……」

短魚雷を3本連続発射する。

これで沈む相手では無いことは知っているが。

「準備よし！艦載機発艦始め！」

「対潜ヘリを上げます」

ケストレルから対潜爆弾を搭載した航空機が、クズネツオフからは対潜ヘリコプターが発艦した。

「死にたくないなら投降しなさい。私も艦娘沈めるのには抵抗あるから」

戦力的不利は明らかだ。

降伏勧告を行ってみる。

《マーフィさん！弾道ミサイルがトラックに着弾！》

「……被害は？」

《トラック泊地に甚大な被害が出ています！ただ……核弾頭ではなく通常弾頭で……》

「……そう……了解」

核弾頭では無かった……それを聞き少し安心した。

そしてもう1度敵潜に呼びかける。

「シンビルスクだったかしら？優しいところあるじゃない。貴方みたいな娘死なせたたくないわ」

もう1度、降伏勧告を行う。

だが返事は魚雷で返ってきた。

「チツ……！可愛くないわねソ連艦は！」

「僕そんなに可愛くないかなあ……」

「心外です。」

「なんでアンタらが精神的ダメージ受けてんのよ！集中しなさい！」

何故かクズネツオフとヴェリーキーが心にダメージを負っていた。

「魚雷は無誘導……拡散しつつ接近！」

「うらかぜ、対潜兵装をばら撒きつつ敵潜を追い込むわよ」

「了解！」

「マイケル・マーフィより提督へ。交渉決裂、現在攻撃を受けているわ」

《……ダメか……》

「一応、沈めない程度にダメージ与えてみるけど相手は潜水艦だからちよつと難しいかもね」

《分かった……》

提督は若干落ち込んだ声を出す。

私はそこに少しイラついた。

「貴方が攻撃を受けたらやり返せって言ったのよ。自分の言葉に責任持ちなさい！」

少し説教してみた。

しかし返事は無かった。

「魚雷は……このコースなら当たらない」

遠ざかる魚雷の航跡を見つつ、アスロックを準備する。

だがその時だった。

「くっ……」

「クズネツオフ！」

突然の爆発音がして振り返る。

クズネツオフから水柱が上がっていた。

「く……あ……あの中に誘導魚雷が混ざっていたようです……」

「クズネツオフ！喋らないで！どこをやられたの！」

「機関部が……自力では動けません……置いていってください」

「何言ってるの！意地でも連れて帰るから！」

ヴェリーキーがクスネツオフを介抱してる間に新たな魚雷を警戒する。

空母が1隻行動不能になるのは痛い。

ここは全員で撤退するべきか・・・

空母を安全な外海に駆逐艦と共に撤退させて・・・そうすると戦力は私だけになる。

ヴェリーキーの対潜兵装だと少し心もとない。

だが防空能力はうらかぜと同じくらい頼もしいものだ。

「・・・全員聞いて、私以外はクスネツオフを連れて外海に退避しなさい。私はあなた達が撤退出来たのを確認したらすぐに退避する」

「でもそれだと・・・」

「分かってるわ。でも誰かが後ろも守らないといけない、だから私がやるわ」

「分かった・・・でも、必ず・・・」

「はいはい、分かってるわよ。私はイージス艦なんだから」

そう言っただけは敵潜の方向へ舵を切る。

艦隊は反転して撤退に入る。

「さあ、来なさい」

この言葉に反応するように魚雷が2本向かってきた。

デコイを散布して回避する。

「簡単に避けられるわね！ソ連製なんてそんな物かしら？」

するとクルスクとシンビルスクから2本ずつ、計4本の魚雷が発射された。

デコイを散布し、魚雷の近くに砲撃をする。

「くっ・・・装填！」

しかし途中で弾薬が尽き再装填を行う。

魚雷は3本デコイに食いついた。

だが・・・

「キャアア!!」

喰らった。

右舷に魚雷を被弾した。

「う……く……しまった……」

航行に問題はないが、ソナーが壊れてしまった。

これでは海の中の事が何も分からない。

「少し調子に乗りすぎたかしら……」

痛む脇腹を手で抑えて、近くの島に向かう。

出血もしているようだ。

「あ……」

ふと後ろを振り向くと更に魚雷が2本迫ってきていた。

「キヤアアア!!」

足に激痛が走る。

足の力が抜ける。

あと少しで浅瀬なのに……!

「う……く……」

私は何とか立ち上がって島へ向かう。

無線で……増援を呼ばないと……

その時、ケストレルの艦載機から投下された対潜爆弾が敵潜を1隻

捕らえた。

大きな水柱と共に破片のようなものが上がってくる。

「沈んだ……?」

沈んでいなくても損傷は負っている。

今のうちだと、島に向かった。

「くっ……痛むわね……」

足と脇腹の痛みに耐えつつ島影に隠れる。

無線機は……

「……雷撃のせいかしらね……全くついてないわ」

無線機は破損していた。

これでは連絡が取れない。

「虎の子の衛星電話だけど……この島が邪魔……か」

電話をかけようと思ったら敵前に身を晒す必要がある。

……ソナーが壊れて、機関部も損傷が酷い。

でも……

「……コイツらを沈めないと……皆が危ないのよね……」
敵前に身を晒せば私もタダではすまないだろう。
私は電話を握り締めていた。

「あら……なんで震えてるの……私……」
勝手に体が震える。

寒いわけじゃないのに……

「そっか……私……皆と会えなくなるのが怖いのね」
ハワイ沖で出会って、今まで横須賀鎮守府で過ごしてきた。
その大切な仲間達と会えなくなるのが怖かった。

「でも……私が守らないとどちらにせよ会えなくなるのよね……」
決意を決めた時だった。

目の前にあの潜水艦ではない、別の勢力が現れた。

「深海棲艦……!」

駆逐艦クラスが3隻出てきた。

すぐに照準して撃沈するがまだ湧いてきた。

「ふざけないでよ……!!」

痛む体を引きずって電波の通じる場所に出る。

「ここなら鎮守府に……」

「見てなさい……皆殺しにしてやるわ……」

電話番号を素早く入力して鎮守府に電話をかける。

「早く出てお願い……」

片手で砲撃しながら島の近くにある岩山にもたれ掛かる。
もうほとんど自力では立てない。

《横須賀鎮守府だ。誰か?》

「こちら駆逐艦マイケル・マーフィー……至急、増援を……」

《マーフィー……!?!どうした!?!》

「空母達が損傷したからその撤退援護をしたのよ……」

《分かった、今どこだ!》

「現在位置は作戦海域にある小島……ぐッ?!」

《どうした!?!》

足に砲撃が命中した。

激痛に襲われて電話を手放してしまう。

《応答しろ！おい！！正確な座標を！》

「クソツ・・・電話が・・・」

電話が海の中へと沈んでしまう。

私は残った力で砲を構える。

あと駆逐艦が・・・6隻・・・

「遮蔽物があれば・・・」

何とか砲を杖にしながらか立ち上がって岩山の陰に移動しようとする。

「動いてよ・・・私の足・・・お願いだから・・・！」

だがまた砲弾が私に当たる。

また足だ。

「ぐっ・・・うぁ・・・！」

自分でも弱弱しいと思うほどの声が出る。

私はその場に倒れてしまう。

「まだ・・・撃てるわよ・・・」

意識が朦朧とするなか砲を構えて深海棲艦に攻撃する。

だが・・・

「・・・!?弾切れ・・・?!」

弾倉を交換しようとした瞬間腕にも砲撃が命中する。

「あぐツ!？」

力が抜けて垂れ下がる。

腕が上がらない。

「絶体絶命じゃないのよ・・・」

私は腰に差してした拳銃を取り出す。

提督がくれたM9ピストルだ。

「ただの拳銃だけど・・・」

威嚇するように駆逐艦に向けて発砲する。

砲を杖にしながらか立ち上がる。

「せめて・・・キレイな空が見たいわね・・・」

そして空を見上げた時だった。
背中に大きな衝撃が来た。

痛みは感じなかったが体の力が自然に抜けていく。

(ああ・・・やられた・・・)

もう、声すら出なかった。

景色がスローモーションになる。

私は何とか動く顔を動かして空を見た。

(キレイだわ・・・空・・・)

そのまま意識が途切れた。

いそかぜ再就役

くマイケル・マーフィく

山に響く銃声。

血だらけで岩陰に身を隠す男達。

私はその状況を上から見下ろしていた。

他の人たちが何を喋ってるのか分からないがある男の声だけは分かる。

(なんで私こんな所に・・・)

さっきまで海の上だったはずだ。

そんなことを思っていたら男に向かってRPGが発射される。

(危ない！)

叫びたいのに声が出ない。

私はただ見守るしか無かった。

(この人達は・・・SEALS・・・？相手はタリバンかしら・・・)

なぜ私がこんな夢を見ているのか不思議だった。

その間にも男は何とか山の開けた場所にたどり着く。

だが満身創痍だ。

(敵がそこまで来てるのに何してるの！仲間は・・・)

仲間達は必死にその男を守ろうとしていた。

そして男は電話をかけた。

「こちらスパルタン01・・・マイケル・マーフィ大尉・・・」

男の名前を聞いた瞬間、私の心臓の鼓動が早くなった気がする。

私・・・？いえ、私と同じ名前・・・？

(どうして・・・この人の事は私知らないのに・・・)

会話の内容から男は仲間を守るために自分の身を危険に晒しながらも増援を呼ぼうとしていた。

(あれ・・・私と同じ事してる・・・)

しかし男は増援を呼んだ時に足を撃たれて電話を落としてしまう。

そして銃を杖にして何とか立ち上がり、空を見上げた。

その瞬間、背中に弾丸を受けて力尽きた。

そして私はある事を思い出した。

(そうだ・・・この人は・・・私・・・)

私の艦名の由来となった人物だった。

なんでこんな重要な事を忘れていたんだろう。

ただ私もこの人と同じ、仲間を守って倒れた。

本望だ。

(みんな・・・先に逝くけど・・・許してね)

そして夢の中にも関わらず強烈な眠気に襲われて目を閉じた。

私はもうこの目を開くことは無いだろう、そう思っていた。

だが・・・

「ん・・・う・・・」

ゆっくりと意識が覚醒していく。

また体の感覚も戻ってくる。

「う・・・ぐあ・・・生きてるの・・・？」

また手に暖かい物を感じた。

「・・・シンベル・・・スク・・・？」

あのソ連潜水艦だ。

彼女も同じように怪我をし気を失っていた。

私は周りの状況を確認する。

「ここは・・・あの小島・・・？」

私が最初に隠れたあの小島だった。

だが周りに敵艦の姿も見えない。

それに私はいつの間にか艦装を外していた。

艦装は海岸に転がっていたがシンベルスクの艦装は見当たらない。

「ああもう・・・痛むわね・・・」

足と腕が痛くて仕方ない。

ただ背中に関しては無傷だった。

どうやら艦装に砲撃を受けた衝撃で気を失っていたらしい。

「ちよつと・・・起きなさい」

私はまだ握っていた拳銃を彼女に向けて尋問することにした。

「ん……」

「おはよう、御機嫌はどうかしら」

「……!？」

「貴女の艷装ならどっか行つたわよ」

「……私をどうする気ですか」

「さあ？お望みならどうにでもするわよ。あ、そうだ、首輪でも付けてメス犬にしてあげましょうか」

「……つくづくアメリカ人は下品ですね」

「何よ、面白くないわね」

「貴女こそ自分の心配をしてはどうですか？怪我、酷いことになってますよ」

「……このくらい……大丈夫よ」

強がってみせるが酷い痛みだ。

「……強がってるの見え見えですよ。ちよつと見せてください」

「ちよ……何触ろうとしてんのよ……」

「……だいぶ出血してますね……少し痛いかも知れませんが許してください」

「やめてって……ホントに、撃つわよ……!」

だが私の腕は上手く上がらない。

手が震えてしまう。

「拳銃すら支えられてないじゃないですか。大丈夫です、危害は加えませんから」

シンビルスクはそう言うと言の腰のポーチから薄い緑色をした液体が入った注射器を取り出す。

中身はきつと高速修復剤だろう

「大丈夫です。お願いだから信じてください」

「なんで……敵の私を……」

「あなたの行動に好感を抱いた……じゃ理由になりませんか？」
「……そう……」

変なヤツ……正直な感想だ。

シンビルスクはそんな事考えてるうちに注射を打ってくれた。

体が少し軽くなった。

痛みも和らいだようだ。

「終了です、これで大丈夫ですよ」

「・・・ありがとう」

シンビルスクは軽く微笑んだ。

「ねえ・・・私は敵なのに何で？艦娘が嫌いじゃなかったの？」

「そうですね・・・元同僚の艦娘は嫌いでしたよ。皆沈みましたが」

「そんなに酷い艦娘だったの？喋りたくなかったらいいんだけど・・・」

「大丈夫です。そうですね・・・まあ簡単に言うとは皆提督に御褒美を貰いたかったらしいですね」

「御褒美？」

「エツチな事です」

「何それ・・・」

「着任と同時にそういう風に教育されましたからね、例に漏れず、私も。でも、私が壊れる前にクルスクが助けてくれました。ちよつと荒っぽかったですが」

この娘・・・本当に酷い所に配属されちゃったのね・・・

クルスクも出来れば沈めたくないんだけど・・・

「で、周りの艦娘達はその御褒美のためなら何でもするって感じでした。だから・・・私達が逃げようとした瞬間にも・・・」

「攻撃してきた・・・のね」

「そうです。失敗すれば御褒美はお預け、それが嫌だったみたいですね。別に殴る蹴られるの暴力を振るわれるわけでもないのに・・・」

「・・・ねえ、あなたはこれからどうしたいの？クルスクと行動したい？」

「・・・どうですかね・・・彼女は私以外の艦娘を憎んでいます。それに、私は日本に核ミサイルを撃った犯罪者です。今更戻るなんて・・・」
「私達の提督はそれでも迎え入れたいって言ってたけど」

「信じれるわけ・・・ないじゃないですか。例え本当だとしてもどんなお人好しなんでしょうか。私は罪のない人を核ミサイルで・・・」

「でもあなたはその事を悔いているの？ならいいじゃない」

「良くないです！分かりますか?!私は本来であれば守るべき人を殺したんですよ!」

シンビルスクは大声で叫び出した。

「おかしいですよね・・・攻撃しておいて・・・」

「いいわよ。あなたの意思で攻撃したんじゃないって分かったから」

「え・・・?」

「本当の事教えて。あなたは自分の意思で撃つたの?それとも命令されて?」

「・・・」

シンビルスクは考え込んでいた。

だがすぐに覚悟を決めたような顔をする。

「私は・・・核ミサイルを撃つつもりは無かったです・・・それよりも日本に恨みなんて・・・でも・・・クルスクが・・・」

「やれ・・・って言ったのね」

「私は最初は拒否しました。でも・・・撃たないなら沈めるって・・・」

「私はトラツク島のあの鎮守府になら撃ちました。あそこだけは・・・許せないから・・・」

「その気持ちは分かるわよ、でも日本に撃つつもりなんて無かったのね」

「はい・・・言ってしまうえば貴女達を攻撃するつもりだってありませんでした・・・」

シンビルスクはだんだんと涙声になってきた。

最初は機械みたいで冷酷な子かと思っただけど・・・
「もういいわ、大丈夫」

私は何とか動く体でシンビルスクを抱きしめる。

「私より・・・小さいですね」

「はあ!?!」

「抱きしめられてサイズが分かりました。私のほうが大きいです」

「あんたそのケツ穴溶接して眉間に新しいケツ穴作るわよ!?!」

「・・・やっぱりアメリカ人は下品です」

「うるっさいわね!!」

〈提督〉

「マーフィの場所は分かるか!？」

《ダメ!見つからない!》

「隊長・・・やっぱり・・・」

「縁起でも無い事はやめろアンドロメダ」

「すみません・・・」

マーフィと音信不通になって数時間、現場海域には深海棲艦が出現し始めていた。

あの2隻はまだ息を潜めているんだろう。

「せめてあの潜水艦の位置さえ特定できれば・・・」

その時、執務室に明石と夕張、いそかぜが飛び込んできた。

「提督!やりました!」

「後にしてくれ」

「後とかじゃないのよ!いそかぜの艦装が何とかなりそうなの!」

「艦装?あれ修復出来ないんじゃないのか?」

「兵装までは不可能でした。でも素体となる部分の修復が出来ました!」

兵装が修復出来ないんじゃないや意味ないだろ・・・

そう言おうとした時だった。

「司令官、私の艦種覚えてますか?」

「イージス艦だろ・・・」

「違います。ブイ・ウエツブ艦です」

「ブイ・ウエツブ艦・・・そうか!」

「あとリーダー、ソナーについては無事でしたので回収できました。」

ブイ・ウエツブ艦・・・自分の好きなように兵装、機関などを載せ変えられる艦。

つまり、船体さえあれば何とかなる船だ。

「システムリマも生きていました。これなら敵潜水艦も・・・」

「明石！夕張！よくやったぞ！いそかぜ、今すぐ艦娘に再就役だ！」
「了解しました。護衛艦いそかぜ、再着任します」

あのシステムがあれば敵潜水艦を捜索する事が簡単になる。

あとはマーファイだけか・・・

「アンドロメダ、引き続きマーファイの捜索だ」

「了解しました。」

いそかぜ

「12.7cm連装砲に酸素魚雷、10cm高角砲、アスロツクVL
S・・・あとはシステムリマですか」

「今残ってる装備はこれだけですな・・・」

「明石さん、ありがとうございます。ミサイルの迎撃までは出来ませ
んがこれなら」

「あ、そうそう。これも持って行って！」

「チャフト・・・フレア発射機ですか」

「これも何とか直せたから！」

夕張さんは笑顔で親指を立ててくる。

本当に頼りになる。

「じゃあ、頑張ってるね」

「ありがとうございます、行ってきます！」

私は鎮守府を出発する。

久々の海だ。

マーファイさんを撃ったあの2隻の潜水艦・・・絶対に見つける！

対潜水艦戦闘

くマイケル・マーフィく

高速修復剤のおかげでだいぶ体が楽になった。

でも足だけは上手く動かない。

「折れては無さそうだけど・・・」

「足ですか？」

「うん、どうにも動かしにくいのよね・・・」

「たぶん、筋が切れたか何かしてるんだと思いますよ」

「それっぽいよね・・・ねえ、貴女にこんな事お願いするのをおかしい

けど、あそこに置いてある艀装持ってきてもらってもいいかしら」

「お安い御用です」

「さつきまで撃ち合ってたのに・・・ずいぶん打ち解けたわね」

「本当です。やっぱり・・・あなたの所の提督はいい人ですよ」

「突然どうしたのよ」

「仲間のために・・・提督のために命を掛けれる所を見ると・・・って

感じですよ」

「そうかしら？あれでもただのセクハラ提督よ」

「そうやって冗談言えるくらいが私は良かったです」

悲しそうな顔で話すシンビルスク。

話が終わると艀装を取ってきてくれた。

「ありがと、これ装備したら動けないかしら・・・」

装備してみるとさつきより体が重くなった気がする。

やはり艀装のダメージは大きかった。

「ソナーがダメ・・・あとミサイル誘導装置も破損・・・残ってるのは

主砲のみか・・・」

「どうするんです？」

「どうするって、とりあえずアンタの仲間を水中から引っ張り出して

1発フアックしてやろうかしら」

「・・・下品です」

「うるさいわよ」

ただ、艦装をつけたおかげで何とか立てる。

私はそのまま海に行く。

海岸に体を固定して、迫ってくる深海棲艦を仲間の到着まで追いつけば大丈夫だ。

救難信号も発信すれば確実にここに来てくれる。

「シンビルスク、絶対にあなたを連れて帰るから」

「なんですかそれ・・・私行きたいなんて・・・」

「いいから。私は貴女と一緒に仕事したいって思っただけよ」

「・・・私・・・」

「はいはい、核ミサイルの事は置いとく。とりあえず隠れてなさい。いい?」

「・・・分かりました」

シンビルスクが去るのを確認して使える兵装をもう1度確認する。

単装速射砲と短魚雷のみ・・・

レーダーは幸い無事だ。

水上目標は探知できる。

そして、すぐにレーダーに反応があった。

救難信号に反応した深海棲艦だ。

駆逐艦クラスが4・・・

「来なさい・・・ファックしてやるわベイビー!」

先制攻撃とばかりに先頭にいた駆逐艦に砲弾を浴びせる。

敵も負けじと反撃してくる。

ソナーがない以上、敵潜水艦と魚雷を探知できない。

常に海面に目を配る。

「早く来てよ・・・!何時間も持ちこたえられないわ・・・!」

駆逐艦も最高速で逃げ回りながら砲撃してくる。

FC Sの1部が破損してマニュアルで照準しなければならぬ、命中率も少し下がっている。

「クソ・・・!当たらない!」

その時、弾倉が空になる。

弾倉交換しようとした時、腕に砲撃が命中してしまう

「うぐッ．．．！」

だが今度はまだ腕が動く。

足の間を砲を挟んで弾倉を交換しボルトストップを押してスライドを前進させて初弾を薬室に送り込む。

「いい加減．．．沈んでよッ!!!」

叫びながら砲撃を行う。

「くっ．．．あと弾倉が2つ．．．！」

短魚雷が残り8本だ。

ミサイルはまだ残っているが誘導装置が壊れていて敵をロックオンできない。

「誰でもいいから早く来てよもうー！」

その時だった。

聞き慣れた爆音がし駆逐艦が大爆発する。

空を見上げるとハーブーンが飛んできていた。

残りの駆逐艦にも命中する。

「このハーブーン．．．」

その時遠くに発光信号が見えた。

「えっと．．．オ・マ・タ・セ．．．お待ちせ．．．まったくよ．．．」

遠くから艦隊がこっちに向かってきていた。

その中には、いそかぜの姿があった。

「いそかぜ．．．？良かった艦装が治ったのね」

私はそのまま砲を杖にしてしやがみこむ。

もう脚が動かない。

機関故障のようだ。

「シンビルスク？もういいわよ」

シンビルスクの名前を呼ぶが返事がない。

どこにいったのかしら．．．

「シンビルスク？」

もう1度呼ぶと、聞き慣れた声が出た。

シンビルスクのものでは無い声。

「シンビルスクならこいよ」

「!?クルスク!!」

「私に気付かないなんてとんだお間抜けね、アンタもシンビルスクも」

「は、離して・・・」

「うるさいわよ、裏切り者」

「え、ち、違います!」

シンビルスクは首に腕を絡められ、人質に取られたような形になっている。

「あ、が・・・く、くる、しい・・・!」

「何勝手に色々喋ってんの?アンタは」

「ご、ごめんなさい・・・」

「ごめんなさいで済むと思ってるの?ねえ、貴女のせいで私の命が危ないのよ?分かる?」

「ごめ、ごめん、なさい・・・!」

シンビルスクは首を絞められているようだ。

私はすぐに砲を向ける。

「やめなさい!その子を離さないとアンタが額でタバコ吸えるようにしてやるわよ」

「なにその脅し。まあいいわ。ほら行きなさい」

クルスクは思った以上に簡単にシンビルスクを離した。

だが・・・

「まあ無事に離すなんて言っていないけど」

腰からマカロフを出してシンビルスクの足に発砲した。

「あ、ああああ!!」

「何してんのよ!!」

私は反射的に引き金を引く。

砲弾はクルスクの腕に命中した。

「あぐっ・・・!!」

「アンタ、この子は仲間じゃないの?!何で撃つんだよ!!」

「う、裏切り者を撃つて・・・何が悪いのよ」

「裏切り者?どこがよ!別に貴女の情報なんて一言も言っていなかったわよー!」

「違うわ、艦娘何かと仲良くしてるのが裏切り者って行ったのよ」
「な……」

シンビルスクはその間にも苦しんでいた。
出血も酷い。

「う、う……痛い……痛いよ……!」

「ほら、早く助けてあげないと」

「くっ……」

海面にクルスクが浮かんでいて、シンビルスクは海岸の砂浜に倒れている。

早く止血してあげないと……

「じゃ、私は貴女のお仲間を沈めてくるわね」

「やめなさい!!」

「ふん、止まると思ってたの?」

私はもう1度クルスクに砲撃した。

だが砲弾は命中せず、クルスクに逃げられた。

だけど……

「そうだ、向こうにはいそかぜがいる」

あの子のソナーは誰よりも強力だ。

あとはあの子達に任せよう。

私はシンビルスクに駆け寄る。

「シンビルスク!シンビルスク!大丈夫!」

「あ、う……痛いです……足が……」

「大丈夫、止血してあげるから!」

止血帯を救急セットから取り出して止血を開始する。

「頑張つてよシンビルスク!」

「は、い……」

だんだん弱々しい声になる。

それに出血も止まらない。

まさか……

「大腿動脈……クソツ!!」

動脈が縮んで体の中に入り込んでる以上、動脈を接合しないと止血

できない。

手持ちの救急セットには接合セットも動脈を挟むための道具もあるが……

「シンビルスク……」

「ハ、ア……ハア……」

息も荒くなってきた。

こんな小柄な女の子に……しかも臙装がない、普通の人と変わらない子に銃弾を撃ち込むなんて……

「シンビルスク、聞いて。今からかなり痛いことするけど……貴女を助けるため。分かって」

「や、だ……痛いこと……いや、だ……!」

「お願い!このままでと貴女は死んじやうのよ!」

「やだ、やだ……死にたく、ない……!」

「じゃあ、我慢して!」

シンビルスクは震えながら頷く。

私はなるべく彼女が傷口を見ないように目隠しをする。

「やめ、やめて……こわい、こわい……!」

「大丈夫、大丈夫だから」

シンビルスクの頭を撫でてやり、そして傷口に手をつ突っ込んだ。

「ああああああ!!!」

シンビルスクの咆哮のような悲鳴が響く。

だがすぐに動脈を掴むことが出来た。

すぐに引つ張り出す。

「あとは……!!」

一気に動脈を縛り付け、接合する。

常にシンビルスクの事を見ながら作業する。

「いだい!!いたいいたいよおお!!」

「大丈夫!もう大丈夫だから!」

「うあああああ!!」

「暴れないで!お願いだから……!」

何とか接合に成功する。

だが傷口から出血はまだ続いている。

「お願い……はやく誰か来て……！」

「あ、ああ……う……」

だんだんと弱々しい声になっていく。

止血帯で止血するがまだ軽く出血してしまふ。

「無線機さえ……この！動け！動きなさい！！このポンコツ無線機！！」

怒鳴りながら艤装の無線機を叩く。

するとさつきまで聞こえなかったノイズが聞こえだした。

「この手に限るわ!!」

急いで鎮守府に周波数を合わせる。

「横須賀鎮守府！応答して!!」

《こち……鎮守府……誰……》

「マイケル・マーフィよ！」

《マーフィ……のか!》

「ノイズが酷い……こっちの声はちゃんと聞こえるの?!」

《あ……え……る!!》

「聞こえてると信じて言うわよ！今から座標、S—B—0—9—3に

救護ヘリを送って！大至急よ！」

《了解……近……ヘリ……ヘリオス……8が……かう!》

「了解!!」

レーダーの端に小さな影が見える。

これがヘリだろう。

何とかして交信を試みる。

「マイケル・マーフィから近くの航空機！」

《こちらヘリオス78！君だな！今から向かう！あと15分だ!》

「了解!!シンビルスク！頑張って!!」

「は、い……が、がんば、り、ます」

だが、目が虚ろだ。

出血もまだしている。

「ヘリオス78！お願い！輸血の用意をして!!」

《了解!》

「シンビルスク頑張つて！私と鎮守府に行くんでしょ！！」

「鎮守府・・・いい、いきたい・・・で、す・・・」

「だったら元気になりなさい！！ねえ！聞いているわよね！！」

「ちやんと・・・聞こえ、て・・・ま、す・・・」

だが目の焦点があつてないようだ。

「ねえ！私の顔が分かる!？」

「も、う・・・よく・・・みえな、い・・・」

この状態はかなり危ない。

・・・最悪の事態なんて考えたくないけど・・・

「シンビルスク」

「なんです・・・か・・・?」

「何かして欲しいことある?」

「ぎゅって・・・」

「何?」

「もう、1度・・・ぎゅって、して、ほしい・・・です・・・」

私は無言でシンビルスクを抱きしめる。

彼女の体は小刻みに震えていた。

「あつた、かい・・・です・・・」

「・・・あなたもよ」

「マーフィ・・・さん・・・」

「何?」

「も、し・・・出来たら・・・私、を・・・海の見え、る所、に・・・」

「・・・やめなさい、そんな話は」

「ごめ、ん・・・なさい・・・約束・・・」

「約束?」

「鎮守府に、いっしょ・・・に・・・」

シンビルスクは涙を流しながら言ってくる。

もうか細い声になっている。

私は少し抱きしめる力を強める。

遠くからへりの音がする。

「シンビルスク、へりが来た。もう少しよ」

「あと、すこ、し・・・」

「そう、あと少し、楽勝よね？」

「あと、すこ、し・・・らく、しょう・・・」

「そう、楽勝。頑張つて」

「らく、しょ・・・がんば・・・」

突然シンビルスクの体が重くなる。

「シンビルスク？シンビルスク！」

だが反応が無い。

呼吸も・・・止まっていた。

「シンビルスク・・・」

私はもう1度彼女の体を強く抱きしめて地面に優しく置いた。

そして目を閉じてやる。

「・・・」

何とも言えない感情がこみ上げてくる。

「あ、あ・・・うわあああああ!!!」

怒りなのか悲しみなのか分からない!!

ただ、強烈なクルスクに対する憎しみだけは分かった。

《こちらヘリオス78！到着した!!》

「・・・遅い・・・もう・・・死んじやったわよ・・・」

《・・・了解》

「提督に、その子の遺体は私が帰るまで安置してって伝えて」

《了解した。これより収容する》

私はそのまま無言で砲を持ち上げる。

不思議と体は軽く、簡単に動けた。

機関だつてまだなんとか動かせるようだ。

「沈めてやる・・・沈めてやる!!」

私は出せる最高速度でクルスクを追いかけた。

く提督く

「・・・・・・了解」

「どうしたのですか？」

「アンドロメダ・・・シンビルスクの死亡が・・・確認された」
「え・・・」

「クルスクに撃たれた怪我による失血性ショックだそうだ」

「同じ・・・仲間を・・・？」

「ああ・・・」

信じたくない。

仲間が仲間を・・・

「艦隊の様子は？」

「えと・・・第1艦隊が・・・待ってください！マーフィさんが！」

「どうした？」

「マーフィが敵に向かって進行中！」

「マーフィ・・・おい！無線繋げ!!」

「りよ、了解！」

「おい！マーフィ!!何考えてる！その損傷状態で動くな!!」

《うるさい!!!私はずを地獄に落とすとしてやらないと気が済まないわ

!!!》

「今のお前は冷静さを失ってる！やめろ!!」

《うるさい・・・うるさいうるさいうるさい!!!》

「おい！聞いているのか!!おい!!」

だが無線からはノイズが聞こえるだけだ。

「交信途絶しました・・・」

「クソツ・・・あのバカ!!いそかぜ！聞こえるか！」

《はい、聞こえます》

「マーフィが今そっちに向かっていている！アイツはクルスクを沈めるつもりだ!!」

《え・・・？》

「とにかく、今クルスクはどこだ！」

《それがマーフィさんの近く・・・え、待ってください!!》

「どうした？」

《クルスクの位置？だ、ダメです！教えられません!!》

「マーフィか!？」

《はい、あのクルスクの位置を・・・》

「アイツを止めろ!!あのままでと二人同時に沈むぞ!!」

《りよ、了解しました!!全艦、マーフィさんを止めに向かいます!!》

今のマーフィは完全に頭に血が上っている。

刺し違えても沈める気だろう。

クルスクは原子力潜水艦・・・沈めれば放射能汚染が・・・

それよりも怨念も持って沈めば深海棲艦になる可能性が十分にある。

もし原子力潜水艦のまま深海棲艦になれば強敵だ。

「マーフィ・・・」

「いそかせ」

「いそかせ、どうするの?」

「こうなった以上、マーフィさんをどうにかしてでも止めないといけないです」

「でも、どうやって・・・」

それを今考えている。

だけど思いつかない。

その時だった。

「魚雷音聴知!方位240。距離3500!」

「クルスクが撃ってきた・・・全艦退避行動!あと、対戦戦闘用意!!」

「了解!」

「空母はすぐに退避してください!!」

「分かってるよ!」

すぐにアスロックを目標に発射する。

ただ、これにマーフィが気づいたようだ。

「マーフィさん!待って!!」

だがマーフィはクルスクが居そうな当たりに魚雷をばら蒔いた。

そして、爆音が水中から聞こえる。

・・・やってしまった

「マーフィさんの魚雷が命中！」

「やっっちゃった……」

くマイケル・マーフィく

大きな水柱が立つ。

命中だ。

だがしぶとくもクルスクは浮上してきた。

「いい気味ね、クソツタレピロシキ野郎」

「は、あ……」

「あら？ 喋れないのかしら？ 大丈夫よ顔面以外を刺身にしたら死人でも喋るらしいわよ。ちようどナイフあるし試してみましようか？」

「ふ、ふふ……本気で私を沈めるの……？」

「ええそうね。もっと苦しんでもらいたいけど」

「あ、あははは、バカね……私は原子力潜水艦なのよ……」

「

「ああ、そうだったわね。まあ知ったこっちゃないわ」

私は砲をクルスクの眉間に向ける。

「最期に言いたい事でもあるかしら？ 一応聞いてあげるわ」

「ふふ……本気で怒ってるのね……いいわあ……」

私はゆっくりとトリガーに力を掛けていく。

クルスクはそのまま続いて言ってきた。

「地獄でもまた戦いましょう……」

「地獄に落ちるのはアンタくらいよクソツタレ」

そして空に砲声が響く。

クルスクは眉間に砲弾を撃ち込まれ、崩れ落ちた。

そのままゆっくりと沈んでいった。

私はシンビルスクの仇をうった……そう思うと同時に力が抜けて崩れ落ちた。

意識が戻る。

電子音で目が覚めた。

「ここは……」

「……んあ……起きたか」

「提督……」

「気分はどうだ眠姫」

「……処分したいなら好きにすれば」

「処分してほしいのか？」

「え……?」

「俺は処分って言葉が嫌いなんだよ。それに……俺にも気持ちは分かる」

「……」

「シンビルスクの遺体はまだ安置してある。お前が動けるようになってたら葬式をして見送ってやろう」

「そうね……ねえ、提督。彼女を……その……遺灰でダイヤモンドを作れないかしら……」

私は彼女と一緒に居たかった。

ただそれだけだった。

「まあ……できないことは無いが……」

「お願い」

「分かったよ。葬儀の後に遺灰は全部回収させる」

「ありがとう。提督」

「可愛い艦娘の頼みだ。お安い御用だ。」

「そういうえば、電は？」

「アイツか……ずっとシンビルスクの身の回りの事してくれてるよ。アイツが自分がやるって言って聞かなかったんだ」

「そうなの・・・」

「今は居室で寝てると思うがな。さて、俺もその可愛い寝顔でも見に行くかな」

「いってらっしゃい」

提督はそのまま病室を出ていった。

後から聞いた話だと、クルスクは放射能汚染を起こすことなく沈んでいったらしい。

また鎮守府の被害は死者行方不明者含めて500人以上、その大半が防空指揮所の人間だった。

鎮守府は防空能力を今完全に失っている。

提督はその穴埋めということでWW2の艦娘にも対ミサイル迎撃の訓練をするという事だ。

「シンビルスク・・・」

私は腕の中で消えていった命を思い出す。

あの感覚は忘れてたくても無理だ。

「う、うあ・・・グスツ・・・」

涙が頬を伝っていった。

私はあと2日は病室らしい。

寝ていた期間は3日も寝ていたようだった。

その間シンビルスクは冷たい冷蔵庫の中に居たと思うとやり切れない気持ちだった。

葬儀

あの潜水艦事件から2日たった。

マーフィも車椅子を使つて動けるようになった。

「司令官さん、行きましようなのです」

「ああ、そうだな」

「・・・」

「そんな顔するな、俺だつて悲しいんだから」

「はい・・・」

今日は巡航ミサイルの着弾で死亡した人員及び、シンビルスクの葬儀だ。

隊員はそれぞれの地元で葬儀のあと航空機で輸送される。

シンビルスクは横須賀市内で火葬となる。

「・・・なんだか・・・後味の悪い任務与えちまったな・・・」

「仕方ないのです・・・あんな事になるなんて・・・」

「仲間が仲間を・・・今後は同じ事が起きないようにしないとな」

居室がある建物を出て、会場がある飛行場地区に向かう。

やはり家族も幾らか来ているようだ。

俺は家族に話しかけられるたびにその息子の最期の瞬間の事を伝えた。

彼らはミサイルが弾着するまでの間、街を守ろうと必死だったと思う。

あれが不意の攻撃だったのが不運だった。

また鎮守府のレーダーは深海棲艦を補足する事に特化した物で艦娘を補足する事は重視されてない物だ。

補足する事は可能だが基本的に艦娘は無条件で味方と判断され、レーダーには小さくしか表示されない。

深海棲艦は大きく表示されるため、もし艦娘側が今回のように攻撃してきた場合は捉えることが難しいのだ。

一応、艦娘は別のレーダーで補足できるが、あの時は任務も無かつたためレーダーの電源を落としていた。

「鎮守府のリーダー・・・変えるべきだったな・・・」

「リーダーですか？」

「ああ、まあ色々難しい話があつてだな」

「そうなのですか・・・」

「そろそろ式の時間だな。電は席に着いて待っていてくれ。俺は別にやる事あるから」

「分かったのです」

「じゃあ、また後でな」

電と別れて俺は別の場所に移動する。

シンビルスクの棺がある場所だ。

「マーファイ、やっぱりここか」

「ええ、もうこの顔見ること出来ないから」

「そつか・・・すまん」

「なにが？」

「もっと早く見つけていれば・・・」

「いいわよ。これは戦争なんだから。それとも貴方はこうやって仲間が死ぬ度に落ち込むつもり？」

「いや・・・そんな事はないが・・・」

「とにかく、今はこの子と2人にしてよ」

「了解した」

俺はそのまま式場の壇上に登って式が始まるのを待つ。

泣いている家族もチラホラといった。

そして、10分もたった時、式が始まった。

俺は、彼らがどういう人物で、最期まで必死に街や鎮守府を守ったと言った。

だが、艦娘のミサイル攻撃とは口が裂けても言えなかった。

あの攻撃は深海棲艦の新兵器、ステルス性を持った巡航ミサイルだとしか言えなかった。

「タイフーン級潜水艦娘シンビルスク及び、最期まで横須賀の防空に務めた英霊に敬礼!!」

「儀仗隊、気をおおつけい!!」

隣では儀仗隊が64式小銃を構える。

「控えええ銃！・・・用意！！」

空に銃が向けられる。

彼らを見送る弔銃だ。

「撃てー！」

銃声が空に響く。

「撃てい！！」

4回、空に向けて斉射された。

「捧げえええ銃！！」

ラッパ手のラッパに合わせて、彼らの棺がそれぞれの航空機に乗れられていく。

シンビルスクは別個に用意された霊柩車へと運ばれた。

俺は降壇し、シンビルスクの霊柩車へと向かう。

「・・・ロシア式でやってやりたかったが・・・許してくれ」
棺に向かって呟く。

マーフィは無言で敬礼していた。

「提督、行きましよう」

「ああ、了解」

クラクシオンを鳴らして霊柩車が出発する。

その後を3トン半トラックが2台着いてきた。

「もうこれ以上仲間は死なせたたくない」

俺は1人助手席で呟いた。

くマイケル・マーフィく

ここが本当にお別れの場所・・・

火葬場のロビーでシンビルスクの棺を炉に入れる時を待つ。

私は彼女が骨になる前に棺に近づいた。

「シンビルスク・・・ロシア艦娘である貴女にこういうのって変かも知れない・・・だけど、あっちでもこれ、持っていて欲しいの」

私はそう言って棺にNavySEALsの部隊章を棺に打ち込み、棺の中に私の艦としてのパッチと識別帽を入れた。

DDG—112と書かれたパッチと帽子だ。

それが終わると係員の人が炉に向かうようにと指示してきた。私達もそつちに向かう。

「……点火のボタン押すの……私がしていいかしら」

「ああ、お前が押してやれ」

炉の扉が開くと空気が一気に重くなった気がする。

その中に棺が入れられた。

「マーフィ」

「ええ、分かってるわ。さようなら……シンビルスク……私の友達……」
ボタンを押すと中からバーナーのような音が聞こえた。

私含めて全員が無言で敬礼をする。

「あとは呼ばれるまで待とう」

「そうね……」

「うう……ぐすつ……」

「電、泣かないで、あの子だって悲しい見送りはして欲しくないはずよ」

「でもなのです……」

他の艦娘もすすり泣いてるのが多数いた。

「私だって……泣きたいわよ……でも、おかしいわよね……あんなに私たちと撃ち合ったのに……」

シンビルスクが発射した魚雷の傷は足に残っている。

「だけど、私は恨んではない。」

「とりあえず、待合室に行くぞ」

提督のその言葉でみんな待合室に向かった。

「シンビルスク」

私は自分の葬式を上から眺めていた。
変な気分だ。

『マーフィ……』

話しかけたいけど、声が届かない。

ちよつと寂しい。

『自分のお葬式って・・・何か変な気分です・・・』

1人呟く。

そういえば、ここの提督ってどんな人なんだろう・・・

私はそう思い、提督を探しに行く。

『この体なんか楽しいですね、ふわふわ飛ばますし』

私はちよつとだけこの幽霊(?) ライフを楽しんでいた。

そんな事してるうちに提督を見つける。

『あれが提督ですか・・・何か思ってたほどの人じゃないですね』

私はきつと太ってる人だと思っていた。

そしてちよつと悪戯を思いつく。

『そういえば幽霊って心が読めるとか聞いたことが・・・試しちゃいましょう!』

私は提督に突撃する。

『ふむふむ・・・パイロットさんですか・・・って!この人なんですか!・ロリコンさんですか!』

人の心というか記憶を読めたが中々楽しい。

『次あの人行っちゃおー!』

幽霊ライフをしつかり楽しんでいた。

なんてしていると誰かに肩を叩かれた。

『楽しんでる時になんですか?もう空気中読んでくださいよ・・・』

振り向くと軽く怒った感じの男の人が3人ほど腕くんで立っていた。

『あれ?私が見えるんですか?』

『・・・そりゃ同じ幽霊だからな。それよりも何してんだお前』

『見ての通り、幽霊ライフを楽しんでるんです』

『・・・人の心読むのは程々にしとこうや嬢ちゃん・・・』

『えく・・・』

『お前、俺だって記憶読んでるお前見て俺も出来るかなとか思って母ちゃんの記憶よんだら親父との営みの瞬間引き当てたんだよ!分かるかこの気持ちがい!』

『いや・・・逆恨みじゃないですか・・・』

『いいから見られたくない記憶だってあるんだからやめときなさい、分かった?』

『はい・・・』

とりあえず大人しく引き下がろう・・・

『あーあ・・・もうお別れだよ・・・』

『俺もだ。じゃーな戦友』

『あつちでまた会おうぜ』

私に説教してきた3人はそう言って別れて輸送機の方に向かつていった。

私も私の入った棺が霊柩車に運ばれていた。

『この鎮守府ともお別れですか・・・1番の思い出つてあの・・・うらかぜといそかぜのイチャイチャ現場見ちゃった事ですね・・・こんな思い出もつてあの世に行きたくないです・・・もつと清らかな思い出が良かった・・・』

嘆いても仕方ない・・・

それよりも私、幽霊になった勢いで何かネジ飛んでる気がします。

『これあれですよね、火葬場行ったらあの曲必要ですよ。コホン・・・今から練習しちやお』

軽く咳払いをして歌う。

『アーチーアーチーアーチーwwwwwwwwww燃えてるんだ廊下ああ
wwwwwwwwww』

アホになつたのかな私。

『完璧です(ドヤツ)』

なんてアホな事してる間に火葬場に着いた。

『よし、じゃ・・・私の歌を聞けー！なんて、言ってみたいセリフの一つが言えました。満足です。』

そんな事を私がフワフワ浮きながら叫んでるなんて誰も思わないだろう。

ていうか気付かないでください、私死んでるのに死にたくなる思います。

「シンベルスク・・・」

『あれ？マーフィさん？何してるんですか？』

「これあっちでも持ってたね」

そう言うのと棺に何かを打ち込み、また帽子のようなものを入れた。
すると私の手元にそれと同じ物が現れた。

『？なんですかこれ？』

一つはNavySEALsの部隊章、一つはマイケル・マーフィと
いう船のパッチ、一つはその識別帽だ。

『DDG-112・・・これがマーフィさんのですか・・・』

そして私の棺が炉に運ばれていく。

もう本当にお別れだ。

あのボタンは点火スイッチだろう。

『マーフィさん・・・貴女ともっと一緒に居たかったです・・・』

この声はマーフィには聞こえてないだろう。

寂しいけど・・・

「さようなら、シンベルスク・・・私の友達・・・」

そしてボタンが押された。

私は幽霊なのに不思議と涙が出てきた。

『やっぱり・・・寂しいです・・・でも・・・さようなら』

私は強烈な眠気に襲われた。

この鎮守府のみんなと居たかった・・・でもそれはもう出来ない。
でも私は核ミサイルを日本に撃ち込んだ。

それは事実なんだ。

だから私はアナタ達と一緒に居られないんです。

そう心の中で呟き私は目を閉じた。

イタズラ好きの潜水艦

あの事件から2週間たった。

鎮守府は何とか機能を回復しつつある。

だがそれも飛行場地区と資源庫などだけだ。

防空能力は陸軍の高射特科から借りたレーダーと短SAM、パトリオットしかない。

あとは87式自走高射機関砲だ。

今日は電が先に部屋を出て執務室に行っていた。

1人だと居室が広く感じる。

「さて、仕事に向かいますかー」

着替えようとロッカーを開けたら・・・

「やべ、制服全部クリーニングに出してるんだった・・・米軍時代の迷彩服しかないしこれでいいか」

久々に来たデザート迷彩服は少し小さかった。

ま、いつか。

のんびりと廊下を歩いて執務室に向かう。

それにしてもまだ10月なのにまだ暑い。

そんな事思いながら執務室に入る

「おつす、お疲れさん」

「あー！司令官さん！おはようなのですー！」

「おはようは朝言っただけだな」

「えへへ、そうでしたね。そういえば今日は迷彩服なんて珍しいですね」

「ああ、クリーニングに出してたの完全に忘れててな」

「あらら・・・」

「まあこれでも仕事は問題ない！んで、今日は何がある？」

「えっと・・・鎮守府修理のために使った資材のお金関係ですね」

「まあいつも通り書類って感じか」

「そうですね・・・100枚以上ありますけど」

「殺す気か」

机に積み上がった書類をみて嘆く。

ハンコ押すだけだが・・・

「まあいいや・・・やるか」

「あ、それとお手紙なのです」

「ん？どれどれ」

差出人は大本営。

内容は・・・

「んーと・・・鎮守府の服務関係の一斉点検・・・あく・・・ついにもブラック鎮守府潰しに来たか」

「どういう事なのです？」

「服務点検つてのは普通は営内の整頓状況とか見るんだが・・・たぶん上は艦娘の疲労状況とかチェックするつもりだろうな」

「あ、私たちが酷使されてないか確認するためですか」

「そゆこと。まあウチは大丈夫だと思うが」

「大丈夫なのです！みんな司令官さんの事信頼してますし！」

「はは、そう言ってもらえると助かるな。とりあえず書類片付けたらこの部屋軽く掃除すつか」

「なのです！頑張るのです！」

そこから怒涛のハンコ押しが始まった。

多すぎだろ量!!

「うおおお!!押ししても押ししても増えてきてる気がする!!」

「司令官さん、これ追加なのです」

「のおおおお!!」

途中で他の部署に呼ばれた電がダンボールいっぱい書類を持ってきた。

司令官泣きそう。

「これだけ俺にハンコ押させる書類作るとか殺す気か!?俺の地位でも奪いたいのか!？」

そんな事叫びながらハンコ押しして昼飯行ってハンコを押すという簡単なお仕事をしていたら課業終了ラッパが鳴った。

「お、終わった・・・」

これマンガならプシユーとかいう効果音と共に頭から煙出てると思う。

「電……飯行こうか……」

「お……お疲れ様なのです……」

今日は久々に食堂に行こう。

メニューなんだっけな

「今日の食堂のメニューなんだっけ」

「えーつと……今日は全国の基地メニューで、陸軍の丘珠駐屯地のメニューって書いてますね」

「丘珠って……札幌か」

「確か近く通りましたよね」

「そーいやUHー1がよく飛んでたな」

なんて旅行の思い出に浸りながら食堂に向かうとハンバーグのいい匂いがする。

「お！今日はハンバーグか！」

メニューには、タマちゃんハンバーグと書いてあった。

挽肉と玉ねぎをほぼ同量使っているらしい。

「こりや美味そうだな」

トレーをもって並んでいると後ろからケストレルに呼ばれた。

「隊長！珍しいね」

「お、ケストレルか。今日は何となく気分だな」

「ねえねえ、後で執務室行ってもいい？」

「ん？何で？」

「いやー面白そうなDVD借りたから皆で見ようかと思って」

「あー……まあ片付けしてくれるなら……」

「やった！じゃあまた後で行くから！」

「ほいほい」

また騒がしくなりそうだな……

「司令官さん、このあと執務室行く用事あったのです？」

「あ……あ、そうだ銃の手入れして無いからしないと」

「私も行っていいですか？」

「んな許可取らなくても大丈夫だよ。むしろ来てくれ」
「えへへ、了解なのです」

トレーに晩御飯を取り、席に向かう。

「和風ハンバーグなのか、ふかし芋もあるし美味そうだな」
「美味しそうですねです！」

「じゃ、いただきます」

「いただきますなのです！」

見た目通りの味と言うか、とにかく美味しかった。
すぐに完食してしまった。

「ふう、ごちそうさま」

「司令官さん早いのですー！」

「んな急がなくてもゆっくり食べればいいよ」

俺はのんびりと椅子にもたれる。

・・・また食べたいなこのハンバーグ。

「ごちそうさまなのです！」

「お？食べおわったか？」

「なのです！」

「んじゃ居室帰るか。風呂入ったら執務室に行くぞ」

「了解なのです！」

食器を返却し、居室に向かう。

部屋に入り冷蔵庫のコーラを開けた。

「かぁー！仕事終わりのコーラは美味い!!」

「あはは、おじさんみたいなのです」

「む、おじさんとは失礼な」

「じゃあ・・・お兄さん？」

その瞬間俺の脳内に一つの欲求が生まれた。

電にお兄ちゃんと呼んでほしい。

「電、お願いがある」

「な、なんですか？なんで真剣な顔してるのですか？」

「お兄ちゃんと呼んでくれ」

「はにやつ!?ど、どういう事なのです!?!」

「そのままの意味だ。ほら頼む！ハリー！」

「え、ええ・・・じゃあ・・・お、お兄ちゃん？」

「もっと可愛く！」

「も、もつとですか!? う、うーん・・・お兄ちゃんっ」

「あゝ、癒されるゝ」

「一体なんなのですか・・・」

その時、部屋から別の声が聞こえた。

『提督ってそんな趣味あったんですか・・・』

「ん？何だって？」

「どうしたのです？」

「なんか今変な声が」

「司令官さん？」

「まあいいや。空耳だろ」

「・・・? とりあえず私お風呂行ってきますね」

「あいよー、その後俺も行くよ」

「あの・・・一緒に入るのです？」

「へっ!? ど、どした!？」

「な、何となく聞いただけなのです！」

「お、おう、そうか」

「わ、私先に行きますね！」

電が風呂に入るとまた声が聞こえた。

『まるで童貞みたいな反応するんですねこの提督・・・おもしろっ』

「おい！誰だ今俺を童貞と言った奴!!」

「司令官さん? どうしたのです？」

「あ、ああ、何でもないよ」

そろそろアレかな・・・疲れ溜まってるのか・・・

なんて事思いながらコーラを飲み干した。

のんびりテレビを見ていると電が出てきた。

「お次どうぞなのですゝ」

「はいよー」

さっさと汗を流して湯船に浸かる。

「はぁ・・・極楽極楽・・・ってじいさんか俺は」

風呂場でそんな事呟きながらのんびりと1日の疲れを取る。

「ふういい湯だった。電、執務室行くかー」

「もう行くのです?」

「ケストレル達が来るって言ってたしな、なんかDVD見るとか言ってたからお前もどうだ?」

「私も見たいのです!あ、そうだ。お菓子とか持っていきますか?」

「あー・・・執務室に残ってただろ。あれで大丈夫じゃないか?アイツらも持つてくるだろうし」

「なら大丈夫ですね、じゃあ行くのです!」

「そだな」

執務室の鍵を取り、向かう。

俺は下が陸軍が陸上自衛隊だった時の迷彩服、上はODシャツと言うかラフな格好だ。

「なんか司令官さんのその格好似合うのです」

「ん?そうか?」

「はい!なんか軍人さんって感じするのです!」

「そっか、ありがとな」

なんて会話しながら執務室に入る。

部屋の中はまだ若干暑かった。

「軽くエアコン入れるか」

「温度どれくらいにするのです?」

「んーと、25℃くらいでいいぞー」

「了解なのです!」

「えーと、お菓子お菓子・・・トツポとポテチか。まあこんなもんでいいだろ。あと皿は・・・」

ケストレル達が来てでもいいように準備してやる。

賑やかなアイツらを見るのはこっちも楽しいしな。

「さて、電はのんびりしていいぞ」

「じゃあ司令官さんの近くで、手入れを見とくのです」

「んな面白いものでもないけどな」

俺は執務室のロッカーからMk18を取り出す。
引き出しからもP226を取り出す。

「もう一ヶ月くらい手入れしてないから油乾いてそうだよなあ」
分解して遊底部から清掃していく。

綿棒には埃がかなりくつついた。

「うわ、汚え・・・」

油を染み込ませたウエスで拭いていく。

なんて事してたらケストレル達がやってきた。

「入るねー!」

「あいよー」

「失礼します」

結構な人数が入ってきた。

ケストレルにバーベットにマーフィにいそかぜにうらかぜに
アンドロメダに・・・あと珍しく511の姿もあった。

「お? ゆー、珍しいな」

「私も・・・DVD見たいです」

「あとからクスネツオフも来るよー」

「なんだよ現代艦しか来ないのか」

「ゆーもいるじゃん」

「まあそうだな」

「ゆー、忘れられてた・・・」

「違うから! 大丈夫! 悲しい顔すんな!」

するとまた声が聞こえた。

『あー、提督こんな小さい子泣かせたー。鬼ですね。いや悪魔です
だからお前誰だよ。』

とりあえず置いていて。

「ケストレル、何借りてきたんだ?」

「ん? あ、これこれ!」

手にしたのはホラー映画だった。

しかも話題の超怖いやつ。

「ゆー、ゆー怖いのが苦手です・・・」

「大丈夫だよ、映画なんて作り物だし！」

「まあ騒ぎすぎない程度にな」

「はーい」

なんて話してたらクズネツオフも来た。

「ケ、ケストレルさん！ごめんなさい！遅くなりました！」

「あくいいいよいよ。さ、座って座ってー」

「何見るんですか？」

「ん？これ」

「はうつ・・・か、帰ります」

「逃がさないわよ？」

「マーフィさん離してください！私帰るんですう！」

ほぼ強制的に座らされていた。

可愛そうに・・・

「さて、俺も続きやるかなー」

俺も自分の事にとりかかる。

「んじやスタート！」

相変わらず元気なケストレルとどういうDVDか見た瞬間一言も喋らなくなったアンドロメダとバーベツト。

この2人怖がりか。

内容は幽霊屋敷の謎に迫るみたいなベターなものだった。

しかしそこは和製ホラー、ベタな展開なんて気にならない仕掛けをしてくる。

「キヤアアアア!!」

「ひいいい!!」

「アラアアクバル、アラアアクバル」

和製ホラー始めてのマーフィがいきなりぶっ壊れた。

突然アラアアクバルしか言わなくなった。

お前の方が怖い。

「ど、どうせ作り物だし!!」

「そそそそそうよ！アメリカのゾンビのほうが100倍怖いわ！」

「いや、貴女さつきからアラアアクバルとかしか言っていないじゃない」

「貴女も何か今までの罪を懺悔してたじやない！」

「な！何聞いてんのよ!!」

なんでホラー映画見てるだけで昔の罪懺悔してるのか気になって仕方ない。

ふと電の様子をみると青ざめた顔をしてカタカタ震えつつも画面を見ていた。

怖いもの見たさって感じか。

「観察してるのも楽しいな」

なんてしてる間に整備が終わり組み立てる。

チャージングハンドルを引いて動作チェックも行う。

「キヤアアアアアア?!なに?なんの音!」

「あ、すまん。俺だ。」

「貴方ねえ・・・張り倒すわよ!」

「いや・・・すまんかった」

マーフィに本気で怒られた。

てかコイツ地味に怖がりなのね。

なんて事してる間に映画は終わった。

「なかなか怖かった・・・」

「アンドロメダ・・・」

「なんですかバーベツト・・・」

「トイレ行きましょ」

「私も行きたいです・・・」

バーベツトとアンドロメダが震えながら出ていった。

時刻は10時過ぎ。

外は真っ暗だ。

「大体こういうの見てると本物来るっていうよな」

「ひいつ!?そ、そんな事言わないでください!」

「あ、すまん」

「ししし司令官さん、今日一緒に寝ようなのです」

「いや・・・いっつも一緒に寝てるだろ・・・」

「ゆーも誰かと寝たい・・・」

「どんだけ怖がつてんだよ・・・」

「司令官さんは怖くないのですか?!」

「あー・・・まあ幽霊よりも怖いもの沢山見たしな」
「戦場なんてそんなもんだ。」

「むしろ幽霊のほうが怖くない。」

「とりあえず、もう2200だ。寝る準備しとけよ」

「はーい」

「なんて事してると・・・」

「キヤアアアア!!」

外からアンドロメダ達の悲鳴が聞こえた。

俺はすぐに銃に弾を込める。

「どうした!大丈夫か!」

銃をもって廊下にでると腰を抜かした2人がいた。

「どうした、何があった」

「あ、あ、ああ・・・」

窓の外を指さしたまま固まっている。

窓を見るが何もいない。

「で、出た・・・出たんですう!!」

「はあ?見間違いか何かだろ。とりあえず大丈夫か?立てるか?」

「あ、ありがとうございます・・・」

執務室に入った瞬間、今度は停電した

「おっ?」

「はにやあああ!?!」

「ひいひい!!!」

まるでホラー映画だな。

なんて事思ってた。

「あれ、ブレーカーは落ちてないな」

執務室のブレーカーを見たが異常は無かった。

変だな。

「とりあえず回復を待つか」

俺は無線機を取って業務班に連絡する。

「提督より業務班、停電したっぽいんで確認願えるか送れ」
《こちら業務班、停電つてどこですか？》

「執務室が停電してるんだが・・・」

《え？ここから執務室見えますが停電してませんよ？》

「は？」

《え？》

その瞬間、無線機から物凄いノイズが聞こえた。

「おい！聞こえるか！業務班！！」

だが無線機からはノイズしか聞こえない。

敵の電子攻撃か？

「警報！現在鎮守府は電子攻撃を受けている可能性あり！対処

班――」

《アハハハハハ》

「誰だ！！」

突然子供のような笑い声が聞こえた。

なんか洒落になんねーぞ、これ。

「どどどどどうしましょう!？」

「とりあえず落ち着け、お前らも・・・」

他の連中は震えて座り込んでいた。

「とりあえず原因を探る必要がある、全員で電気室にいくぞ」

「ゆ、ゆー、腰抜けちゃったばいです」

「だらしないわね・・・」

マーフィが立たせようとするが・・・

「あれ？私も腰抜けちゃったわ」

「それキョトンとした顔で言うセリフじゃねーだろ・・・」

その時、扉が物凄い勢いで叩かれる。

「ひいひい!!」

俺は銃を構えて誰何する。

「誰か!!」

だが反応がない。

まだ扉は叩かれている。

「おい！ふざけるのもいい加減にしろ！」

ドアを蹴破るとそこには誰もいなかった。

足音も聞こえない。

天井にも床にも何も居なかった。

「おいおい・・・嘘だろ」

「ゆ、幽霊さんなのです!?!」

「そそそそんなわけないじゃないですかかかか!!」

「アンドロメダさん声震えてるのです・・・」

「とりあえず移動しよう。マーフィはまだ車椅子だから執務室に残れ。銃は撃てるな?」

「ちよつと待つてよ！私一人!?!」

「仕方ないだろ」

「提督の鬼！悪魔！ビンラディン!!」

「最後のおかしいだろ!!!」

わけの分らない罵倒をされた。

とりあえず電気室に向かう。

執務室からはマーフィが震え声で早く帰ってこいという感じの言葉が聞こえた。

「しかし・・・こういう事だ・・・俺たち以外に誰もいないぞ」

「なのです・・・」

「う、うらかぜ・・・肩つかないでください・・・」

「へ？私何もしてないよ?」

「え?」

「え?」

「どした?」

ふとうらかぜ達の方を向くと・・・

「あ・・・」

血まみれの男が立っていた。

出た。

「ああああああ!!!出たアアアアア!!!」

「もうやだああああ!!!」

「あーいそかせ!!待って!!」

絶叫していそかせが逃げていった。

この状況では1人になると危ない。

「いそかせー!うらかせ、アイツを頼む!」

「了解!!」

その間に血まみれの男は消えた。

電気室まではあと少し・・・

「電、大丈夫か?」

「あわわわわわわ」

「・・・おい電ー」

「あばばばばばば」

「なんてこった」

電がいろんな意味で再起不能になった。
とりあえず担いで執務室に戻ろう。

くマイケル・マーフィく

ホント、女の子をこんな所に1人とか何考えてんのあのバカ提督!!
「あーもう頭に来るわねえ!!」

1人執務室で怒鳴っている・・・

『あははは、すっごい怒ってますね』

「まったくよ!って・・・なんですって?」

『お久しぶりです、マーフィさん』

「・・・」

目の前に懐かしい顔が出てきた。

でてきた。

出た。

「ひゃわあああああ!?!?!?!」

『ひっ!?!』

「やらああああ!!! いやああああ!!! 来ないで! 来ないれえええええ!!」

『そこまで驚かれると逆に面白いですね。てか、私の事分かってます？』

「いやああああ!!お願い!やめてええ!!来ないでええ!!何でもするから!何でもするから来ないでええ!!」

私は頭が真っ白になって叫ぶ。

『ん?今何でもって?』

「お金でもお菓子でも何でもあげるからああ!!」

『いやあの、そろそろ私に気付いてくださいよ』

「ひいいい!!しゃべったああああ!!」

『いや最初から喋ってるじゃないですか。ていうかなんですか?アレですか、お化け苦手ですか』

「うええええん!!やだああああ!!・・・あ・・・」

『あ、漏らした』

恐怖のあまり失禁してしまった。

恐怖より恥ずかしさが上回る。

「うわああああん!!見ないでええええ!!」

『いやー、見ないでって言っても私こんな体なんでマーフィさんの自慰行為とかも見ちゃいましたしー』

「うえええええん!!!」

『ていうかさそろそろ落ち着きましょう?それよりも何かマーフィさんめっちゃ可愛いんですけど・・・』

「もうお嫁に行けないいい!!」

『私が結婚してやんよ!・・・なーんて、また言いたいセリフ言えました。んで、いい加減私の事分かってください。シンビルスクですよ』

「ふえええん!!シンビルスクはもういないのおおお!!」

『いや、目の前に居ますから。幽霊ですけど』

「うえ・・・目の前・・・?」

『あく・・・ようやく泣きやみましたか・・・』

「ふえ・・・え・・・?シンビル・・・スク・・・?」

『はい、シンビルスクです』

目の前にはSEALsの部隊記章を付け、DDG-112と書いた

帽子を被ったシンベルスクがいた。

私が棺に入れたものを身につけている

「なんで・・・なんで・・・あなた死んじゃったのに・・・」

『ほら、何か幽霊になれたんですよね、それに貴女が身につけている・・・ダイヤモンド。私はそこに居ます』

「へ・・・?これ・・・?」

『1度伝えたかったんですよね、ダイヤモンドを見るたびに貴女が寂しそうな顔をするので。私はそのダイヤモンドとなつてずっと貴女と居ます。だから悲しまないでください。ビビるのはいいですけど』

「な、なに言ってるの?ビビってないわよ」

『へー・・・じゃ、その床の染みはなんですか?』

「え・・・?」

私は床を見る。

私の下半身から小さな湖が出来ていた。

「・・・」

『マーフィさんの貴重なお漏らしシーンバツチリ目に焼き付けました。』

私は無言で腰の拳銃を抜いた。

「さよなら」

『わあああああ!!ストップ!!やめてください!!』

「やだああああ!!離して!!離して!!死ぬのおお!!」

『命を大事にしてくださいー!てか物理干渉できた私すごい!!』

そんなやり取りを10分ほどした。

私も疲れて冷静さを取り戻した。

「はあ、はあ・・・で、なんで鎮守府はこんなになつてるのよ・・・」

『あ、それですか?私と防空司令部の方達でイタズラしちゃいました。てへっ』

「はああ!?!」

『いやー、まだ防空司令部の方達って現世に残ってるのでイタズラしちゃおうって話になっちゃいました』

「なんでそんな事すんのよ!」

『面白いじゃないですか！あ、あと今この空間現世から切り離してま
す』

「何そのサラツとすごい事出来てるの!？」

『いやー皆さん、気合い入れちゃいました』

「えええええ……」

『あ、たぶんもう提督さんにもネタバレされてるかも知れませんよ』

私はこの状況がとりあえず飲み込めない。

なに？イタズラでこんな事になってんの？

なんてしていると……

「どっこいしよー!」

「あばばばばばば」

「提督!?てか、電どうしたの?」

「ああ、ちよつと……な……な……な……なあ!？」

『初めまして、シンビルスクです』

シンビルスクはペコリとお辞儀をした。

半透明の体で。

「なあああああ!?!出たアアアア!!」

『あーこの反応みると皆に会ってないですね』

「あばばばば……あ……ここ……」

『あ、この娘が電さんですか。よろしくお願いします。シンビルスク
です』

「幽霊なのに丁寧ね貴女……」

シンビルスクを見た電さんは……

「にやああああああああああああああ!!!」

そのまま気絶した。

提督も地味に震えている。

『あははっ！ここ面白いですね！皆さんもう出てきていいんじゃない
ですか?』

『だよ、行くか。お久しぶりです、提督』

「あばばばばば」

『これ俺ら認識出来てなくね?』

『そうだな』

認識とか以前に周りを幽霊に囲まれたら誰でもそうなると思う。

『おーい、提督ー』

『あばばば・・・あ？あれ？お前らどっかで見たような』

『あ、やつと意識戻りましたか？防空司令部の連中ですよ』

『え、何、俺連れていかれんの？』

『あー、リア充なんでそうしたいですね』

洒落にならないこと言ってる。

そして提督にドツキリでしたと言う事を伝えていた。

すると提督は・・・

「つまり・・・なんだ？お前らの遊びだと・・・」

『そつすね』

「そうか・・・ところで・・・」

提督は拳銃を取り出す。

「墓にはなんて・・・刻んでほしい？」

『ちよいちよいちよいちよい!!!』

『提督落ち着いてください!!』

「提督落ち着きなさいって!」

「うるせええ!!てかお前小便臭いんだよ!」

「・・・ぶつ殺すわよ?」

『やつちやっていいと思いますよ?』

私は問答無用で提督の顎に1発アップパーを食らわせた。

提督はそのまま崩れ落ちた。

『さて、十分楽しめたのでそろそろ元の現世に戻しますか』

『せやな。楽しかったぜ嬢ちゃん』

もとの現世に戻る・・・そうなるともうシンビルスクとは会えない

のかな・・・そう思っている

『もう会えない・・・そう思いました?』

「え、分かるの?」

『顔を見たら。でも大丈夫です。そのダイヤモンドに私は居るんです。気が乗れば貴女の夢にでも出ますね。あ、たまに枕元に立ちま

す』

「それは怖いからやめて」

『あははは！漏らしちゃいますもんね！』

「こんのお・・・」

『まあこれくらいにして、じゃ現世に戻しますね』

そうシンビルスクが言うのと突然の眠気に襲われた。

「ん・・・ん？」

目を覚ますと執務室だった。

提督はまだ気絶している。

「みんな居る・・・」

まるでさつきまでの事が嘘だったみたいDVDを見る前に戻っていた。

時間も2200だ。

「シンビルスク・・・」

私はダイヤモンドを握りしめた。

すると声が聞こえた。

『私はいつも貴女を見守っています。だから安心してくださいね』

「シンビルスク?!」

その後の声は聞こえなかった。

でもダイヤモンドの中にいてくれる。

そう思うだけで心強かった。

艦娘の日常

「どっか出かけるかなー」

カレンダーを見ながら呟く。

今日は土曜日だ。

「あ！私お買い物行きたいのです！」

「よし、んじや行くか！何買うんだ？」

「んと、服と最近出たドラマのDVDほしいのです！」

「了解！んじや車でも用意すっかな」

「車で行くのです？」

「たまには運転しないとな」

「司令官さんとドライブ楽しみなのです！」

「うし！んじや着替えて行くか！」

「なのです！」

着替えて出かける準備をする。

ガソリンあつたかな・・・

くマイケル・マーフィく

「はあ・・・暇ね・・・シンビルスクの幽霊でも出ないかしら」

なんて呟くと・・・

『呼びました？』

「きやあああああ?!?!?!」

『わあ!?!びつくりしますよ！なんですか！』

「ででで出たああああ!!」

『そりや貴女が呼んだんですから出ますよ！呼んでといてビビるってなんですか！失礼な！』

突然の事にびつくりしたがよく見るとシンビルスクだった。

「あ・・・シンビルスク・・・」

『そうですよ！もうなんで涙目なんですか！』

「だってびつくりしたのよ！」

『呼んだのそっちじゃないですか！』

「だからっていきなり出ることはないじゃない！」

『なんですかそれ！てか私昨日の夜からずっとこの部屋居ましたし』

「へっ・・・？」

『マーフィさんの恥ずかしい事してる所見ちゃいましたし』

「・・・」

思いある節がいつぱい出てきて頭が真っ白になる。

たぶん顔は真っ赤だ。

『マーフィさん彼氏欲しかったんですねー。しかも彼氏居ること想定してあんな事しちゃうなんて・・・昨日のマーフィさんエロかったですよっ。』

「あわわわ・・・」

私はまた無言で机に置いてあった拳銃をとって頭に押し付ける。

「今度こそさよなら」

『わああああ!!だから落ち着いてくださいってばー!!』

「何よ離してよ！私もう死ぬのー！」

『だから命は大切にー！』

シンビルスクが腕を押さえつけてくる。

『あ、そうだ。私物理干渉できるなら・・・あはっ、いい事思いつきました』

その瞬間私は金縛りにあう。

「あ・・・ちよつとシンビルスク！何してるの!? What are you doing now!？」

『私英語分かりません。んでこのままベットへゴー』

「何勝手に体動かしてるのよ！やめてええ!!」

そして私はベットに寝転んだ状態になる。

何か嫌な予感がする。

「ちよ、ちよつとシンビルスク・・・何する気なの・・・？」

『んー・・・昨日のマーフィさん何か満足出来てなかったようなので私がお手伝いしちゃいます』

「お、お手伝い・・・？何かしら？すごく嫌な予感がするわ」

『とりあえず服脱ぎまじょうか』

「いやああああ!!ちよつと!ちよつと待つてよ!これあれじやない!いそかせ」と うらかぜじやない!!」

『実は数日前から気の強いマーフィさんをイジメたくてあの2人見て研究してました』

「何考えてんの!?!」

そんな事言ってる間には私は生まれたままの姿に...

「ちよ、ちよつと待つてよ!私こんなの...」

『いつもパンツだけ脱いでましたもんね』

「そういう話なくていいからああ!!」

『えーと、マーフィさんの弱い所は...』

「いやああああ!!やめてえええ!!」

そこから1時間くらいシンビルスクにイジメられた。

死にそうよ...

「あううう...もうやらああ...」

『ヤバイです、私何か新しい趣味に目覚めそうです』

今度はシンビルスクが脱ぎました。

『幽霊なんで出来るかどうか分かりませんが私も一緒にやっちゃいます!』

すー!』

「ま...まだするのお...?」

『私がちよつと満足出来ません』

「もうやめてえええ...」

結局、お昼ご飯の時間まで4時間くらいシンビルスクにイジメられた。

くケストレルく

「アンドロメダ?準備出来た?」

「ま、待つてください!」

「遅いよー!」

私はアンドロメダの様子を見に行く。

アンドロメダは必死にオシヤレしていた。

「そんな気合い入れなくてもいいから」

「だ、だって・・・その・・・」

今日はアンドロメダと彼氏の友達をくっつけようと彼氏と相談した作戦を実行する日だ。

彼氏の友達は告白したくても勇気が出ないらしく、アンドロメダも会いたいけど忙しくて会えないという感じだった。

「お、お待たせしました!」

「ほいほい、行こっか」

「うう・・・やっぱ恥ずかしいです・・・」

「んー? そう? いいじゃん、頑張りなつて!」

「で、でもお・・・」

「私は彼氏と2人で何処かいくからそっちは2人で楽しめばいいよ!」

「はううう・・・」

なんて会話してるうちに駅につく。

ここで待ち合わせだ。

「さて、あのバカ、彼女を待たせるとはいい度胸してるねえ」

「わ、私達のほうが早く着きましたし・・・」

「まあそうだけどね」

ケータイを弄りながら待っていると2人が来た。

「おまたせー! って、まだ時間より早いよ?」

「んー何となく早く来たただだよ。んで・・・10分待ったから・・・なんか奢りなさい!」

「えええ!?!」

「へへ、嘘だよ。んじや行こうか」

「うん、今日はどこいこうかな・・・」

「それくらい考えててよー!」

なんて会話しながら後ろを見ると、顔を真っ赤にしたアンドロメダとめっちゃおどおどしてる男がいた。

「あれ・・・どうすんの・・・?」

「あー・・・まあ今日は正樹が頑張るって言ってたし・・・」

「じゃあ、私たちは先に行こっか!」

「とりあえずゲーセンでも行く?」

「いいねえ、私よりスコア低かったらジュースね!その代わりタクミが勝ったら何でも言う事聞いてあげる」

「よっしゃ!絶対勝つ!」

「その代わりゲームは私が選ぶから」

「マジですか・・・」

「不満?」

「大丈夫です・・・」

何でも言う事聞くといった瞬間目の色変えやがったなコイツ。

まあ、私が負けることはない!たぶん!

くアンドロメダく

「・・・」

「・・・」

私はなに話していいか分からずずっと髪の毛をいじっていた。彼も何をしていいか分かってないようだ。

「あ、あの!」

「ふえ!?!」

突然、呼ばれる。

私はびつくりして変な声が出た。

「な、なんでひょうか・・・?」

噛んだ。

恥ずかしい・・・

「ちよ、ちよつとこつち来てもらっていい?」

「は、はい」

私はきつと顔真っ赤だろう。

普段の仕事ならこんな事ないのに・・・

そして人通りの少ない場所に来た。

「あ、あの、どうしたんですか?」

「え、えつとだな・・・その・・・」

彼もまた顔真っ赤だ。

でも深呼吸して、覚悟したような顔になる。

「アンドロメダさん！」

「は、はい!？」

「お、俺と・・・その・・・付き合ってください!!」

「え、えええええ!？」

突然の告白。

どうしていいか分からなくてあたふたする。

「え、えつと・・・えつと・・・!」

彼は答えを待っているようだ。

私も勇気を出して答える。

「え、えつと・・・わ、私こそ・・・す、好きです!」

勇気を出して答えた。

彼は顔を真っ赤にしている。

「え、えつとじゃあ・・・これで恋人だな!」

「そそそそうですね!」

「アンドロメダ・・・じゃ長いよね」

「そそそそうですね!」

「・・・アンドロメダさん?」

「そそそそうですね!」

「あー・・・ダメだこりゃ」

私は頭が真っ白になって壊れたラジオのようになっていた。

「アンドロメダ?」

「ひゃい!？」

「あ、やつと気づいた」

「え、えと・・・ごめんなさい」

「謝らなくていいよ。じゃあどっか行こうか!」

「は、はい!」

「とりあえずカラオケでも」

「カラオケ・・・いいですね!」

「なんかやつと普通に喋ってくれたね」

「はえ!?!そ、そうですか?」

「うん、なんかそれもそれで可愛かったけど」

わたしはたぶんその瞬間頭から湯気が出ていたと思う。
すると手に暖かい感触があった。

「せっかくだし、手、繋ごっか」

「あううう……」

「はは、真つ赤なアンドロメダ可愛いな」

「こんなに私を恥ずかしめるなんて許しません……」

そして手を繋いで歩く。

駅前のカラオケ店に着き、2人で中に入った。

すると正樹の友達らしき人が話しかけてきた。

「お！正樹じゃん！なに……して……ん……の……」

「おつす！奇遇だな！」

「ああああああ!!! 貴様あ!!俺達と誓った非リア充同盟はどうしたア
!!」

「ふっ……遠い過去に……捨ててきちゃった……ぜ」

「やめろ一真……コイツはもう俺らの手の届かない所に行っちゃ
たんだ……」

「あははは……」

私はその状況を苦笑いして眺める。

そして正樹に連れられて部屋に入った。

「じゃあアンドロメダから歌おうか」

正樹は意地の悪い顔をした。

「え、ええ……は、恥ずかしい……」

「大丈夫だつて！」

私はしぶしぶ曲を入れて歌った。

最初は恥ずかしかったがだんだん楽しくなって最後の方は私が
マイクを離さなくなった。

「アンドロメダ、歌上手いね」

「えへん！もっと褒めていいんですよ！そして私の歌を聞けー！」

「でもそろそろ変わってほしい……」

楽しい時間が過ぎていった。

くケストレルく

「あの2人大丈夫かな」

「大丈夫だよ、正樹意外としっかりしてるし」

「しっかりやる事やってたり・・・」

「うわあああ!!正樹に先に卒業されるのは嫌だああ!!」

「何よそれ」

私は苦笑いする。

なんてしていると・・・

「あ」

「あ、勝った」

10点差でタクミにスコアが負けてしまった

「うわあああ!!負けたあああ!!」

「よっしゃああ!!言う事聞いてもらうからね!」

「くっ・・・殺せえ・・・」

「じゃあ・・・」

タクミは僕の行くところに着いてこいという内容だった。

どこに連れていかれるんだ私は・・・

ゲーセンを出て10分も歩いたところで私は察した

「ちよ!!ここホテル街じゃないの!」

「僕も決めたんだ!今日男になるって!」

「私決めてないいい!!」

なんてしていると目の前のホテルからアンドロメダと正樹が出てきた。

2人とも物凄く幸せそうな顔をしていた。

というかアンドロメダは女の顔をしていた。

「ア、アンドロメダアアア!?!」

「ふえ!?!ケ、ケストレルさん!?!」

「ふっ・・・タクミか・・・」

「あ、ああ・・・馬鹿なあ・・・」

「悪いな・・・俺が・・・先に男になった・・・」

「くそおおお!!」

何だこれ。

「アンドロメダ!何してんの!?!」

「な、何って・・・きやつ」

「あわわ・・・」

私は若干ヤケになりタクミの手を引く。

「わああ!!ちよつと!」

「グッドラック・・・タクミ」

ほぼ無理やりホテルに連れ込んだ。

「ケ、ケストレルさん?」

「わ、私もだって・・・私だって出来るし!」

「な、何が!?!」

「さつさとシャワー浴びてきなさいよー!私も行くからー!」

「りよ、了解です!」

タクミは不格好な敬礼をしてシャワーを浴びに行った。

私はもう引き返せないと思いい腹を括った。

「わ、私だってもう卒業してやるし・・・」

アンドロメダに先を越されたのが悔しいのか何なのか・・・

なんてしてらうちにタクミが出てくる。

「お、お先であります!」

「わ、私もいくから!」

そして私もシャワーを浴びる。

心臓の鼓動が早い。

体をキレイにして外に出る。

タクミはすごいいい姿勢でベットに座っていた。

私はそれに速足で近づく。

「え、えつとケストレルさん?」

「んっ・・・!!」

「んんん!?!」

ほとんど無理やりキスをした。

そのままタクミに押し倒された。

「も、もう後戻りとか無しだよ」

「わ、分かってるよ！」

そしてそこで私もついに1線を超えた。

く提督く

「ふい・・・ただいまっ」と

「ただいまなのですく」

「執務室に置くものだけ持っていくかー」

「そうですね！」

時刻は午後6時

外も薄暗くなった。

「いそかぜー、電話番号ありがとうな」

そう言いながら部屋に入る。

「あ、司令官。お疲れ様です。特に電話はありませんでした。強いていうなら詐欺の電話来たので逆探知してトマホーク撃ち込んだくらいですね」

「うん、なにめっさ過激な事してらっしやるの!？」

ツツコミどころ満載だがとりあえず置いておく。

執務室に補充のコーヒーや紅茶を置く。

そんな事してたら外から車椅子の音が聞こえた。

「ん？マーフィか？」

ドアを開けたら・・・

「あうううう・・・シンビルスク・・・もうやらああ・・・」

『あ、提督さん、お疲れ様です。ちよつとイジメすぎちゃいました！てへっ』

車椅子に座りながら燃え尽きたマーフィとその後を半透明で浮遊しながら車椅子を押すシンビルスクの姿があった。

「絵面怖すぎだろ!!」

『マーフィさんどうしましょう?..』

「部屋に戻して休ませてやれよ！」

「やらああ・・・部屋に帰ったらまたシンビルスクが・・・」

『もう少し愛を深めましょうか』

「いやあああああ！私どうせするなら男の子がいいのおお!!」

よく見るとマーフィは椅子に拘束されていた。

シンビルスクはめっちゃ悪い笑顔をして車椅子を押しに行った。

「……」

そんな事をしていると

「うわあああ!!マーフィさん!」

ケストレル達が帰ってきた。

「お、ケストレルにアンドロメダ。おかえり」

「ただいまー!ねえ隊長聞いて!タクミったら早いのもー!」

「へっ?何が?」

「ケ、ケストレルさんより早く卒業してやりました」

「へっ!!なんだって!!」

何となく想像が付いた。

ていうかアンドロメダは彼氏出来たのか。

「まあ…幸せなのはいいが…それは俺に報告しないでいいから…」

「おっと、それは失礼。でも安心して!避妊したから!」

「そういう問題じゃねーから!」

「え…ゴム足りたんですか…」

「うおおおいい!!」

目の前の2人のガールズトークには付いていけない。

ていうか、ちよつと前までケストレルはこんな話したら顔真っ赤に

してただろ!

「まあ…うん、お幸せにな」

「はーい!どうもねー!」

「あ、ありがとうございます」

2人は寮に帰っていった。

いろんな意味でエンジョイしてんな…

「司令官さん、あの2人どうしたのです?」

「あ…大人の階段登ったっほいな」

「?」

その話を聞きたいとかぜは。
「ケストレルさんアンドロメダさん……後で話聞きます！」
何やら楽ししうな笑顔をした。

「暇だ……」

執務室で一人呟く。

今日は珍しく仕事が無い。

あるにはあるが量も大したことなかった。

「建造でもしてみるかな……」

なんて呟いていたら突然部屋のドアとか戸棚が開いたり閉まったりし始めた。

ポルターガイストが始まった。

だが一瞬で犯人が分かる。

「おいコラ、シンビルスク！やめろ！」

『えー……てか何で私って分かるんですかー』

「お前くらいだろこんな悪戯すんのは！」

『ほんとに私だけだと思いました？』

「え、何それ」

『ほら……貴方の後ろにも……』

「はあ？後ろ？」

後ろを振り向くと窓ガラスに焼け爛れた人間の顔があった。

表情が分からないくらい焼け爛れているが物凄い形相で睨んでいることだけは分かる。

「控えめに言って超怖い。」

「おわあああああ?!?!」

『いやああああ?!?!出たああああ!!』

「なんでお前もビビってんだよ！」

『何となく怖そうな人呼んでみたらめちやくちや怖い人がああああ!!』

「お前かよ呼んだの！お帰り願え!!」

『あ、悪霊退散！アラアアクバル！』

「なんでイスラム教徒と化してんだお前は！」

『じゃ、じゃあ、マーフィさんと結婚出来ますように！』

「出来ねーだろお前死んだから!!てかそれ幽霊に頼むことじゃないよね?!もう一つ言うと幽霊がお願いする事じゃねーだろ!!」

ふと後ろを振り向くと例の幽霊は呆れた顔をして消えた。

『あ・・・帰ってくれました・・・』

「お前な・・・マーフィの所にでも行つとけ・・・」

『いやー、マーフィさんイジメすぎて気絶しちゃんだんですよねーあははー』

「あははーじゃねーよ!何お前もクレイジーサイコレズになつてんだ」

この鎮守府に2組もレズカップル要らない・・・

俺はとりあえずこの空間から逃げたかった。

「電でも連れて建造にでも行こ・・・」

『いつてらつしゃい、貴方に神のご加護がありますように』

「何今更良いキャラぶつてんだよ!」

『いいじゃないですかー』

とりあえず俺はさつさと工廠に向かう。

その途中の廊下で電を見つけた。

「あ、電ちようどいい所に」

「?なんですか?」

「ちよつくら工廠まで着いてきてくれ」

「了解なのです!」

というわけで工廠前。

相変わらずちよつこい妖精が動き回っている。

「お!てーとく!おひさー!」

「ういっす、2隻分建造頼めるか?」

「うむ!任せられよ!」

機械に資材を突っ込んでいく。

そしておもむろに高速建造材を取り出した。

「出てこいクソツタレええええ!!!」

「それ建造で言うセリフじゃない。」

「ストレス溜まつてるのですか・・・?」

「たぶんな」

そして扉が開く。

さてどんなバケモノが出るやら……

「提督さん、お疲れ様です。練習巡洋艦鹿島、着任です。うふふっ」

「か、鹿島……?」

「はい?何でしょうか?」

「うわああああ鹿島ああああ!!よく来てくれたああああ!!バケモノ意外がやっとうたアア!!」

「きやつ!な、なんですか!?!」

思わずまともな艦娘が出たことに喜びさけんでしまった。

「あ、すまん、俺はこの提督だ。とりあえずあと一人出てくるからソイツがきたら鎮守府を案内するよ」

「ありがとうございます、ふふっ」

鹿島は優しく微笑んだ。

電は若干ムスツとしていた。

「どした電」

「……なんでもないのです」

「ん?そか?」

『鈍感提督め……』

「ん!?!シンビルスク!?!」

「シンビルスク?」

「あ、ああ、何でもないよ」

そんなことしているうちにもう一つも終わった。

今度は誰が出てくるやら。

そして扉が開いた。

「DDG—151ネイサン・ジェームズ参上!ミサイル迎撃から疾病対策までお任せだよ!」

「……結局はこうなるのか……」

「あれえ!?!なんでガツカリしてるの!?!」

「なんでもない……てかお前、アーレイ・バーク級か?」

「うん!そうだよ!」

「んじやお前の姉がここにいるから後で挨拶でも行くか」

「姉！誰々!？」

「マイケル・マーフィだよ」

「お！マーフィ居るんだ！」

「ネイサン・ジェームズさん、鹿島です。よろしくお願いしますね」

「電なのです！よろしくなのです！」

その時、ネイサン・ジェームズは少しだけビクツツとして笑顔に戻る。

「うん！よろしく！私もみんなに負けないように頑張るよ！」

俺は若干違和感を覚えたがとりあえず気のせいということにした。

「んじや、鎮守府案内にでも行くか。電も一緒に行くぞー」

「了解なのです！」

というわけで鎮守府を案内していく。

特に面白い場所もないが。

「ホントはもうちょい施設あったんだが・・・ミサイル攻撃受けてな」

「えー、私なら一瞬で迎撃したのにー」

「提督さん、ミサイルって何ですか？」

「あー、そっか。鹿島は分かんないよな。ジェームズ、教えてやってくれ」

「お任せあれ！えつとね！」

ジェームズはミサイルの概要を簡単に説明した。

内容を聞いた鹿島は若干震え上がっていた。

「つ、つまり、狙ったら絶対そこに飛んでくるんですよね・・・」

「んー、まあそだね」

「しかも音の早さで・・・」

「物によったら音の3倍とかだよー」

鹿島は更に青ざめた。

ついでに電も青ざめた。

「司令官さん！ミサイルって早くても亜音速くらいで飛んでくるって言ったじゃないですかあ!!」

「あー・・・まあ特殊な対艦ミサイルはマッハ3くらいだな」

そーういや教育し忘れてた。

なんて思っていたら若干ヤツれたマーフィが前から来た。

「あら、提督じゃない。その2人はどうしたの？」

「ああ、さつき建造したんだ。お前の妹もいるぞ」

「へっ？妹？」

「会いたかったよマーフィー!!」

「え、きやつ!!」

「私、ネイサン・ジエームズだよー！お姉ちゃんー！」

「え・・・？ネイサン・ジエームズ？艦番号は？」

「DDG-151だよ！どしたの？」

「・・・ごめんさない。私貴女を知らないわ」

「え・・・？」

知らない？どういう事だ

「同じアーレイ・バーク級じゃないのか？」

「お、同じアーレイ・バーク級だよ！」

「・・・貴女何を言っているの？アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦に100隻目は居ない。それに私はアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦で最新型なのよ。151なんて存在しない。」

「え・・・だ、だって私・・・」

存在しない艦・・・どういう事だ。

「え、えっと提督さん、私混乱してきました。」

「俺もだ。」

「わ、私もなのです」

俺たちは完全に混乱していた。

1番混乱しているのはジエームズだろう。

「で、でも私！あなたがお姉ちゃんって知ってるんだよ！」

「・・・ごめんさない。私には分からない。アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦はまだ62隻しか居ない。私が今ある中で最後に就役した艦なんだから」

俺は一つ、ふと思ったことがあった。

いそかぜのようにパラレルワールドの艦が建造されたのではな
いか。

だ。SFチックな話ではあるが、いそかぜと うらかぜ がいい例

「なあジエームズ、お前の記憶にある世界情勢はどうなっている?」

「世界? えっと・・・あまり喋りたくない・・・」

さつきまで明るかった顔が一気に暗くなる。

「どうしてだ?」

「・・・言いたくないの!!・・・みんなを信じれなくなるから・・・」
突然叫ぶ。

みんなを信じれない?

「とりあえずマーフィ、ジエームズはお前の知ってる世界の艦じやなさそうだ」

「どういう事よそれ」

「いそかぜ と同じだ」

「ブイ・ウェツブ艦って事?」

「いや、ジエームズは普通のアーレイ・バーク級だろうが・・・コイツに何かあつたんだろう」

そんな話をしてる後ろでは電と鹿島がジエームズを宥めていた。

「ジエームズさん、大丈夫なのです?」

「うん・・・大丈夫。二次大戦の艦なら大丈夫だから・・・」

「二次大戦の艦ならってどうしてですか?」

「ごめんね、今は話したくない。私の事きつと嫌いになるから」

「まあ、話したくないならまた話せるようになってから教えてくれ。いつでもいいよ」

俺はそう言つて鹿島と寮に帰らせた。

「司令官さん、ジエームズさんどうしたんですか?」

「さあな・・・」

そんな話をしていると。

『そんな時に私参上です』

「にやあああああ!?!?」

「おわっ!? シンビルスクか!? いきなり出てくんな!」

『あ、電さんごめんなさい。提督さんもついでにごめんなさい』

「上官に対していい態度してんなお前・・・」

『えへへ』

「えへへじゃねーよ！」

『まあそんな事置いといて、ちよつと記憶でも見てきましようか？』

「いや、しなくていい。知られたく無いことだつてあるだろう」

『んー・・・まあそうですね、じゃ私はこの辺で』

「はいよ、じゃーな」

シンベルスクはそのまま消えた。

「電、とりあえず執務室に・・・電？」

「くあwせdrftgyふじこーp」

「・・・・・・・・・・」

「んだああああ!!終わるかちくしょう!!」

大量の事務仕事を前に叫ぶ。

時間は2200だ。

昼はあんなに暇だったのにいきなり夜に仕事が舞い込んだ。

電は疲れていたようなので先に部屋に帰らせた。

「はあ・・・海風にでもあたるか・・・」

俺は冷蔵庫からよく冷えたビールを持って外に出る。

今日は月が良く見え外が明るい。

「はあ・・・誰が仕事手伝ってくれないかな・・・」

なんて事呟いてると埠頭に小さな灯がみえた。

タバコの火のようだ。

「誰だあれ」

近づいてみると。

「あら？ジェームズか？」

「提督？」

「奇遇だな。てか、お前タバコ吸うんだな」

「まあね。なんか吸ってないとやってらんないよ」

「昼みたいな元気さも無さそうだが」

「あんなのキャラ作ってるって分らない？」

ジェームズは冷たくそういった。

「まったくさあ・・・私にも色々あるだよ。まあ、こうやってタバコ吸うのもみんなが居ない時にしてるけど」

「そうか」

俺も隣に座りビールを開けた。

「何勝手に隣に座ってるの？」

「いいだろ別に」

「まあいいけど・・・てかもう一本ないの？」

「ビールか？生憎、お前がいるとは分からなかったしな」

「気のきかない提督だね」

「うるせえ」

昼とはずいぶん性格が違う。

今のジエームズはとても冷たい感じがする。

「で、提督。ビール飲んだら帰るの？」

「んー。まあそうだな。お前と話していたい気もするが」

「なにそれ口説いてるの？」

「俺はもう電が居るから他には要らん。ただ単にお前の話が聞きたいだけだ」

「はあ・・・まあいいか。提督なら艦娘じゃないし」

「なんでまた艦娘が苦手なんだ？」

「苦手って訳じゃないけどね。昔の事のせいでね」

「なるほどな」

ビールを飲みながら聞く。

「私ってね、ある意味で人類最後の希望の艦・・・ラストシップだったのよ」

「ラストシップ？」

「そ、ラストシップ。感染すると致死率が90%以上の病気が流行ってたんだ」

「また恐ろしいな」

「最初は極秘任務で出てる間に流行ってたから私自身も病気の事は知らなかった。ただ、ウイルス学者が乗ってた」

ジエームズはそのまま続ける。

ジエームズ曰く、そのウイルス学者はウイルスの原子株を見つけてワクチンを作りたかったらしい。

「そしたらどこから嗅ぎつけたのがロシア人が原子株を渡せてキーロフ級で襲ってきてね、まあ大変だったよ」

「キーロフ級か・・・キーロフ級は苦手か？」

「どういう意味それ。まあ、苦手だよ、正直ね」

「そうか・・・」

「どうしてそんな事聞くの？まるでここにキーロフ級いるみたいだよ」

「いやまあ……一人居るんだがな……」

「ふーん……名前は？」

「ピョートル・ヴェリーキー」

「ヴェルニじやないならいいよ。アイツには借りがあるから」
「借り？」

「仲間一人殺された。まあそれだけ」

「……そうか」

「なに暗い顔してるの？」

「いや、悪いこと聞いたかなって思ってたな」

「別に大丈夫だよ。んで、続きだけどき。ヴェルニにを海の藻屑にしたあとはワクチンが完成した。まあそれだけなら良かったけど」

ウイルスの免疫を持ったグループが襲いかかってきたらしい。

今度は原子力潜水艦を持ってきて。

「アスチュート級潜水艦だったかな。アキレスって言ったた。おかしいよね、同盟国の潜水艦なのに」

「どうしてみんなお前を狙ったんだ？」

「ヴェルニは原子株を奪ってワクチンを作ってそれで世界を掌握しようとした。アキレスは単に私が邪魔だった。免疫者だけの社会を作ろうとしたらね」

「世紀末だな……」

「ホントに。ま、そんな所で私はどうしても艦娘に対して不信感が取れないんだよね。何かしてくるわけじゃないけど」

「トラウマってのはなかなか取れないもんだよ。そうだ、いそかぜにでも相談してみろ。いい話相手になっってくれるかもな」

「なんで？同じイージスだから？」

「……アイツは仲間を沈めたんだ」

「そうなんだ……」

「まあ、わざとではないしな。そんなわけだ、アイツならいい相談相手になってくれるかもしれない。ケストレルはお前と似通った感じかもな」

「ケストレルって……あの空母艦娘だっけ？」

「そうそう、アイツの場合は戦争中だったが……アイツもアイツで姉を沈めたんだ。まあ、正確には俺達が沈めた」

「え？どうい事？」

「俺はアイツが艦の時代に乗艦してたんだよ」

その時の戦争の話をした。

オーシアやユークトバニアという国名に首を傾げてはいたが。

「そうなんだ。なんかそれ聞いたら安心したよ、私だけじゃなかったんだね」

「そういう事だ。お前一人苦しまなくていいよ」

「ありがと、すっきりしたよ」

ジェームズはもう一本タバコを加えてポケットをゴソゴソしていた。

「2本目か」

「昼間はなかなか吸えないからね。ニコチンの補給だよ」

「そか。まあ健康には気をつけろよ」

「はいはい……ってあれ、火がつかない」

「オイル切れか？」

「あくあ……提督火、持ってない？」

「火か……あく、マッチならあるぞ」

「それでいいや」

「ほらよ」

マッチを投げて渡す。

彼女は見事にキャッチした。

「どーもね」

ジェームズはタバコに火をつけていた。

月明かりに照らされてタバコを吸ってる横顔がなんだか映画の主人公みたいだった。

「なに見てんの？」

「いや、何となく」

「あ、そ」

ジェームズはマッチを投げ返してきた。

「んじや、風邪ひくなよ」

「言われなくても大丈夫だよ」

そう言ってその場を去った。

「次の日」

「んあ・・・」

起きると執務室の机だった。

「やべ、あのまま寝てたのか・・・」

口元のヨダレを拭っていたらドアがノックされた

「はいよー」

「司令官さん！ここにいたのですかー！」

「ありや、電？」

「昨日帰ってこないから凄く心配したんですからね!!」

「すまん、まさかの寝落ちしてた」

「お仕事終わったのです？」

「ああ・・・なんとか・・・」

昨日の夜、マーフィが寝て暇になったシンビルスクが執務室に来たので頼み込んで手伝ってもらった。

幽霊に手伝わせるって凄く構図だが・・・

電とそんな話をしていると鹿島が入ってきた。

「おはようございます提督さん、今日の訓練って何がありますか？」

「あー・・・そだ、ジエームズの戦闘能力のデータが欲しいからな、鹿島がその情報収集係で」

「了解しました」

鹿島は敬礼して出ていった。

「そういえば司令官さん」

「ん？なんだ？」

「司令官さんタバコ吸うのです？」

「またどうした？」

「いえ、なんだが服からタバコの臭いがしたので・・・」

「ああ、ジエームズか」

「ジエームズさんですか？」

「アイツ、タバコ吸ってるからな。まあ、本人はそういうキャラじゃないから言わないでって言ってたが」

「それ言っちゃっていいのですか……」

「電には隠し事無し、だろ？」

「そうですね……ま、まあ私は誰にも言わなければ問題ないですね！」

そんな話をしてたら今度はジエームズが入ってきた

「おっはよー！」

「おっす」

「今日ってなんかあるの？」

「お前の戦闘能力を把握するテストみたいなのするぞ」

「ほう！私の本気を見せる時が来たようだね！」

「まあ怪我しない程度に頑張ってくれ」

「はーい！」

ジエームズは気分良さそうに出ていった。

ホントに昨日とは別人だな……

対潜水艦戦闘訓練

くネイサン・ジエームズく

鎮守府から約500キロの洋上。

今日は、第六駆逐隊の子達といそかぜの訓練のためだ。

いそかぜは今、第二次大戦の駆逐艦と装備がほとんど変わらない。ソナーとレーダーは強力な物のままだが。

ちなみに私はそのお守りのようなものだ。

正直めんどくさい。

しかもいつの間にか私が喫煙者って知られてるし・・・

まあ心置きなく吸えるからいいけど・・・

早速タバコに火をつける。

「ふー・・・」

訓練海域には潜水艦達が待っている。

今日は対潜水艦訓練だった。

「いそかぜ、ソナーは何か捉えてる?」

「はい、もうバッチリと」

私はふといつもの調子を忘れてそう言った。

「なんかいつもと違うのです?」

「へっ?! い、いやいやいや!! 変わらないよー!」

「・・・怪しい・・・」

「怪しくないから!」

さすがに素の私を見たらみんな離れて行きそうだからね・・・

「タバコ加えながら必死に否定してる・・・」

響に疑いの視線を向けられ私は焦ってタバコを落とした。

しかも足に命中した

「うわあああああつちいいいいいい!!!」

自分でもびっくりするような声が出た。

・・・死にたい。

「ジエームズさん・・・もしかしてドジっ子ですね!」

いそかぜは笑顔で親指を立ててくる。

素の私がこんなんじゃない上にドジっ子扱いされてちよつとプツチン来たので、脅かしてみることにした。

「・・・言うことなし、掛け値なしのどデカ地雷を踏んだよ・・・いそかぜ」

「へっ?」

「一つ聞きたいんだけど・・・墓にはなんて・・・書いて欲しい?」

私はVLSの蓋を開く。

「はわわわわ!!!喧嘩はダメなのです!!」

電が必死に止めてくる。

「ぐ、ぐ、ぐごめんなきいいいい!!」

いそかぜは涙目で謝ってきた。

そろそろ満足したので止めようかな

「・・・嘘だよ、必死になってる姿可愛いね!」

「はえ・・・?」

いそかぜは海面に座り込んでいた。

「ど、どれだけびつくりしたと思ってるんですかああ!!」

「あははは!!ごめんごめん!」

「もうジェームズさん!意地悪は良くないのです!」

「あははは!ごめんって!」

なんてワイワイ話ながら進んでいると潜水艦達から無線が入る。

《ジェームズさん!聞こえるでちか!》

「ん?ゴージャ?どしたの?」

《所属不明の艦娘2人が深海棲艦から攻撃を受けてるの!イク達だけじゃ難しいのね!》

「了解!すぐに向かうから頑張ってる!」

そう言っつて無線を切る。

「セイバーホーク1発艦準備!」

「レーダーで見つけられないの?!」

「ダメ、小島が多くてレーダーの索敵範囲が限定されてる・・・」

「潜水艦は捉えています!ここから東に50km・・・ちよつどあの島が沢山ある所です!」

「分かった、セイバーホーク1の情報を待ちつつ全速で向かおう」
「了解！」

（U96）

耳障りなピンガー音。

駆逐艦が私達に食いついて離れない。

「どうするのね？」

「どうしよう・・・」

敵は戦艦3、空母1、駆逐艦2の艦隊だ。

駆逐艦は耳が良いらしく、食いついて離れない。

狼が追い回される側になってしまった。

「せめて上の艦娘が片付けてくれれば・・・」

上にいた艦娘は現代艦娘のようだが1隻が大破、もう1隻がそれを必死に庇っている。

「ねえクロさん・・・」

「なんですか？」

ユーが何かを思いついたのか提案してきた。

「私が囷になるから誘導魚雷で・・・」

「だ、ダメです！危ない！」

「でも・・・」

そんな話をしていたらゴーヤとイムヤが突然動き出す。

「な、何して・・・」

「1番練度が高いのは私たちだから！」

そう言っって離れていく。

駆逐艦はそれに食いついた。

「1番2番、誘導魚雷用意！」

発射管を開く。

誘導魚雷が駆逐艦を捉えてくれる事を祈る。

「魚雷1番2番！発射！」

魚雷は磁気信管、ヤツらの腹に大穴を開けます！

「爆雷着水音！2発！」

ユーが上を向いて叫ぶ。
ゴージャ達を狙っていた。

だがゴージャ達はそれを躲して逃げる。
駆逐艦は魚雷に気づいていなかった。

「あと30秒……」

1隻が気づいて反転を始める。

だけど……遅いです！

大きな爆発音が聞こえた。

「フタエノキワーミー！キワーミー！」

「シズカニセイッ！」

「(・ω・)」

「あれ……ユー、何か口が勝手に……」

いつもの事です。

だがこれで駆逐艦は片付いた。

と、同時に艦隊が到着する。

くいそかぜく

敵艦隊補足！

沈みゆく駆逐艦を通り過ぎ、敵艦隊に向かう。

「先制攻撃をかける、ハーブーン攻撃始め。目標戦艦夕級、発射弾数2発。」

ジェームズさんは冷静に諸元を入力していく。

「ハーブーン発射始め!!」

ジェームズさんの小柄な体から2発のハーブーンが発射された。

ハーブーンはブースターを切り離し低空飛行を開始する。

敵艦隊はその音に気づいてこっちを振り向いた。

夕級が3隻……！

「戦艦は私が抑える。あなた達は空母をお願い」

「了解しました！艦隊は私に続いてください！」

「了解なのです！でもいそかぜさん、慣れてないうちはあまり前に出ないようお願いなのです！」

「分かってます、私はあなた達の目と耳になります」
空母を搜索する。

空母は島の影に身を潜めているだろう。

《いそかぜ、私のへりを使って。空母を搜索させてるから》
「わかりました！」

ジエームズはさつきまでとは別人のように言ってくる。

《こちらセイバーホーク1！いそかぜさん聞こえる?!》
「聞こえます！」

《敵空母発見！だけど、艦載機の発艦準備に入ってる！そこから西約28km！積んであるペンギンミサイルを撃ったけど迎撃されちゃったからもう援護出来ないよ！》

「分かりました！大丈夫です！」

「ペ、ペンギンさんがミサイルになっちゃったのですか・・・」

電が悲しそうな目で私を見てくる。

第六駆逐隊全員がそんな目で私を見てくる。

普段クールな響が1番悲しそうだ。

「・・・戦争だもんね・・・仕方ないさ・・・」

いや、そんな悲しそうな目で私を見ないでください！

何もしてないのに良心が痛みます!!

「ペ、ペンギンミサイルっていう空対艦ミサイルがあるんです！提督に言えば画像見せてくれますから！」

「ペンギンさんが爆弾かかえて突っ込んでいく画像なんて見たくないのです！」

電は軽く泣きながらそう言ってくる。

ていうか、この子達ペンギンがロケットブースターでもくつつけて腹に爆弾抱えて、さよなら天さんとでも言いながら突っ込んでいく所を想像してるんだろうか・・・

「・・・純粹なのはいい事ですよね・・・」

敵空母に進撃しつつそんなことを呟いた。

《こちらセイバーホーク1！ご主人様！空母から艦載機が上がってきた！》

《了解、待ってて。対空ミサイル撃つから》

ジエームズさんのほうを見ると複数の対空ミサイルが打ち上がっていた。

私達も空母に急ぐが障害物が多くて移動しにくい。

「ねえいそかぜさん、何か変じゃない?」

雷は何かに気づき私に問いかけてくる。

「空母を隠すには最適かもしれないけど・・・普通護衛の駆逐艦とかつけるわよね・・・」

「・・・確かに・・・」

私は嫌な予感がしてきた。

今、ちようど孤島群の真ん中あたりだ。

孤島に阻まれレーダーが上手く目標を捕えられない。

上空を飛んでいるヘリが唯一のセンサーだ。

「これマズイですね・・・」

たぶん空母は困だ。

そしてその予感が的中したのかヘリから無線が入る。

《こちらセイバーホーク1!!いそかぜさん、敵駆逐艦出現!数は10を超えています!困まれてる!》

「やっぱり・・・反転して逃げます!どこから来るか分かりません、警戒を厳にしてください!」

「了解!」

島を縫うようにして離脱を開始する。

その時、目の前に報告にあつた不明艦娘を見つけた。

「味方です!大丈夫ですか!」

一人は中破、もう1人は大破していた。

「僕は大丈夫だからこの子を・・・!」

「う、う・・・わ、我輩・・・まだ・・・」

「大丈夫です!もう助かりますよ!」

「私が肩を貸すのです!」

「私もやる!助けるわ!」

「電さん、雷さん、お願いします!」

ジエームズさんに援護を要請する。

「ジエームズさん！助けてください！」

《分かってる。早くそこから逃げて》

撤退を開始した時、真後ろに駆逐艦が現れた。

私は慣れない砲で砲撃をするが当たらない。

「これが速射砲だったら・・・！」

その時、無線からジエームズさんの声が聞こえた。

《みーつけた・・・》

その数秒後、砲弾が飛来する。

《そのまま真っ直ぐ行って。ルートはクリアだよ》

「了解しました！ジエームズさんも・・・」

《私はもうちょいしたらかな》

くネイサン・ジエームズく

センサー代わりのヘリが敵艦を捉えている。

可哀想に・・・ここからは誰も逃げれないよ

私は敵に聴こえるように言う。

「ほら、きつさとかかかってきなさい。それともビビってるの？」

挑発してみると背後から攻撃を仕掛けようとした駆逐艦が出現した。

「丸見えだよ」

速射で4発砲弾を叩き込む。

当たりどころが良かったのか爆発を起こして轟沈した。

「残念だったね。私はもう君たちを補足してるんだ。同情するよ、この海域からは誰一人生きては帰れない・・・ここは地獄のモーテルさ、できる限り逃げてみな。でないと・・・」

敵を全てロックオンしトマホークのVLSを開く。

「ブギーマンに喰われるぞオ！」

トマホークを斉射する。

10発以上のトマホークが飛翔していった。

敵は慌てて逃げ始める。

「鴨撃ちだね・・・面白くもない・・・」

レーダーから敵が消滅する。

私はいそかぜ達と合流するために進路を変更した。

「いそかぜ」

「大丈夫ですか?」

「僕は大丈夫・・・あ、自己紹介まだだったね。僕はタイコンデログ級ミサイル巡洋艦、ヴィンセンス。彼女はオリバー・ハザード・ペリー。ペリーって呼んであげて」

ヴィンセンスと名乗った彼女は中破だがまだ余裕そうだ。

「ペ、ペリーなんて呼び捨て・・・我輩・・・ゆ、許さないから・・・」

「今は喋らないでください!」

「あと2時間で鎮守府なのです!」

時刻は夜、まだ鎮守府の明かりは見えない。

「司令官! 負傷した艦娘を連れて帰投中、あと2時間で着きます!」

《了解した! ドックは開いてる、気をつけて帰ってきてくれ!》

「了解!」

「提督」

「負傷した艦娘か・・・名前からしてまた現代艦娘・・・そろそろ鎮守府の財政がやばくなりそう (震え声)」

「あらいいじゃない。私は話が分かる子が多くなるのはいいけどね」

「そりやマーフィーとかにとってはな・・・」

『私も話せる子が増えるのは嬉しいです』

「うわあおああ!?!」

いきなりシンビルスクが目の前に出てきた。

毎度ながらかなりびっくりする。

ちなみにマーフィーは慣れたようだ。

「あら、やっぱり着いてきてたの?」

「お前は随分慣れたの・・・」

「そりやね。そういえば艦娘の名前は何だつて言ってた？」

「んーと・・・タイコンデロガ級巡洋艦、ヴィンセンスとOHペリー級フリゲートのオリバー・ハザード・ペリーって言ってたぞ」

「・・・ヴィンセンス・・・」

マーフィは険しい顔をした。

何かあったのだろうか。

「ねえ、貴方は船の艦歴は結構知ってる方？」

「んや、俺は元々空軍だったから艦船についてはからつきしだったからな。どうした？」

「いえ、だったらいいの・・・ただ、あの娘の艦歴、見ない方が良いでしょう」

マーフィは強い口調でそう言った。

ヴィンセンスの艦歴を見ない方がいいってどういう事だ？

「何かあったのか？」

「まあ・・・ね。まあ調べるのは勝手だけど、もしこれが元々知ってる艦娘以外に教えたら貴方、許さないからね」

「・・・そんなにか・・・ちなみにシンビルスクは知ってるのか？」

『ええ、まあ。可哀想な話ですよ。あの娘にとっても・・・』

「・・・」

相当大変な事が起きたのだろう。

知りたいという欲求はかなり強い。

だが、彼女達の言い方を聞く限り知らない方がいいのだろう。

「あと、彼女が自分で言ってくるかもしれないけど、その時は絶対に彼女を責めない事ね。まあ貴方なら大丈夫でしょうけど・・・」

「分かったよ、何が起こったのか分からないが・・・まあ大丈夫だ」

「信じるわよ」

マーフィにここまで言われるという事は相当なのだろう。

艦歴は絶対に見ない方がいいな・・・

電の仕返し

「んぐああああ・・・」

背伸びをしたらそんな声が出た。

いつも通りの事務仕事・・・。

「お疲れ様なのです」

「ホント疲れた・・・」

電が持つてきてくれたお茶を啜りながら残りを片付ける。

大体は各部署からの最終確認関係の書類だった。

主にハンコを押すだけだが。

「自動ハンコ押し機とか発売されないもんかな」

「そしたら司令官さんの仕事なくなっちゃいますよ?」

「軍人は仕事無いくらいが丁度いいの」

「それサボりたいだけなんじゃ・・・」

「む、人間が悪い」

そんな感じで電と談笑しつつハンコを押していく。

その時電話がなった。

「はい横須賀鎮守府」

《どうも提督、大本営だ》

「うえ・・・なんですか・・・」

《あからさまに嫌そうな声を出すんじゃない。傷付くだろうが》

「メンタル弱いなオイ。それでなんですか?」

《いや、こつちから送った訓練命令の書類に目を通してくれたかなと思っ》

「書類? いや、来てないですよ」

《おかしいな・・・トンツーで送ったのに》

「そりゃ分かるわけないわ!! ウチの通信班員に和文モールの勉強させて無かった俺も悪いけどそもそもモールで命令来るなんて想定外なんだよ!!」

電話機に向かって怒鳴りまくる。

《え・・・だって昔・・・》

「昔じゃねーよ!!今何年だよ!!もつと別の手段使えばカタレ!!」

《わ、分かったから落ち着いて・・・そうだLINEで》

「アンタに情報保全って単語は無いのかよ!!陸軍の前期教育でもいつていっ!!」

《じゃあどうやって送れというんだ・・・》

「専用の回線とか使って送信すればいいだろうが!!」

《そんなものは無い。》

「無いのかよ!!」

ダメだこの軍隊。

電にどうにかしてくれと目で合図したが苦笑いで返された。

「はあ・・・じゃあこっちからへり出すんでパイロットに書類渡してください・・・」

《分かった、ついでに訓練資材もそこに積んでおくよ》

「了解です・・・」

そして電話は切れた。

「はあ・・・あいつらの頭は何年前で停止してんだ・・・」

「何か毎回の事で見慣れちゃいましたね」

「なんかすまん・・・」

俺はそのまま電話で飛行班に大本営まで飛んでくれと指示を出した。

なんかもう疲れた。

「電・・・ちよいと来てくれ」

「なんですか?」

「俺に癒しをだな・・・」

「癒し?はわっ!!」

抱きまくらみたいに電を抱いた。

ああ・・・いい匂い・・・

「ちよ、ちよつと司令官さん!」

「もう俺のメンタルは限界なんだちよつと許してくれ」

「・・・分かったのです、でも今日だけなのです!」

「はいはい」

「・・・聞いてます?」

「聞いてます」

電を抱きしめたままそう返した。

最近、忙しくてこんな感じに出来なかったからここで電の成分補給だ。

「司令官さん、も、もう離してなのです!」

「えー・・・もうちよい」

「もうちよいじゃないのです!見られたら恥ずかしいのです・・・」

「大丈夫、大丈夫」

電の頭に俺の顔を押し付けたままそう言った。

「絶対大丈夫じゃないのです!バカップルとか言われるのです!」

「大丈夫、大丈夫」

「・・・聞いてませんよね?」

「大丈夫、大丈夫」

「むう・・・こうなったら・・・」

電は電話に手を伸ばした。

「離さない!とこの電話でアメリカ合衆国に宣戦布告するのです!」

「さあ仕事に戻るぞー!」

速攻で電を離れた。

「この番号でそんな事された日には第三次世界大戦が起こる・・・」

「電・・・脅しがシャレになってない・・・」

「そういうのは2人きりの時限定なのです!」

「今も2人きり・・・」

「そういう意味じゃないのです!2人ってお部屋に帰ってからの話なのです!それならその・・・何してもいいのです・・・」

電は顔を赤くしてゴニョゴニョと喋った。

めちやくちや可愛い。

「ん?今なんでもって?」

「な、なんでもなんて言ってないのです!」

「え、でも今何してもいいって・・・電も溜まってるんだな」

俺はちよつと悪い顔をして電をからかってみた。

電は顔を真っ赤にしてプルプルしてした。

そして……

「司令官さんがイジめるのですううう!!」

「あっ」

執務室を飛び出していった。

く電く

司令官さんのアホ!ド変態なのです!ちよつと頭冷やすといいのです!

そりや私だつてここ1ヶ月くらい司令官さんと……

「んにやああああ!!」

なんかモヤモヤして廊下でちよつと大声でした。

「うひゃあ!?!い、電?」

「ま、マーフィさん?」

車椅子のマーフィさんが近くにいた。

「まだ足は治らないのです?」

「うん、医者に診てもらったけど臙装を付けてないと歩くのは難しいかもって」

「そうですか……」

「そんな顔しないで。車椅子生活にも慣れたから大丈夫よ。ところでどうしたの?」

「ちよつと司令官さんと……」

私はマーフィさんにさっきの事を話す。

「くっ……砂糖吐きそうなくらい甘いわね……」

『じゃあマーフィさんも私と砂糖吐きそうなくらいイチャイチャします?』

「なんでアンタが出てくんのよ!!」

「あ、シンビルスクさん」

もう幽霊を見慣れた感じがするのです……

『電さんも最近私を見慣れた感じがしますね、驚いてる時が可愛かったのに……』

「アンタこの子にまで手を出したら司令官ブチ切れるわよ」

『私寝取られ物は嫌いなので大丈夫です』

何の話か分からないけど何故か鳥肌がたった。

「そうだ電、司令官の意地悪な事にはこっちもお返ししましょうか」

マーフィさんはちよつと悪い顔をして言う。

「まず電は2〜3日くらい司令官を避けるようにして部屋に籠るの」

「お部屋にですか・・・でも私のお部屋・・・」

「それは私の部屋使わせてあげる、それで私が代わりに司令官に電が怒ってるって伝えてあげるわ」

「それでどうするのです?」

「これで少し頭冷やすんじゃないかしら」

「・・・」

任務で会えないなら仕方ないけどこうやって2〜3日会えないのは私も辛い。

「まあ電が辛くなったら止めればいいわ」

「うーん・・・」

ただちよつと司令官さんのイタズラには困ってる所があるのでやることにした。

「・・・やるのです!」

「じゃあはい、これ」

「なんですかこれ?」

「盗聴器みたいな物よ」

マーフィさんは軽くウインクして渡してきた。

そしてシンビルスクと一緒に執務室に向かっていった。

・・・大丈夫かな

くマイケル・マーフィく

さしてどんな顔するやら

「司令官いるかしら」

「ん?どうぞー」

『失礼しまーす!』

「お前も一緒かい！」

『ひどいですね、私とマーフィさんは愛を誓い合った仲なんです』
「断じて違う」

変な誤解招きそうだからやめてくださいホントに！

「ああ、うん・・・ほどほどにな」

ほら招いてるー！

「あの、司令官。本題なんだけどいい？」

「ああ。まあそれもいいんだが電見なかったか？」

「見たわよ、その時すつごく怒ってたけど」

「!?」

「2〜3日くらい私の部屋に籠るって言ってたわ」

「そうか」

あれ、意外と冷静。

「ずいぶん冷静ね」

「当たり前だろ。指揮官が不測の事態で混乱したら全員死ぬ事になる。とりあえず電お茶をくれ」

ダメだめちやくちや混乱してる。

『はい、司令官さん』

なんでアンタが電の真似をしてるのよ

「おお、ありがとう。あれ？電なんか透明になってね？」

『あはは、何を言ってるんですか。私は元々透明ですよ』

「おっとそうだった、はっはっはっ！」

『あはは』

なんだこれ！

「シンビルスク、ふざけてないで帰るわよ・・・司令官も電帰って来た
らちちゃんと謝りなさい」

「うわああああ!!消えないでくれ電ああああ!!」

「聞きなさいよ!!」

「うわああああ!!」

話しても無駄そうなので部屋をでた。

とりあえず作戦成功？

その時、ジエームズとすれ違った。

「あら」

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「ちよつとね、今司令官暴走してるから気をつけて」

「暴走・・・何してるのあの人・・・」

くネイサン・ジエームズく

「入るよ」

ドアをノックするが返事がない。

「司令官？」

開けて見ると小麦粉の袋から粉を出してまるで麻薬みたいな状態にして吸おうとしてた。

「・・・なにやってんの？」

「この粉吸うとね、気持ちよくなるんだよー！たーのしー！」

「・・・どうしたの？」

「君もこの粉を吸いたいフレンズなの？」

「フレンズってなんの事言ってるさっぱりなんだけど」

「たのしー！」

「おいコラ、日本語喋れ」

目が逝ってる。

「あなたは怒る事が得意なフレンズなんだね！」

「いい加減にしてくれないかな」

「大丈夫！フレンズによって得意な事と苦手な事違うから！」

「いい加減にしろボケナス」

私は思いつきり司令官の頭を引っぱたく。

「はっ・・・！俺は一体何を・・・！」

「なにそのテンプレみたいな気づき方」

「ああ、ジエームズか。どうした」

「どうしたってこれ、司令部に書類取りに行かせてたんでしょ」

「あ、ああ、ありがとう」

「それより電は？どうしたの？」

「……」

司令官は黙り込む。

大体予想がついた。

「どうせ余計な事して電怒らせたんでしょう？」

「なぜ分かった」

「そんな顔してたから」

私はタバコを取り出して火をつける。

「司令官も吸つとく？」

「俺は止めたつて。それよりもここで吸うなつて何回言えば……」

「いいじゃん、どうせ私以外吸う人居ないんだから」

「まあそうだけど……」

「それで、書類の内容なんだつたの？」

「ん……ああ、艦娘の陸戦訓練か……」

「へえ、陸戦訓練。楽しそう」

司令官は書類に目を通していく。

私はへりから下ろされる訓練機材を眺めていた。

「やり方は各鎮守府に任す……訓練機材は……」

司令官は大きなため息をついた。

「今どきバトラーも無しでチームを分けて戦闘訓練なんてやらないぞ……」

司令官はほれという感じで訓練機材の目録を渡してきた。

「うわ……」

小銃類は38式歩兵銃や99式短小銃。

弾薬はペイント弾……

「この訓練器材は無かつたことにしてウチはうちのやり方でやるか……」

「どうするの？」

「たぶんコレは敵泊地に上陸して司令部陥落を目指すための訓練だろうな。陸戦隊の到着を待ってる時間も惜しいしな」

「なるほどね」

「ジェームズは車運転出来るか？」

「大型までなら大丈夫だよ」

「武器庫に行つて、これだけ全部あるか見てきてくれないか？」

「武器庫つてここの建物にないの？」

「あるにはあるが基本自衛用の装備しか置いてないからな、この鎮守府で使う大半の装備を収めてる武器庫がここから2キロ位のところにある」

「そうなんだ。了解」

私はメモを持って外に出る。

えーつと・・・小銃はM4A1が20、Mk18mod.0とmod.1それぞれ10づつ・・・

「CQB向きの装備・・・だね」

実際、敵司令部となると施設内での戦闘になるだろう。

そう考えるといいかもしれない。

私は司令官に言われたハンヴィーに乗り込み武器庫に向かった。

く提督く

「電あああ・・・」

1人机につつぶして眩く。

「うおおおお!!帰つてきてくれえええ!!俺が悪かったああああ!!」

叫ぶのはいいが虚しくなる。

「はあ・・・いいや、訓練の事考えよ・・・」

上陸して敵司令部制圧となると大火力の戦艦、イージス艦はなるべく洋上に残したい。

対潜警戒はイージス艦の哨戒ヘリとソナーで大丈夫だとは思うが装甲もあり、対潜戦闘も可能な軽巡も残したい。

そうなると重巡と駆逐、潜水艦娘を重点的に訓練するか。

「重巡に指揮を任せて、ちつこくて素早い駆逐艦がライフルマンあたりか・・・潜水艦は隠密行動が得意だから破壊工作・・・」

バトラースシステムがあったからあの子達に痛い思いをさせる事はないだろうが、実際に弾丸が飛んでくるといふ事は分からないかもしれない。

訓練後半でペイント弾使うか・・・

「まあ、これでいいか・・・」

一息ついてコーヒーを飲む。

1人だけの執務室でぼけーっと天井を眺めていた。

く電く

・・・執務室にはやく戻ってあげたいけど・・・

「うううう・・・」

マーフィさんも今居ないし・・・

「んにああああ!!私はどうすればいいのですー!!」

『どうもこうも、自分に正直に行動したらいいと思いますよ』

「はにやつ?!」

『心配なんでここでさつきからずっといましたよ』

いつまにかシンビルスクさんが部屋にいた。

「正直に・・・」

『提督さんもだいたい反省してると思うし、大丈夫じゃないですか?』

「そうですね!私戻るので!」

マーフィさんの部屋を出て執務室に向かう。

『提督さんと距離置くみたいなさ言って約30分で戻るとは・・・』

何か聞こえた気がしたけど気にしない。

「司令官さん?入るのです」

だが返事がない。

もしかして・・・

「司令官さん!!」

ドアを思いっきり開けると机に突っ伏して寝ていた。

「ね、寝てたのですか・・・変な心配しちゃったのです・・・」

司令官さんに毛布を掛けてあげて机に乗ってる書類をまとめる。

「ふう、こんなもんなのです」

わかりやすいようにまとめて、私はソファアに座った。

ぼけーっとしながら天井を眺めた。

「今日はなんか暖かいのです」

そう呟いてお茶を入れて元の位置に座る。

お茶を啜りながらいつ起きるのだろうと司令官さんを眺めた。

「可愛い寝顔なのです」

なんて呟いた時だった。

「んぐ・・・んぐ」おとおお

「おっさんみたいなイビキなのです!?!」

熟睡していた。

私はその姿を眺めながらお茶を飲んだ。

敵工廠地区上陸作戦

部屋に差し込む日差しが暖かくなってきたこの頃。

鎮守府には銃声が響いていた。

この前の艦娘の陸戦訓練命令、あれをウチでも実施している。教官にマーフィ、その助教にジェームズが付いている。

2人とも銃の扱いや戦い方も完璧だった。

あの2人が教えたら大丈夫だろう。

ただシンビルスクが訓練用に使っている建物のくらい場所に出てきて訓練生を脅かして1部お化け屋敷みたいになっている。

その度にマーフィにシンビルスクが怒られているのだが・・・

「落ち着かねえ・・・」

「そうですか？」

銃声の響く場所で仕事はまったく落ち着かない。

電も居たらきつと同じことを言うだろう。

だが当の電はその陸戦訓練に行っていて居ない。

代わりにアンドロメダがいる。

「そういえばこの命令どうしますか？」

「そうだな・・・」

アンドロメダが差し出した命令文書

内容は深海棲艦の工廠らしき施設を発見、これを強襲、深海棲艦の生産能力の低下とどうやって深海棲艦が生まれるのかを調査せよとの事だった。

別の鎮守府との合同作戦でもある。

そしてこの作戦には今陸戦訓練を行っている艦娘を投入する。

「そういえば隊長、不知火さんと夕立さんの成績がトップクラスらしいですよ」

「みたいだな、モニターの映像も見たがコイツらノリノリだな・・・」

夕立はM240などの軽機関銃を好み少しトリガーハッピー気味だった。

セカンダリーのハンドガンも50口径のデザートイーグルを好ん

でいた。

そして不知火はMk18 mod0やショートバレルのM3ショットガンなど短めの武器を好んでいて、戦い方はジェームズやマーフィに仕込まれたSEALsのようなスタイルだった。

不知火は陸戦が好きなのか何なのか同じ部屋の陽炎曰く、今までに見たことないくらいご機嫌で

「私は不知火じゃありません。ジョン・ぬいつく　です」
とか言い出したらしい。

陸戦訓練の前に何かロン毛のおっさんが出てくる映画も見ていたらしい。

「不知火はノリノリだし夕立は火力バカだし・・・いいコンビなのか何なのか・・・」

「どうします？陸戦組は各鎮守府2名ずつつてなってますけど」

「コイツらで大丈夫だろ。不知火は閉所戦闘や格闘も上手いし標的を素早く切り替えて射撃するのも得意みたいだからな。夕立もトリガーハツピー気味とはいえ、射弾をある程度集中させてるから制圧射撃でいい仕事しそうだ」

「では司令部にそのように伝えますね」
「了解」

・・・普通の兵士より能力が高いとはいえ・・・見た目は10代の女の子に銃を持たすなんてな・・・
複雑な気持ちだ。

「はあ・・・」

アンドロメダが出ていき1人になった部屋でため息を着いた。
作戦は1週間後だ。

それまでは艦娘の陸戦訓練に当てられる。

明日からは夕立と不知火を集中的に訓練しよう。

く不知火く

もう硝煙の臭いを嗅ぎ慣れた。

私は目の前のターゲットを作業するように撃ち抜いていく。
私と夕立が集中的に訓練され始めてもう4日だ。

《オーケー、オールクリア。前よりタイム上がったんじゃない?》
「ありがとうございます」

《ただちよつとハンドガンへの切り替えにもたつき気味だからそれは
要演練ね。とりあえずお疲れ様》

私はキルハウスと呼ばれる建物から出る。

「お疲れ様っぽい!」

「お疲れ様、次はあなたね」

「ソロモンの悪夢、見せてあげる!」

夕立は大きな機関銃を持ち上げて薬室に初弾を装填した。

私はそれを見ながら水分補給をする。

「・・・ちよつと撃ちすぎました」

使った弾薬を確認した。

前より10発ほど増えている。

私は少ない弾薬で敵を倒すというやり方をしていた。

弾薬は無限ではないのだから節約するに越したことはない。

《ぽいぽいぽーい!!》

《ちよつと撃ちすぎよ!!》

《まったく戦場は地獄っぽーい!!ひゃっはー!》

《一つのターゲットに20発は撃ちすぎよ!!》

ターゲットの頭の部分が千切れるまで弾を撃ち込んでいた。

「撃ちすぎ・・・」

私は呆れ気味に呟いた。

私と夕立の作戦はあと3日後だ。

く提督く

モニターを前に作戦説明の準備をする。

今回は他の鎮守府との合同作戦だ。

特に隠す必要もないが、現代艦達はなるべく秘匿しておきたい。

もし司令部が知ったらほぼ確実に全ての作戦へ参加させられるだ

ろう。

上からすれば最強の武器なのだから。

そんな事考えてると作戦に参加する艦娘達が集まりだした。

「んーつと・・・全員いるかー?」

人数を数えたら全員いるようだ。

「よし、始めるか。まあ知つての通り敵基地攻撃だ。ただ今回は敵基地の壊滅とは言え、敵基地の調査も含まれる。だから今回ウチは航空戦力を主体として目標周辺の敵性勢力を精密攻撃する」

モニターに敵基地の画像を出す。

基地周辺の防空装備は事前に偵察したところ高射砲や対空機関砲が主のようだ。

「ただこの対空装備の近くに対空レーダーらしきものを見つけた。もしかするとレーダーを使い正確に攻撃してくる可能性がある。今回は海軍の基地航空隊も合同で出撃前する。その目標の指示などはウチの部隊持ちだ。んで、そのためにE-767、AWACSをウチから上げる。コールサインはマジックだ」

その後も淡々と作戦説明をして行き、最後の陸戦の説明に移る。

「陸戦要員に不知火と夕立が含まれてるのは知ってるよな?それと一緒にウチの鎮守府の陸戦部隊も出す。コールサインはハンマーだ。不知火、夕立は艦隊ともに前進、周囲の安全を確保したのちに上陸、艦装は上陸地点に置いてハンマーの到着を待つのと他の陸戦要員との作戦確認をしておく」

「了解しました」

「了解っばい!」

「いいか、危なくなったら後方にジエームズとマーフィ、ケストレル、ピョートル、クズネツォフが待機している。必要に応じて支援要請を行え。艦隊の任務はあくまで陸戦要員の護衛だからな。」

そう言っつてブリーフィングを締めくくる。

その時、不知火が俺の方に来た。

「どうした?」

「いえ、これが最後かも知れませんので」

そう言つて不知火は自分の識別票を渡してきた。

「帰つてこなかったらこれを陽炎に渡してください」

「・・・形見は受け取らない」

「いいから持つててください。もしこれさえ無くなったら陽炎に渡せるものが無くなります」

「はあ・・・分かったよ、でもこれは後でお前に返すからな。分かったか?」

「はい」

「じゃあ気合入れて行つてこい、全員帰つてくるまでが任務だからな。一人でも欠けたら任務失敗だ」

不知火はそれを最後まで聞かずに部屋を出た。

「こういうフラグじみた事はやめてくれマジで・・・」

一人識別票を握つて呟いた。

く赤城く

港を出て18時間ほどたった。

もう間もなく作戦海域だ。

「皆さん、作戦通りに行きます」

「了解!」

「加賀さん、艦載機を上げましょう」

「了解です赤城さん」

艦載機を発艦させていく。

大空に何10機もの航空機が展開された。

くメビウス1く

「メビウス1より全機、久々の実戦だから気合入れていくよ!」

《メビウス2ラジャー》

《ほーい》

気合の入れ方は様々だがまあ大丈夫だろう。

《隊長、どうする?低空から行くか上から行くか》

「今回は艦爆隊もいるからなるべくカバー出来る位置で。各人が思う

位置でいいよ、散開！」

《りよーかーい》

隊を分散させる。

あたりは若干暗さの残る早朝だ。

《隊長、下方に敵艦隊確認！》

「了解！艦攻隊は向かってる？」

《現在降下中！》

「了解、そのまま4と5が援護について！」

《了解！エンゲージ！》

2機の零戦が降下していく。

自慢じゃないけどウチの隊員は1人1人が1個飛行隊に相当する

戦闘力だから100機でも一気に来ない限り大丈夫だ

《マジックよりメビウスリーダー、艦攻隊に気づいた敵航空母艦より

艦載機発艦中》

「了解！みんな聞いた？」

《了解！》

《聞こえてるよー》

全員から返答がある。

大丈夫だろう。

《メビウスリーダー、海軍航空隊が当空域に接近中、誤射に注意せよ。

またケストレルよりF-14Dが4機発艦、制空権確保に向かってい

る》

「了解！頼もしいのがいっぱい来たわね！」

《隊長！敵機視認！単機だから偵察機みたい！》

「分かった、迎撃に向かえる？」

《まっかせてー！》

私は艦爆隊の後方に待機したままでいる。

そろそろ敵機がこっちに気づくはずだろう。

《マジックよりメビウスリーダー、発艦した敵艦載機のうち10機が

そちらへ向かった、至急迎撃せよ》

「ラジャー！メビウス1エンゲージ！」

《こちらノーマッド61、間もなく作戦区域に侵入》

《マジックよりノーマッド61、まだ敵はそちらに気付いていないよ
うだ、なるべく低空を飛行しレーダーに補足されるな》

《ノーマッド61了解》

《こちらメビウス4！艦攻隊に迫る敵航空機の半数を撃墜！こちらの
被撃墜数は無し！艦攻隊は魚雷の投弾体制に入ったよ！》

《了解メビウス4、艦攻隊へ敵対空砲火に注意せよ》

《こちら艦攻隊、了解！》

無線が飛び交う。

順調なようだ。

「見つけた！」

艦爆隊を狙う敵機を発見した。

「明石さん特製の空対空ロケットでも喰らえ！」

出撃前前に明石さんと夕張さんが搭載してくれた空対空ロケット。

これは目標着弾前に複数の子弹に分散して敵を攻撃する物だった。

子弹1発の威力は30mm機関砲弾クラスらしい。

「発射！」

10機の敵機は密集して接近中だった。

いい的だ。

ロケットに気づいた敵は反転しようとするが遅い。

「おやすみ！」

空に花火のように爆炎が上がる。

4機撃墜だ。

「残り6機!!」

味方を4機もやられて頭にきたのか深海棲艦の異形の戦闘機は後
ろを取ろうとしてくる。

「甘い甘い！」

右旋回で回避中にすれ違った敵に機関砲を撃ち込みさらに1機落
とした。

「あー……でもやっぱしつこいなー……」

後方に3機ついている。

アレやるかー。

「よっ……とー!」

機体を80度近くピッチアップさせる。

だが高度は変わらずだが速度は急減速する。

コブラとよばれる機動だ。

これで敵機は私を追い越した。

機首を下げると慌てて逃げようとする敵機の後ろを取った。

「おやすみー、いい夢見てねー」

ラダーを切つて機首を左右に揺らし横薙ぎにするように機関砲と機銃弾をばら撒く。

被弾した敵機は3機とも撃墜された。

《マジックよりメビウスリーダー、敵戦闘機撤退を開始。追撃は避け艦爆隊の護衛に復帰せよ》

「了解、歯ごたえないなーホント」

《敵偵察機撃墜!!高いところ飛びすぎだよもー!!》

《マジックより艦爆隊へ。グローバルホーク無人偵察機から得た情報によると敵基地周辺に強固な対空防衛網が張られている。リーダーによる観測射撃を行っているようだ。ただしリーダーは低空が死角になっている、低空を飛行し爆撃を行え》

《艦爆隊了解!!》

《マジックよりメビウスリーダー、艦爆隊の護衛を上空のF-14Dが引き継ぐ、艦攻隊の支援に迎え。またもう間もなく呉鎮守府の艦隊が当海域に侵入》

「了解!」

《呉の航空隊が到着後、艦爆隊の援護をそちらの支援に回す》

「了解、艦爆隊から一旦離れる!」

《こちら呉艦隊旗艦の神通です……聞こえますか?》

《マジックより神通、よく聞こえる》

《海域の状況を教えてください》

《横須賀艦隊の航空隊が敵機動艦隊と交戦中、また艦爆隊が低空で敵基地に進攻している。》

《了解しました、私たちの近くに敵はいますか?》

《確認出来ない、そのままの進路を維持して目標へ向かえ》

《了解しました》

呉の艦隊も到着したみたいだ。

これで戦力の増強が期待できる。

「赤城さん!そっちはあとどれ位になりそう?」

《もうあと2時間ほどで敵基地に肉薄できます、航空隊の皆さんも補給は遠慮せずに行ってください》

「了解!」

《マジックより旗艦赤城へ、空母は現在位置で停止し駆逐艦と巡洋艦を先行させろ。護衛に後方からネイサン・ジエームズが急行中》

《了解しました。加賀さん、ここで止まりましょう》

《分かったわ》

く 不知火く

空母と別れて敵基地に向かう。

今いるのは、利根と筑摩、夕立と私だ。

私たちは艀装のほかに上陸後に使う小銃と弾薬、ボデイアーマーを艀装に付けている。

「不知火に夕立よ、上陸後に敵を追い払うは吾輩達に任せて一気に行くのじゃ!」

「分かってます」

「危なくなったらすぐ呼んでね」

「はい」

《こちらノーマッド61!不知火へ、聞こえるか?》

「聞こえます」

《そちらが上陸して10程で現地に到着する、到着後は当機のドアガンで近接支援を行う》

「了解しました」

《こちらハンマー1!降りた後はそちらの援護を任せてくれ!》

「了解です。頼りにしてます」

そうして交信を終える。

「さつきから、のーまっどだとか、まじつくだとかよく分からん
じゃ……」

「姉さん、電子機器とか弱いものね」

「筑摩は詳しいのか？」

「そこそこですかね？」

「今度教えて欲しいのじゃ！」

「え、2人ですか？」

「当たり前なのじゃ」

「喜んで教えますね」

2人きりという単語を聞いた筑摩は何かすごく嬉しそうな表情を
する。

「私がおもう手取り足取り隅から隅まで全部教えますね！」

「ん、え？あ、ありがとうなの……じゃ？」

妹の突然のテンションの上がり具合いに姉は混乱していた。

その時、管制機から無線がはいる。

《マジックより利根へ》

「な、なんじゃ!？」

《方位0―3―6に敵駆逐艦を確認。数2。そちらへ向かっている》

「ぜ、ぜろ……すりー……しつくす……?」

「姉さん、36度って事です」

「あ!そ、そういう事か!いや、分かってたぞ?」

《マジックより利根へ、了解か?》

「分かったのじゃ！」

《その駆逐艦を撃破すれば敵基地まですぐだ》

「了解したぞ！」

「敵、確認しました!射程圏内です！」

「砲撃開始！」

「発射！」

轟音と共に砲弾が発射された。

「不知火と夕立はそのまま行くのじゃ！」

「了解」

「了解っぽい！」

《マジックより不知火、そのままの速度で前進せよ。敵基地には複数の沿岸砲が配備されている。攻撃に注意》

「了解しました」

もう敵基地のある島は目視できている。

「夕立、砲戦準備」

「了解っぽい！」

《不知火さん！聞こえますか？》

「はい」

《呉艦隊所属の吹雪です！私も同じ陸戦要員なのでよろしくお願いします！》

「了解しました」

《マジックより不知火、もう間もなく舞鶴艦隊も到着予定。陸戦要員は川内と那珂》

「了解しました」

「軽巡って期待出来そうっぽい！」

「そうですか？」

他の鎮守府はきつと上の出した装備で訓練してその通りの装備だろう。

期待は出来ない。

「不知火さん！発砲炎確認っぽい！」

「回避します」

砲の射程まではまだ遠い。今は回避だ。

《マジックより不知火へ。後方に展開する友軍艦隊より沿岸砲台に向け巡航ミサイルが発射された。着弾まで持ちこたえろ》

「対空陣地へは撃てないのですか？」

《対空陣地の正確な位置を特定出来ていないため攻撃は不可能だ》

「了解」

《着弾まで10分ほどかかる》

「了解、この距離を維持して回避します」

《こちらメビウス1！敵機動艦隊の攻撃に成功！空母を撃沈！》

《マジック了解、艦攻隊は補給が必要な機のみ帰投せよ。その他は他鎮守府艦隊の援護に回れ》

《艦攻隊了解、隊を分散させる》

《マジックより不知火、舞鶴所属艦隊が当海域へ進入。基地到達まではまだ1時間ほどかかる見込みだ》

「了解しました。」

その間に安全確保ですね。

そう呟いて前進と回避を続ける。

「不知火さんあれ！」

夕立が指さす方向から多数の巡航ミサイルが飛来した。

「前進を再開します」

《不知火！利根じゃ！敵艦隊を撃破！そちらに戻るぞ！》

「了解しました。感謝します」

目標まであと数マイル。

上空をミサイルが通過していった。

敵の砲撃はまるで命中しない。

「敵も大甘照準ですね」

「エイムが甘いっほい！」

数十秒後敵基地に爆炎が見えた。

着弾だ。

《マジックより不知火。グローバルホーク無人偵察機から新たな情報。敵は防御陣地を構築中だ、接近し艦砲射撃を行え》

「了解」

もうすぐ射程内だ。

《こちらマジック、敵の防御陣地には重機関銃及び迫撃砲の配置を確認した。上陸後に集中砲火を浴びせるつもりらしい。先制攻撃で撃破せよ》

「了解。艦爆隊は？」

《早期警戒レーダーを回避しつつ接近中。もう間もなくだ》
遠くからエンジンの音が聞こえてくる。

空爆を先に行われた方がいいかも知れない。

「不知火さん！いつでも撃てるっばい！」

「了解、射撃開始！」

敵陣地へむけて12.7cm榴弾を撃ち込む。

敵はまだ砲撃に気付いていないようだった。

また砲撃の直後に頭のすぐ上を艦爆隊が飛行していった。

「着弾確認。マジック、効果はどうですか？」

《現在偵察機が向かっている。待機せよ》

あちこちから煙が立ち上っている。

何発は命中しただろうか。

《確認、敵陣地の20%弱にダメージを与えた。のこりは艦爆隊に任せて前進》

「了解」

ここから一気に速度を上げていく。

上陸まで5分とかからない。

「夕立、一気にいきます」

「了解っばい！」

すぐ目の前では艦爆隊が敵陣地と対空陣地に対して空爆を行っていた。

《マジックより舞鶴航空隊、敵艦隊の約50%を撃沈》

《舞鶴航空隊、了解》

《舞鶴所属の艦隊はそのままの進路を維持せよ。横須賀艦隊の陸戦要員は上陸を開始した》

《了解！急ごう！》

《マジックより艦爆隊へ、敵対空設備にダメージ。あとひと踏ん張りだ》

私たちもあと一息で目標に着く。

「ついたらっばい！」

「マジック、こちら不知火です。上陸に成功しました」

《マジック了解。ノーマッド61の到着及び他の味方の到着を待て》

「了解。夕立、周りを警戒しつつ装備を変えます」

「了解っぽい」

夕立はいつものお気楽な感じから雰囲気を変えた。
私も訓練より急いで武装を用意する。

「OKっぽい」

「ノーマッド61の到着まで待ちましょう。利根、聞こえますか？」

《聞こえるのじゃ！》

「夕立と上陸に成功しました。周辺の警戒をお願いします」

《了解なのじゃ！》

《マジックよりメビウスリーダー、当該空域の敵性航空機の排除を確認。上空警戒にあたれ》

《了解！》

《こちらノーマッド61、もうまもなく到着する！》

《了解ノーマッド。まだ目標には少数ながら対空装備があると思われる》

《61了解！細心の注意を払い接近する！》

《マジックより艦爆隊へ、損害を報告せよ》

《10機中が4機が落とされたが全員のパラシュートを確認している！》

《了解、ノーマッド61は兵員を降下させた後にCSSARを実施せよ》

《了解！》

無線からは現在の戦況か聞こえてくる。

今はこつちが有利のようだ。

「夕立、敵は見えますか？」

「まだ居ないっぽい」

その時だった、耳元に風切り音がして咄嗟に振り向くと後ろに置いた艦装に銃弾が当たり火花を散らしていた。

「コンタクト！」

「どー?!」

上陸地点にあった装甲車の残骸に隠れて敵を探す。

ふと基地のまるで研究所のような四角い施設の上にキラキラ光るものを見つけた。

スナイパーだ。

「居ました。距離200m、あの建物の屋上です」

「見えたっばい!!」

夕立が制圧射撃を開始した。

「艦爆隊聞こえますか?」

《こちら艦爆隊!》

「私たちから見て丁度正面の四角い研究所のような施設の屋上にスナイパーらしきものがあります。機銃掃射を要請」

《了解! 目標位置確認!》

すぐに上からエンジン音が聞こえてきた。

同時に曳光弾も大量に目標の位置に降り注ぐ。

《こちら艦爆隊、効果は不明だが敵はビビっただろう》

「了解、感謝します」

「どうする?」

「今のうちに陣地を確保します」

「あそこがいいと思う」

夕立が指さす先にはまだ損傷を受けていない重機関銃が配置された土嚢で作られた機関銃陣地があった。

「あそこに行きましょう」

なるべく急ぎながらも警戒をおこたらずに進む。

「グロイっばい・・・」

「・・・」

そこには空爆の破片を食らったのかそれとも重機関銃の直撃でも食らったのかおびただしい量の血痕と何かも分かりたくない破片がいつぱいあった。

でもそんな事でここを放棄するわけにはいかない。

「夕立は50口径についてください」

「了解!」

遠くからヘリの音もする。

《こちらノーマッド61! もう5分もかからない! 目標地域は安全か?》

「今のところ敵は確認できません」

《了解！》

《不知火さん！吹雪です！聞こえますか？》

「聞こえます」

《あと20分ほどで到着します！》

「了解」

《こちら川内、私たちもあと40分ほどかかるけど到着するよ》

「了解しました」

私は初の陸戦ということであまり気分が高揚していた。

心拍数も早くなっているような気がする。

まるで始めて陸戦訓練を受けた時みたいだ。

いや、それよりもきつと興奮しているだろう。

私はそんな事思いながら銃を握り直した。

敵工廠地区上陸作戦 2

く不知火く

「夕立、右の林を警戒してください。何かいます」

「分かっているっばい」

夕立は50口径機関銃を林に向けたまま警戒している。
確実に何かがいる。

《こちらノーマッド61！もうまもなく上空に到着！》

「了解しました。林に何かいます、こちらで警戒対処します」

《了解！》

ヘリの音が大きくなる。

もうすぐ近くまで来た時だった。

林から不意打ちのようにロケット弾が発射された。

RPGだ。

《右にRPG！》

ヘリはギリギリで回避した。

「見つけた！」

夕立はバックブラストを確認した場所一带に機関銃を撃つ。

《こちらノーマッド61！地上に複数の兵員！ガンズ、RPGだRP

G！やられる前に殺れ！！》

真上のヘリから機銃掃射が始まった。

夕立も合わせて機銃掃射を開始した。

《こちら吹雪！大丈夫ですか?!》

「こちらで片付けます、でも急いで」

《了解です！》

《こちらノーマッド！あらかた片付いた、隊員を降下させる！》

ヘリは少し移動してホバリングを開始した。

《よし、降下地点だ！》

《ロックンロール！》

《GoGoGo!!》

10名の隊員がファストロープを伝って降下してくる。

ものの一分で展開が完了した。

《マジック、こちらノーマッド。これよりCSARに移る》

《マジック了解。まだ周囲にRPGを持った敵が潜んでいるかも知れない、注意せよ》

《了解》

降りてきた隊員達はすぐに私の周りに集まった。

「ハンマーだ、よろしく……って言っても同じ鎮守府だがな」

「はい、よろしくです。今のところ敵の攻撃は軽微です。でも念のため周囲の警戒を怠らずに。吹雪隊の到着後、私たちは先行して建物に突入、その際に数名付いてきてください」

「了解、では隊を分けよう」

「お願いします」

吹雪達の到着まであと5分程度。

上陸は吹雪と伊19らしい。

大丈夫だろうか。

「もう1度内容を再確認します。この研究所のような場所の調査及び施設の制圧です。研究施設にはなるべくダメージを与えない事が重要な事項です」

「了解っほい」

「夕立、射撃はなるべく3〜5発ずつの連射で設備にダメージを与えないように」

「うう〜……了解っほい……」

「外なら好きだけ撃つてください」

夕立は撃ちまくれないのが少しお気に召さないらしい。

作戦内容を再確認しているとようやく吹雪と伊19が合流した。

「お待たせしました！」

「お待たせなのね！」

「お疲れ様です。これより突入します」

「あれ？この人達は？」

「ウチからの増援です」

「よろしく。ハンマーだ」

吹雪達の武装は2人とも四四式騎兵銃だ。

まあCQB向きではあるか・・・

「行きましょう、夕立、残弾数の把握は確実に」

「了解っぽい！」

わたしたちは施設に前進を開始する。

「不知火さん、その銃ってどこから持ってきたんですか？」

「これは元々ウチの装備です。年代的にもこっちの装備が主流だと思うのですが・・・」

敵は自動小銃でこっちはボルトアクションライフル・・・戦争末期じゃないんだから・・・

と心の中で呟く。

「ハンマー隊は施設の上からお願いします」

「了解した」

ハンマー隊は側の階段を登っていく。

「突入します」

ドアに手をかけるが当然と言うべきか鍵がかかっている。

「当然ですよね」

「どうしますか?」

吹雪は困った顔で言ってきた。

だがこういう事は想定内、ドアブリーチ用の爆薬を持ってきている。

「吹き飛ばします」

「いきなり派手にいくのね」

「鍵を破壊するだけです」

爆弾を取っ手にかけて両脇に張り付くように指示した。

「破壊」

爆薬を爆発させドアを吹き飛ばした。

私と夕立が突入し、続いて吹雪達が来た。

「クリア」

「クリアっぽい」

「敵影無し・・・なのね」

施設内は少し薄暗く、薬品のような臭いがした。

「この臭い・・・なんか危ないお薬っぽい・・・」
「ですね」

「不知火さん、あつちに下に降りる階段が」

「了解、下に行きましょう。ハンマー1聞こえますか？」

《こちらハンマー1》

「我々は地下に降ります。そちらも上階の搜索が終わったら地下へお願いします」

《了解》

《こちらノーマッド61、撃墜された搭乗員を救助。目立った怪我は無さそうだ。これより周囲を警戒する》

《マジック了解》

へりが無事に救助を終えたようで一安心だ。

上空ではまだ突発的に空中戦が起きているようだ。

「地下施設って何か嫌な雰囲気なのね」

「そうですね」

「きつと捕らわれた女の子がエロ同人みたいな事されてるのね！」

「・・・」

「ぽい？」

夕立は分かかってないようだった。

「エロ同人みたいな事ってどんな事っぽい？」

「エロ同人みたいな事っていうのはね・・・」

「わー！わー！」

「吹雪、大声出さないでください」

「だ、だって・・・」

「敵がいたら・・・」

呆れ気味に前を向いた時だった、壁にチラツと銃口が見えた。

「コンタクト!!」

次の瞬間、敵が撃ってきた。

「伏せるっぽい！」

階段だったために逃げ場がない。

私は伏せる時に壁際に敵の姿を確認したので素早く反撃した。敵は壁の向こうにいるから当たってるのか当たってないのか分からない。

だが私が数発射撃した後に撃つてこなくなった。

「やったっばい？」

「分かりません」

私はゆっくりと階段を降りる。

下からは少しだがうめき声のようなものが聞こえた。

当たった？

「・・・」

階段を降りきって曲がり角に着く。

私は拳銃に持ち替えてゆっくりと出た。

そこには肩と足に被弾したヲ級がいた。

側には深海棲艦特有なのか異形のライフルがあった。

ヲ級は撃たれた肩を抑えて恐怖に染まった顔でこちらを見ている。

出血自体は大したことない。

「どうしましょうか」

私はそばにあった銃を蹴飛ばして遠くにやる。

ヲ級は歯をガチガチと鳴らせながら何も言わずに恐怖に染まった

顔で見上げてきていた。

私の銃口はずっと彼女に向いている。

「素直に言えば助けます、仲間はどこに居ますか？」

ヲ級は恐怖で喋れないのか涙目で震えながら首を振る。

「・・・そうですか」

銃を構え直して頭を狙う。

ほかの仲間の位置を知らないなんて有り得ない。

「素直に言えば助けると言っただんですが、聞こえませんでしたか？」

私はゆっくり引き金に指を掛けた。

その時いきなり羽交い締めにされた。

「やめてください！本気で怖がってます！」

「・・・敵に同情するんですか？」

吹雪だった。

私は冷たく言い放つ。

「私は約束しましたよ。素直に言えば助けると」

「でもこんなに怯えて・・・」

吹雪はヲ級を指さそうとした時だった。

ヲ級はさつき蹴飛ばした銃に手を伸ばそうとしていた。

夕立がそれに気づいてヲ級の腕を踏みつける。

「何してるっぽい？」

機関銃の銃口がヲ級を捉えていた。

「妙な真似は止めた方がいいっぽい」

「・・・イク、この子をヘリの位置まで連れて行ってください」

「り、了解なのね・・・ほら、行くの」

念のため手を縛って連れていく。

「吹雪はここでイクの到着を待ってください。夕立、行きます」

「了解っぽい！」

2人で先に進む。

少し調べたところこの施設は地下1階までしかないようだ。

「何かここ・・・変な臭いっぽい・・・」

夕立が一つの部屋を指さして言う。

確かになんだか変な臭いがする。

「よし、行きましょう」

ドアに鍵はかかってない。

中からは何かが動く音がした。

「突入」

ドアを蹴破るのと同時に夕立が先行して突入、続いて私が行く。

不意だったのか中にいた敵は満足に準備出来ていなかったようだ。

1人、また1人と撃って行く。

「クリア」

「クリアっぽい」

倒れているのは夕級や又級だった。

夕級が指揮官クラスだろうが、頭を撃ち抜かれて既に息絶えてい

た。

聞こうにも聞けない。

《こちらハンマー1・3階でこの研究所の責任者らしき男とその付き添いの深海棲艦を確保した!》

「了解」

辺りを見回すと何かのポッドのようなものが沢山ある。

ここがその深海棲艦の研究室なのだろうか。

「夕立、ポッドを開けられますか?」

「え・・・これあけるっぽい・・・?」

「当たり前です」

中身の事なんて想像したくもないが開けて中身を見るのも任務だ。

「中に何もありませんように・・・」

夕立は恐る恐るポッドのロックを解除して扉を開ける。

「う・・・やっぱり開けなきや良かった・・・」

中には何か半液体状の物が人の形を作ろうとしていた。

このポッド内で深海棲艦が作られていたのだろう。

「あれ?このスイッチって・・・」

夕立が壁に付けられたスイッチに気づいてそれを押した。

するの部屋の奥の壁が開いた。

奥には階段が見える。

「まだ地下がありますね・・・念のためハンマー隊の到着を待つて行きましょう」

「了解っぽい」

その数分後に吹雪と伊19が到着した。

「あの子の様子はどうでした?」

「ひどく怯えてたけど、怪我も大したことないし大丈夫なのね。そっちの航空機に乗せたの」

「了解しました」

《こちらハンマー、上階で確保したHVTをへりに乗せた。これよりそちらに向かう》

「了解。マジック、聞こえますか?」

《こちらマジック》

「舞鶴の部隊の到着予定は分かりますか？」

《もうあと10分ほどで到着予定》

「了解しました。到着後は施設周辺の安全確保を指示しておいてください」

《了解》

残弾を確認しているとイクが興味深々にポッドに近づいていた。

「このポッド・・・もしかして中身は・・・」

ジュルリと涎をすすする音が聞こえた。

たぶん中でR18なことを想像していたのだろうがそんないい話はない。

「中を見たら後悔しますよ」

「そんなに凄い事になってるの？」

「グロイ意味では凄いことになってますね。めちやくちや臭いですし」

「うえ・・・」

イクは汚いものにも触ったかのような顔をしてその場を離れた。

そんな事してるウチにハンマー隊も到着した。

「この下に新たな施設を確認しました、ここに突入します」
「了解」

「吹雪とイクはここでこの部屋の安全確保をお願いします」

「了解です！」

「では行きましょう」

ゆっくりと階段を降りていく。

下にはもう一つの扉があった。

これは電子ロックみたいだ。

「パスワードが無いとダメですか」

「ふむパスワードか・・・それならここにあるぞ」

ハンマー隊の1人がC4爆薬を取り出す。

それならこのドアを簡単に吹っ飛ばだろう。

「では扉から離れましょう、お願いします」

「了解」

鼓膜が破れそうになる爆発音を感じた。
下を見るとドアが無くなっていた。

「行きましよう」

素早く中に突入する。

その時、たぶん全員がその状況を信じられなかっただろう。

中には日本海軍の制服を着た男が立っていた。

階級は中将だった。

周りには鎖に繋がれた艦娘達がいた。

そして男の周りには取り巻きのように深海棲艦が。

男はまさか扉が吹き飛ばされるなんて想像もしてなかったんだらう。

こちらを見て硬直していた。

「なっ・・・!」

男が拳銃を抜く前に取り巻きの深海棲艦を撃つ。

私がある間に男に体当たりして押し倒した。

「クソッ! 離せ!!」

「動かないでください。じゃないと額でタバコ吸えるようになりますよ」

だが男は私を振りほどこうともがく。

拳銃のグリップ部分で男の鼻頭を思いつき殴打した。

「……………!!!」

鼻を抑えて声にならない悲鳴を上げていた。

「夕立、その周りの連中は何人か生かしておいてください」

「了解っぽい」

ハンマー隊の人は鎖に繋がれていた艦娘を解放していた。

私は男の胸ぐらを掴む。

「・・・胸糞悪いですね。今からあなたの歯を全部折って飲ませてやりたいですが生かしておいてやります。どうせ後で殺されると思いますすが」

「クソ・・・海軍の連中は昭和で頭が止まってると思ってたのに・・・」

「残念ですが、私達の司令官は元々アメリカの特殊部隊の人ですので
両手を縛ってハンマー隊に身柄を渡した。
捕まえた深海棲艦は夕級とヲ級だけだった。
他はみんな死んでいた。」

「拘束されていた艦娘達は大丈夫ですか？」

「何かひどく衰弱してるけどまだ何とかかなりそうっぽい」

「了解、回収のへりを要請しましょう」

証拠になりそうな書類や写真などを撮って外に出た。

く提督く

《マジックより全部隊へ。作戦の成功を確認した。敵の奇襲に警戒し
つつ帰投を開始せよ》

「ふう・・・一安心って所だな」

「そうですね・・・誰も怪我しなくて良かったのです」

「そうだな」

「にやつ!？」

電を抱き寄せて頭を撫でた。

「な、なんでいきなり撫でるのです!？」

「んー、何となく。強いて言うなら一安心したからかな？」

「そ、そうですね・・・」

電は顔を真っ赤にしていた。

その時不知火から連絡が入る。

《司令官、不知火です》

「聞こえるぞ。お疲れ様」

《はい。あの、報告なのですが》

「んなモン帰ってからすればいい。帰り道には気をつけろよ」

《いえ、緊急の報告です》

「ん？緊急?..」

何やら嫌な予感がする。

《施設内で日本海軍の将校を捕縛しました》

「捕縛？保護じゃないのか？」

《いえ、深海棲艦に協力している様子でした。まるで実験材料のように艦娘達が鎖で繋がれていました。》

「・・・嘘だろ」

《今、ノーマッド61に研究所の責任者といっしょに乗せて帰投中です》

「了解した」

「どうしたのです？」

「ちよつと不知火から深海棲艦について報告でな」

「もしかして製造方法分かったのです？」

「まあそんな所かな？電、ちよつと済まないが席を外してもらっても大丈夫かな」

「はい、戻っていい時に連絡してくださいなのです」

電はたぶん俺の嘘に気づいただろうが気にしないようにしてくれていた。

海軍の将校がなぜそんな所にいる・・・

俺は電話を大本営に繋げる。

「・・・」

《もしもし？》

「横須賀鎮守府だ」

《お！大佐か！どうだ作戦は》

「成功しました。あと報告なんですが」

《報告？》

「施設内で海軍将校を捕縛しました」

《なっ!?!どういう事だ!》

「分かりませんが、ただ深海棲艦と共に居て、実験材料のように周りには艦娘が鎖に繋がれていたそうです」

《・・・分かった、こちらでも調べてみる。この事は内密にな》
「了解しました」

電話を切った。

あのクソ野郎から全部吐かせてやる。

「ノーマッド、提督だ。聞こえるか」

無線機を取ってノーマッドを呼ぶ。

《こちらノーマッド61。感明よし》

「到着までどのくらいだ？」

《あと2時間弱です》

「了解。確保したクソ野郎は生きてるか？」

《少しボコった程度ですが生きてます》

「了解、まだ殺すな」

《了解》

無線機を置いて電にもう帰ってきていいと連絡した。

「顔を見たら殺しそうだ・・・」

深海棲艦の製造方法くらいなら別にこんな怒りは感じていない。

その開発責任者を連れてこられた所で普通に製造方法を聞いて終わりだ。

だが今回は話が違う。

身内が何故その場に居たのか。

何としても吐かせないと。

「司令官さん、入ります」

「あいよ」

「どうでした？」

「んー・・・まあ・・・」

「まあ何となく嫌な事あったって予想がつくのです」

「飛びつきり嫌な事だがな・・・」

ため息を付きながら電が入れてくれたお茶を飲んだ。

く2時間後く

へりの音が聞こえる。

ノーマッドが帰ってきた。

「ハンマー、研究所の責任者は別室で尋問しろ。クソ野郎は俺に渡せ」

「了解」

「くれぐれも条約に違反しないようにな」

「それは提督に言えますけどね」

そう言つてハンマー隊の隊員は研究所に居た科学者らしきものを連れていった。

「お前はこつちだ」

「離せこのクソツタレ！俺が誰だか分かつてんのか!!」

喚く中將を連れて倉庫に行く。

中にはジエームズが待っていた。

「こいつ?」

「そうだ」

「ふーん・・・」

「なんだよ姉ちゃん俺に尋問しようつてのか、ご褒美だな」

「軽口叩けるのも今のうちだ。今すぐ殺してやりたいがまだ生かしておいてやる事に感謝しろ」

きつと今の俺は電が見たら泣きそうな顔をしているだろう。

中將を椅子に縛り付ける。

「お前・・・俺は中將だぞ！上官にこんな事していいと思つてんのかクソツタレ！」

「うるせえんだよ」

思いつきり腹を蹴飛ばす。

「司令官、私がやるから帰つてていいよ」

「そうか・・・任せた」

「オイ！お前は自分の手を汚したくないからつて女の子に尋問させるのか！」

俺はそんな罵声を受け流しながら倉庫を出た。

代わりに保護された艦娘達を受け入れる準備をする。

とりあえず執務室でお茶でも出してやろう。

そう思いながら執務室へ向かった。

尋問

捕虜の収容も終え、一息ついた。

電はその間に保護した艦娘達の名簿を持ってきてくれた。

「駆逐艦春雨、村雨・・・軽巡球磨・・・あと空母翔鶴と瑞鶴か」
ずいぶん沢山と・・・何しようとしてたんだ本当に。

その時、電話が鳴った。

「もしもし?」

《大佐、調査結果なんだが》

「え、早・・・」

まだ調査すると言って3時間も経っていない。

《ヤツは大本営内部の人間だ。しかも前から艦娘を売春目的で色々やったりしてたらしい》

「なんでそんなのが中将になれるんすか・・・」

呆れ気味で言う。

《証拠が無かったんだ。艦娘も他の鎮守府から拉致ってきたらしい。しかもまた何人かで協力して自分たちに従うようにしてきたとか》

「エロ同人かよ」

《とにかく、容赦しなくていい。ジュネーブ条約も気にするな》

「それ上がいう言葉じゃないですけどね」

《あと深海棲艦に協力していた話は何としても聞き出せ、その後は火炙りにしようが鋸引きにしようが構わん》

「ここは中世のヨーロッパか・・・まあいいや了解しました。」

《頼んだ。ヤツの経歴はトンツォーで送る》

「だから何自然にトンツォーで送ろうとしてんだアンタわ!!」

《じゃあ・・・LINEで》

「この前同じ事言ったよね!?情報保全って言葉知ってるだろうがオツ
ライン!!」

《すいませんでした・・・車で送るので許してください・・・》

「そうしろよ!!」

そうやって乱暴で電話を切った。

「あーもうちくしょう・・・んで、保護した艦娘達の状態は？」

「えと・・・春雨さんと村雨さんの衰弱が酷いらしくて・・・命に別状はないそうなのです」

「そうか・・・了解」

「なんでこんな酷いことを・・・」

電の声は震えていた。

たぶん怒っているんだろう。

「1発引っぱたかないと気が済まないのです！」

電はどこから出したのか魚雷を振り回していた。

「爆発したら危ないからやめようか・・・」

「あーもう頭に来るのです！」

「それは同じだよ」

電は怒りながら残りの仕事のために部屋を出ていった。

あと10時間程度で不知火達が帰ってくる。

くネイサン・ジエームズく

「はあ・・・罵るのもいいけどいい加減吐いてくれないかなホント。疲れるんだよね」

「このクソアマが！誰がお前何かに！」

「もうさ、早く殺したいから喋ってくれない？」

「殺す気かこの野郎！やって見ろよ！ジュネーブ条約違反だぞ!!」

「何自分の権利だけ主張してるの？」

中将は鼻血垂らしながら必死に暴言を吐く。

まるでいきがっているヤンキーみたいだ。

「アンタ本当に自分の立場分かってる？」

「分かってないのはお前だ！俺を誰だと思ってる！海軍中将だぞ！」

「だから？ウチの提督はそんなの気にしないし私はその命令に従ってるだけ」

「この野郎！この国に居られなくしてやる！」

「アンタはこの世に居られなくなるけどね。まあいいや吐かないん

だったら用はないって司令官に言われてるし」

「おう！だったら早く殺せよ！お前俺のバックが分かってんのか！」

「へえ、バックって何？」

自分で墓穴を掘った。

協力者がいるような事を自分で言ったのだ。

「……」

「なんで急に黙るの？バックがいるんでしょ？早く言ってよ」

「……そんな事言ってる」

「アンタ幼稚園児？録音してあるってバカでも気づくでしょ？」

私はボイスレコーダーの録音を止めて再生する。

ボイスレコーダーは呼びで4つほど持っているから一つくらい問

題ない。

「これで言い逃れ出来ないね」

「……俺が死ねば終わりだ」

「で？自殺でもするの？」

さつきまでの威勢がどこかに行ってしまった。

「まあ提督から自殺だけは避けて言われてるんだよね」

私は歯医者なんかにある口を強制的に開けさせる器具を取り出した。

「ちよつとお口開けて貰えるかな」

「……」

「開けろっつってんだろ」

私は思いつきり鳩尾を殴る。

「かはっ……！」

一瞬のスキを見て口にそれを入れた。

「あが……」

「私が殴らないって思った？残念だったね」

そしてペンチを取り出す。

「じゃあ今から歯医者さんごっこでもしようか。患者さんいっぱい虫歯あるから治療しないとね」

今の私はどんな顔をしてるのだろうか。

たぶんひどく歪んでいると思うが。

「痛かったら手を上げててくださいいねー」

中将の顔はこれから何されるかを理解して恐怖の色が見える。

「話したくなったら頑張ってジェスチャーしてくれたりいいよ」

私は頭を無理やり固定して口にペンチを突っ込んだ。

中将は声にならない悲鳴と止めろと必死に叫んでいた。

「とりあえず・・・この歯からいこうか」

「あがああああ!!!」

「結構硬いな」

倉庫に悲鳴が轟く。

私はゆっくりりと歯を引き抜いた。

「んがああああ!!!」

「あー・・・うるさ・・・んで、吐きたくなった?」

頭を離すと泣きながら頷いた。

「ちなみに歯はまだ10本以上残ってるから」

私はまだやる気なのは相手にも伝わっただろう。

「ちくしようこの悪魔め・・・」

中将は泣きながら罵ってくる。

「悪魔でも何でもいいから早く言ってくれないかな・・・こつちも疲れるんだよね、オッサン暴れるから押さえなきゃいけないし」

「クソ野郎が・・・何が知りたいんだよ・・・」

「ようやく話す気になった?あそこで何をしたのか、それが知りたいんだってさ」

「なんでお前は投げやりな感じなんだ」

「捕虜の尋問なんて面倒臭いんだよね、それに今回は相手が相手だから殺したくて仕方ない気持ち押さえてるの。分かる?」

「・・・」

中将は私の言葉を無視して話出した。

「あそこには深海棲艦に艦娘のデータを学習させるためにいた」

「学習ね」

「まあ後は個人的な趣味だ。深海棲艦が艦娘を調べる時が好きなだけ

だ。可愛い女の子が異形に全身くまなく調べられるってそそるだろ」
「とんだド変態だね」

「それにそのビデオを売ればいい小遣い稼ぎになるんだよ」

「そういう下らない理由で私たちの仲間を敵に売ったんだね、余計殺したくなった」

「・・・何とでも言え。で、もういいだろ。刑務所にぶち込むなり何なりしろ」

「まだ質問が残ってるよ」

「なんだ」

バックにいる協力者の話を聞けていない。

「バックの話しやべってくれない？」

「・・・」

それだけは言いたく無いらしい。

「ねえ、それ言ってくれるまで楽になれないよ？」

「言うかよクソツタレ」

「強情だなホント・・・」

私は司令官から渡された護身用の拳銃と別に持っていた22口径の拳銃を取り出す。

「おい、殺すのか。司令官の命令は無視かよ」

「別に殺さないけど？」

私は薬室に初弾を装填する。

「じゃあ脅しか。拳銃程度でビビるとでも思ってるのか！」

「ねえねえ、一生歩けなくなるってどう？」

「な・・・どういう・・・」

私は膝に向けて弾倉の弾丸全てを撃ち込む。

「うがあああああ!!!」

「うわあ・・・グッロ・・・」

「あ、あああ・・・!」

頑張れば治るかも知れないが何かしら障害が残るだろう。

それにしてもなかなか口を割らないってすごいな・・・

「ちくしょう殺してやる・・・殺してやるこのクソアマア!!」

「おー怖い怖い、オッサン元気だねえ」

呆れたように言いながら次の弾倉を装填した。

「ねえ、アンタのバックにいる人ってさ、この痛みを耐えてでも喋っちゃダメな人なの？」

「………」

「素直に答えるならまだ生かしておいてあげるかも。家族だつていでしょ？」

「………」東京に妻と子が……」

「また会いたいでしょ？じゃあこんな所で死んでいいの？」

「………」

「正直に話せばもう1度は家族に会えるよ。さよなら位言えるんじゃない？」

中将は黙ったままだ。

「そりゃさ、ずっと家族と暮らしたいって気持ちも分かるけど自分のやった事の大きさくらい理解してるよね？国を売ったのと一緒だからね」

私は少し落ち着くためにタバコを啜えて火をつける。

「1本吸う？」

「………」タバコは止めた」

「そ、ならいいや。正直アンタがここから解放されたらどうなるか分かる？」

「………」

「ここよりもっと酷い目にあうと思うよ。ウチの海軍の上つて脳みそ昭和で止まつてるの知つてるでしょ」

こういう情もかけれないような捕虜相手になるるか分かったもんじゃない。

CIAと同じくらいキツイ目に会うだろう。

「あ、そうだ。もう一つ聞きたい事あった。これは簡単に答えられるよね」

「なんだ……」

「なんで深海棲艦なんか協力するの？金のため？」

「違う、そんな下らん理由じゃない」

「変態ビデオ撮って売るのは充分下らん副業だと思うけど」

「それは趣味だ」

「・・・変態」

「何とでも言え。俺が深海棲艦に協力するのは海軍に復讐するためだ」

「なにそのありきたりな理由。もっとひねりなさいよ」

「聞いたのお前だろ。俺は昔、提督をしてた時に艦隊を全てを沈められた。上の無能な作戦のせいで」

「ふーん・・・」

「あの馬鹿共は敵機動艦隊撃破の命令を出した。命令書には偵察写真があつたよ、1週間以上前の。」

「今も昔も変わらないねえ・・・」

ウチはいつもその情報の遅さに司令官がキレてるが。

「当時は何も疑問に思わず出撃させた。だけどそこにいたのは機動艦隊と戦艦隊の連合艦隊だった」

中将は苦い顔をして続ける。

「そもそも司令部の偵察機が写した写真では解像度が低くてほとんど分からなかったそうさ。そこに機動艦隊だけが単体で動いている、今だよ。つづつけると言わんばかりに命令を出した。それも写真が送られてきて解析が終わり進路を割出してからだ」

「・・・まあ、大体分かったよ。その命令通りにしたら全滅したと」

「そうさ。だから俺はアイツらを許さない」

「それが何の罪のない艦娘達の売春目的の人身売買と何が関係あるの？艦娘のデータを調べさせるのはまだ分かるけど」

「単なる金稼ぎだ」

「そ、まあいいわ。それで話戻すけど。バックについて教えてくれる？」

「・・・」

「それは喋りたくない・・・」

「・・・分かった」

「それでいいよ」

「ただ俺を殺す前に家族に合わせてくれ。お前の目の届く所でいい」
「殺すって決めた訳じゃないけどね」

「俺の協力者は陸軍の連中だ」

「海軍と仲悪いつて聞いたけど」

「アイツらの所に女っ気が無かった、それだけだ。金だと足が簡単に着くかも知れないからな」

「艦娘拉致ってる時点で大分簡単に足がつくと思うけど・・・」

「拉致ってるのは陸軍の連中だ。俺は知らん」

「あ、そ・・・」

呆れてきた。

「で？まあ売春組織みたいなのは分かったとして、深海棲艦までのルートは？」

「それは深海棲艦側からコンタクトを取ってきた、日本の連中は関係ない」

「じゃあ関係あるのは陸軍？」

「そうだ、1人は俺と同じ中将だ。あとは若い幹部が数人だ」

「了解、ありがとう。とりあえずまあここまで喋ってくれたらこれで良いかな」

「殺すのか？」

「まさか。あんたの話が本当かどうか確かめてからじゃないと。何？もう死にたいの？」

「・・・」

「もしかして私が優しく話しかけたからって気を緩めた？残念、今もアンタを殺したくて仕方ないよ」

私は捨て台詞のようにさっきの膝に向けてもう1発撃ち込んだ。

「ウギヤアッ アッ アッ アッ!!!」

「アメとムチってね。いや、飴と22口径？」

苦しむ中将を後にして倉庫から出る。

ついでに衛生班に中将の治療を任せた。

私はケータイを取り出して司令官に電話をかける。

「もしもーし」

《ああ、ジエームズか。どうした》

「ある程度吐かせたよ。確認してほしい事いっぱいあるんだけど」

《了解、お手柄だ》

「じゃ、ご褒美はキューバ産の高級タバコでいいよ」

《それは仕事が終わったからだ》

「ほーい。とりあえずちよつと返り血とかついて気持ち悪いからシャワー浴びてから司令室行くね」

《了解、じゃあまた後で》

そう言つて電話は切られた。

外の天気は今にも雨が降りそうだ。

く提督く

ジエームズから送られてきた情報を確認する。

・・・上層部の汚職か・・・

ついでに中将の経歴にも目を通す。

「・・・上のミスで艦隊を全滅・・・そこから本部勤務になるが非行が散見される・・・か」

同情したいがやつてる事のせいでそんな事出来ない。

もしこれが単なる復讐のために深海棲艦に情報を売ったくらいならまだ同情も出来る。

だが他人が愛情を込めて育て上げてきた艦娘を誘拐して自分好みに調教して売春するなど同情すら出来ない。

「どうしたもんか・・・」

コイツの元の所属は陸軍か・・・んで協力者の陸軍中将が同期と・・・電、すまん。お茶もう一杯貰えるかな」

「お安い御用なのです！」

「さんきゅー」

電が持ってきたお茶を啜っていると保護した艦娘の1人の翔鶴がやってきた。

「あの・・・」

「お？ああ、翔鶴か。災難だったな。大丈夫だったか？」

「お陰様で・・・妹共々無事です」

「なら良かった。所属鎮守府は覚えてるか？」

「いえ・・・私たちの鎮守府はもう・・・」

「襲撃でやれたか・・・」

「はい・・・」

そういえばつい最近、小規模の襲撃で派遣隊がやられたという報告を聞いた。

そこの所属か。

「全員その所属か？」

「はい・・・全員まだ新米提督の所に配属予定でした・・・」

「・・・そうか」

確か、艦娘2隻撃沈、提督は戦死という報告が出ていた。

その時に捕まったか。

でも確かあの派遣隊の移動は極秘だったはず。

あの中将が情報を流したのか・・・それなら話の辻褄もあう。

「まあ、行くところがないならウチで過ごせばいい。部屋はちよつと時間がかかるが許してくれ」

「大丈夫です、あそこに比べたら・・・」

「・・・この執務室を自由に使ってくれ。布団は・・・電、余裕あったっけ」

「えっと・・・備品庫に確かいっぱいあったはずなのです」

「了解、んじやここに布団敷いとくか」

「了解なのです！翔鶴さん、お茶どうぞなのです」

「あ、いえ・・・私はすぐに・・・」

「まあ飲んでいけ、遠慮しなくていいさ」

翔鶴は恐る恐る椅子に座って電の出してくれたお茶を飲んでいた。

「さて・・・あのオッサンどうするか・・・」

「本部の人達は来ないのですか？」

「たぶんそのうち来るだろう」

ただ処分はそちらでやれと言われたために来ないかもしれない。

「まあ、ジエームズから詳しく聞けば大丈夫か」

何て呟いてるとジエームズが入ってきた。

何故か私服だ。

「なんで私服・・・？」

「いやー、洗濯したら他に着る服無くてね。まあ司令官なら私服でも何も言わないかなって思ってた」

「お前・・・まあいいや・・・」

「ところでそこのお姉さんは保護した子？」

「ああ、翔鶴」

「よろしく願います」

「うん、よろしく」

ジエームズは笑顔で挨拶した。

「それでまず、一応さつき簡単には伝えただけど詳しくは言っていないよね」

「まあな。どうだった？」

「まずまずかな。餉と22口径が効いたみたい」

「餉と22口径って何・・・？」

「ひ・み・つ」

「可愛らしく言っても少しだけ中身予想出来るから全然可愛らしくない」

同情する気はないが・・・南無。

「それで、深海棲艦に協力した理由は単に海軍への復讐なんだってさ。上が無能で艦隊が全滅したらしいよ」

「なるほどな・・・」

「あと、さつき伝えただけど拉致ってるのは陸軍の仕業で必要な情報を伝えてた。これは陸軍とつ捕まえて聞いた方が早いかな」

「そうだと思ってる知り合いの陸軍大佐に連絡取ったよ。特殊作戦群が確保に向かうんだと」

「陸軍は仕事早いねえ・・・」

「まあ、海軍よりは現代的な考え方してるからな・・・」

それしても特殊部隊動かすかね・・・

連絡取った時は大佐大激怒してたからな・・・

「んで、他には？」

「艦娘をあの場合に居させたのは深海棲艦に艦娘について学習させるためだったんだって。でもそれは翔鶴に聞いた方が早いかも」

突然話を振られて翔鶴は少し困惑していた。

「んく・・・まあ言いたくなかったら大丈夫なんだがあそこで何されたか教えてくれるか？」

「・・・」

翔鶴は少し悩んでいた。

思い出すのも嫌な事だってあるだろう。

「・・・お話します」

「喋れるところだけでいい。無理はしなくていいんだから」

「・・・はい」

「とりあえず軽い質問なんだが、あそこにどのくらい居た？」

「えと・・・たぶん一ヶ月は・・・」

「・・・一ヶ月もか」

「はい・・・とにかくその・・・」

翔鶴は口ごもる。

「ごめんさなさい・・・あの・・・そちらの方にだけ話していいですか？」

「ん？ああ、いいぞ」

翔鶴はジェームズに話を聞かせていた。

同性にしか言えない事って・・・

いや待て俺。邪な考えを生むんじゃない落ち着け。

何かを察した電が笑顔でこっちを見てるんだ。

これはあれだ。違う。

「司令官さん？」

「はひい!？」

「な、何をそんなにビビってるのです!？」

「いや、あれだ。違うから。エロ同人みたいな事期待してないから」

「・・・？」

「違うぞ、そういうのはエロ同人の中でしか起きてないって知ってるから大丈夫だぞ！」

「あの・・・何かよく分からないんですけど・・・とりあえず落ち着くのです！」

なんて俺がパニックしているとジエームズが冷たい声で・・・

「司令官、ちよつといい所だから静かにしてくれない？」

「いい所ってなんですか!？」

「あ、失礼。違うよ、私別にそんな邪な事想像してないから」

「・・・」

翔鶴は顔を真っ赤にして俯いていた。

「・・・ジエームズ・・・こつち来い」

「嫌だ」

「嫌だじゃねーよ！」

「あ、あの・・・もういいですか・・・」

「えー・・・もうちよい！」

「もうちよいじゃねーよ！お前人の不幸な話聞いて何してんだ！」

「司令官だつて内容想像してるクセに」

「うっさいわ！」

俺とジエームズの口喧嘩を見て翔鶴が少し笑っているのに気づいて少し安心した。

あんな事があつた後だ、こうやって少しでも安心してくれるとありがたい。

ちなみに状況に察しのついた電さんは笑顔で若干青筋が額に浮かんでいる。

怒ってらっしやる。

「司令官さん？何を想像したんですか？ナニを？」

「いやアレだから！これは健全なだな！」

「健全なつて事は今認めたね」

「ちくしょうこの野郎！誘導尋問なんて卑怯だぞ！」

「いや、誘導尋問なんてしてないし勝手に自爆しただけだよ」

「司令官さんちよつとこつち来てくださないのです」

「・・・はい」

部屋の隅に呼ばれて観念してそこに行く。

「司令官さん・・・ダメなのですよ、翔鶴さんだって怖い思いしたのにそんな変な事想像したら」

「ホントすいません・・・」

「司令官さんが健全な人って言うのは分かりますけど、口に出したらダメなのですー!」

「申し訳ございませんでした・・・」

「ちゃんと相手の気持ちを考えるのです!」

「ごめんよ母ちゃん・・・」

「母ちゃんってなんなのです?!」

とりあえず解放してくれた。

電が死んだ母ちゃんに見えてきた・・・

「あー・・・そうだ。翔鶴、これで瑞鶴と間宮で甘い物でも食ってこい」

俺は財布から一万円札を取り出して渡した。

「い、一万円も貰えませんか!」

「いいんだよ。てか今手持ちが万札しかないからな、まあそれで好きなもの食べて売店で何か買ってもいいし好きにしろ」

「・・・ありがとうございます」

翔鶴は一万円札を丁寧に折りたたんでしまった。

「さて、とりあえずここをアイツらが寝れるようにするか」

「そうですね、お布団探してくるのです!」

「お、頼んだぞ」

「じゃあ私はこの辺で」

「おいコラ、手伝え」

「私今日仕事して疲れたんですけど」

「布団敷くだけだから手伝ってくれ」

「はあ・・・じゃあキューバ産タバコ2箱ね」

「増えた!?しかも尋問と同じ報酬かよ!」

「ほら、可愛い艦娘の頼みでしょ」

「この野郎・・・ああもう分かったよ、それで良いから手伝ってくれ」

「約束だよ」

ジエームズはそのまま電を追って外に出た。
俺は机やソファアールをどかした。

「はぁ・・・」

疲れなのか何なのかため息が出た。

アメリカ艦とロシア艦の休日

くネイサン・ジエームズく

ものすごく腹立つ。

私はいつにも増してイライラしながら街を歩いていた。

今私は停職という懲戒処分を食らっていた。

私があの中将に対してやり過ぎだと言うことを後から捜査のために来た警察から怒られた。

「はあ……」

私は海沿いの公園にあるベンチに座ってため息を着く。

停職という処分をくらってはいるが提督はこんなの形だけの処分だから休暇だと思つて外出とかしてもいいと言つてくれた。

それでも処分を食らつたことに納得いかない。

「このままどっか行こうかな……」

なんてボケーっと思ひながらベンチに座っていると突然声をかけられた。

「あ、あの……えつと……」

「ん？」

声の方を振り向くと鎮守府の中で見たことある顔がいた。

名前は知らないけど。

「どうしたの？」

「え、えつと……ネイサン・ジエームズさん……？」

「そうだよ。で、そっちは？」

「ア、アドミラル・クズネツォフです……」

「あー、前提督がロシア艦娘が居るって言つてたの思い出したよ。今日は休みなの？」

「は、はい、えつとジエームズさんも見かけたので一緒にお買い物とかどうかなくて……」

クズネツォフは顔を真っ赤にして必死に話しかけてきていた。

私は何だかそれがとても可愛く思えて今までイライラしてた事もアホらしくなってきた。

「いいよ、暇だったし。それでなんでもう一人は隠れてるの？」
私が奥の自販機に隠れている艦娘の方を見た。

「うひゃあ!?!ば、バレてた・・・?」

「あんなにチラチラ見てたらすぐ分かるけど・・・どうしたの?」

「い、いやその・・・」

「ヴェリーキーもこっち来るです」

クズネツオフが手招きしていた。

「うゝ・・・」

ヴェリーキーと呼ばれた子は渋々こっちに来た。

ヴェリーキー・・・どっかで聞いたような・・・

少し考えて思い出した。

キーロフ級の艦娘か。

「ぼ、僕はピョートル・ヴェリーキーです、あのキーロフ級が苦手って聞いてたから・・・」

ヴェリーキーは少し怖がっているようだった。

「あー、その話か。あはは、別にキーロフ級皆が嫌いな訳じゃないよ」「そ、そうなの?」

「うん、まあ昔嫌な事があってね。それで、お買い物行くんでしょ?」

「あ、そうだった!クズネツオフの私服を買いに行くんだっただ」

「へえ、じゃあ私もついでに買おうかな」

「はい、みんなで行くです!」

そう言って3人で近くのショッピングモールに歩く。

私はいつものジープンに上はシャツと薄手のミリタリージャケットだったからたまには女の子らしい服を買ってもいいかな。

マーフィにもせっかくだからオシャレしろって言われてたし。

「そういえばジェームズさんって、いそかぜ たちと同じで僕達とは別の世界?の船だったっけ」

「普通に呼び捨てでいいよ。私はそうだね、いそかぜ達の事をよく知らないから分からないけどね」

「もし嫌じゃなかったら聞いてもいいですか?」

「うん、いいよ」

特に面白い話でもないが・・・
何て話しながらシヨツピングモールに向かつていった。

（提督）

「大丈夫かな・・・」

「どうしました？」

「いや、ジエームズの事なんだがな・・・」

「ジエームズさんメンタル強そうですね？大丈夫じゃないですか？それよりも隊長、今日はヴィンセンスさんとペリーさんの訓練日でしたね」

「ああ、対空戦闘訓練だな」

今日は電達は輸送船団護衛に出ていて秘書がアンドロメダだ。

「そういえば結果つて出ました？」

「ん？結果？」

「この前の作戦で色々資料とか回収したじゃないですか」

「あー、それはまだだな」

何て話をしていたらタイミング良く情報班の人員が入ってきた。

「失礼します」

「はいよ、お疲れ様。どした？」

「はい、この前の調査結果が出ましたので」

「お、ご苦労さん。ちょっと目を通して聞きたいこととかあるからこのソファアに座っててくれるか？」

「あ、はい。ありがとうございます」

「アンドロメダはお茶か何か出してやってくれ」

「はい、了解しました」

俺は資料に目を通す。

回収されたサンプルから深海棲艦の体は人間と同じらしい。

またその生態データは人間の女性のものだった。

艦娘のデータは主に兵装などだった。

そしてその生態データの収集は各地で拉致した人間のデータを集めてより理想的な身体能力を採用しているとか。

そして俺はもう一つ気になる文章を見つけた。

深海棲艦が拉致した人間とその人間のデータから作り出した深海棲艦を入れ替える実験をしているというものだ。

「これなんの意味があるんだ・・・」

俺はボソツと呟く。

意味不明だった。

軍の上級者を入れ替えるなら理解は出来るが一般人でしかも拉致されている被害者の平均年齢は18歳から21歳程度の少女だ。

「そういや、前に同じことあったけど何か新しい情報とかあるのか?」

「いえ、特には。ただ、この前の艦娘誘拐グループの連中はまだ捕まっていないそうぞ」

「まだ逃走中か・・・」

「はい、特殊作戦群が現在追跡中です」

「了解、とりあえず何か新しい情報があったら頼む」

「了解しました」

そう言つて敬礼して出ていった。

そういえばジェームズとあとクスネツオフ達が外出中だったが・・・大丈夫かな。

ジェームズはたぶん捕まりそうになったら逆に相手をボコボコにしてソイツ攫つて身代金要求しそうな勢いだが・・・

「隊長なんか今ものすごく失礼な事思つてませんでした?」

「そんな事はない」

「ジェームズさんなら相手をボコボコにして逆に誘拐して身代金要求しそうって思つてそうでしたけど」

「なんで分かるの!?!」

「付き合いの長さだけでいえば電さんより長いですから」

「思えばそうだな・・・それをいえばこの中で俺と付き合いが一番長いのはケストレルだな、アイツの就役の時も上で援護に回ってたからな」

なんて思い出話に浸っていた。

くネイサン・ジエームズく

「え、えつと・・・それを着るの・・・？」

クズネツオフが自信满满々で出してきた服はまさに女の子って感じのフリフリの服。

「ジエームズさんなら似合うです！」

「クズネツオフってこういう時元気だよねえ・・・」

しかしここで断るのも申し訳ない。

私は苦笑いで試着室に入った。

「私のキャラじゃないよね・・・」

「何を言うのですか！ジエームズさん、茶髪でセミロングなんて私が襲いたいくらい可愛いです！」

「そういうえばクズネツオフは髪フェチだったね・・・あはは・・・」

外ではヴェリーキーの苦笑いする声が聞こえる。

「切るの面倒くさくてほったらかしてるんだけどね・・・」

自分の髪を触りながら呟く。

正直、ショートにしたいがマーフィが物凄い形相で断固拒否してくる。

黙って切ったら何があるやら分からない・・・

なんて思いながら服を着た。

「・・・タバコ・・・やめようかな」

自分でもビックリするくらい似合っていると思った。

ただしそこにタバコが無ければだが。

薄めの紺色のスカートに紫色の内着、やたらフリフリのカーディガン。

「私も何も無ければ・・・こうやって普通の女の子みたいに楽しめてたかな・・・」

私はたぶんアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦の中でも実戦経験豊富なほうだろう。

それに核攻撃を間接的に受けた事すらある。

「着ましたか？」

「え、あ、うん。着たよ」

するとカーテンが開けられる。

「ふああああ！可愛いです！ジェームズさん可愛いです！」

「か、可愛いって2回も言わなくていいから……」

たぶん少し顔が赤くなってるかも知れない。

言われ慣れてないから……。

「ク、クズネツオフを見たことないくらい生き生きしてる……」

「このまま買って着て帰りましょう！」

「え!?!このまま!?!」

「ここのお店、店員さんに言ったら大丈夫らしいですよ」

「え、ええ……」

クズネツオフはキラキラした目でこつちを見てくる。

やめろ。私をそんな目で見るな。このまま拒否することに良心が痛むから。

「わ、分かったよ……」

「じゃあ店員さん呼んでくるです！」

そう言つてクズネツオフは店員を呼びに行った。

「クズネツオフっていつもあんな感じなの？」

「い、いや……今日ほど生き生きしてたの見たのは僕も初めてかも……」

「そうなんだ……」

ヴェリーキーは苦笑いで店員を連れてきているクズネツオフを見ている。店員はそのまま服のタグを切ってくれ、値段を書いた紙を渡してきた。

私達はそれを持ってレジに並ぶ。

「そういえば、クズネツオフ達も買ったの？」

「僕は付き添いだから何も買ってないよ、クズネツオフは何か買ったの？」

「うへへへ……今日はもう可愛いジェームズさん見れたので私は満足です……」

「……この子やっぱいつもこうなの？」

「・・・今日が特別だと思う・・・」

クスネツオフは何も買っていないがとりあえず幸せそうな顔をしていた。

「それで、この次はどうする？」

「お腹空いたしどこかでご飯とかどう？」

「私も同じです！ジェームズさんはどうです？」

「じゃあご飯にしようかな、今日はこうやって服も選んでくれたしご飯奢るよ」

「え、わ、悪いよ」

「いいよ、私そこそこお金持ってるし」

「じゃあお言葉に甘えて・・・」

「イタリアンなご飯が食べたいですお姉様！」

「お姉様!?!」

私とヴェリーキーがハモった。

「ジェームズさん可愛くてカツコイイので私の理想のお姉様です！」

「ぼ、僕はダメなのか・・・」

何故かヴェリーキーがダメージを負っていた。

「えっと・・・お姉様・・・か」

私はちよつと艦だった時の事を思い出す。

私はアメリカ海軍のミサイル駆逐艦。

彼女はソ連の重航空巡洋艦。

何だか複雑な気持ちだが、彼女は無邪気な目でこっちを見てきていた。

「うん、いいよお姉様で」

「いいの!?!」

「悪い気はしないからね」

「えへへー、お姉様ー！」

「・・・何だこれ」

側でヴェリーキーは微妙そうな顔をしていた。

とりあえずやたらとクスネツオフに懐かれた。

私達はレストランを探した。

「ねえヴェリーキー、クズネツオフって艤装を付けると性格変わるって聞いたけど」

「うーん・・・そうだね、なんか本当に機械みたいになるよ」

「・・・それが今じゃこれか・・・」

私の右腕にべつとりとくつつき、お姉様くとか言いながら頬ずりしてきている。

なんだこの可愛い生き物は。

「あ、こことかいいんじゃない?」

ヴェリーキーがある店の看板を指さす。

そこは1000円でピザ食べ放題の店だった。

「ここいいね、ここにしようか」

そう言っって店内に入る。

「みんな食べ放題でいい?」

「ごめんね、奢らせちゃって」

「いいよ、私も今日は楽しませてもらったお礼だよ」

「お姉様ー、今度また3人で外出したいです!」

「うん、また今度ね」

「あはは、すっかり懐かれてるね」

「慣れてみると結構可愛いよ」

「うー・・・僕にはこんなに懐かないのに・・・」

「へへ、アメリカ駆逐艦に負けた気分はどう?」

「あー!なにそれ酷いなー!」

「あはは、冗談だよ。とりあえずドリンクバーも頼んだし何か飲み物取りに行こう」

「お姉様のは私が行くです!」

「え、いいよ、自分で行くから」

「私じゃダメですか・・・?」

何故かクズネツオフは涙目で見てくる。

「そ、そんなに行きたいの・・・?じゃ、じゃあコーヒーお願い」

「かしこまりです!」

「クズネツオフ、行こっか」

ヴェリーキーに連れられてドリンクバーに向かっていた。

「小動物か何かなあの子……」

私も身長が高い方では無いが、ヴェリーキーが160cmくらいでクズネツオフは150もないくらいに見える。

「全く提督もこんな子達に囲まれて幸せだねえ……」

私はそんな独り言を呟いて2人を待っていたら1分もしないくらいで帰ってきた。

「ありがとう」

「いえ！お姉様のためです！」

「一瞬で物凄い懐かれてるね……」

「自分でもビックリだよ」

私はコーヒーを飲みながら一息ついた。

「そういえば、お姉様に聞きたいことあるです」

「ん？なに？」

「その、前に言ってたジェームズの知ってる世界とここの世界が違うって話聞きたいです」

「あー、それね。うん、いいけど面白い話じゃないし特にヴェリーキーには辛い話もあるかもだけど」

「僕は大丈夫だよ」

「そっか、じゃあどこから話そうかな……」

私はまず、私が世界で最後の希望だったという話から始めた。

「ウイルスが蔓延、世界は世紀末……でも私にはその病気を治す手段を作れる希望があつたんだよね」

「希望です？」

「うん、その病気を研究するウイルス学者とそのウイルスの原子株って言うのが手に入ってるね。そのせいなのか私自身、医療とかはお手の物って感じなんだけどね」

「ということはお姉様はお医者さんですか？」

「まあそんな感じかなー、免許もないから簡単な治療とかしか出来ないだろうけど……」

そして私はキーロフ級に襲われた話やイギリス潜水艦に襲われた

話などをした。

「まあこんな感じかな」

「お姉様・・・結構大変だったんですね・・・」

「うーん・・・まあね」

「そういえば僕の姉妹にヴェルニなんて居ないからちよつと安心かな」

「もしこの鎮守府に居たら喧嘩してるかもね」

私は笑いながらそんな事を言った。

そんなことをしてるうちに頼んだ一枚目のピザが来た。

「本格的だね」

「おいしそうです！」

「じゃあジエームズさん、いただきます」

「うん、クズネツオフも言ってるしまた3人で出掛けよつか。あ、でも今度はマーフィも連れてきたいな」

「僕は大歓迎だよ」

「マーフィさんはお姉様のお姉様ですよ、挨拶するです！」

「いやクズネツオフ・・・結婚するわけじゃないんだから・・・」

「結婚ダメですか・・・」

「本気なの!?!」

私もピザを吹き出す所だった。

たぶんその話を聞いたら提督はこれ以上レズカップル増やすのやめてくれて泣きながら言ってきたそうさ。

「でも私はお姉様と結ばれる為ならどんな障害も乗り越えるです！」

「・・・ヤバイ、本気だこの子・・・」

ヴェリーキーは真正面で頭を抱えていた。

「あ、あははは・・・」

私は何かもうどうにでもなれという感じの笑いが出ていた。

5月のある日

5月なのにもう暑い。

心の中で嘆きながら鎮守府を巡回していた。

今日は第六駆逐隊は演習で秘書をネイサン・ジェームズに任せていた。

「これ終わったらアイスでも食いに行くか・・・」

「アイスねえ・・・冷たいビールのほうが私はいいかな。あとタバコ」

「そこは可愛らしくアイスで喜べよ」

「・・・わーい！私アイス大好きー！提督さんカツコイイ☆」

ジェームズは普段のキャラ・・・というか初対面の時のキャラを更にぶりっ子にしたような感じになった。

たぶんコイツの事を何も知らなかったら可愛いと思えただろう。

というか額に青筋が浮かんでる。

あと視線に殺意を感じる。

「誰がそこまでしると言った・・・あと怖い」

「可愛い女の子に向かって怖いとは聞き捨てならないよ」

「拘束した人間の膝に22口径とは言え10発以上の弾丸ぶち込むヤツのどこが可愛いんだ」

「22口径っていうちっちゃい弾丸使うあたり女子力高いとか思わないの??」

「女子力（物理）か女死力の間違いだろ・・・」

「まったく提督ってホント電以外には冷たいよね」

「そうか?」

「まあ、私はそれくらい扱いのほうが楽でいいんだけど。で、あとここだけでしょ?」

「ああ、ここで最後だな」

「じゃあささっと終わらせてアイスでも食べに行こうよ。提督の奢りで」

「お前・・・」

そう言いながら俺は戦闘指揮所の扉を開ける。

指揮所とは言え、ここは基本的に鎮守府近海における艦娘以外の部隊の指揮を行っている。

また展開している艦娘がどこにいるのかを表示しているモニターなどがある。

艦装に取り付けた発信機の信号を衛星が拾ってモニターに表示している。

「どうだ調子は」

「あ、提督。バッチリです。」

そのモニターの前に座っている青年はヘッドホンを外して俺の方を振り向く。

「演習のほうはどうだ？」

「現在、ターゲットドローンを使った対空戦闘中ですね」

「そうか」

今回の演習は鹿島の練習巡洋艦として新規配置艦娘に教育が出来るようにさせることも目的としている。

「ま、あとはよろしくな」

「了解です」

俺はそう言って指揮所を出た。

ジエームズは外で呑気にタバコを吸っていた。

「終わり？」

「ああ、これで終わりだな」

「じゃ、行こっか」

「どこにだ？」

「アイス食べに行くんでしょ」

「あー・・・そんな約束してたな」

「提督の奢りだからね」

「・・・はいはい」

何となく甘い物が楽しみという雰囲気かジエームズから出ていた。

何だかんだ女の子らしい所もあるな・・・なんて父親のような気持ちで見ている。

「どうしたの？」

「いや、何だかんだ女の子らしい所あるなって思ってたな」

「・・・それどういう意味？」

「アイス食べに行くのが楽しみって雰囲気出てたから」

「そ、まあいいよ。それよりも提督って私のこともしかしてあんまり女の子扱いしてない？」

「お前そういうの嫌いそうだからな、正直あんまり」

少し怒ってくるかと思っただが意外な返事が帰ってきた。

「さすが提督・・・なのかな、よく見てるね」

「あれ、怒るかと思っただのに」

「苦手だよ、私は女の子扱いされるのって・・・実際、見た目が女の子だけで中身は実戦経験豊富なイージス艦だからね」

そういうジエームズは何か悲しそうだった。

「・・・きつとあんな事が無ければ私もマーフィみたいに女の子らしいというかお淑やかな性格になれたのかな」

「どうだろうな・・・正直、実戦経験豊富な現代艦艇って言ったらケストレルやアンドロメダ、いそかぜだしな。あとバーベツトか」

「ケストレル達は戦争だったんでしょ？私のは人間の汚い部分だよ。まあ突っかかってもし方ないけど・・・あ、間宮見えてきたよ」

「・・・苦労してんだな・・・」

ジエームズの記憶がどういものかイマイチイメージがつかないからそういう返事しか出来ないが本人は気にしていないようだ。

なんて話してる間に間宮に着いた。

「いらっしやいませー！あれ、提督？電ちゃんとかじゃないんですか？」

「今日は演習行ってな・・・コイツにはまあ仕事に付き合ってくれましそのお礼って感じかな」

「ふふ、まるで親子みたいですな」

「・・・こんなお父さんやだ」

「・・・地味に傷つくからやめろ・・・」

ジエームズに傷つけられた所で席に案内された。

席についてメニューを開いた。

「そういえば私、日本の和菓子って食べた事ないな」

「ありや、そうなのか？ マーフィは抹茶と一緒に食べる和菓子は最高だつて言つてしょっちゅう来てるらしいぞ」

「あー、そういえば何かそんな話してたかも」

「まあ何でも好きなの行けばいいぞ、俺は適当に冷たいコーヒーでも飲んでもるから」

「そう？ じゃあこの和風パフェにしところかな」

「はいよ」

近くのボタンを押して注文を受け取ってもらう。

そういえば間宮に来る時は大体電とだったから違うヤツと来るのは何か新鮮だ。

「お待たせしました、注文は？」

「和風パフェとアイスコーヒー頼む」

「はい、了解しました」

間宮はメモを持って厨房に戻っていった。

「そういえばジェームズはマーフィと外出とかしないのか？」

「どしたの？ 急に」

「いや、何となく。一応姉妹だろう」

「ホント・・・一応・・・ね」

ジェームズは少し悲しそうな顔になる。

「私の中じゃちゃんと姉つて記憶があるのに向こうにはそれがないからね・・・私の中じゃアーレイバーク級は100隻以上あるのに彼女の中じゃアーレイバークは60隻くらいしか居なくて彼女が1番最新型で妹もまだ作られてないんだから・・・」

「・・・まあ、なんだ。記憶が違うとは言え、同じアーレイバークなんだ。それは違わないだろ」

「まあね、だから向こうも私を妹のように扱ってくれるけど・・・やっぱり何だか私は妹キャラつて感じだね」

「それはまだ慣れてないから・・・つて言いたいけどな・・・まあ、マーフィなら受け入れてくれるよ」

「知ってる、マーフィが優しいのは妹の私がよく知ってるよ」

ジェームズはちよつと笑顔でそう言った。

なんてしてる間に注文した物が届いた。

「じゃ提督、いただきます」

「はいよ」

パフエを味わいながら食べるジェームズを見ながらのんびりコーヒーを飲みふと、伝票を見た。

「ブフツ!!」

「うわああ!?!どしたの!?!」

珍しくジェームズが大きな声を出す。

「あ、いや・・・うん、なんでもない・・・」

「なにそれ・・・まあコーヒーかからなかったからいいけど・・・」

「・・・」

高い。

すんごく高い。

俺のコーヒーが200円なのに対してパフエのお値段なんと3500円。

ちらつとメニュー表を見たら最高級抹茶に日本の中でもかなり有名な和菓子店が間宮用に作ってくれたアンコにその他もろもろ日本の味を詰め込んだ高級パフエだった。

幸いジェームズは味わいながら食べていてくれた。

時々幸せそうな顔をしている。

「さすが女子の食べ物・・・」

俺はそう呟いた。

くネイサン・ジェームズく

「はく・・・ごちそうさま。何か日本の味って感じだったよ」

「は、はは・・・そりゃ良かった・・・」

「何でそんな顔が引きつってんのさ」

「気のせいという事にしといてくれ・・・」

「?」

なんだコイツ。

とか思いながらも美味しいものが食べれて満足だ。

「んで、まだお仕事あるの？」

「んや、今日はもういいぞ。外出するなりなんなりしてくれ」

「了解、んじゃねーごちそうさまー」

私は手を振って隊舎に帰る。

「どこか行こうかな・・・」

なんて考えながら隊舎の廊下を歩いているとトイレから何かの物音と苦しそうな声が聞こえてきた。

「・・・なにこれ」

興味本位と何かあれば助けるともりでトイレに入る。

耳を済ましていると・・・

「い、いそかぜ・・・誰か来ちやうから・・・」

「ふふ、この時間ならこのトイレは誰も来ませんよ。それより昨日はお世話になりました」

「ちよ、ちよつとまつ・・・あっ！」

「ふふ、私のうらかぜ・・・」

・・・これが噂のいそかぜとうらかぜか・・・

しかも鍵かかってないし・・・

私はドアを開けた。

「・・・」

「・・・」

2人と目が合う。

「・・・何してんの？真昼間から」

「・・・あの」

いそかぜが何か言おうとしている。

というか洋式便座にうらかぜ縛り付けて何やってるのこの人は・・・

「ごっ・・・美味しいですよ」

「何言ってるの!?!」

うらかぜの股間を指さしてそんな事を言う。

久々に人にツツコミを入れた気がする。

「・・・もういいや、この事は誰にも言わないから・・・」

「いやあの、せめて助けよう?!私昨日からずっといそかぜに部屋でも

色々されててそろそろ過労気味なんだよー！」

「いや面倒臭いし」

「薄情者オオオオ!!」

そんな叫び声を無視してドアを閉めた。

「よし、私は何も見ていない。これで皆幸せだよね」

そういう事にしておこう。

というかしておきたい。

私は自分の部屋まで急いだ。

「……もしかしてここも？」

部屋の中からはマーフィの声が聞こえる。

声というか喘ぎ声というか……

シンビルスクという名前も聞こえる。

確かマーフィに憑いてる潜水艦の幽霊だったような

私は意を決して扉を開ける。

「シ、シンビルスク……も、もうやめ……ジエームズ帰ってくるかも……」

『えへへー、ジエームズさんはお仕事ですからね！昨日は出来ませんでしたしー!』

「も、もうやら……やすませて……」

全裸のマイケル・マーフィさんが全裸の半透明で浮遊してる女の子にイジメられていた。

物凄い絵面だった。

私はそつと気づかれないようにドアを閉めた。

たぶん今私は泣きそうな顔してるかも知れない。

「……まともなのは私だけか……」

たぶん半泣きになっている。

私は逃げるように執務室に向かった。

く提督く

さーて……久々に平日なのに午後休みだし何すっかな。

なんて考えながら私物のパソコンを開く。

もし厳しいというか陸軍の連中がこれ見たら懲戒処分を食らうだろうな……

そのへん緩い海軍で良かった。

「うーむ……とりあえずFairly Out 4で111のアイツとなるか」
そう呟いてゲームを起動しようとした時誰かが入ってきた。

目線を上に上げると半泣きのジェームズが。

……あのジェームズが半泣き!?

「ど、どうした!?!」

「て、ていとくうう……もう部屋帰りたくない……」

今にも泣きそうな声で訴えてきた。

「どうかジェームズが泣くほどって何だ、マジで何があった。」

「と、とりあえず落ち着け……ソファアでも座れ、な?」

「うん……」

嘘だろ。

普段のキャラが一変してか弱い女の子みたいになってる。

明日にはこの鎮守府に砲弾の雨が降るんじゃないだろうか。

「とりあえずコーヒーでいいか?」

「その前に涙ふけるもの欲しい……」

「涙?」

よく見るともう泣いてらっしやった。

「ちよ、ちよいまて! えーっと……ああ、これでいいや!」

今朝洗濯して汗でもかいた時に使おうと思っていたタオルを渡した。

た。

「ありがとう……」

涙声だ……。

「それで、どうしたんだ?」

「マーフィが……うえっ……」

「わああ!! 泣くなって!」

「うええ……私だって泣く時には泣くのいい……」

「分かった、分かったから。泣きやめ。な?」

「もうちよつと待つて……ぐすっ……」

「・・・お前が泣くほどって何があっただんだ本当に・・・」

俺はそれが心底心配だった。

あのジエームズだ。

人の膝に22口径ぶち込んでも動じないジエームズが・・・ってこれはさすがに失礼か。

「あのね・・・」

「お、おう・・・」

「部屋に帰ったら・・・マーフィが裸で・・・」

「オーケー、もうあとは何が起きたか全て理解した」

「ほんとに・・・？」

「ああ・・・全裸のシンビルスクも居てマーフィがめっちゃくちゃされてたんだろ」

「・・・みてたの・・・？」

「違うわ！」

それにしても自分の姉が目の前でめっちゃくちゃされてる所を見たら泣きたくなるだろう。

「・・・落ち着くまでここに居ていいぞ・・・あと2時間は終わらんかな・・・」

「・・・」

ため息を付きながら滑走路を眺めていた。

そろそろ電達も帰ってくる。

「提督・・・」

「ん？」

振り向くと思いつきりジエームズに抱きつかれた。

「んんんんん?!?!」

「今はこうしたい・・・」

「え、あー・・・どうすりやいいのこれ・・・」

無下に引き離す訳にもいかない・・・

とりあえず撫でてやるか・・・

「ん・・・」

「落ち着くか？」

「うん……」

なんてしてる時だった。

「司令官さん！演習無事終了なので……す……」
「……」

俺は多分今物凄い顔をして固まっていると思う。

そして電も固まっている。

俺の鳩尾付近には泣きながら抱きつくジエームズとその頭を撫でてる俺の手。

誤解だと言えはいいのだが完全にお互い硬直していた。

「し」

「し……死!？」

俺は死を確信していたら……

「司令官さんの浮気者なのですううう!!!びええええ!!!」

「待ってくれ違アアアアア!!!」

遠のく電の声と俺の必死に誤解だと訴える声が虚しくも鎮守府の司令部に響いた。

敵新型機

「・・・何かごめん・・・」

「何かじゃねーよ!」

遠ざかる電の悲鳴を聞きながら嘆く。

どうやって誤解を解こう・・・

あんなの誰がどう見たって浮気だろう。

「とりあえず電を探して謝るぞ」

「それがいいかもね」

「・・・まあお前が泣き止んでからだけだな・・・」

ジエームズはまだ目が真っ赤だった。

「じゃあもうちよい頭撫でてて」

「何でだよ」

「落ち着くから」

「・・・はいはい」

この状況をもう1度見られたら言い逃れは不可能だな・・・

なんて思っていると廊下から物凄い勢いの足音が。

あと何かエンジンの音する。

「誰か来たな」

「ん・・・」

ジエームズは俺から離れて自分で涙を拭っていた。

その様子を見ていたらドアがものすごい勢いで開いた。

開けたのは電さん。

さっきの状況から30秒経ってないのにいつの間にか白装束に着

替えてチェーンソーを持っている。

しかもブオンブオン言わせながらエンジン吹かしている。

控えめに言って死ぬほど怖い。

「い、電さん・・・?」

「私を・・・差し置いてえ・・・他の女とお・・・イチヤコラしてた

のはどなたなのですか?」

顔を傾けながらそう言ってくる。

前髪で片目が隠れてて余計に怖い。

とりあえず怖い。

「あの・・・電さん？少々お話宜しいでござりますか？」

「お話の内容次第なら聞いてあげますから早く喋りやがりやがれなのです」

「電、あれは誤解だ！」

「そ、そうだよ！あれには事情があつて・・・」

「はて？誤解つてどんな意味のJapaneseでしたっけ」

Japaneseだけ無駄に発音の良い電さん。

「なんでそこだけ英語なんだよ！てか、ホントに誤解だ！」

「大丈夫なのです、初めは皆そう言いますけど一回チェンソーで刺身にされたら本当の事喋るって教えてもらったのです」

「誰だよそんな過激な事教えたの!!」

「ごめん私・・・」

「犯人お前かよ！」

まさかの犯人はジエームズだった。

てかチェンソーで刺身つて何？おいしいのそれ？

「とりあえず司令官さん？優しくしてあげるのでお〇ん〇ん出すのです」

「何故!?!あと優しくつて何をする気!?!」

「去勢なのです」

「お願いします許してください何でもしますから」

「ん？今なんでもつて言ったのです？じゃあ去勢するのです」

「いやああああ!!お願い許してええ!!せめて息子の命だけはあああ!!」

土下座しながら息子の命だけは守ろうとする海軍大佐の図である。

ちなみに半泣きだ。

「電お願い聞いて！私ちよつと嫌な事あつて提督に相談してたの！」

「それで抱きついていい理由になると思つてるのです？とりあえずジエームズさんもそのたわわに実つたオツパイが許せないので切り落とすのです」

「待つて色々おかしい」

ジェームズはどうやらおっぱいを切られそうだ。

「良かったなジェームズ、まだ子孫残せるぞ」

「そういう問題・・・?」

「まあでも、相談内容とやらを聞いてやらないことも無いのです。電は賢いので」

「何かキャラ壊れ始めてるぞ電!」

電のキャラが壊れ始めたがとりあえず何とか話を聞いてくれそう
だ。

聞いてくれそうだがちよいちよいエンジンの回転数上げてて心臓
に悪い。

「あの、とりあえず説明するけど・・・」

ジェームズはこの流れを説明した。

聞いてて俺は胃が痛くて泣きそうだったが・・・

何組のTPO?何それ知らない!レズセ○クスターのしー!って
言う連中が増えれば気が済むんだちくしょう。

しかし話を聞いた電は・・・

「なんだ、私の勘違いだったのです☆シ」

そう言つてチェーンソーを窓に向かってフルパワーでぶん投げる。

俺とジェームズはあまりの変わりように唾然としていた。

「によわあああああ!!?チェーンソー!?チェーンソーナンデ!」
というバーベットの悲鳴が聞こえてきた。

普段のクールさが全部どこかに旅立った悲鳴だった。

「全くもう、司令官さん早く言うのです!電、勘違いしちゃったのです
!」

「まあ・・・その・・・勘違いさせて悪かった」

「でも、浮気じゃなくて一安心なのです。あ、それとジェームズさん」
「はいっ!?なんでしよう!」

突然話しかけられジェームズも普段の感じがどこかに行っていた。

「司令官さんの撫で撫でつて落ち着くの共有できたのです」
と満足げな顔を言う。

「・・・何突然惚気けてんだ・・・あと提督は何嬉しそうな顔してんの
「いやー、ほら可愛い嫁がだな？」

「・・・もういいや、とりあえず部屋帰るよ」

「もういいのか？」

「・・・」

ジエームズは硬直した。

部屋に帰ればまだマーフィとシンビルスクが事を致してるかもしれない。

きつとそう思ったのだろう。

「・・・やっぱここにいる」

「そうしとけ・・・」

なんてしていると電話がなる。

「もしもし？」

《大佐か？少し急な任務を頼んでいいか？》

「はいはい、何を頼む気ですか？」

《そつちの1番練度の高い航空隊と空母を至急、南方海域に送ってくれ！》

「はあ・・・」

《敵の新型機が出たらしいんだ、次々と他の航空隊がやられてる》

「敵の新型ね・・・了解です」

そう言つて電話を切る。

そういえばこの前、南方海域で機動艦隊が全滅したとか聞いた。

まあでも、ウチのメビウスなら大丈夫だろう。

「電、赤城と加賀あと、翔鶴と瑞鶴呼んできてくれ」

「了解なのです！」

「珍しいね、ケストレル達を呼ばないなんて」

「ちよつと資源的な問題でな・・・そろそろ節約しないとヤバイし、最近ケストレル達ばかり使つて他の艦娘の練度も上がってないからな」

「ちやんと考えてるんだね」

「そりやな・・・てか今まで考えてないと思つてたのかお前」

「普段の提督見てたら・・・仕方ないでしょ」

思い当たる節が多すぎて泣きそうだ。

とりあえず涙を堪えて作戦を考える。

「とりあえず護衛艦はジエームズとマーフィだ。敵の新型がどんなものか分からないが、お前らの防空圏に引きずり込める事が出来れば何とかなるだろう」

「まあね・・・じゃあマーフィを・・・呼びたいけど行きたくない・・・」
「・・・気持ちは分かるがな・・・」

ジエームズはトボトボと歩いていった。

それと入れ違いのような感じで電が呼んできたメンツが帰ってきた。

「ただ今戻ったのです！」

「お、ありがとう。とりあえず座ってくれ」

赤城と加賀はリラックスしてるようだが、この前救出された艦娘の翔鶴と瑞鶴はどうにも落ち着かないようだ。

「2人とも、リラックスしてくれば大丈夫だ。んで、ここに呼んだのは任務があるからだ」

「任務・・・ですか？」

「ああ、敵新型機の情報収集だ。あと会敵した場合は可能なら撃破だ」
「新型相手に私達って提督さん何考えてるの？」

瑞鶴は少し怒ったように言う。

そりやそうだ。

翔鶴と瑞鶴の練度は高い方ではない。

「お前らは艦隊の防空役だよ。他にもイージス艦と情報収集艦が着いてくるがな」

「イージス艦・・・？」

そうだ、翔鶴と瑞鶴は知らないんだった。

「まああれだ。めっちゃ良く見える電探と超高性能の探針義にめっちゃ強いロケット詰んでる艦種だよ」

「ごめん、提督さん。ぜんっぜん分からない」

「何!?!これほど簡単に説明したのに!?!」

「ぎっくりすぎだよー」

「む、そうか・・・じゃあまずイービス艦には大きな特徴があつてだな・・・」

今度はイービスシステムについて話す。

「つまり凄く対空が強い艦娘って事ね」

「まあそうなる。とりあえず作戦についてだが、新型に遭遇したら情報収集しつつ交戦、無理そうならジェームズとマーフィの防空圏に引きずり込め。2人の艦対空ミサイルで攻撃する。あと情報収集艦アンドロメダもいるが、アンドロメダは戦闘には不向きだ、最重要目標として援護するように。まあこんなもんか」

「了解しました。赤城さんとならやれます」

「頼むぞ、すでにこの新型に機動艦隊がやられてるらしいからな。じゃあ出撃は今から3時間後の1730だ！」

くネイサン・ジェームズく

鎮守府を出て4時間。

外は真つ暗だ。

「南の海に向かうって言っても・・・バカンスは出来ないよね」

「何呑気なこと言ってるのよ貴女は」

「いいじゃん、たまには平和な世界をね？」

「まったく・・・これでも戦争中なのかしら・・・」

「ふふっ、お二人共仲いいですね」

艦隊先頭に私、マーフィ、アンドロメダ。後方に空母4人がまともって移動している。

今はまだ安全圏だからのんびりおしゃべりをしながら移動していた。

後ろの空母4人も談笑していた。

「そういうえばジェームズ、貴女ってフライトIIAだったかしら」

「ん？そうだけど？」

「いえ、私の記憶だともうフライトIIIが建造中だったはずだからね。100隻目ならもうフライトIVとかになつてるのかと思って」

「うーん・・・その辺の事は知らないんだよね」

「まあ決めるのは大統領とかだしね」

「大統領・・・うん、大統領ね・・・」

「どうしたの?」

「いや・・・私、大統領は皆病気で死んじゃってたから・・・最終的には私に乗ってたけど」

「あ・・・ごめんなさい、あなたの知ってる事って結構辛いこと多いも
んね・・・」

「ううん、いいよ。それよりもタバコ吸ってもいいかな?」

「ええ、吸えるのは今のうちよ」

「そうだね・・・」

私はタバコを咥えて火をつける。

「すー・・・ふー・・・」

「ジェームズさんって何かタバコ似合いますね」

「うん?そう?」

アンドロメダが笑顔でそう言ってきた。

ちよつと嬉しい。

「ちよつとアンドロメダ、そんな事言ったらジェームズの吸う本数増
えちやうじゃない!」

「あはは、ごめんなさい、つい」

「もう・・・」

「まあまあ、いいじゃん」

「良くないわよ、貴女そんなのだと彼氏の1人も出来ないわよ」

「そういうマーフィは欲しくて欲しくて仕方ないんだっけ?」

「なっ!?!」

「ふふつ、彼氏が居るっていいですよー」

アンドロメダはちよつと悪い笑みを浮かべる。

「あー!なによその勝者の余裕みたいなの!」

「あはは、良ければ紹介しますよ?」

「い、いいわよそんなの!・・・ほんとは欲しいけど・・・」

「最後なんて?」

「な、なんでもないわよ!!」

なんて話しながら海を進んでいく。

その時だった。

レーダーの端に何かを捉えた。

「ん？レーダーコンタクト」

「あ、ホントね・・・対空目標が・・・1」

「IFF応答なし・・・どうする？」

「どうするもこうするも、確認しないと。赤城、加賀」

呼ぶと2人はすぐに来た。

「艦載機を上げて、不明機1を確認したわ」

だが2人は顔を見合わせてマーフィに伝えた。

「ごめんなさい、赤城さんと私の艦載機は夜間には飛べないわ」

「・・・そうだった・・・」

マーフィは完全に忘れていたようだ。

「仕方ない、確認したら私達でやりましょう」

「そうだね。んで・・・警告？」

「そうね・・・もし民間機だったら大変だし」

「じゃあ私がやるよ。あー・・・地点A―2―0を飛行中の航空機へ、

こちらは日本海軍所属ミサイル駆逐艦ネイサン・ジエームズ。貴機の

所属、飛行目的を明らかにせよ。3度警告を行うが3度とも返答がな

い場合は敵と判断し撃墜する。オーバー。」

「これで大丈夫かしら」

「たぶんね」

私達はすでに火器管制装置に火が入っている。

何時でも撃てる状態だけに緊張が走る。

もし民間機だったらという最悪の事態だけは避けたかった。

しかし願いが通じたのか、返信がある。

《こちら、テクノエア357。当機は東京国際空港に向けて飛行中
です》

私は一安心して返信した。

「テクノエア357、了解。突然警告しちゃつてごめんね」

《すみません、こちらオートパイロットの不調で航路を少し外れて

いたので。任務頑張ってください。交信終わり」

「ありがとう、そちらも安全なフライトを」

そう言って無線を切った。

私は軽くため息を着いた。

「お疲れ様」

「ありがとう・・・あーもう、なんで提督はこの時間の民間機を教えてくださいないの?」

「ああ見えて隊長は結構抜けてますから」

「これ下手したら抜けてたじや済まない事案になってたわよ・・・」

「あはは・・・ごもつともですね・・・」

目標海域まではあと6時間ほどだ。

く提督く

「ふああああ・・・」

大あくびをしながらデスクに座る。

アイツらが頑張ってるのに1人だけ寝るわけにはいかない。

「コーヒー飲むのです?」

「いや、大丈夫だよ。それよりホント昼はすまなかったな」

「もう誤解だつて分かったので大丈夫なのです!ちよつとびっくりしちゃいましたけど」

「まあ、あれは誤解されても仕方ないしな・・・」

「でも私に隠れてあんな事するのは許さないのでですよ?」

「ちよつとだけでも・・・ダメ?」

「司令官さんく・・・?」

ちよつと冗談を言ってみたら電は笑顔で俺の机の引き出しから拳銃を取り出した。

「電さんそれ人に向けちゃダメ!!」

「でもこれ説明書には敵に向かって撃ちましようって書いてるので
す」

「待って味方!フレンドリイ!アイム、フレンズ!ブルーオンブルー
!」

「ふふ、冗談なのです」

冗談が冗談じゃない。

なんて気持ちは心にしまった。

「とりあえず銃口は人に向けられないように!」

「え、でも司令官さん、私に大砲は向けてくるのに・・・」

「ぶっ・・・!!」

思い切り吹き出す。

まさかのそこですか。

「いやそれはその・・・」

「えへへ、でも司令官さんの大砲は好きなのですよ?」

「え、ちよ、あの」

何故か俺が恥ずかしくなってくる。

ていうか普段はこんな事言わないのに何でだ!!

ふと時計を見ると現在時は0100。

深夜だ。

つまり深夜テンションだ。

「司令官さん、今ならだれも居ないですよね」

「いやまあそうだけど・・・」

「ちよいといい事しましよ・・・なのですっ!」

「フアツ!」

ちよつと頬を染めながら膝の上に乗ってきた。

あれ、電ってこんなに色っぽかったっけ・・・

そこから先はイチャラブエロマンガみたいになったのは想像する

までもないだろう。

くネイサン・ジエームズく

「な、ななななにしてるんですか隊長ー!!!」

突然アンドロメダが叫ぶ。

「ど、どうしたの?」

「あ、えつといえ・・・なんでもないです・・・」

「でも顔真っ赤よ?大丈夫?」

「だ、大丈夫です！」

「でもなんでヘッドセット付いたり外したりしてるの？」

さつきからアンドロメダが突然挙動不審になりヘッドセットを付
けたり外したりしている。

「ふえっ!? え、あの！ 違うんです！」

「とりあえずどうしたの・・・誰にも言わないから」

「う、え、えっとその・・・」

アンドロメダは小声で私とジェームズに内容を話してくれた。

つまりはアンドロメダに繋いである無線の電源を入れたまま執務
室で電と事を致してるようだ。

「ジェームズ、やる事は分かってるわよね？」

「うん、たぶん今の私達は心が一つだと思う」

トマホーク・・・攻撃用意。

目標はあのロリコン提督の脳天。

「な、何するんです？」

「大丈夫よ、トマホークが2発飛んでくだけだから」

「それ大丈夫じゃないですよ！」

「大丈夫、電には当たらないから」

「そういう問題じゃなくて！」

アンドロメダが必死に止めてくる。

これは普通に攻撃しても怒られない様な気がするんだけどなあ・・・

「まあでも・・・アンドロメダがそこまで言うなら・・・」

火器管制装置の火を落とす。

命拾いしたなああのロリコンめ。

「とりあえずおしゃべりもこの辺にしましょうか。もうすぐ作戦海域
よ」

「了解」

私は空母組にもう間もなくだとジェスチャーで伝えた。

4人の顔つきも引き締まった。

だがまだ深夜だ。

対空警戒を厳にしつつ休息を取ろう。

私は旗艦のマーフィーに一つ意見具申する。

「マーフィー、一つ具申んですけど」

「なにかしら」

「夜が開けないと艦載機は上がれないんでしょ？だったらここで休息を取るのはどうかな」

「あ、それいいですね。賛成です」

「うーん・・・そうね・・・そうしましょうか。とりあえず私とマーフィーは交代で対空監視ということでもいい？」

「私はいいけど空母組は朝まで休憩で大丈夫？」

「ええ、問題ないわ」

「了解」

私はその旨を伝えるために空母組に近寄る。

日の出まであと4時間ほどだ。

休める内に休むのがいいだろう。

「旗艦から夜明けまで休憩って指示だよ」

「本当ですか？」

「うん、対空警戒は任せて仮眠でも取ってて」

「ありがとうございます。じゃあ赤城さん一緒に寝ましょう」

「え、い、一緒に？」

「ええ」

赤城は若干戸惑いつつも一緒に離れていった。

「じゃあ私達も」

「うん、そうだね」

仲いいな空母組は・・・

なんて思いながら見ていた。

私は1日2日寝なくても何とかできるのでマーフィーと警戒につく。

「ジェームズ、寝なくていいの？」

「私は1日寝ないくらいじゃ大丈夫だよ。マーフィーは？」

「私も。というか昨日休みで散々寝たし大丈夫よ」

「へ、へえ・・・散々寝たんだ・・・」

「なんでちよつと引き気味なのかしら・・・？」

昨日の一件のせいで・・・
とは口が裂けても言えない。

「ところでさ」

「サラツと話帰るわね・・・何?」

「マーファイって本当に彼氏欲しいの?」

「んえ!?!ど、どうしたの!?!」

「いや、何となく」

するとマーファイは顔を真っ赤にさせながら呟く。

「そりやミサイル駆逐艦なんて言ってるけど艦装を取れば普通の女の子だし・・・」

「マーファイは女の子らしいところ沢山あるからきつと出来るよ」

「何よ突然・・・そういうあなたも結構可愛い所あるの分かってる?」

「うえ!?!なんで急に!?!」

「うーん・・・恥ずかしい思いさせられたお返しかしら」

可愛いなんて言われなれてない・・・それだけに恥ずかしい。

「そうやって可愛いで顔真っ赤にしてる所とかね。男性が見たらイチコロなんじゃないかしら」

「う、うるさい!・・・でも・・・彼氏かあ・・・」

なんて言いながら東の空を見ると明るくなってきていた。

夜明けだ。

「マーファイ、夜明け」

「ホントね・・・じゃあ、作戦開始といきましょう」

「了解、みんなを起こしてくる」

私は空母達を起こしに向かった。

くメビウス1く

「アンドロメダさん、メビウス隊全機発艦」

《了解しました。現在レーダーに敵影ありません》

「了解」

敵の新型機・・・か。

すでに機動艦隊がやられてるって話だ。

《隊長、新型機の話って聞いた?》

「え?ううん、知らないよ」

《これ噂なんだけど、エンジンの音が猫の鳴き声みたいなんだって。それに機体は私達と同じような形をして二重反転プロペラって話》
「エンジンの音可愛いわねそれ・・・ていうか二重反転プロペラなんてロマンの塊を搭載してるのね」

《だねー、落とすの勿体無いかも》

「そんな事言っていないで、会敵したら攻撃!」

《分かってるよ》

毎度毎度緊張感のないこの部隊だ。

なんておしゃべりしながら飛行すること1時間。

アンドロメダさんから連絡が入る。

《先行する加賀航空隊から連絡!敵新型機らしきものと遭遇、交戦中との事です!》

「了解!メビウス全機、至急急行して増援に入るよ!」

《よし来た!私達の出番だね!》

《やったろーぜ!》

編隊を崩して向かう。

敵はすぐ近くのようだ。

「あれ・・・かな」

明らかに動きの違う敵がいる。

ただ、1機だけだ。

加賀航空隊は苦戦してるようだ。

「全機!花火の中に突っ込むよ!」

《了解!》

「加賀航空隊!こちらメビウス隊、援護に入る!」

《了解、助かる!》

最大速度で突っ込む。

その時にその敵機が横をすり抜けた。

エンジンの音はまさに猫の鳴き声だ。

ただしあんな可愛い声ではない。

それに特徴的な二重反転プロペラ。

「なっ、速ッ!!」

目標はかなりの速度だ。

「全機ブレイク!こいつ結構ヤバイかも!」

《だろうね!見た目からしてヤバそうだよ!》

必死に食いつこうと私も操縦桿を操る。

敵はまるで踊っているかのように飛んでいる。

「はあッ、はあッ・・・!!」

Gで呼吸が辛い。

「くっ・・・そ・・・!なんで、あんなに綺麗に飛ぶのよ!!」

《敵じゃなかったら一緒に飛びたいレベルだよ!》

《まったく同感!!》

そんな時だった。

敵が旋回する一瞬を捕らえた。

「もらった!!」

だが、ソイツは旋回中にクルビットと呼ばれる、高度を変えずにほぼその位置でループする機動をした。

推力偏向能力がついてるなら理解できるのだが・・・

私は逆に後ろを取られた。

「えっ!?!」

《隊長!チェックシックス!!》

「な、なんで!?!くそ!!」

旋回、上昇、降下あらゆる手段を使って逃げる。

《隊長!援護に入る!》

「了解!」

ふと振り向くとメビウス4が敵機の後ろに着いた。

《もらった!これで!!》

その時だった。

今度はコブラを行いメビウス4の後ろを取る。

「逃げっ・・・!!」

逃げてと叫ぼうとしたが間に合わない。

敵の機銃が火を吹いた。

《うわああああ!!!》

「は、早く脱出して・・・」

翼をへし折られて錐揉み状態で落ちていく。

脱出したかしてないかを確認する余裕すらなかった。

敵はまた後ろだ。

「よ、よくも・・・!!!」

一気に急上昇して私はストールターンを行う。

機体が下を向く前に機銃を撃ち始める。

機首が下を向いた時は敵とヘッドオンのはず。

そう思った時だった。

「え、居ない!?!」

ふと視界の端にプロペラが写る。

そこにはすり鉢状に横滑りしながら飛行する敵機が居た。

何もかもがスローモーションに見える。

「・・・!!!」

やられた。

この位置だと私の体に砲弾が直撃するだろう。

涙を流す暇すらない。

その時だった。

《隊長ー!!!》

そう叫びながら5番機が突っ込んでくる。

そしてコースは衝突コースだ。

それに気づいた敵機はロールして私から離れた。

「馬鹿っ! アンタ突っ込むつもり!?!」

《隊長が危なかつたんだから仕方ないよ! それよりも後ろ取られた

!》

5番機を探すと背後にさっきの敵機がいた。

アイツの武装、さつき見えただけど機首に30mmクラスのモーター

カノンを積んでる・・・

「待っててー!」

援護に入ろうと射線を確保しようとするが相手はフラフラと動き回り射線に捕えられない。

それどころか急減速しながらバレルロールを行い再び私の背後につく。

「クソ！またなの!?!」

機動力を改造したこの零戦52型に互角どころかそれ以上の性能なんて……

二重反転プロペラに比較的大型の機体。

見た目からは想像出来ないほど機動力がいい。

「加賀航空隊！どこななの!?!」

《待ってなさい！私がやるわ!》

加賀航空隊の烈風が上空から降下してきた。

そして背後につく。

《もらったわ!》

だが私はその後を起こることが想像出来て叫ぶ。

「駄目ツ!!逃げて!!」

遅かった。

敵はクルビットを繰り出した。

烈風のパイロットからしたら視界から消えたと思った次の瞬間にはその機のモーターカノンと機関砲がこつちを向いている。

「やめっ……」

《あああああ!!……》

絶叫が途中で途切れる。

烈風はコックピット付近を蜂の巣にされていた。

敵機は耳障りにも感じてきた猫の鳴き声のようなエンジンを響かせてまるで挑発するように正面に出てきた。

「この……馬鹿にしゃがって!!」

当たらないと分かっているも機銃を撃つ。

敵機はそれをサラリと躲す。

「……だったらこつちにも奥の手が」

作戦開始前のブリーフィングで聞いた事を思い出す。

一か八かだけどこっちのキルゾーンに引き込む。

そこまではここから15分。

私は部隊に無線で告げる。

「いい、聞いて。これからあの敵機をキルゾーンに引きずり込むよ。これは囷作戦になるけどね」

敵機は別の機体を追いかけて回している。

私の作戦を伝えるチャンスだ。

《大丈夫、私達はリボン付きなんだから》

「・・・そうだよ。うん！じゃあ作戦を言うからよく聞いて」
作戦といいつつ内容はシンプルだ。

私が囷になりながらジェームズさんとマーフィさんの艦対空ミサイルの射程圏内に引きずり込む事だ。

超機動といえど相手はプロペラ機。

音速の何倍で飛んでくるミサイル相手には無力だろう。

「いい、私が囷になってあの機体をジェームズさんたちの防空圏に引きずり込む。もし私に寄り付く敵機が居たら叩き落として。それと・・・」

私は一呼吸置いて覚悟を決めた。

「・・・私が撃墜されたら誰でもいい。囷を引き継いで」

こんな危険な事、仲間にやらせたくない。

だけどそうしないと被害が増えるだけだ。

《隊長が撃墜されたらって事だけが聞き捨てならないけど、いいよ。やろう！》

《そうだね！黒猫に一泡吹かせてやろうよ！》

《あ、その黒猫っていいね》

《でしよー、真つ黒な機体に猫の鳴き声のようなエンジン音だしね！》
「ちよつと！せめて緊張感持ちなさいよ！」

だがこの雰囲気は安心する。

《そう言えば隊長、メビウス4のパラシュート確認したよ。無事脱出してた》

「ほんと!?良かった・・・」

《艦隊にはもう伝えてあるよ。ジエームズさんから救難ヘリが上
がってこつちに来てるからその援護が必要だね》

「了解！代わりに伝えてくれてありがとう！」

《隊長忙しそうだったからねー。メビウス4にはちよつと海水浴を楽
しんでもらおうか》

「あはは・・・まあこの南方だからね・・・」

私は気合いを入れるように操縦桿を握り直した。

「じゃあ・・・行くよ！」

《了解!!》

加賀航空隊に襲いかかっている黒猫に上空から突っ込む。

それをあつさりと躲して私の後ろに着いてきた。

「かかった！」

《援護は任せて!》

「了解！でも絶対に黒猫に手を出さないで！」

《そつちがピンチにならなかつたらね!》

ぴつたりと後ろに食いついて離れない敵機。

正直怖い。

だがここで逃げ切らないといけない。

「防空圏まで10分・・・」

長い10分になりそうだ。

ドツグフアイト

「ネイサン・ジエームズ」

「あと60マイルでSM-3の射程内・・・」

レーダーを見ながらそう呟く。

赤城の艦載機が提案してきた作戦は私達の防空圏に敵機を引きずり込んでミサイル攻撃をする事だった。

たった1機にこの損害・・・ね。

「ジエームズさん、不明瞭な通信を・・・」

「不明瞭な通信？」

ヘッドセットを手にしたアンドロメダが私にそういった。

「解読します・・・えーつと・・・敵機に関して・・・ですね」

「敵機に関して？とりあえず続けて」

「了解しました・・・えつとこれ・・・敵の・・・コールサイン・・・？」

「コールサイン？」

「はい、ティーチャと呼ばれています」

「ティーチャ・・・先生？」

「分かりません、呼んでいる声はヲ級のようです」

「ふーん・・・まあ何か大それたコールサインだね、ティーチャなんて」

「全くね・・・先生は先生でも反面教師って奴かしら」

マーフィと2人でそんな事を毒づいていた。

「航空隊の損害は？」

「加賀航空隊が既に4機撃墜、メビウス隊も1機撃墜されました」

「了解、あと20分でセイバーホーク1が現場海域に到着するよ」

さつき上げたSH60の状況をレーダーで確認する。

それにしても敵は1機しか居ないのだろうか。

「そう言えばさ、あの1機に機動艦隊がやられたって事だよね」

「そうみたいね。油断出来ないわ」

「全くだね」

とは言ったものの、音速の何倍という速度で飛行する艦対空ミサイ

ルをよけるのだろうか。

まあそれはやってみればわかる事だ。

「メビウスの隊長は大丈夫？」

「今のところ・・・」

「・・・無事にこつちまで来たら後は任せなさい」

マーフィは呟くように言った。

「メビウス1」

《隊長！もういいよ！逃げて！》

「大丈夫・・・まだ、大丈夫!!」

機体を掠める曳光弾。

敵はピツタリ真後ろだ。

「後部機銃が欲しいよ・・・!!」

《隊長！お願いだからもう逃げてって!!》

仲間の悲痛な叫び声が聞こえる。

「大丈夫だから!!」

私も無線に向かって怒鳴る。

ここで逃げたら味方に被害が出る。

正直逃げたいけど・・・

キャノピーに手を押し付けて後ろを振り返る。

ロールや上昇、降下を繰り返して後ろを見る余裕がほとんど無い。

敵機の特徴的な二重反転プロペラとその軸にある30mmクラスのモーターカノンを視認できた。

それは間違いなく私の機体を捉えている。

何となくだけどコックピットを捉えてるようにも思えた。

「ハ、アッ・・・ハアッ・・・!」

恐怖で心拍数も上がっている。

オマケにずっと高いGがかかる機動のせいで息すらままならない。

苦しい。

「あと・・・あと5分・・・!!」

あと5分このままの進路を維持さえ出来れば味方の対空ミサイルの射程に入る。

だがその時だった。

《もう見てられないよ!!隊長!!》

上空から1機の零戦が捻り込みながら降下してきた。

敵機はそれに気づき機首を上げた。

私は飛び込んでくる零戦の機首と翼から射撃時に出る炎が見えた。ヘッドオンだ。

「なっ……」

何してるの。

そう叫びたかった。

そして敵機の機銃からも炎が上がる。

《あっ……!!》

敵のモーターカノンから吐き出された砲弾が機体の中心を捉えていた。

零戦から放たれた機銃弾は敵機の横をすり抜ける。

「は、早く脱出……」

そう言い切るよりも先に空中で機体が爆発した。

あれは……7番機……

パラシュートは確認出来ない。

「え……」

少し放心状態に陥る。

目の前で何が起きた？

理解できない。

頭が追いつかなかった。

「なんで……?」

《隊長!!後ろ!!》

その言葉で我に帰る。

そして怒りもこみ上げてきた。

「この……この野郎……!!絶対に許さない!!」

コックピットで叫ぶと同時に操縦桿を思いつきり手前に引く。

「落としてやる落としてやる落としてやる!!!」

《落ち着いて!!》

僚機の声が鬱陶しく感じる。

「うるさい!!!」

無線に向かって怒鳴る。

《まずいよ、隊長が我を忘れてる!みんな隊長の援護に!!》

《了解!!》

黒猫は私にぴったりとくっつき射線に捉えている。

いつ撃たれてもおかしくないのにまるで撃ってこない。

「クソ・・・クソ、クソ、クソオ!!!バカにしないでよ!!」

まるで僚機を落とされて悔しいか?と言いたげな飛び方だった。

私はもう1度ストールターンでヘッドオンになろうとする。

だが、さつきと同じ事になってしまった。

「あ・・・」

すり鉢状に横滑りしながらこちらに照準を合わせようとしていた。

《うわあああ!!》

その時、僚機が叫びながら突っ込んできた。

同じようにかわそうとする敵機。

だが、機銃を撃ちながら突っ込んできた僚機の20mm砲弾が敵機のエレベーター部を捉え、破壊した。

吹き飛ぶ水平尾翼の稼働面。

敵機の機動力が大幅に落ちていた。

「もらった・・・落ちろ落ちろ落ちろこのクソツタレ!!!」

背後を取り機銃を撃つ。

だが、機動力が落ちたとはいえ、二重反転プロペラの推力は変わっていない。

敵はどんどん加速する。

だが・・・そっちはジェームズさんの防空圏だ。

「みんな、追い込むよー!」

《分かってる!あの子の仇は取ってやる!》

この手であるコックピットを機銃掃射してやりたいが無理なのは

分かっている。

せめて避けることが出来ない矢が迫ってくる事に恐怖しながら落ちろ。

私はここの中でそう思った。

そして・・・敵機のスピードから考えてヤツはもう防空圏内だ。

《捕らえた・・・マーフィ》

《分かっているわ。発射!》

《目標、距離450キロ。SM-3発射・・・落ちろ》

「・・・さあ、みんな帰ろう」

《・・・いいの?》

「何が?」

《あの子の事・・・》

メビウス7の事だろう。

良い訳ない。

だけど・・・これが戦争だ。

落とす側が居れば落とされる側がある。

そういう事だ。

「受け入れるしかないよ・・・これが戦争なんだから」

《・・・》

《・・・うん》

そんな帰投モードの時だった。

敵は一緒だけ、左に機首を振り、機銃を掃射した。

空中で何かが2つ爆発する。

《えっ・・・!?!》

《SM-3ロスト・・・2発とも・・・やるねアイツ》

敵はミサイルを迎撃した。

まるで接近してくるのが分かっているようだった。

そしてその光景を満足そうに見て上昇、雲に隠れてしまった。

《アイツどこいったの!?!》

「後方警戒!どこから来るか分からないよ!!」

《了解!》

だが、その後姿を再び表すことは無かった。
私達も燃料が限界になる。

「・・・なんだったのアイツ」
その思いだけが残る。

特徴的な二重反転プロペラに逆ガル翼。
そして機首のモーターカノン。
猫の鳴き声の様なエンジン音。

「・・・メビウス7のパラシュート確認できた人いる？」
《誰も・・・見てないよ・・・》

《・・・》

「・・・了解。メビウス7に・・・敬礼」

彼女の墜落地点に敬礼して赤城さんへと向かった。

く提督く

「・・・了解、帰り道には気をつけてくれ」

《了解しました、交信終わり》

「はあ・・・メビウス隊で2機落ちたか・・・」

アンドロメダの報告を聞いてタメ息をつく。

それにしても報告にあつた敵機は深海棲艦としては異質だ。

二重反転プロペラに逆ガル翼。

メビウス1のガンカメラの映像も送られてきたが、あれは俺達の側の戦闘機を模している。いつもなら異型の戦闘機なのに。

それにあの機動力・・・

厄介な相手が出てきたものだ。

「これでメビウス隊はあと6機・・・か」

普通の航空隊なら補充が効くんだが・・・ネームド航空隊となると
な・・・

とはいえ、代わりの効く命はない。

「司令官さん、お疲れのようならお休みしたほうが・・・」

「・・・大丈夫だ、それより鹿島の方はどうだ？この前の演習終わって
この鎮守府に配属予定の新隊員の教育に戻っていったが」

「うーん・・・それがなのです・・・」

電は渋い顔をした。

「演習中に聞いたのですが・・・」

電は鹿島から聞いたという話をした。

「どうやら完全に教官と思われてないらしい。」

鹿島自身、かなり優しい性格をしているから叱るに叱れない所があるのだろう。

あとまあ・・・見た目めっちゃ美少女だしな・・・

「あと少して訓練終わるだろ、執務室に呼んでくれ」

「了解なのです！伝えに行つてきますね！」

「うん、よろしく」

そして俺は無線を取る。

相手はアンドロメダだ。

「アンドロメダ、聞こえるか？」

《はい、聞こえます》

「航空隊の様子は大丈夫か？」

《なんとか・・・ただ、メビウス隊の隊長がかなり精神的に来てると思います、普段は滅多にしないゴーア라운드を3回ほど・・・》

「着艦は大丈夫なのか？」

《はい、何とか。ただ着艦フックを折っちゃったみたいです》

「了解、航空隊の連中には帰ったら休暇をやると伝えてくれ。」

《了解しました》

仲間をまた失った隊長の気持ちはよく分かる。

俺自身、何人も失っている。

「だけど、こう思うしかない。これは戦争なんだ。」

敵にだって仲間も居るし家族だって居る。

「こんな考え方は軍人失格かも知れないが・・・」

「言葉は通じるのにな・・・」

敵の事を思う。

日本語も通じるし、こっちに友好的な者すら居た。

「というか、国内でデパートに普通に買い物に来てる姿を目撃されて

いる。

あとゲーセンでプリクラ撮ったりしてる姿とかを写真で見ただ事がある。

「まあいいや・・・和平交渉は俺の仕事じゃない」

なんてしてるとドアがノックされた。

「どうぞ」

「入ります」

入ってきたのは鹿島だった。

それにしても随分早い。

「随分早いな」

「ちようどこちらに向かってましたので」

「そか、とりあえず電から色々聞いたんだが・・・大丈夫か？」

「何とか・・・大丈夫・・・です」

「・・・せめてこっち見ようか。目を合わせなくていいから・・・」

「ううっ・・・だって・・・だってあの子達酷いです！私を困らせて影で楽しんでるんです！この前なんてその私の困った顔とか色々写真に撮って仲間内で商売してる子とかいるんですよ・・・！」

「・・・」

すまん鹿島。

一瞬、その新隊員達と仲良く慣れそうって思ってしまった。

たぶんその商売目の前でされてたら俺も買った。

「う、え・・・もう、私どうしていいか・・・」

「泣くなつて、大丈夫だ。そうだ、教育隊の動画とか見たらどうだ？ ネットにいっぱいあるだろ」

「ネットですか・・・？」

「ああ、それ見て研究してみるんだ」

「ぐすつ・・・分かりました・・・」

「とりあえず泣き止んでから部屋出ろよ・・・下手すると俺が泣く羽目になる」

たぶん大丈夫だがな・・・電の勘違いはたまに死ぬほど怖いから・・・

「あー……もういいや仕事止めた止めた」

「……いいんですか……?」

「ああ、今日は休む。電ももうすぐ帰ってくるだろうしな。部屋帰って2人で映画でも見るよ」

「私、今日研究して明日から実践してみます……」

「そうしてみな。そうだ、これ持っていけ。小型の無線だ。お前の指導とかどんな感じか聞いてみたいしな」

「はい……ありがとうございます……」

だいぶ精神的に辛そうだ。

まあでも、鹿島には将来的に配属予定隊員と新配置艦娘の教育を任せるつもりでいる。

ここで強くなつてもらわないとな……

なんてしてたら電が帰ってきた。

「ただいまなのです……って……司令官さん……?」

「違うんです聞いてください電様」

「えへへ、冗談なのです!」

「あー、そっか冗談かー!あはは!」

心臓止まるかと思った。

というか心停止（物理）が起きると思った。

「とりあえず鹿島はもう部屋に帰ってゆつくりして来い。電、今日はもう仕事終わりにして映画でも見ないか?」

「いいのです?!」

「大丈夫、明日でもどうにかなるよ。あとはやる気の問題だな」

「えつとじゃあ……私は帰りますね、お疲れ様でした提督さん」

「ああ、明日から頑張れよ」

鹿島は目元を拭って執務室から出ていった。

俺も椅子から立ち上がる。

「さて、何見る?」

「うーん……劇場版けものフレンズで!」

「よしそれ見るか!」

「わーい!たーのしー!なのです!」

電ははしやぎながら部屋へと戻った。

（翌日）

そろそろ訓練が始まる頃だろう。

鹿島に渡した無線の電源を入れる。

《はい、皆さんおはようございます！今日はえつと・・・警戒自衛戦闘です！》

懐かしいな・・・

俺も新隊員時代に思いを馳せる。

だが・・・

《うえ〜い》

なんだこの気合のない返事は・・・相手が鹿島じゃなきや殺されるぞ・・・

すると・・・

《あの・・・もつと元気よく行きましょ？ね？》

《鹿島教官とハグ出来たらもつと元気出ます》

・・・おい。

俺も混ぜろ。

《あ、あの・・・学生長、ちゃんと指導しました？》

《はい、一応。鹿島教官のパンチラ写真渡したら明日からマトモになるって言っていました》

・・・どうなってんだこの教育隊。

あとその写真ください。

《・・・》

たぶん鹿島今震えてんだろうな・・・

なんて思った次の瞬間だった。

《あの・・・皆さん》

いつもと雰囲気の違い鹿島の声。

周りは気づいていなさそうだが。

《もしかして私がいつもいつも笑顔とかで対応すると思いませんか？
ね？学生長？》

《え……》

《すつたらお前らは私がいつもいつも優しいお姉さんだと思つとつた
んやなオイコラ学生長どういいう事か説明せんかオイ》

ひえっ。

めつちや怖い。

普段怒らない人が怒るとこうなのか!?

《お前らええ根性しとるなオイ。その気合い別の事に使う気無いか
？なんか答えるコラ》

キャラ変わってますけど!?

あとあなた元々可愛い系の声なのにそのレンジャー教官みたいな
言葉遣いで違和感マシマシなんです！

《あら、ごめんなさい。私とした事が、ふふっ》

この言葉すら怖い!!

《でも、皆さん。今日は訓練内容変更しましょうか、では皆さん……》
ヤバイ、この先何が起こるか少し予想出来てしまったが故に自分の
新隊員時代の悪夢が蘇る。

《その場に腕立て伏せの姿勢を取ってください♪》

来たアアアア!!しかもこれたぶん当分終わらないタイプだ!!

《ちよつと、遅いし皆動き揃ってないですよ。ちよつと学生長立つて
ください》

《はい》

《返事は大きくハイ!だろうがコラ!》

《はひい!!》

こええええええ。

《学生長、おかしいですよね？あなたがこの隊の長なのですから、ね
？》

《はい!》

《返事はレンジャー!だろうか!》

お前レンジャー訓練の動画見ただろ。

思いつきり突っ込みたかった。

《レンジャー!!》

お前は疑問に思え学生長。

おかしいだろ色々。

《あなたの統制力の無さがこの事態を招いているって分かりますか? あなた人間ですよね? 分かりますよね?》

《レンジャー!》

お前もしかしてレンジャー訓練の内容知ってる? レンジャーってとりあえず答えておく感じだと知ってる?

《日本語で喋ってくださいね♪》

そして君は本当にレンジャー過程の動画見たのかね。

《はい!すみません!》

《ふふっ、その人何姿勢崩してるんですかあ? やる気ないんですからお家に帰っていいですよ♪》

《レンジャー!》

なんでお前もやねん。

《返事だけは立派なカカシばかりですね、でもそろそろ寒くなってきましたでしょう?》

現在の気温、32℃。

《レ、レンジャー!》

《暑いです・・・》

レンジャーという声に混じって弱音が聞こえた。

君の気持ちはよく分かる。

でもそれ言うのと死ぬシステムになってるから・・・

《あら、今寒いって聞こえましたね♪じゃあ暖めてあげますね》

暖めてあげますねって声が物凄く優しいんだが内容を知ってるから死刑宣告にしか聞こえない。

しかも即執行。

《まったく、弱音吐かなきゃ終わりにしてあげたのに・・・ふふっ、頑

張ってくださいね♪》

無線の向こうから聞こえる新隊員の数を数える声と悲鳴が混ざった声。

《あ、学生長は立ったままですよ、あなたが皆を指導するんですから》
イヤアアア!!それ1番精神的に来るヤツだから止めたげて!!

俺は無線を聞きながら過去を思い出し悶えた。

皆汗ダラダラ書きながら腕立て伏せしてる中、お前指導しろって言われて立たされるヤツ・・・あれ本当に死にたくなる。

《あら、指導しないですか?命令が聞けませんか?》

お願いします、提督さんの顔に免じて許してあげてください。

《まったく、学生長がこんなのだと皆死にますね》

そこまで言わんといえあげてえええ!!

《あら?腕立て伏せは終わってませんよ?頭で考えられなくても腕立て伏せは出来るでしょう?それとも腕立て伏せすら出来ないバカの集まりだったんですね・・・じゃあ腕立て伏せは終わりにしますね》
無線の向こうから安堵の声が少し聞こえた。

・・・これで終わるわけないだろ・・・南無

《全員、雨衣を着てくださいいね♪今日はゲリラ豪雨が来ますから》

《え、でも今日天気予報だと・・・》

《来てください、ふふっ♪》

《はい・・・》

《ふふっ、いい子ですね》

嫌な予感しかない。

あと何が起こるかももう分かった。

とりあえずぶっ倒れるヤツが出るという事だけ分かった。

俺は電話を取る。

「・・・衛生班聞こえるか」

《はい、聞こえます》

「熱中症の処置が出来る救急車を10両くらい新隊員が訓練してる所に送ってください・・・」

《何かあったんですか?》

「いや・・・今から何か起こるから・・・」

《?とりあえず了解しました》

そう言って電話を切った。

そして再び無線を聞く。

《今日は小銃持ってきてきてて良かったですね、では皆さん控え銃ですつ
!》

銃の金属音が聞こえる。

・・・本当にやめてあげて。

《では駆け足、進め♪私も走りますから皆さん元気だしてくださいね
!》

《はい!》

めっちゃ気合いのこもった声が聞こえた。

お前ら絶対汗だくになった鹿島が見たくてその気合いだろ。

この後の状況を聞くのが嫌になり無線を切る。

「司令官さん、新隊員の方達大丈夫なのです?」

「とりあえず死人が出ないように処置した・・・」

「なにごとなのです!」

この後、新隊員30人中、10人ぶつ倒れて待機していた救急車に助けられていた。

聞いた話、うわ言のように「鹿島さんの汗だく姿・・・目に・・・
焼き付けた・・・」とかぶつ倒れる時の悲鳴が「汗だく透けブラいた
だきましたー!」とか「鹿島さんの汗1滴飲めた!我が生涯に一片の
悔い無し!汗美味し!」とか「汗だく姿エツロ!」とか叫んでぶつ倒
れたらしい。

なんて思ってたらドアがノックされた。

「どうぞ」

「提督さん、入りますね」

「はいよ、訓練お疲れ様」

「はい、ありがとうございますっ!みんな心を入れ替えてくれるって
言ってくれました!」

「そか、良かったな」

「でも私・・・大切な教え子が10も倒れるまで走らせるなんて・・・」

鹿島は涙目でそう言った。

でもたぶん全員怒ってない。

衛生班によると全員怒ってないどころか最高の1日だったと言っているらしい。

倒れた連中も命に別状もなく、また全員何故かとても幸せそうな顔をしているらしい。

「大丈夫だって。そうだ、これから毎日でも軽く汗かく程度に皆と走ったらどうだ？全員の士気が相当高くなると思うが」

「毎日ですか？」

「ああ、健康にもいいしな」

あと男性隊員の心の健康にもいいと思う。

なんて心の声が聞こえたら電がレンジャー教官になりそうだ。

「ありがとうございます！提督さん！また明日から頑張りますね！」

「おう、しつかりな」

鹿島は元気に出ていった。

「ふう・・・」

「司令官さん」

「ん？」

「走って汗かいたら健康に良いってわかるのですが、なんで士気があがるのです？ちよつと説明してくれませんか？」

「・・・レンジャー！」

「そうですね！そんなに走りたいですか、では司令官さん私も走りますけど司令官さん屈強ですからその対化学兵器用の防護衣とガスマスク付けて走れますよね？」

「レンジャー！！」

この後まさかの小銃じゃなくてジャベリン持って走らされた。

10分もしないうちにガスマスクの目ガラスの向こうに天使の羽が見えた。

後から衛生班の連中に俺がうわ言のように「ほら、目ガラスの向こ

うに天使の羽が・・・」と言っていたらしい。

目が覚めて時計を見るとあと2時間程度で空母隊が帰って来る時間だった。

あと何だかんだ電は俺の心配をせずと傍に居てくれたらしい。

「あー司令官さん、目が覚めたのです！」

「ああ・・・おはよう」

「良かったのです・・・昨日はごめんなさいなのです・・・」

「大丈夫だ、昔を思い出す程度だったからな」

ジャベリン持って走らされる記憶なんてこれっぽっちも無いがな

!!

「ところで、空母隊は大丈夫か？」

「あ、えっとさっき連絡が入ったのですが、メビウス隊の隊長さんがやっぱり精神的に危ないそうで・・・」

「・・・だろうな。帰ったらカウンセリングさせるか・・・」

航空機の妖精さんも地上に降りれば普通の人間より少し小さいサイズになる。

しかもどうやって小さくなったり大きくなったりするのかまるで分からない。

ある意味世界の七不思議みたいな感じだ。

だが、たまにサイズが帰ってきてても変わらない妖精もいる。

大抵は精神的に参ってる時だが・・・

前回、僚機を撃墜された時は大丈夫だったが今回はどうなるか・・・俺はベッドの近くの窓から艦隊が帰投する方向を眺めた。

紅茶はキメるもの。

くネイサン・ジエームズく

「あーっーいー・・・」

「・・・うるさいわよ」

「だって暑いんだし仕方ないじゃん・・・」

南方海域の哨戒任務を命じられて沖縄近くまで来たのはいいが暑い。
い。

何せ陽の光を遮るものが何も無い海の上。

日光が痛いくらい眩しい。

「せっかく南の海なんだし楽しまないと損よ」

「じゃあ冷えたビールとおつまみ。あとタバコ」

「・・・あなたね・・・あとタバコは吸ってるじゃない・・・」

なんて言いながら哨戒を続ける。

今回は私とマーフィ、アンドロメダ、金剛と大和だ。

哨戒任務にしてはちよつと物騒なメンツではある。

「あー・・・せめて冷たいフルーツが欲しい・・・」

「あ、そうだ。皆さん、ラムネ飲みますか？」

「ラムネ？」

そう言って大和はどこからかラムネを5本取り出した。

「いいわね、頂きましょ」

「大和のラムネは最高ネー！」

私も1本貰って飲む。

よく冷えたラムネはとても美味しい。

これだけでもだいぶ戦力回復になる。

「まだまだあるので欲しい時は何時でも言ってくださいね」

大和姉さんマジ天使。

なんてことを思いながら残りを飲み干した。

「美味しかった、ありがとね」

「いえいえ」

「大和ー！もう1本プリーズネー！」

金剛は2本目を飲み出ししていた。
ほのぼのした空気。

このまま何もなく任務が終わってほしいな・・・
なんて思ってた時だった。

こういう時に限って何も無かった試しがない。

レーダーに光点が映る。

速度や反射からしてミサイルの類いだ。

「ヴァンパイア、ヴァンパイア、ヴァンパイア!! 飛翔体接近!」

「こつちも捉えた、迎撃?」

「ええ、迎撃するわよ!」

「了解。SM-3、諸元入力」

目標の速度は約400ノット。

巡航ミサイルあたりか?

「SM-3発射始め!」

私とマーフィからミサイルが発射される。

「データ解析します、お待ちください」

「了解」

「私達はどうするネ?」

「ちよつと待つて。たぶん近くに敵艦がいる」

ミサイル攻撃をしてもいいが鎮守府の懷事情で燃料があつても弾薬がない。

ミサイルは私達の持つてる分しか当分ない。

「敵を見つけたら私達のレーダーで着弾観測をする。それでお願い」

「了解しました」

「了解ネー!」

その時、ヘッドセットを付けたアンドロメダが何かを受信した。

「ジェームズさん、通信です!」

「通信?」

「はい、こちらに向けてのです」

「なにそれ・・・いいよ、ヘッドセット貸して」

アンドロメダからヘッドセットを借りて付ける。

「・・・もしもし」

《どうだね我が艦隊の攻撃は！》

「いやどうだねって聞かれてもこっちに来る前に落とすだけ」

《ふっふっふ・・・あれは我が艦隊の武装の中でも最弱よ・・・》

「あ、そ・・・」

何かすごく面倒くさそうだ。

「分析完了しました。えと・・・敵は南方棲鬼です！」

「またどえらいのが来たわね・・・トマホーク数発程度じゃダメージすら入らないかも・・・」

《ふふ、まだまだ攻撃は続くわよ・・・》

その声の後だった。

「ヴァンパイア、ヴァンパイア、ヴァンパイア!!新たに2発接近！」

「まだくるの・・・面倒臭いなもう・・・」

「ぶつぶつ言っていないで撃ちなさい！」

「はいはい・・・S M | 3、発射」

再び、2発のミサイルが飛翔していく。

「インターセプト五秒前・・・スタンバイ・・・マークインターセプト
！」

「目標1発撃墜しました！」

「2発目が来るよ、S C A T待機、C I W S対空戦闘用意」

「主砲、発射用意！」

マーファイが先に主砲で迎撃を開始した。

「目標・・・見えました！・・・って何あれ!？」

双眼鏡を持ったアンドロメダが叫んだ。

「何が見えたの!？」

「えと・・・えっと・・・あの・・・」

アンドロメダは言いにくそうだ。

「というか何が来てるんだ。」

「もういいー！射程に入ったー！」

マーファイは主砲を撃ち始める。

数秒後に空中で爆発が起きた。

「撃墜・・・ふう・・・」

「で、何が見えたの？」

「えっと・・・その・・・形容し難いんですがその・・・羽とプロペラの生えたパンジヤンドラムが・・・」

「なにそれ!？」

「What!？」

・・・なんだそれ。

心の底からそう思った。

なぜパンジヤンドラムにプロペラと翼を生やす必要がある。

元々紅茶キメたような物にプラスでマーマイトあたりキメてもうヤバいとしか言いようがない。

「わ、私が言うのもなんですが紅茶キメてるネ・・・」

英国生まれの金剛がドン引きしてる。

私はさっきの無線で南方棲鬼を問いただしてみる。

「・・・あんたは紅茶でもキメたの？」

《ふふっ・・・驚いてるわねえ・・・》

ええ、そりゃそんな物が羽生やして飛んできたら誰でも驚くと思いますよ。

《あれはね・・・私達の提督直々に開発した最新兵器なの・・・これで日本なんて終わりよ》

「あー・・・そうなんだ・・・ちなみにそれ作ってる時何か飲んでた？」

《んー・・・紅茶飲んでたわね。結構大量に。何か最近、紅茶飲んでないと震えが止まらないって言ってたわあ》

完全にキマってますがな。

とりあえず、もう面倒臭い。

帰ろう。

「みんなー、帰るよー」

「え、ちよっ、帰るの?」

「深海棲艦が英国面に落ちたっただけでも重要な情報だよ」

「意味わかんないわよ!というか、敵のボスいるんだから!」

「あれほっというも無害だと思っ」

マーフィと帰る帰らないの話をしてるとレーダーに何かを補足した。

さっきのパンジャンではない。

「敵、南方棲鬼及び敵艦隊!!」

「ほら来たわよ!!」

「出てこなきゃほつといて帰ったのに・・・」

敵は5キロ程度の所に出現した。

目視でも確認出来た。

《あー、あー、聞こえるう?》

「アイツ、スピーカー使ってるよ・・・」

《艦娘のみんなー、ここが墓場よ》

「・・・だつてさ」

「だつてさじゃないわよ! 攻撃用意!!」

「・・・トマホーク・・・要らないか、大和、金剛、私達が観測するか
ら撃つちやつていいよ」

「わ、分かったネ!」

「了解です! 全主砲、斉射!!」

「ファイアー!」

耳をつんざく砲撃の音。

砲弾は綺麗な放物線を描いて南方棲鬼に降り注ぐ。

大したダメージは無さそうだ。

《ちよつと! 痛いわよ! 人がまだ喋ってるでしょ! それならこっちにも
も考えあるから覚悟しなさいよ!》

「だつて、怒ってるよ」

「なんであなたはそんなに落ち着いてるの・・・?」

「無線聞いてたらね・・・」

「ジェームズさん! 南方棲鬼が何か用意してます!」

南方棲鬼の近くに何か緑色の物が見えた。

私は双眼鏡で確認する。

「・・・パンジャンだねあれ」

「・・・ええ、すつごくパンジャンドラムね」

《ふふつ、見えてるかしら。これで貴方達も終わりよ》

「ああ・・・ええ、深海棲艦の脳みそが終わってるって事ね」

《違いわよ!!》

「なんで聞こえんのよ・・・」

マーファイもはや呆れ果てていた。

《これはね、燃料気化爆弾搭載のパンジヤンドラムよお。色々と改良を加えて最強のパンジヤンドラムとなったの》

最強のパンジヤンドラムというパワーワード。

「大和、3式弾で撃つていいよ」

「え、えと・・・いいんですか?」

「うん、もう面倒臭いからパンジヤンドラムごと吹き飛ばす」

「りよ、了解しました!」

再び9門の46cm砲が火を吹いた。

その砲弾はちょうど敵の真上で爆発する。

ついでにパンジヤンドラムも誘爆した。

レーダーから南方棲鬼以外の光点が消失した。

「あれ硬いわね・・・」

「だね。とりあえず近づいて降伏勧告でもしようよ」

南方棲鬼に照準したままゆっくりと近づく。

「終わりだよ。あんたの敗因はどう考えても紅茶のキメすぎ」

南方棲鬼は爆発の熱で服が破けてやたらセクシーなことになっていた。

「紅茶キメてるなんて言わないでよ!これでもあの何日も寝ずに頑張ってたんだからあ!」

「その努力どこかに回せて説教してやったほうがいいと思う・・・」

「・・・沈めなさいよ・・・」

「え?」

「沈めればいいじゃない・・・敵の私を・・・」

南方棲鬼は涙目でそう言ってきた。

私はマーファイと顔を見合わせた。

「・・・」

無言で砲を向けるマーフィ。

その時、南方棲鬼の指に何か光る物を見つけた。
「？」

私がそれを見ようと手を伸ばすと

「や、やめて！」

「その指の何？」

「これだけは・・・つけたままで沈みたい」

その言葉で私は何となく察した。

結婚指輪かその類だろう。

「マーフィ」

「・・・分かってる。もういいわ。行きなさい」

「え？」

「別に貴女が憎い訳じゃないの。待つてる人が居るんでしょ。早く帰らないと紅茶のキメすぎで倒れるんじゃない？」

「・・・」

「周り全滅させといてアレだけどね・・・」

マーフィは苦笑いでそう言った。

「あ、ありがとう・・・この恩は必ずパンジャンで・・・」

「要らないわよ!!!」

パンジャンドラムの恩返し。映画化決定。

なんてワードが頭の中に浮かび笑いそうだった。

南方棲鬼は何度かこちらを振り返りながらゆっくりと潜航していった。

「はあ・・・今度こそ帰ろう」

「そうね・・・疲れたわ」

「後味悪い結果にならなくて良かったです」

大和は微笑みながら南方棲鬼が帰っていった方向に向かって言った。
「まあね・・・」

妙な疲労感を覚えながら帰路についた。

く提督く

「報告は以上だよ。」

「了解、ご苦労さん」

ジエームズからの報告を受け一息付く。

「あ、そうだ。お前あてに何か来てるぞ」

「え？」

俺は昨日届いた小包を出す。

「なんだろうこれ。開けてみてくれる？」

「お前な・・・平気で上官に・・・」

これ爆弾だったらどうすんだ・・・

まあ事前に検査は終わっているので安全ではあるが。

「開いたぞ・・・ってなんだこれ。南方棲鬼と・・・あとこれ向こうの提督か」

「ラブラブな写真送り付けてくれちゃって・・・」

向こうも向こうで楽しくやってんだな・・・なんて海軍本部が聞いたらボコられそうな事を思う。

「あと手紙・・・なんじゃこりゃ・・・」

中には高そうな紅茶のセットとパンジヤンドラムの模型が入っていた。

というか、なぜパンジヤンドラム。

「これがパンジヤンドラムの恩返し・・・ふふっ」

「何笑ってんだ・・・」

しかもよく見たらラジコンだこれ。

パンジヤンドラムのラジコンって・・・

「まあいいや・・・とりあえず外出するなり部屋で休むなりしててくれ」

「うん、今日は外出してくるよ、じゃあお疲れ様ー」

「はいよー」

ジエームズが執務室を出ていったあと俺は少しこのパンジヤンドラムのラジコンが気になり遊んでみる事にした。

「これどうやって曲がってりすんだろ」

とりあえず床に置いてスイッチを入れると車輪のブラスターに火

がついた。

なかなかリアルだな。

「これで前進かな？」

レバーを倒した時だった。

「ただいまなのですー」

「あつ」

「えっ？は、はにゃあああああ!!？」

電に突進して足に当たった瞬間爆発するパンジャン。

まさかの炸薬入。

「い、電ああああ!!！」

俺は急いで駆け寄る。

「大丈夫か!？」

「けほっ……大丈夫なのです……」

「良かった……」

よく見たら何故か服だけ綺麗に破けて体は無傷だ。

「い、電、服がだな……」

「にやつ!？」

一瞬で顔を真っ赤にする電。

というか無駄にエロい破け方をしてる。

エロい。

「あ、あんまり見ないでほしいのです!」

「これが夜ならなあ……」

「な、なにを言ってるのですか!!」

「んや、可愛いなーって」

「にやつ!？し、司令官さんのバカなのです!」

「はは、いつもなら平気な顔してるのにな」

「してないのです!!どんなイメージなのですか!!」

なんて執務室でイチャコラしてた。

ちなみに後からラジコンの説明書を見たらその深海提督手作りのラジコンで炸薬も入ってるが人体には無害でも何故か服だけ破ける特殊な火薬を使ってるらしい。

あとそれ砲弾に詰めようかと思ってるとか書いてあった。
・・・やめて欲しいようなやっつけて欲しいような・・・
なんて思いながら残りの仕事を始めた。

ネイサン・ジェームズの嫌いな物

くマイケル・マーフィー

「はあ……」

『あら、マーフィさんが珍しく悩んでますね……はっ、もしや恋の悩み!?許しませんよ私という女が居ながらー!相手は誰だちくしよー!!そいつの枕元でAK乱射してやるー!!!』

「違うわよ!あと長いし物騒だから止めなさい!!」

『えー、違うんですか?あつ……ということとはもう何ヶ月も生理が来てない……ちくしよー!例えトイレに隠れても見つけ出して核ミサイルぶち込んでやるー!』
「だから違うわよ!!」

ひとり部屋でシンビルスクに向かって突っ込む。

というかこの子なんでこんなにやる事物騒なんだろうか……

『じゃあ何の悩み事ですか?』

「大したことじゃないわ」

『そう言われると余計気になりますよー』

本当に大したことじゃないが……まあいいか。

「えつとね、ジェームズって何か本気で怖がるようなものってあるの
かなって。私はあの子の事よく分かってないからね。あの子には私
が姉って記憶があるのに……」

『あー、そういう悩みなんですネ』

「それにあの子結構可愛いのに仏頂面だしあんまり笑ったり怖がった
りとかないのよね……」

『えへへ、マーフィさん。それなら調査済みですっ!』

「え、ホント?」

ただ同時に私はある事を思い出す。

この子他人に入って思考とか読み取って遊ぶ癖がある。

……絶対ジェームズで遊んだなコイツ。

『ジェームズさんの苦手なものベスト3から行きます!』

「あら、随分調べてるのね。ところで……どうやって調べたのかしら

？」

『えっへん！それはもちろん寝てる間に相手の精神に入ってますね！……はっ!!』

「おかしいわね、私それ止めろって何回言ったかしら？」

『ご、5回くらいです……』

「そう、5回……ね？もつとあるけどサービスしてあげるわ」

『さ、ササササービスってなんのですか……？』

「これよ」

私はとあるお寺から貰った幽霊を封じ込める力があるというお札を取り出した。

『いやああああ!!ごめんなさい許してくださいいい!!それだけは嫌なんですー!!』

「でも私5回くらい怒ったわよねえ？ちよつとくらいお仕置きする権利あるんじゃないかしら」

『それちよつとじゃないんです！それ封じ込めるっていうより別の空間に飛ばされるんですう!!しかもそこヤバいですよ!!一言で表すとヤバい霊しか居ないんですよ!!あれ全部人間界に解き放つたら人類くらい一時間で死滅しますからね!!しかも私この前そこに飛ばされた時の状況分かります?!こんな可愛い美少女来た時の地獄絵図分かりますか!?!男の悪霊に犯されかけて女の幽霊には嫉妬か何か知りませんけど本気で殺されかけましたからね?!』

「長い。3行」

『嫌だ。怖い。行きたくない!!お願いしますマーフィさん何でもしますから許してください!!』

「へえ……なんでも……?」

『はいもうマーフィさんが満足するまでエッチしてあげますから!』
「……」

本気で封じ込めてやろうかと思ったが、さすがにここまで怖がってるということは相当な体験だったのだろう。

可哀想だしやめておくか……

「はあ……もういいわ……」

『うわあああ！マーフィさんん！ありがとうございます!!大好き!!』

「はいはい・・・それで、ジェームズが苦手なものって何なの？」
やはりそこは気になるので聞いてみる。

『え、えつとですね。ジェームズさんが本気で苦手なものが3つありまして・・・』

「あら、意外とあるのね。」

『まず一つ目！アスチュート級潜水艦です！』

「まさかの・・・」

『ジェームズさん、その潜水艦には手を焼いたみたいで相当苦手らしいですよ?』

「意外と普通なのね・・・というかあの子同盟国の潜水艦とも・・・」

ちよつとだけジェームズの過去がどれだけ悲惨だったのか考えた。

アスチュート級と言えばイギリスの潜水艦。

つまりは味方のはずの潜水艦なのだ。

「二つ目は?」

『えつとですね、ゴキブリです!』

私はそれを聞いた瞬間、さつきまで着いていた頬ずえからずり落ちた。

いきなりレベル下がりすぎでしょ!!

「い、意外と女の子らしいのね・・・」

『ゴキブリを見かけたら火炎放射器でその建物ごと浄化しないと気が済まないみたいですよ?』

「・・・」

怖すぎる。

『ゴキブリ||未知のウイルスの元。つまり消毒。そして解決。私は世界を救うって心の中になりました』

「どんだけ嫌いなよ・・・」

『あ、そうだ、1番苦手なものの前にもう一つ苦手なものがありましたよ』

「3つじゃなかったの?」

『忘れてましたてへっ☆』

「・・・封じ込めようかしら」

『お許してくださいマーフィ大明神様』

大明神ってなんかヤダ。

『あ、あの・・・もうふざけないので許してください・・・』

「いいわよ・・・」

私はため息を付きながらコーヒーを飲む。

『ええっと・・・ジエームズさんって女の子として扱われるのが嫌みた
いですよ』

「え?」

『可愛いのもつたいないですよねー・・・』

「・・・何となく分かるわ・・・」

『そうなんですか?』

「あの子、聞いた話ただけけど悲惨な状況に何度も直面して・・・仲間
もいっぱい失って・・・自分も沈みそうになりながらも戦ってたんだ
からね・・・」

『・・・』

私は船の時代に実戦を経験してない。

だからあの子がどんな気持ちだったかは分からないが、たくさん
戦ってたくさん傷ついて・・・たくさん人を殺して。

だから普通に女の子として扱われる事に違和感を感じてるのだろ
う。

「そうだ、1回あの子を心底可愛くしてみましようか」

『どうやるんですか?・・・まさかマーフィさんそれだけはダメですー
!!』

「違うわよ!!たぶん貴女が想像してる事とは違うから!!」

『・・・残念です』

「どっちよ・・・」

『で、どうやるんですか?』

「まあ普通に可愛い格好でもさせて姉妹デートとかね」

『・・・もしナンパされたらどうするんですか?』

「大丈夫よ、これでも軍人なんだから」

『いえ・・・その・・・ナンパしてきた人達がなんですけど・・・』
「どういうこと？」

『ジエームズさん下手すれば逆に殴り倒して・・・とか』

「・・・あなた私の妹になってイメージもってるの？」

『ご、ごめんなさい・・・』

「まあいいわ・・・そういえば1番苦手なものって？」

私は1番気になっていた事を聞く。

『はい！言いたくてうずうずしてました！ずばり・・・』

いったい何が苦手なんだろうか。

あの子を知りたいチャンスだ。

『幽霊です！』

「あだっ!!」

頬ずえからずり落ちて顎を強打した。

痛い。

「幽霊が苦手なの？あの子・・・」

『ジエームズさん曰く、ゾンビとか妖怪とか何か実体があるならトマホークでも撃ち込めば解決するけど幽霊は物理で殺せないから嫌いらしいです』

「あ、あの子らしい・・・わね・・・」

『でも私は大丈夫みたいなんですよね・・・残念です・・・』

「あら？そんなの？」

『何かその・・・アスロック撃ち込めば倒せそうって思われてるみたいで・・・』

「・・・あの子の苦手基準は武器が効くか効かないかなの・・・？」

でも私はちよつとしたイタズラを思いつく。

「ねえ、シンビルスク。あなた幽霊のお友達居ないの？」

『いやあの・・・そりやいな事ないですけど・・・』

「ちよつとジエームズを驚かせてみましょうよ。もうすぐ帰ってくるし」

『いいですけどどうやるんです？』

「幽霊ってうんと怖い状態とかに出来ないの？」

『私達をなんだと思ってるんですか!?!』

「ほら、怖い映像とかにあるような感じで部屋に立ってこれるだけでいいから」

『まあ・・・それなら・・・じゃあちよつとまってて下さいね』

「うん、よろしくね」

そう言った2秒後だった。

『お待たせしました!』

「はやっ!?!」

『いやー、飴ちゃんあげたら喜んで引き受けてくれましたよこの子』

「・・・え?この子?というかどこに居たの?」

『姿見せてくれるって言うてるんでまって下さいね!あ、そうだせつかくなんで目をつぶってくれます?』

「え?あ、ああ、分かったわ」

言われた通り目をつぶる。

その後なんだか顔の周りに暖かいものが・・・

これ絶対に何かいる・・・

『はいー!いいですよー!』

私は意を決して目を開けた。

そこには・・・

「によわあああああああ?!?!?!」

10歳くらいの女の子が居た。

居ただけならいい。

前髪垂らしてしかもその隙間から吸い込まれそうなくらい真っ黒になった目が見えた。

しかも無表情。

あとそれが20cmも無いところにいた。

『あはははー!ビビりすぎですよー!』

「び、ビビるわよこんな近くにいたら!!」

『こんな近くになって前から居たんですけどね』

「え」

『あれ？気づいてなかったんですか？たまにマーフィさんの枕元に居ますよ？普段はその角でテレビみたり雑誌読んだりしてますけど』
「ちよ、ちよつとまってる？嘘よね？」

『私、この鎮守府というかこの近くのお友達ってこの子だけですよ』
私は一気に鳥肌が立つ。

『あ、ちなみにこの子、自分が思う最強に怖い姿してって言ったら今まで研究してきた成果を果たす時って意気揚々と変身しましたよ』

「なによそれ!!!」

『ふだんはこんな感じですよ』

そして目の前の女の子が消えたと思ったら今度は普通に可愛い女の子が立っていた。

・・・というか幽霊って変身できるのか・・・

「心底ビビったけど・・・とりあえずこれでイタズラしましょうか」

『おー!』

女の子は声は出せないようだが笑顔で手を上げた。

くネイサン・ジエームズく

「あー・・・やつと終わった・・・ビール飲みたい・・・」

今日は電が食堂勤務の当番らしく、代わりに秘書をしてくれと言われた。

それならいいが仕事量が多すぎる・・・

というかレーダーの不調を治すのがなぜに提督直々なのか・・・

「めんどくさ・・・飲んで忘れよ・・・」

そして部屋の前に到着した。

「そーいやマーフィ今日は休みかー・・・マーフィお酒弱いから一緒に飲んでくれないしな・・・まあいいや」

そんなこと呟きながらドアを開けた。

すると部屋は真っ暗だった。

「あれ？マーフィ居ないのー？」

そう言ってみるが返事がない。

「外出かな。まあいいやー、電気電気つと」
その時だった。

何か目の前に暖かい物を感じた。

「ん？何これ」

前には何も無い。

「やば・・・疲れすぎてるのかな・・・」

そう思いながら電気をつけた。

そしてふと正面を向いた時だった。

目の前に白い服を着た女の子が。

しかも前髪垂らしてその隙間から真っ黒な目が覗いている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私の思考が停止する。

・・・私はこんなんだけど、幽霊だけは苦手だ。

特にこんな呪ってきそうな奴。

やばい泣きそう。

「・・・・・・・・！」

私は恐怖に抗いながら部屋を猛ダツシユで飛び出す。

向かうは提督の執務室。

く提督く

「さて、今日は電が食堂勤務だし食堂行くのもいいな」

終わった書類をまとめてコーヒーをすすする。

食事までまだあと30分ほどある。

「やっぱり電が入れてくれるコーヒーのほうが美味しいな・・・」

自分で入れてみたはいいが何か違う。

やっぱり電のがいい。

なんてしてる時だった。

ドアが蹴破られる。

「な、なんだ!？」

驚いてドアを見ると顔を真っ赤にして俯いているネイサン・ジエー
ムズさん。

・・・今度は何事だ!?

「お、おいジェームズどうし・・・」

するとジェームズは無言で俺に近づいてきた。

耳まで真っ赤になってよく見ると震えている。

というか仕事で来てた米海軍の迷彩服のままだ。

「!？」

そしてまた抱きつかれた。

「ど、どした!?!何があった!?!」

状況が飲み込めない。

あとまた電に殺されかける・・・

「ジェームズ?」

「う・・・ぐすつ・・・」

「またか!?!またなのか!?!」

俺は前の出来事を思い出す。

マーフィとシンビルスクがイチャイチャしてた事だ。

「・・・部屋変えるか?」

無言で頷く。

というか鳩尾あたりが濡れてきた。

これ相当泣いてないか・・・

「ひぐつ・・・私・・・」

「どした?」

「ぐすつ・・・私ね・・・」

「ああ、なんだ?」

とりあえず聞いてやるか・・・

「うえっ・・・物理で殺せない幽霊嫌いなもの・・・ぐすつ・・・うつ・・・」

「・・・はい?」

「どういうこと?」

「・・・どういうこと!?!」

「すまんジェームズ。何が言いたいのかわからん!」

「だから・・・ね・・・ゾンビとかなら・・・ひぐつ・・・トマホーク

撃ち込めば・・・死ぬでしょ・・・?」

「・・・いやまあ・・・うん」

「でもね・・・Japaneseだね・・・Ghostには効かないよ・・・」
「・・・すまん。全然わからん」

「だから・・・！幽霊嫌いな・・・！怖いんだよ・・・」
「・・・もしかしてアレか。」

コイツの中で怖い幽霊、怖くない幽霊はミサイルとかその辺の効果があるヤツらか効果が無いヤツらなのか・・・
てかゾンビって幽霊？

「分かった、とりあえず俺から離れて座れ。な？」

「・・・やだ・・・」

「なんでだ」

「・・・今の顔・・・見せない・・・」

「・・・お前も何だかんだ女の子らしい所あるな・・・」

「違う・・・」

まあいいや・・・。

そう思いながら頭を撫でてやる。

「・・・ありがとう」

「これぐらいしか出来ないがな・・・」

「・・・大丈夫・・・これ以上の事は電にしてあげて・・・」

「・・・お前って何か泣いてるとかそういう弱くなった時は本当に女の子って感じだな」

なんて言いながら立ったままはキツくなってきたソファアに座る。

ジエームズは抱きついたまま一緒に座った。

「・・・なんか地味にいい匂いが・・・つていかん!!このままでは浮気になる!!」

「てーとく・・・」

「なんだ？」

「少し落ち着いた・・・借りたものあるんだけどいい？」

「ああ、なんだ？」

「シグ・・・」

「なんで君は拳銃をご所望なのかね・・・？」

「・・・いいから貸してよ」

「頼むから誰も撃つなよ・・・」

そう言つてSIG P226と弾倉を渡す。

ジエームズはまだ目が赤いが・・・まあいつものジエームズだ。

「ありがとう・・・」

そう言つて部屋から出ていった。

「大丈夫かなアイツ・・・」

めっっちゃ不安だ。

「ネイサン・ジエームズ」

銃は心強い。

私は拳銃を握りしめてもう1度部屋の前に立つ。

「すー・・・ふー・・・」

息を大きく吸い込んで私はドアノブを持たずに拳銃で狙う。

怖くてドアノブが持てない。

とりあえずぶつ壊して開けよう。

4発ドアの鍵の部分に撃ち込む。

そしてドアを蹴り開ける。

「によわああああ?!!?」

開けた瞬間聞こえたのはマーフィの悲鳴と目の前にいる幽霊。

「ふふっ・・・見つけた・・・」

私はそう言つて拳銃で狙う。

『え、ちよつ、ジエームズさん!?!』

無言で弾倉の全弾をぶち込んでやる。

『ひにやあああああ!!!』

幽霊が悲鳴を上げて逃げ回る。

その時マーフィの後ろに小さな女の子の幽霊がいた。

「・・・ここにもいた」

「ちよ、ジエームズ落ち着いて!!」

私は弾倉を新しく差し込んで再装填する。

だがマーフィに押さえ込まれて撃てない。

「離してマーフィ!!そいつ殺せない!!」

「殺すも殺さないもすでに死んでるからこの2人!!」

『そそそそそそそうですよ落ち着いてください!!』

「普段冷静なのにどうしたの?」

マーフィはそう聞いてきた。

「私は幽霊が嫌いなもの!!」

そう叫んで腕を振り払って拳銃をふたたび話しかけてきた方の幽霊に向ける。

だが・・・

「やめるバカ」

「あ、提督・・・」

「部屋途中でドンパチやるんじゃねーよ・・・まったく」

「返してよ!!」

私は提督に向かって叫んだ。

「・・・お前が幽霊苦手なのは分かるがな・・・コイツ、覚えてないのか?」

そう言っ指さすのはよく良く考えたら思い出した。

シンベルスクだ。

「あ・・・で、でもコイツは・・・?」

そう言って私は提督の後ろを指さす。

「ん?」

ゆっくりと後ろを振り返った。

そこにはさっきの女の子の幽霊がいた。

白い服に長い髪・・・

「のわああああ!!」

そしてまさかの拳銃乱射。

「あんたもなの!?!」

マーフィが提督に向かって叫ぶ。

「あー・・・びっくりした・・・」

提督はそう言いながら胸をなでおろしていた。

さっきの幽霊は居なくなっていた。

「……とりあえずジエームズこっちこい」

「なんで」

「部屋変えてくれって言ってただろ」

「あー……うん」

「えっ!？」

マーフィが目を丸くして驚いている。

「すまん、すぐ部屋割りを変えるから少しの間一人部屋で我慢してくれ」

「え?あ、う、うん……分かったわ……」

悲しそうな顔をするマーフィを見たら何とも言えない気持ちになった。

「……」

「どうした?」

「やっぱり私、このままの部屋でいい」

「いいのか?」

「うん。この部屋にマーフィー一人にさせれないよ」

「そか。じゃあ俺はこのまま飯行ってくるよ」

そう言っつて提督は拳銃を仕舞って去っていった。

「……」

「どしたの?マーフィ」

「いえあの……ごめんなさい!」

「え?」

マーフィは涙目になりながら謝ってきた。

「私……貴女が幽霊嫌いつて聞いてイタズラしちやったの……」

「あー……なんだ、マーフィのイタズラだったんだ」

「怒らないの?」

「こういうドッキリつてアメリカじゃ普通でしょ?私は懐かしくて好きだよ」

私の知ってるアメリカはもうこんなドッキリすら出来ない状態だったんだ。

なんだかこういう雰囲気は懐かしくて悪い気分はしなかった。

「でもマーフィすごいよね。シンビルスクも。あんなリアルな幽霊の格好するなんて」

『あの・・・拳銃撃ちまくられてなんですけど・・・私も立派な幽霊なんですけど・・・』

「あんたアスロック撃つたら死にそうじゃん」

『ジエームズさんの怖い基準ってあれですか!?物理攻撃効くか効かないかですか!?!』

「当たり前でしょ。私の心の格言は『血が出るなら殺せるはずだ』だよ」

『物騒すぎますよ!』

「いや、貴女が言えた話じゃないと思うわ」

『マーフィさんは冷静に突っ込まないでくださいいい!!』

なんて3人で笑っていた時だった。

マーフィが爆弾を投下していく。

「あ、そうそう。貴女が本気でビビってた幽霊だけどアレ本物よ?シンビルスクの友達なんですって」

「・・・!?!」

『あの子、生きてる人間のほうがよっぽど怖いってどっか行っちゃいましたよ・・・私の妹みたいな存在だったのに・・・ぐすん』
いや待って。

本物?

モノホンなの?

「ジエームズ?どうしたの?」

「うっ・・・え・・・今日もう一人じゃ寝れないよ・・・」

「ジエームズが泣いた!?!」

私だって泣く時は泣くんですよ・・・

「あ・・・えっと・・・よしよし」

マーフィが抱きしめてくれた。

『あー!!ジエームズさんずるいですー!』

「悪霊退散」

『ひどい・・・いいですよ・・・私角っこ丸くなってますもん・・・ぐすん・・・』

「ジェームズ、ごめんね。怖がらせて」

「ぐすっ・・・大丈夫・・・」

そのまま2時間くらい姉に甘えるような感じになっていた。

ブラック鎮守府の捜査

「ガサ入れ……ですか……」

執務室に俺と海軍本部の将校。

「うむ。ブラック鎮守府の摘発でな。それで捜査に……」

「なんで俺なんすか」

「ほら君あれじゃん……元グリーンベレーじゃん」

「元グリーンベレーの俺に勝てるもんか……とか言わせたいんですか
アンタは。あと俺はSEALsです」

「そうだっけ？まあいいや、とにかく君の鎮守府から地上戦が出来る
艦娘を1人連れて行ってくれ。表向きは鎮守府と鎮守府の情報交換
みたいなものだ」

「だから他のヤツに頼めつての……はあ……了解しました」

なんで一々俺にこんな任務が……提督の仕事じゃねーだろこれ。

この話電が聞いてなくて良かった。

上の言う摘発なんて対象が生きてようが死んでいようが構わな
いって意味だからな……

「陸戦得意なヤツなんて居たっけな……不知火ですら陸は苦手って
言ってたし……」

「まあ考えておいてくれ。出発は明日だ」

「明日!?!」

「こういうのは一刻を争うからな」

「いくら何でも急すぎるだろ……」

「報酬は弾むぞ?」

「良いように使いやがってからに……了解しました」

将校は納得したのか頷いて出ていった。

「はあ……陸戦得意そうなのはイージスの連中か……いそかぜは……
休暇だしマーフィーはまだ怪我治ってないし空いてるのはジエーム
ズか」

早速ジエームズを呼び出す。

ちょうど近くに居たのかすぐに来た

「はいよ、呼んだ?」

「お前これとか使える?」

M9とMP7を渡す。

「うん、普通に使えるよ。どしたの?陸で戦えって?」

「まあ・・・そんなもんだな。ブラック鎮守府摘発だと」

「それで陸戦できそうなのが私だからって事ね・・・まあいいよ。任せ
て」

ジェームズは了承してくれたようだ。

それにしても上もブラック鎮守府は即死刑みたいな事言ってるの
にまだやるヤツいるのか・・・

大抵は艦娘を性欲処理機だと勘違いした馬鹿相手だが。

「あ、そうだ。銃は自前のがあるからいいよ。それに私拳銃のほうが
慣れてるから長いのは提督が持つときなよ」

「長いのも隠し持てるサイズだからな、俺も拳銃くらいか」

最悪体術もあるから大丈夫だろう。

「電に言わなくていいの?」

「言ったら素直に行かせてくれないだろ、上もそれを知って電が居な
い時にいつも来やがるんだよ・・・」

「好きな手を汚させたくないんでしょ。まったくラブラブだね」

「どうした?お前も誰か欲しいのか?」

少しからかってみた。

「私は別に・・・」

ジェームズは少しだけ顔を赤くしてそっぽを向く。

「まあ俺は止めりゃしないから街に出て彼氏でも作ってこい」

「だから私は別になって言ってるじゃん!」

「そうか?今さっきちよつと顔赤くしてたぞ?」

さらにからかうとジェームズはその自前の拳銃を取り出して向け
てきた。

「殺すぞボケナス」

「オーケーオーケー。落ち着こう。俺が悪かった」

ジェームズはそのまま部屋を出ていった。

ブラック鎮守府なんて胸糞悪いのが大半だし片付けたところでスツキリしないんだよなあ・・・保護した艦娘には心に傷を負ってるし治すのも簡単にはいかない。

「準備つってもなあ・・・」

持ち物は護身用の拳銃とダミーの書類くらいだ。

今日はもうさっさと寝よう。

電は明日まで姉達と遊びに行っている。

「とりあえずメールで送っとくか」

電に明日から少し居ないとメールを送るとすぐに返ってきた。

可愛い絵文字付きで気を付けてねという感じだった。

「可愛いなホント・・・」

ケータイで電と撮った写真を眺めていた。

大半が寝顔の写真だったが・・・

↳翌日

「用意はいいか？」

「いいよ、タバコもバッチリ買ってきたから」

「そこかよ準備って！」

なんてツツコミながらヘリに乗り込んだ。

目標の鎮守府は1時間ほど飛行したところにある。

「ブラック鎮守府か・・・」

「どした？」

「いや、その人って私たちの事なんて思ってるんだろうって思ってるね」

「さあな・・・ただの兵器とか思ってる奴も居れば性欲処理の愛玩動物
としか思っていないのも居るしな・・・」

人それぞれとしか言いようがない。

共通してるのは胸糞悪い事しかないくらいだ。

「ねえ提督」

「なんだ？」

「提督は私たちの事どう思ってるの？」

「なんだいきなり。まあ・・・なんだ。家族みたいなもんだな」
「そっか」

なんて話をしてるうちに鎮守府に着いた。

「じゃあまた帰りは呼ぶ、操縦お疲れさん」

「了解しました！お気を付けて！」

へりが離陸していくと出迎えの提督と艦娘が出てきた。

秘書は鹿島だった。

提督は見た目人の良さそうなおじさんといった感じだ。

特に艦娘に疲労の色も見えない。

「ようこそ、そちらが秘書ですか？」

「DDG151ネイサン・ジエームズです」

「DDG・・・はて」

「まあそのへんはゆっくり中で話しましょう」

「そうですね」

司令部に案内される。

特に変わった雰囲気はないが。

「それで情報交換とは」

「えーっと・・・あーなんだっけ」

書類を探しながら思い出す。

たしか訓練に関してだ。

「あ、思い出した。艦娘にも格闘訓練をしろって事でその訓練のやり方についてです」

「ほう、格闘訓練ですか。ベッドの上ですか？」

相手の提督はイタズラっぽく笑う

「もう提督さんったら、ふふ」

「とりあえず下ネタは置いといて」

本題に入る。

「格闘経験者はいるんです？」

「あー・・・確か元アメリカ軍人だったヤツが・・・鹿島、すまないがクックを呼んできてくれ」

「了解しました」

「元アメリカ軍って奇遇ですね、俺もですよ」

「ほう！海軍ですか？」

「海軍は地上に降りてからだったかな」

「ということは元パイロットですか！」

「そうですね」

なんて話をしていたら黒人のおっさんが入ってきた。

「ああ、クツク。この人も元アメリカ軍人らしいよ」

「ほう」

雰囲気で察する。

たぶん俺と同じ特殊部隊出だろう。

さて、俺は本題の捜査でもしようかな

「提督、鎮守府を案内してもらっていいですか？」

「ええもちろん。鹿島、連れて行ってやれ」

「了解しました」

「ジエームズさん……だったかな、手伝って欲しい事があるからこつちに来てもらっていいかい？」

「了解」

「じゃあジエームズ、後でな」

あからさまに今、ジエームズと俺を切り離れたな。

気の所為だといいが。

ジエームズは何かを察して雰囲気が変わった。

「じゃ、よろしく」

「はい」

鹿島に連れられて歩く。

特に鎮守府に変わった施設があるわけでもない。

ていうか俺の鎮守府が変わりすぎなだけか……

「えーっと、ここが工廠ですね。ちなみに向こうが鎮守府の防空指揮所になります」

「へえ、武装は？」

「そうですね……高射砲と……えっとたしかソ連から輸入した自走砲でえっと……ZS……」

「ZSU?」

「それです!たしか四連装でした」

「てことはZSU—23—4か」

「はえ・・・お詳しい」

「うちの鎮守府にも似たようなのいっぱいあるからな」

「あ、あとこれはクツクツさんのご意見で導入した、ハンビーって車ですね」

「なるほど」

1時間くらいに案内してもらい司令部に帰ろうとした時だった。

「あっ」

「どした?」

「すみません、ちよつと靴紐が」

「そうか」

一瞬気にしなかったがよく見たら靴紐なんて着いていない。

俺はとっさに拳銃に手をかけて言う

「何考えてる、靴紐なんてついてないぞ」

「・・・命令なんです」

鹿島は突然スタンガンを取り出して突っ込んできた。

「あぶなっ!おい動くな!」

「命令守らないと・・・分かってください提督さん!」

「分かれもクソも知るか!!いいか動くな!」

だが鹿島はまた体当たりしようとしてくる。

「この・・・!」

上手く相手の首を締めあげられるように捕まえた。

「さつき聞いてたか知らんが俺は元は特殊部隊出の人間だ、格闘でどうにか使用なんざ100年早いんだよボケナス」

「か、はっ・・・!」

「正直に話せ、あの提督はどこに行った。この鎮守府で何をしてる」

「な、何も知りません・・・!」

「知らないならなんでスタンガンで攻撃した?」

「・・・」

「黙りか？まあいい、お前はここで寝てろ」

「・・・!!かはっ！」

気絶させるために手に力を込める。

鹿島の目が少し虚ろになってきた。

「・・・許せ、起きた時にすべて終わってる。」

くネイサン・ジエームズく

鍵の閉まる音を私は聞き逃さなかった。

スカートを触るフリをして足のホルスターのP226のハンマーを起こした。

「いやー、良かった。あの提督さん強そうですね」

「そりやSEALsだからね」

「ところで私は君に聞きたい事が沢山あるんだ」

口調も変わっている。

よく見ると窓は簡単に割れない加工が施してあるしドアは鍵がかかっている。

「聞きたいこと？」

「ああ、君はとても可愛い。好みの男性はいるのかな？」

「別に。いないけど」

「ああ、その冷めた態度も素晴らしい・・・」

「・・・何言ってるの？さっきから」

大体何が起きそうかは察した。

下手に拳銃を出すと向こうも武器を使ってくる可能性もある。

少し弱めの女の子を演じるか。

「それでだね、聞きたい事って言うのは全部君の体に聞くから大丈夫だよ・・・」

「ちよ、やだ・・・やめてよ」

「ふふふ、もう逃げられないよ」

「何それ、帰るから」

ドアに行き手をかける。

もちろん開かない。

「あれ、鍵？」

「大丈夫、すぐ気持ちよくなるから・・・ふふふ」

「ひっ・・・！」

「敢えて怯えた雰囲気を出す。」

「ああ、いいねえ・・・その怯えた顔・・・すぐに気持ちよくしてあげるからねえ・・・」

「ゆっくりと近づいてくる。」

「武器は何も無さそうだ。」

「私は必死にドアを開けようとするフリを続けた。」

「や、やだー！来ないでー！」

「怖がらないでいいよ・・・」

「男は私から5歩くらいに近づいた。」

「・・・まあ、ちつとも怖がってないけどね」

「なっ・・・!?!」

「拳銃を抜いて少し距離を取る。」

「初弾は装填済、ハンマーも起きている。」

「つまりは私が引き金を引けば弾丸は発射されるという事だ。」

「艦娘ならこういう事しないって思ってた？残念だけど、私は陸戦も得意だから。アーレイ・バーク級を舐めないで欲しいかな」

「私はいたずらっぽく笑いながら言うが銃口は決して逸らさない。」

「わ、私を撃てば君の立場は無くなるぞ」

「なにそれ。というか、私が独断で拳銃を突きつけてるって思ったの？これ、上からの命令だから。アンタを捕まえろって」

「な、なら撃てるわけ・・・」

「下半身に脳みそでも着いてるの？あの上の連中が生け捕りを重視してるわけじゃないでしょ。提督のところに来た命令だと、死体でも問題ないって来てるから」

「・・・」

「相手の提督は俯いた。」

「そういう事だから妙な真似は・・・」

その時だった。
相手は突進してくる。

「うわっ!？」

・・・しまった、油断した。

押し倒される形になってしまった。

持ってきていたP226が手を離れてしまう。

「ふふ、何だかんだ女の子だ」

「ちよ・・・クソっ・・・!」

いくら艦娘といえど、体格のいい男に押さえつけられてはどうしようもない。

「は、離して!!」

「ああ・・・まずその減らず口を塞ごうか」

「なにを・・・んぐっ!？」

口に丸めた布を押し込まれた。

しかも何か薬でも入れているのか妙に甘い。

両手を押さえつけられているから逃れようがない。

「・・・さて、ではその体を拝見させていただけようかな」

「んんっ!？」

この野郎、動けないのをいい事に・・・

男が私の服の前をはだけさせ下着に手をかけようとした時だった。

数発の銃声と共にドアが蹴破られる。

「ジェームズ!!」

提督・・・。

「なん・・・!？」

「てめえこの野郎・・・良くも俺の可愛い部下に手を出しやがったな」

提督の額には青筋が浮かんでいた。

だが、私を押さえつけている相手も往生際が悪いのか私が落とした拳銃に手をかけようとした。

「この豚野郎が!」

提督は数発発砲した。

相手の腕に何ヶ所か風穴が開く。

「ぎやああああああ!!」

撃たれた事で相手は私の上から少し動いた。

おかげで右手がフリーだ。

思いつきり顔を殴りつける。

「ぶはっ！提督、あとちよつとで大事な処女が持つてかれる所だったよ」

「そりやすまん」

「まあでも・・・ありがとう」

ふと相手のほうを見たら無線機を手にしていた。

「総員に告ぐ！横須賀からの訪問者はスパイだ！射殺せよ!!」

「おまつ・・・!!」

基地中に警報が鳴り響いた。

「ふ、ふふふ、これでお前らもおしまいだ・・・」

「てめ・・・」

提督が拳銃を向けようとした時だった。

相手の方が先に発砲した。

その弾丸が私の足に当たった。

「あぐっ!？」

それ見た提督は無言で応射、相手は額を撃たれて崩れ落ちた。

「大丈夫か!？」

「な、何とか・・・」

当たったと言っても太ももを掠めて少し肉が抉られた程度だ。

デカイ切り傷といったくらいだが・・・。

痕が残りそうだ・・・

「とにかく逃げるぞ!」

「んじやおぶって」

「お前な・・・」

私を担ぎ上げて提督は航空機がありそうな格納庫に向かった。

「まったく面倒な事になったぞちくしょうめ・・・」

「まったくね・・・いてて・・・」

「大丈夫か?」

「まあ何とか・・・それよりもなんかさつきから体が火照ってる気がする・・・」

「そういえば顔も赤くなってるな・・・さつきと帰るか」
物陰に隠れながらそんな話をした。

「つとそうだ。上に連絡して警備兵を止めないとな」

「そだね、撃たれたらたまんないし」

「まったくだ」

それにしてもさつきからやたらと体は熱いしなんかドキドキするし・・・なんなんだ。

提督は無線で本部と連絡を取り合っていた。

「提督・・・」

「ん？どした？」

「ううん、何でもない」

「そか」

「連絡は終わり？」

「ああ、30分ほどで本部の憲兵が来る。それまでは念の為隠れないとな・・・」

ふと周りを見渡すと人目に付かなさそうな場所に小屋があった。

「あそこは？」

「ん？ああ、あそこにするか」

「んじや、運ぶのよろしく」

「はいはい、お姫様」

そうして小屋の中に走り込んだ。

く提督く

「はあ・・・はあ・・・」

「大丈夫か？」

「へ!?う、うん、大丈夫・・・」

「とは言っても何か変だぞ・・・出血は止まってるし・・・」
ジエームズは妙にトロンとした顔をしている。

・・・なんかどっかで見たとあるような。

「お前まさか風邪ひいてたな？」

「え!? な、何してるの!？」

「何って熱あるか見るんだよ」

おでこに手を乗せてみる。

汗ばんではいるが熱はない。

「んー・・・俺の体温が高いのか？」

こうなったら・・・という感じでおでこ同士を合わせてみる。

「ツツツツ!!」

ジエームズからは声にならない声上がる。

「ど、どした!？」

「な、なななんでもない!!」

「そ、そか・・・」

だがジエームズは苦しそうに呼吸していた。

「はあ・・・はあ・・・」

「・・・」

まさか口に突っ込まれてた布に毒でも仕込まれていたのか・・・。

いやそれならもつと早くに効果が出ているはずだ。

「ジエームズ、とりあえずそのマットレスに横になれ」

「だ、大丈夫」

「いいから」

体調不良なのにずっと立たせておくわけにもいかない。

少し汚れてはいるが倉庫代わりだったのだろう、小屋にマットレス

があつたのでそこに寝転ばせた。

「・・・暑い・・・」

「ん? そうか? ってお前何してる!!」

「・・・暑いから・・・」

暑いからと言いながらシャツのボタンを外し始めた。

・・・下着がこんにちわしてる。

「バカお前、下着見えてるぞー!」

「・・・提督になら見られていいよ」

「何仰ってるんでございますの!？」

「・・・だって助けに来てくれた提督カツコよかった」

「部下を助けるのは当たり前・・・ってだから更に脱ごうとするな!! 仮にも異性の前だぞ!!」

「・・・だから提督になら・・・」

妙に色っぽい顔をしながらそう言う。

・・・そして俺はピンと来る。

「お前媚薬かなんか飲まされたな!？」

「なにそれ・・・ていうかも・・・」

そしてジエームズは我慢ならんというように俺の手を引っ張った。

「おわっ!？」

「提督・・・」

「ちよ、まつ・・・俺は妻帯者だぞ!!」

「・・・私じゃダメなの・・・?」

「ダメとかダメじゃないとかじゃなくて・・・いやダメだろ!!」

ジエームズは俺の顔を顔を近づけてくる。

何とか片手で押さえつけて耐えてはいるが。

「提督・・・お願い・・・」

「お願いじゃなくて!!」

「私、提督の下で居られて良かったって思ってるのに・・・」

「思ってるのにじゃないわ! ていうかお前薬効きすぎだよ!!」

いつものクールな感じとは打って変わって今度はなんか妙にエロいお姉さんと化していた。

「提督・・・好きなの・・・」

「分かった、俺のこと好きなんだな! 分かったから落ち着けてこの野郎!!」

「・・・この間からずっと我慢してるのに・・・」

「知るかな事! てか薬のせいでお前変な事になってんだ分かってるのか!？」

「私の正直な気持ちだよ・・・!」

「分かった、分かったからとりあえず離せええ!!」

遂には足を腰に絡めて俗にいうだいしゆきホールド状態になった。

・・・まずい、俺の体制的にバランスを崩すとコイツとキスすることになる・・・

するのが嫌とかではないが・・・いろいろダメなので必死の抵抗を続けた。

「いかん・・・そろそろキツイ・・・」

「ていとく・・・お願い・・・」

「んぐぐぐぐ・・・」

その時だった。

「大佐!!」

小屋のドアが開けられた。

「大・・・佐・・・」

「違う違う違う!!誤解だ誤解!!」

「・・・邪魔しやがって・・・」

本部の憲兵隊の到着でようやく解放された。

その後は鎮守府の艦娘の保護等の処理を任せて帰路につく。

ほんの5時間ほどだったのにどつと疲れた・・・。

ジエームズは薬が効きやすい体質なのか帰りの航空機の中でも火照った顔をしたままだった。

さすがに人目があるからかあと一歩で踏みとどまってるようだが・・・。

そんなこんなで横須賀に戻り、執務室に帰ってきた。

今回は突然だったので誰にも代理を頼まずに出たから執務室はカラだった。

・・・これがまずかった。

「提督・・・人、居ないね」

「ちよ、待てー!」

ジエームズさんのスイッチ、オン。

鍵も閉められた。

だが、今度は運がいい事に帰ったことに気づいたマーフィが執務室に来たのだった。

「あれ?提督ー?いないの?」

「ま、待ってくれ！今開ける！」

「・・・チツ」

ジェームズは不機嫌そうに舌打ちをした。

その後は状況を説明してマーフィに連れて帰って貰った。

俺は疲れきった体で部屋に戻りシャワーを浴びた。

今日は電は泊まりだとさっきメールが入っていた。

・・・戸締りはしっかりしとこ・・・

「さてと・・・一杯飲んで寝るか」

冷蔵庫からビールを取り出して飲む。

「ふあ・・・」

布団に潜って目を瞑ればすぐに眠りに落ちた。

この時俺はジェームズの薬の効きやすさをもっと理解しておくべきだった・・・。

「ん・・・？」

何かが体の上にいる。

そして俺が使っていないタイプのシャンプールの香り。

・・・目を開けるとジェームズがいた。

なお全裸。

「ジェームズ!？」

「あ、起きちゃった」

「おま・・・!」

よく見るとまだ顔が火照ってる。

何時間効果持続してんねん!!

「提督・・・私、2番目でいい、だから・・・」

「何が!?あと服着ろ!!」

あんのクソ野郎、ジェームズになんて事しやがる!!

おかけで大変な目にあってるんだぞ!!

と今頃地獄でBBQにされてそうなああの鎮守府の提督に心の中で恨み言を言う。

「もう我慢出来ない！」

「んぐ!？」

不意打ちのようにキスをされた。

「えへ、やつと出来た」

見たことないような幸せそうな顔。

「・・・ああもうどうにでもなれ・・・」

「ねえ提督・・・続き、いい?」

「ああもう・・・どうにでもなれ・・・」

このクソ提督と自分を心の中で罵った。

「ちゃんと避妊はするから、ね?」

「そこまでやるの!?!」

予想してなかった言葉。

「だって好きなんだよ、提督」

「いや、あの・・・これ逆レ○プって奴じゃね!?!」

「そうだけど」

「そうだけじゃねえ!!」

「お願い、今夜だけ・・・」

ジェームズは今にも泣きそうな顔だった。

「・・・あのな、なんでそこまでして」

「受け入れてくれたから・・・」

「何が?」

「私のこと、過去の事とか・・・」

「ああ・・・」

「その頃から・・・ちよつと気になつてた」

ジェームズは軽く泣きながら続けた。

「電がいるのは知ってる・・・けど、私、今日助けてくれて、それに受

け入れてくれて・・・何回も提督には助けられたから・・・」

「・・・そうか」

「・・・全裸でそんな事申されましても・・・とムード台無しの事を

心の中で思う。

「だから私、提督が好き」

「・・・俺は」

「分かつてる・・・分かつてるけど・・・お願い、今日だけは提督と寝

させて」

「・・・分かったよ・・・」

泣きながらここまで言われてどう断ろうか分からなくなったので諦めた。

・・・電に黙ってこれだと・・・殺されても文句は言えんな・・・
そう思いながら夜を越した。

くネイサン・ジエームズく

「ああああああ!!!」

「・・・やっちゃまったな」

「ヤツちまったよホントに!!!うわああああ!!!」

私はいろいろ思い出し提督の布団に顔を埋めて叫ぶ。

「あ、あれ全部薬のせいだから!!」

「・・・ここまでしといてか?」

あたりに散らばる昨日はお楽しみでしたねという痕跡。

「言わないでええええ!!!」

「・・・とりあえず服着ろ」

「そうする!!」

私は急いで服を着た。

・・・とりあえず昨日言ったことは本心ではあるけど・・・

アホ!私のアホ!!もう後戻り出来ないじゃん!!!

「・・・俺も大概クズだな・・・」

提督は天井を見つめてそう呟いた。

「私!全部私のせいだから!!」

「半分くらいは俺のせいでもあるがな・・・」

「ごめんなさい!!!」

私と提督はその後、なんとも言えない空気で部屋を片付けた。

夜間パトロール

「ネイサン・ジェームズ」

「はああああ・・・」

「さつきからでつかいため息ついてどうしたのよ」

「なんでもない・・・はああ・・・」

「何でもないわけではないですよ。ここなら誰も聞いてないし話してよ」

提督からの指示で私とマーフィーは哨戒任務に付いていた。

哨戒海域は鎮守府から150kmほどの海域だ。

レーダー類が完全に復旧してない今、イージス艦の私たちが鎮守府の目となっていた。

・・・そして私はこの前のことを思い出してため息を付いていた。

「じゃあ無線機は全部OFFで・・・」

「分かったわよ。ほら、話してみて」

「うん・・・」

私はこの前のことを全て話した。

マーフィーはそれを聞いて何を言うだろうと思っていたら意外と冷静な返しをくれた。

「あらま・・・ジェームズもやるわね」

「あらまって・・・」

「私はジェームズが提督の事好きだったのには驚いたけどね」

「まあ・・・うん・・・」

「いいじゃない。若気の至りって事で・・・電にバレたらヤバいだらうけど」

「・・・私も提督もその辺に埋まってるよきつと」

「あはは、かもね」

「笑い事じゃないよ・・・」

なんて話をしながら淡々と任務をこなす。

正直、提督と一緒にいると顔が真っ赤になってるので電が近くにいとバレるかもしれない・・・。

「そういえばジェームズ」

「なに？」

「初めてが提督？」

「なに・・・ぶっ!!」

私は意味を理解して吹き出した。

「な、何をいきなり！」

「いえ、何となくよ」

「何となくって・・・」

「で、どうなの？」

マーフィーは笑顔でそう聞いてくる。

「は、初めてだよ・・・」

「そっかそっか」

マーフィーは笑顔でそういった。

まるで妹から恋愛相談受けた姉のようだ。

・・・いや、そうなのだが・・・

「まあいいじゃない、好きな人からなんだから」

「そうだけど・・・」

私は2番・・・いや、それすらなれないという事が分かっているか

ら悲しい。

「まあジエームズが最近元気ない理由が分かってよかったわ」

「結果深刻だよ・・・はあ・・・とりあえずタバコでも・・・」

私はタバコをポケットから取り出して啜えた瞬間だった。

「リーダーが何かを捕捉した。」

「ん？」

私はタバコを啜えたままそれが何かを確認しようとする。

「マーフィー」

「ええ、捕らえてる。味方・・・？」

「提督に確認してみる」

「話せる？」

「仕事だから」

確かに少し気まずいが私は軍人。

気まずいからと言って無線通信ができないなんて軍人失格だ。

「提督、こちらジェームズ」

《こちら提督。なんだ》

「不明艦をレーダーに捕捉。横須賀への入港予定があるの？」

《いや、この時間帯だとないも・・・敵味方識別装置は？》

「アンノウン」

「ジェームズ、艦載機を上げるわよ」

「了解。艦載機をあげて確認するよ」

《了解》

無線を切つてへりを飛ばす。

目標はここから20km程度だ。

なんでいままで捕捉出来なかったのか・・・。

夜間のため目視確認できない。

「ジェームズ、武器はいつでも使えるように」

「分かってる」

武器の安全装置を解除した。

「向こうからは見つかつてなさそうだけど・・・何者かしら」

「ここまで堂々と海の上移動してるから艦娘かな？」

「もうすぐ分かるわ」

するとへりから情報が来た。

目標は艦娘のようだ。

「味方・・・ね。とりあえず入港予定ないっていうから所属を聞かないと」

「だね。私がやるよ」

無線をオープンチャンネルに合わせて呼びかけた。

「こちら日本海軍所属駆逐艦ネイサン・ジェームズ。そちらの艦名、目的地を知りたい。オーバー」

「・・・応答なしね」

「もう1度呼びかける」

その後何回かに渡って呼びかけたが応答無しだった。

その間にへりから新たな情報が来た。

艦娘は大和と金剛だという。

・・・なんでそんな戦艦娘がこんな所に。

「提督、大和と金剛って何か任務で出てるの？」

《ん？その2人なら今日そもそもどこにも行ってないぞ？》

「なら他の鎮守府・・・？」

《いや、この近くに大和を持つてる所はない》

「じゃあ一体・・・」

その時、遠くで何かが光る。

そして爆音も。

これは・・・。

「!!レーダーに感!砲弾がこっちに来てるわ!」

「こちら日本海軍!!敵じゃない攻撃を中止せよ!!」

「ジェームズ!私が迎撃するから連絡を!」

「了解!提督!攻撃を受けた!!」

《何!?味方からか!?!》

「味方からだよ!!どうするの!?!」

「スタンダード、発射!!」

「提督!!向こうから応答はないしいきなり撃ってきてるんだよ!どう

すればいい!?!」

《クソっ・・・!》

「ジェームズ!発光信号を試して!」

「了解!」

私は発光信号で交信を試みるが返事がない。

「応答無しだよ!!」

「なんだってのよ!クソ!!」

相手側からは砲撃時の発砲炎が絶え間なく見える。

明らかに沈めるつもりだ。

その時だった。

マーフィーが迎撃した砲弾の破片が降ってきた。

「あたっ!?!破片・・・?」

よく見てみるとその破片は深海棲艦の物とよく似ていた。

・・・これは・・・。

「提督！深海棲艦が艦娘をコピーしてるって話はないの?!」

《何を言ってる?》

「今、迎撃した砲弾の破片が私に当たったんだけどこれは深海棲艦の物だよ」

《・・・あの噂は本当の事かよ畜生・・・!》

「噂?」

「これ以上砲弾が増えたら迎撃しきれないわよ!!提督!!」

無線機越しからため息のあと提督が何かを決断した声色で言ってきました。

《2人ともよく聞け、あの2隻はの行動は反乱と認める》

「沈めろつての!」

《・・・ああ。その代わりなんでもいいからあの2隻のパーツを回収しろ。出来ることなら本体がいいが》

「そんな簡単に言うけどね、こっちだっていっぱいいっぱいなのよ!!とにかく反撃していいのね!」

《ああ、そうだ!ウエポンスフリー、交戦を許可する!》

「了解!ジエームズ、ウエポンスフリー!」

「了解!トマホーク用意!」

「大和クラスなら1発や2発じゃだめ・・・10発は撃ち込むわよ!」

「分かってるよ!ロックオン!」

「トマホーク発射始め!」

「ファイア!」

大和と金剛に対して20発近いトマホークが発射された。

「あとは命中祈って迎撃に専念だね」

「ええ、ジエームズは金剛からの砲弾をお願い」

「そんなもん認識しきれないよ、手当たり次第に行こう。無傷で帰るよ」

「言うわね、やってやるわ!」

全力で砲弾を迎撃し、回避する。

時折、迎撃をすり抜けた砲弾が近くに落ちるがその瞬間に見えるのはやはり深海棲艦の砲弾だ。

「やっぱり深海棲艦・・・？」

そう考えているとミサイルは目標に命中した。

爆炎と爆音が聞こえてくる。

「命中！発砲炎も見えなくなったわね・・・」

「確認しに行こう」

急いで現場に向かうとやはり・・・と言うべきか、見た目は完全に大和と金剛だが被弾した部位からは深海棲艦の部品などが見える。

これは深海棲艦のコピーした艦娘だ。

・・・だがこれは少し厄介な話だ。

「マーフィー、写真は撮った？」

「ええ、パーツも回収したわ」

「じゃあ急いで帰ろう」

「ええ、そうね」

私たちは鎮守府に急いだ。

く提督く

「噂であつて欲しかったんだがな・・・」

俺はため息をつく。

予想はしていたが恐れていた事態が発生しつつある。

深海棲艦が艦娘のコピーを作るという事態だ。

深海棲艦はどう考えるのかは分からないが、こっちの艦娘達に好き好んで味方を撃つヤツなんて居ない。

それに撃たれてもまずは誤射を疑うだろう。

きつとそこにつけ込んだのだろう。

人間側からしても艦娘の姿をしていたら警告もなしに発砲などしない。

まず、所属不明の艦娘が港に近づいてきたなら所属を聞く、答えなければ何度か聞く。

それでも答えなければ発砲の警告、警告射撃・・・。

しかし本体を狙う危害射撃などしないだろう。

拿捕を狙うはずだ。

その間に移動はし放題だ。

鎮守府の主要部を射程圏内に収めるまで航行を続けていても艦娘の姿をしている限りいきなりは撃たれない。

いや、撃たれることはない。

「これ・・・結構ヤバくないですか隊長」

「ヤバいってレベルじゃないぞ」

「もうすぐ2人も帰ってきますが破片などはどうします?」

「技術班に持ってって調べさせろ。その間にこのコピーがどこから来たのか探つてそこが敵基地なら破壊する」

「了解しました」

「はあ・・・いつ終わるんだろうな・・・この戦争は」

「・・・どちらかが諦めるまで・・・では?」

「どちらか・・・か」

この戦争の面倒臭い所は敵の首都を攻め落として国を占領してしまふという方法が取れない所だ。

しかし向こうはそれが可能なのだ。

人類側には取られると困る重要地点がある。

しかし敵には取られたら困る地点があるにしても首都を取られたりするほどのダメージはない。

そしてこのコピー艦娘作戦の内容を推測するに、コピーした艦娘がどこまで接近できるか。

そして上陸が可能ならそのまま首都攻略に向かうつもり・・・なのかもしれない。

そもそも一般人からすればいきなり艦娘が撃ってくるように見えるため軍全体のイメージダウンに繋がるだろう。

このコピー作戦は早めに潰さなければならぬ・・・。

その事について考えていると2人が帰ってきた。

「ただいま、無事帰ったわよ」

「・・・た、ただいま・・・」

ジェームズはこの前のことがあるからか顔を少し赤くしてそつぽを向いた。

俺も思い出して気まづくなる。

「報告は無線で聞いた通りだよな。お疲れ様」

「ええ、早めにあのコピー艦娘の出どころ見つけた方がいいんじゃない？」

「今全力でやってるよ」

「そう。あ、そうそう提督」

「ん？なんだ？」

マーフィーは俺の近くに来てコソつと言う。

「・・・ジェームズにやった事の責任取りなさいよ」

「ぶふっ!!」

「ふふっ、修羅場にならないようにね」

「もう既に修羅場だよ！」

そう言つてマーフィーは部屋から出ていった。

ジェームズは気まずそうに部屋に残っていた。

臨時秘書艦のアンドロメダは気を使ってか部屋から出ていった。

「・・・あ、あの・・・えっと・・・」

「なんだ？」

「この前はごめん・・・」

「・・・まだその事言ってるのか」

「そりや言うよ。薬盛られてたとはいえ・・・やっちゃいけない事やったわけだし」

「それを言ったらお互い様だろ。な？」

「そうだけど・・・」

「まあなんだ。ジェームズの素直な気持ちが分かって嬉しいよ」

慰めになるのか分からないが優しくそう言ってみる。

ジェームズは赤くなつて俯いたままだ。

「私は・・・2番に・・・なれないよね」

「・・・俺にはアイツがいるんだ。あんなことやっというセリフじゃないがな」

俺は苦笑いしながらそう言った。

「ああもう！そういう一途な所が私は大好きなんだよ！」

「ただいまなのですー!」

「・・・ジェームズさん、私に大好きと言った直後に電さんご帰宅。

「あ、い、電・・・おかえり」

「・・・」

黙り込む電さん。

「・・・やばい。」

「・・・司令官さん?」

「はい!」

「どうぞ続けてくださいなのです」

電は買い物袋を丁寧に部屋の隅に起き、普段は苦くて飲まないという缶のブラックコーヒーを持ってソファアに座った。

「・・・いや、どつちかって言うどふんぞり返った。」

「ジェームズさん? いいのですよ?」

「い、いやあの・・・ごめんなさいいい!!」

普段はぜったいありえないジェームズの絶叫しながら逃走する姿。

「あら行っちゃったのです」

「行っちゃったな」

「さて司令官さん?もしかして・・・隠れて浮気なのです?」

あらしトレートに聞いてくる。

「・・・バレたら死ぬ。」

「いや断じて違う!!」

「じゃあ・・・さっきのは何なのですかあ?」

ズズズと音を立ててコーヒーを飲む電さん。

「あ、いや、あれだよ・・・」

「・・・はあ、まあアレなのです。知ってましたけどね」

「はい?!何がでしょうか!?!」

「ジェームズさんが司令官さんのこと好きって事なのです」

「・・・マジで?」

「マジなのです!」

「いったいいつから・・・。」

「目を見れば分かるのです!最近ジェームズさん司令官さんと会うと

楽しそうなのです。それに司令室の帰り道とかたまたま笑顔なのです」
「よ、よく見てるのな」

「えへへ、でも司令官さんがモテモテなのは嬉しいような悲しいような……なのです」

「まあ……電からしたらな……俺が逆の立場なら同じだよ」

「司令官さん、ジェームズさんのことどう思うのです？」

「どうっていろいろのは？」

「そういう関係として……なのです」

「俺はお前が……」

「そういうの無しで！なのです！」

なんてこった退路が絶たれた。

「まあなんだ……良いとは思う。アイツの事はタイプの部類だよ」

「ここは仕方ないので正直に言った。」

「じゃあ司令官さん……」

俺は一瞬、最悪の事態を想像した。

離婚という最悪の事態を。

……だが答えは違った。

「重婚なのです！」

「……はい？」

「だから重婚なのです！」

「い、いやまて！お前自分で言ってること分かってるのか!？」

「？分かってますよ？」

「いやだったらなんで!？」

あまりに想定外の言葉……。

「重婚そのものは認められていますし、司令官さんの1番は私って所は変わらないのです！あ、でも3人目は許さないので！」

「ふ、2人目ならいいのか……」

「まああの……私もジェームズさん好きなので」

「……え？」

「い、いえあの！いそかぜさんたちみたいなのアレじゃないのですよ!？」

「ごめん、一瞬本気でそう思った」

「勘違いなのですか!!」

電曰く、強くそして優しい所が好きだそうだ。

そして・・・ジエームズが俺のことを好きだと知ってこの人となら俺が重婚したとしても許せる・・・そう言うことだそうだ。

「まったくモテモテなのです、司令官さん」

電は笑顔でそう言った。

・・・俺は心中複雑だがな・・・。

「ところで司令官さん。さっきまでジエームズさんと話してたのってそれだけですか?」

「ん、まあ・・・後の大規模作戦の話も」

「大規模作戦?」

「仮だがな。敵泊地の強襲だよ」

「なるほどなのです! あ、それで話戻しますけど、司令官さんどうするのです?」

「何がだ?」

「重婚」

「あ、ああ・・・」

どうするか・・・俺は悩む。

確かにジエームズも女性として好きだ。

だが・・・電がいる身で・・・。

「ふふっ、悩んでるのです。良かったのです」

「何がだ?」

「この事、一瞬で決めたらどうしようって思ってたのです。でも、司令官さんがちゃんと悩んでて安心したのです」

「あのな・・・悩まないわけないだろ」

「それでこそ司令官さんなのです! ちなみに私は賛成なので司令官さんは好きに決めたらいいのです!」

「お、お前は賛成なのか・・・」

「えへへ、司令官さんはハーレム状態なので夜は寝れないかもしれないですね!」

何故だ! 何故今日の電はこうも大人っぽいんだ!!

「・・・分かったよ、俺は・・・」
俺は決めた。

ジエームズの気持ちは裏切らない。

・・・重婚用の指輪・・・買ってくるか。

研究所搜索

くネイサン・ジエームズく

「これ艦娘の仕事じゃないと思うんだけど・・・」

「まあな・・・それには同意するよ・・・」

「同意するなら断ってよ」

「んな事言われたって珍しく上層部がまともな命令出したんだぞ？」

「まあそうだけどさ・・・なんで私が名指しなの？」

「練度だつてよ」

私は目の前にある命令書を読みながらそう言った。

内容は国内にある深海棲艦と関わりを持っていて可能性のある研究所の搜索だ。

ただの搜索なら陸軍でも出せばいいのだが、搜索グループの1つがこの研究所に行ったあと連絡が取れなくなつて1週間経つらしい。

本来なら空爆でもして吹き飛ばしたいところだが証拠まで無くなると困るから爆撃まではしていない。

おまけにその研究所がある地域は前に起きたシンビルスクの核ミサイルが落ちた場所の近くで現在は封鎖という形になっているが、貧困で困った人や反社会勢力等が入り込み無法地帯となっているそうだ。

そこに普通の人間よりも身体能力の高い艦娘で陸戦も出来る私に白羽の矢が立ったということだった。

「こんな所行きたくないんだけど・・・」

「まあそう言うなって。武器だって良いのを準備してるんだから」

「どんなの？」

「あー、ちよつとだけ待っててくれ」

そう言つて提督は執務室を出てどこかへ向かう。

「・・・まあ・・・あなたの命令なら聞くよ」

私はボソツとそう言った。

すると・・・

『おつほ、こりやてえてえですね！』

「・・・!?!」

びつくりして振り向くと半透明の艦娘が居た。

「・・・シンビルスク・・・今の聞いたの?」

『聞きましたよ! ジェームズさんと提督の関係尊いですね!』

「・・・そう、じゃああなたの墓にトマホークぶち込んだくから」

『ちよつと!?! それ私以外にも被害でますよ!?!』

「コラテラルダメージって知ってる?」

『いや、知ってますけども!』

「それかマーフィにお願いして封印してもらおうか?」

『ごめんなさい忘れるので許してください!!!』

「ふん・・・」

シンビルスクはそう叫びながら窓をすり抜けて逃げていった。

そこに提督も帰ってくる。

「ありや、シンビルスクでも居たのか?」

「いたって言うか化けて出たよ。幽霊って暇なんだね」

「あいつが特殊なだけだと思うぞ・・・」

提督は大荷物のまま呆れ顔でそう言った。

「とりあえずこの装備だ」

「なにこれ・・・アメリカ製じゃないの・・・?」

「なんだ、お気に召さなかったか?」

そう言って提督が放り出したのはAK—74Nだ。

ハンドガードはフロント近くまで覆われているVS—24。

ガスチューブもレイルガスチューブのVS—33が装備されている。

リアサイトはTula TToolが装着され、そのレール部分にはT—1ドットサイトが。

ストックはFAB Defense UAS—AKが装着され、ピストルグリップはMAGPUL MOE—AKタイプになっていた。

ハンドガード下部にはMAGPUL RVGが。

ハンドガード上部のフロントサイト付近にAN／PEQ—15。

マガジンは5.45mmタイプのAK用PMAGが装着され、マズル部分にはHEXAGONの5.45mmサウンドサプリメントが装着されていた。

もはや、AKの原型がほぼ無くなるまでカスタマイズされていた。かなり扱いやすくなつてはいるが。

「・・・どんだけ金かけてんの・・・」

「ユークトバニアから取り寄せんの大変だったんだぞ？特に弾薬とかな」

「弾？」

「7N39イゴルニクって弾だよ。クラス6のアーマープレートですらぶち抜けるって噂だ」

「またどえらい物を・・・」

「俺の大切な艦娘だし、重婚したとはいえ、大切な人に変わりはないからな。最高の装備を持つててくれ」

そう言つて提督は銃を渡す。

「・・・ありがとう」

私は大切な人と言われて顔が赤くなっているかも知れない。

ちよつと恥ずかしいが・・・。

「あと装備はこれだな」

「初めて見る、このプレートキャリア」

「ANAタクティカル製、M1プレートキャリアだよ。クラス4相当のプレートを突っ込んでる」

「へえ。ていうかANAって航空会社みたいだね」

「ユークの会社だな。」

そのあと、提督は他にも集音機能のあるヘッドセットのComTac2とバックパックを渡してくれた。

「バックパックには食料とバラ弾詰めていつてくれ」

そう言つて携行食と7N39が詰まった紙箱を渡してきた。

「マガジンは銃と合わせて7本。ハンドガンはどうする？」

「んー、使い慣れてるから226で」

「MP443は使わないか」

「それだと完全にロシア兵なんだけど・・・拳銃の弾はくれるの？」
「それなら良いの買ってきたぞ、これだ」

「何このエグい形した弾は・・・」

渡された弾薬はホローポイント弾のようだが鉤爪のような物で弾芯が覆われている。

見た感じ着弾時に体内で筋肉繊維を切り裂きながら広がりそう
だ・・・。

「9x19R.I.Pって弾薬だよ。1発で敵が止まるんだと」

「そりや止まるだろうね・・・」

撃たれた後のことなんて考えたくもない・・・。

「それで、増援はあるの？」

「すまない、単独行動になる。上空からの近接支援はあるが」

「ん、了解」

「何も言わないのか？」

「単独の方が楽だよ。見えるもの全部敵だし」

「代わりに孤立無援だがな・・・」

「そうになったら、助けてくれるんでしょ？」

私は少し笑ってそう言った。

提督はいつも誰かが助けを必要としたら例え命令違反でも助けに
来てくれる・・・。

そう信賴していた。

「まかせろ。総理大臣ぶん殴ってでも助けに行ってやるよ」

「ん、そっか。それで？」

「それでって？」

「出発は3時間後なんでしょ？」

「ああ、へりでな」

「じゃあほら、やる事あるよね？」

「ん？やる事？」

私は気づいてくれない提督に少しイラツとしつつもちよつと照れ
くさくなって小声で言う。

「・・・行つてらっしゃいのキスだよ・・・」

「ぶっ！」

「ちよつと、吹き出すのは失礼だと思う」

「す、すまん、お前がそんな事言うなんて思わなくてな……」

「いいじゃん、指輪ついて夫婦なんだし」

「まあ……な……」

提督はきつた電の事を考えているだろう。

少し胸がズキつとした。

「……今は電じゃなくて私しか居ないの。私だけを見てよ」

「お前もそんな事言うキャラだったんだな……」

「あなたの前だけ。恥ずかしいし……」

「はは、そうか。照れてる姿も可愛いもんだ」

「……うるさい。いいから早くしてよ」

「はいはい」

そう言つて提督は私の顔に近づきキスをした。

「ん……」

「満足か？」

「それ聞いちやう？」

「あえて」

「いつそこの先もやりたいたいんだけどな」

私も今スイッチが入ったかもしれない……。

かなり大胆な方の。

「……それは帰ってからの楽しみにとっとけ」

「そうするよ」

私はそう言つてプレートキャリアを着込み銃を取った。

「頼むぞ、国内の敵を暴くチャンスだからな」

「了解。行ってくるよ」

私は執務室を出てヘリポートへと向かった。

目的地は廃墟となった街だ。

放射線は観測されていないが熱線や爆風で破壊されていた。

とはいえ、シンビルスクの放ったミサイルは核出力も抑えられていたように被害自体は爆心地のみといった感じだった。

それでも核攻撃を受けたことに変わりはないが……。
「それにしても……最近では艦娘の扱いが本業以外になりすぎじゃないかな」

特にウチの鎮守府は……。

身体能力は普通の人間より高いのは分かる。

実際、艦娘にもよるが艤装を外し人として生活できる状態でも厳しい訓練を受けた特殊部隊員より戦闘能力、身体能力は高かったりする。

だから、こういう任務も分からなくはない。

分からなくはないが……。

「船の仕事じゃないんだよね……まあいいや」

そうボヤキながらへりに向かった。

すでにエンジンを始動し待機していたブラックホークに乗り込む。

私が乗り込んだことを確認してパイロットはへりを離陸させた。

ここから目的地までは2時間。

着陸地点から目標までが徒歩で1時間だ。

《ジェームズ、聞こえるか?》

「感度よし。どうしたの?」

提督から無線が入った。

《状況の再確認だ。目標は東京の閉鎖区画にある研究所。その調査だ》

「詳しく聞いてなかったけど、どこの会社なの?その研究所って」

《欧州企業だよ。表向きは大規模な複合企業だがな》

「まさかあのゾンビウイルスの……」

《そりゃゲームとか映画の話だろ》

「でもほら、表向きはとかついでるじゃん」

《まあそれも間違っではないけどな……Terra Groupだよ》

「テラグループ?」

《ありや、知らないのか》

「私の記憶にはないけど」

《あー……そうか、違う世界線ってやつだよな》

「なんか厨二っぽくてその言い方好きじゃないけど」
《なんだよ!》

「いやなんで提督が怒るの・・・」

《男なんてな!みんな中学2年生なんだよ!》

「いや、それは偏見」

「どうやら押さない方がいいスイッチを押ししたかもしれない・・・
とにかくそのテラグループというのが何か端末で調べてみる。」

「タルコフ・・・?」

検索して出てきたページにそう書かれてあった。

内容はユークトバニア・・・私の記憶知ってる世界でいうロシアとヨーロッパが作り上げた経済特区、ノルヴェインスク内で起きた紛争についてだった。

その紛争はTerra Group等のヨーロッパ企業の違法行為等のスキヤンダルが原因で政治的対立が起き、ロシア軍と国連軍がタルコフ市内で武力衝突、タルコフは完全に閉鎖されてしまった。

そんな事件の原因の一つであるTerra Groupだが今は事業を収縮し艦娘や深海棲艦についての研究も行っているらしい。

私たちに配布されている高速修復剤もTerra Groupの技術が入っているそうだ。

「そんなのが日本でなんかやってるってわけね」

《政府としては艦娘研究に貢献している以上、大事にしたいは無いが、深海棲艦と関わりを持っていて可能性がある以上放ってはおけないそうだ》

「それで、私の出番ってわけなんだね。深海棲艦との関わりの証拠を取ってくればいいの?」

《それと行方不明のチームの搜索もな。Terra Groupには私兵のPMCもいるそうだ》

「了解、気をつけるよ」

提督とのブリーフィングを終えて10分ほどで、へりは目的地近くに着陸した。

「迎えはよろしく」

そう言うとパイロットは敬礼をして離陸した。

「・・・さてと、行きますか」

初弾を薬室に送り込む。

AKなんて久しぶりに使う。

それにしても、丸みを帯びたハンドガードなので持ちやすい。

Key-modでもあるので余計なレールもないのもあつてかなり扱いやすくなっている。

「核攻撃で閉鎖された区画に怪しい研究所・・・日本のタルコフってところか」

《なんだ、タルコフ事件知ってるのか?》

「さつき端末で調べた。なんでこんな企業が日本に展開してるのか不思議だよ」

《表向きは優良企業だからな。裏では色々やつてたらしいが・・・》

「現在進行形でね。それより航空支援機のコールサインと武装は?」

《支援機はMQ-9リーパー。コールサインはレイブン。武装はAGM-114が4発、GBU-12が2発。支援可能時間は8時間》

「了解」

ドローンが支援機なら心強い。

私は端末に表示される道を歩き始める。

それにしても東京とは思えない場所だ。

郊外だから山だらけなのはあたりまえだが・・・。

だがこの付近はミサイルの爆風を受けて気がなぎ倒されたりしている。

近くにある家も窓ガラスが粉碎され廃墟になっていた。

・・・この区画全体がゴーストタウンのような不気味な雰囲気醸し出していた。

《ジェームズ、その近くに熱源反応ありだ》

「熱源?」

《2人いる。ちょっと待ってくれ・・・》

私は念の為隠れて指示を待った。

《なんてこった・・・武装してやがる・・・》

「武器は？」

《おそらく猟銃だ。この区画は人を完全に退去させてるから居るのは
火事場泥棒のロクデナシだけだ》

「・・・そのロクデナシをどうするの？」

《交戦規定は撃つてくるまでは撃つな。できるか？》

「やってみるよ」

《念の為武器を捨てて区画から退避するように言えるか？》

「無茶を言うねほんと・・・」

私は隠れていた岩から立ち上がる。

「その人達、ここは立ち入り禁止区画だよ」

「な、なんだお前！」

「ぶっ殺せ!!」

そう言うといきなり撃ってきた。

弾が耳元を掠める。

私は咄嗟に岩に隠れた。

「いきなり撃ってきたんですけど！」

《クソツタレ！無法地帯なのかここは?!》

「撃つていいの!?!このままだと殺られるよ！」

《クソ・・・撃ち返せ!》

私はその場で伏せて右にリーンし射撃した。

2人の胸に弾丸が当たり倒れた。

「はぁ・・・2人やった」

《・・・了解》

私は近づいて背中に銃を向ける。

「確認」

そして2人に1発ずつ撃ち込んだ。

《お前何やってんだ!》

「射殺確認。生きてたら困るのは私だよ」

《だからって死体撃ちするんじゃないやねえ!》

提督は無線越しに怒鳴る。

「・・・分かったよ、ごめん。変なスイッチ入ってた」

私はそう言って敵の武装を解除しようとした。

武器に手を伸ばすと持っていたのは89式小銃。

もう1人が上下2連式のショットガンだ。

「提督、89式って民間で売られてるの？」

《ん？》

「倒した1人が持ってた」

《まさか行方不明のチームの・・・ソイツ何か持ってないか？》

「何かって？」

《持ち物だよ、チームのものを持ってるかも知れない》

「ちよっと待ってて」

私は2人が持っていたのリュックサックを取って物陰に向かう。

リュックサックの中を漁ると食料などと一緒にカメラのようなものが出て来た。

これはヘルメットカメラ・・・？

「提督、読みは辺りかも。ヘルメットカメラが出てきた」

《端末で再生できるか？出来ればこつちにも送信してくれ》

「了解」

私は端末にSDカードを差し込んだ。

映像の記録は2日前で止まっていた。

「最近殺られたっぽい」

《チームが行方不明になる時・・・1週間前のファイルはあるか？》

「あるよ」

私はそれを再生した。

すると研究所と思われる施設の内部を映した動画だった。

『重要書類は片付けたか？』

『なんとか全部・・・あとはこのケースさえ持ち帰れば・・・』

『とりあえず研究員を全員このエレベーター前に集めろ、すぐに日本政府の連中が来てしまう』

音声は英語。

L A Bと書かれた白衣を着た研究員も映っていた。

『脱出はどうするんだ・・・？』

『今へりを要請中だ。』

おそらくこのヘルメットカメラの持ち主は隊長クラスなのだろう。研究所の責任者と話をしていた。

だが、口調はかなり高圧的で研究員を逃がすと言うよりただ1部に集めているだけのように見える。

『妙な真似はしないように言っておけ』

『わ、分かってる・・・』

そう言った矢先だった。

『おい！止まれ！止まれ!!』

聞こえるのは銃声と悲鳴だった。

このカメラの持ち主も研究所の責任者と思わしき男性を射殺していた。

まるで口封じだ。

「嘘でしょ・・・研究所の職員を撃った・・・？」

《・・・大層なお仕事だ・・・》

その撃った連中の腕にはUS E Cと書かれたパッチが貼ってあった。

動画はそこで終了していた。

次の動画を再生すると研究所の外だった。

今度は銃撃戦の最中のようなのだ。

『日本の連中に嗅ぎ付かれたららしいな!』

『3―1の9時方向に敵!!』

『そこに敵がいるなら爆薬に点火しろ!』

そう言う隣にいた1人が何かのスイッチを取り出した。

『ぐあっ!』

だが頭を撃たれて倒れる。

『クソっ! 3―2は後方に下がれ! 爆発するぞ!』

そう言ってスイッチを押す。

かなり大きな爆発の後、銃声は止んだ。

《・・・おそらくこの連中に攻撃したのは陸軍のチームだろうな》

「たぶんね。固まっていたせいか全滅だと思うよ」

カメラの持ち主は爆発のあった方向に進む。

『負傷した日本の野郎だ』

『気をつける、負傷兵がグレネードを持つてるかもしれない』
『死なせてやれ』

そして聞こえる銃声。

私は目をつぶった。

戦闘慣れした私でも止めを刺す瞬間は見たくなかった。

それが特に身内の人間であれば……。

動画はそこで終わっていた。

《……これでチームの居場所も分かったな。それにとんでもない証拠も手に入った》

「……深海棲艦と関わってるって話は見つかってないけどね」

《……》

「……ねえ、提督。復讐なんて柄じゃないけど、コイツらに報いなくていいの?」

《……》

提督は何も答えない。

「分かった、この証拠映像を送信したら私でやるよ。このまま仲間を殺されて帰れない」

私はアメリカ海軍の艦とはいえ、所属は日本軍だ。

それにコイツらは見た感じに元米軍のヤツもいる。

同じアメリカ軍属として民間人を撃ち殺すような外道を放っては

おけない。

《ジェームズ、これだけは約束しろ。かならず帰ってこい》

「分かってる。あなたとの約束だもん。破らない」

《……今連中の根城を搜索している。少し待っていてくれ》

私は近くにあった廃屋に入りタバコに火をつけた。

家の中は荒らされ金目の物は全て持っていかれていた。

「貧困地区だったらしいけど……無法地帯だから人の醜さが出てるのかな……」

この地区は封鎖される時も避難を拒否して留まり続け結果閉じ込

められてしまった人たちも居る。

慢性的な物資不足で争いも耐えないのだろう。

日本国内の内戦地域みたいなものだ。

「ここだけ見たら・・・私の記憶と同じだよ・・・」

私はあの赤い悪魔の事を思い出していた。

あの時も人の醜い部分が出て居たから。

「はー・・・」

タバコを一本吸い終わる頃、提督から無線が入った。

《ジェームズ、USECの拠点を見つけた。おそらくこの地域からの脱出の為の拠点だろう》

「了解。やっちゃっていいの?」

《ああ、やっちゃまえ・・・》

提督はあまり気が乗らないような口調だった。

まあ、気持ちは分かるが。

「で、この動画はどうするの?」

《どうするって?》

「本部に提出するのかって事。これ、相手がPMCとは言え国際問題じゃないの?」

《まあな・・・》

艦娘や深海棲艦の研究で協力している企業に雇われたPMCが研究員を口封じの為に殺し調査に来た陸軍の部隊まで殺した。

こんな映像外に出したら敵が深海棲艦だけじゃ無くなってしまう。

《映像は見なかったことに・・・したいんだがな・・・》

「それは私が帰ってからで決めよ。とりあえず、あの外道に報いを」

《分かっている。ただ、建物内になると近接支援は無理だ。それだけは理解してくれ》

「了解。」

《今、USECの拠点を見つけた。そこから西に4km言ったところにある廃工場内だ》

私は端末で地図を確認した。

4 km・・・歩いて1時間くらいか。

「ちやんと上から見ててよ」

《分かってる。お前こそ、気をつけてな》

「うん。帰ったらその・・・さっきの続きだから」

《ぶふっ!!》

「ちよつと、吹き出さないでっつてば」

《いやだから大胆過ぎるだろ!》

「いつそ電も誘う?」

《あり》

「いや、ありなんかい」

なんだよこのド変態は・・・。

そのド変態を好きになっちゃったわけではあるが・・・。

「もういいや、死亡フラグになるだけだよ・・・」

《それな》

「それなじゃないよ」

私はため息をついて廃屋から出る。

弾は十分。

ポケットには注射器に入った応急用の高速修復剤もある。

・・・ヤツらに報いを受けさせてやる。

PMC 襲撃

「・・・着いちやったね」

《ああ・・・そうだな》

「スナイパーはいる？」

目標の廃工場の近くの草むらで身を潜める。

見た感じは普通の木工場だ。

単眼鏡で監視すると、二階建ての社員寮のようなところで人の動きが見えた。

《1人居た。工場の屋根、シートを被せて監視してる》

「あー・・・はいはい、みつけた」

《やるのか？》

「アイツやしないと進めないよ」

私は銃を構えてゆっくり狙った。

距離はおよそ150。

「すー・・・はあ・・・」

引き金を引く。

発射された弾丸は敵のスナイパーを仕留めた。

持っていた銃が地面に落ちるところが見えた。

「ターゲットダウン」

《Good hit。いい腕だな。社員寮までの道はクリア》

「了解」

私は軽く走りながら寮に向かう。

《敵の無線を傍受した。これからそちらでも聞こえるようにする。スナイパーから連絡がないって焦ってるみたいだ》

「了解。まあ、もう社員寮目の前だけだ。」

敵の無線はすぐに聞こえてきた。

『Eagle 2-1、こちらJoker 3-3。定時報告がないぞ。応答しろ』

その後ろから聞こえるのは大音量の音楽。

おそらく油断してるんだろう。

それなら都合がいい。

「お誕生日会かな。まあ気を抜いてるなら都合いいや」

私は音楽が聞こえる部屋の下まで行く。

グレネードを用意して安全ピンを抜いた。

「フラグを投げる」

グレネードは窓を割り室内に入った。

『グレネード！グレネード!!』

『クソツタレ!!』

中から爆発音がする。

私はそれを聞いて玄関から中に入った。

『ちくしょう！マックがやられた!!』

そう言いながら1人が階段を降りてくる。

そこに鉢合わせ、私は相手の胸を撃った。

『ぐあっ!!』

転げ落ちる相手を避けて廊下にいる敵を撃った。

『女!?!』

『この前の仲間かよ!!』

『この前の仲間だよクソツタレども!!』

私はそう言いながら射撃する。

『アレックスがやられた!!』

『アーマー貫いてる!!何使ってたあのクソアマ!!』

『AKだ！AKを持つてる!!』

激しい銃撃戦。

敵は突然の襲撃で混乱していた。

《ジェームズ、何人か外から回ろうとしている》

「何とかしてよ!」

《何とかしてやるさ。レーザー照射》

「至近弾は勘弁してよ!」

《分かってる。任せろ。3・・・2・・・1・・・ライフル》

10秒後、外で大きな爆発が起きる。

余りの衝撃に一瞬クラつとなった。

『ちくしょう!!近接支援だ!!』

『なんなんだよあの女!!』

敵は負けじと数にものを言わせて射撃してくる。
頭が出せない。

「頭が出せなくったって、これ投げたらなんとかなるでしょ!」

私はもう1つのグレネードを壁に跳ね返らせるようにして投げた。

『グレネード!』

一瞬銃撃が止む。

爆発の後に少しだけ前進した。

敵は奥のロッカールームに隠れているようだ。

『アダム待て!よせ!!』

ロッカールームから走り出したPMCの背中を撃つ。

弾丸は背中のアーマーを貫通し敵は崩れ落ちた。

『このままじゃ押し込まれるぞ!!』

『ちくしょう!!』

私は再び声のする方向を撃とうとした時だった。

「あぐっ!」

腕に焼けるような痛みが走る。

「クソっ・・・!撃たれた・・・!」

私は怪我の状態を見る。

泣きそうなくらい痛いけど、そこは艦娘なのか出血そのものは大した事ない。

私はポケットから高速修復剤を取り出して注射した。

これには痛み止めの効果もある。

「はぁ・・・ふう・・・」

一息ついたその時後ろからも撃たれた。

「ぐっ・・・!!」

弾は幸いにもアーマーに当たるが、私は急いで敵を倒したロッカールームに逃げ込む。

その時何かに足が当たって転んだ。

足が当たったのは怪我をしたUSSECだった。

「ちくしょう！消えろ！クソツタレ!!」

男は喚きながら拳銃を抜こうとしたが私のほうが早かった。頭に2発ぶち込んだ。

「この裏だ！裏に居るぞ!!」

敵はそう叫ぶ。

位置は分かった。

私はロツカー越しにフルオートで射撃した。

だが敵も撃ち返して来る。

その1発が足に命中した。

「あうっ！」

自分でも情けない声が出る。

だが高速修復剤のおかげが痛みは少ない。

「このクソツタレめ!!」

私はロツカーを一つ蹴り倒した。

すると前に驚いて銃を下げたPMCがいた。

私はすぐにそいつを撃つ。

『ロツカールームはどうなってんだ!!』

『分かんねえ！女ひとりがいる!』

『マツトがまだ中にいる！女と一緒にだ!!』

私はロツカールームの奥を確認しようとした時胸を撃たれた。

さっきの比じゃない痛み。

おそらく貫通した。

だが痛みを堪えて撃った敵に撃ち返す。

「ぐっ・・・!!はあ・・・はあ・・・」

弾は胸に当たっていたが呼吸は異常ない。

おそらく胸の中で弾は止まっている。

「女の武器を撃つなんて・・・ぐう・・・!」

それでも何ヶ所も撃たれて今にも倒れそうだった。

「絶対に帰るんだ・・・!!」

私は柱の影から後ろの敵に向けて射撃した。

その時目の前で爆発が起きる。

私は後ろにぶっ飛ばされて一瞬気を失った。

「あ……うう……」

銃声が私を叩き起す。

銃は爆発で吹っ飛び少し奥にあった。

だが、爆発時に敵の死体が私の上に覆いかぶさり上手く動けない。

「く……そ……!!」

だが敵の死体には手榴弾があった。

それを手に取りピンを抜く。

敵はこつちに迫ってきていた。

「喰らえ……!」

手榴弾を投げた。

「グレネード!」

爆発時に敵の下に隠れた。

死んだふりをするように。

その数秒後敵は現れて私に向けて撃ってきた。

幸い全部敵の死体に当たったが。

「おい……おい! マット! クソっ! ヒックス! マットは……」

敵はおそらく仲間の状態を確認しようとしたんだろう。

その隙に拳銃を抜き敵の頭に押し付けて撃った。

もう1人もそれを見て硬直したようだ。

素早く頭を撃った。

すると、左奥からショットガンを持った敵が出てきた。

「クソっ!」

私はそつちに向けて全弾射撃し敵の死体を除けて逃げる。

敵はあと1人。

リロードしてる暇はない。

私はナイフを抜いた。

「このやろ!!」

敵に素早く近づきナイフをショットガンに突き刺す。

そして顔を殴ろうとしたが避けられロッカーに当たりロッカーを凹ました。

「ぐっ！」

敵もただでやられるわけが無い。

私を思い切り蹴飛ばした。

その時に敵は拳銃を抜いた。

私は咄嗟に近くにあったロツカー内のプレートで銃を殴る。

発砲されたがギリギリで射線を切れた。

「ぐおおおお!!」

私は敵をロツカーに叩きつけるように押した。

敵も対抗しようとすごい声を上げる。

「ふうっ・・・!!」

「はな、せ・・・!!」

敵の銃の弾倉を抜こうとリリースボタンに手をかけた。

何とか弾倉を引き抜けたが頭突きを食らった。

怯んだすきに肩を撃たれた。

焼けるような痛みが走る。

「あぐっ!!」

耳鳴りもするが敵は弾倉を拾いあげようとしていた。

私はそこにタツクルして相手の上に覆い被さる。

「くたばれ!!」

そう叫びながら顔面を殴る。

だが敵も殴り返してくる。

「ぐうっ！」

顔に鋭い痛み。

女の子の顔面を殴るなんて・・・とか思うが、ここは戦場。

そんな事気にしたら死んでしまう。

「くあああ・・・!!」

敵は私を押しつけようと顔を潰すようにして押した。

敵の荒い息と私の荒い息しか聞こえない。

「おとなしく・・・くたばれ・・・!」

敵は私の首に手を回す。

そして締め上げてきた。

「かつ・・・！あッ・・・！！」
気道が締め息ができない。

私は咄嗟に膝で敵の股間付近を蹴りあげた。

「ぐあああ！！」

敵は叫び私から離れた。

その時に敵からナイフを奪い取る。

「ぐっ・・・！！」

胸に刺そうとナイフを押し込むが敵も必死に抵抗する。

その時私も股間を蹴りあげられた。

激しい痛みでナイフを離す。

「あうっ！！」

敵はナイフを拾うことなく逃げていく。

痛みで苦しみながらも私のAKを拾いあげ逃げていく敵を撃った。

だが当たらなかった。

「クソっ！！」

私は追いかけるように敵の逃げた部屋に入る。

「うおら！！」

思い切り蹴られ体制を崩す。

そこに体当たりをされた。

私はそのまま押し出され窓を割って外に落ちた。

「うわあああ！！」

背中から落ちるが鈍い痛みで息もしづらい。

「がはっ・・・！！」

何とか立ち上がろうとした時だった。

「見ろよ！女だぞー！」

そして銃声。

こここの銃声を聞きつけた現地民だった。

「て、提督・・・助けて・・・！！」

私は這いずりながら遮蔽物に隠れた。

《クソっ！待ってる！！》

その数秒後、爆発が起きる。

敵は爆発に巻き込まれて吹き飛んだ。

「はぁ．．．はぁ．．．」

このままだとさっきの敵が来てしまう。

私は痛む体を引きずって走った。

だが現地民がそれを見て追いかけてくる。

ヘルファイアを撃とうにも敵が疎らに居て撃ち辛いようだ。

《ジエームズ！救助のヘリを送った！！何とか耐えろ！》

「分かってるよ．．．!!」

私は近場に伏せて敵を何人か倒した。

倒れたのを確認して走る。

「はぁっはぁっはぁっ．．．!!」

何とか敵を撒き近くの大木に座り込んだ。

その時近くから物音がする。

「．．．!」

銃を向けるとさっき私と殴りあったPMCが居た。

向こうもこつちと目が合っただけ。

「．．．!」

私の方が早く銃を向けた。

敵は諦めたように下を向く。

私は引き金を引いた。

照準は後にいたロクデナシのほうだが。

「後ろだよー!」

敵は咄嗟に後ろを向く。

だが敵もこつちに撃ってきた。

「くっ．．．!」

その時、PMCは現地民にほうに向けて射撃をしてくれた。

追ってきていた2人を倒してくれた。

そしてお互い銃を向け合う。

「はぁ．．．はぁ．．．」

もう戦う気なんてない。

私も向こうも同じ顔をしていただろう。

お互いアイコンタクトをするように頷いた。

「・・・もう終わりにしたいよ・・・」

私は銃を下げた。

P M Cも銃を下げる。

「・・・」

お互い無言の時間が過ぎた。

「・・・すまないな、女の子を殴って」

P M Cはそう口を開いた。

「・・・ううん、大丈夫」

自然と近寄り、私たちは近くにあった廃屋に入った。

「あんた・・・一体なんなんだ」

「私は海軍所属の艦娘だよ」

「艦娘・・・!?!」

「珍しい?」

「なんで艦娘がこんな所に・・・」

「それはあんた達が日本で違法な研究をしようとしたからだよ。詳しくは知らないけど」

そして廃屋内でP M Cと会話した。

相手はU S E C所属の隊員。

だが、あの研究所の1件で帰ったらやめようと思っていたらしい。自分は元特殊部隊員として腕を磨きたかったのにやった仕事は民間人の口封じ。

こんな事なら辞めておけば良かったと。

「そうだ、これならあんた達の役に立つかも」

そう言って何かのU S Bを取り出した。

「研究のデータだ。このクソ会社を潰そうと思って持ち出したんだ」

「いい仕事するじゃん」

「それより・・・あんた大丈夫なのか・・・?」

私の怪我を見てそう言った。

「艦娘は普通の人より強いから。でも・・・まあ泣きそうなくらい痛いよ・・・」

「それならこれを・・・」

そう言つてモルヒネの注射器を出した。

「大丈夫、これがあるから」

私は怪我の酷い足に高速修復剤をもう一度注射した。

そこから救助のヘリが来るまでの1時間、廃屋内で警戒しつつもPMCと話をした。

名前はマイク。

元はデルタの隊員だったそうだ。

《ジェームズ、もう間もなくヘリが来る。PMCのヤツはどうする?》

「連れて帰ったら? いい証拠になるんじゃない?」

《まあな・・・》

「会社も辞めたがつてるしウチで雇うとか」

《あのなあ・・・》

「雇ってくれるならぜひ行きたいんだがな」

「だつてさ」

《はいはい・・・まあ帰つてからだな》

そう言つて無線は切られた。

遠くからはヘリの音がする。

・・・長い1日だった。

さつきと帰つてリラックスしたい・・・。

「はあ・・・タバコ持つてる?」

「なんだ、吸うのか?」

「私だつて年頃なの」

「そういう意味で使うか? それ」

「いいじゃん。ないの?」

「ほらよ」

私はUSSECからタバコを受け取り火をつけた。

「はー・・・」

早く帰りたい・・・。

さつきまで敵だったヤツの隣で複雑な気分になりつつ、タバコを吸いながら廃屋の今にも崩れそうな天井を眺めていた。

アーマードこれくしょん

「……で、ちゃんと分かるように説明できるか？」
「……ぽい」

若干お怒り気味の俺の前には正座した明石と夕立がいた。
なんで怒ってるかと言うとコイツら2人で結託して内緒で装備を作っていた。

しかも今ハマってるゲームをモチーフにして。

「で、でも提督さん！これすごいっぽい！」

「ああ……すごいな。なんだよ艦装にブースターって」

「それだけじゃありません！飛躍的に加速できるアサルトブーストという機能も搭載しています！」

「んな事聞いてねえ!!」

「あ、提督さん。私の事これから621って呼んで欲しいっぽい！めっちゃイケおじボイスで！」

「なんでだよ!!」

「ほらお願いしますー！一回でいいですから！」

おかしい、説教のはずが何故かツツコミさせられている。

そんなことしていると……

「……ロー……スロー……」

「ん……？」

「スロー……スロー……クイッククイックスロー……」

扉の方から変な声が聞こえてきた。

なんかマーフィーの声にも聞こえる。

「コーラルよールビコンと共にあれ！」

勢いよくドアが開き車椅子のマーフィーが現れた。

ていうか車椅子にブースターみたいなのが着いてる……

「なんなんだよお前ら!!」

俺が頭を抱えていると……

『司令官さん、私がサポートします』

「今度はなんだよ!!」

『私は、艦娘のシンビルスク……あなたの脳波と同期し、交信でサポートします』

今度は幽霊のシンビルスクまで出てきた。

ほんとになんだよ!!!

ていうかお前ら絶対ア!!マードコアやっただろ!!!

俺まだ出てないのに!!!

「ちくしょうお前ら絶対ア!!マードコアやっただろ!!」

「あらバレた?」

「人が業務忙しくて出来てないって言うのによオ!!!」

俺はもう半分ヤケクソでブチ切れていた。

「夕立はあれか!? 艦装をACっぽくしたいのか!?!」

「そうっぽい!」

「この際ヤケクソだちくしょう!! 徹底的にやれ!」

「やったー! 提督さん太っ腹っぽい!」

なんかもう一周まわってACになった艦娘も見てみたいので徹底的にやってもらおうことにした。

そして波乱の数時間後、改装の終わった夕立が戻ってきた。

「見て見て提督さん! 出来たっぽい!」

「お、どんなのが出来たんだ?」

フル装備の夕立を見ると右手にガトリング砲、左手にパイルバンカー、両肩に10連装垂直ミサイル発射機が装備されていた。

「完全にACだな」

「んふふー! これなら敵戦艦でも一撃っぽい!」

「それならせつかくだ、演習でもしてみるか」

そういうと夕立は目をキラキラさせて頷いた。

そしてさっそく演習を組む。

内容は簡単に戦艦VS夕立だ。

「まあ、そういうわけで集まってもらってすまないな」

執務室でそう言って戦艦娘達に謝る。

集まったのは金剛と榛名だった。

「大丈夫デース!」

「榛名も大丈夫です！」

2人とも乗り気で助かった。

簡単に演習内容を説明した。

鎮守府正面海域での装備試験……これが建前の訓練だ。

2人には何をしてもいいから夕立に一発当てれば勝ち、逆に負けは負けたくなったら負けろ……という超アバウトな内容だった。

そうでもしないとブースターまでついた夕立に勝てないだろうと判断したからだ。

「とりあえず、怪我だけしないようにな」

「はいー」

そう言って2人は出ていく。

俺は演習を確認するためにドローンを飛ばすことにした。

指揮所に連絡するといつでも大丈夫だと帰ってきた。

「ま……お手並み拝見だな」

く2時間後く

「よし、訓練開始だ。ルールは分かってるな？」

《提督さん！言って欲しいことあるっぽい！》

「なんだ？」

《621、仕事の時間だって言って欲しいぽい！》

「おまえな……まあいいか……おほん」

俺は咳払いをして頑張って声を似せる。

「621、仕事の時間だ」

《メインシステム、戦闘モード起動っぽーい!!!》

そして夕立は金剛と榛名のいる場所に物凄い速度で飛んで行った。

《な、なんですかあれ!?!》

「夕立だ」

《話と違うデース!!!》

「まあ……言っていないしな」

《か、帰ったら覚えてて欲しいデース!!!》

金剛からの怒りの無線が入った。
そりやまあ夕立がものすごい速度ですっ飛んできたらビックリもするだろう。

《着☆剣!!》

《きやああああ!!!》

そして夕立は榛名に急接近してパイルバンカーをぶち食らわせた。
いた。

訓練用に固めのスポンジ製にしてあったがブーストの速度を乗せた一撃で榛名は軽く吹っ飛んでしまう。

そしてそのままさかのKOだった。

《な、んなあ!?!》

無線機からは金剛の驚愕の声が聞こえる。

そして……

《いだだだだだ!!!》

夕立は金剛の周りを回りながらガトリング砲の弾を浴びせる。

《こ、このお!!》

負けじと発砲する金剛。

それをひらりと避けた夕立は再び金剛に接近した。

《着剣!!》

再びパイルバンカーの一撃。

金剛も吹っ飛びKOとなった。

《やったやった!完全勝利っぽーい!!》

「化け物だ……」

正直な感想だった。

夕立の戦闘スタイルにピッタリの装備になってしまった……。

というかこの装備割と普及させれば強いのでは……??

なんてしてたら部屋にジェームズが入ってきた。

「あれ、なにしてんの?」

「新装備の実験」

「ふーん……ん……ん!?!」

画面を覗き込んで目を見開いていた。

そりやそうだ。

戦艦娘2人KOした駆逐艦がいるんだから

「……なにこれ」

「あれだ、あの……ほら、AC」

「ACってなによ」

「アーマードコア」

「それでなに？その装備作ったって事？」

「まあ……簡単に言おうと」

そういうとジェームズは頭を抱えた。

「ほんつとウチの工廠どうなってるの……」

最近ジェームズは鎮守府の資材とか補給関係の仕事に着いていた。

それでまた訳の分からない物を作ったものだから呆れていた。

「はあ……また書類作らないと……」

「なんかその……ほんとすまん」

「いいよ、その代わりこんど美味しいランチに連れてって」

「お安い御用だよ」

「あ、せっかくだから電もね」

「いいのか？」

「ダブルデートだよ」

「俺としては両手に花だな」

「嬉しいでしょ」

「ここでダンスできそうなくらいには」

「ふふ、楽しみにしてるよ」

そう言っつてジェームズは書類を作り部屋を出ていった。

その時だった。

《提督さん！深海棲艦っぽい！！》

突然の夕立からの無線。

何事かと無人機からの映像を見ると敵の斥候と思われる駆逐艦が来ていた。

敵はすぐに砲撃を始める。

「嘘だろこんな時に!!夕立！応戦できる装備はあるか！」

《砲とミサイルは訓練弾だけど……》

夕立は左手を大きく振ってパイルバンカーに装備された訓練用装備をパージする。

そして万が一にと持ってきていたパイルバンカーを本体に装着した。

《これが本当の着剣っばい!》

「なかなかカッコよくなってるぞ。戦艦2人はお前が吹っ飛ばして戦闘不能だ、頼れるのはお前だけだ。大丈夫か?」

《大丈夫っばい。提督さん、もう1回さっきのセリフ言ってくれと助かるっばい!》

「はあ……分かったよ」

俺は再び咳払いをする。

この間夕立はまったく動いていないが不思議と砲弾が当たっていない。

立ち姿はまるで戦闘前の鬼神だ。

「621、もうひと仕事だ……頼むぞ」

《メインシステム、戦闘モード再起動……っばい!》

そして夕立はブーストを使い駆逐艦に急接近する。

《ソロモンの悪夢、見せてあげる!》

急接近にしてくる夕立に驚き硬直した敵駆逐艦に夕立は大きく左手を振りかぶる。

《着☆剣!!!》

チャージするような動作をするとパイルバンカーは火薬の力を使い鉄の杭を打ち出す。

そこにブーストの運動エネルギーも加わり敵駆逐艦に深くパイルバンカーが突き刺さった。

「すげえなおい……」

砲撃を右に左に高速移動しながら躲し肉薄してパイルバンカーを打ち込む。

夕立の航跡にはブースターの煙の後だけが残っていた。

夕立は駆逐艦が動かなくなったことを確認しパイルバンカーを抜

いた。

パイルバンカーからは青い体液が滴っていた。

「……よくやった、621。戻って休め」

《……ほい！》

この日以降、夕立は大層この装備が気に入りこの装備を使えないなら出撃しないまで言い出した。

そしてパイルバンカーの一撃でKOされた金剛と榛名は若干夕立が怖い……と言うようになってしまった。

それよりも好戦的な艦娘達は皆この装備を欲しがりせっかくだから開発してみようと思ったところ、明石曰く3つも作ったら鎮守府が破産するほどの生産費だったようだ。

そんな話聞いていなかったと問い詰めたら「言ったら怒られると思ったので☆」と言いやがったので2日くらいいそかぜとうらかぜの部屋に放り込んでやった。